

この日を主とともに

ウィリアム・マクドナルド

ゴスペルフォリオプレスジャパン

【凡例】

1. () は著者自身による補足、または文脈上、明らかである意味を翻訳者が補ったもの。
2. (※) は、原著にはないが、本文を理解する上で必要である、と翻訳者が判断して施した注。
3. 《 》 は、本文の中に埋没してしまわないように、強調すべき語であることを示そうとしたもの。

This book was originally published in Canada under the title:
One Day at a Time
by William MacDonald
Copyright ©1998 by Gospel Folio Press
304 Killaly Street West, Port Colborne, Ontario, L3K 6A6 Canada
Translated by permission.
Translation copyright ©2014 by Gospel Folio Press Japan
2-21-9 Sakura Setagaya-ku Tokyo, Japan

原著序文

イエバエは普通二十一日ほどしか生きられない。わずか三週間で、その命のサイクルは完了してしまふのである。生まれ、成長し、子孫を残して、神の壮大な仕組みにしたがつてその役割を終え、死んでいく。神が造られた生き物の中には誕生から死までわずか二十四時間しかないものもある。

主は、人類を祝福され、それよりも長い平均寿命を与えてくださった。とはいえ、永遠の視点に立つてみれば、地上における私たちの日々は、やはり霧、吹き通る風、咲いたその日にしぼむ花、あつという間に語り終えられる話に過ぎない。

私たちにとつて無駄にできる時間は少しもない。黄金にも匹敵する寸刻をその都度買い取り、それを、いわば《永遠の銀行》に投資しなければならぬ。私たちは「時間を贖う」必要がある。「今は悪い時代だからである」(エペソ5・16英訳)。どの日にも八万六千四百秒がつまっている。それ自体は大した分量には思えない。しかし、雪片や雨滴のように、集積すると効果を表し、人生を浸食することもあれば、生氣と活気を私たち自身に、また他の人々に及ぼすこともあるのである。

私たちは、「一日一日を大切に」(One Day at a Time 本書の原題)生きる必要があるのである。

地上で過ごす私の日々が確実に神の前に意味のあるものとなるための方法の一つは、「心に植えつけられたみことば」(ヤコブ1・21)で私が心と思いを満たし、それによつて成長することである。これこそ、ここで一冊の本を、喜びとともに再び紹介したい理由である。その本とは、読む者を鼓舞せずにはおかないみことばの霊想集であり、令名高いウィリアム・マクドナルド兄の簡明直裁でキリストを高揚する文章の数々がもとになつてゐる。

この霊想集は、みことばそのものを読む代用として意図されたものではなく、みことばに対する思索を促進しようとしたものであり、そして神の恵みにより、そこで学んだ真理を、聖霊の力の助けを頂いて、日々の歩みに適用する助けになることを願つて作られたものである。

一人の無名の著者が次のように記している。

一日を神とともに始めよ、祈りの内に神の前にひざまずき

神の御住まいに向かい心を高く揚げよ

そして神の愛に与ることを求めよ

神の書物を開き、定めた分量を読め

それにより思いが清められ、

心遣いのすべてが和らげられるために

一日中絶え間なく神とともに過ごせ

何をするにせよ、家にいようと外にいようと

神は変わらず近くにいまし給うから

心の中で神と会話せよ、霊を天に向かつて揚げよ

与えられしあらゆる良きものに感謝せよ

そして謝恩の賛美をささげよ

一日を神とともに締めくくり、自分の罪を神に告白せよ

主の贖いの血潮に信頼し、主の義を嘆願せよ

夜が訪れれば神と共に伏すがよい

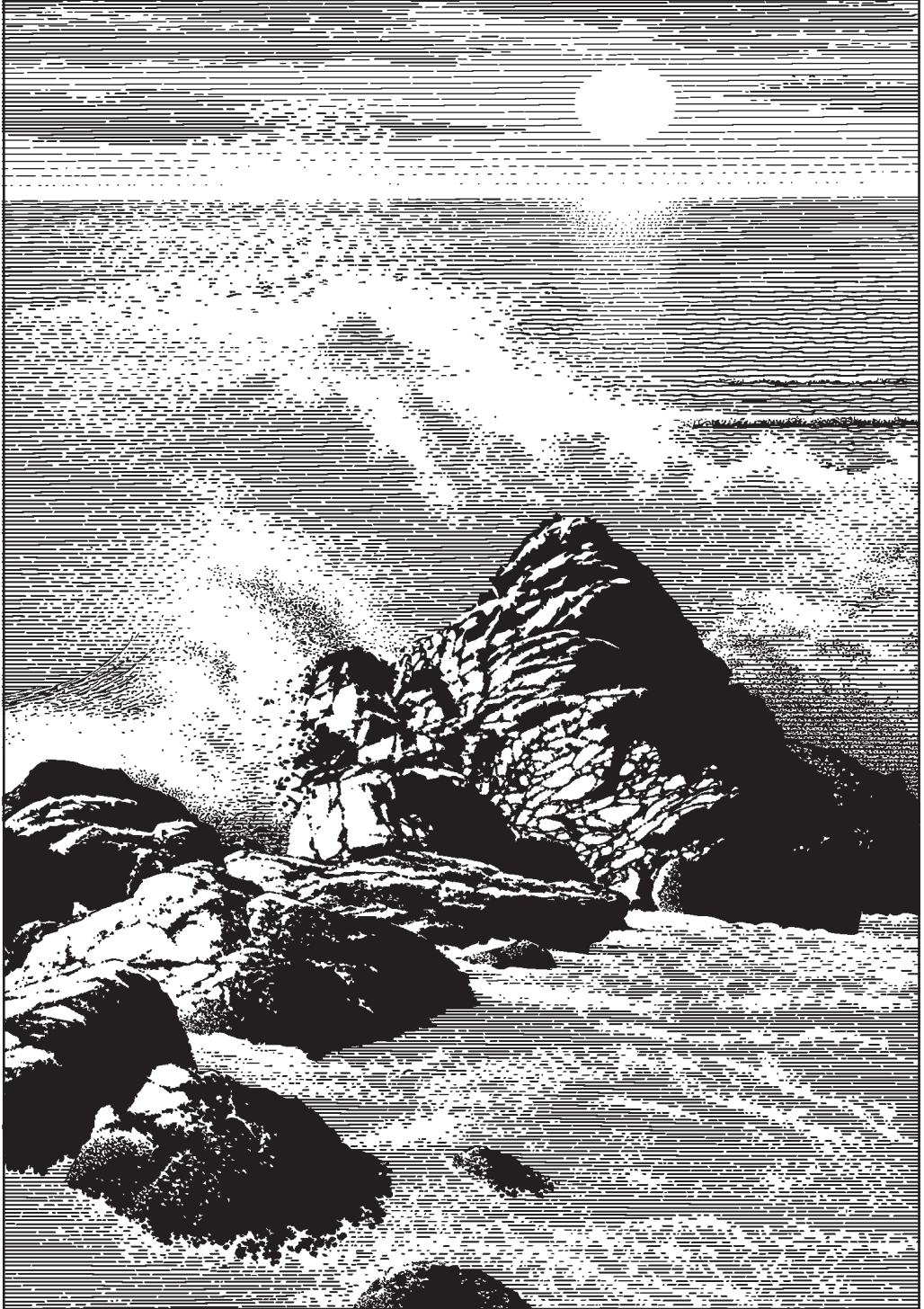
神はそのしもべたちに安眠を賜うから

そして死の谷を踏みゆく時が来れば

主はまどろむことなくあなたを見守り給う

ミシガン州グランドラピッズ

J・B・ニコルソン



「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。」

(出エジプト記12章2節)

新年の決意は良いものですが、同時にしろく、すぐに破られてしまうものもあります。それに比べると、新年の祈りの方がまさっています。祈りは神の御座へと立ちのぼり、祈りの応えをもたらす原動力を始動させるからです。新しい年を迎えるにあたり、次のような願いを、自分の祈りとできれば幸いです。

主イエスよ。この日、新たに自分自身をあなたにお捧げします。これからの一年、私の人生を御手にとり、あなたの栄光のために用いてください。

主よ、わがいのちをとりて、ながために聖め分かちたまえ

(フランシス・ハバガル)

私を罪から、また、あなたの御名を汚す一切のものから遠ざけてください。

聖霊により、教えを素直に受ける者としてください。あなたのために前進したいと望みます。私がありきたりの生活に甘んじないように助けてください。

「主は盛んになり、私は衰ええなければならぬ」を今年の座右の銘とします。栄光はすべてあなたのもです。私がいかに指一本触れないように助けてください。

あらゆる決断をするにあたって、祈りをもつてなすことを教えてください。自分自身の悟りに頼るということは、考えるだけでも恐ろしいことです。「私は知っています。人間の道は、その人によるのではなく、歩くことも、その歩みを確かにすること、人によるのではないこと」(エレミヤ10・23)。

この世に対して死に、また、愛する者や友人の称賛や非難に對しても死ぬ者としてください。ただ、あなたのみこころをお喜ばせることを唯一の、また、混じり気なき我が望みとなさせてください。

他の人の悪口を言ったり、批判したりすることのないように守ってください。むしろ、人の徳を高め、有益なことを語るように助けてください。

困窮している人々のもとへ私を導いてください。あなたのように、私も罪人の友になれますように。滅びの道へ向かつている人々に対する同情の涙をお与えください。

救い主の目で群れ集う人々を見させ給え

涙で目が曇るとも

憐みをもてさまよう羊を見させ給え

主の愛もて彼らを愛させ給え

主イエスよ。クリスチャン生活で私の身に何が起ころうと、冷淡になったり、苦々しくなったり、皮肉屋になることのないようにお守りください。

金銭の管理を導いてください。あなたがゆだねてくださったあらゆるものに対して、良き管理者たるよう助けてください。

私の中からだは聖霊の宮であることを、一瞬たりとも忘れることのないよう思い出させてください。この身震いするような真理が、私の行動すべてに反映されますように。

そして、主イエスよ。今年こそ、あなたの戻って来られる年でありますように。あなたの御顔を見て、ひれ伏し、あなたを礼拝することをどれだけ願っていることでしょうか。これから始まるこの一年間、この祝福された望みが私の心に常に新たにされ、私を地上にしばらくつけるすべてのものから解き放ち、期待で胸躍らせてください。「主イエスよ、来てください」(黙示録22・20)。

「へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」

(ピリピ人への手紙2章3節)

他の人を自分より優れた人であると認めるのは、自然の本能に反します。人間の罪深い性質は、自我に対するこのような攻撃に反抗せずにはいられません。それは、人間的には不可能なことです。そのように超俗的な生き方をする力は、私たちの中には存在していません。ところが、神にはそれが実現可能なのです。内住される聖霊が、自我を消し去り、他の人を尊ぶ力を与えてくださるからです。

ギデオオンが、このみことばの実例となってくれています。ギデオンの部下三百人がミデヤン人を敗走させ、最後のとどめをさすようにエフライム部族に呼びかけました。彼らは逃走路を遮断し、二人のミデヤン人の首長を捕らえました。しかし、なぜもつと早く呼びかけてくれなかったのか、と不平をならしました。それに対し、ギデオンは言いました。「アビエゼルのぶどうの収穫よりも、エフライムの取り残した実のほうが、よかつたのではありませんか」(士師記8・2)。つまり、エフライム人の行った掃討作戦の方が、ギデオンの軍事作戦すべてより輝かしいものであった、と言ったのです。この無私の精神のおかげで、エフライム人の怒りは鎮まりました。

ラバという町を自分で攻略しながら、ヨアブは陥落させる榮譽をダビデに譲ろう、と使者を遣わし、偉大な無私の心を示しました(IIサムエル12・26・28)。ダビデがその勝利で名譽を得ることで、ヨアブは十分満足だったのです。これは、ヨアブの生涯の数少ない輝ける瞬間の一つだったと言えましょう。

使徒パウロは、ピリピ人を自分よりも優れた者とみなしていません。あなたがたがしたこととは、神への価値あるいけにえであるが、自分自身はそのいけにえと信仰の奉仕の上に注がれる、注ぎの供え物に過ぎないと、パウロは言いました(ピリピ2・17)。

時代はずつと最近のことになりますが、他の高名な説教者たちと共に、ひとときわ人望の厚いキリストのしもべが、控えの間で登壇の時を待っていました。彼の姿が戸口に現れると、聴衆から割れんばかりの拍手喝采が起りました。ところが、彼はさつとわきに下がり、自分の後から出てきた説教者たちが喝采を受けられるようにしたのです。

しかし、自己否定の最高の例は、何といても主イエスです。主は、私たちが高められるように、とご自身を卑しくされました。私たちが豊かになれるように、と貧しくなられました。私たちがいのちを得るようにと、死んでくださいました。

「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです」(ピリピ2・5)とある通りなのです。

「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしないで。」

(三ハネの福音書7章24節)

墮落した人間性に宿るもつとも根深い弱さの一つに、うわべで判断してしまうことから抜け出せない習性があります。私たちは、人を外見で判断します。車体を見て、中古車のよしあしを判断します。表紙を見て、本を判断します。何度失望し、幻滅したとしても、「光るもの必ずしも金ならず」ということを、かたくなに拒否して受け入れられないのです。

『劣等感からの解放』(原題 Hide and Seek)という本の中で、ジェームズ・ドブソン博士は、『容貌の美しさが、アメリカの文化でもつとも価値ある人間の特性となつている』と書いています。私たちは容姿の美しさを、博士が「人の価値を示す金貨」と呼ぶものにしてしまいました。その結果、顔立ちの良い子は、見栄えのない子よりも大人に可愛いがられます。教師は、容貌に優れた子どもに良い成績をつける傾向があります。可愛い子どもたちは、そうでない子ほど厳しいしつけを受けません。器量の劣る子どもは、可愛い子どもの場合より、行儀が悪いと叱られやすいのです。

サムエルは、長身で、ハンサムなエリアブを、あやうく王に選ぶところでしたが、主は「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見えないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」(1サムエル16・7)と仰せになって、その誤りを正されました。

史上最大の判断の誤りは、主イエスが地球に來られたときに起こりました。外見に関する限り、主は、好印象を与える風貌ではなかったようです。主には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもありませんで

した(イザヤ53・2)。人間は、かつてこの世に存在した真の美しさを持つ唯一の御方を、少しも麗しいとは思わなかったのです。

しかし、主ご自身は、うわべによって判断するという、この恐るべき罠にかかることは一度もありませんでした。ご來臨の前から主に関して、「この方はその目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さない」(イザヤ11・3)と預言されていたからです。主にとって大切なのは、顔ではなく、人格であり、表紙ではなく、内容であり、肉体ではなく、霊であつたのです。

「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」

(ゼカリヤ書4章6節)

この聖句は、主のわざが人の才能や力によってではなく、聖霊によって遂行されるべきものである、という重要な真理を厳かに示すものです。

エリコ攻略の場合がそうでした。壁が崩れたのは、イスラエルの軍事力のおかげではありません。祭司がラッパを七回鳴らしたときに、この町をイスラエルの手に渡されたのは、主だったのです。

もし、ギデオンが大軍をあてにしていたとしたら、決してミデヤン人に勝つことはできなかったでしょう。なぜなら、ギデオンの軍隊は、すでに三百人にまで絞り込まれていたからです。しかも、武器ときたら、土器のつぼとその中に隠したいまつという奇想天外なものでした。彼らに勝利を与えることができるのは、主以外にはあり得ませんでした。

エリヤは、十二のかわりに水をなみなみと満たし、それを祭壇に注いで、人の力や努力で点火する可能性を意図的に排除しました。したがって、火がくだったとき、それが神のもとから来たことは明らかでした。

弟子たちは、人間の創意工夫のみを頼みとし、一晚中漁をすることはできても、魚一匹捕らえることはできませんでした。もし、奉仕において、本当に意味のある働きをしたいなら、主を見上げなければならないということを、主が弟子たちに示す絶好の機会となりました。

「クリスチャンの奉仕に最も足りないのは、お金である」と私たちは考えやすいものです。ところが、実際にそうであったためしはなく、今後もないことでしょう。(中国奥地宣教団の創

立者) ハドソン・テイラーは、「恐れなければならないことがある。それは、金銭が乏しいことではなく、聖別されていない金銭が多すぎることである」と言いましたが、まさに至言です。

また、私たちは舞台裏での根回し、精力的な宣伝計画、人の心理的操作、あるいは、巧みな弁舌を頼りとしています。あるいは、壮大な建設計画や組織の勢力拡張にかかりきりとなり、そうすることで成功に近づくといい幻想を抱くのです。

しかし、神の御わざが前進するのは、権力によらず、能力によらず、それ以外のどれにもよることはありません。ただ主の御霊だけが、それをなされるのです。

今日、いわゆるキリスト教事業といわれているかなりの部分は、聖霊がおられなくても、支障なく続くものばかりです。しかし、クリスチャンの真正の事業は、聖霊がおられなければ決して戦うことができないものであり、血肉の武器ではなくて、祈り、信仰、神のみことばによって戦う霊的戦いなのです。

「あなたといっしょにいる民は多すぎるから…」

(士師記7章2節)

私たちの誰にでも、数に対するひそかな憧れと、数字で成功を判断してしまう傾向があります。大きな集団は注目と尊敬を集め、小さな集団には、多少の非難めいた気持ちも向けられます。私たちは、この問題をどのようにとらえたらよいのでしょうか。

もし、数の多さが聖霊のもたらした実であるならば、それを軽んじてはなりません。ペンテコステの日に、三千人の人々があつという間に神の王国に招き入れられたのは、その実例です。

数の多さが神に対する栄光を表し、人類への祝福を意味するならば、私たちはそれを喜んでよいのです。大群衆が、心と声を天に向けて神を讃え、贖いの使信を世界に伝えていく姿を見たという以上に適切な願いはありません。

その反面、高慢につながるならば、人数が多いことはわざわざいいです。イスラエルが、「自分の手で自分を救った」(士師記7・2)と言わないようにするため、神は、ギデオンの軍勢を削減しなければなりません。E・スタンレー・ジョーンズは、かつてこう言いました。「私は、数を集めようとする現代の風潮をいとわしく思う。それは現にそうであるように、集団が自己中心になつていくからである」と。

主よりも、人の力に依存する結果につながるならば、人数の多いことはわざわざいいです。おそらく、ダビデが行なった人口調査の問題はそこにあつたのでしよう(IIサムエル24・2・4)。ヨアブは、ダビデ王の動機が不純であると直感して諫めましたが、無駄でした。

人数を増やすために、基準を下げたり、聖書の原則を曖昧にしたり、伝えるべき内容を薄めたり、神を畏れるがゆえの懲戒を行なわないとするなら、人数が多いことはわざわざいいです。得てして私たちの思いが、主よりも、大勢の人々に向けられるとくに、このような誘惑にさらされるものです。

親密な交わりが損なわれる結果になるとするならば、人数が多いことは決して理想的とは言えません。個人が群衆に埋没し、欠席していても誰も気に留めることもなく、喜びと悲しみを共有する人が誰もいないとするなら、教会がキリストのからだであるという概念そのものが放棄されたも同然です。

キリストのからだ(教会)における賜物の伸長を阻害するならば、人数が多いことはわざわざいいです。イエスの選ばれた弟子が十二人であつたということには、重要な意味があります。もし、弟子の数が大群衆であつたなら、細やかな対応は難しかったこととでしょう。

神の一般的な原則とは何か。それは、常に忠実な少数者の証しを通して、神が働かれるというものでした。神は大群衆であるから近づき、少人数であるから離れていくような方ではありません。人数の多いことを誇つてはなりません、その反対に、少ないという原因がもし私たちの怠慢と無関心にあるならば、少人数であることに甘んじてはいけません。

「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。」

(ローマ人への手紙7章18節)

若い信者がクリスチャン生活の早い時期にこのレッスンを学んでいけば、後になって、山のような悩みを抱え込まずに済むことでしょう。

聖書は、私たちの古い、邪悪な、生まれ変わっていない性質の中には、良きものが一切存在していない、と教えています。肉は、良きものを一切含んでいません。回心後も、肉そのものは、爪の垢ほども改善されてはいません。生涯、裏表のないクリスチャン生活を送ったとしても、改善されることはありません。実のところ、神ご自身も肉を改善しようなどとは、思っておられません。十字架で肉性に死を宣告された神は、ただそれを死の場所から動かさないように、と私たちに望んでおられるのです。

もし、心からこのことを信じるなら、私は無駄な探求をしないで済みます。そこにはない、と神が言っておられる場所に何か良いものがあるのではないか、と探したりはしません。

第二に、失望をしないで済みます。自分自身の中に何も良いものがないとわかって、私は決して失望しません。そもそも初めからそこにはないことがわかっているからです。

第三に、内省から解放されます。自己の中には勝利のかけらも存在していないことを前提に出発します。事実、自分にとらわれることこそ、敗北の始まりなのです。

第四に、自己の内部にサーチャイトをあてる心理的、精神医学的カウンセリングから守られます。このような心理療法は、

問題を複雑にすることはあっても、それを解決することができません。

最後に、もつぱら主イエスによつて心を満たすことを学びます。ロバート・マレー・マクシェーンは、こう言っています。

「自分の心の中を一回見ることに、十回はキリストを見よ」と。この比率は絶妙です！ 聖化された自己も、栄化されたキリストの代わりには到底なり得ない、とある人が言つた通りです。また、讚美歌作者は、次のように書いています。「何と心楽しいことか／自我より逃れて／救い主にかくまっていただけけるとは」と。

現代の説教、また、新刊のキリスト教関係の本の多くは、やれ気質だ、やれセルフイメージだ、やれコンプレックスだ、やれ抑圧だと言つて、気の済むまで内省することを勧めています。このような傾向全体が、バランスの欠如のもたらした悲劇であり、その背後には落伍者の列が延々と続くこととなります。

(おそらくパウロならこのように言うのではないのでしょうか。)
「私自身は、自分について考える値打ちもない、悪しき人間である。私は自分を忘れ、神を見上げたい。神こそ、私が全ての思いを向けるにふさわしい御方であるから」と。

「私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。」

(コリント人への手紙第二5章7節)

ほとんどの人にとって、祈り会よりも野球の試合に魅力があるのはなぜか。立ち止まって考えてみたことがありますか？両者の出席率を比較すれば、それが事実であることは明らかです。

また、このように尋ねてみてもよいでしょう。「なぜ、アメリカの大統領になることの方が、集会の長老となるよりも魅力的なのだろうか」と。親は(幼い)息子に、「自分の食事をしつかり食べなさい。そうすれば、いつか長老になれるだろう」とは言いません。「自分のお皿は自分で洗いなさい。そうすれば、おまえも大きくなって、いつか大統領になれるかもしれない」と言うのではないだろうか。

なぜ、ビジネスで成功を収めることが、宣教師の生き方よりも魅力的なのでしょう。子どもたちが将来、宣教師に出て行くことをあきらめさせ、この世の企業で、立派な肩書きの要職につくのを見たいと願うクリスチャンは少なくありません。

なぜ、神のみことばを学ぶことより、テレビのドキュメンタリーに夢中になれるのでしょうか。時間を気にしながら聖書を聞き、あわただしく読むことはあつても、テレビの前では何時間も平気で過ごしているからにはかなりません。

イエスを愛するがゆえに、という理由ではないことを、なぜ、お金のためなら人は喜んでするのでしょうか。会社のためなら疲れを知らないかのように働くのに、救い主が呼びかけても、多くの人は無気力で、反応すらしません。

さらに言えば、なぜ、国家の方が教会よりも大きな存在に見えるのでしょうか。国の政治は華やかで面白さに満ちているのに対し、教会は、躍動感に欠け、足取りが重いように思えることがしばしばです。

これらすべては、私たちが見えるところに従って歩み、信仰によって歩んでいないことがその原因です。私たちの視覚は、歪んでいます。ものごとの実際の姿が見えていません。一時的に過ぎないものを、永遠よりも価値があるように思っています。霊的なことより、精神に関わることに価値があると見えています。人の判断を、神の判断よりも重んじています。

しかし、信仰によって歩むとき、すべては変わります。霊的視力は左右とも1.0の正常値になり、神が見ておられるようにものごとが見えます。宇宙の主権者に直接聞いていただくという、そのことばでは言い表せない特権として、祈りを重んじます。集会の長老は、国の支配者よりも神にとって大切な存在であることがわかります。「もし、神が宣教師に召しておられるのに、王の地位に羨望の思いを持つていたら悲劇である」というスボルジョンのことばに共感できます。テレビは、現実性を欠いたおとぎ話の世界に過ぎませんが、聖書は、満ち足りた生涯へ人を導く鍵であることがわかります。人間味のない会社に勤めていたときには思いもよらなかつたほど積極的に、イエスのために財を費やし、イエスのために用いられたい、と願うようになります。そして、自分が属する地域の教会こそは、世界最大の帝国にまさり、神と神の民にとって重要であると認めるに至ります。

「信仰によって歩む」ということは、これだけの違いを生み出すのです。

「主のみわざをおるそかにする者は、のるわれよ。」

(エレミヤ書48章10節)

主の働きは、非常に重要であるばかりか、差し迫り、壮大で、畏れの念を起こさずにはおかないものです。そのために、怠慢な働きをする者には、のろいが宣告されているほどです。最善を望み、最善を受けるにふさわしい神は、怠惰、遅延、いい加減さ、あるいは、手抜きを容認することがおできになりません。(しかし)途方もなく大切な事柄が関係していることを思えば、それは別段驚くべきことではありません。

一九六八年後半のことでした。チェコスロバキアのプラハ在住の若いクリスチャンが、ヤン・パラハという若いチェコ人に証しをしました。ヤンの関心が本物のように思えたので、このクリスチャンは新約聖書を渡すと約束しました。彼は善意に満ちていたのですが、新約聖書を手するまで、ついつい数週間を無駄にしまいました。そして、入手した後も、実際に手渡すのに先延ばしを続けたのでした。

一九六九年一月一六日、ヤン・パラハは、ヴァーツラフ広場で全身にガソリンをかけ、からだに火をつけました。約束の新約聖書を一回も見ることなく、彼は死んでしまったのです。

善意だけでは、十分ではありません。「地獄へ通じる道は、善意という石で舗装されている」ということわざがあります。しかし、善意だけでものごとは完了しません。行動に移さなければならぬのです。そのための秘訣をいくつかご紹介しましょう。

第一に、主がご自身のためにある行動、または、奉仕をなさいと命じられたら、あなたはそれを絶対に拒否してはなりません。

せん。それが主であるなら、つべこべ言わずに従うことが私たちの当然の責務です。

第二に、先延ばしをしてはいけません。遅延は、命取りです。遅れるということは、相手から必要な助けと祝福を奪うことであり、自分を罪責感と後悔でいっぱいにする事です。

第三に、骨身を惜しんではいけません。「あなたの手もとにあるなすべきことはみな、自分の力でなしなさい」(伝道者の書9・10)。そもそも実行する価値のあることなら、立派に取り組むに越したことはありません。

最後に、それを神の栄光のために行なうことです。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい」(1コリント10・31)。

私たちはみな、(インドで活躍した宣教師)エミー・カーマイケルの精神を持ちたいものです。彼女は、こう記しています。

神への誓い、我が上にあり

影と戯れ、花を摘む猶予、我になし

務めを果たし「決算」を

わが主に告げるその時まで

「自分の家の者に敬愛を示し…」

(テモテへの手紙第一五章4節)

「家では悪魔、外では聖人」という表現を聞いたことがあるでしょう。家の外では温厚で社交性に富んでいるのに、家ではとげとげしく思いやりがないという、恐るべき性癖を指す場合に使う表現です。

この欠点は、ある特定の人々の中だけに限られることはありません。若者もそうならないように用心しなければなりません。自分の仲間うちでは、テレビタレントのような人気者でありながら、両親を震え上がらせるような怖い存在であるというのは、よくあることなのです。仕事関係者の前では、魅力に溢れた外面を保つ夫であるのに、いざ家に帰るとその魅力はどこへやら、いつもの怒りっぽい夫に戻るといふこともあります。講壇からは才気に溢れたメッセージを語るのに、居間では不愉快さを撒き散らす説教者もいます。

それは、罪に堕ちた私たちに潜む、歪んだ性質の一つです。この歪みが、最も私たちに近しく、最も私たちに尽くし、そして、私たちが正気を取り戻せば最愛であるはずの人々に対して、最も残酷なことをさせてしまう原因なのです。エラ・ホイラー・ウィルクックスは、それをこのように書き表しました。

私は大切なひとつの真理を発見した

日の沈む西へと旅を続けながら

私たちが本当に傷つけてしまう人とは

私たちが最も愛する人たちだけなのだ

ほとんど知りもしない人におべっかを使い

すぐに居なくなる客人を私たちは喜ばせる

それなのに、軽率にも

思い切り打撃を与えてしまうのだ

私たちがもつとも愛する人々に

別の詩人もこの感慨に共鳴し、このように書いています。「見知らぬ人には挨拶をし、客人には微笑むのに、自分の家族には辛らつな調子で接してしまふのが私たちである。家族こそ、自分が最も愛するものであるとわかつているはずなのに」。

「教会向けの信仰、祈祷会向けの信仰、キリスト教的奉仕のための信仰を持つことは、ちつとも難しいことではない。しかし、日常生活にかなった信仰であるかどうかは、まったく別問題である。『自分の家の者に敬愛を示す』というのは、キリスト教信仰の中枢をなす一部分であるにもかかわらず、それは極めてまれである。『人に見せるために人前で善行をする』(マタイ6・1参照)の、家では、情けないほどその敬虔さに欠けるクリスチャンを見るのは、決して珍しいことではない。ある家族の父親は、毎週行なわれる祈り会で実に力強い祈りを捧げ、奨励のメッセージは実に見事で、教会全体が、その敬虔さから多大の益を受けていた。ところが、集会が終わって家に帰ると、とたんに気難しく、意地悪い父親に変わるため、妻も家族の者も、彼に面と向かつて口もきけないほどであった」(H・W・スミス)。

(文豪)サムエル・ジョンソンは、言っています。「動物は自分が痛い目にあうと、誰かれ構わず、そばにいるものに襲いかかる」と。人間である私たちは、この生まれつきの性向を避けなければなりません。私たちが人前にいるときよりも、家にいるときの姿の方が、私たちのクリスチャンとしてのあり方を、より真実に反映しているのです。

「私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」

(へブル人への手紙12章1節)

クリスチャン生活を行き過ぎたほどに理想化して見ている人は、多いものです。

そのような人の考えによれば、クリスチャン生活とは、「途切れることなく、頂上を歩き続けるような経験であるはずだ」ということになります。信仰書籍や雑誌を読み、劇的な出来事をした個人の証しをいろいろ聞くと、人生にはそれ以外の要素がないような印象が残ります。そのような夢の世界には、問題も、心痛も、試練も、困惑もありません。厳しい仕事も、日常の雑事も、単調さもありません。すべてが絶好調のはずです。ところが、実際の生活がこのパターンにあてはまらないことがわかると、失望し、幻滅し、だまされたような気になります。

うそ偽りのない事実、次の通りです。クリスチャン生活の大半は、(英国の著名な説教者)G・キャンベル・モルガンが、「見た目には小さなことをしながら、とぼとぼと、忍耐強く歩いていく道のこと」と表現したものです。私もその通りである、と気づいたのがこの道です。一見つまらない仕事、長時間、コツコツとたゆみなく続けるべき学び、見た目には結果の表れない奉仕が山のようにあるのは、私の場合も例外ではありませんでした。ときとして、疑問が湧き上がります。「このようなことをして、実際に何かが成し遂げられているのだろうか」と。ちやうどそのようなときに、主は何かの励ましをしるし、祈りへの素晴らしい応え、明確な導きのみことばを与えてくださる

のです。すると、もうしばらく続けていくだけの力が与えられるという繰り返しなのです。

クリスチャン生活は、長距離走であり、50ヤード(※約46メートル)の短距離走ではありませんから、それを走るためには忍耐が必要です。うまくスタートすることも大切ですが、本当に重要なのは、栄光の輝きのうちにゴールインするための忍耐なのです。

エノクこそは、忍耐の記録に常に名誉ある地位を占めている人物でしょう。彼は、神と共に歩んだのです。考えてもみてください。それは、三百年の長きに及んだのです(創世記5・22)。その三百年とは、魅力に満ち溢れ、絶え間ないスリルが連続した年月であったと考える必要はありません。私たちの住むこの世では、エノクといえども、それなりの試練、困惑、そして、迫害すらもふりかかるのは避けられないことでした。しかし、エノクは、善を行うことに疲れることはありませんでした。最後まで耐えたのです。

もし、投げ出してしまいたい、という誘惑に一度でもあつたことがあるなら、へブル書10章36節のみことばを思い出してください。「あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です」。

気高き生涯を

一瞬で勝ち得た栄光の

明るく輝く炎と想うなかれ

そは黙々と神のみこころを

なしたる日々の集積なればなり

「ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。」

(マタイの福音書18章16節)

聖書によるならば、有効な判断をくだすためには、二人、または、三人の証人による証言がなければなりません。この原則を守るだけで、おびただしい数のトラブルを回避できることでしょう。

私たちは、ついつい一方の言い分を聞いただけで、その人に有利な判断をすぐにくだしてしまいがちです。話に説得力があるように思われるので、同情してしまうのです。ところが、後になって、それは一つの側面にすぎなかつたことを知りませう。もう一方の言い分を聞けば、最初の人は事実を歪めていたか、少なくとも自分に有利な脚色をしていたことがわかるのです。

このように、「最初に訴える者は、その相手が来て彼を調べるまでは、正しく見える」(箴言18・17)のです。事実の全体を把握しようともせず判断をくだせば、私たちの振舞いは、正しさにおいてこの世の司法制度よりも劣るばかりか、箴言一八章一三節に「よく聞かないうちに返事をする者は、愚かであつて、侮辱を受ける」とあるように、とがめを受ける立場に自分を置くこととなります。

メフィボシエテが王座を狙っています、とツイバが報告したとき、ダビデはこの誹謗中傷をうのみにし、メフィボシエテの財産をすべてツイバに与えてしまいました(IIサムエル16・1・4)。後に、メフィボシエテは、本当のことを王に話す機会を得ました。そのときダビデは、十分な証拠もなしに決定をくだしてしまつたことを悟つたのでした。

主イエスも、この原則をよくわきまえておられます。主は、自らがご自身の証しをするだけでは十分でないと言われました(ヨハネ5・31)。そこで、主は四人の「証人」を立てられたのです。パプテスマのヨハネ(32・35節)、主のみわざ(36節)、御父なる神(37、38節)、そして、聖書(39、40節)でした。

二人、または、三人の証人による有効な証言を得ないままにことを運べば、私たちのせいでは人は悲痛を味わい、評判が損なわれ、教会が分裂し、友情が壊れるという事態が起こりかねません。しかし、もし、私たちが神のみことばに従いさえすれば、多くの不正を防ぎ、人が傷つく事態を避けられるのです。

「あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。」

(「コリント人への手紙第一4章7節」)

これは、自分の身の丈まで私たちをへりくだらせてくれる良い質問です。私たちには、もらったものでないものは一つもありません。誕生と共に、肉体と精神が私たちに備えられました。外見や頭の良さは、私たちの手の及ぶ範囲にはなく、誇る理由にはなりません。それは、生まれつきのものなのです。

私たちが知っていることすべては、教育を受けた結果です。他の人が私たちの頭に情報を注ぎ込んでくれたおかげです。独創的な考えを思いついたときでも、実は二十年前最初に読んだ本の中に書かれていた、というような場合がよくあります。エマーソンは、こう言いました。「私が考えついた最高の思想はことごとく、古代の人々に盗まれていた」と！

私たちの才能については、どうでしょうか。ある種の才能は、明らかに育った環境によるものです。訓練と練習のおかげで伸びたのです。しかし、大事なものは、誰の助けがなくても才能が芽を出したのではなく、それは私たちに与えられていたものであるということです。

ピラトは自分が行使する権威に酔いしれていましたが、主イエスは、ピラトに大切なことを思い起こさせています。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません」(ヨハネ19・11)。

つまり、人が息をすることができるとも、ことごとく神からの賜物であるということなのです。これこそ、パウロが「コリント4章7節でこう尋ねることになった理由です。「もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか」。

またそれは、例えば、ハリエット・ピーチャー・ストウ夫人が『アンクル・トムの小屋』を執筆したにもかかわらず、それが自分の才能によるものではないと言った理由でもあります。

「私が、『アンクル・トムの小屋』の作者ですって？ いいえ、違います。私にはその話の構想を考える力はありません。気がついたら書き上がっていたのです。主がそれを書かれたのであって、私は主の御手の中に握られた、この上なくつまらない道具にすぎません。その本の内容は、すべて次々と幻として示され、私はそれをことばに直したただけなのです。主だけが讃えられますように！」

もらったものではないものは何一つない、ということを常に心に留めるとき、私たちは高慢と自己満足に陥らないで済みます。また、自分や自分のしたこと、に少しでも良いものがあつたなら、それゆえに、神に栄光を帰すことができるようになります。

このように、「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であつて、地に恵みと広義と正義を行う者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。主の御告げ」(エレミヤ9・23、24)とある通りなのです。

「私は、私を強くしてくださいる方によって、どんなことでもできるのです。」

(ピリピ人への手紙4章13節)

こうした聖句は、誤解しやすいものです。これを読んだ私たちはすぐに、自分にはできない何百もの事柄を考えます。例えば、身体的な領域の、超人的な力を必要とする、愚にもつかなおよびもつかないような、知的偉業のことを考えたりもします。その結果、これらのことばは、慰めどころか、かえって私たちを悩ませるものとなつてしまいます。

もちろん、この聖句が実際に意味しているのは、主が私たちに望んでおられることであるならば、それを行う力も主が与えてくださるということにほかなりません。主のみこころという範囲の中では、不可能なことは何一つないといつてもよいでしょう。

ペテロは、この秘訣を知っていました。自分の力以外に頼るものがなければ、水の上を歩くことはできないとわかつていました。しかし同時に、もし主が命じてくだされば、自分にもできるということもわかつていたのです。イエスが「来なさい」と言われると、すぐにペテロは舟から出て、大またで水の上を歩き、主のおられるところに向かつていきました。

普通、私が命令したからといって、山がすべり込むように海の中に入っていくということはありません。しかし、もしその山が私と神のみこころの達成との間に立ちただかるなら、私は、「山よ、そこを動け」と言うことができるばかりか、その通りになるのです。

煎じ詰めると、こういうことになります。「主が命じられることであるならば、主がそうできるようにしてくださいる」。それゆえ、いかなる試練であつてもそれに耐える力を、主は与えてくださいます。主は、私があらゆる誘惑に抗し、あらゆる悪しき癖を克服することができるようにしてくださいます。主は、私の思いを常に清いものにし、純真な動機からものごとをなすことができるようにし、常にみこころに喜ばれることをなす力に私に与えてくださいます。

もし、何かを成し遂げるのに必要な力が得られず、身体的、精神的、また、感情的にくずおれそうな危機にさらされるとするなら、どこかで主のみこころを取り違え、自分自身の願望を實現しようとしているからではないか、と自問自答してみてください。神の働きではないかもしれないのに、そう思い込んで行う場合がないとはいえません。そのような働きに、神が力を与えてくださるといふ保証はありません。

したがって、神のご計画の流れの中で自分が前進しているかどうかを見極めることが重要です。そうするなら、神の恵みによつて支えられ、強められる、という喜ばしい確信を持つことができるのです。

「すべては、あなたがたのものです。」

(コリント人への手紙第一 3章21・23節)

聖徒という名にふさわしからぬコリントの聖徒たちは、教会のリーダーである人々について、言い争いを繰り返してしました。ある人々にとつて、パウロは理想的な人物でした。しかし、アポロがお気に入りの人々もいました。また、ケパ(ペテロのこと)が最高だと思ふ人々もいました。これらの誰もが、コリント人のために仕えているのに、その中の一人だけに限定するといふのはばかげていると、パウロは彼らに語っています。「アポロは私のもの」というのではなく、「パウロ、アポロ、そして、ケパは私のもの」というべきであつたのです。

これは、今日の私たちへの警告でもあります。ルター、ウェスレー、ブース、ダービー、ピリー・グラハム、あるいはその他、教会に与えられた偉大な人物には従つても、それ以外の人は排斥するとするなら、私たちは誤りを犯しています。これらすべての人物は、みな私たちに益を与えてくれる人ばかりであり、それぞれの人が与えてくれる光を、それなりに喜び樂しめばよいのです。それが誰であれ、一人の人にのみ従うような者であつてはなりません。

しかし、私たちのものとして与えられているのは、主に仕える人だけではありません。世界も私たちのものなのです。私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。やがていつか、私たちはこの世に戻り、主イエスと共に治めるのです。まだ回心していない人々は、そのときが来るまで、あたかもこの世界が自分たちのものであるかのように、物事を取り仕切ります。しかし、本当はそうではありません。その人々は、単に

留守を預かっているようなもので、私たちがこの世を所有するその日まで管理をしているにすぎないのです。

また、いのちも私たちのものです。ただいのちがある、という意味ではありません。すべての人には、いのちがあるからです。私たちにはもつと豊かないのち、永遠のいのち、キリストのいのちそのものがある、という意味です。私たちのいのちとは、空しいもの、風を追うようなもの(伝道者の書2・17他)ではなく、意味と目的があり、報いを伴つたものです。

そして、死も私たちのものです。もはや死の恐怖に囚われて生涯を奴隸のように暮らさなくてよいのです。今や、死は私たちのたましいを天国に引き上げる神の使いとなりました。それゆえに、死ぬことは益なのです(ピリピー1・21)。

これらすべてに加え、私たちはキリストのものであり、キリストは神のものです。このように考えると、私はガイ・キングの一風変わったことばを思い出さずにはいられません。キングは、言いました。「ああ、私たちほど幸運に恵まれた乞食がいるだろうか！」

「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。」

(ガラテヤ人への手紙5章13節)

自由とは、神の子が持つ、値段のつけられない財産の一つです。御子の手で解放されたのですから、真の意味で自由となりました。しかし、召された目的は放縦ではなく、責任ある自由のためです。

子どもは、家庭のいろいろな制約から自由になりたがるものです。若い人は、勉強という訓練の場から自由になりたがりません。大人は、結婚の誓いから自由になりたがりません。また、さらに、定職につけば型にはめられると考え、それを嫌がる人もいます。しかし、これらのいずれも、私たちが召された自由ではありません。

星は、勝手にその軌道を離れて宇宙をさまようことはできません。列車は、線路を離れて田園地帯を蛇行することはできません。飛行機は、割り当てられた航路からされる自由はありません。飛行機の安全は、ひとえにパイロットが規定を遵守するかどうかにかかっています。

ジヨウエットは、このように述べています。「無法者が自由であるという世界は、どこにもない。どのような道に進みたいにせよ、もし、自由を発見したいなら束縛を受け入れないわけにはいかない。音楽家は、もし、妙なる音楽の世界で喜びを味わいたいなら、和音の法則に敬意を払わなければならない。建築家は、万有引力の法則に縛られることを受け入れなければならない。さもなければ、やがて出現するのは、家ではなく、がらくたの山となってしまう。健康の法則をいつも無視する人が味

わう自由とは、いったいどんなものであろうか。これらのいずれの領域においても、違反は大怪我のもとであり、敬意を表明することは自由になる道である。」

クリスチャンが律法から解放されたというのは、その通りです(ローマ7・3)。しかし、それは、クリスチャンが無法者になったという意味ではありません。今や、キリストを法とし、愛の帯で結ばれ、新約聖書にある数多くの戒めに従うものとなりました。

クリスチャンが、罪という主人から解放されたのは(ローマ6・7、18、22)、ひとえに神とその義のしもべとなるためであつたのです。

クリスチャンは、すべての人に対して自由です(1コリント9・19)。それは、すべての人に対してしもべとなり、より多くの人が神のものとなるためです。

しかし、罪の口実としてその自由を行使することは、許されていません(1ペテロ2・16)。肉の欲求のままにするということも、許されてはいけません(ガラテヤ5・13)。他の人をつまづかせることも、許されてはいけません(1コリント8・9)。主イエスの御名に恥をもたらすことも、許されてはいけません(ローマ2・23、24)。この世を愛することも、許されてはいけません(1ヨハネ2・15、17)。内住される聖霊を悲しませることも、許されてはいけません(1コリント6・19)。

人間は、自分のやりたいことを行つても、充足も憩いも見出すことができません。キリストのくびきを背負い、キリストから学ぶことによる以外に、それを見出すことはできないのです。ある人が言つた通り、「主に仕えることこそ完全な自由」なのです。

「再びヨナに次のような主のことばがあった。」

(ヨナ書3章1節)

希望と約束に輝くメッセージが、ここに記されています。失敗した、ということは、神がその人を見限った、ということと同義ではありません。

ダビデの犯した失敗は、あからさまな筆致で記録されています。それを読めば、私たちもダビデと一緒にちりの中に座し、恥で顔がほてる思いになります。しかし、ダビデは主の前に碎かれるとは、また、心底から悔い改めるとはどういうことかを知っていました。しかも、神はダビデを捨ててはおられませんでした。神は彼を赦し、実を結ぶ人生へと回復してくださったのです。

ヨナは、神からの宣教の召しに応えようとせず、結局は大きな魚の腹の中に飲み込まれてしまいました。言わば「生きた潜水艦」の中で、ヨナは服従するとはどういうことかを学びました。主が再び声をかけられると、ヨナは二ネベに行き、さばきが目前に迫っていることを伝えました。その結果、二ネベの町全体が、こぞって深い悔い改めをしたのでした。

マルコは、パウロ、バルナバと共に華々しいスタートを切りました。ところが、途中で一行を離れ、故郷に帰り、周囲を失望させてしまいます。しかし、神はマルコを見捨てはしませんでした。マルコは再び、戦列に加わり、パウロの信任を再度得て、マルコの福音書の執筆を任せられ、期待を裏切ることなく、「しもべ」としてのキリストを描いたのでした。

主を裏切ることにはあり得ない、と永遠の忠誠を誓ったにもかかわらず、ペテロは「主を知らない」と言ってしまうました。「翼の折れた鳥は、もう二度と高い空を飛ぶことはできない」

と言って、人々はこのような人物に見切りをつけるどころです。しかし、神はあきらめることはなさらず、ペテロはそれまでよりも一層高い空を飛ぶようになりました。五旬節の日に、三千人に対して御国の扉を開けたのは、ペテロでした。倦むことなく労し、迫害者たちの手で何度も苦しみを受けました。自分の名前を冠した書簡を二通したためました。そして、殉教の死を遂げ、栄光に満ちた奉仕の生涯を締めくくったのです。

このように、奉仕の点についていえば、神は、やり直しの機会を与えてくださる神です。失敗したからといって、その人と関係を断ち切るような御方ではありません。碎かれ、悔いた心を見ると、神は身をかがめて、倒れた兵士の顔をもたげてくださるのです。

しかしながら、これを罪や失敗を大目に見るという意味に解してはなりません。主の期待を裏切った、という苦痛と後悔の思いは、それ以降、十分な抑止力として働くべきなのです。

また、悔い改めない罪人に、神が死後、もう一度チャンスを与えてくださるという意味でもありません。死には、恐るべき最終性があります。罪を抱えたまま死んだ人に対する恐るべき宣告は「木が倒されると、その木は倒れた場所にそのままにある」(伝道者の書11・3)と記されている通りです。

「人ではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。」

(エペソ人への手紙6章7節)

奴隷に対するパウロの教え(エペソ6・5・8)は、イエス・キリストのしもべであると告白するすべての者にとって意味深いものです。

まず、第一に教えているのは、どれほどつまらない仕事でも、神の栄光のために行う名譽ある仕事となりうるといふ点です。パウロが手紙を書き送った奴隷たちは、床の清掃、食事の支度、食器洗い、家畜の世話、あるいは、作物の収穫などに携わっていたことでしょう。しかし、使徒パウロは、そのような雑用が、「キリストに対するものであるかのように」(5節英訳)行うことができるばかりでなく、それらを行う奴隷たちは、キリストのしもべとして神のみこころを行い(6節)、主に仕え(7節)、そして、「良いことを行えば」主から報いを受ける、と言いました(8節)。

私たちは、世俗的なことと聖なることというように、物事を二分する考え方をしがちです。一週間の仕事、一日の仕事は世俗的なものであるが、みことばの説教、証し、また、聖書を教えることは聖なるものであると考えやすいのです。しかし、この箇所によれば、クリスチャンにとつて、そのような区別は必要ないことがわかります。これに気づいたある著名な説教者の妻は、台所の流しの上に、次のような題辭を掲げました。「ここでは毎日三回、神への礼拝が行われています」。

この勸所を解したしもべなら

骨折り仕事も神のわざ

部屋の掃除も神の定めと同じく

等しくしつかりなしとげる

(ジョージ・ハーバート)

この箇所には、さらにとつておきの教訓があります。それは、たとえ社会的序列のどこに位置しようが、キリスト信仰がもたらす最高の祝福と報いから締め出される心配はないということです。仮に、仕事着を脱いで背広を着ることがなかったとしても、キリストに栄光をもたらす、純良な働きであるならば、受ける報いにはまったく遜色がありません。「良いことを行なえば、奴隷であっても自由人であっても、それぞれその報いを主から受けることをあなたがたは知っています」(8節)。

これを信じ、私たちもジョージ・ハーバートの詩を借りて、こう祈りたいものです。

わが神、王よ、教えたまえ

あらゆることの中にあなたを見

何をなすにあたつても

あなたになすがごとくすることを

「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであつたなら、わたしのしもべたちが、：戦つたことでしょう。」

(ヨハネの福音書18章36節)

キリストの御国がこの世のものではないという事実だけで、私がこの世の政治に関わろうとしない理由としては十分です。もし、私が政治に参加すれば、世界の諸問題を解決する力があると主張する政治の仕組みに、信任票を投じていることとなります。率直に言つて、そのような信任は到底できるものではありません。「全世界は悪い者の支配下にある」(Iヨハネ5・19)ことを知っているからです。

社会の諸問題を解決する上で、政治はとりわけ無力であることを露呈してきました。政治的な救済とは、化膿した傷にバンドエイド(傷絆)を貼ることではありません。感染源までは到達しないのです。私たちの病める社会の根本的な問題は、罪であることが私たちにはわかっています。罪に対処しないなら、それがなんであれ、治療法として真剣に考えるに値しません。

そうなると、優先順位の問題になります。政治に関わることに時間を費やすのか、それともその同じ時間を使つて福音を広めるのか。イエスは、この問いに答えてこう言われました。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行つて、神の国を言い広めなさい」(ルカ9・60)。私たちの最優先課題は、キリストを告げ知らせることにあります。キリストこそが、世界の諸問題の答えであるからです。

「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです」(IIコリント10・4)。事実その通りであるわけですから、私たちは投票による以上に、はるかに多くのことが祈りと断食、そして、神のみことばによつて

可能なのであり、それが国と世界の歴史を形成していくことにつながるのだという大胆極まりない認識に至るのです。

ある著名な人物が、かつてこう言いました。「政治とは、元來腐敗したものだ」と。その後で、次のような警告のことばをつけ加えました。「教会は、人間的な事柄に関与しようとするあまり、本来の役割を忘れるようなことがあつてはならない。それは競争しても勝ち目のない領域である。教会がもし、政治に首を突っ込めば、その純粋な目的を見失つてしまふだろう」と。

この時代に対する神のご計画とは、諸国の中から御名のために民を召し出すことです(使徒15・14参照)。腐敗した世に安住するようにではなく、この世から人々を救い出そうと、神は心を傾けておられるのです。私は、この栄光に満ちた解放に関与し、迷うことなく神と共に働けばよいのです。

どうしたら神のわざを行うことができますかと、民衆がイエスに尋ねると、主は、神が遣わされた者を信じるのが神のわざです、とお答えになりました(ヨハネ6・28、29参照)。そうであるなら、私たちの使命は明白です。それは、投票箱ではなく信仰へと、人々を導くことです。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方です。ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてください。」

(ヨハネの手紙第一一章9節)

この聖句からの確信を得ることがないまま、クリスチャン生活を継続していくのは事実上不可能といえます。恵みによって成長するにつれ、自分自身のどうしようもない罪深さに、私たちが気づく度合いはかえって深くなるばかりです。罪から即時に清められるための備えがなければ絶えざる罪責感と敗北感から、私たちが逃れるすべはありません。

ヨハネはここで、告白することによって罪が赦されるという備えがクリスチャンにある、と私たちに告げています。クリスチャンでない場合は、主イエスを信じれば罪の刑罰から法的な意味での赦免を受けることができます。クリスチャンの場合は、告白することによって、さながら子どもが親に赦してもらいうように、罪の汚れからの赦しを受けることができます。

罪があると、神の子どもとされた人は神との交わりが断たれてしまいます。そして、その罪が赦され、捨て去られるまで、交わりは断たれた状態のままです。私たちが告白すれば、神はご自分のみことばを守ってくださいます。神は、赦すと約束してくださいましたのです。神が赦してくださいすることに不正はありません。なぜなら、十字架の上におけるキリストの御わざが、そのようなのできるための備えとなったからです。

したがって、この聖句は、自分の罪を告白するなら、罪の記録は抹消され、完全に清められ、同じ家族に属し、幸いな思いが回復されるということの意味しています。自分の生活の中に罪があることに気づいたら、ただちに神の御前に進み出て、そ

の罪を名指し、拒絶するなら、確かにその罪が駆除されたことを知ることができます。

しかし、どのようにしたらそのように確信できるのでしょうか。赦された、という感覚が生まれるのでしょうか。これは、感情の問題ではまったくありません。私たちが赦していただいたと知ることができるのは、神がみことばの中でそう言われたからです。感情とは、どうひいきみに見ても、あてになるものではありません。それに対して神のことばは、揺らぐことがありません。

しかし、誰かがこう言つたとしたらどうでしょう。「神が私を赦してくださいました、というのわかる。でも、私は自分自身を赦すことができないのだ」と。大変敬虔なことばに聞こえますが、実は神に対しては不遜なことばです。もし、神が赦してくださいましたのであれば、神が望んでおられるのは、私とその赦しを信仰によって受け入れ、赦されたことを喜び、清められた器として出ていき、神に仕えることなのです。

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法を思い出すことはしない。」

(ヘブル人の手紙10章17節)

キリストの血によって覆われた罪であるなら、神は忘れることがおできになる…これは、聖書の中でも、たましいを真底から安らげてくれる真理の一つです。

「東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される」(詩篇103・12)と読むとき、目を疑います。「あなたは私のすべての罪をあなたのうしろに投げやられました」(イザヤ38・17)と、ヒゼキヤと共に言うことができるとは、驚きそのものです。主が、「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った」(イザヤ44・22)と言われるのを聞けば、肝をつぶします。しかし、それよりもさらに素晴らしいのは、このようなみことばを読むときです。「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ」(エレミヤ31・34)。

私たちが罪を告白すると、神は赦すだけでなく、即座に忘れてくださいます。神が直ちにご自身の忘却の海に罪を葬ってください、と言い換えても、その真理を拡大解釈しているわけではありません。絶えずつきまとう罪と激しい戦いを繰り広げていたクリスチャンの例をとり、説明してみましよう。ほんの一瞬、気を緩めたときに、彼は誘惑に屈してしまいました。彼は、急いで主の御前に出て思わず言いました。「主よ。私はまたやらかしてしまいました」と。すると、そのとき、主がこう言っておられるのが聞こえたように思った、と言うのです。「また、何をしましたか?」と。つまり、告白に続く一瞬の間に、神はすでに忘れてくださっていたということが大事な点です。

これは、全能の神であられるからこそ忘れることもできる、という喜ばしい逆説です。一方で、神は、すべてのことをご存知です。神は星を数え、一つひとつに名をつけておられます。神は私たちが眠れない夜を数え、涙の数をご存知です。雀が地に落ちるのも、神の目を逃れることはありません。神は、私たちの髪の毛の数をご存知です。ところが、すでに告白し、捨てられた罪は忘れてくださるのです。

最後に、大切なことを申し上げます。「神が、赦し、忘れてくださるというとき、神はそこに看板を立てられるのだ」と言った人がいます。そして、その看板にはこう書かれています。「ここは釣り禁止区域!」と。うまく言ったものです。神が忘れてくださった私の過去の罪や他人の罪を、私が釣り上げてはならないのです。この点では記憶力に乏しく、忘れるのが得意でなければなりません。

「主の霊はサウルを離れ、主からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた。」

(サムエル記第一16章14節)

聖書の中には、悪い行動の原因が神にあるかのよう思わせる箇所があります。例えば、アビメレクがイスラエルを三年間治めた際、「神は、アビメレクとシエケムの者たちの間にわざわいの霊を送った」(士師記9・23)と書かれています。アハブの時代に、ミカヤは邪悪な王にこう告げました。「主はここにいるあなたのすべての預言者の口に偽りを言う霊を授けられました」(1列王記22・23)と。ヨブは、「私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならぬではないか」(ヨブ2・10)と言って、自分が損失を被った原因を主に帰しました。その一方で、主ご自身も、イザヤ45・7で「わたしは平和をつくり、わざわいを創造する」と言っておられます。

しかし、神は聖なる方であるゆえに、悪をもたらしすことも、また、それを容認することもできないということをおぼえています。いかなる罪も、病気も、災いや死も、主から来ることはありません。神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもないのです(1ヨハネ1・5)。主が、ご自身の完全な道徳性に反することの原因となるとは、到底考えることができません。

その他の聖句を見れば、サタンこそが病氣、苦しみ、悲劇、破壊の元凶であることは明らかです。ヨブが被った損失と激しい苦悩を引き起こしたのは、悪魔でした。腰が曲がったままの女性は、十八年もの長い間サタンに縛られていたのだと、イエスは言われました(ルカ13・16)。パウロは、肉体のとげを「サ

タンの使い」と呼んでいます(IIコリント12・7)。サタンは、人類のすべての災いの背後にある元凶です。

しかし、これは神が悪を創造したとする聖句とどのように調和するのでしょうか。その説明は、次に述べることに言い尽くされます。聖書では、ことが起こるのを神が容認された場合でも、それをなされたのは神である、という場合が、よくあるのです。それは、積極のみこころと、消極のみこころとの違いです。民が経験するのを神が容認されたことの中にも、そもそも民が選ぶのを神がよしとされなかったことがいくつもありました。神は、イスラエルが四十年間荒野をさまようことを容認されました。しかし、イスラエルが受け入れてさえいたら、ずっと短い経路をたどって約束の地へ導くことが神のみこころだったのです。

たとえ、悪霊や人間の悪を容認されるにしても、最後の権限を持つておられるのは神です。神は、悪をも統御しておられます。それは、御自分の栄光のためであり、また、悪に悩まされている人々の祝福のためなのです。

「ヤコブの中に不法を見いだし、イスラエルの中にわざわいを見ない。」

(民数記23章21節)

「雇われ預言者」バラムは驚くべき真理を口にしました。すべてを見通される神ですら、神の民であるイスラエルに罪を見出すことはできないというのです。このときのイスラエルにあてはまることは、今日のクリスチャンにも見事にあてはまります。神がクリスチャンをいくらご覧になっても、永遠の死をもつて罰すべき罪を、何一つ見出すことができないのです。クリスチャンとは、「キリストの中に」おかれたものです。つまり、神の前に立つとき、クリスチャンは、キリストの完全さとふさわしきのすべてを身にまといつていなのです。愛する御子を受け入れるのに何の差し障りもないのと同様に、神はクリスチャンを受け入れてくださいます。これ以上の恵まれた立場は望むことができないばかりか、この立場がなくなることも決してありません。どれほど探ろうが、キリストにある者を責めるべき咎を、神は何一つ見出すことはできないのです。

イギリス人と(世界で最高級の車と評価される)ロールス・ロイスに関わるある出来事を例にとつて、これを説明してみましよう。彼は休暇でフランスを旅していたのですが、あるとき、車の後軸が破損しました。現地の修理工場では車軸を交換できなかったたので、修理工場の人々はイギリスに電話をしました。すると、ロールス・ロイス社は後部車軸を送ってきただけでなく、それを適正に取り付けられるように二人の機械工までも派遣してきたのです。このイギリス人は、無事に旅を続け、それからイギリスに戻り、請求書が来るのを覚悟していました。ところが何カ月過ぎても請求書が届かないので、彼はロールス・ロ

イス社に手紙を書きました。すぐに返事が届き、そこにはこう書いてありました。「弊社は注意深く記録を調べましたが、ロールス・ロイス社製の車の後軸が破損した、という記録は、ひとつも発見できませんでした」と。

神がどれほど丹念にご自身の記録を調べても、クリスチャンを地獄でさばくべきいかなる罪の記録も見出すことはできません。クリスチャンは、愛する御子の中にいるものとして受け入れられているからです。クリスチャンは、キリストにあつて完全であり、神の義でできた衣にすつかりつつまれています。神の前に非の打ち所のない立場を有しています。ですから、クリスチャンは勝利と確信を持つて次のように言うことができます。

まず御手をわが尊き救い主に伸べ給え

神の評価に照らして、調べ給え

イエスに一点でも罪のしみがあると証明し給え

しかる後に、汝は汚れている、と告げ給え

「あなたは、自分のために大きなことを求めるのか。求めるな。」

(エレミヤ書45章5節)

クリスチャンの奉仕においてすら、一目置かれる存在になりたいという、ひそかな誘惑があります。雑誌に名前が載るとか、ラジオからその名前が流れるというように…。しかし、それはとんでもない罠です。それは、キリストから栄光を奪うものです。私たちからも平安と喜びが奪われます。そして、私たちがサタンの弾丸の格好の標的となります。

まず、キリストの栄光を奪うという点です。(※モーセ五書の注解で有名な)C・H・マッキントッシュは、こう言いました。

「人物にしる、その働きのしる、注目を浴びるようになったら、危険は常に最大となる。主イエス以外の人物、または、働きの注意が向けられるのは、サタンがその目的を達成している証拠であると考えて差し支えない。ひとつの働きの極めて素朴な形で始まるかもしれない。しかし、働きの人が聖なる警戒心と靈性を保っていないければ、その人自身、または、その働きの結果が幅広い注目を集めることになり、本人が悪魔の罠に陥らないとも限らない。サタンの壮大な、また、絶えざる狙いは、主イエスに不名誉をもたらすことである。そして、もし、一見クリスチャンの働きのように見えるものを通してそうできるのであれば、当面の勝利はそれだけ大きいものになる」と。(スコットランドの神学者)J・デニーもまた、この点を見事に説明しています。「自分は偉大な人間であり、キリストは素晴らしいという二つのことを、同時に証明することは誰にもできない」と。

そんなことをしているうちに、私たちは自分を損なっています。ある人が言いました。「奉仕をすることによって偉大な人

間になろうと努力するのをやめたときに、初めて本当の平安と喜びを経験しました」と。

そればかりではなく、偉大になりたいという願望のゆえに、私たちはサタンの格好の標的になってしまいます。有名な人物であるほど、その転落はキリストの大義に、より深刻なそしりを招くことになるのです。

パプテスマのヨハネは、偉大さを主張することを一貫して放棄し続けました。「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」ということこそ、彼の座右の銘だったので。

私たちも、主が高きに召してくださるまでは、一番低いところにいる方がよいのです。私たち一人ひとりにとって幸いな祈りとは、「私を小さき者、無名の者のままにしたまえ／キリストにのみ愛され、尊ばれる者としたまえ」(賛美歌)といえましょう。

ナザレとは取るに足らざる場所なりき

ガリラヤとてもまた変わりなし

「何一つ思い煩ってはいけません。」

(ピリピ人への手紙4章6節フィリップス訳)

人が思い煩う可能性のあることは、たくさんあります。癌や、心臓病、他の無数の病気にかかる可能性をはじめ、有害といわれる食品、思いがけない死、核戦争、歯止めのないインフレ、不確実な未来、このような世で成長する子どもたちが大丈夫であろうかという厳しい見通しなど、その可能性はきりがありません。

それなのに、神のみことばは、「何も思い煩ってはいけません」と私たちに語っています。神が私たちに望んでおられるのは、思い煩いのない生活です。それには、もつともな理由があるのです。

思い煩いは、不要です。主は、私たちが氣遣ってくださいています。そして、その手のひらの中で私たちを包んでくださっています。主の許しなしに、私たちの身に起こることは何もありません。私たちは、盲目的な偶然、事故、宿命の犠牲者ではありません。私たちの人生は計画され、整えられ、導かれています。

思い煩いは、無益です。思い煩っても問題は解決しませんし、危機も回避できません。ある人が言ったように、「思い煩っても明日の悲しみを取り去ることはできず、今日の力を奪い取るだけ」なのです。

思い煩いは、有害です。医師は、患者の病気の多くが思い煩い、ストレス、神経過敏に起因しているという点で、意見が一致しています。潰瘍の比率は、心配に起因する病気のリストで上位に位置しています。

思い煩いは、罪です。「思い煩いは、神の知恵を疑うものである。神は、御自分がなしていることがわかっていると、暗に言うのと同じだからである。思い煩いは、神の愛を疑うものでもある。神は、自分のことなど気にかけておられないというものも、同然だからである。思い煩いは、神の力を疑うものである。神には、自分に思い煩いが起きる環境を変えることができないというのも同然だからである」と、ある人が言う通りです。

私たちは、思い煩いを誇ることさえ珍しくありません。妻が絶え間なく心配しているのを夫がとがめると、妻は答えました。「私が思い煩わなかったら、ものごとは何も進みはしないわ」と。私たちがそれを罪であると認め、それをまるごと放棄するまでは、解放されることはありません。しかし、そうするとき、私たちは確信をもって言うことができます。

明日のことに私は心を悩ませない

救い主が気づかってくたさるから

主が苦勞と悲しみにて明日を満たされるなら

耐え、担えるように主は助けてくださる

明日のことに私は心を悩ませない

明日の重荷を今持つ必要はどこにもない

明日の恵みと力を前借りはできない

であるなら明日の気苦勞を今からする必要が

どこにあるだろう

「神は愛です。」

(ヨハネの手紙第一4章8節)

キリストの来臨により、ギリシャ語に新しく、愛を示すことばが加わりました。それは「アガペ」という語です。すでに友愛を表す語(フィリア)と情熱的な愛を表す語(エロス)はありましたが、神がそのひとり子を与えるほどの愛、また、互いに示すように、と神が呼びかけておられるような愛を表す語はなかったのです。

この愛は、この世の愛とは異なる、新しい広がりをもった愛です。神の愛には、始まりがなく、終わりもありません。限界のない愛であり、測ることができません。完全に純粹で、情欲の汚れは微塵もありません。犠牲的であり、自分にかかる損失を計算に入れませんが、愛とは、与えることによつて、その本来の姿を現します。それは、「神は、…ひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」とあるからであり、「キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を…おささげになりました」(エペソ5・2)と書かれているからです。愛は、絶えることなく他の人々の益を求めています。愛すべき相手のみならず、嫌な相手にも、思いやりを持ちます。味方だけではなく、敵にも思いやりを差し伸べます。愛する対象の価値や美德によつてではなく、与える側の寛大さによつて、愛が引き出されます。徹頭徹尾、非利己的で、見返りに何も要求せず、個人的利得のために相手を利用することもありません。自分にされた悪を記憶に留めず、むしろ、多数の侮辱と無礼な行いを優しく包み隠します。すべての失礼な振舞いに親切で報い、自分を殺そうとする者のために祈ります。愛は、常に他の人のことを思い、自己よりも他人を尊びます。

しかし、愛には決然とした面もあります。神は、ご自分の愛する者たちを懲らしめます。愛は、罪を大目に見ることができません。罪とは有害で、破壊的なものであるからであり、愛は、自分が愛する対象を危害と破壊から守りたいと欲するからです。

神の愛の最大の表れは、私たちの身代わりにカルバリの十字架上で死ぬものとして、ご自分の愛する御子を与えてくださったことです。

ああ神よ、誰かあなたの愛を測りえましよう
私たちのため、かけがえなき御方を粉砕し、

こよなき喜びとされる愛する御子
キリストを砕くまでのその愛を

(アラバン)

「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。」

(ヨハネの手紙第一4章11節)

愛とは、抑制も予測もできない感情であると考えてはなりません。私たちは愛しなさいと命令されていますが、もし、愛というものが何かとらえどころのない、ときおり湧き上がる感情の高まりで、原因の思いあたらない風邪のようなものであるなら、その命令を守るとはまず不可能だと言わなければなりません。愛とは、確かに感情を含みはしますが、感情というより、むしろ、意志に関わるものなのです。

それと同時に、愛とは、日常の厳しい現実とほとんど関わりのない、夢で見るお城の世界にしか存在しないものだという概念に用心しなければなりません。月光やバラを楽しむ時間が一時間であるとすれば、床掃除や皿洗いは何週間にも相当するからです。

言い換えれば、愛とは、はなはだ実生活に関係したものです。例えば、食卓でバナナを盛りつけた皿が回ってきて、そこに黒い斑点のバナナがあったら、それをあえて選ぶのが愛なのです。使用後に、洗面台やバスタブをきれいにしておくのが愛です。紙タオルがなくなりそうであれば、次に使う人が不便をしないように交換しておくのが愛です。使われていないときに、明かりを消すのも愛です。丸めて捨てられたティッシュを踏みつけないで拾い上げるのが愛です。車を借りた後で、ガソリンとオイルを補給しておくのが愛です。頼まれなくても、ゴミ箱を空にするのが愛です。愛は、人を待たせるようなことをしません。自分より他の人の必要を優先します。集会の妨げにならないように、泣き止まぬ赤ちゃんをそつと連れ出します。

耳の遠い人にも聞こえるように、大きい声で話します。そして、他の人に分かち合える経済力をつけるために愛は働くのです。

愛にはその衣に縁へりがある

その長さは地面にふれるほど

大通りや小道の汚れにふれてもおかしくない

おかしくないどころか、そうせねば気がすまない

山の上で休息などなぜできよう

谷間に下つていかなければ気がすまない

愛の心が満ち足りることはない

くじけた人の心に光が灯るときまでは

「時間をあがないなさい。」

(エペソ人への手紙5章16節 英訳)

世の人々がますます仕事アレルギーになりつつある現在、クリスチャンは過ぎゆく一瞬たりとも逃さず、これを最大限に用いなければなりません。時間を浪費するのは罪、と心得ましよう。

どの時代でも、仕事の勤勉さがどれほど大事かを証言する声が絶えることはありません。救い主ご自身が言っておられます。「わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。」

(ヨハネ9・4)と。

(『キリストに倣いて』の著者として有名な)トマス・ア・ケンピスは、こう書いています。「怠惰と無気力に陥るな。読書、執筆、祈祷、静思あるいは何か有益な労働に従事し、みな利益となるようにせよ」と。

みことばの解釈者としての成功の秘訣を尋ねられたとき、G・キャンベル・モルガンは、こう言っています。「一に努力(work)。二にひたむきな努力(work)。そして三に、やはり努力(work)です」と。

世に來られたとき、主イエスが大工として仕事をされたことを決して忘れてはなりません。主のご生涯の大部分は、ナザレの仕事場で費やされたのです。

パウロは、天幕作りの職人でもありました。それは、自分の働きの中でも重要な位置を占めていると、パウロは見なしていませんでした。

罪が世に入った結果が労働であると考えるのは間違いです。罪が入る以前から、アダムは菜園に置かれて、その管理をゆた

ねられています(創世記2・15)。のろいというのは、労働に伴う苦しみと汗のことです(創世記3・19)。天国においてすら、仕事が続いています。「そのしもべたちは神に仕える」(黙示録22・3)とあるからです。

仕事は、祝福です。を通して、創造性を発揮したいという私たちの必要が満たされるのを経験できます。勤勉に仕事に取り組むとき、頭脳とからだは、最高の機能を発揮します。有益な仕事に従事すると、罪から何重にも守られる幸いに与ります。「サタンは、怠け者のために悪さを用意して待っている」(アイザック・ウォッツ、※讚美歌作者)からです。「怠惰な姿を見ると、悪魔は誘惑したいという誘惑に駆られるのだ」と、トマス・ワトソン(※十七世紀の清教徒の伝道者)は言っています。正直で、勤勉で、誠実な仕事ぶりは、クリスチャンの証しに欠かせない要素です。しかも、私たちの労働の結果は、私たちの死後にまで残る可能性があります。ある人が言った通り、「誰でも、自分のからだに横たわっていても何か有益なことができるよう、生前から手を打っておかなければならない」のです。また、ウイリアム・ジェームズは、こう言っています。「一生の素晴らしい使い方とは何か。それは、一生が終わってもまた存続するもののために用いることである」と。

「これを信じる者は、あわてることがない。」

(イザヤ書28章16節)

超音速旅客機や高速通信の時代に住み、急ぐことが合言葉という文化の中にいる私たちですが、聖書では、急ぐことが良い意味で使われることがめつたにないと知ると、意外の感に打たれます。めつたにないと言うのは、放蕩息子を迎えに飛び出した父親の例があり、神は赦しを急いで与えてくださると暗示されているからです。しかし、一般的に神は急ぐことをなさいません。「王の命令があまり急だったので」(1サムエル21・8)とダビデが言ったのは、言い訳のそしりを免がれません。ダビデのことは盾にして、自分があわてふためき、右往左往することを正当化してはなりません。

事実をありのままに言えば、今日の聖句にあるように、主を本当に信頼しているなら、急ぐ必要はどこにもないのです。私たちの任務がたとえ緊急なものであっても、取り乱して肉体的な活動をするよりは、御霊によって静かに歩む方がうまく行くのです。

結婚に急ぐ若い男性がいるとします。急がなければ、他の誰かがその女性を奪ってしまうと彼は考えます。真実を言えば、その女性を彼にと神が望んでおられるのであれば、誰も彼女を奪うことはありません。もし、彼女が神の選んだ人でなかった場合、「急いで結婚、ゆつくり後悔」ということを、身をもって知るだけです。

もう一つの例は、いわゆる専心の働きにあわただしく入っていくという問題です。この世が減じようとしているのを黙って見過ごしているわけにはいかないと、本人は主張します。イエスは、ナザレで長い年月過ごされましたが、そのような主張は

されませんでした。神が公生涯に召し出されるまで、主はひたすら待つておられたのです。

個人伝道においても、私たちは急ぐことがしばしばです。信仰告白を勝ち取ろうとするあまり、私たちは、熟する前に果実を摘んでしまいます。聖霊が、罪の自覚を十分に与えてくださるのを待つことができないのです。このような方法の結果、偽りの信仰告白と、挫折した人々の列が続くことになります。私たちは、「忍耐を完全に働かせなければなりません」(ヤコブ1・4)。

私たちの人生が真に有用なものとなるためには、どうしたらよいのでしょうか。その秘訣は、ひとりよがりの使命に向かつてやみくもに進歩するのではなく、主の召しを確信をもって忍耐強く待ち望み、聖霊に導かれた働きに与るところにあります。

「そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」

(マタイの福音書11章26節)

ほとんど誰の人生にも、自らは選ばなかつたであろう、できれば取り除きたい、しかし、どうしても変えられない、というものがあります。肉体的な障害や異常という問題、あるいは、軽度とはいえ、決して消え去ることのない慢性の病氣、さらに、神経的、情緒的疾患という、とても歓迎できない「客」が長居をするという問題です。

実に多くの人が、「もし、こうでありさえしたら…」と夢想して、敗北の人生を歩んでいます。もし、もつと背が高かつたら。もし、もつとハンサム(美人)であつたら。もし、違う家族、人種に生まれていたら。もし、男性(女性)に生まれていたら。もし、スポーツに秀でた体格に生まれていたら。もし、完璧な健康に恵まれていたら…と。

このように考える人が、知らなければならぬ教訓があります。それは、変えることのできないことを受け入れるときに、平安が生まれるということです。今の私たちがあつたのは、神の恵みです。神は、無限の愛と無限の知恵をもつて、私たちの人生を計画されました。もし、私たちが神と同じほどに見ることができたら、神がなされたのとそっくり同じに物事を整えたことでしょう。したがって、私たちは、「そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした」と言うことができ、当然なのです。

しかし、それよりもさらに進んだ段階があります。以上のよいうなことを、柔順な諦めの心で受け入れる必要はどこにもありません。愛の神が、それらのことを敢えて許されたのであれば、賛美と喜びの源泉にすらできるのです。パウロは、肉体のとげ

を取り除いてください、と三度祈りました。主がとげに耐えるだけの恵みを約束してくださいと、使徒パウロは叫びました。

「私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう」(IIコリント12・9)と。

人生の逆境にしか見えないことを喜び、むしろ、神に栄光を帰す手段としてそれを用いることができるとしたら、それは一種の霊的成熟度を示す指標です。(※盲目の讚美歌作者)フアン・クロスビーは、まだ小さいうちにこの教訓を学びました。わずか八才のとき、盲人の女性詩人は、次のように書いています。

ああ、わたしってなんて幸せなことでもでしょう
たしかに目は見えません
でもわたしは決心しました

この世で満ち足りていようと

わたしが楽しむこの祝福の多さは何かしら

ほかの人が味わえないものばかり

だから目が見えないからといって

泣くのもため息をつくの

わたしにはできないし、したくもないの

「あなたがたは、ただで受けたのですから、ただで与えなさい。」

(マタイの福音書10章8節)

世界最高のバイオリニストの一人、フリッツ・クライスラーは、こう言っています。「音楽が体内に組み込まれた状態で、私は生まれた。ABCも読めないうちに、楽譜は直感的に理解できた。これは天からの賜物である。私が獲得した才能ではないからである。したがって、私の音楽に対する賞賛は、本来、私が受けてはならないものである。…音楽は、値段のつけられない神聖なものである。今日、音楽界の著名人が要求する法外な演奏料は、社会に対する犯罪行為以外の何ものでもない」と。

このことばは、クリスチャンとしての働きに関わる誰もが、心に留めておきたいものです。クリスチャンの伝道は、得ることではなく、与えることにあります。「私に得になるものが何かそこにあるか」ではなく、「どのようにしたら、最大多数の人々と救いのメッセージを分かち合うことができるか」ということが問題なのです。クリストに仕える上では、相手に負担をかけるより、自分がその重荷を負う方がはるかに幸いです。

確かに、「働く者が報酬を受けるのは、当然だからです」(ルカ10・7)とあり、また「福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定めておられる」(1コリント9・14)のはその通りです。しかし、だからといって、自分の賜物に値札をつけるのを正当化する理由にはなりません。賛美歌の使用に對して、法外な著作権使用料の請求を正当化する理由にはなりません。人前で話し、歌う場合の契約に、途方もない料金を求めるのを正当化する理由にもなりません。

魔術師シモンは、他の人に聖霊を与える力を金で買おうとしました(使徒8・19)。シモンがこれを自分の金儲けの手段と見

ていたことは、間違いありません。シモンはこの行動により、宗教上の特権を金銭で取引することを示すことばとして、自分の名を英語に残すことになりました(simony=聖物売買)。今日の宗教界は、「シモニー」で致命傷を負ったと言っても過言ではありません。

もし、なんらかの方法によつて、いわゆる伝道事業から金銭的支援が引き揚げられるなら、その大部分はたちどころに運営をやめてしまうことでしょう。しかし、それでも最後の力の一滴を注ぎ尽くすまで前進をあきらめない、忠実な主のしもべたちが残るはずです。

私たちは、ただで受けたのですから、ただで与えなければなりません。与えれば与えるほど、祝福は広くおよび、報いも一層大きくなります。―「量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでに(ルカ6・38)」。

「さばいてはいけません。さばかれないためです。」

(マタイの福音書7章1節)

聖書についてはろくに知らなくても、この聖句だけは知っているという人はよくいます。しかも、それを何とも奇妙に適用するので。(例えば)口にするのはばかられるほど邪悪なことをした人を批判する場合でも、信心深そうに言います。「さばいてはいけません。あなたもさばかれないためです」と。言い換えれば、どのような形であれ悪をとがめることは一切認めない、という意味で引用するわけです。

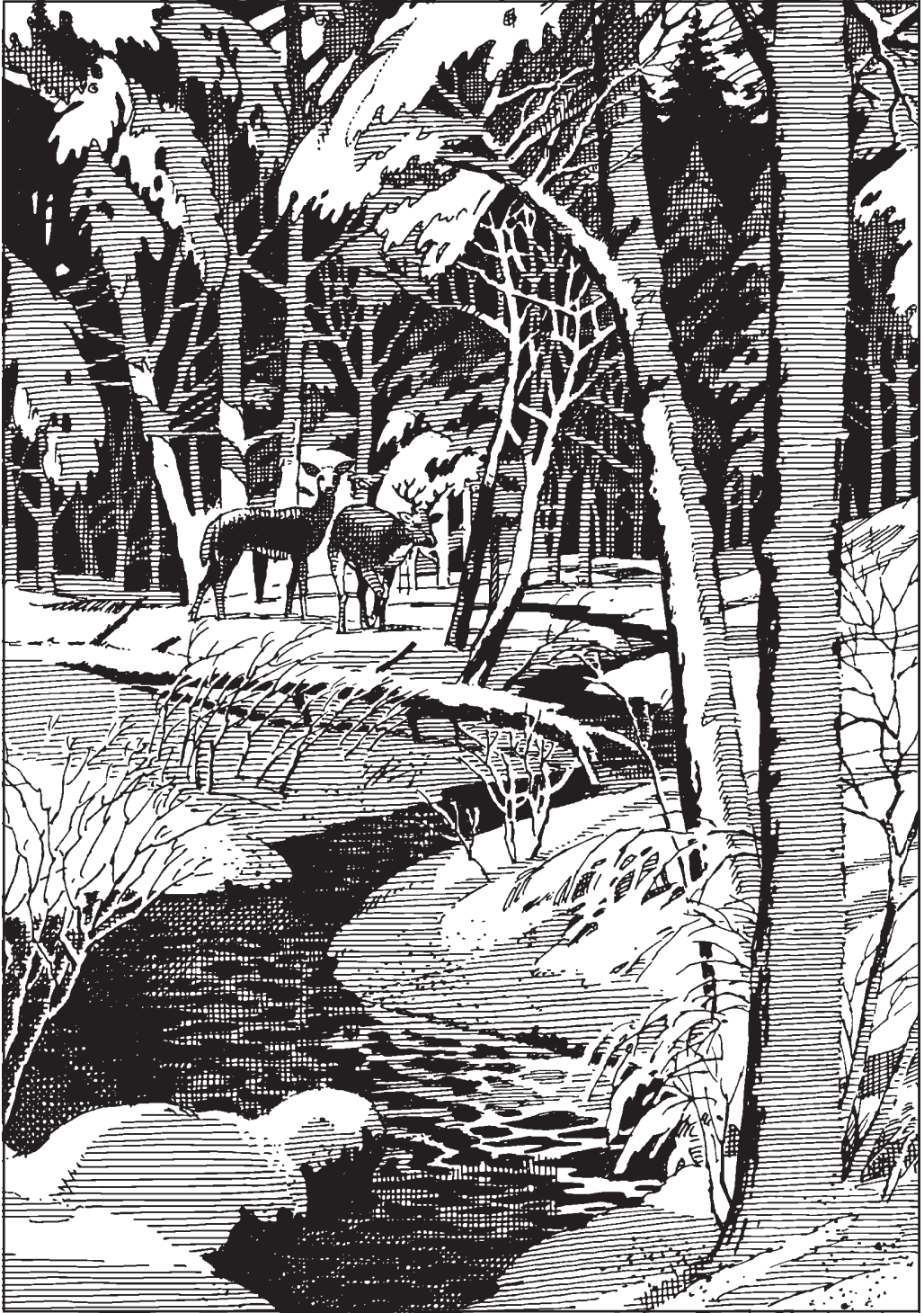
しかし、確かにさばいてはならない領域というものがある一方、さばくことが命じられている領域もあるというのは、明白な事実です。

さばくことが不適切な場合とは、例えば、次のようなものです。人の動機をさばいてはならない：全能でない私たちには、なぜ人があのこと、このことをするのか、その理由がわからないからです。他のクリスチャンがする奉仕について、さばいてはならない：その人が立つのも倒れるのも主によるからです。道徳的に中立的な事柄に対して、良心のとがめを感じる人をさばいてはならない：そのような人の良心を踏みにじることは、間違っているからです。人を外見で判断したり、えこひいきをしたりしてはいけません：大事なことはその人の心がどうであるかなのです。そして、言うまでもありませんが、とげとげしく、批判的で、難癖をつけるような心を持つことは避けなければなりません。習慣的にあら捜しをするのは、クリスチャンの信仰を伝える上で、何の宣伝効果もありません。

しかし、さばくことが(逆に)命じられている領域もあるので。聖書と一致しているかどうか調べるために、すべての教え

の「さばき」、すなわち、吟味をしなければなりません。釣り合わないくびきを負うことがないように、相手の人が本当のクリスチャンかどうかの「さばき」、すなわち、見極めが必要です。クリスチャンであるなら、民事裁判所に出頭するという方法を選ぶのではなく、自分たちの間で論争に決着をつけられるようであればなりません。それぞれの教会は、度を越した罪に対して「さばき」、すなわち、裁定をくだし、罪を犯した人を交わりから排除しなければなりません。教会に属する人々は、どの人が長老や執事の資質があるかどうかの「さばき」、すなわち、判断が必要です。

神は、私たちが批判力を放棄したり、すべての道徳的、霊的標準を投げ捨てたりすることなど望んではおられません。神が求めておられるのは、それが禁じられている領域では、さばくことをやめ、命じられている領域では、正しくさばく(判断する)ということだけなのです。



「キリストの栄光にかかわる福音」

(コリント人への手紙第二4章4節)

福音とは、キリストの栄光に関わる良い知らせであることを決して忘れてはなりません。確かに、福音は十字架につけられ、葬られた御方についてのものです。しかし、その御方は、もはや十字架にかかつてはおらず、墓の中にもおられません。よみがえり、天に昇り、神の右の座について栄光を受けておられるのです。

私たちは、この御方を、身分の低いナザレの大工、苦難のしもべ、あるいは、ガリラヤのよそ者として紹介はしません。あるいは、現代の宗教芸術に描かれるような、弱々しい空想的社会改良家として紹介することもしません。

私たちは、いのちと栄光の主である御方を宣べ伝えます。主は、神が高く引き上げ、すべての名にまさる名を与えられた御方です。その名を聞けば、すべてのものが膝をかがめ、すべての口が栄光の神、御父に向かって、「この方こそ主です」と告白するのです。主は、栄光と名誉の王冠を戴く君主であり、救い主なのです。

私たちの語るメッセージで、主を侮辱していることがいかに多いことでしょうか。人間の才能を崇めるあまり、そのような人間をしもべにできる神は幸運であるといわんばかりの印象を、私たちはつくり出しています。主を信頼するのは、とてつもない恩恵を主に施しているかのごとき口調で語ります。

これは、使徒たちが宣べ伝えた福音ではありません。使徒たちは、要するにこう言ったのです。「あなたがたこそは、主イエス・キリストの殺害者だ。あなたがたは主を捕らえ、悪しき手で主を十字架に釘づけた。しかし、神は主を死からよみがえら

せて天の右の座につかせ、栄光を与えられた。主は、今日そこで、肉と骨のある、栄光のからだをもつて生きておられる。釘の傷跡があるその手には、宇宙の支配の象徴である、笏しやくが握られている。主は再び戻って来られ、正義によつて世界をさばかれる。だから、悔改め、信仰をもつて主に立ち返れ。救われるための他の方法はない。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていない。」。

ああ、新たな目をもつて、栄光のうちにいます御方を見ることができよう。そして、それにふさわしい口が与えられて、御頭みかぶつに冠と輝く無数の栄光を、宣べることができよう。そうなったときこそ、五旬節の日のごとく、罪人は、主の前にふるえおののいて叫ぶことでしょう。「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか」と。

『光が、やみの中から輝き出よ。』と言われた神は、私たちの心を照らしてくださいました。それは、イエス・キリストの御顔にある、神を知る栄光の知識の輝きを私たちが発するためです。」

(「コリント人への手紙第二」4章6節ダービー訳)

「神が照らしてくださいましたのは、；私たちがその輝きを発するためです」。ここから神が意図されたのは、私たちが神の祝福の終着点となることなく、祝福を伝える経路となることであると知らされます。「神は照らしてくださいました」という表現は、私たちの回心を指しています。世界の創造の際に、光が輝くように命じられた神は、新しい創造の御わざにおいては、御自身私たちが心の中で輝いてくださいましたのです。

しかし、神がそうしてくださいましたのは、私たちが利己的にその溢れる祝福をため込むためではありません。むしろ、イエス・キリストの御顔にある神の栄光を知る知識が、私たちを通して他の人に伝わるためなのです。

それと同様の趣旨で、神がいかに、「異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示」してくださいましたかを、パウロは語っています(ガラテヤ1・16)。神が私たちに御子を啓示してくださるのは、私たちが他の人に御子を示すためなのです。この真理がやっと思心できた何年も前のこと、私は聖書の見返しにこう書きました。

もし、イエス・キリストを見る唯一の手段が

お前のうちにおられる主を見るだけであるなら、

マクドナルドよ、人々はそこに何を見るだろうか

イアン・マクファーンが、次のように言ったのも驚くにはあたりません。「説教とは、威厳があり、気高く、畏怖の念をもたらす超自然的行為である。それは、一個人を通して、一人の大いなる御方を、個人からなる集団に伝達することであり、そのようにして伝えられた御方が永遠なるイエスなのである。」マクファーンは、その例証として、ジョージ五世が語ったことばが、ラジオでアメリカに中継されたときの出来事を紹介しています。ニューヨークのラジオ局の重要なケーブルが切れてしまい、局員たちは真つ青になりました。「そのときであった。ハロルド・ヴィヴィアンという若い修理工は、どうするべきかを瞬時に理解した。切れたワイヤーの両端をとり、王のメッセージを載せた電流が伝達されている間、痛みをこらえ、勇敢に握り続けたのである。およそ二五〇ボルトの電荷が彼のからだを激しく揺さぶり、頭から足先まで痙攣が走り、少なからぬ痛みを引き起こした。しかし、彼は握った手をゆるめようとはしなかつた。断固として、必死に、人々が王の声を聞き終わるまで、ケーブルを離さなかつたのである」。

ほむべき主よ

われらは通信路に過ぎず

されど汝が奇しき力

われらのうちを流れ行くとき

汝が使用に耐えうるなり

日毎に、また刻一刻と

「また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに入った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。」

(ヨハネの黙示録8章3節)

この箇所が登場する御使いとは、ほかならぬ主イエス御自身であると、私は信じます。そして、ここに描かれる主のお働きは、私たちに對する慰めと勇気で満ちています。

主は、何をしておられるのでしょうか。すべての聖徒の祈りを受け取り、ご自身の貴い香を加え、御父なる神に差し出しておられるのです。

私たちの祈りも賛美も、不完全きわまりないことを私たちは痛いほど知っています。正しく祈るにはどうしたらよいのかわかっていません。私たちのなすことのすべてが、罪と、あやしげな動機、そして、自己中心で汚れています。

ひざまずいて祈る最も聖なる時間の上に

賛美の歌があなたに喜ばれていると

私たちが見なすその時の上にこそ

すべての心を探られる主よ

あなたの赦しを注ぎたまえ

しかし、そもそも御父なる神に届く前に、私たちの礼拝と執り成しは、まず主イエスの中を通過します。主は、あらゆる不完全さの痕跡を除去してくださるので、それらが最終的に御父に到達するときには、非の打ち所のないものとなっています。

そればかりではなく、さらに素晴らしいことが起こります。主は、聖徒の祈りに香を加えてくださるのです。その香とは、主の完全なご人格とその働きから発する芳香を表しています。私たちの祈りに効力があるとすれば、それはこのおかげなのです。

これは何という励ましでしょう。何と不器用な祈りしかできないことか、と私たちの誰もが痛いほど気づいています。文法の規則は片っ端から破り、自分の思いを優雅に表現できず、教理的には愚かしいことを口にするのです。

しかし、だからといって、祈ることをあきらめる必要はありません。私たちには、御父とのやりとりのすべてに手を加え、清めてくださる偉大な大祭司がつかっているのですから。

メアリー・ボウレーは、その真理を捉えて詩に表し、こう書きました。

多くの香が立ち上りゆく

永遠の御座の前へと

恵み深くも、神は身をかがめ

かよわきうめきの一つ一つを聞きたもう

我らの祈りと賛美のすべてにキリストは

香炉の芳香と愛を加えたもう

かくて臭気はあとかたもなし

「もしも私が、『このままを述べよう。』と言ったなら、確かに私は、あなたの子らの世代の者を裏切ったことだろう。」

(詩篇73篇15節)

この詩篇作者は、つらい時期を通った経験がありました。悪者がこの世で繁栄を謳歌しているのに対して、彼自身は悩みと苦しみの悪夢を経験していたのです。彼はやがて、神の正義、神の愛、神の知恵に疑いを持ち始めました。あたかも、主が悪に褒美を与え、正義には罰を与えておられるかのように思えたのです。

しかし、アサフは高貴な決意を固めました。神の子たちがひとりもつまずくことのないように、自分の懷疑を表立つては述べまい、と決めたのです。

おそらく、私たちのほとんど誰もがときとして、懷疑と疑問を持ちます。ことに、我慢の限界にまで達しようとするとき、また、何もかもが私たちの頭上に崩れ落ちてくるように思われるときに、神の摂理を疑うのは容易です。こんなとき、私たちはどうしたらよいのでしょうか。

相談相手として、霊的判断力に優れた人に、その疑念を打ち明けることには、まったく問題はありません。ときには、あまりにも混乱してトンネルの出口の光が見えないことがあります。ところが、他の人にはそれがよく見えていて、私たちをその場所まで連れて行くことができます。

「暗やみに入ったから、といって光の中で示されたことを疑ってはいけない」というのが、一般的な原則です。状況がどれほど心細く見えても、それをもとに神のみことばを解釈してはいけません。むしろ、聖書によって環境を解釈することです。そ

して、神が定められたことは誰にも覆すことはできず、その約束を無にすることはできないと悟ることです。

しかし、何はさておき、無用に疑いを吹聴ふいちやうすることは避けなければなりません。キリストを信じて間もない人々をつまずかせかねない恐るべき危険があるからです。このような人々について、キリストは言われました。「しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです」(マタイ18・6)。

私たちが確信できることは、無数にあります。疑問は、もしあったとしても、たかが知れています。確信しているところを分かち合いましょう。ゲートルは、言いました。「あなたに確信するところがあるなら、その恩恵を私にも分け与えてはくれないか。しかし、懷疑はどうかあなたが持ったままにしておいて欲しい。懷疑なら私にも十分あるのだから。」

「あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。」

(ヨブ記42章2節)

神が定められたことは、覆ることがありません。人間が邪悪であろうとも、それにおかまひなく神は事をなされるのです。人間がどのような主張をしようとも、最後の決定権を持つのは、神です。ソロモンは、私たちに気づかせてくれていきます。「主の前では、どんな知恵も英知もはかりごととも、役に立たない」(箴言21・30)と。それにつけ加えて、エレミヤは証します。「主のご計画はことごとく成し遂げられる」(エレミヤ51・29英訳)と。

ヨセフの兄たちは、ヨセフをミデヤン人の隊商に売って厄介払いをしようと決めました。しかし、彼らが見事にやり遂げたのは、神のみこころを成就することでした。ミデヤン人は、無料でヨセフをエジプトまで運んでくれ、そのエジプトでヨセフは総理大臣、また、民の救済者の地位に上ったのです。

盲目に生まれついた人が視力を取り戻し、救い主を信じたとを知ると、ユダヤ人たちは彼を会堂から追放しました。それは、ユダヤ人にとって大きな勝利だったのでしょうか。いいえ。どのみちイエスは彼を連れ出さなければなりませんでした。なぜなら、「良い羊飼いは自分の羊をその名で呼んで連れ出します」(ヨハネ10・3)とあるからです。結局、ユダヤ人は、イエスの手間を省いてくれただけだったのです。

イエス・キリストを捕え、十字架に釘づけ、死に追いやったとき、人間の悪は頂点に達しました。しかし、ペテロは、この方が「神の定めた計画と神の予知とによつて」(使徒2・23)引き渡されたのだと教えました。神は、キリストを高く引き上げ、

主、また、救い主とされることによつて、人間の途方もない罪悪を解決する道を開いてくださったのです。

(※アメリカの著名な説教者)ドナルド・グレイ・バーンハウスは、見事な樹木が何本もある私有地を持つ、裕福な地主の話をしたことがあります。

「しかし、彼を憎む敵がいた。『あいつの木を一本切り倒そう。そうすればあいつもがっかりすることだろう』と言い、夜の暗闇にまぎれて、フェンスをそつと乗り越え、もつとも見事な木のところに行つたかと思うと鋸と斧を使って切り倒しにかかった。朝、あたりが明るくなりはじめると、遠くの方から馬にまたがり、丘を越えてやつて来る二人の姿が見えた。そのうちの一人が地主であるとわかると、あわてて彼はくさびをはずし、木が倒れるようにした。ところが、倒れるとき、枝の一本がからだにからまり、彼は地面に倒され、身動きができなくなつてしまった。このときのひどい怪我がもとで、やがて彼は死んでいった。死ぬ前に、彼は金切り声で言った。『どうだ。あなたの自慢の木を切つてやつたぜ。』すると、地主はあわれんだ目で彼を見て言った。『私がお連れしたのは建築家だ。新しく家を建てるスペースをつくるのに木を一本切らなければならなかったのだが、まさかあなたが一晩かかってその木を切り倒してくれたとは!』」

「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」

(ヤコブの手紙一章22節)

集会、学びの大会、セミナーに出席すること自体が神の働きにつながると思うのは、巧妙な欺きです。メッセージに耳を傾け、自分のなすべきことについて語っていると、あたかもそれだけで自分が神のみこころを成就しているのではないかという妄想が忍び込んできます。実際は、自分の責任をより重いものにし、自分を欺いているだけなのです。本当は、かなり肉体的であるのに、霊的であると自分を欺きます。本当は、停滞しているのに、成長していると自分を欺いています。どうしようもないほど愚かであるのに、自分は賢いと自分自身を欺いています。

イエスは、言われました。賢い人とは、主のみことばを聞き、それを実行する人のことである、と。愚かな人は主のみことばを聞いても、何も行動に移しません。

説教に耳を傾け、「何という素晴らしいメッセージだろう」と言っただけでは、十分ではありません。真のテストは、「今、聞いたことをヒントに、何か行動をしよう」と言うことなのです。ある人がこのように言いました。良い説教とは、知性の領域を広げ、心を温め、厳しく迫るだけでなく、行動への意志を駆り立てるものである、と。

メッセージの中ほどで、最初に歌った賛美の曲名を説教者が聴衆に尋ねたことがあります。誰も答えられません。朗読された聖書の箇所がどこかを尋ねました。誰も答えられません。どのような連絡や発表があったかを尋ねました。誰も思い出す

ことができませんでした。人々は、「教会ごっこ」をしていただけだったのです。

あらゆる集会が始まる前に、以下のような質問を自分自身にしてみるとよいのではないのでしょうか。なぜ、私はここへ来たのか。神が個人的に私に語りかけてくださるようになり、と私は望んでいるか。もし、神がそうしてくださったなら、私は神に従うかと。

死海が絶えず水の流入を受け入れながら、それに見合う流出をしていないために、そのような名前がつけられたのは当然といえましょう。私たちの生活においても、情報がいくらあっても適用しないなら、停滞が待っているだけです。救い主の絶えざる問いかけが胸にこたえます。「なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか」(ルカ6・46)。

「私はキリストとともに十字架につけられました。」

(ガラテヤ人への手紙2章20節)

主イエスが十字架で死なれたのは、私の身代わりとしてだけではありません。私の代理としても、死んでくださったのです。私のために死んでくださっただけでなく、私本人として、死んでくださったのです。主が死んでくださったという中には、私も本当に死んだという意味があります。アダムの子孫としての私のすべて、私の古い、邪悪な、回心前の自我は、十字架に釘づけられました。神の評価基準によれば、肉体にある者としての私の人生は、終止符を打たれたのです。

それだけではありません。救い主が葬られたとき、私も葬られたのです。キリストが葬られたのは、私が葬られたことと同一の出来事です。これは神の目から、古い「私」というものが永遠に取り除かれた状態を表しています。

そして、主イエスが死者の中からよみがえったとき、私もよみがえりました。しかし、ここで状況に変化が起きています。よみがえったのは、埋葬された者、すなわち、古い自我ではなく、新しい人―すなわち、私の中に生きるキリストです。私は、新しいいのちの歩みをするために、キリストと共によみがえったのです。

これらのすべては、立場上、すでに起きたこととして神はご覧になっています。今度は、それを私の實際生活の中で適用することを、神は望んでおられます。私が自ら死と葬り、そして、復活というサイクルを通過したことを認めるように、と神は望んでおられます。しかし、それにはどうしたらよいのでしょうか。

誘惑がやって来たとき、悪への誘いに対する応答を、死体が行う通りに応答すればよいのです。死体は無反応(！)。つまり、こう言うのです。「私は罪に対して死んだ。お前はもう私の主人ではない。お前との関係についていえば、私はもう死んだ身である」と。

日ごとに、私は自分の古く、墮落した自我が、イエスの墓に埋葬されていると、見なさなければなりません。つまり、内省するあまり自我にかかりきりにならないことです。自我の中に何か価値あるものがあるのではないかと捜したり、目もあてられない自我の墮落ぶりに幻滅したりもしないことです。

そして最後に、キリストと共によみがえった者として、一瞬一瞬を、新たな大志、新たな願い、新たな動機、新たな自由と新たな力に満ちた、新しいいのちに目を向けて生きていくことです。

ジョージ・ミュラーは、自分とキリストが一体であるというこの真理が初めて胸に落ちたときのことを、こう語っています。

「私が死んだ日があった。ジョージ・ミュラーに対し、また、その意見、好み、趣味と意志に対して死んだ日である。この世に対し、また、この世の賞賛や非難に対して死んで日である。そして、たとえ私の兄弟たちや友人からのものであったにしても、その賞賛や批難に対して、私は死んだ。それ以来というもの、私はひたすら、『恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう』努め励んでいる」(II テモテ2・15)。

「わたしの味方でない者はわたしに逆らう者であり、わたしとともにも集めない者は散らす者です。」

(マタイの福音書12章30節)

主イエスは、パリサイ人について、右のように語られました。パリサイ人は、赦されざる罪を犯してしまいました。実際は、聖霊の力によってなされた主の奇跡を、悪魔のかしら、ベルゼブルのおかげでできたのだと言ったからです。彼らが、主をイスラエルのメシヤ、世の救い主として受け入れるつもりのないことは、今や明白でした。パリサイ人たちは、はつきりとキリストの側に立たなかつたため、必然的にキリストに逆らう者となつてしまいました。キリストの側に立つて仕えない彼らは、キリストを妨害する者となつてしまったのです。

キリストとはどのような御方であり、どのようなことをなさつたのか、という点においては、中立的立場はありません。「垣根」にまたがるのは不可能です。人は、キリストを支持するか反対するか、どちらかの立場しかないのです。決められないという人も、実は、すでに一定の決断をくだしているのです。

キリストに関わる真理という点においても、妥協点はありません。聖書のキリスト教信仰では、見解の相違がある領域もないことはありませんが、これはそのうちのひとつというわけにはいきません。(アメリカの著名な説教者) A・W・トウザーは、「教理の中には、妥協不可能なものがある」と、私たちに気づかせてくれています。主イエスの完全な神性、処女降誕、正真正銘の人間性、罪なきご人格、罪人の身代わりとしての死、肉体の復活、神の右の御座への昇天、そして、主の再臨に対しては、揺るがない確信が求められています。この基本的教理に制

限を設けはじめると、後に残るのは、「半人前」の救い主だけです。それでは、到底救い主とは呼べません。

詩人がそれをこのように書き表しています。

「あなたはどうか考えるのか、キリストを」

これこそあなたの状態ともくろみを試す試金石

キリストを正しく捉えていなければ

他のすべてを誤ることは避けられない

イエスがご自身の姿を現すとき

あなたがイエスを愛する者かそうでないのか

それに従い神は処遇を決めたもう

あわれみか御怒りか、それを決めるのはあなたなのだ

「あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です。」

(ルカの福音書9章50節)

一見、これは昨日の聖句と矛盾しているように思えますが、矛盾ではありません。昨日、「わたしの味方でない者はわたしに逆らう者です」と救い主が語られた相手は、不信のパリサイ人でした。しかし、きょうの聖句は、事情が異なります。弟子たちは、イエスの名によつて悪霊を追い出していた人を見て、やめさせたのでした。彼が、弟子たちと関わりを持つとうとしないというだけで、止める理由は十分だと思つたのです。しかしイエスは言われました。「やめさせることはありません。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です。」

救いの問題に関しては、キリストの味方でない者は、キリストの反対者です。しかし、奉仕においては、主に反対しない者は、主の味方なのです。

私たちは、主に仕える他の人に対立するために召されたわけではありません。お互いのつま先を踏むことなく、働きを続けるだけの場所はたつぷりあり、世界は大きく広いのです。「やめさせることはありません」という主のおことばを深く心に留めなければなりません。

しかし、その反面、「この人の所に行き、一緒に行動せよ」と、イエスがヨハネや他の弟子たちに言つてはおられないことにも注意しなければなりません。ある人たちの使う方法は、他の人には、到底受け入れがたいものです。また、ある人たちの宣べ伝えるメッセージの強調点は、私たちと異なっています。ある人たちは、他の人よりも理解が進んでいます。そして、他の人なら、罪悪感を持つことに関して、まったくこだわりのない人たちもいます。あらゆるクリスチャンを、自分とまったく

同じ鑄型に入れることができるなどと思つてはなりません。しかし、パウロと同様、福音が勝利する度に、私たちは喜んでよいのです。パウロは、言いました。「人々の中にはねたみや争いをもつてキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもつてする者もいます。一方の人たちは愛をもつてキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています、他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもつて、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであつて、このことを私は喜んでいきます。そうです、今からも喜ぶことでしょう」(ピリピ1・15・18)。

サム・シューメーカーは、鋭い問いを投げかけています。「いつになったら私たちにわかるのだろうか。この時代の光と闇との激しい戦いのなかで、たとえ個人的好みには合わなくとも、友軍の支援が必要であること、そして、反キリストの嵐にまっしぐらに突き進むためには、共に協力しなければならぬ、ということが」と。

「私は言います。御霊によって歩みなさい。」

(ガラテヤ人への手紙5章16節)

御霊によって歩むということは、具体的にどうということなのでしょう。実際は、一部の人々が考えるような、複雑で非現実的なことではありません。御霊によって、一日を過ごすというのはどんなことなのか、以下に書いてみることにしましょう。

まず、祈りをもって一日をはじめます。自分の生活の中にあると気づいている罪をすべて告白します。これによって、あなたは清められた器とされ、神に使っていただけるようになります。しばし、賛美と礼拝に時間を費やします。これによって、たましいが整えられます。あなたの生活の決定権を、主にお渡しします。これによって、主があなたを通して、あなたの中に生きてくださることができるようになります。この再献身の行為により、無用な計画を思い巡らすことをやめて、あなたの生活を、主に治めていただくことができるわけです。

次に、しばらく、神のみことばを糧とする時間を取ります。そうすることによって、自分の生き方に対する神のみことばの大枠を知ることができます。そればかりではなく、現在の環境の中で、主のみことばとは何かという、具体的なヒントを受けることもあるでしょう。

この静思の時間が終わったら、手元の仕事をを行います。通常、これは単調で、お決まりのありきたりのものであるでしょう。多くの人が、ここで間違った考えを持ちやすいのです。御霊によつて歩むということは、エプロンや作業着の世界と無縁であると思っているからです。しかし、実際は、御霊によつて歩むというそのほとんどが、毎日の仕事を誠実に、また、勤勉に行うことで成り立っているのです。

一日を通して、罪に気がついたらすぐに告白し、それを捨てます。心に神の祝福が浮かんだら、主を賛美します。良きことを行いたい「衝動」には、例外なく従い、悪への誘惑は、例外なく拒否します。

そして、その日、自分の身に起きることを、あなたに対する神のご意志であると捉えます。予定がさえぎられたことが、かえつて主に仕える機会に変えられます。がっかりする経験は、神との出会いの機会となります。かかってくる電話、届いた手紙、訪れた来客は、それぞれ神のご計画の一部として見ることでできるようになります。

ハロルド・ワイルディッシュは、その著書で次のような引用をしています。

「あなたが罪の重荷全体を、完成したキリストの御わざの上においたように、あなたの生涯と奉仕の重荷全体を、今、あなたの内側で働く聖霊の働きにゆだねよ。」

「朝ごとに自分を明け渡し、御霊に導かれよ。そして、讚美の声を上げ、自分とその日の使い方を主にゆだねて安んじよ。一日中、喜ばしい気持ちで主に頼り、また、従い、主が自分を導き、啓発し、戒め、教え、用い、主はみこころを自分の内に、また、自分と一緒に成りなしてくださる、と待ち望む心を養え。目に見えるところや感情に一切頼らず、主のお働きを事実と見なせ。我らの生活を統べ治めるお方は、聖霊であると心得、聖霊が共におられることを信じ、従い、自分自身を何とかしようともがく努力をやめよ。そのとき、御霊の実は、我らの内におのずと表れ、みこころの内に、神の栄光となるだろう。」

「たましいと霊…の分かれ目」

(へブル人への手紙4章12節)

『人間は三つの部分から成り立つ』と聖書が語るとき、その順番は常に、霊、たましい、からだです。それに對し、人間がこれらの語を一緒に用いる際、その順序は必ずといっていいほど、からだ、たましい、霊です。罪が神の定められた順序をひっくりかえしてしまつたのです。もはやからだが最初で、次にたましい、そして、霊が末尾に置かれているのです。

人間という存在をつくる二つの非物質的部分とは、霊とたましいです。霊によつて、人は神と交わることができるようになります。たましいは感情や情熱と関係があります。微細な点にいたるまで霊とたましいを峻別することは不可能ですが、霊的なことと、たましいに関することの区別はできなければなりませんし、また、それを知る必要があります。

それでは、霊的であるとは、どういうことを言うのでしょうか。キリストが崇められるような説教がそれです。御霊の力によつてイエス・キリストを通し、神に祈る祈り、主に對する愛を動機とし、御霊による力をいただいて行う奉仕もそれです。霊とまことをもつて行う礼拝も、それです。

それでは、たましいに関わるものとは、どのようなことを言うのでしょうか。人とその雄弁さ、堂々とした風貌や機知に注目を集める説教、他の人に好印象を与えようという意図をもつてなされる機械的で、心のこもらない祈り、ひとりよがり、報酬目当てでなされる、肉的方法を用いた奉仕、目に見えない霊的な現実より、目に見える、機材の助けを中心に繰り返される礼拝です。

神の教会と、聖堂やステンドグラスの窓、祭服、尊称、燭台、香、また、その類の虚飾との間に何の共通点があるでしょうか。あるいは、もつと身近な例を言えば、教会とマディソン・アベニュー(※世界の一流ブランドが集まるニューヨークの高級ショッピング街)の広告宣伝、募金活動、伝道キャンペーン、個人崇拝、そして、それらに伴うきらびやかな音楽のショーと何の関わりがあるでしょうか。

一般的なクリスチャン雑誌の広告を見れば、私たちがいかに「たましい」を中心とした考え方になつてしまつたかがよくわかります。

パウロは金、銀、宝石に比せられる奉仕と、木、干し草、刈り株に比せられる奉仕との区別をしています(1コリント3:12)。霊的なものであるならばすべて、神の審判の火に耐えますが、たましいのレベルに過ぎないものはすべて、燃え上がり、なくなつてしまうことでしょう。

「この山でもなく、エルサレムでもない」

(ヨハネの福音書4章21節)

サマリヤ人にとって、礼拝の中心はゲリジム山の上でした。

ユダヤ人にとつては、エルサレムこそは、神が地上で御名を置かれた場所でした。しかし、イエスは、サマリヤの女に新しい時代の到来を告げました。「真の礼拝者たちが霊とまことによつて父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです」(ヨハネ4・23)。

礼拝のために指定された場所は、もはや地上に一箇所もありません。神のご経綸による私たちの時代、聖なる方が、聖地にとつてかわつたのです。主イエス・キリストが、今や、主の民の集う中心となりました。ヤコブのことばが、こうして成就しました。「国々の民は彼のもとに集まる」(創世記49・10英訳)。

私たちは、主のもとに集まります。ステンドグラスの窓を備え、オルガンの音楽が流れる聖堂には集まりません。どれほどの才能と雄弁に恵まれていても、特定の個人のもとには集まりません。主イエスこそが、私たちを引き寄せる神の「磁石」です。

地上の場所は、重要ではありません。集会所であろうが、家庭であろうが、また、畑や洞窟であろうが、私たちは集まることができます。真の礼拝においては、信仰によつて天の聖所に入るのです。父なる神が、そこにおられます。主イエスが、そこにおられます。御使いたちが、祝祭の衣を着てそこにいます。旧約の時代の聖徒が、そこにいます。そして、世を去つた教会時代の聖徒たちが、そこにいます。このような神々しい会衆の中で、私たちは聖霊の力により、主イエスを通して、神の前に

心からの礼拝を捧げることのできる特権が与えられています。つまり、私たちの肉体は依然として地上にあつても、霊においては、はるか下で戦争を繰り広げる不安な世を離れ、途方もない高みにまで昇るのです。

これは、「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中からいます」(マタイ18・20)という救い主のことばと矛盾しているのでしょうか。いいえ、これもまた真実です。主は、主の民が御名によつて集まるとき、特別な方法で臨在してくださいます。主は、私たちの祈りと讚美を受け、それを御父に捧げてくださるのです。主イエスが私たちの真中においてくださるといふのは、何という素晴らしい特権でしょう。

「だれに対しても、何の借りもあつてはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。」

(ローマ人への手紙13章8節)

この聖句を、どのような負債も負つてはならない、という禁止の命令として解釈する必要はありません。私たちの住む社会では、電話料の請求、光熱費の請求、水道料の請求(※それぞれが一種の負債)を逃れることはできません。また、状況によつては、同じ額の家賃であるならば、住宅ローンを組んで家を買ひ、資産を築いた方が賢明かもしれません。さらに、今日では、借入れの契約なしに事業を運営することは不可能です。

しかし、この聖句が、その他の慣行を禁じていることは確かです。弁済の見込みがほとんどないのに借金をすることを禁じています。価値が目減りしていく品物を購入するために、借金することを禁じています。滞納に陥ることを禁じています。必要不可欠でないもののために借金をすることを禁じています。クレジットカードがあるというので、衝動的に過大な出費をする誘惑に負け、債務に埋もれることを禁じています。未払い残高に対する法外な利子を払い、主からゆだねられた金銭を無駄遣いすることを禁じています。

この聖句が書かれたのは、私たちが債権者の督促、過大な支出による夫婦のもめごと、破産申し立て裁判など、クリスチャンの証しを台無しにする一切のものに遭わないですむためです。

一般論として、私たちは収入に見合ったつましい生活をし、「借りる者は貸す者のしもべとなる」(箴言22・7)ということを中心に念頭において、責任ある経済生活をしていかなければなりません。

どんな場合でもクリスチャンにふさわしい唯一の負債とは、互いに愛し合うという責務です。私たちはまだ主に立ち返つていない人を愛し、その人々に福音を紹介する義務を負つています(ローマ14)。私たちは兄弟を愛し、兄弟のために、いのちを捨てる義務があります(1ヨハネ3・16)。この種の負債によつて、法律上のトラブルに巻き込まれることはありません。むしろ、パウロが言うように、そうすることによつて律法をまつことができるのです。

「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちに
みことばを大胆に語らせてください。」

(使徒の働き4章29節)

初代のクリスチャンたちは、迫害の中を通つてるとき、環境が変化するのを待つことはありませんでした。むしろ、その環境の中で神を賛美したのです。

その模範に、私たちはなかなか做うことができません。条件が好転するまで、行動を先延ばしするのです。パリケードを、足がかりではなく、妨害物とみなします。「私たちの環境が理想的でなかったから」と言い訳をして、早々に降参してしまいます。その典型的な例をいくつか見てみましょう。

卒業までは無理、という理由でクリスチャンの奉仕に関わらない学生がいます。ところが、卒業後、恋愛と結婚に夢中になります。その後は、仕事や家庭のことで忙しく、神に仕える働きになかなか打ち込むことができません。仕方がないので、退職まで待とうと決めます。そのときになれば、残りの人生を主に捧げることも自由にできる、と思うからです。ところが、退職の頃には、体力も視力も衰え果て、結局は、暇な生活に甘んじてしまいます。

あるいは、どうにもそりの合わない人と一緒に仕事をしなければならぬ羽目になることもあるでしょう。もしかすると、その人は教会で重要な立場の一人であるかもしれませんが、確かに誠実で、勤勉なのですが、馬が合いません。どうしたらいいでしょう。私たちは傍観者の立場を取り、顔をしかめながら、立派な葬儀がそのうち行われるだろう、とその日を待ちます。ところが、そうは問屋が卸しません。そのような人に限つて、

驚くほど長寿なのです。葬儀の日を待つても無駄というものです。

ヨセフは、自分の人生を有用なものにするのは、牢獄を出てからにしようなどとは考えませんでした。牢獄の中でも、神に仕えてなすべき仕事がありました。ダニエルは、バビロン捕囚の真つただ中で、神に仕える一大勢力となりました。もし、捕囚が終わるのを待つていたなら、時期を逸し、何もできなかったことでしょう。パウロがエペソ人、ピリピ人、コロサイ人、ピレモンに手紙を書いたのは、獄中でした。環境が良くなるのを待つていたわけではなかったのです。

事実は単純明快で、この世にあつては、環境が理想的になることはないのです。そして、クリスチャンにとつても、環境が改善されていくという保証はまったくありません。ですから、救いの場合と同様、奉仕においても、今こそが、恵みの時なのです。

ルターは、言いました。「自分の働きにとつて絶好の機会が来るのを待つという人が、そのような機会に会うことはない」と。そして、ソロモンは警告しています。「風を警戒している人は種を蒔かない。雲を見ている者は刈り入れをしない」(伝道者の書11・4)。

「あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。」

(伝道者の書11章1節)

ここでいうパンとは、おそらくパンの原料である穀物の比喩でしょう。エジプトでは、川が氾濫した後に種が蒔かれます。水が引くと、作物が顔を出します。しかし、すぐにそうなるわけではありません。収穫がやって来るのは、「ずっと後の日になって」なのです。

今日、私たちが住んでいるのは、「インスタント」社会であり、結果がすぐ表れるのを私たちは期待します。インスタントのマッシュ・ポテト、紅茶、ココア、スープ、オートミールがあり、銀行での借入れも即座にでき、テレビでは録画がすぐに再生できます。

しかし、クリスチャン生活や奉仕の場合はそうはいきません。親切なことをしても、すぐに報いられることはありません。祈っても、すぐに答えが来るわけではありません。そして、奉仕をしても、その結果がすぐ表れることは普通ありません。

聖書は、繰り返し農業のいとなみを例にして、霊的な奉仕の説明をしています。「種を蒔く人が種蒔きに出かけた」(マタイ13・3)。「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です」(1コリント3・6)。「初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がはいります」(マルコ4・28)と。それは長い期間に渡る、段階を経た過程です。南瓜は樍の木より早く成長するといえ、やはり時間はかかります。

それゆえ、打算を抜きにした親切な行動であつても、その結果をすぐに期待するのは、非現実的です。祈りの答えをすぐに

いただこうというのは、未熟さのしるしです。福音を初めて聞いた人に、すぐ決心を迫るのは、賢いとはいえません。

自分の労苦は、主にあつて無駄ではないという確信を持ち、延々と与え、祈り、たゆみなく奉仕していくという経験こそが、普通なのです。しかし、その後しばらくすると、結果がいくぶん表れてきます。得意になるほどではありませんが、前進を続けようという励みとしては、十分な結果です。

成果の全貌は、天国に到達するまではわかりません。何といつても、天国こそ、自分の労苦の実を見るには最善で、もつとも安全な場所であるからです。

「笑うときにも心は痛み…」

(箴言14章13節)

この世に、完全なものは何一つありません。すべての笑いは、悲しみが混じっています。ひとつとして、傷のないダイヤモンドはありません。どの人も性格に欠陥があります。この世では、例外なく「りんごが虫に食われている」のです。

理想を持つのは、大切なことです。完全を望む思いを、神は私たちの内に入れてくださいました。しかし、日の下には掛け値なしに完璧なものを見出すことはできないという現実を見ることも大切です。

若者は、ともすると口げんかをするのは自分の家族ぐらいなものだと思いやすく、才気に溢れたテレビタレントと少しも似ていないのは、自分の親ぐらいではないかと考えやすいものです。

自分の教会の集まりには失望しながら、通りの向こうの教会ではすべてが順調に違う、と思いやすいのです。

あるいは、完全に理想的な友人を果てしなく求めて、結局は、人生を使い果たすということが起こりやすいのです。自分では完全さを生み出すことはできないのに、他の人には完全を当然のことのように期待してしまいます。

誰にも性格上の欠点があり、ある欠点は他の欠点よりも際立っているにすぎないという事実、私たちは正面から向き合わなければなりません。抜きん出た人であるほど、その欠点も目立ちやすいものです。欠点を見て失望するよりは、他のクリスチャンの長所を大事に捉える方がまっさつています。誰にも、長所はどこかにあるものです。しかし、長所のすべてを合わせたもの

を持つている方が、一人だけおられます。それは、主イエスです。

主は、地上にいる私たちが完全なるものを求めても、それが満たされることはないという状況をあえてお造りになり、その結果、しみも傷もない御方に、私たちが目を向けるようにしておられるのではないだろうか、と私はよく考えます。主こそ、あらゆる美徳を一身に集めたお方です。主に失望することはありえないのです。

「圧迫された時、あなたは私を大きくしてくださいました。」

(詩篇4篇1節ダービー訳)

「静かな海で船乗りが鍛えられたためしはない」とは、よく言ったものです。苦難を通して初めて忍耐力をつけていくことができるのであり、重圧を受けて初めて、人間の幅が広がるからです。

この世の人々ですら、困難には人を作り、人格を広げる力があると認めるにやぶさかではありません。(アメリカの発明家)チャールズ・ケッテリングは、かつてこう言いました。「問題とは、進歩につけられた値段のことである。私には問題だけ持ってきてもらえばよい。朗報は、私を弱くしてしまうから」と。

しかし、試練がもたらす益を証しているのは、何と云ってもクリスチャンたちです。

例えば、このような文章があります。「苦しみはひとときのこと。しかし、苦しみの実は無遠まで」と。

ある詩人は、それを裏打ちすることばを書いています。

楽人は光の子に混じり、喜びに輝いて言わん

そのもつとも美しい音楽は

暗き夜に学んだものなり、と

御父の住まいに響き渡る多くのほめ歌は

光もささぬ部屋の暗き中で

涙にむせびつつ生まれしものなり、と

スボルジョンは、余人に真似のできない言い方で書いています。「快適で安楽なとき、幸福感に満ちた時間から受けた恵みのすべてを合わせても、それは小銭程度のもではないだろうか。

しかし、悲しみや苦しみ、そして、悲嘆から受けた益の合計は、計り知れない。ハンマーで叩かれ、やすりによって磨かれずして得たものが、何かあっただろうか。苦惱こそは、我が家における最高の調度品である」と。

ですから驚くことはありません。名前が不詳のヘブル書の筆者も次のように言っています。「さて、懲らしめというものが、そのときは喜ばしいものでないのは明らかである。それどころか、これ以上、不快なものはないといつてもいい。ところが、それが過ぎてみると、いつのまにかその懲らしめを受け入れた人の人格に、本物の良い実が宿っていることがわかるのである」(ヘブル12・11フィリップス訳)。

「全世界をさばくお方は、公義を行なうべきではありませんか。」

(創世記18章25節)

私たちの人生に、その意味の深さを測ることもできないほど不可解なことが起こっても、全世界をさばくお方は、絶対的で限らない正義の神である、という確信があれば、安心して居ることが出来ます。

物心つく前に死んでしまった子どもはどこへ行ってしまったのかという疑問があります。私たちの多くは、「神の国は、このような者たちのものです」とイエスが言われたことを知れば、それで納得が出来ます。子どもたちは、イエスの血のゆえに安全である、と私たちは信じます。しかし、それでも承服できない人にとっては、今日の聖句が足りない部分を補ってくれるでしょう。私たちは神のなされることに間違いはない、と信頼してよいのです。

神の選びと予定説という、未だに決着のつかない問題があります。神は、ある人々を救いに選びながらも、他の人々をさばきには定めないのでしょうか。カルヴァン派(※救いにおける神の絶対的主権を強調)やアルミニウス派(※救いにおける人間の自由意志を強調)の主張が出尽くした後でも、なお、神には一点の不正義もないという、全面的な確信を持つことが出来ます。

さらに言えば、正しい人々が深い苦難を経験しているというのに、悪人が栄えるという一見すると不公平なことがこの世の中には起こります。また、福音を一度も聞いたことのない異教徒の最終結果はどうなるのかという、何度となく議論されてきた疑問があります。そもそも、神はなぜ罪が世に入るのを許されたのか、と人は首を傾げます。私たちには、悲劇や窮乏、飢餓、そして、身体的、精神的ハンディキャップを前にして、た

だ黙するしかないケースがよくあります。懷疑が、常にこうささやきます。「神がすべてを支配しているというなら、そもそも、なぜ神はこのような事態が起こるのを許したのか」と。

それに対して、信仰はこのように返答します。「しばし待て、最後の章が書かれるそのときまで。神は、まだ一度も間違いなどなさってはおられない。はつきりと全体が見えるようになったその時こそ、全地をさばかれる方は正しいことをなさったと気がつくだろう」と。

神の書く文字があまりに壮大で

我らの近視眼では読み取ることができない

断片的な文字の一部を見て、

我らはすべての謎を解こうと試みる

希望がついた理由、死の理由

そして、いのちの理由を

果てしなき戦争、無用の争いの理由を

しかし、さやかに見えてわかるときがやがて来る

神のなされることに間違いはなかった、と

(ジョン・オクスナム)

「人は自分の愚かさによってその生活を滅ぼす。しかもその心は主に向かって激しく怒る。」

(箴言19章3節)

聖書に比べうる心理学の本はありません。人間の行動に対する、他では見出すことのできない洞察が書かれているからです。例えば、ここに描かれているのは、身勝手なことをして自らの生活を台無しにしておきながら、その責めを自分で負うのではなく、主に向き直り、主に不満をぶちまける人のことです。

何と真に迫った記述でしょう。かつてクリスチャンであると公言しながら、その後、性的不品行の汚れに巻き込まれた人々がいました。その結果、彼らは恥をかき、面目を失い、経済的に破滅してしまいました。しかし、彼らに悔改める気持ちはあつたのでしょうか。いいえ、キリストに背を向け、信仰を放棄し、過激な無神論者になっていったのです。

背教の原因として、道徳上の失敗がその根底に潜んでいるケースは、おそらく私たちが思っている以上に多いのではないでしょうか。A・J・ポロックは、聖書についてありとあらゆる疑問と否定のことばを吐き出す若者に出会ったときのことを、語っています。「あなたは、いったいこれまでどんな罪に耽^{かひ}つてきたのですか」と訊ねると、青年は泣き崩れて、おぞましい罪と不品行の数々をさらけ出したのでした。

自分自身の罪がもたらした結末を見て、主に對し激しく憤るという人間のひねくれた反応は、甚だしく不当なものです。W・F・アデニーは、言います。「神が禁じられた行動をした結末がひどいものであつたからといって、神の摂理を非難するのは愚の極みである」と。

「悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに來ない」(ヨハネ3・20)というのは、まさしくその通りです。使徒ペテロは、あざける人々は「自分たちの欲望に従つて生活し」「故意に無知である」のだ、と気づかせてくれています。ポロックは、このような感想を述べています。「神の真理を受け入れることができないとか、そうすることをためらうという背景には、道徳的な理由がある場合が少なくないという、極めて重要な真実が明らかに。おそらく隠れているものを明るみに出す光の性質、そして、聖書の持つ抑止力が嫌悪されるのであろう。誤っているのは、頭の方というより、むしろ、心の方なのである。」

「私の用向きを話すまでは食事をいただきません。」

(創世記24章33節)

アブラハムのしもべは、自分に課せられた使命を果たすまでは、という一種の切迫感を持っていましたが、私たちも同様でなければなりません。とはいえ、すぐに、四方八方に向かつて駆けずり回らなければならないという意味ではありません。また、私たちが神経質になって、あらゆることを急いでしなければならぬという意味でもありません。しかし、目の前に置かれた任務を最優先課題として、それに打ち込むという意味であることは、確かです。

ロバート・フロスト(※アメリカの国民的詩人)の詩の一節に表現された姿勢は、私たちのものでもなければなりません。

森は(休め、と招くがごとく)美しく、暗くて深い

でも私には果たすべき約束がある

眠る前に行かねばならぬ

あと何マイルも

エミー・カーマイケルは、そのスピリットをとらえて、このように書いています。「神への誓いが上にあり／影と戯れ、地の花摘むいとま我になし／務め成し遂げ主への報告なすまでは」

別の詩の中で、エミーは、こうも書いています。

昼はたった十二時間があるだけ

ああ、決して切迫感が私の内で消えないようにしてください

い

良き羊飼いわ

丘という丘をあなたと共に捜させてください

そして、ほむべき救い主ご自身も、切迫感をもって生きておられたのではなかったでしょうか。主は、言われました。「わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょうか」(ルカ12・50)。主の弟子たちは、両替人たちを追い出された主の熱情の激しさを見て、詩篇六九篇九節のメシヤに関する預言の引用を思い起こしました。「弟子たちは、『あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす』と書いてあるのを思い起こした」(ヨハネ2・17)。

勇敢な使徒パウロのことばから、その切迫した思いが聞こえてくるでしょうか。「この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです」(ピリピ3・13、14)。クリスチャンにとっては、のんきに構えていいいいのだ、という言い訳は通用しません。

「私は私の民の中で、しあわせに暮らしております。」

(列王記第一4章13節)

シュネムに住む有力な一人の女性は、エリシャが(家の前を)通る度に、温かいもてなしをしました。ついには、預言者が自分の部屋を持てるように、「寝室を作つてあげましょう」とまで夫に提案をしています。気前の良いこの夫人に報いようと、「私にできることが何かないか」とエリシャは尋ねました。ひよつとすると王、または、將軍に紹介してあげようと思つたのかも知れません。しかし意外にも彼女の返答はあっさりしたものでした。「私は私の民の中で、しあわせに暮らしております」。言い換えれば、「私は自分の人生に満足しています。庶民の中で暮らしが気に入っています。上流階級の仲間入りをしようとは、特に望みません。有名人と懇意になることは、私にとつてそれほど魅力的なことではありません」というのです。

何と聡明な女性でしょう。有名人、金持ち、上流階級の人々と顔見知りになることが生きがい、という人は心得なければなりません。地上で最上の部類に属する人のほとんどは、新聞の一面にも、ついでに言えば、社交欄にもその名が決して載らない人々であることを。

私は、福音派陣営の「大物」と言われる人々とおつきあいをしてきた経験があります。しかし、ほとんどの場合、その経験は、失望するものであったことを告白しなければなりません。そして、キリスト教出版界で、鳴り物入りで宣伝されたものであればあるほど、幻滅もそれに比例してひどいものでした。選ぶことが許されるのであれば、私の願いは、謙遜かつ敬虔な心を持ち、地に足の着いた暮らしをしている人々、この世では無

名でも、天国ではよく知られている人々と、知己になることです。

A・W・トウザーは、次のように私の気持ちを代弁してくれています。「私は、聖徒が存在すると信じる。喜劇俳優なら会つたことがある。興行師にも会つた。誰が建てたか分かるように、建物の前面に自分の名を刻む創設者にも会つた。回心したかどうか怪しい無鉄砲な人にも会つた。アメリカとカナダのいたるところにいる、風変わりなクリスチャンにも会つた。しかし、心から会いたいと願っているのは、聖徒である。主イエス・キリストに似た人々に私は会つてみたい。：実際のところ、私たちが求め、また、持つべきものとは、我らの神、主の麗しさを宿す人間の心である。人を惹きつける、魅力的な聖徒一人は、五百人の興行主、便利品の考案者や宗教を商売にする人々に匹敵する。」

チャールズ・シメオンも同様な心情を表明しています。「私が歩みを始めた日から今に至るまで、：私が交遊関係を結んだのは、『地にある聖徒たち』(※詩篇16・3)であつた。その誰もが、主のゆえに、私に対して力の限り親切を示してくれたのである」。

それゆえ、シュネムの女に贅辞を贈ります。彼女のことばには、靈的洞察が潜んでいるからです。「私は私の民の中で、しあわせに暮らしております」。

「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせるためであり」

(エペソ人への手紙4章12節)

すべてを根底から変える洞察とはこのことです。エペソ人への手紙四章にある賜物の数々が与えられたのは、奉仕の働きにふさわしく聖徒を整えるためだ、というのです。聖徒にその準備ができるやいなや、賜物は始動します。

どういうことでしょうか。クリスチャンの働きの成否は、最短期間で自分のすべきことを成し遂げたら、次に新しい領域を探し、それを勝ち取るかどうにかかっている、というのです。

これこそ、パウロが実行したことでした。例えば、パウロはテサロニケに行つて、三回の安息日に渡つてユダヤ人に宣教していますが、パウロが去つた後、そこには、すでにその役割をはじめた集会(教会)ができていたのです。働きが確立する早さとして、それが例外的に速かつたことはもちろんです。一方、パウロが一箇所に留まつた期間の最長は、二年でした。それは、エペソの場合です。

聖徒たちが、いつになつても、何かの賜物に頼り続けることは、決して神の意図される場所ではありません。賜物とは、消耗品のようなものです。もし、聖徒たちが説教の吟味をする専門家のままで、実際の奉仕の働きにまったく加わらないとしたなら、どうなるでしょうか。それでは、本来の霊的成長を遂げないばかりか、神が意図されたように世界に福音が伝わることも決まらないうちです。

ウィリアム・デイロンは、「成功を収める外国人宣教師は、決して外国人を後継者にはしない」と言っています。それは、国内の働き人についても、まったく同様のことが言えるはずで

つまり、働き人の任務が終わりを迎えたら、別の説教師を探すのではなく、地元の聖徒たちがそれを引き継ぐべきなのです。

私たち説教師は、自分の立場が終身的なものだ、と考えることがよくあります。他の人では心もとないと思うのです。私たちがいなくなれば、出席者が減つてしまうだろうという「事実」を根拠に、自分の働きは終身的なものだと言い訳し、他の人ではうまくいかないとか、まだ任せるとは荷が重いなどと、不平を並べ立てるのです。しかし、本当のことを言えばその彼らにしっかりと学んでもらわなければならないのです。そして、そのための学びの機会が提供されなければなりません。また、訓練、責任の委託、そして、進歩の評価がなされなければなりません。

そして聖徒たちが、特定の説教師や教師がいなくてもやっていける、と感じるところまで来たなら、もはや自己憐憫に陥つたり、傷ついた感情をいたわつたりする必要はありません。それは祝うべきことなのです。働き人は、今や解放されて、自分がかつ必要とされるところに行けばよいのです。

たとえ、どれほど賜物のある働き人であつたとしても、神の働きがいつまでも一人の人物を中心に動いているという状況は、大変困つたものです。もはや自分に頼らなくてもよいところまで聖徒たちを建て上げることこそ、その人の本来の目的とすべきことだからです。私たちの住むこの世界では、他のところに行けば、いくらでもすることがあるのですから。

「知恵のある者はこれを聞いて理解を深め…」

(箴言1章5節)

知恵ある者と愚か者との本質的相違が、箴言に書かれています。それは、知恵のある者には聞く耳があるが、愚か者にはないということです。

愚か者と言っても知的な能力のことを言っているではありません。むしろ、知的能力に関して言えば、非凡であるかも知れません。しかし、愚かな人は、何かを人に教えられることに我慢がなりません。自分の知識は無限で、判断には誤りがない、という致命的な幻想を抱いているために苦勞しているのです。助言をしようとすればするほど、友人は軽蔑されます。

その人が当然の結末である罪深く愚かな行動のつけを受けまい、ともがくのを見ても、周囲の人は彼が破綻に向かうのをただ眺めていることしかできません。

そのようにして、一つの危機が過ぎたかと思えば次の危機がやってきます。経済的に破綻したかと思えば、今度は私生活が崩れ放題。そして、仕事は業績が悪化し、崩壊寸前という具合です。しかし、本人は、たまたま運が悪かったただけだ、と自分を正当化するばかりです。まさか、自分が自分自身の最悪の敵であるとは思ってもやらないのです。

他人には求められてもいないのに助言をするのですが、自分の生活をまともによつていくことができないでいる点は、眼中にありません。自分の話は人に聞かせたくてうずうずし、御託を並べるのです。

知恵ある者の考え方はそれにまさっています。人類が墮落した結果、精神内部がどこか混線していない人は一人もいないことに気づいているからです。そのため、自分が見過ごした問題

の側面が、他の人には見える場合があることをわきまえています。自分の記憶が、ときどき怪しくなるということを喜んで認めます。聞く耳があり、正しい決断をする助けになることを喜んで受け入れます。それどころか、他の人の助言を進んで求めます。「多くの助言者がいると安全である」(箴言11・14英訳)と知っているからです。

他の誰もがそうであるように、知恵ある者でもときどきは間違いをします。しかし、自分の間違いから学ぶ、という美德が欠点を補ってくれるおかげで、あらゆる失敗を成功への踏み台とします。自分が当然受けるべき叱責に感謝し、「私が間違っていました。ごめんなさい」と言うことをためりません。

知恵ある子どもは、両親のしつけに従いますが、愚かな子どもは反抗します。知恵ある青年は、純潔に関する聖書の教えに服従しますが、愚かな若者は欲望のままに行動します。知恵ある大人は、主に喜ばれるかどうかという観点ですべてを判断しますが、愚かな大人は自分にとって喜ばしいことは何かという基準で行動します。

かくして、知恵ある者はますます賢くなり、愚か者は自分の愚かさという轍わだちにはまつて、抜け出せなくなるのです。

「アダムは、…彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。」

(創世記5章3節)

自分の姿かたちやイメージに似た子どもを生むというのは、肉体的生命の基本となる事実です。アダムは、自分とよく似た子を生み、その子をセツと名づけました。おそらく人々がセツを見たときには、それ以来、今日まで言われてきたことを言ったことでしょう。「この父にしてこの子あり」。

自分のイメージに似た子が生まれるというのは、霊的生命にもあてはまる事実であり、私たちの襟を正さずにはおきません。他の人を主イエスに導くのに、私たちが用いられた場合、その人々は、どこことなく私たちに似た特徴を帯びるようになります。それは、遺伝でなく模倣の結果なのです。私たちがクリスチャンの理想の姿として見上げ、私たちにならつて、無意識のうちに自分の行動を重ね合わせていくのです。ほどなく、彼らには、家族のような類似性が現れます。

それは、例えば、私の生活で聖書が占める位置が、信仰の「子どもたち」の基準にもなるという意味です。私が祈りを重んじていけば、彼らも祈りを重んじるようになります。礼拝を重んじれば、その特徴もまた受け継がれていくのです。

もし私が弟子訓練をほどこす上で、厳しい基準を緩めなければ、「信者なら誰でもこうされるのがあたり前なのだ」と彼らは思うことでしょう。その反対に、もし、救い主のことは骨抜きにし、富や名声、快樂のために生活していけば、彼らも私に見習うのは当然の結果です。

救霊に熱心な人は、個人伝道に熱心な人を生み出す傾向があります。聖書を暗記する喜びと実益を経験した人は、その志を霊的な子どもたちに伝達していきます。

自分の集会出席が不規則であれば、あなたの「弟子」たちもそうなることは避けられません。いつも遅刻していれば、彼らもまた遅刻するようになるでしょう。自分がいつも後方の席に座っているのに、彼らが同様にするのを見て驚いてはいけません。

その反対に、あなたが自分を律し、信頼に足る人であり、時間を守り、積極的に奉仕に関わっていれば、あなたの「テモテ」(※パウロの弟子であり、パウロにとつては息子のようであった)たちもあなたの信仰にならうことでしょう。

つまるところ、私たち一人ひとりに次のような問いかけがなされているのです。「自分に似た《子ども》が生まれて満足できるだろうか」と。使徒パウロは、「私にならう者となつてくさい」(1コリント4・16)とすることができました。私たちもそう言えるでしょうか。

「あなたがたの信仰のとおりになれ。」

(マタイ福音書9章26節)

イエスが二人の盲人に、「わたしがあなた方の目を見えるようにできると信じるか」と尋ねると、彼らは、「信じます」と答えました。主は、彼らの目に触れ、こう言われました。「あなたがたの信仰のとおりになれ」。すると、彼らの目は開きました。

もし、十分な信仰がありさえすれば、富であろうが、癒しであろうが、また、何であろうが、望むものはなんでも手に入る、とこの箇所から結論づけることは容易なことでしょう。しかし、残念ながらそれは事実ではありません。信仰とは、どこかで主のみことば、神の御約束、聖書の命令に基づかなくてはならないものだからです。そうでなければ、信仰とは、自分に都合の良いことを軽々しく信じるということ、なんら変わりません。

今日のみことばから、この神の約束を適用できる範囲とは、信仰を働かせる度合いにかかっていることがわかります。ヨアシュ王がアラムに勝利するであろう、と確言した後、エリシャはヨアシュに向かい、矢で地面を叩くように命じました。ヨアシュは、三回叩いて止めてしまいました。エリシャは怒って言いました。「あなたは、五回、六回、打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを打って、絶ち滅ぼしたことになる。しかし、今は三度だけアラムを打つことになる。」(Ⅱ列王記13・14・19)と。彼がどれだけ勝利できるかは、ひとえに彼の信仰にかかっていたのです。

弟子として生きる上でも、それと同じことが言えます。私たちは、すべてを捨て、信仰によって歩むように召されています。地上に宝を積むことを禁じられています。これらのご命令に、私たちは、どこまで大胆に従っていくべきでしょうか。生命保

険、健康保険、預貯金、株、債券を手放すべきなのでしょうか。

その答えは、「あなたがたの信仰のとおりになれ」というみことばの中にあります。「私は現在の必要と家族の必要のために一生懸命働きますが、それ以外のすべては主の働きのためにお捧げし、将来は神に託します」というだけの信仰をあなたが持っているなら、主が将来の面倒を見てくださることは間違いない、とあなたは確信を持つことができます。主は、そうしてくださると言われ、主のことばは期待外れで終わることがないからです。その一方、私たちがまさかのときのために備えて、「人間的な思慮分別」を働かせるべきだと感じたとしても、神の私たちに對する愛はいささかも変わりなく、私たちの信仰の度合いに応じて私たちを用いてくださることでしょう。

信仰による生涯とは、エゼキエル書四七章にある、神殿から流れる水のようにです。足首まで水に浸かることも、膝や腰まで水に入ることもできます。しかし、それよりもさらに良いのは、全身水の中に入り、泳ぐことです。

神の最上の祝福が注がれるのは、もちろん、神に全幅の信頼を寄せた人です。ひとたび神の真実とその満たしを経験したなら、私たちは「常識」という名の松葉杖、つかえ棒、クッションを片づけたくなるのではないのでしょうか。あるいは、誰かが言ったように、「いったん水の上を歩くと、二度と船に乗りたいとは思わない」のではないのでしょうか。

「互いの榮譽は受けても、唯一の神からの榮譽を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。」

(ヨハネの福音書5章44節)

主はこう仰せになって、人間の称賛と神の是認の両方を、同時に求めることはできないことを示しておられます。また、いったん私たちが人間に認めてもらおうという方向に走り出してしまえば、信仰による生き方が大打撃をこうむると主は明言しておられます。

使徒パウロも同様に、人の称賛と神の称賛の両方を渴望することは、道徳的一貫性を欠くと言っています。「もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません」(ガラテヤ1・10)。

例を挙げてみましょう。ここに神学のある分野で、大学院レベルの学位を望む若いクリスチャンがいたとします。しかも、彼は正式な認可を受けた大学からの学位を望んでいます。その学位は、認可された教育機関からのものでなければなりません。ところが、残念なことにその学位の提供を認可された大学は、信仰上、重要で基本的な真理を否定する大学にしかありません。しかし、自分の名前に、その学位をつけることは彼にとつてはかけがえのない望みなのです。それで、やむをえず学者としての名声を優先して、キリストの十字架の敵である人々から、その学位を受けることを承諾します。この過程で、彼が汚れを受けることは、ほぼ避けられません。かくして、彼が以前と同じ確信をもって語ることは、二度とできないこととなります。

この世で学者、または、科学者として有名になりたいという願望の中には、はじめから危険が組み込まれています。聖書の原則を危うくし、犠牲にして、より自由主義的な立場をとり、

近代主義者よりも、^{プロテスタント}根本主義者(※聖書を文字通りに信じる信仰者)に批判的な目を向けさせるといふ、巧妙な危険が潜んでいるのです。

キリスト教関係の学校は、教育界で公認された機関からの認可を求めるべきか否かという選択を前に、苦悩しています。認可を受けたいと渴望するあまり、聖書が強調していることを薄め、御霊を持たない人が決めた肉的な行動指針が、採用されていく結果になります。

しかし、何にもまして希求すべきものは、神からの「認可」です。それに代わる選択肢の代価は、あまりにも高くつくものです。「真理を売って得たコインには、たとえうつつすらとではあつても、いつも浮かび上がるもの、すなわち反キリストの像がある」(F・W・グラント)からです。

「しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。」

(コリント人への手紙第一一章27節)

もし、大工が廃材や捨てられた木材をもとに見事な家具をつくるとしたら、最高の材料しか用いなかっただけの場合に比べ、受ける賞賛はより大きいのではないだろうか。同様に、神が、愚かで価値のない、弱いものを使って、輝かしい結果をもたらしてくださるとき、神の見事な「技量」と力はいつそう際立つのです。その成果は、原材料が良かったためでは決してありません。その功績が帰されるべき御方は主以外にありえない、と「材料」たちは、告白せざるをえないことでしょう。

士師記には、繰り返し、神がこの世の弱いものを用いて、力あるものを狼狽させた事例が書かれています。例えば、エフデは左ぎきのベニヤミン人でした。聖書で「左ぎき」とは、弱点を意味しました。しかし、エフデはモアブの王エグロンを倒し、そのおかげで、イスラエルは八十年の休息を得たのでした(士師記3・12・30)。

シャムガルは、牛の突き棒を振り回して戦闘に加わりましたが、武器とは言い難いこの道具を用いて、ペリシテ人六百人を倒し、イスラエルを救いました(士師記3・31)。デボラは、女性であったにもかかわらず、神の力によって、カナン人に対して大勝利を得ました。(士師記4・4、5・31)。バラク率いる一万の歩兵は、人間的に言えば、シセラの鉄の戦車九百両に勝ち目はありません。にもかかわらず、全面的な勝利を得ました(士師記4・10、16)。もう一人の女性、ヤエルは、天幕のくいと、とても武器とはいえないものでシセラを殺しました

(士師記4・21)。七十人訳聖書によると、ヤエルは(弱い方である)左の手で杭を持ったと書かれています。ギデオンは、主が三万二千人から三百人に減らされた軍勢を率いて、ミデヤ人の陣営に進軍しました(士師記7・1・7)。ギデオンの軍隊は、大麦のパン一塊に例えられています。大麦のパンは、貧しい人々の食糧だったので、貧困と虚弱を表しています(士師記7・13)。ギデオンの軍隊が持っていたのは、とても武器とは呼べない代物ばかりで、土がめ、たいまつ、そして、角笛でした(士師記7・10)。そして、あたかもそれだけでは自分たちの敗北が決定的とはならない、言わんばかりに、つばは打ち壊されてしまいました(士師記7・19)。アビメレクは、一人の女の手によって投げ落とされたひき白の上石で倒されました(士師記9・53)。トラという名前という意味は、「虫」です。軍隊を率いて民を解放する者の名としては、縁起の悪い称号です(士師記10・1)。サムソンの母が聖書に初めて登場するときには、無名で不妊の女性にすぎません(士師記13・2)。そして、サムソンは、ろばのあご骨以外に武器と言えるものを何も持たずに、千人のペリシテ人を打ち殺したのでした(士師記15・15)。

「主は彼らを滅ぼされる。それはあなたがたが、彼らを追い払い、滅ぼすためである。」

(申命記9章3節 英訳)

神が人類をお取り扱いになるとき、すべてにおいて、神と人間との不思議な融合があります。

例えば、聖書がその例です。著者である神ご自身だけでなく、聖霊によつて動かされた筆者としての人々がいるのです。

救いに関しては、初めから終わりまで、主以外のものが入り込む余地はありません。救いを得るために人間にできること、また、救いを受けるにふさわしくするものは何一つありません。しかし、救いを受けるには、人間の側に信仰が必要です。救いに与る個人を選ぶのが神であることは、はっきりしています。人々は狭き門を通って入らなければなりません。ですから、パウロは、テトスへの手紙で、「神に選ばれた人々の信仰」(テトス1・1)と書いているわけです。

神の目から見れば、私たちは「神の御力によつて守られています。しかし、それには人間から見た側面もあります。つまり、「信仰により」守られているわけです。「信仰により、神の御力によつて守られており…」(1ペテロ1・5)。

私を聖なる者にすることができるのは、神以外におられません。しかし、私の協力なしに、神が私を聖くされることはありません。私は、信仰に徳、知識、自制、忍耐、敬虔、兄弟愛、愛を加えていかなければなりません(IIペテロ1・5・7)。私は、神のすべての武具を身に着けなければなりません(エペソ6・13・18)。私は、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着なければなりません(エペソ4・22・24)。私は、御霊によつて歩まなければなりません(ガラテヤ5・16)。

クリスチャンの奉仕の全領域にわたつて、神と人との融合を見出すことができます。パウロが植えて、アポロが水を注ぎましたが、成長させたのは神です(1コリント3・6)。

個々の教会の指導者に関して言えば、人を長老に立てることができるとは、神お一人であることを知ります。パウロは、あなたがたを群れの監督にお立てになつたのは聖霊です、とエペソの長老たちに語りました(使徒20・28)。とはいえ、人間自身の意志も、そこに関与しています。まず、監督の働きを自ら望んでいなければなりません(1テモテ3・1)。

最後の点として、今日の冒頭の聖句では、神が敵を滅ぼしてくださると書かれています。私たちも敵を追い払って滅ぼさなければならぬとも書かれています(申命記9・3)。

バランスの取れたクリスチャンになるためには、神と人とのこの融合を認識していなければなりません。すべてが神次第であるかのように祈るだけでなく、すべてが私たち次第であるかのように行動しなければなりません。あるいは、戦時中の警句を借用すれば、「主をほめよ。次に弾薬を渡せ」ということにならぬでしょうか。ある人が言ったように、豊かな収穫を与えてください、と私たちは祈るべきですが、畑は耕し続けなければならぬのです。

「このイエス・キリストはすべての人の主です。」

(使徒の働き10章36節)

新約聖書に見られる主要な主題の一つに、《イエス・キリストの主権》があります。何度も繰り返し、キリストが主であられること、また、私たちの人生において、キリストをその地位にお迎えるべきことが勧められています。

イエスを主と認め、王冠を差し出すということは、私たちの生涯をイエスに明け渡すという意味です。それは、自らの意志を捨て、何にもまざってイエスのみこころを求めていくことにほかなりません。それはまた、どこであろうと出かけ、なんであろうと行い、主が望まれることをなんでも語るということなのです。「あなたは、私たちの味方ですか。それとも私たちの敵なのですか」と、(約束の地の最初の関門、エリコ侵攻を前にした)ヨシヤが尋ねたとき、主の軍の将が答えたことを端的に言えば、「わたしが来たのはあなたを援助するために来たのだ」(ヨシヤ5・14)ということでした。つまり、主は、栄えある助け手として来られるのではなく、私たちの生活の全権を掌握するために来られるのです。

主の主権がどれほど重要なものかについては、新約聖書で「救い主」という語が二十四回であるのに対し、「主」という語が五百二十二回使われているという事実が、それを如実に物語っています。一般的には、「救い主、主」と言うのが通例であるのに対して、聖書は常に「主、救い主」という順序で言っていることも特筆に値します。

イエスを自分の主とすることは、私たちにできる最も筋の通った、合理的な行為です。主は、私たちのために死んでください

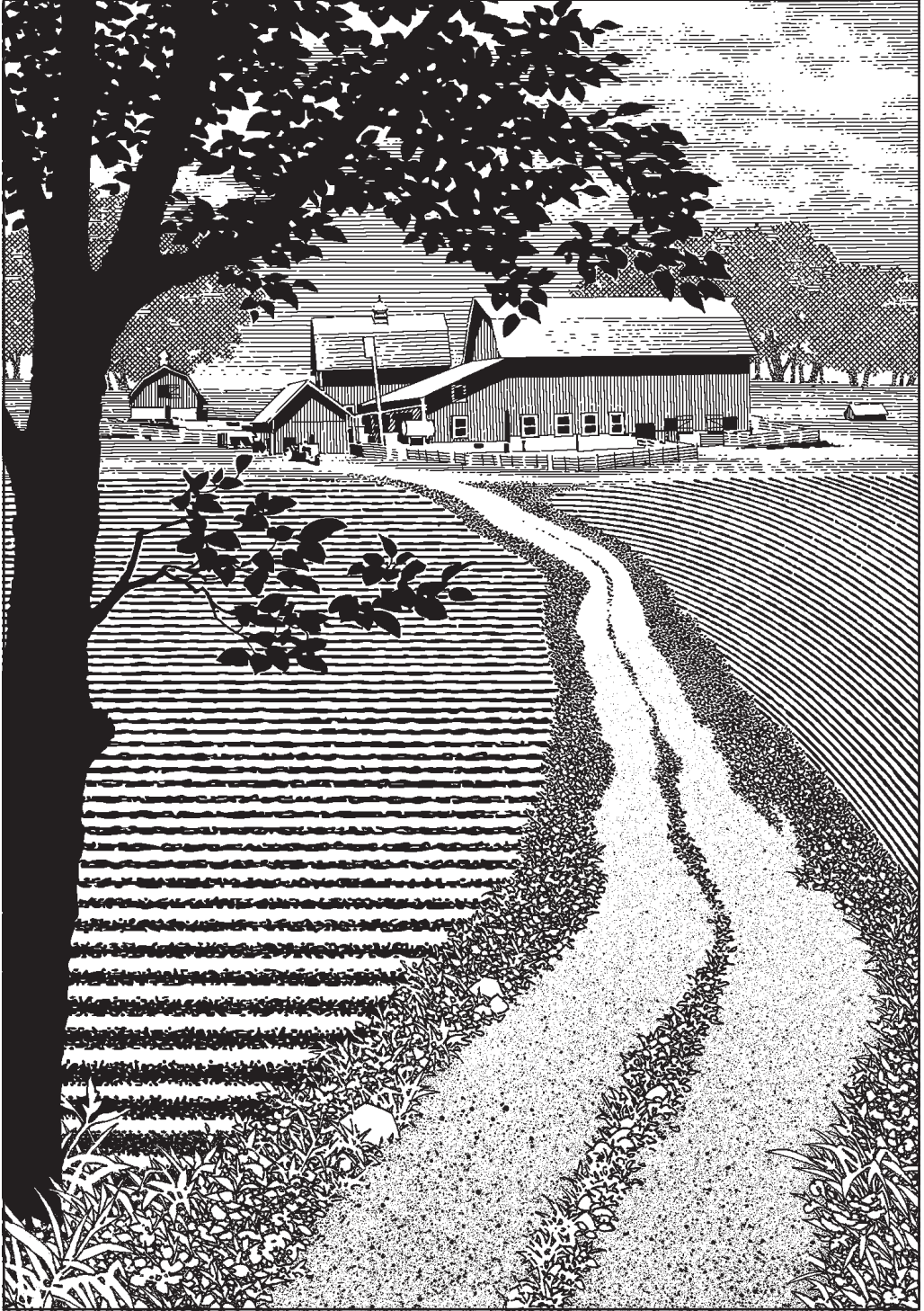
ました。私たちにできる最低限のことは、主のため生きることにはかなりません。主は、私たちを買い取ってくださいました。私たちはもはや自分自身のものではありません。「恵みに報ゆるすべなきこの身は/身とたま捧げて額ぬかずくほかなし」。

永遠の救いを与えてくださる、と主に信頼できるなら、ましてや私たちの生涯をも導いてくださる、と主に信頼できるのではないのでしょうか。「永遠のたましいを神にゆだねながら、死すべきいのちを手離さず、優れた方を捧げると告白しながら、劣った方を保留するというのは、言行不一致である」(R・A・レイドロウ)。

それでは、イエスを主として迎える、とはどういうことでしょうか。それをするためには、自分自身を初めて主に明け渡し、生活のあらゆる領域を主の大権のもとに置く、という危機的経験を通らなければなりません。それは、「保留なく、後退なく、後悔なし」(No reserve, No retreat, No regrets. ※ウィリアム・ボーデンの言葉)という全面的な献身を意味するからです。

それ以降は、一瞬一瞬を主の導きにゆだね、自分のからだを主に捧げて、主が私たちを通して生きて働いてくださるようになるかどうかの問題です。一回の危機的経験が継続的な過程となつて続いていくのです。

十分道理にかなった話ではないでしょうか。主は、その知恵と愛と力をもつて、私たちよりもずっと見事に人生の舵取りをしてくださるのです。



「昼間は十二時間あるでしょう。」

(ヨハネの福音書11章9節)

イエスが、ユダヤへ帰ろうと提案されると、弟子たちは怯えました。ユダヤ人が、主に石を投げつけて殺そうとしていたのが、ついこの間のことであつたというのに、これからそこへ戻るう、と言うのですから。弟子たちの不安に答えて、イエスは言われました。「昼間は十二時間あるのではなかつたか」と。一見、この問いは、会話とまつたくかみあつていないように思えます。しかし、救い主が言おうとしておられるのは、次のことです。

労働日は、昼間の十二時間で成り立っている。人が神に自らをゆだねると、どの日にも定められた予定があり、その成就を阻止できるものは何一つない。したがって、イエスがエルサレムに戻つても、また、ユダヤ人が再び主を殺そうと企んだとしても、彼らに成功の見込みはない。主の御わざはまだ途中であり、主の時はまだ到来していないからです。

神の子であるなら、どの人にも「使命を成し遂げるまででは不滅である」ということがあてはまります。私たちはこれを知つて、生活に大きな平安と落ち着きを取り戻すべきなのです。もし、私たちが神のみこころの中に生き、健康と安全のためのためたり前のルールを守るなら、定められたときより一瞬たりとも早く死ぬことは決してありません。主が許容されておられないことは何一つ、私たちの身の上で起こることはないのです。

口に入れる食物、飲む水、吸う空気に関して、心配のあまりに病んでしまうクリスチャンすら少なくありません。環境汚染に敏感な私たちの社会では、死が戸口にまで迫っているとほめかすものが、常に存在しています。しかし、この思い煩いは

不要です。「昼間は十二時間ある」からです。悪魔がどうやつても侵入できない垣根を、神は信仰者の周りにめぐらしておられるのではなかつたでしょうか(ヨブ1・10)。

こう信じているならば、過ぎたことに対して仮定の話をほとんどしなくて済むことでしょう。「救急車がもつと早く到着していたら」、「医師が一ヶ月前に、患部の広がりについてくれていたら」、「夫が別の飛行機に乗っていたら」と。

私たちの生涯は、無限の知恵と無限の力が注がれて計画されたものです。主は、私たちのそれぞれに対して、完全な「時刻表」を持つておられます。主の「列車」は、その完全なスケジュールに沿つて運行しているのです。

「御霊の実は愛…」

(ガラテヤ人への手紙5章22節)

「御霊の實」という表現から、そもそもこの後に列挙されている美徳のどれも、聖霊によらなければ決して生み出されないことに気づかされます。回心を経験していなければ、この美徳のどれも表すことはできません。真の信仰者であっても、自分自身でそれを生み出す力はありません。ですから、これらの美徳を考へるときには、これが超自然的なものであり、この世のものではないことを覚えていなければなりません。

一例を挙げれば、ここで話題とされている愛は、情熱を示す「エロス」でも、友愛を示す「フィリア」でも、情愛を示す「ストルゲー」でもありません。それは、「アガペー」の愛—すなわち、神が私たちに示し、私たちが他の人に示すように、神が願っておられる愛のことです。

具体的な例を挙げて説明してみましよう。T・E・マッカーシー博士は、エクアドルのアウカ・インディアンの手にかかつて殉教した五人の若い伝道者の一人、エド・マッカーシーの父でした。マッカーシー博士と私が、イリノイ州のオークパークでひざまずいて祈っていると、博士の思いはエクアドルと、エドの遺体を呑み込み、いまだその行方を教えてはくれないクラライ川に向かったのです。博士は、祈りました。「主よ。私どもの息子たちを殺した人々が救われるのを、この目で見るまで私を生かしてください。そして、私が彼らを抱きしめて、キリストを愛するものとなった彼らを、私も愛していると伝えられるようにしてください」と。私たちが立ち上がると、涙が幾筋にもなつて博士の頬を伝っていました。

神は、その愛の祈りに応えられました。そのアウカ・インディアンのかか、後にキリストへの信仰を告白したのです。マッカーシー博士はエクアドルに行き、自分の息子を殺害した男たちに実際に会い、彼らを抱きしめ、「キリストを愛する者となったあなたがたを、私も愛している」と告げたのです。

これこそ、アガペーの愛です。それには、偏りがなく、外見に左右されず、敵であるか味方であるかにも関わりなく、最高に良いことをしてあげようとする愛です。それは、無条件の愛であり、常に与えはしても、何一つ見返りを求めません。それは、犠牲的な愛で、自分にかかる負担にも留めません。自分のことはまったく考えず、自分よりも他の人の必要にこそ関心を持ちます。それは、純粹で、短気や妬み、高慢や復讐心、あるいは、悪意と無縁です。

愛こそは、クリスチャン生活の最大の美徳です。愛なくしては、私たちがどれほど気高い努力をしようと、それは無価値です。

「御霊の実は…喜び」

(ガラテヤ人への手紙5章22節)

主と出会って初めて人は本当の喜びを発見します。そのときに、「ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜び」(1ペテロ1・8)と、ペテロが言う経験の中に入るのであります。

恵まれた境遇にあるときには、誰でも喜ぶことができます。しかし、御霊の実である喜びは、地上の境遇がもたらした結果ではありません。それは、主と私たちとの間に結ばれた関係、また、主が私たちに与えてくださった尊い約束の数々から湧き出るものなのです。何とかしてその喜びを教会から奪うためには、キリストを王座から引き降ろすしかありません。

クリスチャンの喜びは、苦しみと同時に存在することができません。パウロはこの両者を結び合わせ、「忍耐と寛容を尽くし、…喜びをもつて」と語っています(コロサイ1・11)。テサロニケの聖徒たちは、「多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもつて」みことばを受け取りました(1テサロニケ1・6)。苦難の中にあつた聖徒たちが、過去何百年にも渡つて、主は闇夜でも歌を与えてくださった、と証言してきました。

喜びは、悲しみと同時に存在することができません(IIコリント6・10)。愛する者を失った信仰者は、墓の傍らで涙を流しても、その愛する者が主の御前にいることを知つて喜ぶのです。

しかし、喜びは、罪とは同時に存在することができません。クリスチャンが罪を犯せば、必ず歌を失います。その罪を告白して捨て去るまで、救いの喜びが回復することはありません。

主イエスは、ののしられ、迫害され、身に覚えのないことで非難されるときにも、「喜びなさい」と弟子たちに教えられました(マタイ5・11、12)。そして、何と弟子たちは、それを実行

したのです！ それから何年もおかずに、「使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行つた」(使徒5・41)と書かれています。

私たちの喜びは、主を知れば知るほど増大していきます。おそらく、最初のうちは小さい苛立ち、慢性的な病氣、ちよつとした不便の中でも喜ぶことができるでしょう。しかし、神の御霊は、その程度では満足されません。状況が最悪でも、主の導きは完全であると知つて喜ぶところにまで、私たちを到達させたいのです。預言者ハバククは、言いました。「そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみもらせず、オリブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は困いから絶え、牛は牛舎にいななくなる。しかし、私は主にあつて喜び勇み、私の救いの神にあつて喜ぼう」(ハバクク3・17、18)。私たちがそのような言えたとしたら、私たちは霊的に成熟した者と言えるのです。

「御霊の実は…平安」

(ガラテヤ人への手紙5章22節)

信仰によつて義と認められた瞬間、私たちは主イエス・キリストを通して、神との平和を回復しました(ローマ5・1)。これは、神と私たちとの間の対立が終わりを告げたことを意味しています。それは、対立の原因であった私たちの罪を、キリストが確かに処理してくださったおかげです。

私たちの良心にも、平安が訪れました。御わがが完了し、キリストが罪の負債を支払い、神が罪を忘れてくださったからです。

しかし、聖霊はそれにとどまらず、私たちが神の平安を心から楽しむことを望んでおられます。この平安とは、私たちの時が神の御手であり、神があえて許されない限り、私たちの身に起こることは何もないと知ったときに訪れる、静けさと安らぎのことです。

ですから、交通の激しい^{フリーウェイ}高速道でパンクしたとしても、落ちて着いていることができます。交通渋滞のために予定の飛行機に乗れなくなっても、慌てる必要がありません。平安とは、たとえ自動車衝突事故を起こしても、また、調理用レンジで油が引火したとしても、冷静でいられることにほかなりません。

御霊のこの実があれば、ペテロのように監獄でも安眠ができますし、ステパノのように自分を殺そうと襲いかかる者たちのために祈ることもでき、パウロのように船が難破しても他の人を励ますことができます。

晴天なのに、飛行機が突然、乱気流に飛び込んで、強風にあおられる羽根のように舞い、翼の端が四メートルも捻じ曲がり、飛行機が傾き、落下し、上昇し、降下し、その度に乗客のほと

んど誰もが絶叫するときにも、この平安があれば、信仰者は頭を垂れ、神にたましいをゆだね、どんな結果に至ろうとも、神を賛美することができます。

あるいは、例を変えると、私たちが診察室に座り、「残念ですが、悪性です」という診断結果を医師から聞いたとしても、神の御霊は、私たちに平安を与えることができるということです。御霊のおかげで、私たちはこのように返答することができます。

「先生、死ぬ覚悟はできています。私は神の恵みにより救われ、このからだから離れるということは、主と共にいるようになるということですから」と。

ビッカーステスが作った美しい賛美歌の歌詞にこうあります。「義務は押し寄せ、悲しみの波はうねり、愛する者は彼方へ去り、未来はベールに包まれている。…この暗き罪の世界にあつても平安がある、完全な平安がある。それは、イエスを知っているから。そして、イエスは王座についておられるから」。

私たちが、これと同じ平安をいただくことができます。

「御霊の実は…寛容」

(ガラテヤ人への手紙5章22節)

寛容とは、人生に腹立たしいことが次々と起きてても、忍耐強く、また、ときには意気揚々と耐えていく美点のことです。忍耐をもって逆境に応答していくという意味もないとは言えませんが、普通は、人から挑発されても、寛大さをもって耐えることを指しています。

神は、人間に対して寛容です。今日の人間のひどい罪深さを少しでも考えてみましよう―売春の合法化、同性愛の広がり、妊娠中絶容認の法律、結婚や家庭の崩壊、道徳的基準の見境のない拒絶、そして、もちろん人間の罪の頂点ともいべき、唯一の主、救い主である神の御子の完全な拒絶です。神が一拳に人類を絶滅されたとしても、到底神を非難できるものではありません。しかし、神はそうはなさいません。神の慈愛は、人を悔い改めに導く役割を担っています。一人でも滅びることを神は望んでおられないのです。

そして、神の民の生き方の中に、聖霊にゆだねた結果として、この寛容が生み出されることこそ、神のみこころなのです。つまり、短気であってはならないということです。すぐにかつとなつてはいけません。不当に扱われた時、その仕返しを機会をうかがうようではいけません。むしろ、ある人が「勝利する忍耐」と呼ぶものを実際の場で示すべきです。

テン・ブーム姉妹として有名な、コリーとベツツイーが強制収容所で、言語に絶する苦しみを耐えていたときのこと、「私たちが解放された暁には、この人たちを助けなければ」とベツツイーはよく言っていました。「彼らを助ける方法をとにかく見つけなければ」と。もちろん、コリーは、姉がナチスの犠牲に

なつた人々が社会復帰できるためのプログラムを考えているのだと思っていました。

しかし、ベツツイーが言っていたのは、自分を迫害しているナチスの人々のことだつたということが、後になってやつとわかりました。何とかして、彼らが他の人を愛するようになれないものかと考えていたのです。

コリーは、次のように感想を述べています。「この時が初めてというわけではなかったが、私は、自分のこの姉が、いったいどんな人なのだろうと驚かないわけにはいかなかった。姉の横にいながら、常識で踏み固められた道を私がやつとのことです歩いてるときに、姉がたどっていたのはどのような道だつたのだろうか」と(『わたしの隠れ場』より)。

ベツツイーが歩んだのは、寛容の道でした。そして、謙虚にも本人は否定していますが、コリーも同じ道を歩んだのです。

「御霊の実は…親切」

(ガラテヤ人への手紙5章22節)

親切とは、優しく、寛大な気質が、人のために役立ち、あわれみ深く、他の人の益になる行動として表れることを言います。親切な人とは、大らかであつて辛辣ではありません。思いやりがあり、よそよそしくはありません。人に役立とうとし、われ関せずという態度は取りません。よく気が利き、情け深く、物惜しみをしません。

この世の人々にも、お互いに対して示す自然な情としての親切というものがあつてあります。しかし、御霊が生み出す親切さは、超自然的なものです。それは、およそ人が自分でできる範囲をはるかに超えています。それがあつたために、信仰者は、何の見返りも求めずに貸し与えることができます。何の恩返しもしできない人を、手厚くもてなすことができます。あらゆる侮辱に対しても、礼儀をもつて対応することができます。

あるクリスチャンの大学生は、アルコール中毒の学生に、こうした普通ではあり得ない親切を示しました。アル中の学生は、目もあてられないほどひどい状態になつたため、クラスメートたちからつまはじきにされ、ついには宿舎から退去を命じられました。ところが、そのクリスチャンの大学生は、部屋にも一つ余分のベッドがあつたので、一緒に住まないか、とこの酔っぱらい学生を招いたのでした。幾晩も、自分のルームメートとなつた男が嘔吐したものをきれいにし、服を脱がせ、からだを洗い、ベッドに寝かせなければなりません。それは、まさにクリスチャンの親切さとは、どういふものかを示す気高いふるまいでした。

そして、それからどうなつたでしょうか。彼のしたことは報いられたのです。あるとき、しらふでいたこの自堕落な男は、いらいらしながら尋ねました。「あのなあ、いいか。なんで俺のためにここまでやってくれるんだ。いったい、どんな狙いがあるんだ(What are you after?)」と。クリスチャンの学生は、答えました。「君のたましいが救われること。それが僕の『狙い』よ(In after your soul.)」と。その願いは叶えられました。

アイアンサイド博士が、ある日、地下室の不要品を整理し、ユダヤ人の廃品回収業者に電話をしました。新聞、雑誌、ぼろきれ、スクラップの金属を持つて行つてもらうためです。博士は、がらくたに対してなるべく高い値がつくように真剣に取引しようとするふりをしました。しかし、もちろん業者にはかたがたありません。業者が最後の荷物をトラックに載せようとしたとき、親切なことで有名な博士は、彼を呼び戻して言いました。「ああ、忘れるところだつた。主イエスの名において、どうか受け取つていただきたい」。そう言つて、当時としてはかなりの価値があつた五十セント硬貨を握らせたのです。

帰つていくときに、業者は言いました。「イエスの名によつて、俺に何かをくれた人は、あんたが初めてだ。」

「御霊の実は…親切」。

「御霊の実は…善良さ」

(ガラテヤ人への手紙5章22節 英訳)

善良である、とは人格に秀でていることを意味します。「あらゆる点で不備のない徳」と、ある人が定義した通り、それを備えた人は、生活のどの領域でも、親切で徳が高く、清廉です。

善良さとは、よこしまの反対です。よこしまな人は欺き、不道徳で、信用がおけず、不正、残忍、利己的で、人を憎み、貪欲、かつ(または)、不摂生です。善良な人は、完全でないとしても、真実、正義、純真さ、その他の望ましい特性がその生活に滲み出ます。

使徒パウロは、ローマ人への手紙五章七節で、正しい人と、情け深い(つまり、善良な)人を区別しています。正しい人は、確かに公正で、正直であり、人間関係がまっすぐです。しかし、超然として冷淡である場合もあるかもしれません。それに対し、情け深い人は、愛情深く、人好きのする人です。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありませんが、情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるものです。

しかし、以上のことを踏まえながらも、善良であるとは、毅然としたものであることを忘れてはなりません。罪を見逃し、大目に見たりすることは、善良とは言えません。したがって、善良とは、叱責し、矯正し、懲らしめることでもあるのです。善良さが受肉された方、主イエスが、神殿を清められたときのことを見れば、それがわかります。

善良であることの特徴は、悪意を克服する力があることです。パウロは、ローマの信者に書いています。「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい」(ローマ12:21)。他の人に憎まれて、気持ちが腐ったままであれば、私たち

は悪に負けてしまったのです。しかし、私たちがそれにへこたれず、恵みと憐れみと愛を示すなら、私たちは善をもって悪を克服したのです。

マードック・キャンベルは、英国のハイランド州にいた敬虔な牧師の話をしています。彼の妻は、ことあるごとに、夫に意地の悪いことをしていました。ある日、彼が聖書を読んでいると、彼女はそれをさつと奪い、何と暖炉にそれを投げ込んでしまったのです。彼は、彼女の顔を見上げ、おもむろに言いました。「こんなに暖かい火のそばに座わったのは多分、生まれて初めてだ」と。彼の善意は、彼女の悪意を克服しました。やがて、彼女は愛らしく、慈悲深い妻になりました。

キャンベルは言っています。「彼のイゼベル(※悪女の代名詞)は、ルデヤ(※ピリピ人教会最初のクリスチャン女性)になった。彼のいばらはゆりとなった」と。善意は勝利したのです。

「御霊の実は…誠実」

(ガラテヤ人への手紙5章22節)

御霊のこの実は、主や、他の人との関係において忠実であり、信頼がおける存在であることを意味しています。ある人はこれを定義して、自分やその本性、また、いかなる約束、自分に寄せられる信頼にも背かないことと表現しています。

「口で言えば証書はいらぬ」とは、誠実な人を相手にするときには、わざわざ契約を文書にするまでもないという意味です。その人が同意したとすれば、安心して実行してくれるのを待っていい、ということなのです。

誠実な人は、約束の時間に遅れることはなく、支払いが滞ることもなく、教会で行われる集会には欠かさず出席し、督促されなくても自分に割り当てられた仕事は、最後まで成し遂げます。結婚の誓いを固く守り、家庭での責任をしっかりと果たします。主の働きのために、収入を選び分け、時間と賜物の管理にも注意を払います。

誠実であるとは、たとえ個人的には大きな損をすることになっても、自分の言ったことばに責任を持つということです。誠実な人は、「損になっても、立てた誓いは変えない」(詩篇15・4)のです。言い換えれば、夕食の招待を受けた後、それよりも高級なメニューの夕食会に招かれようが、もつと気の合った仲間との会食のチャンスが訪れようが、もとの約束を反故にはしません。(十分に代わりを務めることのできる人を確保するならともかく)職務をそつちのけにして、休養のための旅行に行くようなことはしません。自分の家を売る場合、たとえ後になって誰かが一万ドルかそれ以上を上乗せすると言われても、もともと同意した価格で売ります。

誠実さが極まれば、キリストへの忠誠を捨てるよりは、むしろ、死を選びます。国王が、「キリストへの信仰を撤回せよ」と迫ったとき、ある誠実なクリスチャンはこう答えたと言います。「心がそれを思い、口がそれを語り、手が署名をしたのです。必要とあらば、神の恵みにより、血によってその封印をいたしましょう」と。

ポリカリュポス(※初代教会の指導者の一人)は、「もし、主を否定すれば、それと交換に命を助けよう」と言われたとき、あえて火あぶりの刑を選び、次のように言いました。「この八十六年間というものは、私は主に仕えてきました。主は一度たりとも私に悪いことはなさいませんでした。今さら、どうしてわが主、わが主を否むことができましょう」と。

殉教者たちは、死に至るまで忠実でした。それゆえに、いのちの冠を受けるのです(黙示録2・10)。

「御霊の実は…柔和」

(ガラテヤ人への手紙5章23節)

柔和といえば、(一九二〇年代の)漫画の主人公のキャスパー・ミルクトーストをすぐに思い浮かべる人も多いことでしょう。彼は、臆病と小心の代名詞でした。しかし、この御霊の実は、それとは大違いです。それは、弱さではなく、超自然的な力を根源としているからです。

柔和とは、第一に、信仰者が自分の生活に対する神のすべてのお取り扱いに対し、愛をもつて服従することを指しています。柔和な人は、反抗や詮索、不平を持つことなく、神のみこころに従います。「知恵に満ちておられる神が誤るはずがない。愛に満ちておられる神が意地悪いことをなさるはずがない」と推測します。この世に偶然や偶発的なことはないと気づいているその人は、神が、すべてのことを働かせて、自分の人生に益をもたらそうとしてくださっていると信じます。

柔和の中に、信仰者と他の人々との人間関係も含まれます。そこでは、自分が目立つことを避け、自分を主張せず、謙遜で、高慢になりません。柔和な人とは、自分が碎かれる道を進みゆく人です。何か間違ったことを言ったり、したりした場合でも、面子にこだわることをやめ、「ごめんなさい。赦してください」と言います。自尊心が傷つかないことよりは、面目を失う方を選びます。正しいことをしたために、苦しみを受けても、それを忍耐強く耐え、仕返しなどまったく念頭にありません。濡れ衣を着せられても、自己防衛を慎みます。(※新約聖書ギリシャ語研究の権威)トレンチが言うように、柔和な人とは、たとえ、他の人から受ける痛みや嘲りがあつたとしても、それによつて

自分を懲らしめ、清めるために、神があえてお許しになつたものとして受け入れる人のことです。

柔和な人とは、「神の御旨を恨むことなく受け入れる人、内なる強さのおかげで、優しく、穏やかでいられる人、完全に神の支配のもとにある人」と定義した人もいます。(※スコットランドの著名な霊的指導者)アレキサンダー・ホワイト博士に、「あなたの友人の牧師が不信者同然である、として懲戒処分を受けています」と教区の人が告げたとき、博士は、その処分に対して烈火のごとく怒りました。ところが、批判していたその人が、「ホワイト博士のことも真正のクリスチャンではない」とも言っていた、とつけ加えると、博士は、こう言つたそうです。「私を一人にしてくれないか。主の前に自分の心を探りたいのだ」と。(他の人に対するそしりには怒つても、自分に対するそしりは受け入れる)、これが柔和です。

私たちすべては、「柔和で、心へりくだつた」方のくびきを共に負うように、と召されています。そうしていくときに、たましいの安らぎを見出し、ついには、地を相続するのです。

「御霊の実は…自制」

(ガラテヤ人への手紙5章23節)

自制とは、生活のあらゆる領域における節度、または節制という意味を含んでいます。

信仰者であるなら、聖霊の力により、考える事柄、食物や飲み物に対する欲求、話す内容、性生活、気性、その他、神から与えられた能力は、何であれ自制できる力が与えられています。いかなる情欲や欲望の奴隷になる必要もありません。

パウロは、コリント人に向けて、闘技をする者は、あらゆることについて自制してはいないか、と言っています(1コリント9・25)。パウロ自身も、どんなことにも支配されまいと心に決めていました(1コリント6・12)。それゆえ、パウロは自分のからだを打ち叩いて従わせました。他人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないためです(1コリント9・27)。

練達したクリスチャンは、過食を避けます。コーヒー、紅茶、コーラに支配されそうになれば、それらを飲む習慣そのものを捨てます。どんな吸い方であれ、タバコに支配されることは拒否します。医師の処方による場合を除き、精神安定剤や睡眠薬、その他の薬品は注意深く回避します。睡眠に費やす時間を管理します。性的欲望という問題に悩まされるときには、不純な考えを追い出し、日々思いを清めることに集中し、建設的な活動に没頭します。このような人にとつては、あらゆる嗜癖(しへき)(※何かをやめられなくなること)や、まとりつく罪は、巨人ゴリヤテのようなものであり、征服の対象です。

クリスチャンが、ある特定の習慣をやめられないでいると嘆く話は、よく耳にします。そのような敗北主義では、失敗が決

まったようなものです。それは、必要な勝利を与えることが聖霊には無理だと言うのも同然です。実をいえば、聖霊を持たず、回心を経験していない人々ですら、喫煙や飲酒、悪口をやめることができる場合が少なくありません。であるなら、内住する聖霊によつてそうすることは、クリスチャンにとつて、どれほど容易なはずでしょう。

自制は、他の八つの御霊の実と同様に、超自然的なものです。御霊のおかげで、信者は、他の方法とは比べ物にならない方法で、自分を律することができるのです。

「あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはいかに牢に入れられることになります。」

(マタイの福音書5章25節)

この箇所を表面的に読んだだけでも分かる教えのひとつは、クリスチャンであるなら安易に訴訟に関わってはならないということ。苦情や損害に対する是正を求めてすぐ裁判に訴えるという反応にも、無理からぬところがあります。しかし、信仰者を導く原則は、生来的な反応よりも次元の高いものです。神のみこころは、生まれ持った傾向に逆行する場合が少なくありません。

今日の法廷は、事故の補償、医療過誤訴訟、離婚訴訟、相続財産の主張という案件で満ちています。多くの場合、人々は一挙に大金を手に入れようと期待して、弁護士のもとに駆け込みます。しかし、クリスチャンの場合は、法の手続きではなく、愛の力によってものごとの解決を図らなければなりません。ある人が言ったように、「法的手続きを選んだら最後、法的手続きの言うがままになり、ついには、一円残らず財産を持つていかれる」だけです。

勝者となるのが確実なのは、弁護士ただ一人です。彼の報酬は、確約されています。ある漫画が、こんな様子を描いています。原告は牛の頭を引っ張り、被告は尻尾を引っ張っています。その間、弁護士はずっと牛の乳を搾っているのです。

I コリント六章では、クリスチャンが、他のクリスチャンを相手に訴訟を起こすことをはっきり禁じています。一つには、教会の知恵ある人々に、もめ事の相談をすればよいからです。

しかし、さらにまざった方法とは、この世の判事たちの前に行くのではなく、むしろ、不当な扱いに甘んじ、だまされる方を選ぶことです。(ついでながら、クリスチャンである伴侶に関わる離婚訴訟は、すべてこの例外です。)

しかし、信者と不信者の間に起こる訴訟はどうなのでしょう。クリスチャンが、自分の権利のために立ち上がらなくてもよいのでしょうか。

むしろ、自分の権利は主張しない方がはるかにまざっているというのがその答えです。それは、キリストのゆえに、一人の人間の生き方がはつきり変わったことを示す機会になるからです。自分を不当に扱った人に対して、訴訟を起こすのは、神のいのちがなくてもできます。しかし、自分の主張を神にゆだね、その問題を用いてキリストの救いの力、また、変容の力を証しする機会とするには、どうしても神のいのちが必要。クリスチャンは、可能な限りすべての人と平和を保つ生き方をするべきなのです(ローマ12・18)。

「ある人が、隣の家との間に塀を建てはじめた。すると、隣人が来て言った。『その土地をあなたが買ったのは、裁判沙汰を買ったようなものだ。その塀は、こちら側に五フィートはみ出してくるだろうからな』と。すると、その人は言った。『隣人には、いつも良い人に恵まれると分かっていますよ。そこで提案しましょう。あなたが良いと思うところに塀を建て、請求書を送ってください。そうすれば私が支払います』と。結局、塀は建てられなかった。必要がなくなったからである」(E・スタンレー・ジョーンズ)。

「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」

(マタイの福音書25章40節)

ここには、励ましと警告の両方が描かれています。報いがあるという励ましと、私たちを立ちすくませる警告です。キリストの兄弟である人々にしたことは、それがなんであれ、キリスト御自身にしたこととみなされるということです。

自分と同じくクリスチャンである人に親切を示すことにより、主イエスに親切を示すことができます。神の民をもてなすとき、私たちは、自分の家でキリストをもてなしているも同然なのです。もし、主寝室を使ってもらうなら、それをキリストに使っていただくのと同じなのです。

キリストが王の王、主の主として来臨されたときには、誰もがすぐに精一杯のことをすることでしょう。しかし、通常キリストは、非常にみすばらしい装いで私たちの戸口に現れるため、私たちは試されます。主の兄弟で最も小さい者をどう取り扱うかは、私たちが主をどう取り扱っているかと同じことなのです。

一人の年老いた敬虔な伝道者が、聖徒たちとみことばを分かち合おうと、ある集会を訪ねました。彼は人を惹きつける個性に欠け、力強い説教スタイルも持ち合わせていなかったかもしれませぬ。しかし、間違いなく神のしもべであり、主からのメッセージを携えていました。長老たちは、集会にはお招きできないと断り、その代わりに黒人の貧民街の集会に行つてはどうか、と提案しました。彼は言われた通りにし、その兄弟たちに温かく迎えられる。ところが、そこで集会を持つていたその週のうち、心臓発作に襲われ、死んでしまったのです。それは、あたかも上流階級の人々からなる集会の兄弟たちに、主が

こう言っておられるかのようでした。「あなたがたは、彼が来るのを望まなかったようだが、わたしは望んでいた。彼を拒んだあなたがたは、わたしを拒んだのである」と。

「偉大な賓客」という詩で、エドウィン・マーカムは、主が客として自分の店に来てくださる、という夢を見た靴屋のコンラッドのことを書いています。彼は、主の訪問に備え、朝早く起きて、入念に準備をしました。彼は、心をときめかせながら待つていました。やがて、戸を開く音が聞こえると、すぐに飛び出して客を迎えました。しかし、それは一人の乞食でした。コンラッドは、乞食に靴を履かせました。次に、老婦人が来たとき、彼女の荷物を持ってやり、食べ物を与えました。しばらくして、迷子が来たとき、その母親のところに連れて行ってやりました。しかし、ついに主は姿をお見せになりませんでした。コンラッドは打ちひしがれ、店の片隅ですすり泣いていました。すると、沈黙の中で、優しい声が聞こえてきました。

「元氣を出しなさい。わたしは約束を守った。」

三度、わたしはあなたの友好の戸口に行つた。

三度、わたしの影があなたの家の床にかかった。

足を怪我した乞食はわたしである。

食べ物をもたらつた婦人はわたしである。

家が分らず道にいた子どもはわたしである。」

「聞いていることによく注意しなさい。」

(マルコの福音書4章24節)

聞いたことに注意しなさい、と主イエスは、警告しておられます。私たちは、耳という門から入って来たものを管理する責任があると同時に、聞いたことを適切に処理する責任があります。

あからさまな偽りに耳を傾けてはいけません。カルトは、かつてないほどに大量の宣伝を吐き出し、少しでも耳を傾けようとする人々を探し回っています。「カルトの信者を家に入れてはいけない」「あいさつしてもいけない」と使徒ヨハネは、言っています。彼らは、キリストに反対する人々だからです。

人を欺く破壊的な事柄にも、耳を傾けてはなりません。大学や神学校で学ぶ若者は、神のことはに對する懷疑と否定という集中砲火を、毎日のように浴びています。奇跡が、本当は奇跡ではなかったと巧妙に説明され、主イエスは賞賛されるどころか非難され、聖書の明白な意味が薄められるのを耳にします。破壊的な教えを受けながら、その影響を受けないでいることは不可能です。たとえ、学生の信仰が破壊されなかったとしても、彼の知性は汚されます。「人は火をふところにかけ込んで、その足が焼けないだろうか。また人が、熱い火を踏んで、その足が焼けないだろうか」(箴言6・27・28)。答えは明らかに、「いいえ」です。

汚れたことやいかがわしいことに、耳を傾けてはなりません。今日の社会で一番ひどい汚染とは、心の汚染です。大半の新聞、雑誌、書籍、ラジオとテレビ番組、映画、人の会話を描写すると、「卑猥」の一言に尽きます。これに常にさらされていると、クリスチャンは本来の罪深さを感じなくなる危険性がありま

す。しかも、それは危険であるだけに留まりません。心の中に下劣でいかがわしい話が入ると、私たちにとって最も聖なる瞬間に、それがよみがえり、私たちにつきまとうのです。

無価値なこと、どうでもよいことで心を満たしてはなりません。そんなことができるほど人生は長くはなく、使命は待ってくれません。このような世界であるからこそ、私たちは本気にならなくてはならないのです。

一方、積極的な面から言えば、私たちは神のみことばに耳を澄まさなければなりません。心が神のみことばで満たされ、その聖なる教えに従えば従うほど、神を一層慕い求めるようになるのです。そればかりか、神の御思いに心を浸すことで、キリストの姿にいつそう変えられ、周囲の道徳的汚染からさらに分離されていくのです。

「だから、聞き方に注意しなさい。」

(ルカの福音書8章18節)

クリスチャンの生活においては、何を聞くかだけでなく、どのように聞くかということも大切です。

神のみことばを、自分に関係のないという態度で聞くこともあり得ないではないでしょうか。それは、聖書を他の本とまったく変わらない本のよう読み、全能の神が聖書を通して、私たちに語りかけていることを気にかけていないかのように読む読み方です。

批判的に聞く場合もあります。その場合は、人間の知性の方が聖書より優れていると見ているわけです。聖書が自分をさばく基準なのではなく、聖書をさばく立場に自分を置いているのです。

反発しながら聞く場合もあります。弟子に求められる厳しい基準や、女性の従属的立場、そして、かぶりものが扱われている部分に來ると、腹が立ち、従うのを真つ向から拒否します。

聞いてもすぐに忘れてしまう場合もあります。ヤコブの手紙に出てくる人のように、「生まれつきの顔を鏡で見、自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであつたかを忘れてしまう」(同1・23・24)のです。

しかし、おそらく最も多いのは、(聞いても何も感じないという)鈍感なタイプでしょう。みことばをたくさん聞いたので、無感覚になってしまったのです。メッセージも機械的に聞くだけです。聞くには聞いても、新鮮味のない繰り返しにしか思えず、耳にたこができてしまっています。「まだ、私が聞いたことのない話がありますか」という態度です。

神のみことばをどれだけ聞いても、それに従わないのであれば、ますます公正な判断をする「聴覚」がそこなわれます。聞くのを拒むと、やがて聞く能力そのものが失われます。

もつとも優れた聞き方とは何でしょうか。それは、敬虔に、従う思いを持つて真剣に聞くことです。聖書に従う、という固い決心をもつて、私たちは、聖書に近づかなければいけません。たとえ、誰一人そのようにする人が、他にいなかったとしても。賢い人とは、聞くだけでなく、行動に移す人であるからです。神はご自身のことばにおののく者を探しておられるのです。(イザヤ66・2)。

パウロは、テサロニケ人が神のみことばを聞いたときのことを称賛してこう言っています。「あなたがたは、人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれた」(1テサロニケ2・13)と。それと同じように、私たちも、聞き方に必要なのです。

「自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」

(ルカの福音書9章24節)

信仰者である私たちが自分のいのちに対して取る姿勢は、基本的に二通りしかありません。いのちを救おうと努めるか、または、キリストのためにためらわずいのちを失うかのどちらかです。

無理なくできるのは、いのちを救おうとする生き方です。自分中心になることに努力する必要はなく、不便もない生き方をしようと思えばできないことはありません。入念な対策を立てておけば、さまざまな衝撃をやわらげ、損失を防ぎ、あらゆる不快なことを回避できないこともないでしょう。自分の家とは、「立入禁止」の看板の立つ私有地です。それは、家族限定で、他の人をもてなすのは最小限に留めます。自分の生活にどれだけ影響が出るかということが、判断を下す基準になります。もし、他の人を助けるために計画に支障が生じたり、仕事が増えたり、多額の出費が必要となれば、お断りです。自分の健康には、必要以上に気を使ってしまうがちな私たちは、睡眠を削らなければならぬほどの奉仕、病氣や死と身近に接するような奉仕、または、身体的に危険を伴う奉仕は断ります。また、周りの困っている人を助けるより、自分の身なりを優先に考えます。要するに、主が来臨されないとしたら、何年か後に朽ちていくほかに肉体を気遣うために生きています。

自分のいのちを救おうとして、私たちはいのちを失っています。私たちは、自己中心的な生き方の結果として、ありとあらゆる不幸を経験し、他の人のために生きることに伴うすべての祝福を受け損なっているのです。

それに代わる選択肢は、キリストのためにいのちを捨てることです。このように生きることは、奉仕と犠牲が伴うものです。不要なリスクを背負い込んだり、裁判でわざわざ負ける道を選ぶわけではありませんが、だからといって何がなんでも自分を生かそうと願い、義務から目をそむけるようなことはしません。「私たちが神のためとあらば、たましいもからだも捨て石とする」(※ロバート・L・ステイブンスンの詩)ということは、ある意味で道理に適ったことです。神のために財を費やすこと、また、自分が費やされることは、私たちにとつての最高の喜びではないでしょうか。困窮している人のためにこそ、私たちの家庭は開放され、財産は費やされ、時間は提供されるものなのです。

このようにして、キリスト、また、他の人のために自分の人生を注ぎ出すとき、まさにいのちと呼ぶにふさわしいのちがそこにあります。いのちを失うことによつて、私たちはそれを救っているのです。

「彼は言った。『あなたがたに言うが、だれでも持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている物までも取り上げられるのです。』」

(ルカ力の福音書19章26節)

この節の前半にある「持っている」という語は、単なる所有以上のことを意味しています。そこには、今まで教えられたことに従う、また、与えられているものを用いるというニュアンスが含まれています。言い換えれば、単に私たちが持っているものというのではなく、むしろ、持っているものを用いて、私たちが行うことを言っているのです。

であるなら、聖書を学ぶ上で非常に大切な原則がここにあるわけです。私たちが受ける光に従っていくとき、それにつれて、神はもっと多くの光を与えてくださいます。クリスチャン生活で、最高の進歩を遂げるのは、どのような人でしょうか。それは、たとえ聖書が言っていることを行う人が周囲に一人もいなかったとしても、自分はそれを行う、と心に固く決めた人です。言い換えれば、知能指数ではなく、「従順指数」が重要なのです。聖書は、従順な人の心に対して、その宝の扉をさつと開いてくれるものです。「私たちは、知ろう。主を知ることが切に追い求めよう」と、(預言者)ホセアは的確に述べています(同6・3)。教えられたことを実行すればするほど、主はますます多くのことを私たちに示してくださいませ。情報に適用が加わると、成果は飛躍的に向上しますが、情報だけで適用がなければ、宝の持ち腐れです。

この原則は、賜物と才能の用い方についてもあてはまります。預かった一ミナを十ミナを増やした人は、十の町を支配する権

限が与えられ、賜物を生かしてさらに五ミナ得た人は、五つの町の支配が認められました(ルカ19・16・19)。

これは、責任をきちんと果たしていると、やがて、より大きな特権と責任がゆだねられることを示しています。自分のミナをまったく用いなかた人は、持っていたミナも失ってしまいました。つまり、主のために与えられているものを用いないでいると、やがては、用いる能力をも失ってしまうのです。使わないでいると、なくなってしまうのです。

からだも使わないでいると、その部分が萎縮し、使いものにならなくなります。常に使い続けるからこそ、健全に発達するのです。これは、霊的生活でも同じです。憶病が原因であれば、怠惰が原因であれば、預かった賜物を地中に埋めてしまうなら、やがて、神は私たちが用いるのをやめ、その代わりに、他の人で補充されることに気がつくことでしょう。

したがって、聖書の指針に従うこと、数々の約束を自分のものとする、また、神が与えてくださった能力なら何でも利用することほど重要なことはないのです。

「あなたがたは、悟りのない馬や騾馬らばのようであつてはならぬ。」

(詩篇32篇9節)

私たちが主の導きを求めるときに、二つの間違つた態度をとる可能性があります。馬と騾馬とは、それを表わしているように思えるのです。馬は、まっすぐ前方に突進して行こうとします。それに対して、騾馬は進むのを嫌がります。馬はせっかちで、活力に溢れ、性急な傾向があります。反対に、騾馬は頑固で、扱いにくく、怠惰です。詩篇作者は、そのどちらも悟りがないと言っています。両者とも、くつわや手綱のような馬具を用いて制御しなければなりません。さもないと、主人のところすら寄つて来ないのです。

神が望んでおられるのは、私たちが神の導きに敏感になることであり、神がみこころを示されたときに、自分の知恵で突進したり、尻込みしたりしないことです。

この点で役立つかもしれない経験則を、いくつかご紹介しましょう。

神の導きであるかどうか、二人か三人の証人の口を通して確認できるようにしてください、と神にお願いしてみましよう。

主はこう言っておられます。「ふたりか三人の証人の口によつて、すべての事実が確認されるためです」(マタイ18・16)。ここで言う証人とは、聖書のみことばの場合もあれば、他のクリスチャンの助言、環境が不思議に整つていくことなどの場合があります。神のみこころを明確に示すことが二つ、または、三つあれば、もはや疑いや不安に悩まされることはありません。

もし、神の導きを求めても、導きがない場合は、今いる所に留まることが神の導きです。「前進を示すランプが点灯していな

いということは、留まれというランプが点灯していることである」というのは、今なお真実です。

拒めば不従順となるといことがはつきりするまで、導きを待つてください。イスラエルの民は、雲の柱と火の柱が動くまでは、進むことを禁じられました。民がどれほど正当化しても、独断的行動の言いわけにはなりませんでした。彼らの責任とは、雲が動いたときに、進むことでした―それより早くても、遅くてもいけなかつたのです。

最後に、キリストの平和に、あなたの心の「審判」になつていただくことです。これは、コロサイ3章15節の意識でもあります。神が本當に導いておられるときには、神は私たちの知性や感情に働きかけて、正しい道の場合には平安を、その他の道の場合には平安がないようにしてくださいという意味です。

神のみこころを知りたいと切に願い、直ちに従う用意があるならば、神の懲らしめのくつわや手綱は必要ありません。

「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」

(ピリピ人への手紙2章4節)

ピリピ人への手紙二章のキーワードは、「他の人」です。主イエスは、他の人のために生きました。パウロも他の人のために生きました。テモテも他の人のために生きました。エパフロデトも他の人のために生きました。私たちもまた、他の人のために生きるものでなければなりません。

そう命じられているのは、それが正しいからであるだけではなく、自分自身の益にもなるからです。もし、他の人のために生きることが高くつくことがあるとしたら、そうしない場合は、さらに高くつくこと知らなければなりません。

私たちが住む社会は、自分の興味関心のためにだけ生きる人で溢れています。他の人を助けるのに忙しいのではなく、家でふさぎ込んでいます。些細な痛みや苦しみについてよくよく考え、そのうちに心気症(※ノイローゼの一種)になってしまします。孤独の中で、誰も自分に関心を持ってくれないとこぼし、自己憐憫で苦しみます。自分のことを考えれば考えるほど、ふさぎ込んでいきます。人生は、やがて巨大な内省の暗闇となり、それが恐怖になっていきます。そのうちに、医師のもとへ出かけ、大量の錠剤を服用するようになりますが、その薬といえども彼らの自己中心性はさすがに治すことはできません。やがて、彼らは精神科医をしばしば訪れては、診察室の長椅子にからだを横たえ、生きることの退屈さと倦怠感を何とか軽減する方法を見つげようとするのです。

このような人々にとつての最良の治療法とは、(意外かもしれませんが)他の人に仕える生き方です。訪問を待つ寝たきりの人々がいます。友を必要とする多くのお年寄りがいます。ボラ

ンティアの助けを歓迎する病院があります。一通の手紙や一枚のカードでも、それによって元気を取り戻す人々がいます。故国からの良い知らせを待ちわびる宣教師がいます(そこに多少の現金を同封したら、どんなに喜ばれることでしょうか)。救われなければならない魂がいます。教えを受けなければならぬクリスチャンがいます。つまり、退屈したという言いわけが通用する人は、どこにもいないのです。一生かかっても生産的な活動をするには足りないほど、なすべきことは十分あるのです。そして、他の人のために生きるという過程そのものを通して、交友の範囲が広がり、人生はもつと楽しいものとなり、満足と充実感が発見できるのです。P・M・ダーハムは、こう言っています。「他の人に対する同情心が豊かな人は、自分の悲しみに流されることも、自己憐憫という害毒を受けることも少ない」と。

他の人のため、しかし主よ、他の人のために…

これこそ我がモットーであらせたまえ

他の人のために生きるものとなるよう

われを助けたまえ

そして、主のごとく生きる我とならしめたまえ

「主の使いは言った。『メロズをのろえ、その住民を激しくのろえ。彼らは主の手助けに来ず、勇士として主の手助けに来なかつたからだ。』」

(士師記5章23節)

デボラの歌には、イスラエル軍とカナン人との戦いが膠着状態に入っていたときに、傍観者のままでいたメロズへのろいがか繰り返されています。ルベン族も辛辣な侮蔑を免れていません。彼らにも協力の意志はあったのですが、結局、羊の群れを置いてまで応援に駆けつける熱意はなかったのです。ギルアデ、アシエル、ダンも、不介入の不名誉を名指しで指摘されています。

ダンテは、言いました。「地獄の一番熱い場所は、道徳上の重大な危機に際して、どちらつかずの態度をとった人々の予約席である」と。

それと同じ心情が箴言でも、次のように書かれています。「捕えられて殺されようとする者を救い出し、虐殺されようとする貧困者を助け出せ。もし、あなたが『私たちはそのことを知らなかつた。』と言つても、人の心を評価する方は、それを見抜いておられないだろうか。あなたのたましいを見守る方は、それを知らないだろうか。この方はおのおの、人の行ないに応じて報いられないだろうか」(箴言24・11、12)。キドナーは、このように注釈しています。「条件が悪かつた(10節)、成功の見込みがなかつた(10節)、知らなかつたのだから仕方がない(12節)、と言いつくするのは雇い人であつて、真の羊飼いではない。愛があればそう簡単にはあきらめない。愛なる神も同じである」。

もし、反ユダヤ主義の大きなうねりが全国を席巻し、ユダヤ人が強制収容所やガス室、焼却炉に追いやられていくという事

態が起きたら、私たちはいつたいうのでしようか。彼らを安全にかくまうために、自分のいのちを危険にさらすのでしようか。

あるいは、同じクリスチャンの仲間が迫害にさらされ、彼らをかまくまえば死刑にされるとしたら、それでも私たちは、自分の家庭に彼らを迎え入れるのでしようか。私たちは、どういう行動を取るのでしょうか。

あるいは、それほど英雄的なことではなく、現代にありがちなケースを取り上げてみてもよいでしょう。あなたがキリスト教関連団体の理事を務めているとします。ところが、誠実に働く従業員が、身に覚えがないことで責任を問われます。資産家であり、有力な理事の怒りを静めるためです。最後の採決が行われるとき、あなたは手をこまねいて沈黙を守るのでしょうか。

イエスが裁判を受けたサンヘドリン(※ユダヤ人最高議会)、または、イエスがつけられた十字架の刑場に私たちがいたとしましょう。私たちは、あいまいな立場をとろうとしたのでしようか、それとも、「自分はイエスの仲間である」と言つたのでしようか。

沈黙は、必ずしも金とは限りません。ときには、「臆病」を表す(黄色にすぎない)こともあるのです。

「おとうさん。私は：罪を犯しました。」

(ルカの福音書15章21節)

放蕩息子が悔い改め、帰ってきて初めて、父親は息子に駆け寄り、首を抱き、口づけしました。悔い改めがないのに、赦しを与えたとしたら、正しいとは言えなかったことでしょう。聖書の原則は、「悔い改めれば、赦しなさい」(ルカ17:3)なのです。

放蕩息子が遠い国に行っている間、父親が援助を送ったという記録はありません。もし、実際にそのようにしたとしたら、この反抗的な息子の人生に働きかけておられる神の御わざを妨げたことでしょう。主は、この強情な息子が、どうしようもないところまで行き着くのをじっと待っておられたのです。この息子は、万策尽きるところまで行かなければならないこと、また、どん底を経験しなければ、助けを求めて目を上げることは決してないことを、主はご存知でした。この無宿者が(豚のえさである)イナゴ豆の皮を食べなければならぬほど落ちぶれたときこそ、(頑固な)心が砕かれるときであったのです。ですから、父親は息子を主にゆだねて、危機が極限に達するのを待つほかはなかったのです。

これは、親にとって最も実行が困難なことの一つであり、ことに母親にとっては辛いものです。主が緊急事態を送られる度に、思わず反抗的な息子や娘を助け出してしまうのが生来の傾向であるからです。しかし、このような親が成功することといったら、主のなさることを妨害し、愛する息子や娘の苦悩を長引かせることぐらいのものです。

かつて、スポルジオンは言いました。「道を誤った者に対する最も真実な愛とは、誤りの中にいる彼らと仲良くすることでは

なく、あらゆる点でイエスが言われたことを忠実に守ることである」と。人が悪の中にいることを容認するのは、愛ではありません。愛があれば、むしろ、人は主に向き、こう祈るはずで「主よ。どれほど代償が高くついても構いませんから、彼を回復してください」と。

ダビデがした最大の間違いの一つは、アブシャロムがまだ悔い改めていないのに、王宮に迎え入れたことでした。ほどなく、アブシャロムは民の心を盗みはじめ、父に対して謀反を計画しました。拳銃の果てに、父をエルサレムから追い出し、父に代わって王となり、油を注がれる儀式を行いました。アブシャロムが軍隊と共に出動し、ダビデを葬り去ろうとしたときですら、ダビデは家来に命じて、万が一アブシャロムと対決することになっても、いのちは助けてやるように、と指示したくらいです。しかしヨアブは、ダビデにまさった判断をし、アブシャロムを殺しました。

神によつて、息子や娘が、豚同然の生活に落ちぶれた状況に追いやられ、それをただ見ていることしかできないという痛みを甘んじて受け入れる親の場合は、それ以上の悲しみに遭わないようにしていたことが少なくありません。

「まことに、人の憤りまでもが、あなたをほめたたえ、あなたは、憤りの余りまでをも身に締められます。」

(詩篇76篇10節)

人間の歴史で興味がかきたてられる特徴の一つは、神が人の憤りさえも用いて、ご自身が賛美をお受けになることです。墮落してからというものが、人類は神に、また、神の民に、そして、神の大義にこぶしを振り上げてきました。そのような憤りを、神は即座にさばくことはなさらず、神の栄光と御民の祝福になるように、これをすべて吐き出させ、巧みに利用されるのです。

徒党を組んだ男たちが、自分たちの弟に悪を企て、遊牧の一回に売り渡したところ、彼はエジプトに連れて行かれました。ところが神は、彼を引き上げて、第二の権力の座に着かせ、民族の救済者とされました。後に、ヨセフは兄たちを論してこう語っています。「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました」(創世記50・20)。

ハマンは、ユダヤ人に対して激高しましたが、その結果、自分の身の破滅を招き、彼が滅ぼそうとした人々は高い地位に引き上げられました。

三人の若いヘブル人が、燃える火の炉に投げ込まれました。炉があまりにも熱かったため、彼らを投げ込んだ者たちが焼け死んでしまうほどでした。しかし、ヘブル人たちは無傷で、煙の臭いすらつかずに出てきました。すると、異教徒であるはずの王が、(青年たちの信じる)ユダヤ人の神をのしる者に死刑を宣告しました。

ダニエルは、天の神に祈ったため、獅子の穴に投げ込まれません。しかし、ダニエルが奇跡的に無事であったのを見た異教の

支配者は、またしても、ダニエルの神に崇拜と崇敬を命じる勅令を出したのでした。

新約聖書を紐解くと、教会が迫害を受けたことにより、かえって福音の種がこれ以上ないほど急速に蒔かれたことがわかります。ステパノの殉教の中には、すでにパウロが回心する種が宿っていたのです。パウロが投獄されたことよって、四通の手紙が書かれることになり、それは、やがて新約聖書の一部となりました。

時代は下り、(ボヘミヤの宗教改革者)ヤン・フス(は火刑に処せられ、その遺体)の灰は、川に投げ込まれましたが、(ライン)川の流域のどこでも、福音がそれを追いかけるように伝えられていきました。

人間は聖書を引き裂いて、それを風に飛ばしますが、紙切れとなった聖書を無造作に拾い上げて読み、見事に救われる人がいます。人は、キリストの再臨という教義をあざけりますが、その結果、終わりの日には、あざける者が来るといふ預言を自ら成就しているのです(Ⅱペテロ3・33)。

このように、神は、人の憤りを用いて、ご自身が賛美をお受けになるように、状況を導いておられます。そして、神の賛美に至らないことは抑止しておられるのです。

「あなたは、わたしの名のために宮を建てることを心がけていたために、あなたはよくやった。」

(列王記第一8章18節)

ダビデの心にあつた大きな願いの一つは、エルサレムに主の神殿を建てることでした。主は、ダビデが神殿を建設することは認めない、と告げられました。ダビデが戦いの人であつたからです。しかし、主は、注目すべきことばをつけ加えておられます。「あなたは、わたしの名のために宮を建てることを心がけていたために、あなたはよくやった」。このことから、たとえ、私たちが神のためにしたいと願うことが遂行できない場合でも、それを行いたいという願望を神が評価してくださることは、明確であるように思われます。

先延ばしや、怠惰のために実行するに至らなかつたという場合には、この原則はあてはまりません。願いを持つだけでは不十分なのです。よく言われるように、「地獄への道は、善意という石で舗装されている」のです。

しかし、クリスチャン生活の中では、主に喜んでいただくこととしても、自分ではどうにもならない状況のために、それができないという場合が多々あります。例えば、回心した若者がバプテスマを受けたいと望んでも、信仰を持たない両親に禁止されるという例があります。このような場合、神は、バプテスマを受けていなくても、バプテスマを受けたとみなしてくださいます。彼が両親への不従順というそしりを受けることなく、家を出て独立し、主に従うまでは…。

クリスチャンである妻が、教会のすべての集いに参加したいと望んでも、酒飲みの夫は、頑として耳を貸しません。しかし、

主は、夫に対する妻の従順、および、他の人々と御名のもとに集いたいという願いの両方に報いてくださるのです。

ある老齢の姉妹は、聖書を学ぶ大会で、他の人々が食事のお世話を仕をしているのを見て涙を流しました。長年、食事のお世話をしてきたことが彼女の大きな喜びだったのでありますが、もうからだがいうことを聞かなくなつたのです。しかし、神はどうご覧になるでしょうか。彼女が流した涙の報いは、他の人々が労苦しめて受ける報いに遜色はありません。

喜んで宣教地での奉仕に身を捧げたいと願いながら、自分の住む町から外に出ることすらかなわなかつた人が、いつたいどれくらいいるでしょうか。それは、誰にもわかりませんが、神は、知つておられます。―そして、この聖なる願望が、やがて、キリストのさばきの御座で報われるときが来るのです。

この原則は、献金にもあてはまります。主の働きのために、すでに身を削るほど捧げているのに、「もつと捧げることができたらいいのに」と願う人々がいます。やがて来るべき日に、神の「台帳」を見れば、彼らが確かにそれ以上捧げた、と記録されていることでしょう。

病氣の人、身体にハンディのある人、寝たきりの人、老人も、最高の榮譽を受ける立場から除外されてはいません。なぜなら、あわれみ豊かな神は、私たちが成し遂げたことだけではなく、私たちが抱いた夢すらも、判断の基準としてくださるからです。

「費用もかけずに、私の神、主に、全焼のいけにえをささげたくありません。」

(サムエル記第二24章24節)

主が、疫病の蔓延^{まんえん}を食い止められた場所で、「全焼のいけにえを捧げよ」と、ダビデに命じられたとき、(地主であった)アラウナは即刻、「打ち場、牛、火にくべる木を捧げます」と申し出ました。しかし、ダビデは、「どうしても代価を払って買いたいのだ」と言い張りました。自分に負担がかからないものを、主に捧げたくなかったのです。

クリスチャンになるために払う代価は何もないことを私たちは知っています。しかし、真に弟子として生きていくには、高い代価が必要である、ということを知らなくてはなりません。「代価のない信仰は価値のない信仰である」というのは、その通りなのです。

自分を捧げるとしても、その範囲が、結局、利便性、費用、快適さを考慮して決定されることが多いことでしょうか。もちろん、私たちは祈り会に出かけます。ただし、疲れていなければ、または、頭痛がなければ…。もちろん、私たちはバイブルクラスを受け持ちます。ただし、週末を山で過ごすスケジュールとぶつかなければ…。

公の場で祈ったり、証しをしたり、福音を宣べ伝えたりすることは緊張するので、結局、黙っています。救済伝道団(※貧しい人を助け、福音を伝える働き)で奉仕したいとは望みません。シラミやノミがくっついてしまうからです。宣教地に赴くという思いは、直ちに頭から追い出します。蛇やクモのことを考えただけで、身の毛がよだつからです。

私たちの献金は、ほとんどの場合、犠牲というよりは、チップ程度にすぎません。失っても惜しくないものを捧げます。全財産を捧げたやもめとは、大違いです。人をもてなす場合には、かかる費用、こうむる不便、片付けの大変さのそれぞれの大きさを考慮して、迎え入れる人を決めます。家のじゅうたんはどれもこれも、酔っぱらいの吐物のしみがついてしまった、という救霊の働き人とは大違いです。他の人の求めに応じることがあっても、快適なベッドに横たわる時刻が来れば終了です。霊的、また、具体的な助けが必要であれば、いつでも起こしてもらって構わないという長老とは、大違いです。

キリストから召しを受けても、「それしたら、何の得があるだろう」とか、「割に合うだろうか」とまず自問します。むしろ、このように問うべきではないでしょうか。「この捧げものは、本当に代償が伴っているだろうか」と。「霊的生活においては、見返りよりも、代償の大きい方がまきついている」とは、的を射たことばです。

私たちが贖うために、私たちの救い主がどれだけの犠牲を払ってくださったかを考えるとき、主のために支払うべき代価と犠牲を惜しむとすれば、忘恩のそしりを免れないのではないのでしょうか。

「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」

(エペソ人への手紙4章7節)

主が、「何かをせよ」と命じられるときには、どんな場合にも、主が必要な力を私たちに与えてくださることを忘れてはいけません。主が命じられるなら、たとえ、それが不可能の領域にあっても、可能にしてくださいという意味が含まれているのですから。

イテロは、(娘婿の)モーセに言いました。「もしあなたがこのことを行えば、—神があなたに命じられるのですが—あなたはおもてたえることができ、この民もみな、平安のうちに自分のところに帰ることができましょう」(出エジプト18・23)と。

「原則はこうである—神は、ご自身が命じられたあらゆる任務をご自分のしもべが遂行できるように全責任を負ってください」(J・O・サンダース)。

公生涯において、主イエスは、少なくとも二人の、からだが不自由な男に会っておられます(マタイ9・6、ヨハネ5・9)。どちらの場合も、主は、「起きて、床を取り上げて歩きなさい」と彼らに命じておられます。それに従おうと意志を働かせたとき、その無力な手足に力が流れ込んできました。

ペテロは、もし、主イエスが、「水の上を歩いて来なさい」と言つてさえくざされれば、水の上を歩けるのだ、と察知しました。イエスが、「来なさい」と言われるやいなや、ペテロは舟から降り、水の上を歩いたのです。

手が萎えてしまった人が、それを伸ばせるかどうかは疑問です。それでも主が、「伸ばしてみなさい」と命じると、彼はそれに従い、手はもとに戻ったのです。

わずかなパンと魚で五千人を養うという発想は、論外です。しかし、イエスが、「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を用意なさい」と言われると、「不可能」という文字が消滅したのです。

ラザロは、墓の中に四日間横たえられていましたが、「ラザロよ、出てきなさい」と、イエスは呼びかけられました。その命令にはそうするのに必要な力が伴っていたため、ラザロは出て来たのです。

私たちもこの真理を自分に適用するべきです。神が導いておられるのに、自分にはできない、と逃げてはいけません。もし、神が、「何かをせよ」と命じられたのであれば、力も供給してくださいなのです。「神のみこころに導かれる場所であるなら、あなたを支える神の恵みが必ず待っている」ということばは、この点を見事に説明しています。

神が何かを命じられるときには、その命令に伴う費用を、主が支払ってくださいということも、同様に真実です。もし、神の導きが確かであるとの確信があるなら、資金は心配する必要がありません。神が、備えてくださるのです。

紅海とヨルダンの水を分けて、御民を通れるようにしてください。さつた神は、今日も同じです。御民が神のみこころに従うとき、神は今も、不可能を可能にしてくださいのです。神は、何を命じられるにしても、それに必要な恵みを今も備えてくださいます。神は、今もお、みこころのままに、私たちのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです(ピリピ2・13)。

「初めに、神…」

(創世記一章一節)

創世記の最初の二語を、それ以下と分離すると、「初めに神」という全生涯に対する一種の指針となります。

この指針は、十戒の第一にも示唆されています。「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない」(出エジプト20・3)。人間であれ、物であれ、真の生ける神に代わるものがあつてはなりません。

エリヤとやもめの話の中にも、その教えが垣間見えます。やもめには、息子と自分用に最後のパンを作るだけの小麦粉と油しか残っていませんでした(一列王記17・12)。あろうことか、エリヤは、「まず、私のためにそれで小さなパン菓子を作りなさい」と言います。これは、さもしい利己主義のように聞こえるかもしれませんが、そうではありませんでした。エリヤは、神を代表しています。エリヤが言っていたのは、こういうことでした。「とにかく神を第一としなさい。そうすれば、生活に必要なものの供給が途絶えることはない」。

それから何世紀も経つたのち、主イエスも山上で同じことを教えてこう言われました。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」(マタイ6・33)。人生において、何よりも優先すべきは、神の国とその義なのです。

救い主は、ルカの福音書一四章二六節で、ご自身を何よりも優先するべきであると重ねて主張しておられます。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができ

ません」と。キリストは第一位の場所を占めなければならないのです。

しかし、神を第一にする、とはどのようなことでしょうか。私たちには、面倒をみるべき家族があります。その上に、この世の仕事のことも考えなければなりません。そして、私たちの時間と資金をどこまでも求める責務が山のようにあります。

実は、神を愛することによって、私たちは、神を第一にしていることになるのです。ただし、その愛と比べれば、その他のすべての愛が「憎しみ」に思われるほどの愛です。すべての物は、神からの委託品として用い、神の国に関わって利用できるものだけを残します。良いものが、ときには最良のもの、邪魔となるということをお忘れず、永遠に影響する事柄を最優先します。

人間にとつて最も恵まれた状態とは、神と正しい関係にあることです。正しい関係とは、神を第一とする関係のことです。たとえ、神を第一にしたとしても、問題がなくなるわけではありませんが、生きていく上で、充足感や達成感を経験します。しかし、神を第二にしてしまうと、問題ばかりが残り、惨めな生き方が待っているだけなのです。

「それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」

(ヨハネの福音書21章22節)

「あなたは老人になるまで生き、その後で殉教する」と、主イエスがペテロに告げられると、ペテロはヨハネの方に目をやり、「彼の境遇はもつと恵まれたものになるのですか」と、疑問を声にしました。主のお答えは、「それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい」というものでした。

ペテロの態度を見ると、(第二代国連事務総長)ダグ・ハマーシヨルドのことばを思い出さないうけにはいきません。「どんな事情があるにせよ、自分には許されぬのに、他の人にはそれが認められている、という苦々しい思いは、いつ炎となつて燃え上がつてもおかしくない。たとえ、それが鳴りを潜めたとしても、気分が良いのはせいぜい数日間であろう。ところが、これほど情けないみじめな状態にあつても、そこにはまぎれもなくほろ苦い死の味が存在する。なんだ、結局ほかの人はみな、何事もなかつたように生きていかれるのか、と」。

もし、私たちが右の主のみことばを心に留めるなら、クリスチャンの間に存在するどれほど多くの問題が解決することでしょう。

自分たちよりも、他の人たちが繁栄しているのを見るときに、腹の虫が収まらないというのは、よくあることです。主が、あの人たちには新しい家、新しい車、湖畔の別荘を与えてくださるなんて…。

私たちよりも、献身の度合いが少ない(と私たちが思っている)人たちが健康に恵まれているのに、私たちがきたら二、三の慢性の病氣と戦わなければならない…。

あの家族は、子供たちがみな容姿に恵まれ、運動も勉強もトツブクラスなのに、私たちの子どもときたら、平凡極まりない…。私たちには自由にできないことを、他の信者たちが行なっているのを見ると、そのこと自体は罪ではなくても、その気ままたきに腹が立つてくる…。

言うのも残念なことです。クリスチャンの働きの間にも、それなりの職業的妬みが存在します。自分よりも好評を博し、友人の数も多く、世間で注目されている伝道者を見て、へそを曲げる人、あるいは、感心しない方法を用いる同僚を見て、機嫌を損ねる人もいます。

主にふさわしくないこのような態度に対する主のおことは、目の覚めるような力をもつて迫ります。「それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい」。

主が他のクリスチャンをどのようにお取り扱いになるかは、私たちが首を突っ込むべきことではありません。私たちの責任は、主が私たちのために決めておられる道がなんであれ、そこを歩んでいくことなのですから。

「風はその思いのままに吹き、…」

(ヨハネの福音書3章8節)

神の御霊は、最高の主権者であります。思いのままに動かれます。私たちは御霊を特定の鑄型に流し込もうとしますが、うまくいくことはありません。

聖霊が示す型のほとんどは流体、すなわち、風、火、油、水などです。手に握ろうとしても、「わたしを閉じ込めてはいけません」と、いつも言っておられるかのようです。

聖霊が道徳的に間違っていることは決してありませんが、それを除く領域では、例外的で、型にはまらない方法で行動する権限を有しておられます。例えば、神が男性に指導的役割を与えておられるというのは、その通りです。しかし、聖霊がお望みとあれば、デボラのような女性指導者を立てることができないとは言えません。

霊的に衰微している時代には、通常は禁じられているはずの行動を御霊は許されます。それゆえに、ダビデとその部下は、祭司のためにとっておかれたパンを食べることが認められました。そのため、弟子たちも安息日に、麦の穂を摘んだのは問題がないとされたのです。

『使徒の働き』には、はっきりとした予測可能な伝道の定式がある、と人は言います。しかし、私は、聖霊の主権という定式以外は見ることができません。

使徒たちやその他の人々は、教科書に従ったわけではありません。彼らが従ったのは、聖霊の導きであり、それは、常識が教えるものとはかけ離れていることが珍しくなかったのです。

例えば、御霊はピリポを導いて、サマリヤで大きな実を結んでいる信仰覚醒の働きからあえて手をひかせ、ガザへ向かう、

たつた一人のエチオピアの宦官に、証しをするように導いておられます。

現代に関していえば、聖霊に何ができて、何ができないかを決めてしまうことがないように、注意しなければなりません。聖霊は、いかなる罪にも関わることはない、と私たちは知っています。しかし、その点を除けば、聖霊が常識を超えたことをなさるのは間違いありません。聖霊は、特定の手法には限定されません。慣習にも縛られません。聖霊は、形式主義や儀式尊重、霊的沈滞にいつも抵抗し、生気を注ぎ込む新しいいうねりを起こされるのです。ですから、私たちは、聖霊が主権者として働かれることを受け入れる姿勢を持つていなければなりません。傍観者を決め込んで、批判をしているようであってはならないのです。

「ところがアムノンには、ひどい憎しみにかられて、彼女をきらった。その憎しみは、彼がいただいた恋よりもひどかった。」

(サムエル記第二十三章15節)

(ダビデの王子)アムノンは異母妹、タマルに対する情欲の炎を燃やしていました。そして、美しい彼女を自分のものにしようと決意します。自分の欲することが、神の律法によつて禁じられているのは明らかであつたので、アムノンは苛立つていました。しかし、彼女を自分のものにしたという欲望にとりつかれると、もう他のことはどうなつてもいいと思うほどになりました。そこで、彼は病気を装つて彼女を自分の部屋に誘い込み、彼女に乱暴を働きます。一瞬の激情を満すためなら、すべてを犠牲にしてもかまわないと思つたのです。

ところが、その後、欲情は憎しみに変わりました。彼女を自分勝手に利用しつくした後、彼女への侮蔑をあらわにしたのです。初めから会つていなければよかつたと、おそらく願つたことでしょう。そして「彼女を外に追い出せ」と命じ、扉に鍵をしまつたのです。

この歴史の一コマは、毎日再演されています。自由奔放な現代社会では、道徳基準はその大半が顧みられなくなりました。結婚前の性的関係は、あたり前のこととして受け入れられています。結婚という手続きを経ないで、男女が一緒に暮らしています。売春は合法化されています。同性愛は、一つのライフスタイルとして受け入れられるようになりました。

老いも若きも、気に入つた人を見つければ、それで事は決まります。自分を律する高い「法」が存在するとは夢にも思いません。いかなる抑制もかなぐり捨て、自分の欲しいものは何とでも手に入れよう、と心に決めていきます。正しいか、間違つ

ているかと考えることを端から拒み、「それでもしないとまともな生活ができない」と言わんばかりです。そして、アムノンがしたように無謀な行動に走り、目標を達成したと考えるのです。

しかし、事が起こるまではあれほど美しく見えていたのに、事が起きた後では醜悪に見えることがよくあるものです。どれほど頑固に否定しても、罪悪感から逃れることはできません。お互いに対する尊敬が敵意となり、次には、感情が沸騰して口論となり、憎悪に変わります。かつては、自分にとつてなくてはならない人に思えた人が、今や、ぞつとするほど嫌な存在になるのです。そこから暴力、法廷闘争、果ては殺人にまで辿り着くのに、それほど時間はかかりません。

情欲は腐つた土台であり、その上に永続的な人間関係を築くことはできません。人が、純潔という神の法則を無視すれば、自分を損ない、破滅するだけです。神の恵み以外には、赦しと癒し、そして、回復をもたらしてくれるものはないのです。

「兵役についていながら、日常生活のことに巻き込まれている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。」

(テモテへの手紙第二二章4節 英訳)

クリスチャンとは、主に徴募されて、率先して「軍務」に励む者です。日常の出来事に巻き込まれてはいけません。この箇所では、「巻き込まれる」という語が強調されています。確かに、クリスチャンがこの世の務めから完全に分離することは不可能です。家族の必要を満たすために働かなければなりません。日常生活にある程度巻き込まれることは、避けられません。さもなければ、パウロがIコリント五章一〇節で言っているように、この世から出ていかなければならないことになってしまいます。

しかし、わざわざ自分が巻き込まれるような事態を招いてはいけません。優先順位を崩してはならないのです。それ自体は良いことでも、場合によっては、最良のものの敵となる場合があります。

「この世の営みに巻き込まれるとは、どういうことか。それは、この世との分離をあきらめ、この世の表面的な事柄に、名実ともに当事者として関わることを言う」と、ウィリアム・ケリーは言っています。

人間の問題を解決する手段として、世の政治に深く関わっていくなら、それを「巻き込まれた」状態というのです。それは、沈没しつつあるタイトニック号の甲板上で、せつせとデッキチェアを整頓するようなものです。

また、世界の病理の万能薬として、福音よりも社会奉仕を強調すれば、私は巻き込まれているのです。

また、ビジネスしか眼中になく、金儲けのため最高の努力を注いでいけば、私は巻き込まれているのです。そのようにすれば、暮らしはよくなっても、いのちを失うこととなります。

神の国と神の義が、私の生活で第一でなくなつたとき、私は巻き込まれているのです。

トマトやゴボウのミネラル成分の不足、ワイオミング州のカモシカの夏の習性、綿のTシャツに含まれる細菌の量、ポテト・チップスの褐変反応、回転後のハトの目の動きがどうであるか、それも大事なこともありませんが、永遠のいのちに招かれた者が、そうしたことに心を奪われた場合、それを巻き込まれた状態というのです。このような研究は、生活の糧を得る手段としては良いかもしれませんが、人生全体の情熱を注ぐだけの価値はありません。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」

(ローマ人への手紙8章28節)

これは、困難が極まって前へ進めないようなときに、私たちが当惑させずにはおかない聖句の一つです。風が優しく吹いているときには、「主よ、私は信じます」と言うのに何の苦勞もありません。しかし、人生の嵐が起ると、「不信仰な私を助けてください」と私たちは言うものです。

とはいえ、この聖句が本当であることも、私たちは知っています。神は、すべてのことを働かせて益としてくださる―聖書がそう言うから、「そうなのだ」とわかるのです。見ることも理解することもできなかつたとしても、信仰によって、それを適用することができるのです。

それが本当であることは、神がどういう御方かを考えるとわかります。主が、無限の愛、無限の知恵、無限の力の神であるとするなら、私たちに最善をもたらすために主が計画され、働いておられるというのは、必然的な結論です。

それが本当であることは、神を信じる人々の経験からも知ることが出来ます。みことばの日めぐりカレンダー(Choice Cleanings)に、無人島に投げ出された難破船のただ一人の生存者についてのエピソードが紹介されています。彼は、やつこのことで小屋を建て、難破船からできる限りのものを集め、小屋の中に運び込みました。彼は、神に救出を祈り、通過する船に助けてもらおう、と毎日水平線の彼方をじっと眺めていました。ところが、ある日のこと、ぞつとする出来事が起こりました。何と小屋が炎に包まれているのです。すべての所有物は、煙と

なって消えてしまいました。ところが、最悪と思えたことが、実は最善だったのです。「あなたの煙の信号が見えたので来たのだ」と、救助にやって来た船長が言いました。もし、人生を神の手にゆだねているならば、「すべてのことが働いて益となる」ということを覚えていようではありませんか。

確かに、信仰が揺らぐときがあり、重荷に耐えられそうになりときがあります。私たちは切羽詰まって、こう尋ねます。「ここから、万が一にも何か良い結果が生まれるのだろうか」と。しかし、答えがあります。神が働いて生み出してくださる益のことが次節(ローマ8・29)に書かれているのです。それは、「私たちが御子のかたちと同じ姿になる」ためなのです。彫刻家のノミが大理石の「無駄」な部分を削りつつっていくときに、大理石の中から人の姿が現われてきます。それと同様に、人生の痛みによってふさわしくないものが削り取られ、私たちは主の聖なる姿に似せられていくのです。ですから、たとえ、人生の危機に際して何の益も見出すことができなかつたとしても、これだけは覚えておきましょう。それは、キリストの似姿に変えられるためである、と。

「また、信者になったばかりの人であってはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。」

(テモテへの手紙第一3章6節)

長老の資格を列挙するにあたり、使徒パウロは、まだ信仰の年数が浅い人がこの職務に就くことに警告を発しています。監督の職には、霊的成熟と、敬虔な信仰生活を経なければ得られない知恵と健全な判断が必要です。それなのに、何度この原則が破られ続けてきたことでしょうか。成功を取めた若い実業家や政治家、また、専門家が教会の交わりに入ってきた場合、このような人をすぐに取り込んでおかないと、他所へ行ってしまふのではないかと案じ、いきなり指導的な地位につけてしまうのです。「まず審査を受けさせなさい」という、執事に対するパウロの命令に従う方がもつと賢明ではないでしょうか。

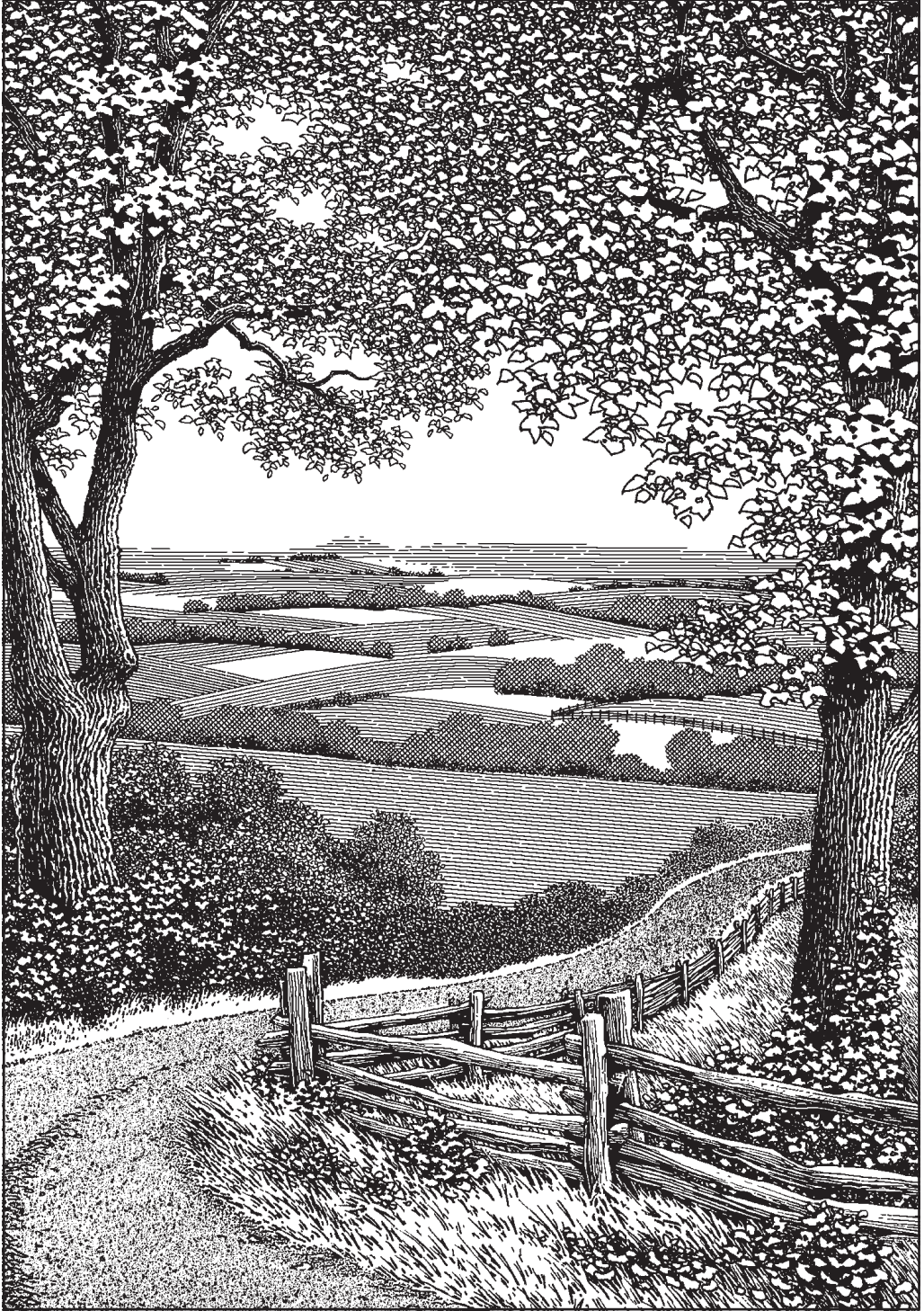
この霊的原則をさらに踏みにじる例が起こるのは、回心したばかりの著名人を、福音主義陣営で宣伝し、美化する時のことです。それは、キリストを信じて救われたばかりという花形フットボール選手かもしれません。宗教をビジネスと心得るプロモーターが契約を交わし、北から南まで(直訳・ダンからベエルシェバまで)ポスターを貼って宣伝に走ります。ハリウッド女優が新生した、といううわさが流れれば、それがトップニュースになります。死刑制度についてどう思うか、婚前交渉についてはどうか、と意見が求められます。回心すれば、あらゆる問題に対する知恵が、あたかもたちどころにもたらされたかのように…。そして、今度は犯罪者が救われると、またとない金儲けのチャンスとばかりに、貪欲な代理人が彼を利用して儲ける、という具合です。

ポール・ヴァン・ゴードー博士は、言います。「私はひざまずいている罪人を立たせて、群衆に披露するようなやり方に賛成したことは一度もない。キリストの御名を傷つける、取り返しのつかない失態が過去に起きたのは、次のような原因がある。それは、まだ神のみことばの種がしっかりと心の中に入り、根を下ろしたかどうかはつきりしていないのに、芸能界やスポーツ界、そして、政界の著名人を世間に見せびらかしたことである」と。

麻薬常習者や政治家が、最近、信仰者の群れに加えられたということになる、おそらく宗教的自負心がくすぐられるクリスチャンがいるのでしょうか。ことによると、そもそも不安感や劣等感に苦しんでいたために、有名人が回心すると、衰えていた自信が回復できるのかもしれない。

しかし、不当に利用される側の著名人は、悪魔の格好の標的になってしまふことが珍しくありません。悪魔の巧妙な罠にはまり、その結果、主イエスに対する証しに、計り知れないそしりを招くのです。

有名であろうと無名であろうと、真正正銘の救いを受けた人すべてのゆえに、私たちは感謝します。しかし、信じて間もない人を、キリスト教信仰の隆盛のためにはこうするのが一番、とばかりに講壇やテレビカメラの前に押し出すとしたら、それは間違いというものです。



「そしてあなたがたは、キリストにあつて、完全なものとされたのです。」

(コロサイ人への手紙2章10節 英訳)

一般的な考え方に反し、天国に入る適性に段階などというものはありません。人は完全に適合しているか、または、まったく適合していないかのどちらかです。神のトーテムポールの最上部には、善良で清い生活をする人々が、最下部には詐欺師や暴力団員が、そして、その中間には天国に入る適性がさまざまの人々がいる、という一般的な概念とはまったく逆です。それは、とんでもない間違いです。私たちは、ふさわしいか、ふさわしくないか、そのどちらかであり、その中間はないのです。

実を言えば、そもそも天国にふさわしいという人は、一人もいません。私たちはみなやましいところのある罪人であり、永遠の刑罰を受けて当然のものであります。私たちはみな罪を犯し、神の栄光に到達できない者になりました。私たちはみな迷い、自分勝手な道に進みました。私たちはみな汚れており、最善の行ないすら不潔なぼろきれのようです。

私たちは、天国に完全にふさわしくないだけでなく、自分をふさわしくするためにできることも何一つありません。私たちの最高の決意や高潔な努力でさえ、罪を除去し、神が要求される義をもたらすために役立つことはありません。しかし、良い知らせがあります。神はその愛のゆえに、神ご自身が要求される義を用意してください、しかも無代価の賜物として用意してくださいなのです。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によつて救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです」(エペソ2・8、9)。

天国にふさわしい者にされるための答えは、キリストにあります。罪人が生まれ変わるのは、いつの場合でもキリストを受け入れたときのことです。神は、もはやその人を罪ある人間として見ることはなさいません。キリストにある者としてご覧になり、それを土台に受け入れてくださるのです。神は、罪を知らないキリストを私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちがキリストにあつて神の義となるためです(II コリント 5・21)。

したがって、結論は次の通りです。私たちはキリストを受け入れているか、受け入れていないか、そのどちらかである。もし、キリストを受け入れているなら、神からご覧になつて、これ以上、天国にふさわしい状態はない。キリストが天国にふさわしい、ということはすなわち私たちもふさわしいということになり、キリストと同じふさわしさがある。なぜなら私たちはキリストの中にいるからである…。

その反対に、キリストを受け入れていないなら、私たちはどうしようもないほど失われた存在である。キリストがともにおられないということは、致命的な欠陥である。この決定的な欠陥を補えるものは他のどこにも存在しない…。

そうすると、他の信者より自分の方が天国にふさわしいという信者は一人もいないことが明らかです。すべての信者が栄光に与かる資格は、みな同じです。その資格とは、キリストのことです。他の信者よりも、自分をもつと多くのキリストを受け入れたという信者はいません。ですから、他の人よりも自分の方が天国にふさわしいという人はいないのです。

「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです。」

(コリント人への手紙第二5章10節)

確かに、天国に入る《ふさわしき》に段階的な違いはないというの、前頁で見た通りですが、天国で受ける《報い》には、段階的な違いがあるというのも事実です。キリストのさばきの座とは、ある人が他の人よりも大きな報いを受ける、審査と報償の場所なのです。

そればかりでなく、天国の栄光を喜び楽しむ「受容力」にも違いが起きることでしょう。誰もが喜びに溢れているとはいえず、ある人は他の人よりも幸福を味わう受容力が大きいことでしょう。杯はどれもみな満杯でしょうが、ある人の杯は他の人のものよりも大きいことでしょう。

栄光の状態に入ったときには、お互いの状態は寸分たがわず同じであるという考えは、捨てなければなりません。聖書のどこを見ても、そのように退屈で区別のない単一性を教えている箇所はありません。むしろ、聖書は、忠実さと献身の生涯に対しては冠が与えられること、そして、報われる人々がいる一方、損失を被る人々もいると教えています。

同じ年齢で同じときに回心した二人の若者がいるとします。一人は出て行って、それから四十年というものの、神の国とその義を最優先する生き方をします。ところが、もう一人の方は、金もうけに生涯の最良の時期を使いました。最初の若者は、主について情熱的に話しましたが、二番目の人は市場の動きが話題の中心でした。最初の人は、今や主を喜び楽しむ受容力が大きく、その優れた能力を天国に持っていきます。二番目の人も、

キリストの御人格と御わざのゆえに、天国に入る適格性には遜色がないものの、霊的には成長がとまったままで、少ないままのその能力を天国に持つていくしかありません。

私たちは日を追うごとに、永遠のホームでやがて受ける報いと、喜び楽しむ度合いを自ら決定しつつあるのです。その決定の要因には、聖書をどれだけ知っているか、また、それに従順であるか、祈りの生活はどうか、神の民との交わりはどうか、主への奉仕はどうか、神がゆだねてくださったすべてのものを忠実に管理しているか、ということが含まれることでしょう。一日過ぎるごとに、永遠をどのように過ごすかが決まりつつあるのだと気づいたなら、直ちに私たちの下す選択、設定する優先順位にそれが如実に反映されるべきであることは言うまでもありません。

「心の中で考えることが、その人そのものである」

(箴言23章7節 英訳)

A・P・ギブスは、よく次のように言いました。「あなたは、自分が思っているような人ではない。あなたが考えること、それがあなた自身である」と。これは、思考を源泉として、そこから行動が外に流れ出ることを意味しています。もし、源泉を支配できれば、そこからの流れも支配できるのです。

したがって、毎日の思考を支配することが基本です。ソロモンが、次のように言ったのもそれが理由です。「力の限り、見張つて、あなたの心を見守れ」(箴言4・29)。ここで、心というのは、思考と同義語と考えてよいでしょう。

ヤコブは、罪は心の中で始まるものであると指摘しています(ヤコブ1・13・15)。私たちが、あることについてずっと考えていけば、いつかやがてそれが行動となることでしょう。

考えを蒔けば、行為を刈り取る

行為を蒔けば、習慣を刈り取る

習慣を蒔けば、性格を刈り取る

性格を蒔けば、運命を刈り取る

主イエスは、憎しみとは殺人に等しい(マタイ5・21、22)、また、情欲を抱いた視線は姦淫に等しいと言われ(マタイ5・28)、毎日の思考の大切さを強調しておられます。また、食べ物によつて人が汚れることはない、人を汚すのは、その人が心の中で考えることであるとも教えられました(マルコ7・14・23)。

私たちは、自分が考えることに対して責任があります。なぜなら、それを支配する力があるからです。私たちは、淫らなこ

とやいががわしいことについて考えることができると同時に、清く、キリストにふさわしいことについて考えることもできます。毎日の思考こそは、いわば、私たちが支配する帝国です。この帝国には、善を行う途方もない可能性と共に、悪を行うとてつもない可能性が備わっています。そのどちらになるか、鍵を握っているのは、私たち自身なのです。

私たちにできる積極的な提案をいくつかご紹介しましょう。最初に、問題をあますところなく、祈りによつて主のもとに持つていき、こう言うのです。「神よ。私に清い心を造り、ゆるがないう霊を私のうちに新しくしてください」(詩篇51・10)と。第二に、キリストの御前に行くときに、それがどう映るだろうかと考えて、あらゆる思いを評価してみることで(Ⅱコリント10・5)。第三に、悪い思いは直ちに告白して、それを追い出すことです(箴言28・13)。第四に、頭が空白で空っぽの状態にならないようにすることです。前向き、また、有意義なことで頭をいっぱいにするのです(ピリピ4・8)。第五に、自分が読むもの、見るもの、聞くものに自制心を働かせることです。きたないものや汚れたものを心に取り込みながら、清いことを考える生活はできません。最後に、主の働きに勤しむことです。心がどつちつかずの状態になったときこそ、卑しい思いが入り込んでくるからです。

「信仰によって、私たちは…悟るのです。」

(ヘブル人への手紙11章3節)

「信仰によって、私たちは…悟るのです」。この言葉は、霊的生活の最も基本的な原理の一つを具体的に述べています。まず、神のみことばを信じ、それから悟るのです。この世は言います。

「見ることができれば信じることができる(百聞は一見にしかず)」。しかし、神は言われます。「信じることができれば見ることができぬ」。主イエスは、マルタに言われました。「もしあなたが信じるなら、あなたは…見る、とわたしは言ったではありませんか(ヨハネ11・40)。後に、主は、トマスに言っておられます。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです」(ヨハネ20・29)。そして、使徒ヨハネは書いています。「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、…あなたがたによくわからせるためです」(1ヨハネ5・13)。まず、信じることです。そうすれば、悟ることができぬのです。

ビリー・グラハムは、この原則が自分の人生でどのように現実になったかを語っています。「一九四九年のことだった。私は、聖書について覚えきれないほどの疑問を持っていた。見たところ、聖書には矛盾があるように思えたのである。私が持つ神の概念には限りがありながらも、それでも調和させることのできない事柄がいくつもあった。立ち上がって、説教をしようとしても、過去に登場した偉大な説教者がおしなべて持つ際立った特徴としての権威と風格が、そもそも私には欠けていた。何百という他の神学生と同様、私はいのちがけの知的戦いを行っていたのである。その結果次第では、将来の伝道活動が大きく左右される可能性があった」。

「その年の八月、私は、ロサンゼルス郊外の山の中にある長老派の大会会場、フォーレスト・ホームに招かれた。山道を歩き、林の中に重い足取りで分け入った私は、神と格闘しているような気持ちであった。私は疑念と決闘し、たましいは十字砲火にさらされたように思えた。ついに、私は捨て身になり、自分の意志を聖書に啓示された生ける神にゆだねたのである。聖書を開いて、その前にひざまずき、私はこう祈った。『主よ、聖書に書いてある多くの事柄が、私には理解できません。しかし、あなたは言われました。「義人は信仰によって生きる」と。あなたからいただいたすべてのものを、信仰によって受け取ります。今、ここで、信仰により、聖書をあなたのみことばとして受け入れます。そのすべてを受け入れます。一切条件をつけずに受け入れます。理解できないことがある場合には、もつと多くの光が与えられるまで判断を保留します。もし、あなたがそれによしとされるのであれば、あなたのみことばを宣言するときに、私に権威を与えてください。そして、その権威によって、人が罪を悟り、罪人が救い主に立ち返るようになしてください』」。

「六週間が経たないうちに、今は過去の出来事となったロサンゼルス・クルセードを私たちは開始した。そのクルセードの最中、伝道活動を変え秘訣を私は発見した。私は、聖書が真理であることを証明しようとするのを止めた。聖書が真理であるということは、私の心の中でもう決着がついていたので、その信仰が聴衆に伝わったのである」。

「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださいように、互いに赦し合いなさい。」

(エペソ人への手紙4章32節)

聖書がいう赦しには、従うべき明確な命令が伴っています。この命令に従いさえすれば、多くの頭痛と心痛を経験しなくて済むことでしょう。

不当な扱いを受けたときに、最初にすべきことは、その人を心の中で赦すことです。「あなたを赦しました」と、相手に告げるわけではありません。しかし、心の中で相手を赦すことによつて、問題は相手と主との間に置かれることとなります。こうすれば、胃液が硫酸に変わることもなく、他の恐るべき身体的、情緒的疾患を経験しないで済みます。

次に、その《兄弟》の所に行き、戒めるのです(ルカ17・3)。自分がどれほど不当な扱いを受けたか、他の人にまくしたてるのではなく、「もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい」(マタイ18・15)のみことばを実行するのです。できるだけ問題が外に出ないように、つまり、できるだけプライバシーを保つことに気を配りましょう。

もし、相手が告白もせず、赦しを求めるともしないのであれば、一人、または、二人の証人を連れて行くことです(マタイ18・16)。こうすることによつて、過失を犯した人の態度について、十分聖書に基づいた証言が得られることとなります。

それでもなお相手が折れないならば、証人を伴って、その問題を集会に持つていくことです。もし、集会の裁定に従うこと

を拒否するなら、もちろん、除名されることとなります(マタイ18・17)。

しかし、この過程のどこかで、相手が悔い改めたならば、そのときは、赦すことです(ルカ17・3)。あなたは、すでに心の中で赦しているのですが、今度は、赦しを与えるのです。ここで重要なのは、問題をうやむやにしないことです。「ああ、大丈夫。あなたが間違ったことをしたわけでは全然ないから」などと、決して言つてはなりません。むしろ、次のように言うことです。「私は心から喜んであなたを赦します。これで問題は片づきました。一緒にひざまずいて祈りましょう」と。

告白し、悔い改めなければならなかったという不名誉な経験が抑止力として働き、あなたに不当な仕打ちをすることはもうないかもしれません。しかし、仮に、また同じ罪を犯しても、悔い改めるのであれば、赦さなければなりません。たとえ、一日に七回罪を犯しても、七回悔い改めるなら、赦さなければなりません。相手が心からそうしているように思っても、または、そうでないように思っても、それに関わらず…(ルカ17・4)。

比喩的に言えば、私たちは何億円も赦免されたということを忘れてはなりません。たかだか数百円程度にしかならない相手の過ちを赦すかどうか、ためらつてはならないのです(マタイ18・23・35)。

「だれでも神のみこころを行なおうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかわかります。」

(ヨハネの福音書7章17節)

TEV (Today's English Version) という英訳によると、この聖句の前半はこうなっています。「だれであれ、神が望むことを行いたいと願う人なら、知るようになる」と。心から知りたいと願うなら、神はその人に教えてくださるといえるのは、素晴らしい約束です。

罪人が自分ではどうしようもなくなつたとき、また、絶望の極みに達して、「ああ、神よ。ご自身を私に現したまえ」と祈るとき、神は、常にご自身を現してくださいます。それは、必ず答えが来る祈りなのです。

米国南西部の洞窟に住んでいた一人のヒッピーは、自らのいのちを断とうとしていました。彼は、酒、麻薬、セックス、オカルトに満足を求めてきましたが、生活は相変わらず空虚そのものでした。自分の惨めな状態から抜け出す出口も見つかりませんでした。ある日のこと、洞窟の中で、彼はからだを丸く縮こませて叫びました。「ああ、神様。―そもそも神がもしいるなら―、ご自分を私に現してください。さもなければ、私は自分のいのちを断ちます。」

それから十分も経たないうちに、一人の若いクリスチャンが、「たまたま」そこを通りかかり、洞窟の入り口に頭を突っ込み、隠遁者風のヒッピーを見て言いました。「こんにちは！ あなたにイエス様のことについて話してもいいでしょうか。」

その後、どうなったかわかりでしょう。そのヒッピーは、主イエス・キリストに信仰を持てば救われる、という良き訪れに

耳を傾けたのです。彼は、救い主のもとに行き、赦され、受け入れられ、新しいいのちが与えられたことを知ったのです。彼は、絶望の淵から祈りました。神はその祈りを聞き、応えてくださいました。「自分もこのように祈ったが、主の特別な啓示がたましいに臨むことはなかった」という話は、今まで一度たりとも聞いたことはありません。

もちろん、この約束はクリスチャンにもあてはまります。もし、自分の人生に対する、神のみこころが何かを心から知りたいたいと望むならば、神は、それを示してくださいます。教会の交わりにおけるべき歩み方を知りたいと思えば、神はそれも知らせてくださるでしょう。どのような必要であろうと、もし、神のみこころを何よりも重んじるならば、神は必ずそれに応えてくださる方です。私たちが神の御思いを本当に知ることができないとすれば、それは、私たちの側の切実さが欠けているからではないでしょうか。

「私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エバフ口デトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です。」

(ピリピ人への手紙4章18節)

パウロが書いたピリピ人への手紙とは、実際には、ピリピの信者たちから受取った贈り物に対する礼状でした。おそらく、それは献金であったと想像して間違いないでしょう。驚かされるのは、使徒パウロがその贈り物を大きく取り上げ、「香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物」と呼んでいる点です。エペソ人への手紙の五章二節では、同様の表現を使って、パウロは、キリストがカルバリでご自身を捧げられたことを描写し、「神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおり」と言っています。主のしもべの一人に対する贈り物が、言語に絶する偉大な贈り物、すなわち、キリストの犠牲と同じ言葉遣いで表現されると思うと、息をのむほかありません。

J・H・ジョウエットは、この点に関して見事な注釈を施しています。「そうであるとすれば、ごく一部で行われたように見えた親切は、いかに広大なものであることだろうか。困窮者を助けているだけ、と思っていたのに、実は、王と語らいをしていたのである。芳香は狭い居住空間から外に出ることはあるまいと想像していたのに、何とそのかぐわしい香りは、宇宙全体に漂っていたのである。パウロの必要にに応じていたにすぎないと思っていたのに、実は、パウロの救い主にして主である御方に仕えていたと知るのである」。

クリスチャンによる献金の真の霊的特性と、それが及ぼす影響の広さが分かると、私たちはしぶしぶ捧げるとか、やむなく

捧げるといふ問題から解放されます。なだめたりすかしたり、あるいは、哀れみや笑いを誘って資金集めをする、その道のプロの手口に、金輪際関わらないで済みます。献金とは、法的な規定などではなく、祭司としての奉仕の一形態であることが分かります。愛するゆえに捧げるのであり、捧げることを愛するのです。

大いなる神に対する私のごく些細な贈り物によつてすら、宇宙にある玉座の間が芳香で満ちるといふ事実は、謙遜な礼拝、喜ばしい献金へといよいよ私たちを駆り立てずにはおきません。日曜日の午前の献金の時間が、退屈で、やむなく礼拝に組み込まれている部分である、とはもう二度と思わなくなることでしよう。それは、あたかも主イエスが肉体をもつてそこに臨在されるかのように、真の意味で、主イエスに直接捧げるための手段となることでしょう。

「神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいるるな考えやはかりごとを判別することができます。」

(ヘブル人への手紙4章12節)

あるクリスチャンの大学生が、自由主義に立つ神学校の学生に証しをしていました。クリスチャンの学生がある聖句を引用すると、神学生は言いました。「私は、聖書を信じていない」と。クリスチャンが別の聖句を引用すると、「言っただろ。私は聖書を信じていないって」という返事が返ってくるだけでした。三回目に聖句を引用したとき、神学生は苛立ち、感情を爆発させました。「いいか。私に対して聖書を引用するのはやめてくれ。聖書は信じていないとそう言つたはずだ」と。事ここに至つて、クリスチャンの学生は完全に勢いをそがれ、敗北感に打ちのめされました。「自分は伝道に全く向いていない」と思うほかありませんでした。

ところが、たまたまH・A・アイアンサイド博士が、その晩、彼の家にゲストとして来ていました。夕食の席で、このクリスチャンの学生は、神学生との間に起きた失意の経験を打ち明けました。そして、アイアンサイド博士に訊ねました。「誰かに証ししようとして、相手が『わたしは聖書を信じていない』と答えたら、博士はどうなさいますか」と。アイアンサイド博士は、楽しそうな微笑みを浮かべて、こう答えました。「私なら聖書からもっと多く引用するだけです」。

これは、たましいを主のもとに導きたいと願う者にとつて、実に優れた助言です。聖書を信じてはいない、と人々が言う場合には、聖書をさらに多く引用すればよいのです。「神のことは生きていて、力があります。たとえ、信じていなくても、神のみことばは効果をもたらすのです」。

二人が決闘しているとします。一人が相手に言います。「お前の剣が本当に鋼はがねでできているとは信じない」と。いったい、どうなるでしょう。相手の男は、剣を地面に置いて敗北を認めるでしょうか。

それとも、金属の炭素含有量と可鍛性(※打ち延ばしの程度)について、科学の講義をはじめましょうか。そんな馬鹿げたことはしません。彼は敵に鋭い突きをし、その剣が確かに本物であることを思い知らせるのです。聖書の場合も同じです。神のことは、御霊の剣です。聖書を攻撃から守るより、むしろ、聖書を用いることが必要です。聖書自身に、自分を十分に守る力があるからです。

聖書が靈感を受けた書物であることを示す証拠が必要であることを、私は否定しません。そのような証拠は、すでに救われた人の信仰を確固たるものにする、という目的のためには大変重要です。まれに、そのような証拠によつて救いの信仰に至る人もいることでしょう。しかし、一般的に言つて、人は人間の論理的説得や議論によつて納得などしないものです。「自分の意志に逆らつて納得させられた人の意見は、元のままである」と言われますが、その通りです。人は、神の力あるみことばと対決する必要があるのです。一つの聖句は、千の議論にもまさります。

これは、聖句暗唱がいかに大切であるかを思い知らせるものでもあります。もし、私が聖句を覚えていなければ、御霊といえども適切なときに、それを思い出させることはできません。しかし、大事なのは、私の言つた言葉ならともかく、みことばの権威を地に落とすことはなさない、と神が約束しておられる点です。ですから、まだ救われていない人と関わる際には、御霊の剣を存分に用い、その後、恵みの奇跡によつて、罪の自覚と回心が起こるのを見届けなければなりません。

「彼は、小羊のようにほふり場に引かれて行った。」

(イザヤ書53章7節 英訳)

私は、小羊が死ぬのを見たことがあります。それは、心が張り裂けるような、無残な光景でした。

処理場に連れて来られたときの小羊は、一段と愛らしいものです。子どもなら、思わず抱きしめたくなるでしょう。どのような種類であれ、動物の子どもは可愛いものです。子猫、子犬、ひよこ、子牛、子馬……。しかし、その中でも小羊のかわいさは群を抜いています。

小羊の立っている姿は、無垢そのものです。しみ一つない純白の羊毛は、清純さを絵にしたようです。小羊は優しく、また、おとなしいのですが、同時に無力で、自分を防御することができません。その目は、特に表情に富んでいます。それを見ていると、恐れ、悲しみ、痛々しさが伝わってきます。こんなにもいとけなく美しい生き物が死ななければならぬ理由は、何一つ見当たらないように思われました。

今や、脚を縛られた哀れな小羊は、あたかも死が差し迫っていることに気づいたかのように、からだを横たえ、息使いが荒くなっています。たつた一回の無駄のない動きで、屠殺人は喉元をナイフでさつと切りました。血が噴き出し、地面に流れ落ちました。小羊の小さなからだは死の苦痛で痙攣けいれんしました。そして、それからまもなく、静かに横たわりました。あの優しい小羊は死んでしまったのです。

見物人の何人かは顔をそむけました。悲しくて正視することができなかつたのです。また、涙を拭いている人もいました。誰もが押し黙ったままでした。

信仰によつて、私はこれとは別の「小羊」が死にゆく姿を見ます。それは、神の小羊です。それは、最も祝福に満ちながら、もつとも恐るべき光景でもあります。

この小羊は、そのすべてが慕わしく、万人より優れ、あらゆる人の中で最も美しい方です。しかも、処刑場に引かれて行ったのは、人生の絶頂期でした。

「小羊」なる主は、罪なき御方であつたばかりではなく、聖にして、危害を及ぼすことなく、汚れを知らず、罪人から離れ、しみも傷もない御方です。これほど清い方が殺されなければならない理由は、どこにも見当たりません。

しかし、死刑執行人たちは主を捕らえ、その両手と両足を十字架に釘づけました。その十字架において、主は罪人の身代わりとして、責苦を集中的に受け、地獄の恐怖を味わってくださったのです。しかも、その間ずっと、主の目に溢れていたのは愛であり、赦しでした。

今や、主の苦難のときは、終わりました。主は、ご自分の霊を解き放ち、十字架にかけられたそのからだはぐったりしました。兵士の一人が主の脇腹を突くと、血と水が噴出しました。神の小羊は死んだのです。

私の心は満ち足りています。熱い涙がとめどなく流れます。私は膝をかがめ、主に感謝し、賛美するほかありません。なぜならば、主がこの私のために死んでくださったからです。私は、主を愛することを決してやめはしません。

「だれからも教えを受ける必要がありません。」

(ヨハネの手紙第一 2章27節)

一見したところ、この聖句は問題を含んでいません。教える人が必要でないのであれば、なぜ復活の主は、わざわざ教師を立て、聖徒たちを整えて奉仕のわざをさせようとなさるのでしょうか(エペソ4・11・12)。

ヨハネが言おうとしていることを理解するためには、手紙の背景を知ることが助けになります。この手紙が書かれていた頃、教会は、グノーシス主義者として知られる偽の教師に悩まされてきました。この異端者たちも、かつては、主イエスを心から信じていると公言し、それぞれの教会の交わりに連なっていました。その後、教会を去った彼らは、キリストの人性と神性に関する偽りの見解を推進し始めたのです。

彼らは、自分たちが優れた知識を持つていると公言しました。そこから、グノーシス主義者という名前がついたのですが、そのもとは、ギリシャ語の「知る」と言う単語、グノーシスに由来しています。彼らは、クリスチャンにおそらく次のようなことを言ったでしょう。「あなた方は良いものを持つているが、私たちはそれにつけ加えるべき真理を持つている。単純な教えを超えた、新しいもつと深い奥義をあなたがたに紹介することができる。もし、十分な成長を遂げて満足を得たいのであれば、我々の教えが必要だ」と。

しかし、ヨハネは、それがすべてまがい物である、とクリスチャンに警告しています。「そのようなペテン師に教えてもらう必要はどこにもない。あなたがたには、真理のみことばがあるではないか。そして、神に立てられた教師もいる。聖霊によって、真理と誤りを見分けることができる。このキリスト信仰は、

聖徒にひとたび伝えられ、足りないものは何もない(ユダ3)。
ゆえに、そこに何かをつけ加えようとするなら、それは欺瞞(ぎまん)である。クリスチャンの教師は、聖書を説明し、適用するために必要な存在であるが、聖書の教えるところを決して逸脱(いだつ)してはならない」と。

ヨハネほど、教会における教師の必要を切実に感じていた人はいなかったことでしょう。ヨハネ自身、並ぶもののない優れた教師でした。しかし、ヨハネなら、聖霊が最高の権威であること、そして、聖なる書物に書かれたみことばを通して、聖霊が御民をすべての真理に導く、と真つ先に主張することでしょう。すべての教えは、まず、聖書という試金石で試されなければなりません。聖書につけ加えるべき教えがあると公言したり、あるいは、聖書に並ぶ権威があると主張したり、または、聖書と一致しないのであれば、そのような教えは断固拒絶しなければなりません。

「そこで、祭司長たちは民の長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、こう言った。『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った』と言ったのだ。」

(マタイ福音書28章12-13節)

主イエスが死者の中からよみがえるやいなや、主の敵たちは、復活という奇跡が実は起きてなどいない、とうまく言い抜けるためのアリバイ工作をはじめました。そのときに、もつとも巧みなでつちあげと思われたのは、夜、弟子たちが来て、死体を盗んだというものでした(イエスが本当は死んでおらず、気絶しただけであるという「気絶説」は、その後数世紀を経て、初めて現れたものです)。残念ながら、盗難説は、他のすべての仮説同様、問題を解決するというより、問題を一層複雑にしています。例を挙げてみましょう。

そもそもなぜ、祭司長や民の長老たちは、墓が空になっているという報告を聞いて疑問を持たなかったのでしょうか。実は、墓が空であるということを実事として受け入れていたので、慌てて「説明」をくつつけたのです。

なぜ、監視の任務にあたっていた兵士が眠っていたのでしょうか。執務中に眠った場合、ローマの刑罰は死刑です。ところが、彼らは、なぜかその刑罰を免除されています。

どうやって兵士が全員、同じ時間に眠りこけてしまったたいうのでしょうか。全員がいのちをかけて、睡眠時間を確保したというのは、容易に信じられることではありません。そもそもどうやって、弟子たちは、見張りの兵士が目を覚まさないように、墓石を動かすことができたのでしょうか。墓石は大きなもので、動かせば必ず音が出てしまうというのに……。第一、弟子

たちに墓石を動かすことが可能だったのでしょうか。ヘロデ時代の典型的な墓の場合、その様式は、(円形の)墓石が転がされて、一段低い溝にはまるように作られていました。こうした墓の場合、開けるよりも密封する方が容易でした。そればかりではなく、ローマ当局によって、墓はこれ以上ないほど厳重な作りにされていたのです。

つい先頃、いのち惜しさに、怖くて逃げ出した弟子たちが、墓の中のものを手に入れるために、(武装した)ローマの番兵との対決もいとわれないほど勇敢になれるものでしょうか。そのような違法行為をすれば、厳しい判決が下されて罰せられる、ということとは、彼らでもわかつていたに違いありません。

兵士が全員眠っていたとするなら、兵士はどうやって、弟子たちが死体を盗んでいったとわかつたのでしょうか。仮に、弟子たちが死体を盗んだとした場合、なぜ、わざわざ手間ひまかけて遺体に捲かれた布を取り、頭の麻布を取り外したのでしょうか(ルカ24・12、ヨハネ20・6・7)。そもそも、なぜ、弟子たちが遺体を盗みたいと思ったのでしょうか。

理由などまったくなかったのです。実際、主がよみがえられたと知った弟子たちの反応は、驚き、信じられない、というものでした。

最後になりますが、面目を重んじる弟子たちが、嘘であるとかわかっていながら、いのちの危険を冒してまで、わざわざ人前に出て、復活を宣べ伝えたのでしょうか。ポール・リトルは、こう言っています。「人間は、自分が嘘であると知っていることのために死ぬことはない」と。弟子たちは、イエスがよみがえったことを心から信じたのです。主はよみがえられました！主は確かに復活されたのです！

「ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。」

(ルカの福音書16章11節)

ここでいう不正の富とは、地上の富や物質的財産のことです。物質的財産を多く所有する人のことを富裕者という——、これ以上広く行き渡っている幻想はありません。家や土地のことを不動産(※英語では「真の財産」と言いますが、それは、不動産こそが真の富であると考えているからです。株や債券のことを有価証券(※英語では「安全、安心」というのは、それさえ持つていれば安心だと考えるからです)。

しかし、主は、不正の富とまことの富とを区別しておられません(ルカ16・11参照)。人間が富と考えているものは、実は、富でもなんでもありません。

ジョンは、富裕な貴族の資産管理人として仕事をする敬虔なクリスチャンでした。ある晩、ジョンは生々しい夢を見、こう告げられました。「この盆地に住む人々の中で最も富んでいる人が、明日の夜中の十二時に死ぬことになる」と。ジョンは、翌朝、自分の雇い主に会ったとき、その夢のことを打ち明けました。はじめのうち、その大富豪は、完全な無関心を装っていました。健康は申し分なかったからです。それに、夢などはともと信じるタイプでもありませんでした。ところが、ジョンが帰宅してしまおうと、彼は専属の運転手を呼び、車で医師のところに出かけました。「徹底的に健康診断をしてください」と医師に頼みました。予想通り、検査の結果、健康状態は申し分ありませんでした。ところが、それでもジョンの夢のことが気がかりだったので、こう言いました。「ところで、先生、今晚、私

の家に夕食においてになりませんか」と言いました。医師は同意しました。

夕食はごく普通に進み、二人はいろいろな話題について語りました。何度か、医師は帰ろうと席を立ちかけましたが、その度に、招いた主人は、「もう少しいかがですか」と引き留め、結局、長居することになりました。ついに、時計が十二時を打ちました。すると、神を信じないこの男は、非常に安堵して、医師と別れの挨拶をしたのでした。それから数分して玄関のベルが鳴りました。彼がドアを開けてみると、管理人ジョンの娘が立っており、こう言うではありませんか。「父が心臓発作を起こし、今しがた亡くなりました。母がそれをお知らせするようにと申しますので参りました」。

死んだのは、確かに盆地に住む「最も富んだ人」だったので

「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何を
するにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」

(コリント人への手紙第一10章31節)

クリスチャンのふるまいを判定する重要な試金石の一つは、
それを通して神に栄光が帰されるか、という問いです。自分の
行動を判定する場合に、「そこに弊害はないか」と問うことは少
なくありませんが、それは、問うべき質問とはいえません。私
たちが問わなければならないのは、「それを通して、神は栄光を
お受けになるだろうか」ということなのです。

何かの行動にとりかかる前には、頭を垂れ、これからしよ
うとすることを通して、主が栄光を受けてくださいますよ
うに、と願えるようであればいいけません。もし、それによつて
神がほめたえられることがないとすれば、そこから手を引か
なければなりません。

弊害がなければ、他の宗教の場合、行動に文句をつけないか
もしれません。しかし、キリスト信仰の場合は、消極的な姿勢
で留まることはなく、あくまで積極的であろうとします。した
がつて、キース・L・ブルックスが言う通り、「もし、クリス
チャンとして実を結びたいならば、ものごとくに弊害があるか
いかなく、真に良いものを探そうと努めること。もし、幸福
な人生を送りたいならば、弊害があるかどうかを問う人々では
なく、真に良いものを求める人々と行動を共にすること」です。

それ自体は無害であっても、クリスチャンのレースにおいて
は、重荷となるかもしれません。オリンピックの千五百メート
ル・レースで、ジャガイモの入った袋をかきいで走つても違反
にはなりません。レースに勝つことはできません。クリスチャ

ンの場合も同様です。無害であるかもしれませんが、障害にな
るかもしれないのです。

しかし、「弊害はないか」と問うこと自体、密かに疑いを持つ
ていることを示してはいないでしょうか。一見して何の問題も
ないふるまい、例えば、祈り、聖書研究、礼拝、証し、日々の
仕事について、そのような質問はしないものです。

ちなみに、恥じる必要のない仕事ならんでも、神の栄光と
変えることができます。主婦の中で、台所の流しの上にこのよ
うな標語を掲げている人がいるのも、そのためです。「ここは一
日に三回、礼拝がおこなわれる場所なり」。

疑いが生じるときはいつでも、ジョン・ウエスレーの母の助
言を手本にしてはどうでしょう。「神に許されている楽しみ
か、そうでないかをはっきりさせたいと思うなら、以下の規
則を適用してみる。理性を弱めるもの、良心の敏感さを損
なうもの、神を知る感覚を鈍くするもの、霊的な味わいを取り
去るもの、肉体が権威を持ち、心を従わせるもの…それこそは
罪」。

「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。」

(マタイの福音書20章26、27節)

真の偉大さとは、なんでしょうか。

この世の「王国」において、偉大な人物とは、富と権力の地位に上りつめた人のことを言います。そのような人には、命令に従う側近や補佐役がいつてまわります。V・I・Pとして、行く先々で、特別な待遇を受けます。その地位のゆえに、人々は尊敬と畏敬の念を表します。つまらないことは自分でやらなくても、他の人が必ずやつてくれます。

ところが、主の王国においては、様相ががらりと変わります。偉大さを測るものさしは、私たちがどこまで人に仕えてもらうかではなく、むしろ、私たちがどこまで人に仕えるかによって決まります。偉大な人とは、しもべとなつて他の人に身をかがめる人のことです。どのような奉仕であれ、つまらないからやらなくてよいというものはありません。特別な待遇や、感謝を期待してはいません。(後にアメリカ初代大統領となる)ジョージ・ワシントンが、本来、階級の低い者が行う仕事をしているときのことでした。それを見た部下の一人がこれに抗議し、こう言いました。「將軍閣下。あなたの方がそのようなことをしてはなりません」と。ワシントンは答えました。「いや、そんなことはない。私にちょうどぴつたりだ」と。

ロイ・ヘッションは、ルカ一七章一〇節を注釈し、次のように指摘しています。

奴隷には五つの特徴がある。

- (1) 自分に対する配慮をまったくしないばかりか、仕事を途中で追加されても文句を言わない。
- (2) 仕事の取り組みに対し、感謝されなくても文句を言わない。
- (3) 仕事をすべてをやり終えても、主人を自分勝手であると言つて責めない。
- (4) 自分は、役に立たないしもべであると告白するようであればならない。
- (5) 柔和かつ謙遜に務めをなし、果たした後も、「役割以上のことをしたわけではありません」と認めるものでなければならぬ。

栄光の頂点を後にして、この地上に人となられたとき、主は仕える者の姿をとられました(ピリピ2・7)。主は私たちの間で、給仕する者のようになられました(ルカ22・27)。主は言われました。「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえつて仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためです」(マタイ20・28)と。主はみずから、奴隷が前掛けとして使う手ぬぐいを腰にまき、弟子たちの足を洗つてくださいました(ヨハネ13・1・17)。「しもべはその主人にまさらず」(ヨハネ13・16)とあります。主が、それほどにまでご自身を低くして、私たちに仕えてくださったというのに、他の人に仕えることは自分の沽券カクセンに関わるなどと考えるのは、もつての外です。

救い主なるあなたが

これほど柔和で謙へりくだられたなら

弱く、罪にまみれ、汚れた、虫にも等しき私が

どうして顔を高く上げることができましょう

「愛をもつて互いに仕えなさい。」

(ガラテヤ人への手紙5章13節)

ある人がこう言いました。「自我は自分が素晴らしい、と思うので人に仕えてもらう。ところが愛は人に仕えるので素晴らしいのだ。」

ある人気のゴスペル歌手が、たまたまレストランで隣に座っていたフレッドという人に証しをし、キリストに導くという喜びに与かりました。それから数週間というもの、彼は回心したばかりのフレッドに弟子訓練をしました。ところが、フレッドは、手術不可能な癌にかかっており、やむなく病後療養所に入院することになりました。ところが、残念なことに、ここでの看護は実にお粗末なものでした。ラジオで名声を博していたこのゴスペル歌手は、欠かさずお見舞いに行き、ベッドのシーツ交換を行い、入浴させ、そして、(使徒パウロがその愛弟子) テモテを扱うかのように食事の世話をし、その他、本来ならば職員がするべき多くのことを代わりにしたのでした。フレッドが召される夜、この有名な歌手は彼を腕に抱き、慰めに満ちた聖句をいくつもその耳元にささやいていました。：「愛をもつて互いに仕えなさい」。

聖書学校で教えていたある高齢の講師は、朝の混雑する時間帯の後になると、男子用トイレの床が水浸しであることに気づきました。彼は丹念に、備え付けの掃除器具のごみを取り除いてから、ひざまずいて床を拭くのでした。最良の授業とは、必ずしも教室で行なわれるわけではありません。学生たちは、自分たちがトイレを使つた後、尊敬する教師が掃除をしていたと

いう模範を見て恥じ入り、やがて向上心を持つようになりました。：「愛をもつて互いに仕えなさい」。

この同じ聖書学校で、真実のしもべの心を持つ学生が、バスケットボール・チームのメンバーとなりました。試合が終わると、選手の誰もが、われ先にシャワー室に駆け降りて行つても、彼は体育館に残り、翌日のための整頓がなされているかどうかを確認するのが常でした。彼にとつては、他の人が自分中心であったことがかえって、すべての人のしもべとなられた主に倣うまたとない機会となつたのです。：「愛をもつて互いに仕えなさい」。

トルコの田舎からクリスチャンの母親がロンドンに連れて来られました。病気で苦しむ息子に腎臓を提供するためでした。腎臓を一つ上げてしまうということは、自分が死ぬことだと彼女は思い込んでいました。英国人の医師が、「息子さんに本当にあなたの腎臓を一つあげてもいいのですね」と確認すると、彼女は答えました。「二つでもかまいません」と。：「愛をもつて互いに仕えなさい」。

ほとんどの人が自分にとつて何が得か、と考えて行動する世界においては、無私の道、犠牲を伴う奉仕の道を歩む人はまばらです。しかしそれは、思つてもみなかつた方法で人に仕える機会が毎日、いたるところにある、ということでもあるのです。

「…よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、…」

(コリント人の手紙第二6章9節)

聖書は逆説、つまり、私たちが通常思うことと正反対に思える真理や、相互に矛盾していると思える真理で溢れています。G・K・チェスタートンは、「逆説とは、注意を引くために逆立ちしている真理のことをいう」と、常々言っていました。以下、私たちの注意を引こうとしている逆説をいくつか挙げてみましょう。

私たちはいのちを失うことによつていのちを救い、いのちを愛することによつていのちを失う(マルコ8・35)。

私たちは弱いときに強く(IIコリント12・10)、自分では何をする力もない(ヨハネ15・5)。

私たちはキリストの奴隷となるときに完全な自由を経験し、キリストのくびきを振りほどけば、束縛に陥る(ローマ6・17・20)。

持っているものを分け合う方が、持っているものを増やすより楽しい。あるいは、主のおことばで言うなら、「受けるよりも与えるほうが幸いである」(使徒20・35)。

人に与えて、かえつて豊かになり、溜め込むことによつてかえつて貧しくなる(箴言11・24)。

罪を犯すことができないという、新しい性質が私たちにあるのにもかかわらず(Iヨハネ3・9)、私たちがなすことはどれも罪で汚れている(Iヨハネ1・8)。

私たちは降伏することによつて勝利し(創世記32・24・28)、抵抗することによつて敗北を経験する(Iペテロ5・5)。

自分を高くすると恥を経験し、自分を低くすると主が高くしてくださる(ルカ14・11)。

圧迫を受けるとかえつて広やかにされ(詩篇4・1ダービー訳)、繁栄すると小さくなる(エレミヤ48・11)。

すべてを持つ立場であるのに、何も持っていない。貧しいようではあるが、多くの人を富ませている(IIコリント6・10)。

(人の目から見ても)知者ではあつても(神の目から見れば)愚かな者である。しかし、キリストのために愚かになると、私たちは真の意味で知者となる(Iコリント1・20、21)。

信仰によつて生きるとき、気苦労と心配から自由にされる。自分の判断に頼つて生きると、いつかは虫とさび、盗人によつて持てるものを失うという恐れがやってくる(マタイ6・19)。

ある詩人は、クリスチャンの生涯を初めから終わりまでを逆説として見、こう言います。

何と不思議なものだろう、

人が舵を取らねばならぬ人生の航路は

何と戸惑うものだろう、人が踏み行かねばならぬ道筋は

幸福の希望は、そもそも恐れからはじまつた

そして、いのちは死んだ方より頂いた

どんなに麗しくても、見せかけにすぎないものは余さず捨

て

最善と思つた決意も、一旦はとどめられなければならない

「完全に救われた」と思つてはいけな

自分がまったく失われた者と気づくまでは

しかし、このすべてをなし、罪の完全な赦しを確信し

赦免を受け入れ平安が自分のものとなつた後、

葛藤は始まる、その瞬間より(抜粋)

「しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。あなたがたは地上のだれかを、われらの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただひとり、すなわち天にいます父だけだからです。また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただひとり、キリストだからです。」

(マタイの福音書23章8-10節)

自尊心をくすぐり、三位一体の神に匹敵する地位に自らを置く、仰々しい肩書に注意せよ、と主イエスは、弟子たちに警告しておられます。御神は私たちの父、キリストは私たちの主であり、聖霊は私たちの教師です。このような称号を、集会の中で私物化してはいけません。もちろん、この世においては、私たちに地上の父があり、仕事では師や雇用主があり、学校には教師(先生)がいます。しかし、霊的な世界においては、神の存在そのものである御父、御子、御霊がそれぞれの役割を充足しておられ、その役割は、専有的なものとして尊ばなければなりません。

「御神が私たちの父」というのは、いのちの与え主であるという意味です。「キリストが主」というのは、私たちがキリストのものであり、キリストの導きに従うからです。「聖霊が教師(先生)」というのは、聖霊が聖書の著者、また、解釈者であられるからです。私たちが教えることすべては、聖霊に導かれるものでなければなりません。

だとすれば、まるでキリストが一度も警告されなかつたかのように、教会が名誉の称号を保持してきたのは、何とも奇妙な現象です。司祭が、今なおファーザー(神父)と呼ばれ、ときには、ドミニネ、すなわち、主と呼ばれることもあるのです。聖職

者は通常、「…師」(Reverend)と呼ばれますが、その語は、聖書においては神のみ使われるものです(詩篇111・9)。「主の御名は聖であり、おそれおい」(参照)。ドクター(doctor「博士」)は、ラテン語の *docere* から来ており、教えることを意味します。したがって、ドクターとは、教師を意味します。取得の称号であれ、名誉の称号であれ、学位とはキリスト信仰の譬というよりは、無信仰の巢窟ともいふべき学術機関が出しているものです。ところが、集会において「博士」として紹介されると、あなたもその学位のゆえに、その人の言葉に権威が増すかのような含みが感じられるのです。もちろん、そんな根拠はどこにもありません。外見がどうであろうと、また職業が何であろうと、聖霊に満たされているなら、神の器として、もつと真実な話をすることができます。

いわゆる世俗的社会では、称号にもそれなりの役割があり、その場合には、「恐れなければならぬ人を恐れ、敬わなければならぬ人を敬いなさい」(ローマ13・7)という原則が適用されます。しかし、教会(集会)生活に適用される原則は、主ご自身が次のように規定しておられます。「あなたがたはみな兄弟だからです」(マタイ23・8)と。

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ています、…」

(「コリントへ手紙第一」13章12節)

クリスチャンとして、主の食卓(聖餐式)に加わり、私たちのために死なれた主を覚えるときほど、「私たちは鏡にぼんやり映るものを見ています」というみことばを痛切に感じることはありません。

何か、厚い、そして、向こうが見えないベールがかかっているように思われるのです。そのベールのこちら側にいる限り、私たちには、ありとあらゆる制約がかかっています。その向こう側には、私たちの贖い、という偉大なドラマのすべてがあります。ベツレヘム、ゲツセマネ、ガバタ(※「敷石」キリストが総督ピラトの前に立たれたときの場所)、カルバリ、空になった墓、神の右の座に引き上げられたキリスト…。そこに、とてつもなく広大な世界が広がっていることは分かるのですが、それを何とか理解しようとしても、自分がいるところにある存在、というより土くれのように感じられてしまうのです。

私たちの罪のために救い主が受けた苦しみを、理解しようと努めます。神から捨てられるという主が味わった恐怖を、理解しようとする理性はもがきます。本来、私たちが永遠に耐えなければならなかった苦悶を、主が耐えてくださったことを私たちは知っています。しかし、それが分かかったとしても、それは、全体のほんの一部にすぎないこと知り、がっかりするのです。私たちは、いわば、まだ探検が済んでいない海の突端に立っているようなものです。

地で最悪の者たちのために、天の最善の方を遣わしてください。た愛がどれほどのものか、と私たちは考えます。失われたものを捜し、救うために、神は、ひとり子の御子を、罪の密林に送ってくださいました。そう思うと心が揺り動かされます。しかし、その愛とは、知識によつて到底理解できるものではありません。それを知ったとしても、ほんの一部分にすぎないのです。

私たちは、救い主の恵みを歌います。主は、富んでおられたのに、私たちのために貧しくなられた。それは、私たちがキリストの貧しきによつて、富む者となるためであった、と。御使いならそう聞いただけで息が止まってしまふことでしょうか。私たちは、目を凝らして、そのような恵みの広大な世界を見ようとしていますが、徒勞に終わります。私たちは、人間であるがゆえの近視状態から抜け出すことができないのです。

キリストがカルバリで犠牲になってくださったことを思えば、それに心が圧倒されるはずですが。それなのに、どうしたわけか何の感動も湧いてこないということが、しばしばあります。ベールの向こう側に広がる世界に実際に入ったならば、私たちは涙を流さないではいられないことでしょう。しかし、私たちはこのように告白しなければなりません。

ああ、自分そのものを私は怪しむ

愛のゆえ、血を流し、死に行く《小羊》よ

その奥義を眺めることはできないのに

あなたを愛する愛が増し加わらないとは

あるいは、(詩人)クリステイーナ・ロセッティのことばを借りて、このように問わなければなりません。

私は羊ではなく、石だったのか

ああキリストよ、あなたの十字架の下に立ち

一滴、また一滴と、緩やかに血を失っていくあなたを仰いでも

涙を流さずにいられるとは

エマオの途上の二人の弟子たちのように、私たちの眼はさえずりられています。やがて、そのベールが取り除かれて、主の晩餐の裂かれたパンと、注ぎ出されたぶどう酒の厳かなる意味を、もつと明瞭に理解する時の到来を、私たちは渴望してやまないのです。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」

(ヨハネの手紙第一 5章13節)

この聖句のゆえに、永遠にわたって神に感謝をする人が私たちの中に何人もいることでしょう。救いの確信は、感情によるのではなく、何よりも神のみことばによるものであることを教えてくれているからです。聖書が書かれた理由は他にいろいろあるにせよ、その一つは神の御子の御名を信じる人には、永遠のいのちがあることを知らせるためです。

確信とは、感情から生まれるものではないことは感謝なことです。なぜなら、感情は、日ごとに変動するからです。「ああ、ありがたい。気分が最高だ」と言うことを、神は求めてなどおられません。むしろ、感情から、イエスとそのみことばへと、神は私たちの目を転じてくださるのです。「あなたは罪が赦されたと感じますか」とある人が訊ねたとき、マルチン・ルターは、次のように返答しました。「そんなことはない。しかし、天に神がおられるのが確かなのと同じくらい、私はそれを確信している。なぜなら、感情は来て、やがて、去っていくからだ。それに、感情はあてにならない。私の保証は、神のみことばだ。それ以外のものは、信じるに値しない」と。C・I・スコフィールドは、こう指摘しています。「義認は、神の御思いの中で起きることであって、信じる者の神経系で起きるわけではない」と。H・A・アイアンサイドは、よくこう言っていました。「嬉しいと感じるから、救われているのかどうかは知らない。しかし、救われているとわかるので、私は嬉しいと感じるのである」と。

アイアンサイドは、文字に記された神のことばによって救われたことを知っていたのです。

「私たちが神の子であるということは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます」(ローマ8・16)とありますが、御霊は、何よりもまず聖書を通して、私たちに証ししてくださいることを忘れてはなりません。例えば、ヨハネの福音書第六章四十七節には、「信じる者は永遠のいのちを持ちます」と書かれています。キリストに信頼したがゆえに、永遠の救いをいただいたことを、私たちは知っています。キリストは、私たちが天国に行く唯一の希望です。したがって、神の御霊は、この聖句を通して、「私たちが神の子である」と私たちに証言しておられるのです。

もちろん、確信を得る他の手段もあります。私たちが救われている、とわかるのは、兄弟を愛しているからであり、罪を憎み、義を実践しているからです。神のみことばを愛しているからであり、祈らないではいられない「本能」があるからです。しかし、確信を得る、第一にして最も基本的な手段とは、宇宙すべての中でも、最も確実で、最も信頼できるもの、すなわち、神のみことばなのです。ジョージ・カッティングは、一度見たら忘れられないトラクト『一に安全、二に確信、そして、三に喜び(Safety, Certainty and Enjoyment)』にこう書いています。「私たちに安全をもたらすのは、キリストの血である。私たちに確信をもたらすのは、みことばである」と。

「もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなりません。」

(ローマ人への手紙11章6節)

恵みの教理という土台を、早い時期にしっかりと身につけておけば、その後の人生で、数しれぬ問題に会いわないうで済みます。救いとは、神からの無代価の賜物であること、また、それにふさわしくないどころか、まったく受けるに値しないものに与えられるということを理解するのは、極めて大切な基本です。永遠のいのちを勝ち取るために、人があげられる功績は、何一つありません。自分という個人に価値がある、という考えをすべて放棄し、救い主の真価のみを根拠とする人に、救いは与えられるのです。

救いはすべて恵みによる、と分かれれば、そのとき、私たちは完全な確信を持ち、自分が救われている、と知ることができません。たとえごく僅かでも、救いが自分自身とみすばらしい「実績」に基づくものだとなれば、救われているかどうかの確証は、決して得られないことでしょう。善行が果たして十分であったか、あるいは、正しいものであったかは知るよしもありません。救いの確証が、キリストの御わざを土台としている、とするならば、疑いに悩まされる必要はありません。

私たちが永遠に安全であるのかに関しても、同じことがいえます。もし、私たちの安全が続く条件として、どれだけ頑張れるか、という私たちの能力に関係しているとすれば、今日は救われていても、明日は失われたものとなってしまいかもしれません。しかし、私たちの安全が、私たちを守ってくださいる救い主の「能力」にかかるとは、私たちが永遠に安全である、と知ることができるのです。

恵みのもとで生きる人は、ふがない罪の手先などではありません。罪が支配を及ぼすのは、律法のもとにいる人に対してなのです。律法は、何をなすべきかということは教えても、それを行う力を与えないからです。それに対して恵みは、神の前における完全な立場を与え、神の召しにふさわしく歩むことを教え、内在する聖霊によつて、それを行うことを可能にし、それを行なった人に報いてくれるのです。

恵みのもとで、奉仕は、律法的拘束ではなく、喜び溢れる特権に変わります。信者は、恐れではなく、愛という動機に基づいて行動します。救いを備えるために、救い主が苦しみを受けてくださったことを思い、救われた罪人は勇気を与えられて、自らの人生を献身的な奉仕のために注ぎ出すのです。

恵みはまた、感謝や礼拝、賛美を呼び覚まし、人生を豊かなものにしてくれます。救い主とはどのような方なのか、私たちが生まれながらにして、また実生活においてどれほどの罪人であったのか、また、主が私たちのために成し遂げてくださった一切のことを知るときに、私たちの心は溢れて、主を慕う礼拝とならざるを得ないのです。

神の恵みに比べるものは、何一つありません。恵みこそは、神のすべてのご本性の中で、王冠をかざる宝石です。絶対的な神の恵み、という真理に深く根を下ろすことです。そうすれば、人生の全体が変容しないではないでしょう。

「弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。」

(ルカの福音書6章40節)

「主イエスがこの箇所で十二弟子に教えておられるのは、他の人々に弟子としての訓練を施す際、自分自身が霊的生活で到達した以上に、彼らが進歩を遂げると期待はできないということなのです。言い換えれば、私たちが他の人に与えるプラスの影響は、私たちの実際の姿の範囲に制約されるのです。あるいは、

自分が知らないことを人に教えることはできない
自分が行かない所に他の人を導くことはできない

と、O・L・クラークが言う通りでもあります。

救い主は、ちりと梁についての話を用いて、この教訓を補強しておられます。ある人が、脱穀場を歩いていました。すると突然、一陣の風が巻き起こり、もみ殻の破片が目にも丸ごと入ってしまった。彼は目をこすり、上まぶたをつまんで下まぶたのところまで引つ張り、どうやったら目からちりが取れるか、友人の善意ある助言をことごとく試します。そこへ私がやってきて、自分の目から電信柱が突き出している(！)というのに、彼にこう言うのです。「さあ、愛する友よ。あなたの目の微小な埃を取り出すのを手伝ってあげよう」と。彼は頭をかしげ、もう一方の良く見える方の目で私を見てこう言います。「まず、あなたが自分の電信柱を目から取り出す方が先決でしょう」と。

まさにその通りです。つきまとう罪に悩まされている人を助けようと思っても、自分自身がその罪にがんじがらめになっているならば、助けることはできません。聖書が明らかに命じて

いることであつたにしても、自分自身が従っていないければ、他の人に無理強いはできないのです。私自身の生活に、何かの霊的失敗があれば、その領域において一切口出しはできません。

私の弟子が申し分ない状態、つまり、訓練が終わったときになつても、弟子が私の霊的水準より一センチでも高くなると期待してはなりません。弟子は、私の高さまでは進歩するかもしれませんが、私はそれ以上導くことができません。

今まで述べてきたことのすべては、自分自身に注意しなければならぬことを、今さらながら明確にしています。私たちの働きは、人格あつての働きです。大事なものは、内面なのです。私たちは能弁で、才知にたけ、よどみなく話すことができるかもしれませんが、その私たちの生活上に盲点、すなわち、怠慢や不従順の領域があれば、たとえ、私たちが他の人に弟子訓練を施したとしても、それは盲人が、他の盲人の手引をするのと変わりありません。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」

(ローマ人への手紙10章9節)

よく好んで用いられるこの福音的な聖句は、二つの基本的真理に焦点を合わせています。それは、墮落してしまつた人間には到底受け入れることのできない、キリストの受肉と復活という真理です。この二つの教理、および、それらが意味するものすべてを受け入れることなくして、救いはありません。

まず私たちは、「イエスが主である」と口で告白しなければなりません。つまり、ベツレヘムの馬小屋で生まれた御方こそ、肉体をとつて現れた神にほかならないことです。主イエスが神であられるということは、救いの計画全体に必要不可欠な要素です。

次に、私たちは、神が死者の中から主をよみがえらせた、と心に信じなければなりません。しかし、これは、単なる復活という事実以上のことを意味しています。それは、主イエスが十字架で私たちの身代りとして死んでくださった、という事実をも含んでいるのです。私たちが罪のゆえに当然支払わなければならないなかつた「罰金」を、主は支払ってくださいだったので。本来、私たちが永遠に耐えなければならなかつた神の御怒りを、主は耐えてくださいました。そして、それから三日目に、神は、死者の中から主をよみがえらせてくださいました。それは、私たちの罪のために、キリストがいけにえとなつてくださったことと対して、神が完全に満足されたという証拠であつたのです。このイエスを、私たちが主、また、救い主として受け入れるとき、私たちは救われると聖書は言っています。しかし、この

ように尋ねる人がいるかもしれません。「なぜ、まず告白し、次に信じると書かれているのですか。まず信じ、それから告白するのではありませんか」と。

九節で、パウロは受肉と復活を強調していますが、事柄が起きた歴史的順序にそつて書いているのです。つまり、最初に受肉があり、それから三十三年後、復活が起きたのです。

次の節では、信じるのが、告白することよりも先に書かれています。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」と。ここでは、私たちが新生するときに起きる順番で書かれています。まず、私たちは救い主を信頼して義認を受けます。その後で、私たちは、既に受け入れた救いをはつきりと告白するのです。

この聖句からは、気取りのない素朴さと、永遠的な新鮮さがかもしだされています。子供たちがこのように歌うのもうなずけます。

ローマ十章の九節

それは私のお氣に入り

キリストを主と告白すれば

神さまの恵みで救われる

だって、約束のみことばが

金の文字になつて輝いているでしょ

ローマ十章の九節

「ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。」

(へブル人への手紙13章13節)

この聖句からまず知らされるのは、キリストこそ、御民が集結する中心であるということです。私たちが集まる場所は、教派や教会、建造物や大伝道者ではなく、キリストのみです。「国々の民は彼に従う」(創世記49・10)。「わたしの聖徒たちをわたしのところに集めよ。いけにえにより、わたしの契約を結んだ者たちを」(詩篇50・5)。

二番目の教訓は、私たちは、宿営の外に出て主のみもとに行かなければならないということです。ここでいう宿営とは、「生まれながらの人間が喜ぶ地上の宗教組織の全体」と定義してよいでしょう。それは、キリストが辱められ、見下されている宗教的領域です。それは、今日、見かけはキリスト教を装っているものの、異教的に変形し、「見えるところは敬虔であつても、その実を否定する」(IIテモテ3・5)ものです。キリストは、その外におられるので、私たちもそこを出て、主のもとに行かねばなりません。

私たちがさらに知るのには、宿営の外でキリストのもとに集まろうとすれば、非難を免れないことです。教会の交わりに関して、主に従順であろうとすれば非難が向けられるというのは、クリスチャンにとって思いもよらないことです。教会の交友関係の中に留まれば、一定の名誉と地位が保証されるという場合は少なくありません。しかし、新約聖書が理想とするところに近づけば近づくほど、主に向けられる非難を、私たちも一緒に受けなければならぬ状況に立ち至ることが多いのです。私たちは、その代価を支払う用意ができていますか。

主は私を召し出された。

血染めの衣を着た御方よ、

私は主の声だとわかった―

わが主よ、十字架につきし御方よ、

主は姿を現わされた。私だけがどうして留まれよう。

主に従うほかはなかった。それ以外に道はない。

世が拒み、斥け、ほふつた御方、

神が奇しき力によつてよみがえらせ、

王座に着かせた御方が

かつて反逆者であつた私の心の中で、

王となつておられることを世が知ったとき

私はこの世から締め出された。

かくして、主と私は宿営の外、

かつては、地上の絆を主の求めにまざるものと思つていた、

しかし、ああ、今や主の御臨在はどの地上の絆よりも甘美なり。

私は外に出た。この世から出ただけではなく、

主の御名のもとへと…。

「もし、だれかが神殿を汚すなら、神がその人を滅ぼされます。神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」

(コリント人への手紙第一3章17節 英訳)

この聖句にある神殿とは、地域集会(教会)のことです。パウロが、「あなたがたがその神殿です」と言うのは、個々のクリスチャンではなく、集団に対して語っているためです。コリントの聖徒たちは、神殿を構成していたのです。

もちろん、個々の信仰者が聖霊の神殿であることも事実です。使徒パウロは、1コリント十六章十九節でこの点にふれています。

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」神の聖霊は、神の子である人のからだに例外なく内在しておられるのです。

しかし、今日のみことばが対象としているのは、集会(※一般的には「教会」。以下同じ)です。パウロは、集会を汚す人がいるなら、神がその人を滅ぼされると言いました。この節で、「汚す」と訳されている語と、「滅ぼす」と訳されている語は、同じ語です。「この語は、聖い生活と純粹な教理に留まるべき集会を迷いさせて損なうこと、また、この罪を犯した者に神が報復として破滅をもたらすことを示すのに用いられている」(W・E・ヴァイン)。

このように、今日のみことばは、地域集会の集まりを自分勝手に変えようとすることは重大な問題である、と私たちに警告しています。事実、それは、一種の自殺行為にほかなりません。ところが、まさにこの領域において、何と遠慮がちになりやすいことでしょうか。ここに、集会の中で自分のやり方を押し通せない人がいたとします。あるいは、他の兄弟と激しい個性の

衝突が起きたとします。すると、聖書に従って問題を解決するというよりは、自分の味方になってくれる人を集めて、教会内に分派を形成するのです。事態はますます悪化し、ほどなくだれの目にも明らかな分裂が起こります。

あるいは、他の人に対して陰口を広め、人を中傷する肉的な姉妹がいるかもしれません。中傷をまき散らす彼女の舌が猛威をふるった後、集会は、恨みと不和でいっぱいになっていることでしょうか。かつて、盛んだった集会がその原形をとどめなくなるまで、彼女はやめません。

このような人々は、いわば、危険なゲームに興じているのです。しかし、そのようなことをして、ただではすみません。宇宙を治め給う偉大な神は、神の集会を荒らす人には破滅をもたらされるからです。分派に心が傾きそうな人は、よくよく気をつけなければなりません。

「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいませ。」

(コリント人への手紙第二二章14節)

パウロがここで使っている比喩は、外国の敵を征服して帰還した、軍の司令官の凱旋パレードである、と一般に考えられています。將軍は、パレードの先頭を進み、勝利の甘美な満足感に酔いしれています。彼の後に続くのは、喜びを満面に表した兵士の集団です。その後ろには、おそらくは死刑に処せられるであろう捕虜が続きます。順路のいたるところで香がたかれ、香気が空気に満ちています。しかし、この香りは、人がどちらの側にいるかによって、その意味がまったく異なります。忠実な兵士には勝利の芳香、しかし、捕虜にとつては敗北と刑罰の前兆の香りなのです。

主のしもべが歩む道も、いくつかの点でこれに似ています。主は、信仰者を常に勝利に導いてくださる司令官のようです。主イエスに従うものにとつては、永遠のいのちの香りです。その一方、福音を拒絶する人にとつて、それは死と破滅のにおいなのです。

しかし、そのどちらの場合であつても、栄光をお受けになるのは神です。悔改める者が救われることによつて、神に栄光が帰されるばかりでなく、滅びゆく人の拒絶によつて、神の正しさが示されるからです。つまり、大きな白い御座のさばきに際して、キリストの前に立つとき、自分の哀れな状態をもちや神のせいにはできないのです。救われるチャンスがあつたのに、それを拒んでしまったからです。

私たちはふつう、クリスチャンとしての奉仕の評価をするとき、どれだけ多くの人々が救われたかを考えます。けれども、ことによると、福音を明確に提示されながらもそれを拒み、自ら地獄への道を選んでしまった人の数も、同様に奉仕が有効であつたことを、この箇所は暗示しているのかもしれない。

神は、そのどちらであつたとしても栄光をお受けになります。最初の場合では、恵みの芳香が、二番目の場合には、正義の芳香が神の御前に立ち上るのです。

何という厳肅な問題でしょう。使徒パウロがこう尋ねるのも無理はありません。「このような務めにふさわしい者は、いったい誰でしょう」と。

「決して私の足をお洗いにならないでください。」

(ヨハネの福音書13章8節)

主イエスは、手ぬぐいを取って腰にまとい、たらいに水をいっぱいにされました。それは、弟子たちの足を洗うためでした。ところが、ペテロのところにやって来られると、ペテロは「決して私の足をお洗いにならないでください」と、きつぱりと拒絶したのでした。

なぜでしょう。なぜ、ペテロは、主の思いやりに満ちたこの奉仕を望まなかったのでしょうか。一つには、自分がふさわしくない、つまり、主に仕えていただく価値は、自分にはない、という思いがあつたかもしれません。しかし、ペテロの態度には、高慢と独立心があつた可能性も十分に考えられます。受ける側に、自分が回りたくなかつたのです。誰かに助けてもらうということを、欲しなかつたのです。

これと同じ態度のゆえに、多くの人が救われなままです。救いを自分の力で勝ち取る、あるいは、自分がそれにふさわしいものとなることは望んでも、恵みによる無代価な賜物として、救いを受け取るのはプライドが許しません。神に借りをつくりたくないのです。「無限の借りをつくるのは誇りが許さないという人が、クリスチャンになることはあり得ない」(ジェイムズ・スチュアート)。

すでにクリスチャンとなつている人々にとつても、学ぶべき教訓があります。私たちの誰もが、人に何かを与えずにはいられない、というクリスチャンに会つた経験があることでしよう。彼らは、いつも人のためになることをしています。彼らの人生は、家族、親族、近隣の人々のために注ぎ出されます。その気前の良さは、まさに称賛に値します。しかし、その香油の中に

は死んだ蟬せみがいます(伝道者の書10・1)。彼らは、決して自分が受ける側にはまわりたくないので、惜しまずに与えることは確かに学んだのですが、人から謙遜に受ける方法は一度も学んだことがありません。他の人に仕える祝福は経験しますが、その同じ祝福を他の人が経験する機会を作らないのです。

パウロは、ピリピ人からの賜物を感謝して受け取ることによる、その人となりを示しています。お礼を述べるくだりで、パウロはこう言っています。「私は贈り物を求めているわけではありません。私のほしいのは、あなたがたの収支を償わせて余りある靈的祝福なのです」(ピリピ4・17)。つまり、パウロは自身自身の必要より、彼らの受けるべき報いのことを考えていたのです。

「ウェストコット司教は、その一生を終えようとする頃、自分は、一つ大きな間違いを犯した、と言つたことが伝えられている。それは、いつも能力の限界まで他の人のため尽くしながら、他の人から何かを自分のためのためにしてもらうことを、決してよしとしなかつたことを指している。そして、その結果、親しみやすさや円満さがどこか欠けることになった。お返しができない多くの親切を受けるといふ『訓練』を、彼は自分に決して課してこなかつたのである」(J・O・サンダース)。

無名の詩人(※内村鑑三によると、アデレイド・プロクター夫人)が、こう書いて、以上のことを的確にまとめています。

愛のために至誠まことの心を以て
惜おぼしまらず与ふる人は大なり

然れど愛のために、臆おそせず物を受くる人は

更に大なる人と称たたへん『内村鑑三訳』

「…みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。」

(使徒の働き11章23節)

クリスチャンの集まりの一部に、一つの気がかりな傾向があります。それは、キリストという御方に対する忠誠心のかけらもない人に対して、学者だから、という理由でおもねる傾向です。

例えば、ここに頭脳明晰な著述家として、説明の巧みさでは他の追従を許さず、原語の研究で卓越した注解者がいたとしましょう。しかし、キリストの処女降誕は否定します。主の奇跡は、実際はなかった、とうまく言い抜けます。救い主が、文字通り肉体をもって復活されたことは受け入れません。世界の英雄たちと並んで、イエスも美術館でしかるべき場所があてがわれなければならぬ、と恩着せがましい意見を述べます。彼にとつては、イエスも多くの英雄の中の一人にすぎません。つまるところ、気持ちの伴わない賛辞で、神の御子をけなしているだけです。このような人には、主に対する真心のかけらもありません。

ですから、学問上の業績が輝かしいという理由で、このような人をクリスチャンが弁護しているのを見ると嘩然とするほかないのです。あたりさわりのないように、彼の知的優秀さを称賛し、キリストに対する異端の見方すら大目に見ています。彼を尊敬すべき権威者として、その言葉引用するのを好み、同じ勉強会に加わります。「あなたは、キリストの十字架の敵と親しくしているではありませんか」と指摘されると、言葉を濁し、その「違反行為」の深刻さを打ち消します。「誰もが認める権威あるこのような人に反論するあなたは何者か」と言って、

逆に聖書をそのまま受け入れ、信じる人々が攻撃されるのは、決して珍しいことではありません。

そろそろ正義の怒りという意味を、クリスチャンが思い出すべき時が来ているのではないのでしょうか。救い主が今、学問の殿堂において裏切りにあつておられるのですから。今は、妥協などしている時ではありません。キリストの御人格とその御わざについては、一切歩み寄りの余地はありません。私たちは、自分の立場をはつきりさせなくてはならないのです。

神の真理が危機に瀕しているとき、預言者たちがあいまいな語り方をすることはありませんでした。主への忠誠心は凄まじいほどであり、傲慢にも主を認めない者たちや軽んじる者たちを激しく叱責したのです。

使徒たちは、主から栄光を奪おうとするあらゆる試みに憤慨しました。彼らは、神学者の世界で名声を博すよりは、キリストに忠実であることの方を選んだのです。

殉教者たちは、妥協して神の御子への忠誠心を捨てるよりも、死を選びました。人に認められるより、神に認められることの方が大切だったので。

私たちの責任とは何か。それはすべてにおいて主イエスに忠実であること、主イエスにふさわしい卓越した地位を認めない人や物事とは対決も辞さないことです。

「子どももらよ。父の訓戒に聞き従い、悟りを得るように心がけよ。」

(箴言4章1節)

箴言四章一〜四節で、ソロモンは「良い助言を一つの世代から次の世代へ継承していくことは、可能であるばかりか、そうすべきである」と述べています。自分の父が、どのように教えてくれたかをソロモンは述べ、自分の息子に「良い教えと健全な戒めに耳を傾けよ」と勧めています。

若い人が、人生の実践面について、自分の親からできるだけ多くのことを学ぶのは、理にかなっています。しかし、それと同時に、あらゆる若いクリスチャンが、霊的領域において、霊的な良き助言者、すなわち、自分の問題を聞いてもらえる人、秘密を打ち明けることのできる人、豊富な経験の蓄えを分かち合ってくれる人、必要な事柄に対処する際に率直な意見を言うてくれる人を持つべきであるというのもその通りです。親がこの役割を果たせるなら、一層好都合です。しかし、そうでない場合には、何としてもそれに代わる人を探し出さなければなりません。

敬虔で円熟した信仰者には、それまで蓄えてきた膨大な実際の知識があります。彼らも敗北を経験したことでしょうが、そこから貴重な教訓を学び、次の機会には敗北を回避する方法を学んだのです。年配のクリスチャンには、若い人々が見逃すかもしれない問題のいろいろな側面が見えていることが少なくありません。そして、バランスを取ること、また、理にかなわない極端な状態を避ける方法を習得しています。

テモテのように、賢明で、若い人であるなら、パウロのような人との交わりを求め、その知恵と秘訣を引き出そうとするは

ずです。もし、自分よりも先に同じ経験をした人がいるなら、まず、その人に相談をしておけば、恥や大失敗を経験しないで済むことでしょう。老年者を軽視するのではなく、戦いを経験し、幸いな証しを携えている人を敬うべきなのです。

概して、老いた聖徒は、若者に自分の意見を押しつけはしないものです。求めもしない助言が嬉しくないのと同様に、助言が皆無であるのも嬉しくないものだともわかっていきます。しかし、聞かれれば、自分の人生の歩みにおいて助けになった洞察を、いつでも喜んで分かち合ってくれるはずで

です。ですから、若者が情欲と葛藤しているにせよ、あるいは、神の導きを見出す方法を知りたいにせよ、または、クリスチャンホームを建設したいにせよ、宣教地に神が自分を召しておられるのか知りたいにせよ、経済のやりくりに困っているにせよ、あるいはまた、もつと力ある祈りの生活を求めているにせよ、霊的な案内人、すなわち、特定の問題について聖書からの光をもたらししてくれる人の助けを求めることは賢明と言えましょう。白髪の下には、まだ開けられていない知恵の宝庫が眠っていることが稀ではありません。他の人の洞察と過去の経験から益を得られるというのに、わざわざつらい経験を通じて学ぶ必要がどこにあるでしょう。

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」

(ヘブル人への手紙11章1節)

信仰とは、神のみことばに対する絶対的な信頼のことを言います。それは、神が安心して頼れる御方である、という確信です。神が言っておられることは真実であり、神が約束されたことは必ず成るといふ信念です。それは、何よりもまず、未来の領域(「望んでいる事がら」)、および、目に見えないものの領域(「目に見えないもの」)に関わるものです。

(米国の詩人)ホイットティアは、こう言っています。「信仰の歩みは、何もない空間に足を置こうとするようなものだ。しかし、気がついてみると下には岩がある」と。しかし、そうではないのです。信仰とは、闇の中で跳躍するようなものではないです。信仰は、最も確かな証拠を必要とするものであり、その証拠は神のみことばの中にあります。

もし、あることを固く信じているなら、やがてそれが現実に起きる、と思いい違いをしている人がいます。しかし、それは単なる軽信(※たやすく信じてしまうこと)であり、信仰ではありません。信仰には、頼るべき何らかの神の啓示、そして、手を放してはならない神の約束がなくてはなりません。神が何かを約束されたとするならば、それは、既に起こったのと同様に確実です。もし、神が未来を予告されたのであれば、その成就は火を見るより明らかです。言い換えれば、信仰は現在に未来を包含し、見えないはずのものを見るようにしてくれるものなのです。

神を信じることには、何のリスクもありません。神は偽ることがおできにならず、欺くこともできません。神を信じるとい

うことは、人ができる最も合理的で、まともで、論理にかなったことです。被造物が創造主を信じることに上に、理にかなったことがほかにあるでしょうか。

信仰は可能なことの範囲に留まらず、不可能の領域にも進出します。ある人がこう言いました。「信仰は、可能性が尽きたところから始まる。もし、可能なことなら、神に帰される栄光はない。もし、不可能なことであるならば、成し遂げることがかえって可能なのだ」と。

信仰、強き信仰は約束を見

神にのみ目を注ぐ

不可能だ、と言われる声を一笑に付し

「必ず成る」と叫ぶ

確かに、信仰による生き方には、困難と問題が伴います。神は、試練と苦悩という坩堝くわぼの中で、私たちの信仰を試し、それが純粋な信仰かどうかを判別はんべつされます(1ペテロー・7)。神の約束の成就を見届けるためには、長い年月を待たねばならないことがしばしばで、ときには、天国に着くまで待たなければならぬこともあります。しかし、「困難とは、信仰を養う食物である」(ジョージ・ミュラー)のです。

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません」(ヘブル11・6)。私たちが神を信じようとならないなら、それは神を偽り者とするも同然です(1ヨハネ5・10)。神を偽り者と呼ぶ人々が、どうして神に喜ばれることができるでしょう。

「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの命令を守るはずです。」

(ヨハネの福音書14章15節 英訳)

「命令だつて?」「新約聖書なのに?」命令という言葉を聞けば、人はいつでも、直ちに律法主義を思い浮かべます。しかし、この二つのことばは同義ではありません。主イエスほど戒めについて多く語った方はいませんが、主イエスほど律法主義とはほど遠い御方もいませんでした。

律法主義とは何でしょう。そのことば自体は、新約聖書にありませんが、それは、神の恩恵を得ようとしたり、それにふさわしいものとなるうとする人間のたゆみない努力を表しています。基本的には、律法を守ることによつて、義認と聖化を得ようとする試みを意味しています。それが、律法主義の本来の意味です。

しかし、今日、律法主義ということばは、もつと広い意味で、硬直した、教訓的な規則を表わすようになりました。ある種の慣習をタブーとして分類しようとするのはみな、「律法的」なのです。実際、「律法主義」という語は、現在、クリスチャンの行動が少しでも規制されたり、否定された場合、反撃に使う、便利な棍棒こんぼうのようなものです。

それでは、「律法主義」に伴う危険を回避するために、クリスチャンはどのように考えるべきなのでしょうか。

まず第一に、クリスチャンが律法から解放されたのはその通りですが、決して無法状態になったわけではない、ということにすぐ付言しなければなりません。クリスチャンにとつては、キリストが律法となつたのです。もはや、自分の好むままに行動するのではなく、キリストが喜ぶことを行う者となつたので

す。

第二に、新約聖書は命令で満ちていることを忘れてはなりません。その中には、禁止の命令もかなりあります。どこが違うのでしょうか。新約聖書の命令は、処罰が伴う律法として与えられてはいないという点です。それらは、義を教えるものとして、神の民であるクリスチャンに与えられているのです。

第三に、クリスチャンが行つてもならん問題がないとしても、益になるとは限らないという点です。それ自体に問題はなくとも、それに支配されてしまうことがあるからです(1コリント6・12参照)。クリスチャンに行う自由があることでも、それを行つたために他の誰かをつまずかせる場合があります。その場合は、それをすべきではありません。

禁止するというのは、「律法的」だと言う人がいるからといって、禁止が悪いとは限りません。ある種の行動規範が、「ピューリタンのだ」と言われて、非難されることもあります。しかし、ピューリタン(清教徒)の行動は、彼らを批判する人々以上に、キリストに誉れをもたらすものだったのです。

一般に認められた行動様式なのに、それを、「律法主義」に過ぎないと酷評するクリスチャンがよくいますが、そのように言う彼ら自身が、ますます自由放任となつて、世に流されているだけなのかもしれません。「律法主義者」「ピューリタン」と言つてけなしさえすれば、自分たちに対する評価が上がると想像するのは、実に浅はかなことです。

私たちの安全は、ひとえに、可能な限り聖書の教えに留まるかどうかにかかっています。断崖の縁にどれだけ近づけるかを試すようなことは、決してしてはなりません。

「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」

(ヨハネの福音書14章14節)

神は、祈りに応えてくださいます。もし、私たちに無限の知恵、愛、能力があつたならするであろうことと、寸分たがわぬ方法で応えてくださるのです。神は、時として私たちが望むものを与え、また、あるときはそれに優つたものを与えてくださいます。まさに神は、常に私たちに必要なものを与えてくださるのです。ときには、神は、素早く祈りに応えてくださいます。また、私たちが忍耐を持つて待つように教えられるときもありません。

神は祈りに応え給う。心挫けるときは

神の子どもが望む通りに恵み給うこともあらん

されど、〈信仰〉はそれによさる安息を学ぶべきこと多し

また、神が語られなくとも

その沈黙を信頼すべきなり

その名を愛と称えられる方は、最善以外を送り給うことなし

星は燃えつき、山壁もいつかは崩れん

されど神は真実にしてその約束は確かなり

求め続ける者たちに

祈りには、条件があります。(「もし、あなたが何かを願うなら」のような)「白地式小切手」(※署名だけされていて、持参人が金額を記入できる小切手)のように思えるものにも、条件が付随していることがよくあります(「御名によって」のように)。

個々の祈りの約束についても、その主題に関わる他のすべてのみことばに照らして考えてみなければなりません。

祈りには、神秘的要素があります。「なぜ」とか「どうして」で始まる質問をすぐにしたくなりますが、ほとんどの場合、あまり有益なものではありません。祈って、神が働いてくださるのを待つ方が、祈りにまつわる神秘のすべての謎を解くことにまさっています。私は、テンプル大司教が言ったことばに同感です。「私が祈ると、なぜか不思議な巡り合わせが起きる。祈らないと、何も起こらない」。

私たちが、主イエスの御名によって神に祈るなら、あたかも主イエスご自身が御父に願いを捧げているのと少しも変わりません。これこそは、私たちの祈りを重要なものに変える力をもたらしてくれるものです。そして、私たちが祈るときほど、全能の状態に近づくときはない、という理由がそこにあります。もちろん、私たちが全能になることは永遠の世界に入ってもありません。しかし、主イエスの御名によって祈るとき、私たちは無限の力を手にしているのです。

最良の祈りは、強い内的な必要から発します。つまり、主に頼れば頼るほど、祈りの生活は力を増していくのです。

祈ると、偶然や確率の法則では決して起こるはずのないことが起きます。私たちの生活は、超自然的な光彩を放ちはじめます。聖霊によって力を帯びます。そして、他の人の生活に触れるときに、神のわざが起ころのです。

私たちは、次のように言った聖徒のようになりたいものです。「私の影響力を測るものさしがある。それは、私の祈りを必要とする人、および、私のために祈つてくれる人の数である」。

「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病氣、あらゆるわずらいを直された。」

(マタイの福音書4章23節)

クリスチャンの間で度々繰り返されるのは、福音伝道と社会的な関わりとの適切なバランスをいかに取るか、という問題です。「福音主義陣営の人々は、人間のたましいへの関心が過大で、人間のからだにそれほど関心を持たない」とよく批判されます。つまり、飢えた人に食べさせ、裸の人に服を着せ、病人を治し、読み書きのできない者に教育を施すことに十分な時間をかけていないというのです。

そのような活動のどれか一つにでも、反対の意見を述べるのは、母性を批評するようなものです。主イエスが、人間の身体的必要に気を配っておられたことは確かですし、弟子たちにもそう教えておられます。歴史的に見れば、クリスチャンは率先して愛の奉仕の先頭に立つてきました。

しかし、その他いろいろな人生の領域の場合にも言えることです。それは何を優先するか、という問題なのです。一時的なことと、永遠的なことのどちらの方が大切なのでしょう。この基準で判断すれば、福音は何よりも大切です。イエスは、次のことばでそれを暗示しておられます。「あなたがたが信じることに、それが神のわざです」。社会事業よりも、聖書の教えの方が大切なのです。

人類が直面する最も切迫した社会問題の中に、偽物の宗教もたらしたものが 있습니다。例えば、牛を殺さないで餓死する他はない人々がいます。その牛が親族の生まれ変わりかもしれない、と信じているからです。外国から山のような穀物が送られても、人間より先にネズミがそれを食べてしまいます。ネ

ズミを殺す人が誰もいないからです。このような人々は、偽物の宗教に足かせをはめられているのですが、それらの問題の解決はキリストにあるのです。

福音伝道と社会奉仕とを両立させようと、「コーヒーとドーナッツ」を(貧しい人々に)提供することに忙殺されているうちに、いつしか福音が隅に追いやられる危険が常にあります。クリスチャンが始めたさまざまな施設の歴史を見ると、良いものが、最善を阻む敵となった例に事欠きません。

社会的関与のあり方にしても、その中には、すべて禁ずると言わないまでも、疑わしいものがあります。革命によつて政府を転覆させようとする試みに、クリスチャンは決して手を出すべきではありません。社会の不正をただすために、政治の力を借りるという方法は、疑わしいものです。主も、弟子たちもそうはしませんでした。福音を広めていく方が、法制化よりも多くのことを成し遂げることができるのです。

クリスチャンが、すべてを捨ててキリストに従い、また、すべてを売って貧しい人に施し、本当に困っている人を見たときに、心も財布も開くなら、社会に無関心なのではないかという良心のとがめを感じる必要はありません。

「自分の肉のために嗜く者は、肉から滅びを刈り取り…」

(ガラテヤ人への手紙6章8節)

罪を犯してそのまま逃げおおせる人は、一人もいません。罪の結末は、不可避であるばかりでなく、大変苦渋に満ちたものです。罪は、無害な子猫のような顔をしていても、やがては、ライオンのように容赦なくすべてを食い尽くします。

いわゆる、罪の魅力といわれているものは盛んに宣伝されますが、その裏側がどうか聞くことはほとんどありません。自分の没落や、その後の惨めさを詳しく伝えてくれる人など、まずいないからです。

しかし、アイルランドの最も才気あふれる作家の一人で、そうしてくれた人がいます。この人物は、面白半分に、同性愛の世界に入っていました。いろいろな出来事の連鎖の果てに、彼は訴訟に巻き込まれ、最終的には刑務所に収監されました。次の文章は、彼がそこで書いたものです。

「神々は、私にほとんどあらゆるものを与えてくれた。私には天才的頭脳、名声、高い社会的地位、輝かしい才能、知的大胆さが備わっていた。私は芸術を哲学に変え、哲学を芸術に変えた。私の発言や行動で、人々が感嘆しなかつたものは一つもない。私は芸術を至上の現実として扱い、人生を単なるフィクションの一形態として扱った。私と同世代の人々の想像力を目覚めさせた結果、私は、神話的存在、伝説的存在となった。私は、社会のあらゆる体制を一言で表し、あらゆる存在を一つの警句に凝縮することができたからである。

それと並行して、私にはこれらとは異質の世界があった。私は正気とはいえない、官能的逸楽の世界に誘惑されるまま入っていく、そこにどっぷりつかった。遊び人、しゃれ男、時流に

乗った男である自分を愉快に思った。私の周りには、けちな性質の輩、卑しい考えの輩が集まってきた。私は、自分自身の才能を浪費するようになった。永遠の若さを無駄にすることに奇妙な喜びを感じた。高尚な世界にあきあきしていた私は、わざわざ低俗な世界に下り、新しい刺激を求めた。思想の世界においては逆説であったものが、欲情の世界では倒錯となった。欲望は、しまいには、疾患、あるいは、狂気、または、その両方となった。他の人の人生のことなどどうでもいい、と思うようになった。手当たりしだい快楽を貪る生活を続けた。ありふれた一日の小さな行動がことごとく、人格の形成、または、破壊につながることに、したがって、密やかな部屋でなされたことは、いつの日か屋上で叫ばれるということを忘れていた。：私に待っていたのは、身の毛もよだつ不名誉であった」。

上記の告白が書かれたエッセイには、まさにふさわしいタイトルがついています。「De Profundis」—それは「深き淵の底より」という意味です。

「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。」

(箴言14章12節)

箴言を読むと、二度にわたり(14・12と16・25)、正しい道とはどれかという人間の判断は、あてにならないことを知ります。正しいように見えても、最後は、破局と死が待っているのです。

第二次大戦中、海軍は飛行隊員にそれをわからせるために、強烈な体験をさせました。高度での飛行中、酸素を使用しないと五感が信用できなくなります。一人のパイロットが、減圧室に入るよう指示を受け、テーブルにつきます。その上には、数学の問題が書かれた紙が一枚置かれています。その部屋から酸素が吸い出されて、高空にいるのと同じ状況が作り出されます。空気が薄くなると、パイロットは問題を解くように命じられ、「これほど正確に解いたのは、君が初めてだ」と、途中で告げられます。

パイロットは、この仕組みに自分は勝つたぞと完璧な自信をもって、問題を快調に解いていきます。問題は易しいように思え、満点が取れるという揺るぎない確信が生まれます。そこにまったく疑いの余地はありません。

しかし、酸素が再び部屋に注入され、テストの答え合わせをしてみると、減圧室から出てくると、問題を解く能力がひどく損なわれていたことをパイロットは思い知らされます。頭脳へ行く酸素が足りなかつたためです。もちろん、酸素を使わないで高度を飛行すると、もはや、自分の判断は信用できないこと、またそれは、墜落を招くようなものであるということがここでの教訓です。

人間の判断力は、罪によって重大な損傷を受けています。天国への道とは、自分が最善を尽くすかどうかである、と人は信じて疑いません。「善行によって救われた人は、今まで一人もいない」というその仕組みを、自分が最初に破って見せるという自信に満ちています。神は、まさか自分を天国の門から追い返されることはないだろうと確信さえしています。

しかし、人間は間違っているのです。「霊的な酸素」がない状況で自分の考えに固執するなら、滅びてしまいます。人間の安全とは、自分の判断ではなく、神のことばに信頼することによるのです。もしそうするなら、自分の罪を悔い改め、イエス・キリストを自分の主とし、救い主として受け入れるでしょう。神のことばは真理ですから、それを信じる者は、自分が歩むべき道を進んでいるという確信が持てるのです。

「また、不品行の者や、一杯の食物と引き替えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がいないようにしなさい。」

(ヘブル人への手紙12章16節)

人生で最高の価値を持つものを、肉欲を一時満足させてくれるものと引き換えにってしまうというのは、往々にしてあることです。

エサウがしたのは、まさにそれでした。野から帰った彼は疲れ、また、空腹でした。そのとき、ヤコブは、赤い豆のスープを調理して待っていたのです。エサウが、「その赤いやつを一杯くれ」、と求めたときに、ヤコブが言ったのは、結局こういうことでした。「いいとも。もし、兄さんが長子の権利を引き換えにくれるなら、スープをあげよう」。

ところで、長子の権利とは、家族で一番年長の息子に与えられる特権でした。それがあれば、やがては家族、または、部族の長となることができ、二倍の遺産がもたらえるという貴重なものでした。

しかし、その瞬間、エサウは、長子の権利には何の値打ちもないと考えました。自分のように腹ぺこの男にとって、長子の権利に何の益があるかと考えたのです。空腹が我慢の限界を超えていると感じたエサウは、それを満たすためであれば、何をくれてもよいと思うほどでした。ひと時の食欲を静めるためには、永続的な価値を持つものでも引き渡してよいと思つたのです。そして、あの恐るべき取引をエサウは行なつたのです。

それと同様なドラマが、ほぼ毎日、上演されています。長年、良い証しを立ててきた人物がいます。彼は素晴らしい家族の愛と、クリスチャンの仲間からの尊敬を受けています。彼のこと

ばには、霊的権威が伴っており、その奉仕には神の祝福があります。彼は、信者の模範です。

ところが、それから凄まじい情熱の嵐がやって来ます。性的誘惑の火に身を焦がすかのようです。突然、肉体の衝動を満足させること以上に大切なものは何もないように思われます。まともな思考力を放棄します。この不倫のためには、あらゆるものを犠牲にしてもよい、と思えます。

そのようにして、彼は、狂気の沙汰ともいべき行動に踏み切ります。一瞬の欲情のために、彼は神の荣誉、自分自身の証し、家族の高い評価、友人の尊敬、立派だったクリスチャン的人格の力を犠牲にしてしまうのです。それは、(イギリスを代表する説教者)アレグザンダー・マクラレンの言つた通りでもあります。「彼は、義への憧憬を忘れた。神との交わりという喜びを投げ捨てた。たましいに闇をもたらしした。繁栄に終止符を打つた。残る年月の間、災いが滝のように自分に襲いかかるようにした。自分の名前も信仰も、何世代にも渡つて、あざける人々の悪意のある皮肉の格好の標的にした」。

聖書の古典的表現でそれをいえば、彼はたかが一杯のポタージュと引き換えに、長子の権利を売ってしまったのです。

「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。」

(サムエル記第一16章1節)

人生には、いつか過去を嘆き悲しむのをやめ、現在の仕事に取りかからなければならぬ時がやってきます。

神は、王としてのサウルを拒絶しておられました。その措置は最終的なもので、取り消すことができません。しかし、サムエルはそれをなかなか受け入れることができませんでした。サムエルは、サウルとの親密な関わりがあつたので、自分の希望が失望に終わるのを涙なくして見るができなかつたのです。取り返しのつかない損失を、サムエルは嘆いてやみませんでした。神が言われたことを要約してみると、こうなります。

「嘆くのをやめよ。出て行って、サウルの後継者に油を注げ。わたしの計画が挫折したわけではない。イスラエルの歴史の舞台に上るべき、サウルに優る人物がいるのだから。」

サムエルは、自分自身の教訓としてそれを学んだだけではなく、やがて、王としてサウルの後を継ぐダビデにもそれを伝えたと、私は思います。いずれにせよ、ダビデがこの教訓を学んだことは、ダビデを見ればよくわかります。(人妻のバテシエバに産ませた)赤子が死にそうなる間は断食し、嘆き悲しみました。神がその子を生かしておいてくださる望みがあつたからです。しかし、その幼子が死ぬと、ダビデは水浴して服を着替え、幕屋に行つて礼拝し、その後、食事をとりました。その現実主義をいぶかる人に対して、ダビデはこう言っています。「しかし今、子どもは死んでしまった。私はなぜ、断食をしなければならぬのか。あの子をもう一度、呼び戻せるであろうか。私は

あの子のところに行くだろうが、あの子は私のところに戻つては来ない」(IIサムエル12・23)。

これは、クリスチャン生活や奉仕において、私たちに語りかける声でもあります。ときに、私たちの役割が剥ぎ取られ、それが他の人に与えられることがあるかもしれませぬ。奉仕の手段が、「死んでしまった」ことを、私たちは嘆きます。

友情や協力関係が引き裂かれ、その結果、人生が空疎で味気ないものになるということが起こるかもしれません。あるいは、自分にとつて、とても大事な人から手ひどい失望を味わわれるということもあるかもしれません。大切な人間関係が、「死んでしまった」ことを、私たちは嘆きます。はたまた、生涯をかけた夢が打ち砕かれ、大望が頓挫するということがあるかもしれません。高い志に基づく願望やビジョンが、「死んでしまった」ことを、私たちは嘆きます。

嘆くこと自体には、何も問題はありませぬ。しかし、そのために、今という時の課題に向き合う力が奪われるほど、延々と嘆いていてはいけません。E・スタンレー・ジョーンズは、「悲嘆や人生の打撃から、一時間以内には、立ち直るように努めている」と言いました。私たちのほとんどは、一時間では短すぎるかもしれません。しかし、どうやつても変わらない事態をいつまでも嘆いていてはいけません。確かです。

「神があなたがたのことを心配してくださるからです。」

(ペテロの手紙第一5章7節)

聖書は、どこを見ても、神が御民のために示してくださる素晴らしい配慮のしるしで満ちています。イスラエルが荒野を通る四十年の旅の間、彼らは天からの食物を食べ(出エジプト16・4)、絶えざる水の供給を受け(1コリント10・4)、決して擦り切れることのない履物をはいていました(申命記29・5)。

私たちの荒野の旅も同じです。これをわからせるため、私たちに對する主のご配慮は、空の鳥、野の花、動物に對するものよりもはるかに大きいと論じておられるのです(マタイ6・26)。それらのどれも、神の御前に忘れられていません(ルカ12・6)。雀の一羽でも、父のお許しなしには地に落ちることはありません(マタイ10・29)。あるいは、H・A・アイアンサイドが言うように、「神は、どの雀の葬式にも出席してください。」のです。もちろん、この話の教訓は、私たちが多くの雀よりも、神にとって大事な存在であるということです(マタイ10・31)。

ソロモンがまとったどの衣服よりもさらに美しく野の草を装ってくださるなら、神はそれ以上に、私たちを装ってくださるはず(マタイ6・30)。牛を養うための食糧を備えておられるなら、神はどれほど私たちの必要に気を配ってくださるのでしょうか(1コリント10・31)。

(大祭司が、イスラエル十二部族を表わす宝石をはめた胸当てを肩からつるすように) 私たちの大祭司として、主イエスは、私たちの名を肩、すなわち、力の場所(出エジプト28・9・12)に担い、その胸、すなわち、愛の場所に置かれます(出エジプト28・15・21)。そればかりではなく、私たちの名は、主の手のひらに彫り刻まれています(イザヤ49・16)。それは、主が私たち

のためにカルバリで受けた釘の傷を、思い出さずにはおきません。

主は、私たちの髪の毛の数を正確にご存知です(マタイ10・30)。主は、私たちが眠られなかった夜の数を数えておられ、私たちが流した涙の数をその書に記録しておられます(詩篇56・8)。

私たちに触れる者は、主のひとみに触れる者です(ゼカリヤ2・8)。私たちを攻めるために作られる武器は、どれも役に立たなくなり(イザヤ54・17)。

異教徒は、肩にかついで神々を運ぶのに対し(イザヤ46・7)、私たちの神は、御民を運んでくださいます(イザヤ46・4)。

私たちが水の中を過ぎ、川を渡り、火の中を歩いても、炎は燃えつかず、神は私たちと共にいてくださいます(イザヤ43・2)。私たちが苦しむときは、主も苦しんでおられます(イザヤ63・9)。

私たちを守る方は眠ることも、まどろむこともありません(詩篇121・3)。神は、「聖なる不眠症」にかかつておられる、と言つた人がいるくらいです。

私たちのために、いのちを与えた良き羊飼いは、私たちに良きものを拒まれません(ヨハネ10・11、詩篇84・11、ローマ8・32)。

主は、年の初めから年の終わりまで、目に留めておられます(申命記11・12)。年を取っても私たちを背負ってください(イザヤ46・4)。それどころか、神は決して私たちを離れず、また、私たちを捨てません(ヘブル13・5)。神のお気遣いは本物なのです！

「わたしは暗闇の宝をあなたに与える。」

(イザヤ書45章3節 英訳)

(ペルシャの王)クロスにこう約束された神は、クロスがやがて征服する暗闇の国々から得る宝物のことを言っておられました。しかし、それを霊的な意味で適用しても、この聖句を曲解することにはなりません。太陽が降り注ぐ日には決して見つからないが、人生の暗い夜になって初めて、発見できる財宝というものがあるのです。

例えば、もし、人生に試練というものがまったくなかったならば歌うことなどなかったはずの歌を、神は最も暗い夜に与えてくださるのです(ヨブ35・10)。

J・スチュアート・ホールデンが次のように呼ぶ暗闇があります。「人生の不可解な神秘―人生に臨む災難、破局、突然の予期せぬ経験、どれほど用心を怠らなかったとしても、避けられなかった出来事、それらのゆえに人生は暗くなる。悲しみ、損失、失望、不公正、動機の誤解、中傷」。これらのゆえに、人生は暗くなるのが少なくありません。

人間的な言い方をすれば、この暗闇を選びたい人など一人もいないことでしょう。ところが、その恩恵は量り知ることができないのです。レスリー・ウエザーヘッドは、こう記しています。「誰もがそうであるように、健康、幸福、成功の溢れる明るい高地の経験を愛し、そちらを選びたいと私も思う。しかし、私が、神、人生、そして、自分自身について、それよりもはるかに多くを学んだのは、明るい太陽のもとで、というより、恐れと失敗という暗闇の中であつた。暗闇の財宝とでもいうべきものが、本当にあるのだ。感謝すべきことに、暗闇はやがて過

ぎ去る。けれども、暗闇の中で学んだことは、永遠にその人のものである」。

光は主と共に永久とわに住むとはいえ

主は知っておられる、暗闇に潜むものを

暗きところのひとつだにない御父は

やがてさやかにしてください

今はぼんやりとしか見えないものを

(サラ・ファリス)

「イスラエルの地から来た娘……」

（列王記第二五章4節）

神のために大いなる働きをするのに、名が知られる必要はありません。それどころか、聖書の中で不朽の名声を得た人々の中には、その名前が不明の場合すらあります。

（命の危険を冒して）ベツレヘムの井戸から水を運んだ三人の男がいました（IIサムエル23・13・17）。この献身的な行為に驚嘆したダビデは、この水を飲もうとはせず、聖なる捧げものとして注ぎ出したのでした。しかし、その男たちの名前は記されていません。

シュネムにいた立派な女性の名前もわかりません（II列王記4・8・17）。しかし、（イスラエルの預言者）エリシャのために部屋を作った人として、いつまでも記憶に留められることでしょう。

（シリアの將軍）ナアマンが、ツアラアトを治してもらうために、エリシャのもとに行くことになったのは、無名のユダヤ人の女中の助言がきっかけでした（II列王記5・3・14）。神は、彼女の名前を知っておられる。それでよいのです。

イエスの頭に香油を注いだ女性は、誰でしょう（マタイ26・6・13）。マタイは、彼女の名前を記していませんが、主は彼女の誉れをはつきりとお告げになりました。「まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう」（13節）。

レプタ銅貨二つを投げ入れた貧しいやもめも、無名の神のしもべの一人です（ルカ21・2）。自分が誉れを得なくてもかまわ

ないという思いですることが、実は、神にとつて大きなことであるという真理を、彼女は示しています。

そして、もちろん、五つのパンと二匹の魚を主に差し出した少年がいました。パンと魚は、みるみる増えて、男たち五千人と女や子どもを養うものとなったのでした（ヨハネ6・9）。名前はわかりませんが、少年のしたことが忘れられることは決してないでしょう。

最後に、もう一つの例を記しましょう。エルサレムの貧しい聖徒たちに送る献金に関わって、パウロは、テトスと二人の兄弟をコリントに遣わしています。パウロは、彼らの名前を記していませんが、彼らを「諸教会の使者、キリストの栄光」と称賛しています（IIコリント8・23）。

（詩人）グレイが、田舎の教会の墓地で、世に知られない人々の墓石を見たときに、このように言いました。

人の目に触れることなく

あまたの花は生まれ、色づく

されど砂漠の空気に、その浪費、かぐわ芳し

しかし、神にとっては、何一つ浪費ではないのです。神は、名も知られず、神に仕えているすべての人の名前を知っておられます。そして、主にふさわしい方法で、やがて、報いてくださるのです。

「私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。」

(「コリント人への手紙第二」2章11節)

私たちの敵である悪魔のさまじまなたくらみを知ることは大切です。さもなくば、おそらく、私たちの弱みにつけこんでくるだろうからです。

悪魔は偽り者で、しかも、初めからそうであったことを知らなければなりません。それどころか、「偽りの父」(ヨハネ8・44)でもありません。悪魔は、神について事実を反することをエバに伝えましたが、それ以来ずっとそんなことを行っているのです。

悪魔は欺く者です(黙示録20・10)。誤りの中に、真実を少しだけ混ぜます。神に関わることはなんでも模倣するか、または、偽造します。光の御使いのふりをし、「義のしもべ」として伝令を派遣します(Ⅱコリント11・14、15)。著しいしるしや、偽りの奇跡を行って、人を欺きます(Ⅱテサロニケ2・9)。そのようにして、人々の思いを汚すのです(Ⅱコリント11・3)。

サタンは、残忍な破壊者です(ヨハネ8・44、10・10)。サタンの目標、また、サタンにつき従うすべての悪鬼の目標は破壊です。このことばに、例外はありません。獐猛な獅子のように、サタンは食い尽くすべきものを捜し求めて、歩き回っています(Ⅰペテロ5・8)。サタンは、神の民を迫害し(黙示録2・10)、自分の手下となったものをすら、麻薬、悪魔礼拝、酒、性的逸脱、その他の悪徳によって滅ぼすのです。

悪魔は、「兄弟たちの告発者」です(黙示録12・10)。「悪魔」(ギリシヤ語で「ディアボロス」という語は、「告発者」「中傷する者」を意味し、その名が示す通りのことをするのです。すべて兄弟たちを中傷する者は、悪魔の働きをしているわけです。

サタンは、失望の種を蒔きます。パウロは、コリント人に警告しました。もし、過ちを犯して、それを悔改めた人を救えない場合、サタンがそれに乗じて、その兄弟を失意のどん底に落とすかもしれない(Ⅱコリント2・7、11)と。

ペテロを通して語り、イエスが十字架へと進むのを思い留まらせようとしたのと同様に(マルコ8・31、33)、サタンは、十字架を負う恥と苦しみをわざわざ受ける必要はない、とクリスマスチャンを「励ます」のです。

悪しき者、サタンのお気に入り、分裂を起こしてから攻め落とすという策略です。「分裂した国は立ち行かない」ことを知っているサタンは、聖徒相互の間に、争いと不一致の種を蒔こうとします。悲しいことに、この戦略を用いて、サタンは過分な成功を収めてきたのです。

サタンは、キリストの栄光に関わる福音の光を輝かせないように、また、救われることのないように不信者の思いをくらませています(Ⅱコリント4・4)。娯楽や偽の宗教、(決断の)先延ばしや自慢で、目が見えない状況を作り出しているのです。事実よりも感情がどうかということ、また、キリストよりも自分自身のことで頭がいっぱいになるように仕向けるのです。

忘れてならないのは、大きな霊的勝利や絶頂の経験の直後、すなわち、高慢の危険が最も大きいときを狙って、攻撃してくるということです。私たちの鎧の弱い所を見つけ、そこを目掛けて矢を放つのです。

悪魔の攻撃に対する最善の防衛策とは何でしょう。それは、聖い人格という防具で身を覆い、主との曇りのない交わりの中に生きることです。

「モアブは若い時から安らかであった。彼はぶどう酒のかすの上
にじっとたまっている、器から器へあけられたこともなく、捕
囚として連れて行かれたこともなかった。それゆえ、その味は
そのまま残り、かおりも変わらなかった。」

(エレミヤ書48章11節)

エレミヤは、ぶどう酒作りの技法を例に取り、安逸を貪って
いては、強靱な人格が生み出されることはないを教えています。

ぶどう酒が樽や桶の中で発酵するときは、必ず滓や澱(※タン
ニンなどの渋味成分)が底に溜まります。ぶどう酒がかき混ぜら
れることがないままに放置されると、やがてまざるようになります。
そこで、ぶどう酒醸造人は、ぶどう酒を容器から容器へと移し、
滓や不純物を取り除くのです。そのようにすると、ぶどう酒は
コクと香りと色具合、そして、風味の良いものになっていきま
す。

モアブ(という民族)は、安楽な暮らしをしていました。突
然、捕囚として連れて行かれるということもありませんでした。
悩み、試練、欠乏から隔離されていたのです。その結果、モア
ブの歴史は平坦で、面白味のないものでした。芳香もなければ、
痛快さもなかったのです。

ぶどう酒について言えることは、私たちにも言えます。私た
ちにも予期せぬ中断、反対、困難、妨害が必要です。それは、
不純物を取り除かれ、キリストに満たされた美しい生活の実が
結ばれるためです。

私たちは生来、動揺の原因となるものから自分を守ろうとす
る傾向があります。自分の居場所を快適にすることに汲々とす
るのです。しかし、神に頼らざるを得ない危機が常に存在する

ことこそ、神の私たちに對するみこころなのです。神は心地よ
い私たちの住みかを、いつまでも揺さぶり続けるのです。

(中国宣教で著しい働きをした)ハドソン・テイラーの伝記の
中で、ハワード・テイラー夫人は、こう書いています。「やがて
世界中に祝福となる彼の生涯は、滓の上にはじつと留まるという
のとはおよそ異なる過程を経なければならなかった。低きに向
かう人間の性質にとつては大変苦痛なものであるが、器から器
へ何度も空けられるという経験を何度も通つて、私たちは純化
されていくのである」。

「ぶどう酒づくりの職人」である神が、私たちの生活に對し
て、何をなさそうとしておられるかということを一且悟ると、私
たちは反抗をしないで済み、服従と信頼を学ぶことができます。
そして、次のように言うことができるようになるのです。

何を選び、何を命じられるにせよ

至高者なる神のご支配に任せよ

そうすれば驚嘆して認めるに至るだろう

神の道がいかに知恵に優れ、御手の力がいかに強いかを

神のはかりごとがあなたの思いをはるかに

凌駕していたかを知るだろう

無用の恐れを引き起こしたそのわざを

神が完了したもうその暁に

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」

（コリント人への手紙第一一章21節）

コリントの教会には、福音に知的にも立派な装いを施そうとする人々がいました。この世の知恵に気を取られた彼らは、キリスト信仰の使信には、当時の哲学者たちに不評な側面があることが、気になって仕方がなかつたのです。信仰を棄てるという考えは毛頭ないものの、学者たちにもつと受け入れられやすいものにしよう、と手を加えたかつたのです。

パウロは、世の知恵と神の知恵とを合体させるに等しいこのような企てを、激しく非難しました。知的な地位を認められようとすることは、靈的な力を失う結果になることを誰よりもよく知っていたからです。

率直に言いましよう。クリスチャンの使信には、ユダヤ人には大それたこと、異邦人には愚かしい内容が含まれています。それだけではなく、大半のクリスチャンは、この世が知恵者と呼ぶ人々ではなく、有力でもなく、身分が高いわけでもありません。遅かれ早かれ、私たちは、知識階級に属していないどころか、浅学、かつ、弱者であり、社会的に低く、軽んじられているという事実を直視しないわけにはいきません。事実、この世から見ると、私たちは無力な存在です。

しかし、驚くべきことに、神は、その愚かに見える使信を用いて、信じる者を救ってくださいます。しかも、神は、その目的を達成するために、私たちのような取るに足りない者を用いてくださいます。神は、このような成功のおぼつかない器を選

んで、虚飾や自負に満ちたこの世に泡を吹かせ、私たちが誇る余地を残さず、神ご自身以外には榮譽を受ける者がないようにしておられるのです。

だからといって、学問は必要ないと言っているわけではありません。もちろん、学問には学問の役割があります。しかし、深い霊性と結合しない限り、学問はいのちを削ぎかねない、危険なものになります。学問が神のことばをさばく地位につき、例えば、（聖書の）ある筆者は、他の筆者よりも信頼度の高い資料を使っていると主張するなら、それは、神の真理からの逸脱にほかなりません。そして、私たちがそのような学者に認められる立場を取ろうとするなら、その異端的な考えにも無防備になつてしまうのです。

パウロは、優れたことば、優れた知恵を携えて、コリント人のもとに來たわけではありませんでした。彼らの間では、十字架につけられた方のほかは、何も知ることはずまい、と決心していたのです。単純に、また、真つ直ぐに提示するからこそ福音に力があるのであって、込み入った問題や無益な理論に没頭し、知的追求を重んじれば力があるわけではないことが、パウロには分かっていたのです。

「しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。」

(マタイの福音書18章6節)

溺れ死ぬ方法として、これほど確実で、しくじる心配のない方法は、他にないことでしょう。この石臼とは、手で操作する小型の臼ではなく、ロバの力で回転させる巨大なものでした。そのような石臼に紐をつなぎ、それを首の回りにしっかりとかけたらば、溺れ死ぬのは即時、かつ、不可避でしょう。

私たちは、救い主のおことばの激しさに、最初はぎよつとさせられるかもしれませんが。小さい者をつまずかせる罪に対して、異常ともいえる断罪のことばを、主が、声を張り上げておっしゃっているように思われるのです。そのような怒りを引き起こすものとは、いったい何なのでしょう。

具体例を用いて考えてみましょう。福音に仕えるある牧師がいたとします。彼のもとには、助言を求める人が後を絶ちません。その来談者の中に、ある性的な罪の奴隷になっている若者がいます。この青年は、助けを必死に求めています。彼(彼女)は、解放の道を見出せるように助けしてくれる人、また、信頼に足る人物として牧師を仰いでいます。ところが、牧師は、あろうことか欲情に燃え、礼儀に反する行動に出ます。その結果、彼(彼女)は、ほどなくもとの不道徳な生活に逆戻りしてしまいます。この若者は、信頼を裏切られたことよって、深い痛手を負い、宗教というものにすつかり嫌気がさしてしまったのです。それからというもの、彼(彼女)は、靈的に半身不随の状態となつていきます。

あるいは、学生がどんな信仰を持っていようと、倦むことなくそれを奪い取る大学の教授がつまずきの元であるかもしれません。懐疑と否定の種を蒔くことよって、聖書の權威を損ない、主の御人格を攻撃するのです。

その振舞いによつて若い信者をつまずかせるのが、クリスチャンという場合もあるかもしれません。自由と放縦の微妙な境目を踏み越えて、いかがわしい行動にふける姿を目撃した若者は、彼の振舞いが、クリスチャンの行動として許されるのだと解釈し、敬虔な、分離の道から離れ、世俗的で信用を落とすような生き方に入っていきます。

主のものである年少者の倫理的、道徳的、靈的な違反行為を助長することは、極めて深刻な問題である、という救い主の警告を私たちは重大に受け取らなくてははいけません。主を信じる小さな者が、罪を犯すきっかけをつくつたという罪責感、不名誉、後悔の海で溺れ死ぬくらいなら、本物の水に溺れて死ぬ方が、むしろましなのです。

「また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。」

(エペソ人への手紙5章4節)

度を越した軽口は避けなければなりません。霊的な力を失う結果になることが確実だからです。

説教者は、生と死、時と永遠という重大な事柄を主題に話をします。メッセージが素晴らしい出来栄であつたとしても、もし、その中に不釣り合いなおかしみがあれば、聞いた人々は、とかく、冗談の方をいつまでも覚え、その他のことをみな忘れてしまうものです。

メッセージの力が、集会後の気楽な会話によって霧散してしまふこともよくあります。厳粛な福音の呼びかけの結果、永遠を思わせる静寂が集会全体を覆います。ところが、人々が席を立てて出て行くこうとすると、打ち解けたおしゃべりのざわめきが聞こえてきます。フットボールの試合の得点や、その日の事柄について話しているのです。聖霊が悲しまれ、神のわざが何一つ起こらないとしても不思議はありません。

いつでも受けをねらつて冗談を飛ばす長老が、長老を模範にしていこうとする若者に、霊的インパクトを与えることは稀です。長老は、気の利いた台詞が若者に受けると思っているのかもしれませんが、実を言えば、若者は深い失望と幻滅を感じているだけなのです。

特に、有害なのは軽口です。それは、生き方を変えるためではなく、笑わせるために、聖書を使って駄洒落を言うことです。みことばを使って駄洒落を言う度に、私たちは、自分の生活は言うに及ばず、他の人の生活においても、聖書の権威を貶め

だからといって、信者はユーモアを少しも解さない、陰気な人間になるべきだ、という意味ではありません。むしろ、自分のメッセージを打ち消してしまうようなことにならないように、ユーモアをコントロールしなければならぬという意味なのです。

キルゲールは、郊外に張つたサーカスの天幕が火事だと叫んで、町に走つてきた道化師の話をしています。人々は彼の叫びを聞いて、腹を抱えて大笑いをしました。道化師は、道化をし過ぎた結果、まともな話をしても信じてもらえなくなつていたので。

チャールズ・シメオン(※イギリスで海外宣教活動の中心を務めた)は、その書齋にヘンリー・マーティン(※インドでの宣教に全生涯を費やした宣教師。若くして召される)の写真を飾っていました。シメオンが部屋に入ると、いつでも、マーティンの目が自分の姿を追つて、こう言っているように思われました。「ひたむきに。ひたむきに。浮かれずに。浮かれずに」。すると、シメオンはこう答えるのでした。「そうとも。ひたむきに励もう。浮かれて時を過ぎすまい。魂が次々と滅びに向かつており、イエスが栄光をお受けになる時が近づいているのだから」

「また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました。」

(コリント人への手紙第一10章10節)

砂漠を通って難儀な旅をしていたイスラエル人は、慢性的に不平をこぼしていました。水の供給に苦情を言いました。食物の供給に苦情を言いました。指導者に苦情を言いました。神が天国からマナを与えても、直ぐに飽き、エジプトのねぎ、たまねぎ、にんにくがほしいと言いました。荒野には、食物市場も靴屋もありますが、神は四十年間、絶えることなく食料を与え、擦り切れることのない靴を与えてくださいました。しかし、この奇跡的な供給に感謝せず、イスラエル人は絶えず文句を言っていました。

時代は変わってはいません。人は、今日も天候について文句を言います。暑すぎる、寒すぎる、雨が多すぎる、雨が少なすぎると。食べ物にも文句をつけます。肉汁が固まりになっている、トーストが焦げていると。仕事と賃金について苦情を、仕事が出来れば失業について苦情を言います。政府と税金の仕組みが悪いと言ひ、それと並行して、給付金やサービスの向上を要求します。他の人々にも、車にも、レストランのサービスにも不満です。取るに足りない体の痛みや疼きを恨み、もつと背が高かったら、もつと痩せていたら、もつとハンサム(美人)であつたら良かったのにも思います。どれほど神が良くしてくださつても、「最近、神様が私にしてくれたことが何かあつただろうか」と言うのです。

私たちのような人間を扱うのは、神にとつて、さぞかし「試練」であることでしょう。神は、私たちに大変良くしてくださり、生活の必需品を与えるだけでなく、ご自身の御子が地上に

おられたときにさえ、享受できなかった贅沢をさせてくださっています。おいしい食物、きれいな水、快適な住まい、沢山の衣類…。私たちには視力、聴力、食欲、記憶、そして、あるのがあたり前だと思つている数々の賜物があります。神は、私たちを守り、導き、支えてきてくださいました。何よりも、主イエス・キリストに対する信仰を通して、永遠のいのちを与えてくださいました。ところが、神にどれだけの感謝が捧げられたのでしょうか。神は、長々と批判を聞かされておられるだけのことが、何と多いことでしょうか。

何年も前のことですが、「最近はどうですか」と聞くと、見事な答えをしてくれた友人がシカゴにいました。彼は、いつもこう答えたものです。「不平を言つたら罪になる」と。私は、思わずつぶやきたくなるときに、そのことをよく思い出します。

「不平を言うのは罪だ」と。不平に対する特効薬は、感謝です。主が私たちのためになしてくださつたことのすべてを思い出すときに、不平を言うべき理由は何もないことに、はたと気づくのです。

「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」

(ヨハネの手紙第一2章15節)

新約聖書において、この世は、神に敵対する王国として描かれています。サタンがその支配者であり、未信者はすべてその配下です。この王国は、目の欲、肉の欲、暮らしむきの自慢を通して人をいざないます。それは、神を除外して自分を幸福にしようとする社会であり、キリストの御名が歓迎されない社会です。グリーンソン・L・アーチャー博士は、この世とは、「神に敵対する人類の特徴ともいえるべき、反逆、自己追求、敵対心を組織化したもの」である、と言っています。

この世には、この世ならではの娯楽、政治、芸術、音楽、宗教、思考のパターン、ライフスタイルがあります。誰もがそれに順応することを迫り、それを拒もうものなら憎しみが返ってきます。世が、主イエスを憎んだのも無理はありません。

キリストは、この世から私たちを救うために死なれました。今や、私たちにとって、世は十字架につけられたものであり、私たちも世に対して十字架につけられたものです。どのような形であれ、信者が世を愛するのは、立派な逆行行為にほかなりません。事実、使徒ヨハネは、「世を愛する者は、神に敵対するものである」と言っています。

信者は、この世の者ではありません。しかし、世に証言をし、世のわざを悪しきものとして責め、「主イエス・キリストに信仰を持って、世から救われよ」と宣べ伝えるべく、世に遣わされているのです。

クリスチャンは、この世から分離して歩むように召されています。以前、これは、ダンスや劇場、喫煙、飲酒、トランプ、ギャンブル等、狭い意味に限定されすぎたきらいがありました。

しかし、これにははるかに多くのことが含まれています。テレビを通してやつてくるものの多くは世俗的であり、目の欲と肉の欲をかきたてるものです。肩書きも、学位や高い収入、先祖からの遺産、有名人になることも、この世的なものです。宮殿のような家にせよ、グルメの食事、人の目を奪う衣服や宝石、高級車、贅沢な暮らしも世俗的です。豪華な船旅、買い物三昧、スポーツや娯楽などに多くを費やす安逸と快楽の生活も、その部類です。自分自身の野望、また、子どもの将来に対する大きな望みも、どれほど霊的で敬虔そうに見えても、世の場合がなるとは言えません。そして、結婚外の性も世的なものであることは言うまでもありません。

救い主に対する私たちの献身と明け渡しので合いが大きければ大きいほど、世的な娯楽や楽しみに費やす時間は少なくなります。C・ステイシー・ウッズは、こう言いました。「私たちがどれだけキリストに献身しているかを知るには、私たちがどれだけ世と分離しているかを見ればよい」と。

私たちはここではよそ者に過ぎない

あなたに墓以外与えなかつたこの地の上に

私たちは安息の場所を懇願はしない

あなたの十字架により

私たちが地に結びつけていた絆は断ち切られた

そしてあなたご自身が

光り輝く世界にある、私たちの宝となった

(J・G・デック)

「見せかけであることも、真実であることも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。そうです、今からも喜ぶことでしょつ。」

(「ピリピ」人への手紙一章18節)

自分が個人的に交際する範囲の外にいる人のことは、たとえ長所があっても認めないというのは、人間に共通の弱点です。それは、あたかも優れたものはみな自分の独占物であり、それと比べうる人やものがあるはずはない、と言うのも同然です。そんな人の姿を見ていると、車のバンパーに張ったユーモラスなステッカーを思い出さないわけにはいきません。(※ベストセラー『私は大丈夫、あなたも大丈夫』(I'm OK, You're OK)という本のタイトルをもじり)「私は大丈夫。あなたはそこそこ(「I'm OK, You're so so」)。このことばすら、しぶしぶ相手を認めたという程度のものです。」

そのような人してみると、自分たちの教会こそ、唯一の正しい教会です。彼らの主に対する働きこそが、真に価値あるものです。あらゆる問題に関する彼らの見解こそが、唯一の権威あるものです。彼らが「死ぬと、知恵も共に死ぬ」(ヨブ記12・2参照)ほどの人々なのです。

パウロは、このような考え方には与しませんでした。他の人も、パウロと同じく福音を宣べ伝えていくことを認めていたのです。確かに、彼を困らせようと、妬みに駆られてそうする者もいました。しかし、それでも彼は、福音が宣べ伝えられていることには変わりない、と彼らの働きを認め、キリストが宣べ伝えられていることを喜んだのでした。

牧会書簡の注解書の中で、ドナルド・ガスリーは、こう書いています。「独自の境地を開いた思想家にとって、自分以外の人

間からも真理の教えが流れ出ることがある、と認めるのには、大変なへりくだりが必要である」。

カルトの場合、信仰とモラルの点のすべてについて、教祖が最終的な権限を持っているというのは紛れもない特徴です。自分が発したことばに対しては、無条件の服従を要求し、信者がそれと異なる意見と接することがないように隔離しようとする。

欽定訳聖書(KJV)の前書きはめつたに読まれることはないでしょうが、翻訳者たちはある人々を、「自分のやり方に固執し、他をことごとくけなし、自分が構築し、自分が納得のいくように手を加えたもの以外には目もくれない、うぬぼれた兄弟たち」と評しています。

寛大な心を持つこと、そして、どの点であれ、美点は進んで認めること。いかなる信徒もクリスチャンの交わりも、自分たちだけが正しいとか、真理を独占していると主張することなどできるはずがない…これこそ、私たちにとつての教訓です。

「…彼が軽率なことを口にしたからである。」

(詩篇106篇33節)

カデシユには水がない、とイスラエルの民が不平をこぼしたとき、神は、「岩に命じれば、水が流れ出る」とモーセに言われました。しかし、モーセは、よくよく民にうんざりしていたため、厳しい口調で言いました。「逆らう者たちよ。さあ、聞け。

この岩から私たちがあなたのために水を出さなければならぬのか」。そう言ったかと思うと、モーセは自分の杖で岩を二度打ちました。この怒りのことばと不従順な行為によって、モーセは、神のおこころを歪めて伝えてしまいました。その結果、イスラエルの民を約束の地へ導くという特権を失ってしまったのです(民数記20・1・13)。

燃えるような熱心に駆られている人が、他の信徒に不適切な態度を取る…。こうしたことは、得てして起こりやすいものです。「自分は訓練ができていますが、彼らとよければ、いつまでもまるで、『おんぶにだっこ』だ。自分には見識が備わっているが、彼らは無知だ」というわけです。

しかし、そういう人自身が学ばなければならないのは、彼らもまた、神が愛したもう人々であり、いかなることばによつて罵ることも、主は容認したまわらないということです。人が罪責の念に打たれ、砕かれずにはいないほど、神のことばを力強く宣べ伝える、ということと、個人的な苛立ちの結果、人に厳しくあたり散らすということとは、まったく別物です。このようなことをしていると、神の最高の報いを自らの手で受けられなくしてしまいます。

ダビデの錚々たる部下の名前が、サムエル記第二の23章に列挙されていますが、その中に書かれていないために、逆に目立

つ名前が一つあります。それは、総司令官ヨアブの名前です。なぜ、彼の名前がないのでしょうか。それは、ヨアブがダビデの友人らを剣にかけたため、と説明されています。もし、そうだとするならば、神の民に対して、舌という剣を使う誘惑に駆られるとき、この出来事は私たちにとつて、この上ない警告となっているのではないのでしょうか。

雷の子の異名をもつヤコブとヨハネが、「天から火を呼び下して、サマリヤを焼き滅ぼしましょうか」(ルカ9・54)と言ったとき、イエスは、「あなたがたは自分たちがどのような霊的状态にあるのかを知らないのです」(同9・55欽定訳)と、彼らを戒められました。(たとえはこのサマリヤ人たちのように)創造されたがゆえに神のものである人々だけでなく、贖われたがゆえに神のものである人々に向かつて不適切なことを口走るならば、主のご叱責を免れないのは当然です。

「神のさばきは真実に基づいている。」

(ローマ人への手紙2章2節 英訳)

神こそは、さばく資格を完全に備えた、宇宙で唯一の御方です。神が、最終的なさばきを私たちに委ねられなかったことは、永遠に感謝してもよいほどです。地上の裁判官が、どうやっても乗り越えられない能力の限界について、考えてみましょう。まず、完全に客観的であることは不可能です。被告が傑出した人物であるとか、容姿に恵まれた人であった場合に、影響を受けないとは言いきれません。賄賂、あるいは、それほどあからさまでない「報酬」により、影響されることもあります。証人が嘘をついているかどうか、いつでもわかるわけではありません。あるいは、嘘をついていないにしても、証人が真実を隠している場合もあります。さらにまた、真実に微妙な陰影をつけている可能性もあります。そして、もう一つ付け加えるとするなら、誠実であっても、証言が不正確であるかもしれないのです。

裁判官は、自分が扱う人々の動機を常に知ることができるのは限りません。しかも、多くの訴訟の場合、動機の確定こそが肝要なのです。

ポリグラフやウソ発見器でさえ、欺くことができます。常習的な犯罪者の場合、罪責に対しての生理的な反応さえも、自由自在にコントロールできることすらあるのです。

しかし、神は、完全なさばき主です。神には、すべての行為、考え、動機についての完全な知識が備わっています。人の心の秘密もさばくことができます。神は、すべての真実をご存じであり、神が知り得ないように妨害できるものは、何一つありません。神は人をえこひいきなさらず、一人ひとりを平等に扱わ

れます。一人ひとりに与えられた知力をご存知であり、知能が遅滞した人に、そうでない人と同じ責任を負わせることはなさいません。神はまた、人の持つモラルの意識がそれぞれ異なることも御存じです。ある人は、他の人よりも誘惑に抵抗する方に恵まれているかもしれません。各々がもつ特権と機会、また、光に反抗してどれほどの罪を犯しうるかもご存知です。作為の罪だけではなく、不作為の罪をも、そして、密やかな罪を、公になつた醜聞と変わらないくらい、簡単に察知されるのです。

したがって、福音を一度も聞かなかつた異教の人々が不当に取り扱われるだろうか、と心配する必要はありません。あるいはまた、人生を通してずっと不当な苦しみを受けた人が、神に正しくさばかれないうままにまわっていることも、また、地上での人生からうまく逃げた邪悪な暴君たちが、罰を免れることもありま

せん。さばき主として座す神は、完全な裁判をしてくださる方です。しかも、その正義とは、真実に基づいたものであり、またそれゆえに、完全に欠陥のないものなのです。

「また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒は流れ出て、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければなりません。」

(ルカの福音書5章37、38節)

ここで言われている皮袋とは、実際は、動物の皮革で作った容器のことです。新しいときには、柔軟でいくぶん弾力性があります。しかし、古くなると、固く、弾力性がなくなり、新しいぶどう酒が、古い皮袋の中に入れられると、ぶどう酒の発酵が進むにつれて、皮袋には抑えきれないほど圧力が増大し、ついには、破裂してしまふのです。

このルカの福音書五章で、イエスは、これを例にとつて、ユダヤ教とキリスト教信仰の激突を説明しておられます。「ユダヤ教の旧態依然の形式、しきたり、伝統、儀式は、硬直化が進み過ぎ、新しい福音の時代がもたらす、溢れる喜びと活力を抑えることができない」と、イエスは言っておられるのです。

この章には、それを示すかのような劇的な出来事が書かれています。一八〇二二節を見ると、中風を患った人をイエスのもとに連れて行つて、癒していたどころ、と四人が、家の屋根をはがしている光景が書かれています。この「斬新」で、意表を突くやり方こそ、まさに新しいぶどう酒がどういふものかを示しています。二一節では、律法学者やパリサイ人がイエスのあら捜しをはじめます。彼らが、古い皮袋なのです。さらに、二七〇二九節には、レビが熱烈にイエスの呼びかけに応答し、友人たちをイエスに紹介しようと、祝宴を開いたことが書かれています。これが、新しいぶどう酒です。三〇節には、律法学

者とパリサイ人たちが、またもや不平をこぼしています。彼らが古い皮袋なのです。

これと同じことが、生活のあらゆる場面でも見られます。お決まりの方法に固まってしまうと、変化に対応することが難しく感じられます。主婦には、食器の洗い方の流儀があり、他の誰かが彼女の流しで不器用に洗っているのを見るだけでいららします。夫は夫で、車はどのように運転するべきかについて、自分の信念があるものですから、妻や子どもの運転を見て、自制心を失いがちです。

しかし、私たちすべてにとって重要なのは、霊的な領域における教訓です。キリスト信仰に伴う、溢れる喜び、興奮、熱心性を持つていたいものです。神が御わざをなしておられるさなかで、傍観者の態度をとっていた、あのパリサイ人たちの偏屈ぶりや冷ややかな形式主義は、私たちが望むものでないばかりか、不要なものです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」

(ヨハネの福音書12章24節)

ある日のこと、幾人かのギリシヤ人たちがピリポのところに来て、「先生。イエスにお目にかかりたいのですが」と、殊勝な願いを申し述べました。それにしてもなぜ、彼らはイエスに会いたかったのでしょうか。ことによると、人気のある新進の哲学者として、アテネへ連れて帰りたいと思ったのでしょうか。あるいは、今や不可避と思われる十字架刑と死からイエスを救いたいと思ったのでしょうか。

イエスは、収穫を得るための重要な原則を一つ例にとつて、お答えになりました。すなわち、「もし、多くの実りを望むのであれば、一粒の麦は地に落ちて死ななければならぬ」と。もし、ご自身が死なないようにすれば、一人のままです。確かに、天においてもろの栄光を一人で味わわれるでしょうが、その栄光を共にする救われた罪人は、一人もないことになります。しかし、もし死ねば、多くの人々が永遠のいのちを受けるための救いの道が開かれます。イエスにとつては、快適な暮らしではなく、犠牲の死を遂げることこそが絶対に必要なことであつたのです。

T・G・ラグラントは、かつてこう言いました。「成功を確実にするためのあらゆる計画の中でも、最も確実なものはキリストご自身の計画であり、一粒の麦となつて地に落ち、死んでしまふことである。もし、麦の粒となることを拒み、自分の将来、人の評価、財産、そして、健康までも犠牲にする覚悟がない場合、あるいは、召されたときに、キリストのためとあれば家を

捨て、家族の絆が裂かれるということも覚悟しない場合、私たちは単独のままである。しかし、もし、豊かな実りをもたらしたいと願うなら、ほむべき主ご自身に倣つて一粒の麦となり、死ななければならぬ。そうすることによつて私たちは多くの実をもたらし得るのである。」

アフリカにいたある宣教師のグループが、倦むことなく長年労したものの、神の前に永遠に残る実がならぬ実ることがなかつた、という記事を何年前か前に読みました。いても立つてもいられなくなつた彼らは、ついに、「会合を開いて、祈りと断食をもつて神の前に出よう」と呼びかけました。それに続く話し合いの中で、宣教師の一人が、「一粒の麦が地に落ちて死なない限り、祝福を見ることは決してない、と私は思う」と言いました。それから間もなく、この宣教師は病にかかり、死にました。それから収穫が始まりました。それこそは、彼が予告していた祝福だつたのです。

サミュエル・ツウエマーは、こう書いています。

損失なくして収益あらず

十字架によらずして救われることあたわず

麦、もし増えんとせば

地に落ちて死ぬほかあらず

見事に実りし小麦畑が

黄金の穂を神に向かい揺れ動かすのを見るとき

知れ、地に落ちて死にたる麦の種のありしことを

十字架に自らを架けたる魂のありしことを

格闘し、涙し、祈りたる者ありしことを

地獄の大軍にもひるまずに戦いたる者ありしことを

「鼻で息をする人間をたよりにするな。そんな者に、何の値うちがあるうか。」

(イザヤ書2章22節)

私たちの人生の中で、本来、神のみが占められるべき地位を、人に捧げたときに待っているのは、苦い失望です。そのときになって、最高に思えた人も、所詮は人間にすぎなかつたと知るのです。確かに、並外れて優れた資質を持っているかもしれないませんが、やはり、その足は鉄と粘土なのです(ダニエル書2・33参照)。こう言うのと、皮肉のように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。それが現実なのです。

侵略軍がエルサレムを脅すに至ると、ユダの民はエジプトに救いを求めました。イザヤは、信頼する相手を間違えていると批判するかのように、(アッシリヤの將軍、ラブ・シャケの)こ

とばを記しています。

「おまえは、あのいたんだ葦の杖、エジプトに抛り頼んでいるが、これは、それに寄りかかる者の手を刺し通すだけだ。エジプトの王、パロは、すべて彼に抛り頼む者たちにそうするのだ」(イザヤ36・6)。また、エレミヤも後になって、同様な環境に置かれましたが、こう言っています。「主はこう仰せられる。『人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ』」(エレミヤ17・5)。

詩篇の記者は、次のように書いて、この問題に関し、真の洞察を示しています。「主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。主に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい」(詩篇118・8、9)。そして、こうも言っています。「君主たちに頼つてはならない。救いのない人間の子に。その息が絶え

ると、その者はおのれの土に帰り、その日のうちに彼のもろもろの計画は滅びうせる」(詩篇146・3、4)。

もちろん、お互いに信頼しなければならぬということには、それなりの意味があることは認めなければなりません。例えば、一定の信頼と尊敬がないとしたら、結婚はどうなるでしょうか。ビジネスの世界において、小切手を現金代わりに使うのは、相互の信頼というシステムがあるからです。私たちは、医師の診断と処方箋が適切であると信頼しています。また、食品売り場にある缶詰や包装品の表示を信頼しています。関わる人々に対して、ある程度の信頼がなければ、どんな社会であれ、生活することは不可能であると言つていいでしょう。

危険がやってくるのは、神にしかできないことを、人がやつてくれると信頼するとき、すなわち、主を王座から引き降ろし、そこに人間を据えるときです。神に代わって私たちが愛情を向ける人、より頼む相手として神にとつて代わる人、私たちの生活において神だけがお持ちになる特権を侵害する人は、それが誰であれ、やがて私たちに苦々しい失望感を与えることは火を見るより明らかです。人間は信頼するに足りない、と手遅れになつてからやつと気がつくのです。

「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいたるようになり、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによつて、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」

(ヨハネの福音書17章21節)

偉大な大祭司としてのその祈りの中で、私たちの主は二度に渡り、ご自分の民が一つになるように、と祈られました(21・23節)。一致を求めるこの祈りは、エキュメニカル運動、すなわち、キリスト教会を名のするすべての集まりを統合する大きな組織を支持する聖書の根拠とされてきました。残念なことに、この教会一致運動が達成されるためには、キリスト教の根本的教理を放棄、または、再解釈しなければなりません。マルコム・マギーリッジがこう書いている通りです。「教会一致運動が勝利を収めるのは、歴史の皮肉と云うべきか、一致するべきことがない時なのである。さまざまな宗教団体が支障なく加わることができそうだと感じるのは、信じていることがほとんどないため、相違点もそれに比例してほとんどないからである」。

主イエスが、ヨハネ一七章で祈られたのは、このような一致のことだったのでしようか。そうであるとは思えません。主が思っておられた一致というのは、神が、主を遣わされた世界が信じるようになる一致である、と主が言っておられるからです。どんな外面的な連合体を作っても、そのような結果をもたらすことができるかどうか、はなはだ疑問です。

主は、ご自分の考えにある一致をこう言つて定義されました。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、彼らがみな一つとなるためです。」主は、こうも言っておられます。「わたしたちが一つであるように、彼らも一つであ

るためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。」

私たちも共有でき、御父と御子も共有される一致とは、何でしょうか。御父と御子に共通する神性のことではありません。私たちに、それが共有できないからです。主イエスは、道徳的類似性という一致を言っておられたのではないかと私は思うのです。信者がこの世に対し、神とキリストの御人格を明瞭に示す点で一つになるように、と主は祈られました。すなわち、正しく、聖く、恵みと愛、清さと忍耐、自制と柔和、喜びと寛容に満ちた生活のことです。

ロナルド・サイダーは、その著書『飢餓の時代の豊かなクリスチャン』の中で、「キリストが祈られた一致は、困窮があればいつでも持ち物を分け合つた初代のクリスチャンに、それが表されていた」と言います。彼らには、真の「コイノニア」、すなわち、共同体の心があつたのです。

「主に従う者たちが、愛によつて一致するようになるというイエスの祈り、すなわち、主が御父から来たことをこの世が認めないわけにはいかないほど鮮明になるようにという祈りは、応えられた。少なくとも一回は！それが起きたのは、エルサレム教会である。彼らの共同生活の特質は、普通ではあり得ないものであつたため、使徒たちの教えを力強く後押ししたのである」(使徒2・45・47、4・32・35参照)。

今日、そのような一致があれば、世は深い感銘を受けずにはいられないことでしょう。クリスチャンたちが一致した証しを示して、主イエスのいのちを輝かせたならば、不信者は自分の罪深さを責められ、生ける水を求めるようになるはずで、今日の悲劇は、多くのクリスチャンが、世的な隣人たちとほとんど変わらないことです。そのような状況のもとでは、不信者が回心するきっかけはないに等しいと言つても、過言ではありません。

「不正に得た財産は減る」

(箴言13章11節 英訳)

「十万ドルは、すでにあなたのものかもしれません!」こんなキャッチフレーズで、なんらかのギャンブルに参加させようという誘惑に、私たちは絶えずさらされています。主婦がスーパーで買物をしていると、「掛け金を独占できる仕組みの」富くじを買いませんか」と誘惑されます。ごく普通の市民であっても、

「雑誌の予約購読を兼ねて」あなたの名前を送って目の前に迫った総額数億円の宝くじに参加しませんか」と誘われます。あるいは、「勝つことは、ほとんど間違いない」というビンゴ大会への誘いという場合もあるでしょう。それから、もちろん、どうみても賭け事としか言いようのない、ルーレット、競馬、ドッグ・レース、ナンバーズ(数当て)賭博があります。

聖書は、これらすべてについてどのように言っているのでしょうか。良いことは、一つも言っていない。

いわく、「急に得た財産は減るが、働いて集める者は、それを増す。」(箴言13・11)。

いわく、「貪欲な人は財産を得ようとあせり、欠乏が自分に来るのを知らない」(箴言28・22)。

いわく、「しゃこが自分で産まなかつた卵を抱くように、公義によらないで富を得る者がある。彼の一生の半ばで、富が彼を置き去りにし、そのすえはしれ者となる。」(エレミヤ17・11)。

確かに、十戒には「あなたは、賭け事をしてはならない」と明確に書かれてはいませんが、「あなたはむさぼってはならない」(出エジプト20・17 ※口語訳)と、はっきり書かれています。ギャンブルはむさぼりでなくして、なんでしょうか。

賭け事には、常に、クリスチャンにとつて悪いものという意味合いがつきまといまいます。それは、ローマ兵が、十字架の場で、縫い目のない主の下着をめぐって賭け事をしたことが思い出されるからです。

ギャンブルを慢性的に行っている人が、家族にもたらした貧困と悲しみのこと、損失を取り戻すために犯された犯罪、そして、ギャンブルと切つても切り離せない悪のことを考えてみれば、クリスチャン生活にギャンブルが入り込む余地がないことは明白です。

食べ物と衣服があればそれで満足するべきことを信者に教えないさい、とテモテに言った後、パウロは、こう警告しています。

「金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります」

(1テモテ6・9)と。

「行って、ふたりだけのところで責めなさい。」

(「マタイの福音書18章15節」)

誰かがあなたを怒らせたり、嫌な思いをさせたとします。そのような場合、聖書は、「出かけて行って、その人にその過ちを伝えてあげなさい」と言っています。しかし、そんな気持ちにはなれません。難しくできないのです。

その結果、くよくよと思い悩みはじめます。相手がしたこと、どれほどひどい間違いをしたかを、心の中で再現します。仕事に集中すべきときにも、頭の中では、その出来事の細部まで思い出しています。そうすると、胃液が沸騰しはじめます。眠るべきときにも、その不愉快な出来事がよみがえり、「ポイラー」の圧力が高まっていきます。「出かけて行って、相手の過ちを教えてあげなさい」と、聖書は言っているのですが、たじろいでしまうのです。

名前がばれない方法で、相手に自分の言いたいことを知らせる方法はないものか、とあなたは考えます。あるいは、相手が自分のしたことと恥をかかないものか、と漠然と期待するかも知れません。ところが、そんなことは何も起こりません。あなたには、自分のすべきことがわかっているのですが、相手と顔を突き合わせて対決するトラウマを考えると、ついひるんでしまうのです。

ここまで来ると、この苦しい「試練」の拳句、ダメージを大きく受けているのは、もはや相手ではなく、むしろ、あなた自身です。むつりしたあなたを見て、何かがあったのだ、とまわりの人も察知します。誰かがあなたに話しかけても、あなたは上の空です。あなたが、他のことで頭を占有されているため、仕事にもマイナスが出ます。総じて言えば、気が散って集

中できません。しかもなお、聖書は言うのをやめません。「行って、ふたりだけのところで責めなさい」と。自制心を精一杯働かせて、それまでは誰にも話さないでいたのですが、ついに、その圧迫に耐えられなくなります。「もうだめだ」と思ったあなたは、誰かに打ち明けます。もちろん、祈ってもらおうという理由です。ところが、同情してもらえらると思っていたのに、こう言われてしまいます。「なぜ、あなたを怒らせた本人の所に行つて、話さないのですか」と。

「そうだ、そうすればいいのだ」。あなたは、敢然と立ち向かう決意をします。言うべき台詞を練習した後で、あなたはみことばに従い、相手にその過ちを指摘します。すると、彼は驚くほど冷静に受け止め、「そのようなことになり、申し訳ありません」と言い、あなたに謝罪します。対談は、祈りをもって終了します。

その場から立ち去るあなたは、肩の重荷が取り去られたのが分かります。胃のむかつきは収まり、新陳代謝も正常に戻ります。みことばにどうして即座に従わなかったのか、と自分を恨めしく思うのです。

「見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」

(サムエル記第一15章22節)

サウル王に対する神のご命令は単純明快なものでした。アマレク人を打ち、そのすべての財産を破壊せよというのです。そのすべて、です。いささかも略奪するではありません。しかし、サウルは、アガグ王、また、えりぬぎの羊、牛、よく肥えた家畜、子羊などを生かしておきました。

サムエルがギルガルでサウルに会った朝、サウルは自信満々に、「私は、主が命じられた通りに行いました」と言います。ところが、ちょうどその瞬間、納屋の「聖歌隊」がオラトリオをはじめたのです。羊は鳴き、牛の低い声も聞こえてきました。間が悪いとは、このことです。

もし、サウルがすべてを殺したなら、どうして羊の鳴き声が聞こえるのか、もちろんサムエルは、そのわけを知りたいと思いました。すると、王は、民のせいにしたり、宗教的理由で仕方のないことだった、などと言いつつ、自分の不従従を隠そうとしました。彼は、次のように言いました。「民は羊と牛の最も良いものを惜しんだのです。あなたの神、主に、いけにえをささげるためです」(サムエル15・15)。

そのときでした。サウルの耳に、その罪を責める神の預言者の声が、雷鳴のように轟いたのは。「見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ」(サムエル15・22・23)。

従うことは、儀式やいけにえ、供え物よりも重要です。

母親が生きている間、ずっと母親を疎んじ、従わなかった家族の話で以前聞いたことがあります。ところが、彼女が死ぬと、その家族は、亡骸を(トップブランドの)クリスチャン・デイトールのオリジナルのドレスで包んだのです。長年に渡る不従従と無礼を償おうという、浅ましくも空しい試みと言うほけはありません。

聖書に反する立場や交友関係を捨てない弁解として、そうした方が、そうでない場合より広い影響をおよぼすことができる、という言い訳をよく聞きます。しかし、神は、そのようなもつともらしい理屈でごまかされる御方ではありません。神は、私たちが服従することを望んでおられます。私たちが影響を及ぼすことができる範囲については、神が配慮してください。実を言うと、もし、私たちが不従従であれば、私たちが及ぼすのはマイナスの影響ばかりなのです。主との交わりのうちに歩んで初めて、私たちは他の人々に対して、敬虔な影響を及ぼすことができるのです。

ウイリアム・ガーナルは、言いました。「いけにえ(sacrifice)を捧げても従順でないなら、それは冒瀆(sacrilege)である」と。自分の不従順を、さも敬虔そうな宗教的言い訳という隠れ蓑でおおうとするなら、事態は一層ひどいものとなります。そんなもので神をごまかそうとしても、無駄というものです。

「黄金と、黄金を聖いものにする神殿と、どちらがたいせつなのか。」

(マタイの福音書23章17節)

イエスの時代の律法学者とパリサイ人は、こう教えていました。もし、人が神殿によって誓うなら、必ずしも約束したこと果たす義務はないが、神殿の黄金をさして誓うならば、事情はまったく別で、その誓いには拘束力がある、と。彼らはまた、祭壇によって誓う場合と、祭壇に置かれたいけにいによって誓う場合とは違う、という誤った区別をしました。前者の場合、破つてもよいが、後者の場合は、拘束力があるというのです。

「あなたがたの価値観は完全に歪んでしまっている」と主は彼らに告げました。黄金に特別な価値が生まれるのは神殿のおかげであり、いけにえが特別なものとして他と区別されるのは祭壇のおかげであるからです。

神殿とは、地上における神の御住まいでした。どの黄金にとつても、その神の御住まいに自分が用いられる以上の榮譽はありません。その黄金は、神の家との関係のゆえに、特別なものになつていくのです。祭壇とその上に置かれたいけにいの関係も、同様です。祭壇は、神への礼拝になくてはならない部分です。動物にとつて祭壇の上でいけにいにされる以上の榮譽はありません。もし、動物に高い志があるとすれば、ゆくゆくはそのようにされることを求めたことでしょう。

ある旅行者が、パリの古道具屋で、安い琥珀こはのネックレスを買いました。ニューヨークで高い関税を払わなければならぬことになつて、彼は好奇心を持ちました。鑑定してもらおうと、宝石商の所に出かけたところ、「二万五千ドルで買いましょ

う」と言われました。二番目の宝石商は、「三万五千ドルで買いましょ」と言いました。「なぜ、それほどの価値があるのですか」と尋ねると、宝石商は、それを拡大鏡の下に置きました。旅行者が覗き込んで見ると、そこには、「ナポレオン・ボナパルトからジョセフィーヌへ」と書いてありました。そのネックレスを高価なものにしたのは、ナポレオンという名前だったので

す。以上のことがどのように適用されるかは、改めて言うまでもありません。私たちは、自分自身だけでは無であり、何もできません。ところが、そんな私たちが特別な存在とされたのは、ひとえに主と、主への奉仕に関わる者となつたからです。スボルジョンが言つた通りです。「カルバリの十字架と絆ができたことこそ、あなたに関わる最も素晴らしい出来事である」。

あなたには、人並外れた明晰な頭脳があるかもしれませんが、これは、感謝すべきことです。しかし、このことを忘れてはなりません。その知性が、主イエス・キリストの御用に用いられて初めて、最高の使命を全うできるのです。あなたの知性を聖別してくださるのは、キリストなのです。

あなたには、この世が喜んで高い代価を払う才能があるかもしれませんが、教会でそれを用いるのはもつたいないほどだ、とさえ考えているかもしれません。しかし、才能を聖別しているのは教会であつて、あなたの才能のおかげで教会が聖別されているわけではありません。

あなたには、大金があるかもしれませんが、それを貯め込むことも、わがままのために使うこともできませんが、御国のために使うこともできるのです。その最高の使途とは、キリストのみこころを前進させるために用いることです。あなたの財産を聖別するのは御国であつて、その逆ではないからです。

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

(コリント人への手紙第二3章18節)

私たちは、自分が礼拝するものに似ていくと、聖書は教えます。その大切な洞察が今日の聖句に含まれています。それを次のように分解してみましょう。

「私たちはみな」——つまり、真の信者はすべて。

「顔のおおいを取りのけられて」——罪は、私たちの顔と主との間におおいを作る原因です。もし、罪を告白し、棄てるなら、顔からおおいを取りのけられます。

「鏡のように」——鏡とは、神のみことばのことで、それを私たちは見つめるのです。

「主の栄光」——主のご品性の卓越性を意味します。聖書の中に、私たちは完璧な主の御人格、完璧な主の御わざ、主の導きを瞳を凝らして見るのです。

「主と同じかたちに姿を変えられて行きます」——私たちは、主に似たものになっていきます。主を見つめることによつて、私たちは変えられていくのです。主に心が占有されればされるほど、私たちは主に似ていきます。

この変化は「栄光から栄光へと」——一つの栄光の段階から次の段階へと続きます。一遍に起きるわけではありません。それは、私たちが主を見つめる限り継続するプロセスなのです。それによつて、私たちの人格に変化が起きていくのです。

「これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」——聖霊は、聖書に啓示された御方として、信仰をもつて救い主を見つめる人すべてのうちに、キリストの似姿を作りだしていきます。

『ナサニエル・ホーソーン短編小説集』の中の「大きな石の顔」で、村を見下ろす、自然にできた人間の高貴な顔に、やがて似ていったのは誰だったでしょうか。それは、ギャザーゴード氏(※「黄金を集める人」の意)や、ブラッド・アンド・サングター將軍(※「血と雷」の意)ではなく、詩人のオールド・ストーニー・フィズ(※「石のように冷たい表情」の意)でもなく、静かに考え深くそれを見つめていたアーネスト(※「ひたむきな」の意)でした。

毎日、仏教の寺院に行き、足を曲げて座り、腕組みをして、緑色の仏像を見つめていた男の話を以前聞いたことがあります。このような願想を何年も続けた後、彼は実際に、仏陀のような顔になっていったといえます。本当の話かどうかわかりませんが、敬虔な思いをもつて神の御子に心を占有していただく結果、品性は主に似ていくのです。

聖潔に至る道は、主イエスを見つめることにあります。キリストと罪のことを同時に考えるのは、普通できることではありません。私たちの思いが、主に占有されているわずかな時間の間、私たちは罪から最も解放された状態にいます。その次に、私たちが目標とすべきは、主を見つめる時間の比率を高めていくことではないでしょうか。

「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」

(ピリピ人への手紙4章11節)

パウロが自分自身の経済的な必要を訴えることがまったくなかったのは、注目に値します。パウロの生活は、信仰の生活でした。神が自分を奉仕に召されたと信じたパウロは、神はそのご命令に伴う支払いをまかなってくださる、と固く確信していました。

クリスチャンは今日、自分たちの困窮を知らせるべきでしょうか。あるいは、募金を懇願するべきでしょうか。いくつか考慮すべき点があります。そもそも、そのような慣習が正当であるという根拠が聖書にはありません。使徒たちは、他の人の必要を知らせることはしても、自らのためにお金を求めることは一度もありませんでした。

信仰による生活は、神のみを見上げるという姿勢と矛盾がありません。神には、ご自身が私たちにさせたいと望まれることであればどんなことでも、必要な資金を与えてくださいます。神が、ちょうど適切なときに、びつたり必要な額を備えてくださるのを見るときに、私たちの信仰はこの上なく強められます。しかも、その備えが奇跡であることが否定しようもない事実であれば、神に大いなる栄光が帰されます。

それに対して、巧妙な資金集めの技巧を駆使して経済をやりくりするのであれば、神のおかげであるということにはならないのです。献金の訴えや請願という方法を使って、「神のために」働きを続行したとしても、それがまったく神のみこころに沿っていない場合があるかもしれません。あるいは、御霊が、とうの昔に離れて行かれた働きを、いつまでも継続させるとい

うこともあり得るのです。しかし、もし、神の超自然的な備えを頼みとするなら、神の備えが続く限り、続けることができるのです。

強引なまでの募金要請が、クリスチャンの働きの成功の度合いを判定する新しい指標となりつつあります。宣伝に最も巧みな人が、最大の収益を手にするのです。資金集めの運動にお金^がが流用される結果、大きな働きに支障が出るかもしれません。その結果、妬みと不一致が生じることが少なくありません。

C・H・マッキントッシュ(※モーセ五書の注解をはじめ、多くの霊的著作を残した)は、自分の個人的必要を明らかにすることについては懐疑的でした。「私の必要を、直接、間接を問わず、誰かに知らせることは、信仰生活からの離脱であり、神の御顔に泥を塗ることである。それはまさに、神に対する背信行為である。それは、神が私を置き去りにされたがゆえに、仲間の助けを求めなければならぬというに等しい。それは、生ける泉を捨てて、水の漏れる水ために頼るようなものだ。それは、私のたましいと神の間に人間を介入させ、私からはたましいの豊かな祝福を奪い、神からは栄光を奪うものである」。

同様に、コリー・テン・ブーム(※ナチスの迫害下にあったユダヤ人救出に尽力し、自らも強制収容所の苦しみを経験した)は、『主のための放浪者』でこう書いています。「私は、世知に長けた人々の玄関先で乞食の真似をするより、富める御父に信頼している子供のようでありたい」と。

「…父のほかには、子を知る者がなく…」

(マタイの福音書11章27節)

主イエス・キリストという御方は深い神秘に包まれています。

そのひとつは、完全な神性と完全な人間性が、ひとりの人の中で融合しているという神秘です。例えば、次のような疑問が湧くでしょう。神のご本性を有しながら、同時に、限りある人間としての制限はないのだろうか。人間にすぎない者は誰であっても、キリストという御方が理解できません。理解できるのは御父をおいてほかにいないのです。

教会を苦しめた最も深刻な異端の多くは、この問題に集中しています。自分の弱さを棚に上げ、人間は自分の理解を超えた深いことを理解しようと躍起になってきました。主の神性を強調するあまり、主の人性を軽視する人々がいました。主の人性を強調するあまり、主の神性を軽んじる人々もいました。

かつて、ウィリアム・ケリーは、こう書いています。「間違いが入り込むのは、神の御子が人間となられた、という点に關してである。というのは、主イエスという御方が一筋縄でとらえられないからこそ、人々の本音が露わになり、その結果、致命的な矛盾に陥るからである。主の、神たる栄光をあえて否定する人がいることは確かにその通りである。しかし、主イエスを貶めるもつと巧妙な方法がある。主の神性は認めるが、その栄光を主の人間性の中に埋没させ、主がご自身について言っておられることを無効にしよう、というものである。その結果、たちまち混乱が起き、せつかく主がわれわれと関わりを持ってくださったということまで分かったのに、主は、神と共有するものが何もない、と言いつつ始末である。この問題からたましいを安全に守る方法は、ただ一つしかない。それは、ことさら

詮索や議論をしようとせず、人間の愚かな思いに駆られて、聖なる場所に踏み込まないこと、また、そのような聖なる地においては、礼拝者でありさえすればよいことである。たましいがそれを忘れるなら、そこには神がおられないことに気づくであろう。そして神は、思い上がった人間が、あえて主イエスについて語り、自分の愚かさを悟るようにされるのである。神のひとり子について啓示されたことを知るためには、聖霊による以外にない」。

主のしもべとして、敬愛を集めていた人物が、学生たちに向かつてこう助言したことがあります。「神性と人性という」主の二重のご本性を論じる際には、聖書が何と言っているかということから、決して離れてはならない」と。さまざまな誤りが入り込むのは、私たちが自分の考えや憶測を入れるときなのです。

御子を知る人は誰もいません。御父のみが御子を御存じなのです。

主の誉れにひそむ高き神秘の数々は

被造物の理解の及ぶところにあらず。

栄光の主は主張したもう、

御父を除いて、御子を解すること能わずと。

(ジヨサイア・カンダー)

「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れませんが、それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によつてわかりまえるものだからです。」

(コリント人への手紙第一2章14節)

生まれながらの人とは、新しく生まれるという経験がまだまったくない人のことです。その人には、神の御霊がありません。霊的な真理も、まるでナンセンスにしか聞こえないため、受け入れる気持ちがありません。しかも、それに留まらず、霊的な真理を理解することができません。なぜなら、それは、聖霊の光に照らされて初めて分かるものだからです。

この点は、強調しておかなければなりません。救われていない人は、単に神に関わる事柄を理解したいと思わないだけでなく、理解できません。その能力が、もともと備わっていないのです。

これは、科学者や哲学者、その他の世の専門家たちを適切に評価する助けになります。日常的な問題について語る分については、専門家として敬意を払いますが、ひとたび霊的領域に入り込んできたら、権威を持って語る資格はいささかもないと、私は考慮の対象から外しています。

どこかの大学教授や、あるいは、自由主義(※靈感された神のこと)としての聖書を認めない立場)に立つ聖職者が、聖書を疑い、否定したことがニュースの見出しになっても、私は特段に驚きはしません。当然予期できる範囲のことなので、無視します。生まれ変わっていない人が、神の御霊に関わる事柄について話すとしたら、自分の領分を超えているのです。

F・W・ボームは、著名な科学者、哲学者たちを、大型客船のファースト・クラス専用遊歩廊プロムナード下に立ち入る資格のない二等船客に、例えています。「科学者や哲学者であるという理由だけでは、いわば、二等船客であつて、フェンスで仕切られた自分たちの領域に留まつていてもらわなければならない。彼らは、キリスト教信仰の権威であるわけではないのだから。…事実を言えば、二等船客である彼らに侮蔑されたからといって、私たちの信仰は、いささかもショックを受けないどころか、信仰を、彼らに確証してもらつたり、支援してもらつたりする必要がそもそもないのである」。

もちろん、科学者や哲学者である聖徒も、中にはいるかもしれません。そのような場合について、ボームは、こう言うのです。「そのような人のポケットからは、いつもファースト・クラスの切符が顔をのぞかせている。私は、その人と楽しく遊歩廊下を歩く。(『天路歷程』の著者として有名な)バニヤンを、私が(その職業である)鍍掛屋かかけや(※鍋、釜などの修理をする職人)であると思わないのと同様、その人を科学者としては見えない。私たちは、ただ同じ船のファースト・クラスの乗客同士なのである」。

ロバート・G・リーは、こうも言っています。「たとえ、批評眼と学識があり、岩石や分子、気体について、すべてのことを知っている人であつたとしても、キリスト教信仰と聖書に対して審判を下す、ということになると、無能をさらけ出す以外にないかもしれない」と。



「主がヨセフとともにおられたので、彼は成功を収めた。」

(創世記39章2節 英訳)

英訳聖書の最も初期のもの一つに、この聖句を「主がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となった」と訳したものがあると聞きました。ひよつとすると、「幸運な」という語は、当時は違う意味だったのかもしれない。いずれにしろ、それ以降の訳者たちが、「運」にもてあそばされる領域からヨセフを救出したことを嬉しく思います。

神の子どもにとつて、「運」などというものはありません。その人生は、愛に満ちた天の御父によつて、制御され、守られ、計画されているのです。偶然に起きることは一つもありません。

そうであれば、クリスチャンが誰かに向かつて、「幸運がありますように」というのは、首尾一貫していません。また、「幸運に恵まれた」ということも同様におかしなことです。そのような表現は、神の摂理という真理を事実上否定するものにほかなりません。

不信仰の世は、さまざまなものを経験に因連づけられます。ウサギの足、鳥の胸の叉骨(※食後残ったこの骨を2人で引つ張り合い、折れた時に長い方を取った者には願ひ事かなえられるという迷信)、四つ葉のクローバー、蹄鉄(魔除けの力があるとされる。幸運がこぼれないように、先端部が必ず上に向くように置かなければなりません!)。指を交差させて(幸運を祈つたり)、木に触れたりします(※自慢などをした後で、たたりを恐れて、手近にある木製品に触れたり、叩いたりする習慣のこと)。それは、あたかもそのようにすれば、出来事を良い方向にもつていくことができるのか、不幸を未然に防ぐことができるか、ともも言っているかのようです。

そのような人は、不運についても、いろいろなものごとの因連づけをします。黒猫、十三日の金曜日、梯子の下を歩くこと(※縁起が良くないとされる)、十三号室、十三階などです。そのような迷信に束縛されて生活している人のことを考えると悲しい気持ちになります。それは、不必要なばかりか、意味のない束縛であるからです。

イザヤ書六五章一一節で、神は、幸運の偶像神を礼拝していたと思われるユダの人々に、罰が下ると警告しておられます。

しかし、あなたがた、主を捨てて者、

わたしの聖なる山を忘れる者、

ガドのために食卓を整える者、

メニのために、混ぜ合わせた酒を盛る者たちよ。

ここで問題となつている罪について、断言することはできませんが、幸運や運勢をつかさどる偶像に、民が捧げものを持ってきたのではないか、という疑念がつきまといまいます。神は、そのような習慣を憎まれましたが、それは、今も変わりません。

私たちがまつた多くの偶然や、「宇宙のサイコロ」を転がされて運命が決められるものではないこと、また、運にもてあそばされるものではないことを知るとき、何という幸いな確信が生まれることでしょうか。人生に起きるすべてのことは、計画されておられ、意味深く、目的を秘めたものなのです。それは私たちにとつて、運命ではなく、御父のなさることであり、偶然ではなくキリスト、運ではなく愛によるものなのです。

「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。」

(列王記第一19章4節)

神の民であつても、エリヤのようにノイローゼに苦しむことは稀ではありません。モーセやヨナもまた、死にたいと願つたのです(出エジプト32・32、ヨナ4・3)。神が信仰者にこのような問題を免除する、と約束されたことは一度もありません。また、このような苦悩があるからといって、それがその人の信仰や霊性の欠如を示しているわけでもありません。それは誰に起きてもおかしくないものなのです。

うつ状態に襲われたときは、こんな具合です。神がご自分の民を見捨てることは決してないとよくわかつているにもかかわらず、神は自分を見捨てられたと感じます。慰めを求めて神のみことばを読もうとしますが、なぜかいつも、赦されない罪とか、背教者の絶望的な状態に関わる箇所を開いてしまします。外科手術によつても、医薬品によつても、除去することのできない苦悩による挫折感を味わいます。友人は、「気持ちを切り替えてみたら?」と言いますが、どうしたらそうできるのかは言ってくれません。即効薬を求めて祈りますが、精神的疲労の重さとは比べると、軽減される程度は微々たるものです。自分のことと、自分のみじめさ以外のことは、考えることができませぬ。落胆のあまり、何か劇的な天災に巻き込まれて死ねたらと願うほどです。

このようなうつ状態には、いくつかの異なった原因が考えられます。肉体的な問題かもしれません。例えば、貧血が原因で考え方に混乱が起きる場合があります。霊的な原因の場合もあるかもしれません。例えば、告白していない罪、あるいはまだ

赦されていない罪によつて起る場合があります。感情面での原因があるかもしれません。例えば、配偶者の浮気によつて起る場合があります。働き過ぎや極度の精神的ストレスの結果、神経を消耗してしまう場合もあります。あるいは、人によつては、好ましくない反応を引き起こす薬剤が処方されたためという場合もあります。

いったいどうしたらよいのでしょうか。まず、神の前に出て祈り、神の素晴らしいご目的を、神が実現してくださるよう願うことです。気づいている罪のすべてを告白し、捨てることです。誰であれ、あなたを不当に取り扱った人を赦すことです。それが済んだあとで、徹底的な健康診断を受け、肉体の疾患が原因という可能性があれば、それを除去することです。働き過ぎ、心配、ストレス、また、あなたを悩ませるその他の原因を排除するために、思い切つた行動をとることです。規則的に休息をとり、からだに良い食べ物を食べ、戸外でからだを動かすこと。これらはすべて、療法として適切です。

それが済んだら、自分のペースを守る方法を習得し、自分をまたしても瀬戸際に追いやりかねない主張に対して、大胆に「ノー」と断ることです。

「そのために、私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています。」

(使徒の働き24章16節)

今のような社会に住み、墮落した古い性質を抱えて生きている私たちは、さまざまな倫理的な問題に絶えず直面しないわけにはいきません。それは私たちがクリスチャンとしての行動原則を、どれだけ真剣に守ろうとしているかを試す諸問題でもあります。

例えば、学生は、試験でカンニングという誘惑にさらされません。もし、不正な方法で取得された卒業証書がすべて返却されることになったら、学校も大学も、収納する場所がなくなってしまうことでしょう。納税者は、所得を過小評価する反面、出費を過大評価し、関連情報を開示しないでおこうという誘惑にいつもさらされています。

ビジネスの世界であれ、政治の世界であれ、法律の世界であれ、物を言うのは袖の下です。賄賂がまかり通ると正義が曲げられます。贈り物が届くと、発注先が代わりません。リベートがあると、仕事は途切れることなく舞い込んできます。裏金を渡せば、過激ときには途方もない要求をする税務査察官もおとなしくなります。

ほとんど、どの職種の場合でも、不正直な方向に向かう圧力がかかります。クリスチャンの医師は、どう見ても虚偽である保険の請求に署名を頼まれます。弁護士は、有罪に間違いなくとわかつている犯罪者を弁護するかどうか決めなければならず、当事者が双方ともクリスチャンである場合の離婚訴訟を引き受けるかどうかを決めなければなりません。中古車業者には、総走行距離計に手を加え、距離数を低く表示してみてもどうか

という内的葛藤があります。労働組合に加入した労働者には、ストライキ実施となった場合、暴力も辞さない覚悟がなければなりません。クリスチャンの客室乗務員は、酒類を出すべきでしょうか(そもそも、その仕事を選んだ以上、選択の余地はあるのでしょうか)。クリスチャンの運動選手は、主の日に競技をするべきなのでしょうか。食料雑貨店を営むクリスチャンは、癌を発生させるとわかっている煙草を売るべきなのでしょうか。

クリスチャンの建築家が、ナイトクラブや、近代主義・自由主義神学を掲げる教会の建物を設計するのは避けるべきことなのでしょうか。クリスチャンの団体であるのに、ビール会社からの贈答品を受け取っていいのでしょうか。あるいは、結婚をせずに同棲しているクリスチャンからの贈り物であつたらどうでしょうか。クリスチャンのバイヤーが、業者から木箱一杯のオレンジや、ジャム、ゼリーの詰め合わせをクリスマスに受け取っていいものでしょうか。

実は、最善の決定を下すための基本原則が、今日の聖句の中にあるのです。「神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています」と。

「主は大なる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。」

(詩篇145篇3節)

神を思うこと以上に、崇高な考えが人の心を占めることはない、と言つても過言ではありません。神がどれほど偉大な御方であるかを考えていると、人生全体が気高いものとされ、神を軽視していると、その人の人生は破滅です。

神は、計り知れず偉大です。神の御力と威厳を堂々とした筆致で述べてから、ヨブは、次のように言いました。「見よ。これらはただ神の道の外側にすぎない。私たちはただ、神についてのささやきしか聞いていない。だが、その力ある雷を聞き分けようか」(ヨブ26・14)。私たちが見ているのは、神の道のほんの周辺部に過ぎず、聞いているのは神のささやきにか過ぎなかつたのです!

詩篇の記者のおかげで、主が目を注がれるだけで地は震え、主が触れるだけで火山は噴火するのだ、と気づかせられます(詩篇104・32)。

主が天をご覧になろうとすれば、身を低くしなければなりません(詩篇113・6)。主は、星々のすべてに名をつけて呼ばれるほどに偉大です(詩篇147・4)。

イザヤは、神の栄光の裾が神殿に満ちたと語りましたが(イザヤ6・1)、主の栄光の全貌が示されたらどうなるかは、私たちの想像に委ねています。後に、神は手のひらで水を量り、手の幅で天を推し量る方、とイザヤが描写しています(イザヤ40・12)。神にとって、国々は手おけの一しずく、または、秤の上のごみのようにみなされます(イザヤ40・15)。レバノンの森のす

べても薪に足りず、そのすべての獣も全焼のいけにえとするには足りないのです(イザヤ40・16)。

預言者ナホムは言っています。「主の道はつむじ風とあらしの中にある。雲はその足でかき立てられる砂ほこり」(ナホム1・3)と。

神の栄光を描く別の個所では、その息をのむほどの描写の中で、「御力はそこに隠されていた」と、ハバククは言っています(ハバクク3・4英訳)。以上のすべてから言えるのは、神の偉大さを描こうとどれほど試みても、人間の言葉では、おおよそ用をなさないということです。

明日から数日に渡って、神のご本性をひとつずつを思い巡らしていきましょう。その結果、次のようになることを願いますが…。

驚嘆―神は驚異に満ちた素晴らしい御方であるがゆえに

礼拝―この御方のご本性のゆえに、また、私たちのために成し遂げてくださったすべてのことゆえに

信頼―神は、全幅の信頼を寄せるのにふさわしい御方であるがゆえに

仕える―このような主に仕えることは、人生最大の特権の一つであるがゆえに

敬う―主にさらに似ていくことが、神のみこころであるがゆえに

(ただし、私たちが模倣すべきではない神のご本性―例えば神の怒り―があり、私たちに到底模倣ができないもの―例えば神の無限性―があることは言うまでもありません)。

「神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。」

(ヨハネの手紙第一 3章20節)

「神が《全知》である」というのは、神があらゆることに關して、完全な知識を持つておられるという意味です。神が何かを学ばれたということは、一度もありませんでしたし、これからもあり得ません。

この主題に關わる素晴らしい箇所の一つは、詩篇一三九篇一〜六節です。ダビデは、そこでこう書いています。「主よ。あなたは私を探り、私を知つておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知つておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知つておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、何と主よ、あなたはそれをごとく知つておられます。あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。そのような知識は私にとつてあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません」。

詩篇一四七篇四節を読むと、神が星の数を数え、そのすべてを名前と呼んでおられることがわかります。ジェームズ・ジンズ卿が、「宇宙の星の総数とは、おそらく、世界中のすべての海岸の砂粒の総数と同じであろう」と言っているのを聞くと、驚嘆の思いが増すばかりです。

一羽の雀すら、御父が気づかないうちに地面に落ちることはない、と主は弟子たちに教えられました。同じ個所で、主は、私たちの頭の髪の毛の数さえも、みな数えられていると言つておられます(マタイ10・29・30)。

そうだとすると、「神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです」(ヘブル4・13)というのは疑いの余地がなく、私たちはパウロと声を合わせて、次のように言わざるを得ません。「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りたいことでしょうか」(ローマ11・33)。

「神が《全知》である」ということは、私たちの誰にとつても實際上大きな意味合いがあります。まず、警告があります。神は、私たちがするすべてのことを見ておられるからです。神に對して私たちは何も秘密にすることができません。

また、慰めがあります。神は、私たちが通る経験を御存じです。ヨブが言ったように、「神は、私の行く道を知つておられる」(ヨブ23・10)のです。神は、私たちの眠られぬ夜を数え、また、流した涙の数を数えてご自身の皮袋に蓄えてくださいます(詩篇56・8英訳による)。

さらに、励ましがあります。何はともあれ、神は私たちのことを何もかもご存知の上で私たちを救つてくださったのです。私たちが礼拝と祈りの中で感じながらも、うまくことばに表現できない内容をも、神はわかつてくださいます。

そして、驚きがあります。《全知》であられるのに、赦した罪のことを、神は忘れることがおできになるのです。「全知の神に忘れることがどうして可能なのか、私にはわからない。しかし、そう言つておられる以上、忘れてくださるのだ」とデイヴィッド・シーマンズ(※宣教師・牧師・作家)が言う通りです。

「主の御告げ―天にも地にも、わたしは満ちているではないか。」

(エレミヤ書23章24節)

神が《遍在》されるというのは、同一の時に神があらゆる場所におられることを意味しています。ジョン・アロースミスというピューリタン(清教徒)は、あるとき、「神はどこにいるのか」と訊ねた異教の哲学者にこう答えています。「まず、私の方から質問させてください。神がおられないところとはどこでしょう」と。

一人の無神論者が、「神はどこにもいない」(God is nowhere)と壁に書きました。すると、一人の子どもがやってきて、単語間にスペースを加えました。その結果、でき上がった文がこれです。「神は今、ここにおられる」(God is now here)。

神の《遍在》を示す代表的な箇所は、何と言ってもダビデによるものです。「私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかつて、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕らえます」(詩篇139・7・10)。

《遍在》ということを話題にする際、汎神論と混同しないように気をつけなければなりません。汎神論では、あらゆるものが神であると言います。汎神論に基づき、人は木々や河川、自然の諸力を崇拜します。それに対し、真の神は宇宙を支配し、宇宙に満ちておられますが、神ご自身は宇宙とは別個の存在で、宇宙よりも偉大な御方です。

神は《遍在》される、という真理によって、御民の生活にどのような実際上の影響があるべきでしょうか。言うまでもなく、私たちは、神から身を隠すことはできないということをご悟らせられ、厳粛な思いになります。神から逃げおおせることはできません。

神は常に御民と共におられる、と知る時には、ことばに表せない慰めがあります。神は、決して私たちを置き去りにすることがありません。私たちは、決して孤独ではないのです。

その次には、チャレンジがあります。神が常に共におられるのですから、私たちは聖潔を保ち、世から分離して歩まなければなりません。

二人、三人が御名によって集まるとき、主は、その真中に臨在してくださるといふ特別な約束をしてくださいました。この事実を覚えて集まるなら、聖徒たちは、深い畏敬と厳粛の念を抱かずにはおられないはずで。

「全能の神、主、支配し給う。」

(ヨハネの黙示録19章6節 英訳)

神が《全能》であるというのは、他のいろいろなご本性と整合しないものを除けば、神にできないことは何一つないという意味です。聖書の一貫した証しの声に、耳を傾けてみましょう。

「わたしは全能の神である」(創世記17・1)。

「主に不可能なことがあるか」(創世記18・14)。

「あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました」(ヨブ記42・2)。

「神にはどんなことでもできます」(マタイ19・26)。

「神にとって不可能なことは一つもありません」(ルカ1・37)。

しかし、ご自分の性質と一致しないことは、何もできないという暗黙の意味があります。例えば、神は嘘をつくことができませぬ(ヘブル6・18)。ご自身を否むことができません(IIテモテ2・13)。完全に聖なる方であられるので、罪を犯すことができません。完全に信頼に足る御方なので、失敗することができません。

神が《全能》であることは、宇宙を創造し、それを保持しておられること、その摂理、罪人の救済、悔い改めない者へのさばきからもわかります。神の御力が最も顕著に示された例を挙げれば、旧約聖書においては出エジプト、新約聖書ではキリストの復活です。

神が《全能》であるなら、神と戦って勝ち目のある人など一人もいません。「主の前では、どんな知恵も英知もはかりごとにも、役に立たない」(箴言21・30)のです。

神が《全能》であれば、信仰者は勝利者の側についても同じです。たった一人でも、神がついておられるならその人こそが多数派です。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう」(ローマ8・31)とある通りなのです。

神が《全能》であれば、祈りによって、不可能も不可能ではなくなります。合唱曲にあるように、私たちは不可能だという考えを笑い、「それは成る」と叫ぶことができるのです。

神が《全能》であれば、私たちは、ことばに表せない慰めを、次の詩のように持つことができます。

救い主にあらゆる問題の答えあり

人生のもつれを主は解き給う

イエスになしあたわざる難事ひとつもなし

なし得ざることひとつもなし

「私は弱いままで、主の力によりかかる。すると、すべては軽くなる。」

「知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。」

(ローマ人への手紙16章27節)

神の《知恵》は、聖書全体に張りめぐらされた糸のようなものです。例を挙げてみましょう。

「知恵と力とは神とともにあり、思慮と英知も神のものである。：力とすぐれた知性とは神とともにあり、あやまつて罪を犯す者も、迷わす者も、神のものである」(ヨブ記12・13、16)。

「主よ。あなたのみわざは何と多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもつて造つておられます。地はあなたの造られたもので満ちています」(詩篇104・24)。

「主は知恵をもつて地の基を定め、英知をもつて天を堅く立てられた」(箴言3・19)。

「神の御名はとこしえからとこしえまでほむべきかな。知恵と力は神のもの」(ダニエル2・20)。

「事実、この世が自分の知恵によつて神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによつて、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです」(1コリント1・21)。

「キリストは、私たちにとつて、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました」(1コリント1・30)。

神の《知恵》とは、神の完全な洞察力、間違いない識別力、誤ることのない判断を意味します。ある人はそれを定義して、「考える最善の方法によつて、考える最善の結果を生み出す

神の能力」と言いました。それは、知識以上のものです。それは、知識を適切に用いる能力です。

神のすべてのわざは、神の《知恵》を表しています。例えば、人体の驚くべき設計は、神の素晴らしさをいかに証しています。

そればかりでなく、神の《知恵》は救いのご計画の中にも見られます。福音は、罪の刑罰がどのように支払われたのか、どのようにして神の義が立証されたのか、どのようにして神の憐れみが正義に基づいて示されたのか、そして、仮にアダムが罪を犯さなかったとしても、キリストを信じる者の方がどれほど恵まれているかを、私たちに語っているのです。

私たちが救われた後も、神の《知恵》はたましいにやさしく慰めを語りかけています。知恵に満ちておられる私たちの神は、誤りを犯すことがありません。確かに、人生には不可解なことが起こりますが、神には間違いがない、と私たちは知っています。

私たちは神の導きに完全な信頼を置いてよいのです。神は、初めから終わりまでをご存知だからです。神は、私たちが全く気づくことのない祝福の道筋をご存知です。神の道は、完全なものです。

最後に触れたいのは、私たちが知恵において成長することを神は願つておられる、という点です。善にはさとくなければなりません(ローマ16・19)。邪悪な時代であるので、私たちはよくよく注意し、機会を十分に生かして用いなければなりません(エペソ5・15、16)。そして蛇のようにさとく、鳩のように素直でなければなりません(マタイ10・16)。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔にいまし、常にいまし、後に来られる方。」

(ヨハネの黙示録4章8節)

神が《聖》であられるというのは、神がお考えになること、行われること、動機とされることのどれにおいても、霊的に、また、道徳的に、あらゆる面で非の打ち所がないという意味です。神は、罪や汚れと完全に無縁の御方です。神は、清くないということがありえない御方なのです。神の聖さを証しする聖書の箇所には事欠きません。そのいくつかを挙げてみましょう。

「あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたも聖なる者とならなければならぬ」(レビ記19・2)。

「主のように聖なる方はありません」(1サムエル2・2)。

「主よ。あなたは昔から、私の神、私の聖なる方…あなたの目はきよく、悪や不義を見ることに耐えられません」(ハバクク1・12、13英訳)。

「神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません」(ヤコブ1・13)。

「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない」

(1ヨハネ1・5)。

「ただあなただけが、聖なる方です」(黙示録15・4)。

「ああ、神の目には月さえも輝きがなく、星もきよくない」(ヨブ記25・5)。

とりわけ、旧約聖書にある祭司職といけにえの制度は、神が聖なる御方であることを教えるものでした。罪によって、神と人との間に隔たりができたこと、その溝を埋めるために仲介者が存在しなけ

ればならないこと、また、いけにえの犠牲の血がなければ聖なる神に近づくことができないということが、そこに示されていたのです。

神の聖さは、あの十字架で、かつてない方法をもって示されました。御子が私たちの罪を担うのを天からご覧になった神は、その愛し給う御子を見捨て、恐るべき三時間の暗闇の中に放置されたのです。

以上のすべてが、私たちにどう適用されるべきかは言うまでもありません。神のみこころは、私たちが聖くなることです(1テサロニケ4・3)。「あなたがたを召してくださいとくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい」(1ペテロ1・15)。

神の聖さに思いを巡らしたなら、深い畏怖と畏敬の念が私たちの中に生み出されなければなりません。神はモーセに、「あなたの足のくつを脱げ。あなたの立つている場所は、聖なる地である」(出エジプト3・5)と言われたのですから。

T・ビニーは、神の御前に立つ者に求められる聖さに驚きを隠せません。

永久とわの光よ！ 永久の光よ！

たましいはどれほど清くあるべきか

すべてを探りだす神の光の中におかれても

たじろがず、かえって静かな喜びをもつて

生き、神を仰ぎ見るためには

しかし、その必要な聖さが、実は、主イエスを信じたことによつてすでに与えられていることに気がつくとき、私たちの心は神への礼拝の思いで溢れずにはいられないのです。

「主であるわたしは変わることがない。」

(マラキ書3章6節)

神は変化と無縁である、というそのご本性を、神の《不変性》と言います。神の本質的なご本性は変化することがありません。もろもろのご本性に、変化は生じません。神がことをなさる上での原則が変わることはありません。

詩篇の作者は、神の《不変性》と、変転極まりない天地とを対比して、「それらは変わってしまいます。しかし、あなたは変わることがなく」(詩篇102・26、27)と言います。ヤコブは主に、「移り変わりや、移り行く影はありません」(ヤコブ1・17)と説明しています。

神は、悔いることがないと教えている聖句は他にもあります。

「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない」(民数記23・19)、「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔いることもない」(1サムエル15・29)。

しかし、それでは、神は悔いるという、次のような聖句はどうとらえたらよいのでしょうか。「それで主は、地上に人を造つたことを悔やみ、心を痛められた」(創世記6・6)、「主もサウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた」(1サムエル15・35)。(出エジプト記32・14とヨナ書3・10も参照)。

矛盾は、どこにもありません。神は、常に次の二つの原則に従って事を行われます。神は、常に従順には報い、不従順には罰を与えられる、ということですが。人間が従順から不従順へ行動を変えるときにも、神はご自身の本性と異なることをなさらず、第一の原則(従順への祝福)から第二の原則(不従順への罰)へと移行されるのです。これは、私たちの目には、後悔された

かのように映りますが、人間的な言い方に従って表現されているだけであり、悔やむとか、気分の変化という意味ではないのです。

神は、常に同じです。それどころか、それが神の御名の一つであるほどです。「あなたは『不変』という御方であり、あなただけが、地のすべての王国の神です」(イザヤ37・16ダービー訳)。

神は変わり給うことがないという事実は、あらゆる時代の聖徒の慰めとなってきたばかりでなく、賛美の主題でもあります。ヘンリー・F・ライトの不滅の詩のことばをもって、私たちも主の不変を賛美することができます。

目が見るものごとごとく移ろい、朽ち行くとも

ああ、変わることもなき主よ、われにとどまり給え！

《不変》、というのは、私たちも做うべき特質でもあります。私たちもまた、揺るがず、変わらず、堅固な者でなければなりません。もし、私たちが優柔不断で、気が変わりやすく、移り気であるならば、この世は私たちを見て、御父に間違ったイメージを持つことでしょう。

「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから」(1コリント15・58)。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

(ヨハネの手紙第一 4章10節)

《愛》とは、相手に無制限の愛情を惜しみなく注がないではないられないという、神の中にある特質です。愛する者に、完全に良き賜物を与えてくださるところに、神の愛はいかなく表わされています。

その《愛》を表す無数の聖句の中から、ご紹介できるのはほんの一部に過ぎません。

「永遠の愛を持つて、私はあなたを愛した。それゆえ、私はあなたに、誠実をつくし続けた」(エレミヤ31・3)。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます」(ローマ5・8)。

「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに」(エペソ2・4)

そして、もちろん、他のどの聖句にもましてよく知られているのは、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3・16)というものです。

「神は愛です」(1ヨハネ4・8)と、ヨハネが言うのは、神を定義しているわけではなく、《愛》が、神のご性質の重要な要素であるという主張です。私たちが礼拝するのは、《愛》ではなく、《愛》の神なのです。

神の《愛》には、開始の時があったわけではありませんから、終わる時もあるはずがありません。その興行は無限です。その《愛》は、完全に純粋で、利己心やその他の罪のかけらもありません。神の《愛》は、犠牲をいとわず、どれほどの代価も気にしません。他の人の幸いになることだけを追い求め、見返りをまったく求めません。その愛の対象が美しくてもそうでなくても、味方であっても敵であっても関係がありません。愛する対象に何かの長所があるからではなく、《愛》を与える御方が恵み深いために、愛が引き出されるのです。

この気高い真理が、實際生活で持つ意味合いは明らかです。パウロは、言いました。「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を：おさげになりました」(エペソ5・1、2)。私たちの《愛》は、まず主のもとへと昇り、次に兄弟姉妹に流れ出し、そして、まだ救われていない世へと差し伸べられるものでなければなりません。

神の《愛》を深く思いめぐらすなら、礼拝はおのずと深さの極みへと導かれるものです。そして、主の御足のもとにひざまづく時、私たちは繰り返しこう言わざるを得ません。

どうしたら、私のような者をあなたが愛せるのか

また、あなたのような神でいてくださるのか

頭でどれほど考えても、答えは暗やみの中。

しかし、私の心にはそれが明るく降り注ぐ太陽のよう。

「あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神…」

(ペテロの手紙第一5章10節)

神の《恵み》とは、それを受けるに値しないどころか、その正反対の扱いを受けることがふさわしい人が、イエス・キリストを主、また、救い主として信頼して神の恩恵を受け、神に受け入れられることを言います。

《恵み》に関して、よく知られている聖句といえば、次の四つです。

「律法はモーセによつて与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによつて実現したからである」(ヨハネ1・17)。

「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」(ローマ3・24)。

「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによつて富む者となるためです」(IIコリント8・9)。

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によつて救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることをなすためです」(エペソ2・8、9)。

神の《恵み》こそ、神のあらゆる徳性の中心である、と誉め称える人もいます。その一人、サミュエル・デイズは、こう書きました。

数々の不思議をなさる大いなる神よ！

あなたのなさることはすべて

神たるあなたの特性をいかに示す

されど、あなたの恵みのまばゆい栄光は

他の不思議の数々をかすませる

あなたに並ぶほど赦しに富む神とは誰か

かくも豊かな恵みを無償で与える神はあなたをおいてない
しかし、神のご本性の一つが他のものよりも優る、と誰が言えるでしょう。

神は、常に《恵み》の神であられました。新約はもちろんのこと、旧約においても。しかし《恵み》という、神のご性質のこの側面は、キリストが来られたことにより、全く新しく、人の心をとらえずにはいないものとして顕されたのです。

一旦、神の《恵み》をいささかでも理解すると、私たちは礼拝を永遠にやめることができなくなりません。私たちは、自問します。「なぜ、神は私のような者を選んでくださったのだろう。なぜ、主イエスは、これほどふさわしくない者のために、いのちそのものである血を流してくださったのだろう。なぜ、神は地獄から救い出してくださいただでなく、今、天にあるすべての霊的祝福で私を祝福し、天においてご自身と永遠を共に過ごせるように定めてくださったのだろう」と。「この身の汚れを知れる」私たちを救ってくれた「驚くばかりの《恵み》」を、私たちが歌うのは、まったく当然というほかありません。

そしてまた、神は、その《恵み》が、私たち自身の生き方の中にも生み出され、私たちを通して他の人々に及ぶように望んでおられます。神は、私たちが他の人々と思いやりをもつて関わるようにと願っておられるのです。私たちのことばも、常に塩味のきいた恵み深いものであるべきです(コロサイ4・6)。私たちは、自分が貧しくなっても、他の人が富むようにしなければなりません(IIコリント8・9)。私たちもまた、まともな相手をされない人々や愛からもれてしまった人々を受け入れ、親切を示す者でなければなりません。

「あわれみ豊かな神」

(エペソ人への手紙2章4節)

神の《あわれみ》とは、罪に悩む者、倒れそうな者、悲嘆に暮れている者、また、困窮している者に注がれる神の情け、慈愛、同情のことを言います。神は、あわれみ豊かで(エペソ2・4)、赦しに富む(詩篇86・5)と、聖書は強調しています。神は、大きなあわれみをお持ちであり(1ペテロ1・3)、その恵みは大きく、天にまで及びます(詩篇57・10)。「天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい」(詩篇103・11)。神は、「慈愛の父」(IIコリント1・3)、「慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方」(ヤコブ5・11)と書かれています。神のあわれみにはえこひいきがなく、「悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてください」(マタイ5・45)。人は、義のわざによつては救われず(テトス3・5)、神の一方的なあわれみによつて救われます(出エジプト33・19、ローマ9・15)。神のあわれみは、神を恐れかしこむ者に、とこしえまで続きますが(詩篇136・1)※日本語訳は「恵み」(ルカ1・50)、悔い改めない人に対するあわれみは、現世のみです。

恵みと《あわれみ》には、違いが一つあります。恵みとは、私を受けるに値しない祝福を神が降り注いでくださることを意味し、《あわれみ》とは、私を受けて当然の罰を神が下されないことを意味しているのです。

聖書の教理は、どれにも義務が伴っています。神の《あわれみ》を受けた私たちに、まず求められているものは、自分のからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物として捧げることです(ローマ12・1)。私たちにできることとして、それ

以上、納得がいき、理にかなない、健全で、良識ある行為はありません。

そして、もちろん、お互いにあわれみ深くあれ、と神は私たちに望んでおられます。あわれみ深い人は、「あわれみを受けろ」(マタイ5・7)という報いが、特別に約束されています。主は、いけにえより《あわれみ》を求めておられます(マタイ9・13)。つまり、どんなに偉大な犠牲的行為がなされたとしても、もし、個人としての敬虔な生き方が伴っていなければ、神に受け入れられることはないのです。

あの良きサマリヤ人も、隣人に《あわれみ》を示した人でした。私たちも空腹な人に食事を出し、貧しい人に衣服を与え、病人を看護し、やもめや孤児を訪ね、泣く人と共に泣くなら、《あわれみ》を示していることとなります。

自分を不当に扱った人に仕返し機会があつてもそれを放棄し、失敗した人に同情するとき、私たちは《あわれみ》を示しているのです。

自分をわきまえ、自分自身にも(ヘブル4・16)、他の人にも(ガラテヤ6・16、Iテモテ1・2)《あわれみ》が注がれるように祈りたいものです。

最後に触れたいのは、神の《あわれみ》を知れば、心が整えられて、賛美の歌を捧げずにはいられなくなるということです。

ああ、わが神よ。あなたの《あわれみ》をこいこい

たましい高く昇りて見るならば

その眺めにわれを忘れ

驚き、愛と賛美を捧ぐるほかなし

(ジョゼフ・アディソン)

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」

(ローマ人への手紙1章18節)

神の《怒り》とは、今、また、永遠において、悔い改めようとしないう罪人に向けられる、神の激しい憤りや応報としての罰をいいます。A・W・ピンクは、神の《怒り》も、神の完全性を示すという点では、神の真実、力、あわれみと何ら変わらぬいと明言します。神の《怒り》を弁解する必要は、どこにもないのです。

神の《怒り》を考察する際、覚えておくべき事実がいくつかあります。

まず、神の愛と神の《怒り》の間に対立はないということです。愛が本物であれば、罪や反逆、そして、不従順が罰を受けるのは当然です。

もし、人間が神の愛を拒絶したなら、神の《怒り》の他に何が残るでしょう。永遠の住まいは、二つしかありません。天国と地獄です。天国を拒絶するということは、地獄を選択することにはほかなりません。

神は人間のためではなく、悪魔と配下の御使いたちのために、地獄を設けられました(マタイ25・41)。主は、悪者の死を望んではおられません(エゼキエル33・11)。しかし、キリストを拒絶する人には、それ以外の選択の余地はないのです。

さばきは、神に「そぐわない」(strange)と語られています(イザヤ28・21英訳)。つまり、神は、さばきよりあわれみを示したいと願っておられることが、暗示されています(ヤコブ2・13)。

神の《怒り》といっても、そこには復讐心や悪意のかけらもありません。それは、義の怒りであって、罪のしみはどこにもないのです。

神の《怒り》とは、私たちが見習うように求められている特質ではありません。それは、神にのみ属する特質です。《怒り》というものを完全に正しく行使できるのは、神以外にはおられないからです。それゆえに、パウロは、ローマ人に対してこう書いています。「自分で復讐してはいけません。神の《怒り》に任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする』と主は言われる」(ローマ12・19)。

クリスチャンは、正義の《怒り》を示すように求められているものの、それはあくまで正しい《怒り》でなければなりません。それが高じて、罪深い《怒り》に変わってしまうようなことがあつてはなりません(エペソ4・26)。しかも、それが行使されるのは、神の荣誉がかかっている場合だけで、決して自己防衛のためであつたり、自分を正当化するためであつたりしてはならないのです。

神の《怒り》があると本気で信じるなら、私たちは、じつとしていることができないばかりか、今もなお滅びに至る広い道を行く人々に、福音を紹介しようとするはずです。そして、神の《怒り》について説く場合には、愛惜の涙が伴わなければならない。

「主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。あなたの真実は力強い。」

(哀歌3章22、23節)

神は誠実であられ、《真実》です。嘘をつくことも、欺くこともできません。ご自分の約束を破ることはできません。完全に信頼に足る御方です。一つとして果たされない神の約束はありません。

「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさらないだろうか。約束されたことを成し遂げられないだろうか」(民数記23・19)。

「あなたは知っているのだ。あなたの神、主だけが神であり、誠実な神である」(申命記7・9)。

「あなたの真実は代々に至ります」(詩篇119・90)。

神が《真実》であるとわかるのは、私たちが御子との交わりに召してくださったからであり(1コリント1・9)、耐えることのできない試練に私たちを会わせられないからであり(1コリント10・13)、私たちを堅く立たせ、悪から守ってくださるからです(2テサロニケ3・3)。たとえ、そう信じない者がいても、神の《真実》は変わりません。神にはご自身を否むことができないからです(2テモテ2・13)。

主イエスは、真理が肉体をとられた御方です(ヨハネ14・6)。神のみことばは、私たちを聖め分かち真理です(ヨハネ17・17)。「すべての人を偽り者としても、神は《真実》な方であるとすべきです」(ローマ3・4)。

神が誠実で《真実》であると知ると、私たちのたましいは確信で満ち溢れます。神のみことばに裏切られることはあり得ず、神は、約束された通りにしてくださいと知りませ(ヘブル10・23)。例えば、私たちの救いが失われることは永遠にあり得ない、とわかるのは、主の羊は一匹も滅びることはない、と主が言われたからです(ヨハネ10・28)。決して乏しくなることはない、とわかるのは、神が私たちの必要のすべてを満たしてください、と約束されたからです(ピリピ4・19)。

神は、御民も誠実で《真実》であること、自分の言ったことや、会うという約束を必ず守ることを望んでおられます。嘘や、誇張、半面の真理を語ることを常態化してはなりません。自分のした約束は、忠実に果たすべきです。クリスチャンは、誰にもまして、結婚の誓いに《真実》でなければなりません。自分の責任を集会や、仕事、家庭で果たすことにも、《真実》でなければなりません。

主が《真実》な方であることを、私たちはどれほど賛美し、感謝すべきことでしょうか。主は期待を裏切ることのあり得ない神なのです。

主に期待して失望なし―主は神にましませば

主に期待して失望なし―主はそう保証したまえり

主に期待して失望なし―主は最後まで見守り給う

主に期待して失望なし―やがて主は答えを賜うべし

(C・E・メイスン)

「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。」

(詩篇115篇3節)

神は、《超越的主権者》です。つまり、神は宇宙を治める最高の支配者であり、望む通りを行うことができになります。しかし、それを踏まえた上で、神が望まれることは常に正しいということも、言い添えておかなければなりません。神のなさることは、完璧なのです。

イザヤは、主が語られたみことばを引用しています。「わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる」(イザヤ46・10)。正気を取り戻したとき、ネブカデネザル王はこう言いました。「彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みころのままにあしらう。御手を差し押えて、『あなたは何をされるのか』と言う者もない」(ダニエル4・35)。使徒パウロは、神のなさることに、人は疑問をはさむ権利を持っていないと主張します。「しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、『あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか』と言えるでしょうか」(ローマ9・20)と。そして、別の箇所でパウロは神を、「みころによりご計画のままをみな行方」(エペソ1・11)と言っています。

ごく簡単にまとめると、神の超越的主権という教理は、神はやはり神であると認めること、と言えます。

それは、私を尊崇と畏敬の思いで満たす真理です。その意味するすべてを理解することはできないにしても、礼拝し、賛美することはできます。

それは、自分自身を神の主権のもとに置かないではいられない真理でもあります。神は、「陶器師」であられ、私は「粘土」です。私を創造し、贖ってくださった神は、私に対してもろろの権利をお持ちです。どのような事情があれ、神に言い返したり、神がお決めになったことに異議を申し立てたりしてはならないのです。

それは、慰めに満ちた真理でもあります。神は、至高の統治者であられるので、今もみころはなされつつあり、やがて、それは神が望まれる結末に至るからです。

人生には、私に理解できないことがいろいろありますが、主が私の人生を織り成していかれるには、金や銀の糸だけではなく、黒い糸も必要なのだと思信してよいのです。

「あなたは神の深さを見抜くことができようか。全能者の極限を見つけることができようか。」

(ヨブ記11章7節)

たとえ、簡潔に述べるにせよ、言及しておくべき神のご本性は他にもいろいろあります。そのような神の完全無欠なご本性の数々を思いめぐらせば、たましいは地上から天へ、卑小な世界から崇高な世界へと引き上げられます。

神は《正義》です。つまり、そのお取り扱いのすべてにおいて正しく、公平で、正当です。神は、「正義の神、救い主」(イザヤ45・21)なのです。

神は人間にとつて《理解不能》です(ヨブ11・7・8)。神は、あまりにも偉大な存在であるため、人間の知性で理解することはできません。(ピュリタンの神学者)ステイブン・チャールノックが言う通りです。「神の存在は、見た目に明らかである。(しかし)神がどのような御方であるかは目に見えない。」さらに、(ピュリタンの教会指導者・詩人・賛美歌作者)リチャード・バクスターは、言います。「神を知ることができたとしても、神を把握することはできない」と。

神は《永遠》であり、始めも終わりもありません(詩篇90・1・4)。神の「寿命」は、永遠なのです。

神は《いつくしみ深い》御方です(ナホム1・7)。主は、「主はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは、造られたすべてのものの上にあります」(詩篇145・9)。

神は《無限》です(1列王記8・27)。神には、限界も境界もありません。神の偉大さは計算不能、測定不能であり、人間の想像を超越しているのです。

神は《自存》の存在です(出エジプト3・14)。神の存在は、いかなる外部的な原因にもよらないのです。神は、他のものもろのいのちはもちろん、ご自分のいのちの根源であられます。

神は《自給自足》の存在です。つまり、神が必要とされるものはことごとく、三位一体なる神の中にあるのです。

神は《超越》した存在です。神は、宇宙と時間をはるかに超えた、物質界とは別個の存在です。

神のご本性として、最後に挙げたいのは、神の《予知》です。神の予知があつて人は救われるのか、それとも、救い主を信じるのは誰か、神が予見しておられた、というだけなのか、クリスチャンの意見は真つ二つに分かれています。ローマ書八章二九節から判断すると、神は、ご自身の主権をもつて特定の個人を選び、そのようにして、神が前から知っていたすべての人々が、最終的に栄光を受けるように定められた、という意味であると、私は信じています。

さて、これで神のご本性を考察するシリーズは終わりとなります。しかし、別の角度から見ると、この主題にはいつまでも終わりがありません。神は、あまりにも偉大で、威光と尊厳に満ちた方であるため、私たちは、くすんだガラス越しにぼんやりと見る程度しかわかりません。神は無限であられるので、有限の知性によって、神を完全に知ることは決してできないのです。永遠に渡つて、神ご自身の驚異を考え続けても、(シエバの女王のように)こう言わざるを得ないことでしょう。「私にはその半分も知らされていませんでした」と。

「父なる神の御前できよく汚れない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。」

(ヤコブの手紙一章27節)

ヤコブがこのように記したのは、このようなことを行えば、クリスチャンとしてなすべきことはみな行ったことになる、と示唆したかったからではありません。むしろ、理想的な「宗教」を分かりやすく示す例として、孤児や寡婦を訪ねること、および、自分をきよく保つことの二つがある、と言っているのです。

講解説教や宣教活動、または、個人伝道に焦点が当てられるのではないか、との予想に真つ向から反し、ヤコブは困っている人を訪ねることを真つ先に考えていたことがわかります。

私は、家から家へと訪ねて歩いたではないか、と使徒パウロは、エペソ人の長老に振り返らせています(使徒20・20)。J・N・ダービーは、訪問こそは、「働きの最も重要な部分」であるとし、見なしていました。彼は、こう書いています。「町の大」時計が時刻を告げ、道行く人々はそれを聞く。しかし、時計を動かし、時を告げさせ、時計の両針を正確に保っているのは、内部の機械である。私は、訪問こそ、貴兄の実質的な働きとなるべきであり、その他のことはみな、その時々になさねばよいと思う。私は、公の場での証しの機会が多いことを怖れる。個人的な(訪問の)働きがない場合は、特にそうである」と(一八三九年四月二日G・V・ウィングラム宛の手紙より)。

一人暮らしをしていた高齢の寡婦が、隣人や友人から助けてもらわなければ生活ができない状態になりました。時間がたつぷりあった彼女は、昼間あったことを、なんでも、細大漏らさず、特に、外部との接触について日記に記していました。ある

日のこと、数日間にわたり、老女の家とその周辺には、生活している様子がないことに、近所の人が気がつきました。警察が呼ばれ、家の中に入ってみると、彼女は死んですでに数日が経過していました。死ぬまでの三日間、日記に記載されていたのは以下の文だけでした。「誰も来なかつた」「誰も来なかつた」「誰も来なかつた」。

毎日の生活の多忙にかまけ、孤独な人、困窮している人、病弱な人のことを忘れるのはいとも簡単です。私たちは、他の問題を優先し、人目につく華やかな奉仕に目を向けることが多いのです。しかし、もし、私たちの「宗教」をきよく、汚れない状態に保ちたいと思うなら、孤児や寡婦、そして、高齢者や寝たきりの人を軽んじることはしないでください。主は、助けを必要とする人に特別な関心を寄せておられ、その必要を満たそう、と前に踏み出す人に、特別な報いを用意してくださっているのです。

「あなたの力は、あなたの日々々に応じて与えられる」

(申命記33章25節 英訳)

どんなときでも、その必要に応じて、ご自分の民に力を与える、と神は約束しておられます。必要が生じる前に与える、とは約束しておられませんが、危機がやって来れば、それに対応する恵みがすでに備えられているのです。

あなたは、病気と苦痛の時期を通るように召されているかもしれませんが。もし、前もってどれほど大変な試練が来るのか分かったとすると、「そんな試練には、決して耐えられない」と言うことでしよう。しかし、その試練と一緒に、神のすべての助けもやって来るのです。それにはあなたも、また他の誰もが驚くほかありません。

愛する者が死んで、召されるときが来ることを心配しながら、私たちは生きています。自分の小さな世界が崩壊し、自分の力ではどうにも対処できないに違いないと思います。ところが、実際は、そんなことは決してありません。それまで経験したことのない方法で、主のご臨在と力を経験するのです。

私たちの中には、「偶発的」な事故や極めて危険な状況に見舞われたものの、間一髪で死を免れた人が少なからずいます。ところが、普通ならパニックに襲われるはずなのに、心に平安が満ち溢れていることに気がつくのです。それは、私たちを助けよう、とかたわらに來てくださった主のおかげです。

キリストのために、自分のいのちを英雄的に投げ出した人々の話を読む度に、改めて思い知らされるのは、神が、「殉教の日のためには、殉教できる恵み」を与えてくださる、ということです。彼らの冷徹な勇気は、人間的な勇敢さということでは説

明がつきません。彼らの大胆な証しが、上から力を与えられたものであることは明らかです。

さて、必要が生じる前から心配し始めても、胃潰瘍になるのが関の山であることは明らかではないでしょうか。神は、必要が生じるまでは恵みも力も与え給わない——これが事実です。

D・W・ホイットルが言っている通りです。

明日のことを私は心配しない

明日のことは救い主が心配してください

明日の恵みと力を先取りはできない

ならば心配を先取りする必要はどこにもない

アニー・ジョンソン・フリントの印象的な詩も、いつもながら的確です。

重荷加わるときは、さらに多くの恵みを神は与え給う

労苦増すときは、さらに多くの力を送り給う

苦悩深まるときは、神のあわれみも増し加わる

試練が倍加すれば、平安も倍加する

養った忍耐が底をつき

半日も終わらないのに力が途絶え、

まさかのためのたくわえもつきるとすぐに

御父の本格的な供給は端緒につく

「しつかりした妻をだれが見つけられることができよう。彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。」

(箴言31章10節)

妻がこのようであったならと、クリスチャンの夫が望むのは、どんなことでしょうか。それを列挙すると、次のようなリストになるのではないかと思われます。以下のすべてを一人で満たす女性がいると期待するほどうぶな人が一人もいなければいいのです。

第一に、神を畏れ敬う女性です。単に新生を経験したというだけではなく、考え方が霊的な女性です。このような女性は生活の中で、何よりもクリストを第一にします。祈りの人であり、積極的に主に仕えます。クリスチャンとしての人格と品位を備えた彼女を、夫は霊的な意味でも尊敬を惜しみません。妻も尊敬の目で夫を見ます。

彼女は、夫に仕えるという、神から与えられた立場を受け入れ、夫がかしらとしての立場を適切に果たせるように積極的に助けます。結婚の誓いを誠実に守ります。良き妻であると同時に、子供たちにとっては良き母です。清潔で、魅力的で、度が過ぎた服装をすることはありません。女性らしく、しとやかに、上品ぶつてはいません。

このように理想的な妻である彼女は、良き主婦であり、住まいをきちんと、また、清潔に保ち、家事を効率よくこなしていきます。おいしい食事を時間通りに出し、喜んで来客を歓迎します。夫の目標と関心を共有していることは、言うまでもありません。

夫との間に意見の違いが起きると、黙り込んだり、むつつりしたり、すねるのではなく自分が問題と感じていることを表に

出すことをいけません。意見の違いに折り合いをつけ、必要とあれば、謝ることもできるばかりでなく、自分に不利な事実も進んで認めます。

他人のうわさ話や、余計なおせっかいをせず、他の人のことに干渉しません。柔和で静かな心を持ち、議論や小言を好みません。

妻として、家族の収入の範囲内で生計をやりくりします。贅沢品を手に入れたいという欲望にとりつかれることはなく、隣人と張り合うことはしません。

もし必要とあれば、逆境も進んで受け入れます。

夫婦の営みに関して、夫が妻に持つ権利に受身的にならず、また、興味が無いという態度でもなく、喜んで応えます。

氣質が安定し、話がよくわかり、野心家ではなく、完全な信頼をおくことができます。

自分の妻が、以上の特徴の大部分を満たしているとわかった夫は、感謝するべきです。そして、妻である女性たちも、さらに向上していく助けにすべく、以上を点検項目として用いていただきたいものです。

「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」

(エペソ人への手紙5章25節)

クリスチャンの妻は、夫に何を望んでいるのでしょうか。妻にとつての第一の関心事は、夫の外見ではなく、その霊的生活でなければなりません。

夫は当然、神の人、すなわち、何よりもまず神の国と神の義を求める人でなければなりません。その目標とは、主に仕え、教会の交わりにおいて積極的な役割を果たすことです。家庭にあつては、家庭礼拝を欠かさず、信仰者の模範でなければならぬことは言うまでもありません。

このような男性は、きちんと家のかしらという立場につきませんが、暴君的ではありません。

夫から愛されているので、妻は要求されるからではなく、自分から夫に従います。妻に敬意を払い、妻をいつも貴婦人のように扱います。信義に厚く、理解を示し、寛容で思いやりと配慮があり、喜びに溢れています。

理想的な夫とは、一家の大黒柱であり、仕事に熱心です。とはいっても、金銭が最優先というわけではありません。物を欲しがらず、貪欲とは無縁です。

子どもを愛し、育み、一緒に時間を過ごし、社会に触れる活動を計画します。子どもたちにとって良いお手本であり、一人ひとりに目を配ります。

来客をもてなすことを喜びます。家庭は主のしもべに対して、また、クリスチャンにも、救われていない人にも開放されています。

妻や家族との通信網はいつもつながっています。妻や子供には無理でできないことがあっても、それを受け入れて理解を示し、不注意による間違いがあっても、明るく笑い飛ばします。社会のことや知識的なことにおいても家族に自分の考えを述べます。何か誤ったことをしたり、また、言ったりした場合には、すぐにその間違いを認め、謝ります。家族からの忠告には、いつでも耳を傾けます。妻が落胆しているときにも、変わらずに毅然としていられる夫であることが、どれほど望ましいかは言うまでもありません。

それに加えて、望ましい資質を言うとするなら、清潔で、身だしなみがよく、自分勝手でなく、正直で、優しく、信頼でき、誠実で、気前よく、感謝の気持ちをすぐに表せることです。また、ユーモアをよく解し、不機嫌にならず、不平を言わない夫であるべきでしょう。

以上のすべてを実現できている人は、仮にいたとしてもごく少数であり、そのすべての良き特徴を期待するのは非現実的と言わなければなりません。いくつかでも発見できれば、妻は感謝すべきですし、他の特質も育つよう、愛をこめて夫を助けるべきでしょう。

「すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。」

(テサロニケ人への手紙第一5章21節)

クリスマスチャンは、一時的な流行や、教理の風にあおられやすいのではないかとと思われることが時々あります。ジョン・ブランチャード(※キリスト教弁証論の著作で著名な説教者)は、二人の観光バスの運転手が意見を述べ合っていたときのことを記しています。自分の運転したバスがクリスマスチャンで満席になった話をする、相手が尋ねました。「本当かい？ それでクリスマスチャンというのはどんなことを信じているんだい？」するとこう答えたということです。「おれが話すことは、なんでも信じてしまふのさ」と。

ほんの短期間、食品にブームが起こります。特定の食品が毒としてこぎ下ろされる一方で、他の食品には魔法のような効能があると信じられます。あるいは、薬効についてのブームの場合もあり、聞いたこともないような雑草やエキスに、目を見張るような効果が発見された、との主張がなされます。

経済的支援の呼びかけを受けると、クリスマスチャンは、だまされやすいところがあります。少なくとも、米国では、孤児の救済とか共産主義反対の運動が宣伝されると、支援団体が信用できるところかどうかを調べもしないで、簡単に応じてしまうのです。

詐欺師は、信者たちの間に入り込み、我が世の春を謳歌しています。どれほどばかげたお涙頂戴の話でも、荒稼ぎするの何の差し障りもありません。

もしかすると、問題の原因は、信仰と軽信(※たやすく信じてしまうこと)の区別ができていないところにあるのかもしれない

ん。信仰とは、宇宙でこれ以上確かなものはない、神のことは信じることです。それに対して、軽信とは、証拠もないのに、また時には、言われていることと反対の証拠があるのに、事実として受け入れてしまうことです。

神は決して、御民が識別力や批判力を放棄してしまえばよいと思っておられるわけではありません。聖書の中には、次のような奨励のことが散在しています。

「すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい」(一テサロニケ5・21)、「卑しいものの中から、尊いものだけを取り出せ」(エレミヤ15・19英訳)、「私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によつて、いよいよ豊かになり…」(ピリピ1・9)。

「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです」(一ヨハネ4・1)。

もちろん、危険が特に大きいのは、教理に関わつての流行や目新しい事象です。しかし、それ以外の多くの領域でも、クリスマスチャンが、過剰なほど夢中になるキャンペーンや一時的流行で、横道にそらされたり、だまされたりすることがないとは言えないのです。

「イエスにあつて眠つた人々」

(テサロニケ人への手紙第一4章14節)

愛する者が誰か主にあつて召された場合、どう反応したらよいのでしょうか。感情のバランスを大きく崩すクリスチャンがいる一方、悲しみはあるものの、毅然として耐えることのできる人もいます。それは、どれほど深く神に根をおろしているか、また、信仰に関わる素晴らしい真理をどれだけ自分のものとしているかに左右されます。

まず、何よりも、救い主が死をどのようにご覧になつていかを知らなければなりません。死とは、ヨハネ一七章二四節の主の祈りに対する答えなのです。「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さつたものをわたしのいる所にわたしといつしよにおらせてください。：わたしの栄光を、彼らが見るようになるためです」。愛する者が主のもとに旅立つとき、主はご自分のいのちの激しい苦しみのもとを見て、満足されるのです(イザヤ53・11)。「主の聖徒たちの死は主の目に尊い」(詩篇116・15)。

次に、死んだ本人にとつての死の意味を正しく認識しなければなりません。死んだ人は、栄光に輝く王にまみえるように、招き入れられたのです。もはや、罪や病氣、苦しみや悲しみから永遠に自由の身とされました。来るべき災いに遭わないように取り去られました(イザヤ57・1)。ライル司教は、こう書いています。「神の聖徒が故郷に帰還することに比べるものは何もない。：家路につき、この古い土くれに過ぎない肉体を離れ、物質の束縛から解放され、無数の天使の群れの歓迎を受けるのだから。信者は死んだ瞬間に、パラダイスにいる。戦いは終わった。争いは終了した。いつかは通らなければならぬ暗い谷をすでに通り返けたのだ。いつかは渡らなければならぬ暗

い川をすでに越えたのだ。罪が混ぜ合わせた最後の苦い杯を飲み干したのだ。悲しみも嘆息もない場所に辿り着いたのだ。そのような彼らに、どうか戻ってきて欲しい、と望むべきでないことは確かである。自分のためには涙を流しても、彼らのために涙を流すべきではない」と。信仰さえあれば、この真理を自分に適用して、川のほとりに植えられた木のように、しっかりと立つことができるのです。

愛する者が死んでしまうのは、私たちにとつて常に悲しみが伴う経験です。しかし、希望のない他の人のように悲しむようであつてはなりません(1テサロニケ4・13)。愛する者は今、キリストと共にいるのであつて、その方がはるかに優つていのです。別れはしても、それはほんのわずかの間にすぎません。やがて、インマヌエルなる方の国の丘の辺で、再会するのです。そして、この地上にいた時にまさる素晴らしい環境のもとで、お互いを知ることができるようになります。キリストにある死者が、まず初めによりがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといつしよに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会い、いつまでも主とともにいることになるという、主の来臨を私たちは待ち望みます(1テサロニケ4・16・17)。

この希望があるかないかで、天と地の開きが出てくるのです。それゆえ、神の慰めは、私たちにとつて決して「取るに足りないもの」ではありません(ヨブ15・11)。私たちの悲しみには喜びが混ざつていて、たとえ今は喪失感があつたとしても、永遠の祝福という約束によつて、十二分に補われるものなのです。

「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。」

(マルコの福音書10章14節)

子どもが死ぬというのは、とりわけ神を信じる人々の信仰にとつて、常に辛い試練です。そのようなときに、自分をつなぎとめるしつかりとしたよりどこを保持しておくことは大切です。

物心つく年齢にならないうちに死んだ子どもは、イエスの血のおかげで安全である、とクリスチャンの間では一般に信じられています。その理由は、次のように展開します。子ども自身には、救い主を受け入れたり、拒否したりする能力がまったくない。そこで神は、十字架上でなされたキリストの御わざの価値のすべてを、子どもに帰してください。その御わざがもたらす救いの価値を、完全には理解できなかったとはいえ、子どもは、主イエスの死と復活によつて救われている、と。

物心つく年齢とは、どのようなものか、それをご存知なのは神以外におられません。それが、一人ひとり異なるのは明らかです。ある子どもは、他の子より成熟が早いかもしれないからです。

物心つく年齢になる前に死んだ子どもも天国に行く、と具体的に言っている聖句は一つもありませんが、その根拠となる聖句は二つあります。その一つが今日のみことばです。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです」(マルコ10・14)。子どもについて話された際、「神の国は、このような者たちのものです」とイエスは言われました。神の国に入るには、まず、大人にならなければならぬと言われたのではなく、子どもたち

自身が、神の国にいる人々の特徴を表していると言われたのです。これは、幼い子どもたちが救われていることを示す、大変強力な論拠です。

もう一つ別な角度からの証明とは、次のようなものです。大人に関してイエスは、「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです」(ルカ19・10)と、言われました。ところが、子どもについては、捜すということばを一切使われず、「人の子は、失われている者を救うために来たのです」。(マタイ18・11)と、言われただけです。言外に、子どもたちは、大人のように迷い出てはいないこと、また、救い主は、子どもたちが死ぬときには、その主権によつてご自分の群れに入れてくださることが暗示されています。子どもたちは、キリストの御わざについて何も知らなかったのですが、神はそれを御存知の上で、御わざに伴う救いの価値を、子どもたちの「勘定書」に加えてくださったのです。

神が子どもたちを取り去られても、神の摂理を疑ってはなりません。(エクアドルで殉教した若き宣教師)ジム・エリオットが、こう書いている通りです。「私なら、年を取るまで地上に生かしておきたいと願う人々が、まだ若いのに神が召されたとしても、それを怪しんではならない。神は、永遠の世界を人ではないにしようとおられるのである。年老いた男性、女性だけにしてください、と私が神を制約することはできない」。

「わが子アブシャロム。わが子よ。わが子アブシャロム。ああ、私がおまえに代わって死ねばよかったのに。アブシャロム。わが子よ。わが子よ。」

(サムエル記第二18章33節)

アブシャロムが救われていたかどうかは別にして、その父ダビデが号泣した姿は、救いを受けずに死んでしまった親族のいる多くの信者の悲嘆とは、どれほど深いものかをよく表しています。その人が救われるように、と何年間も祈ってきたかもしれないのに……。そのような場合のための、ギルアデの乳香(※人を癒やす香油)があるのでしょうか。また、聖書にかなう態度とは、どんなものなのでしょうか。

まず第一に、その人が本当にキリストを知らずに死んだのかどうか、必ずしも確実にわかるわけではありません。乗馬中に投げ出され、「あぶみから地面に落ちるまでの間に、神の憐れみを求め、それをいただいたので」、キリストを信じたという証しを聞いたことがあります。また、別の人は、渡り板を歩いている最中、足を滑らせたものの、海に落ちる寸前に回心しました。このような不慮の事故で、二人のうちのどちらかが死んでも、まさか、信仰を持って死んだと分かった人は、一人もいなかったことでしょうか。

昏睡状態にある人でも、救われることは可能だ、と私たちは信じます。権威ある医学者たちによると、自分で話すことはできないにしても、部屋で話されていることは聞こえるし、理解できている場合が多いといえます。もし、耳が聞こえ、理解する力があるなら、明確な信仰の行為として、イエス・キリストを受け入れることができないはずはありません。

しかし、最悪のケースを想定してみましよう。その人が救われないまま、本当に死んでしまったと仮定してみましよう。そのような場合、私たちはどのような態度をとったらよいのでしょうか。私たちは、たとえ肉親と袂(とも)を分かつことになろうと、断固として神の側につくべきです。罪を持ったまま死ぬ人がいても、それは、神のせいではありません。途方もない犠牲を払って、罪から救われる道を、神は備えてくださいました。神の救いは、無代価の賜物であつて、どれほどの負債や功績があろうとも、それとは無関係です。もし、永遠のいのちという賜物を拒絶する人がいたとして、それ以上神にできることが何かあるのでしょうか。神といえども、天国に行きたくない人を無理やり天国に住まわせることはできません。そんなことをすれば、天国ではなくなってしまうからです。

したがって、もし、愛する者の誰かが、希望を持たないまま永遠の世界に旅立つてしまうとすれば、神の御子がエルサレムのために涙を流し、「わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかつた」(ルカ13・34)と言われた神の御子の悲しみと悲嘆を共有する以外に、私たちにできることはありません。

全地をさばく方は公義を行なわれる、と私たちは知っています(創世記18・25)。ですから、悔い改める罪人を救われるときも、失われた者に罰を与えられるときも、神のなさることは正当である、と認めざるを得ないのです。

「そこでイエスは彼らに、『さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行つて、しばらく休みなさい。』と言われた。…そこで彼らは、…寂しい所へ行つた。ところが、多くの人々が、彼らの出て行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ徒歩で駆けつけ、彼らよりも先に着いてしまった。イエスは、…彼ら…を深くあわれみ、いろいろと教え始められた。」

(マルコの福音書6章31-34節)

思わぬ邪魔が入ると、私たちはいらいらしやすすいものです。思つてもみない要求をされて、自分で決めておいた仕事が完成できそうもなくなり、苛立つたことが何度あっただろう、と考えると、赤面するほかありません。例えば、執筆中、ことばが苦もなく湧き出ていきます。そんなときに限って、電話が鳴つたり、あるいは、相談に来た人が玄関に立つていたりするのです。そのような割り込みは、歓迎できるものではありません。

しかし主イエスは、邪魔をされても動揺することが一度もありませんでした。それらすべてが、その日のための御父のご計画の一部である、と受け入れておられたのです。そのために、主のご生涯には、驚異的な落着きと静けさがありました。

実を言えば、中断される頻度とは、自分がどれだけ役に立っているかを示す指標にほかなりません。『アングリカン・ダイジェスト』誌の筆者は、こう言っています。「中断が入っていららすることはあつたら、思い出してみることだ。その中断が多ければ多いほど、あなたの人生に価値があるのだということを。助ける力が十分にある人しか、他の人の必要を担うことはできない。私たちが苛立たせる邪魔こそは、私たちがなくてはならない存在であることの証明なのである。誰であれ、非難を

免れない最大の落ち度―それこそ、防がなければならない危険である―とは、度を越して独立的であり、非協力的であるために、割り込む人もいない代わりに、居心地の悪いほど一人のままになることである」。

ある多忙な主婦の経験を読めば、誰もが苦笑せざるを得ません。いつもにまして余裕のないスケジュールで動いていたある日のこと、ふと仕事の手を止めて目を上げると、いつもより早く仕事を終えて帰宅した夫の姿が見えました。「何であなたがここにいるわけ？」と、苛立ちを隠しきれずに言うと、「私の住所はここだからさ」と、ぎこちなく微笑んで夫が答えました。その後、彼女はこう書いています。「それ以来、夫が帰宅したときには、自分の仕事を一時中断することにしました。愛をこめて夫を出迎え、夫を第一にしているとわかつてもらうためです」と。

朝毎に、私たちはその日を主に明け渡し、細かな点に至るまですべてを整えてください、と祈りたいものです。そうするならば、誰かに中断されても、主が遣わされた人であるとかかりません。来た理由を尋ね、それに対応します。それはことによると、一日の中で一番大切なことかもしれません。たとえ、邪魔という外見を装つてはいても…。

「しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます。」

(テモテへの手紙第一2章15節)

教会における女性の働きに、パウロが課した制限の幾つかを見ると、女性とは実体のない存在に思えるかもしれません。例えば、女性は教えることを許されていませんし、男性の上に立つてはならず、沈黙していなければなりません(12節)。キリスト信仰では、女性が一段劣った地位に貶められている、と結論する人がいてもおかしくありません。

しかし、一五節を見ると、そのような誤解が払拭されます。「女は子を産むことによつて救われます」。これが、女性のたましいの救いではなく、女性の教会における立場の救いを指していることは明らかです。女性には、神に仕える「息子」「娘」たちを育成していく、途方もなく重要な特権が与えられているのです。

ウイリアム・ロス・ウォーレスは、言いました。「ゆりかごを揺らす手は、世界を支配する手である」。あらゆる傑出した指導者の背後には、ほとんどといっていいほど、偉大な母親がいます。

スザンナ・ウエスレーが講壇から説教したとはとても思えません。家庭での働きの結果、二人の息子、ジョン・ウエスレー(※メソジスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導した)とチャールズ・ウエスレー(※不世出の讚美歌作者)を通して世界に影響を及ぼしたのでした。

私たちの社会においては、家庭を見捨て、ビジネスや専門の分野で華やかな経歴を切り開いていく女性がもてはやされています。

ます。そのような女性にとつて、家事とはつまらないものであり、育児は無用な雑用にすぎません。

あるクリスチャン女性の昼食会で、会話はいつの間にか仕事の話になりました。誰もが、自分の地位と給与について熱を込めて語っていました。一種のライバル心が、そこに作用していたことは疑いありません。そして、三人のたくましい息子がいる主婦に、一人がこう尋ねました。「シャロット、あなたはどんなお仕事をなさっているの?」シャロットは、慎ましくこう答えました。「神の僕たちの育成よ」と。

パロの娘は、モーセの母に言いました。「この子を連れて行き、私に代わつて乳を飲ませてください。私があなたの賃金を払いましょう」(出エジプト2・9)。キリストのさばぎの座に出たときに一番驚くことの一つとは、永遠という視点から神に仕える男の子、女の子を育てることに自分を捧げた女性たちに、主が高い「賃金」を払つてくださることではないでしょうか。

そうです。「女は：子を産むことによつて救われる」のです。教会における女性の地位は、公の働きに関わるものではありません。しかし、ことによると、神を畏れ敬つて子を産むという働きは、神の目に、はるかに重要なものかもしれません。

「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。」

(マルコの福音書16章16節)

この主題に関わる聖句が、聖書中これだけであつたなら、信仰を持つことに加え、バプテスマを受けて人は救われるのだ、と結論をくだしても異論は出ないことでしょう。しかし、新約聖書に、信仰によってのみ人は救われるという聖句が百五十もあるとなると、一つや二つ、先のような聖句があつたからといって、百五十の聖句を否定することはできない、と結論せざるを得ません。

とはいえ、救われるために不可欠ではないにしても、バプテスマは、従順を示す、という意味で、欠かすことのできないものです。御子を主、また、救い主として信じた人がみな、信仰者となつたしるしであるバプテスマの水に入つて、主と自分が一つになつたことを公に示すことは、神のみこころなのです。

新約聖書は、バプテスマを受けない信者、という変則的なあり方を想定していません。救われた人は、バプテスマを受けることが当然とされているのです。『使徒の働き』では、いつも、即時にバプテスマが行われています。弟子たちは、教会という場で、正式の礼拝のときがやってくるまで待つことをせず、信仰を言い表した人がいれば、その場でバプテスマを施したのです。

信仰、そして、バプテスマという順序は、大変近接しているため、聖書は、「信じてバプテスマを受ける者は…」と、ひとくくりにされているのです。

バプテスマを受けることによつて新生する、という非聖書的な教えを避けようとするあまり、もう一方の極端に振り子が振

れるのを容認してしまうことがよくあります。バプテスマを受けようが受けまいが大した問題ではない、という誤った考えに陥りやすいのです。しかし、実は、それが大きな問題です。

「バプテスマなど受けなくても私は天国に行ける」と、こともなげに語る人がいます。そういう人に対して、私はこう申し上げるのです。「その通りです。バプテスマを受けなくても天国に行かれます。しかし、もし受けられないなら、永遠にバプテスマは受けられませんよ」と。天国では、バプテスマを受けたくても受けられないからです。バプテスマは、今主に従わなければ二度と与ることのできない行為の一つなのです。

イエス・キリストを主、また、救い主として受け入れた人は誰であれ、バプテスマを受けることをためらつていてはいけません。バプテスマを受けてこそ、公に主の死と復活を自分に重ねあわせ、新しいいのちを主と共に歩みはじめたことを、公に示すことができるのです。

「まことに、まことに、わたしはあなたがたに告げます。わたしのことを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」

(ヨハネの福音書5章24節)

次のように洞察したことにより、多くの人の人生に変革と変容がもたらされました。

《まことに、まことに》という冒頭の繰り返しは、注意を喚起しています。何か重大なことがこれから語られると。その期待は、裏切られません。

《わたしはあなたがたに告げます》。「わたし」というのは、主イエスです。一九節からそれが分かります。それと同時に、主が何かを語られるなら、それは、絶対にどんな場合でも本当であるということを知らなければなりません。主は、嘘をつくことができません。主は欺くこともできませんし、欺かれることもありません。主がお話しになること以上に確かで、信頼できるものはないのです

「主は、誰に向かつて話しておられるのでしょうか。《あなたがたに告げます》。永遠の神の御子が、あなたや私に話しておられるのです。私たちがこれ以上に輝かしい方から声をかけられたことは、未だかつてなく、これからもありません。ぜひとも、耳を傾けるべきです。

《わたしのことを聞く者は》「だれでも」というのと同じ強さがあります。主のことは聞くというのは、単に耳で聞くというのではなく、聞いて信じる、聞いて受け入れる、聞いて従うという意味です。

《わたしを遣わした方を信じる者》主を遣わされたのは、父なる神であることを、私たちは知っています。しかし、ここで重要なのは、「神はなぜ、主を遣わされたのか」ということです。御父が御子を遣わされたのは、御子が私の身代わりとして死に、私が受けるべき刑罰を受け、私の罪が赦免されるために血を流してくださったためであった、と私は信じなければなりません。

そして、いよいよ三重の約束です。第一に、《永遠のいのちを持ちます》。信じた瞬間に、人は永遠のいのちを所有します。それほどに、簡単明瞭なことなのです。第二に、彼は、《さばきに会うことがなく》。これは、地獄に引き渡されることが決してないという意味です。キリストが負債を支払ってくださったので、神が重ねて支払いを要求されることがないからです。第三に、《死からいのちに移っているのです》。神との関係においては、霊的に死んでいた状態から生まれ変わり、尽きることはない新しいいのちに入ります。

もしあなたが主のみことを確かに聞き、主を遣わされた御父を信じるなら、あなたは救われている、と主イエス・キリストが保証してくださいます。

これが、「福音」(良い知らせ)と呼ばれるのもっともなことです。

「モーセが手を上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を降ろしているときは、アマレクが優勢になった。」

(出エジプト記17章11節)

イスラエルは、アマレクの軍勢と戦っていました。モーセは、丘の頂に立ち、戦場を見下ろしています。勝利となるか敗北となるかは、モーセの手の位置にかかっていました。手が高く挙がっていればアマレクは退却し、手が下がっていれば、イスラエルが後退したのです。

手を挙げているモーセに限定して言えば、モーセは、「あわれみと愛をもって御手を挙げ給う」(※W・ブロックハウスの讃美歌 Our great High Priest is sitting)、主イエスを表しています。私たちが完全に救われている(※ヘブル7・25参照)のは、ひとえに主の執り成しによるのです。しかし、予型としてのモーセの役割は、そこまでです。私たちの執り成し手なる御方の手は、決して下がることのないからです。主が疲れて、外部の助けを必要とすることなどありません。主は常に生きておられ、私たちのために執り成しておられるのです。

この出来事には、第二の適用があります。すなわち、自分を祈りの戦士とすることです。手を挙げて祈る姿は、世界の宣教師で、霊的な戦いに加わっている信仰者たちのために、私たちが忠実に執り成す様子を示しているのです。この祈りの奉仕をないがしろにすれば、敵が優勢となってしまう。

一人の宣教師とその一行が、アフリカで医療伝道に従事していたときのこと、彼らは無法者が出没する地域で夜を明かさなければなりません。彼らは、主の守りに自分をゆだね、眠りにつきました。それから何か月もたつてから、宣教師の病院に運ばれて来た無法者の首領が、その宣教師の顔を見て、「あ

んたを知っている」と言うのです。「身を隠せる場所がない場所に行ったあなたたちを、俺たちは襲って金や医薬品を奪うつもりでいた。だが、二十六人もの兵士がついているのでは、手が出せなかつたよ」と言うのです。

後日、宣教師が、この不思議な出来事を自分の母教会に戻って話すと、メンバーの一人が言いました。「まさにそれは、私たちが祈り会をしていた夜だ。確か、あの時にいたのは二十六人だった」と。

祈りの場所にて、われらが

嘆願するのを神見給え

その時、戦いの潮目は変わり

その時、征服の炎は燃え

その時、真理の旗はひるがえり

敵はすこすこ逃げ、サタンはひるむ

その時、か弱い、恐れれの泣き声は

勝どきに変わる

われらを導き給え、主よ

勝利の祈りを学ぶ場所へと

そしてまた、この出来事からもう一つの洞察を得ることができまます。主は、世々に渡り、アマレクと戦うと誓われました。

アマレクは、肉性の象徴です。クリスチャンは、肉性と戦わなければなりません。祈りは、その際の主要な武器の一つなのです。忠実な祈りの生活をしているかどうかによって、しばしば勝利か敗北かが決まるのです。

「私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることにあります。」

(コリント人への手紙第一13章12節)

クリスチャンとして、いぶかるのも当然で、無理からぬ疑問があります。それは、天国で、愛する者たちの見分けができるのだろうかという疑問です。確かに、この主題を具体的に扱っている聖句は皆無ですが、いくつか推論の筋道はあり、それらを通つていくと、肯定的な結論に導かれます。

第一に、弟子たちに、復活した栄光のからだのイエスを見分けることができた点です。主の外見には変化がありませんでした。それが、「この、同じイエス」(使徒1・11英訳)である点については疑問の余地がありませんでした。このことから、私たちもまた、栄化されたからだになつてはいるものの、それぞれの特徴はそのままであることがわかります。私たちの外見が一様になる、と暗示するものは、何一つありません。1ヨハネ三・二で、私たちが主イエスに似たものとなる、というのは、内面の在り方のことで、永遠に罪とその結果から解放されるという意味です。それが、主と間違えられるほど外見が似るという意味でないことは確かで、あり得ないことです。

第二に、天国に行つたら、地上にいたときより知りうることが減少すると信ずべき理由の一つもあります。地上ですらお互いが分かるのに、天国でも分かるのはおかしい、と考えるべき理由がどこにあるのでしょうか。そのときには、今、私たちが知られているほどに知ることができる、と書かれているなら、結論が出ているも同然です。

パウロは、天国で会ったときに、相手がテサロニケ人であると分かるのは当然である、と期待しています。「御前で私たちの

望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか」(1テサロニケ2・19)。

今まで一度も会ったことのない人でも、それが誰かを見分ける能力が人には与えられている、または、与えられるようになる、と暗示する箇所が聖書の中にあります。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、あの変貌の山で、目の前にいるのがモーセとエリヤであるとわかつたのです(マタイ17・4)。

ハデスに行つた金持ち、アブラハムを見て、それと分かりました(ルカ16・24)。ユダヤ人たちは、御国に入つたら、アブラハム、イサク、ヤコブ、そして、すべての預言者に会うことになる、とイエスは語られました(ルカ13・28)。私たちの財産を賢く管理して、友を作るべきこと、そうすればその友人たちが、やがて私たちを永遠の住まいに迎えてくれる、と教えられています(ルカ16・9)。つまり私たちを見れば、恩恵をもたらしてくれたのが私たちである、と彼らに分かることが前提となっているのです。

ただし、一言、注意をつけ加えねばなりません。天国に行けば、愛する者を見分けることができるのは明らかだと思われれば、半面、地上にいたときと同じ関係で、お互いを知ることではない、ということですが。例えば、夫婦という関係は、もはや通用しません。「復活の時には、彼らはめとつたり、とついでりすることはない。彼らは天にいる御使いのようなものである」というマタイ二二・二三〇のみことばは、それを明確に教えているように思われます。

「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

(ルカの福音書10章41・42節)

マリヤは、静かにイエスの足元に座り、みことばに聞き入っていました。その一方でマルタは、食事の支度をしながら、慌て、冷静さを失っていました。マリヤが手伝いに加わってくれないことに腹を立てたのです。主イエスは、マルタの接待ではなく、その背後にある心を正そうとされました。それに加え、マルタの優先順位が間違っていることが示唆されています。奉仕を礼拝より重んじるべきではなかったのです。

私たちの多くは、マルタと似たところがあります。座っているより、何かを成し遂げたいのです。何事も、きちんと計画を立て、効率を考え、完遂できることが誇りです。朝、聖書を読んでいる、しなければならぬことが六十件もあつたことを思い出し、聖書を読むのを中断してしまうことがよくあります。たとえ祈っても、その日の予定を考えると、思いがダンからベエルシエバ(※イスラエルの北端と南端の町)まで迷走してしまいます。一緒に汗を流してくれる人がいないと、すぐに恨めしい気持ちになります。みんながやらなければならないことを、自分だけがやっていると感じるのです。

その一方で、マリヤと似た人々もいます。愛の人々です。その生き方からは、他の人への愛がにじみ出ています。そのような人々にとっては、炊事道具より人間の方がもつと大切です。とりわけ愛情の向く先は、イエス御自身です。彼らは、マルタのような私たちから見れば怠けているように見えるかもしれま

せんが、そうではありません。彼らの場合は、優先順位が違っていただけなのです。

実は、私たち自身も、有能で才能に恵まれていながら冷淡である人より、暖かく愛情に溢れた人の方を高く評価するものです。私たちの心を捉えるのは、おもちゃに夢中で私たちが目に入らない子どもより、抱きついてキスをやめない子どもなのです。

「神は、私たちの奉仕よりも、礼拝に関心を寄せておられ、また、天の《花婿》は花嫁に求愛しているのであつて、召使にしようとしておられるのではない」と言つた人がいますが、まさにその通りです。

キリストは断じて求めておられない

御足のもとに座る間もないほど

労働に忙殺されることを

忍耐強く待ち望む姿勢こそ

主はしばしば最上の奉仕と見給うなり

マリヤは、良い方を選びました。それを彼女から取り上げはならないのです。願わくは、私たちもみな同じ選択をするものでありますように！

「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。」

(ヘブル人への手紙13章2節)

来客を歓待することは、聖なる義務（「旅人をもてなすことを忘れてはいけません」）であるだけではありません。その中には、栄光に満ちた驚くべき約束が含まれているのです（「こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました」）。

その日は、アブラハムにとり、特段変わったこともない日として始まりました。天幕の入口に座っていると、突然三人の男たちが目の前に現れます。族長であるアブラハムは、典型的な中東の礼儀作法で対応します。彼らの足を洗い、木陰の涼しいところで休憩できるようにし、牛の群れのところまで出て行って子牛を探し、妻のサラに、「パンを焼いてくれ」と頼んで、豪華な食事を供したのです。

ところで、この三人とは何者だったのでしょうか。二人は、御使いでした。三人目は、主の使いでした。主の使いは、人として現れた主イエスだったと考えられます（御使いが「主」と呼ばれている。創世記18・13参照）。

このように、アブラハムは御使いをもてなしただけでなく、受肉される前にたびたび姿を現された主を、一度はもてなしているのです。そして、驚くべきことに、私たちも同じ特権を持っていると言ってもよいのです。

神を畏れ敬う人々を家に迎えて、どれだけ祝福を受けたかを証言してくれるクリスチャンの家族は数え切れません。神に対する好ましい印象が、子どもたちの心に刻まれ、それが一生残るのです。主に對する熱心さに再び火がつき、悲しんでいた心

が慰められ、問題が解決していきます。家庭に祝福がもたらされたのは、ほかならぬ来客という名の「御使い」が、来てくれたおかげなのです。

しかし、主イエスを賓客ひんきやくとしてお迎えすることは、比べようもない特権です。主の御名によつて、主に従う人を一人でも迎えるのは、主ご自身をお迎えしたことと同じです（マタイ10・40）。本当にそう信じるなら、今までにないほどに、もてなしという素晴らしい働きに、出費も自分の時間も惜しまず捧げることでしょう。そして、「つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい」（1ペテロ4・9）というみことばを実行に移し、あらゆる来客をキリスト御自身であるかのように迎えることでしょう。そうするときに、私たちの家庭は、イエスが喜んで訪れた、あのベタニヤのマリヤとマルタの家のようなのです。

「あなたは、私たちを再び生かされないのですか。あなたの民があなたによって喜ぶために。」

(詩篇85篇6節)

信仰の後退は、多くの場合、癌に似ています。つまり、自覚症状がないのです。霊的に冷ややかになっても、それが極めてゆっくり進むために、自分が本当はどれほど肉的になってしまっているか、自覚がありません。切迫した必要に目覚めるためには、ときとして、悲劇や危機が起きるか、あるいは、神の預言者の声がなければなりません。そのときになってやっと、「わたしは潤いのない地に水を注ぎ、かわいた地に豊かな流れを注ぐ」(イザヤ44・3)という、神の約束を求めることができるのです

神のみことばに対する情熱が失せてしまったとき、また、祈りの生活が退屈な決まりごとになったり(または、すっかりなくなってしまうたり)、初めの愛から離れてしまったとき、私には、リバイバルが必要です。私が集会の交わりより、テレビ番組の方に興味があるとき、また、仕事上の約束には時間を守るのに、集会には遅刻するとき、はたまた、仕事は欠勤しないのに、集会には突然思い出したように参加するのであるなら、神から新たなお取り扱いを受ける必要があります。救い主のためには洪るのに、お金が絡むと行うなら、また、主の働きよりも自分の楽しみのために使うお金の方が多いなら、私には、リバイバルが必要です。

恨み、憤り、そして、敵意を心に秘めたままでは、リバイバルが必要です。陰口や悪口に身に覚えがあるときも、そうです。自分の犯した過ちを告白したくないとき、また、過ちを告白してくれた人を赦したくないときも、そうです。家では大喧嘩をしておきながら、集会に行くとき上機嫌を装うときは、

リバイバルが必要です。話の中身、日々の生活、生き方全体がこの世に迎合してしまっているときは、リバイバルされなければならぬときです。高慢、飽食、安逸というソドムの罪(エゼキエル16・49)があるとしたら、私たちがリバイバルされる必要はどれほど大きいことでしょうか。

自分の信仰が、冷ややかで不毛であると気がついたときこそ、第二歴代誌七章一四節の約束を求めるときです。「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう」。

告白こそは、リバイバルへの道です。

ああ聖霊よ、リバイバルはあなたより発します

リバイバルを送ってください

私の中にみわざを始めてください

あなたのみことばは宣言しています

私たちの必要を満たして下さいるのはあなたである、と

主よ、心を低くして嘆願します

今、祝福を与えて下さい、と

(J・エドウィン・オア)

「御霊を消してはなりません。預言をないがしろにしてはいけません。」

(テサロニケ人への手紙第一5章19・20節)

消すといえば、普通は、火を消すことを連想します。火を消すときには、水をその上にかけます。そうすると、完全に消えるか、または、燃える範囲は狭まり、勢いは衰えます。

聖書の中で、火は聖霊の比喩として使われています。聖霊は、熱意、燃焼、熱情を特性とします。ですから、聖霊の支配を受けた人は、熱烈、熱心で、勢いに溢れます。神の民の集まりで、そのような御霊の表れを抑圧することを、「御霊を消す」と言うのです。

パウロは、「御霊を消してはなりません。預言をないがしろにしてはいけません」と言っています。御霊を消すことと、預言をないがしろにすることが関連づけられていることから、「消す」というのは、おもに、それぞれの教会で行われる様々な集会と関係していると考えていいようです。

祈りであれ、礼拝であれ、あるいは、みことばの学びであれ、キリストのために証しをした人を恥じ入らせるようなことをするならば、私たちは御霊を消しているのです。建設的な批判は別としても、ことば遣いやどうでもよい細部を問題にして難癖をつけるならば、その人は公の働きをする気持ちが挫け、また、つまづくことになりかねません。

その一方、周到すぎるほどの準備をして礼拝を行うと、それは事実上、御霊に、「拘束衣」(※囚人などが身動きできないようにする服)を着せるようなものであり、御霊を消しているのです。もし聖霊により頼み、十分な祈りをもって準備するならば、反対のできる人はいません。しかし、人間の工夫を土台にして

準備をした場合には、聖霊が《導き手》ではなく、《傍観者》となってしまう。

神は、教会に多くの賜物を与えてくださいました。神は、いろいろな賜物をいろいろなときにお使いになります。ある兄弟が、その交わりに集う人々を奨励する主からのことばを預かっているかもしれない。ところが、すべての公の働きが、それ以外の誰か一人に集中していると、御霊が、適切な場面で必要なメッセージを引き出す自由がなくなるのです。これもまた、御霊を消すもう一つの原因です。

最後に触れておきたいのは、私たち自身も、もし、御霊の促しを拒めば、御霊を消してしまうという点です。ある主題について、みことばから語りなさいという大きな力が働いているのを感じながら、人を恐れて口を閉ざす場合があるかもしれません。公の場で祈りを導くように促されていながら、恥ずかしさかんだのに、それを言い出す勇気がありません。

その最終的な結果として、御霊が消され、せつかく開かれた集会に、自発性も力も欠如し、キリストのからだであるその教会は、弱体化していくのです。

「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」

(エペソ人への手紙4章30節)

教会で行われるさまざまな集会で、私たちが御霊を消してしまふことがあり得るように、私生活においても、御霊を悲しませてしまふことがないといえませんが。

「悲しむ」ということには、繊細さというニュアンスが含まれています。私たちが愛している人でなければ、私たちのことで悲しむことはないからです。近所の悪童たちのことでは悲しまなくても、言うことを聞かないわが子のことでは悲しむのと同様です。

聖霊に対し、私たちは特別に近くて親密な立場を保有しています。聖霊は、私たちを愛しておられます。贖いの日まで、聖霊は私たちに証印を押してくださいました。この聖霊が、私たちが原因で悲しまれることがないといえないのです。

それにしても、聖霊を悲しませるものとは、何なのでしよう。どのような形であれ、罪は聖霊に悲しみをもたらします。パウロが御霊を、「聖い霊」と呼ぶのは偶然ではありません。すなわち、聖くないものは何であれ、聖霊を悲しみに打ちひしがせるからなのです。

「悲しませてはいけません」という勧告は、犯すことがないように警告されている罪の一覧の中ほどにあります。この一覧にすべての罪が網羅もうらされているわけではなく、例として挙げられているに過ぎません。

嘘をつくこと、御霊は悲しめます(25節)―悪意のない嘘(white lie)、悪質な嘘(black lie)、きらいな嘘、誇張、半面の真実、真実をぼかすことはみな該当します。神には、嘘をつくこ

とができませぬ。ですから、神に属する人々に嘘をついてもよい、と容認することはできないのです。

高じると罪になるような怒りは御霊を悲しませます(26節)。怒りが正当化できるのは、神の栄誉がかかっているときだけで、それ以外の怒りはみな、悪魔につけいる隙すきを与えるだけです(27節)。

盗みをする時、聖霊は悲しめます(28節)。それが、母親の財布からであれ、雇用主の時間や工具であれ、事務用品であれ、盗みは盗みです。

不健全な会話で、聖霊は悲しめます(29節)。これは、猥褻わいせつでいかかわしい冗談から、暇つぶしのおしゃべりまでの一切を含みます。私たちの会話は、人の徳を高めるもの、場をわきまえたもの、親切なものでなければなりません。

無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりの五つをもって、四章の一覧は完結します。

聖霊が喜んでくださる働きの一つは、私たちの思いを主イエス・キリストで占有することです。しかし、私たちが罪を犯すと、聖霊はその働きを停止しなければなりません。私たちを、主との正常な交わりに回復するためです。

しかし、たとえそのようなときであっても、聖霊が悲しんで立ち去ってしまうことはありません。決して私たちを置き去りにはなさらないのです。私たちは、贖いの日のために聖霊の証印を受けています。とはいえ、それはぞんざいな生活の言い訳になるのではなく、聖潔を求める最大の動機の一つとならなければなりません。

「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」

(ローマ人への手紙8章18節)

それ自体に限って言えば、今の時の苦しみとは、戦慄すべきものである場合があります。私には、クリスチャンの殉教者が受けた身の毛もよだつ苦しみが思い浮かびます。クリスチャンの一部とはいえ、強制収容所で耐えなければならなかった苦しみのことを考えます。戦争にまつわる恐ろしい苦しみの数々については、いったいどう言ったらいいのでしょうか。また、事故がもとで無残にも肢体の一部が切断されたり、不自由になつたりするのはどうでしょうか。あるいは、癌やその他の病気によつて肉体が筆舌に尽くしがたい、拷問のような苦しみを受けるのはどうでしょうか。

しかも、肉体の苦しみがすべてというわけではありません。ときには、精神的な苦悶と比べれば、肉体の痛みの方が耐えやすいようにすら思えるのです。ソロモンがこう書いたのは、そのような意味だったのででしょうか。「人の心は病苦をも忍ぶ。しかし、ひしがれた心にだれが耐えるだろうか」(箴言18・14)と。結婚関係の中で生じる不倫による苦しみ、あるいは、愛する人との死別による苦しみ、または、夢が破れた落胆の苦しみがあります。人から捨てられる、または、親友から裏切られるという胸が張り裂けるような苦しみがあります。これだけの打撃、苦悩、押しつぶされそうになる人生の悲嘆の数々を、果たして人間のからだが持ちこたえることができるのだろうか、と私たちはしばしばいぶかるのです。

これまで述べてきたような苦しみは、それだけを見ていれば、到底太刀打ちできないものです。ところが、ひとたび、来たる

べき栄光と並べてみるならば、針で刺された程度のものに過ぎません。パウロは、「将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りない」と言っています。もし、苦しみが大いなら、栄光の大きさはどれほどのものであることでしょうか。

別の箇所では、使徒パウロの口から、次のような喜びに満ちた、霊的な比喩的表現がほとぼり出ています。「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない重い永遠の栄光をもたらすからです」(IIコリント4・17)。天秤にかけてみれば、今の時の患難は、羽毛の軽さであるのに対し、栄光は無限の重さなのです。時間の長さで判断するなら、苦しみは一時的であり、栄光は永遠です。

旅が終わって救い主を仰ぎ見るとき、今の時のいろいろの苦しみは、色あせて、取るに足りないものになっていくことでしょう。

苦労は無駄でなかったとわかる、イエスに会えば…

さまざまな試練も卑小に見える、キリストに会えば…

慕わしき御顔を一目見れば、悲しみはすべてかき消される
だから走ろう、この競争を勇敢に

キリストに会うそのときまでは

(エステル・K・ラストイ)

「私の母の子らが…私をぶどう畑の見張りに立てたのです。しかし、私は自分のぶどう畑は見張りませんでした。」

(雅歌1章6節)

シユラムの乙女の兄弟たちは、ぶどう畑で働かせようと、彼女を送り出しました。ぶどうの手入れで忙殺された彼女は、自分のぶどう畑、すなわち、外見を気にするゆとりはありませんでした。肌は浅黒く、乾燥し、そして、髪は櫛を入れないままになつていたことでしょう。

他人のぶどう畑のことを気にするあまり、自分自身のぶどう畑を顧みない、という危険性が常にあります。例えば、世界を福音化するという壮大な計画に没頭するあまり、自分の家族が滅びに向かう危険性です。神が、私たちに子どもたちを与えてくださるなら、子どもたちこそ、私たちにとって第一の宣教地です。私たちが、主の前に立つたときの最大の喜びの一つは、「見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子たちは」(ヘブル2・13)と、言えることです。聴衆が、感謝の気持ちでどれほど称賛してくれたとしても、自分の息子や娘を失ってしまったては取り返しがつきません。

聖書から見ると、その責任が始まるのが家庭であることは疑えませんが、イエスは、レギオンから悪霊を追い出した後、このように命じておられます。「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい」(マルコ5・19)。福音を伝えるのが一番難しい場所は、ほかならぬ自分の家庭のように思われることがしばしばですが、そここそ伝道を開始すべき場所なのです。

また、主は、弟子たちに命令を与えたときに、こう言われました。「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで」(使徒1・8)。「エルサレム」、すなわち、自分の拠点より始めよというのです。

アンデレは、自分のぶどう畑をなおざりにすまい、と心に決めました。アンデレについて、次のように書かれています。「彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、『私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った』と言った」(ヨハネ1・41)。

愛する者を主イエスのもとに勝ち取るうと誠実に努めても、不信仰から一向に離れようとしないうちの場合もあるに違いありません。親族や友人の永遠の救いを、私たちが保証できるわけではないのです。しかし、他の人の必要を満たすことに専心するあまり、自分の家族とそれに連なる人のことをなおざりにすることのないように用心しなければなりません。そのような場合でも、自分のぶどう畑を優先するべきなのです。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」

(ローマ人への手紙10章13節)

主の御名を本当に呼び求めて、救われない人は一人もいません。必死のこの叫びには、必ず応答が来ます。万策尽きたとき、また、自分の力で自分を救おうという望みをすべて捨てたとき、そして、頼るべきところとして上を見るよりほかなくなつたとき、そのようなときに、もし、主にSOS(※遭難信号)を送るなら、主はそれを聞き、答えてくださるのです。

シーク教徒の青年サドゥー・サンダー・シングは、もし、平安を見いだせなかつたら、自殺をしようと心に決めました。シングは、こう祈りました。「神よ、もし、神という方が本当におられるなら、今夜、あなた御自身を私に現してください」と。七時間経つても答えがなかつたら、ラホール行きの次の列車が猛スピードで通る線路の上に首を横たえるつもりでした。

早朝、イエスが部屋に入ってきて、ヒンドウスターニー語でこのように言う幻を見ました。「あなたは、正しい道を知りたいと祈っていた。その道を歩んでみてはどうか。わたし自身がその道である。」

シングは父親の部屋に駆け込み、こう言いました。「私はクリスチャンになりました。イエス以外の誰にも仕えることはできません。死ぬその日まで、私のいのちはイエスのものです」。

私は、いのちがけて主の御名を呼び求めたのに、答えがなかったという人の話を一度も聞いたことがありません。もちろん、窮地に陥り、「もし、助けてくださったら、あなたのために生きます」と、主に約束しておきながら、切迫した事態が回避できるやいなや、その約束を忘れてしまう人はいます。しかし、神はそのような人の心をご存知です。緊急避難的に神を利用して

も、真心から主に従う決心をしていたわけではないことを、神は見抜いておられます。

しかし、神を必死で捜し求めている人には、常にご自身を現してくださるといふ事実は変わりません。聖書が簡単に手に入らない国々においては、神は幻を通して現れるかもしれません。その他の場所では、聖書の一部分、個人の証し、クリスチャンの読み物、あるいは、環境の奇跡的なめぐり合わせによつてもしれません。したがって、「神を求める人は、すでに神を見出している」といふのは、確かに事実といえるのです。そう言えるほど確かなのです。

「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。」

(ヨハネの福音書13章17節)

キリスト信仰を教え、宣べ伝える者は、自分が宣べ伝えていることを実践する必要があります。真理の生きた実例を、世に提示しなければなりません。主を信じる人々の生活の中に「ことば」なる御方が受肉すること…これこそが、神のみこころなのです。

この世は、話を聞くよりも行動を見て深い印象を受けるものです。「いつの場合でも、説教というのには聞くよりも見る方がいいものだ」と書いたのはエドガー・ゲスト(※イギリス生まれのアメリカ詩人)ではなかったでしょうか。そして、よく知られている皮肉にこういうものがあります。「あなたという存在が邪魔をして、あなたの言っていることばが聞こえない(What you are speaks so loud, I can't hear what you say.)」。

ある説教者について、こんなことが言われていました。彼が講壇に立つと、会衆はいつまでも聞いていたいと望んだ(※それほど説教はすばらしかった)が、いったん、講壇から離れると、二度と説教をして欲しくないと望んだ(※それほど普段の生活はひどかった)、と。

H・A・アイアンサイドは、言いました。「実生活にまさる強力な口封じはない」と。同様な意味で、ヘンリー・ドラモンド(※スコットランドの牧師・著作家)は、書いています。「人そのものが、メッセージなのである」と。カーライルは、自分の証しをつけ加えています。「事実がすべてという時代にあつては、聖い生き方こそ、神がおられることを示す最善の反論である。…人が背後にあつてこそ、ことばは重みを持つ」と。E・

スタンレー・ジョーンズは、言っています。「『ことば』が、私たちを通つて力となる前に、まず、『ことば』なる方が私たちのうちに受肉しなければならぬ」と。オズワルド・チエンバズは言いました。「もし、私が正しいことを宣べ伝えても、それを生活で実行していないなら、神について虚偽を伝えていることになる」と。

もちろん、教えたことを完全に体現しておられるのは、主イエス・キリスト以外におられない、と私たちは知っています。主が語られたことと、主の生き方にはいかなる矛盾もありませんでした。「あなたはいったい、何者なのだ」と、ユダヤ人が訊ねたとき、主はこう言われました。「初めからわたしがずっと主張してきた通りのものである」と(ヨハネ8・25 NIV 訳)。主の日頃の行いは、その主張に呼応していたのです。私たちの行動も、少しずつそうなっていかなければなりません。

博士(ドクター)の称号を持つ二人の兄弟がいました。一人は牧師(神学博士)で、もう一人は医師(医学博士)でした。ある日のこと、悩みをかかえた女性が牧師を訪ねてやってきましたが、どちらの博士(ドクター)がそこに住んでいるのか分かりません。牧師が玄関のドアを開けると、彼女は尋ねました。「先生は説教をなさる方のドクターですか、それともへ実践をなさる方のドクターですか」と。(※「実践する」と「開業医をする」は英語で同じ語)その質問にハツとした牧師は、「自分自身がまず、教えていることの生きた実例にならなければ」と、大いにチャレンジを受けたとのことでした。

「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。」

(ピリピ人への手紙3章12節)

昨日の学びでは、信条と行動が合致していなければならぬことを確認しました。しかし、バランスを欠かないようにするために、二つの点を追記しておかなければなりません。

第一に、この世にいる限り、神の真理に、余すところなく完全に従って生きることは決してできないと認めなければならぬ、という点です。最善を尽くした後でも、なお自分は役に立たないしもべである(※ルカ17・10)と言わねばならないでしょう。しかし、現実がそうであるからといって、それを失敗や中途半端の言い訳にはいきけません。ことばと行動のギャップを絶えず埋めていこうとすることこそ、私たちの責務なのです。

第二に考察したいのは、使者(メッセンジャー)が誰であろうが、使信(メッセージ)は、使者よりも常に大切であるという点です。アンドリュー・マーレーは言います。「主のしもべであれば、遅かれ早かれ、自分では完全に実行できていないことばを宣べ伝えなければならないときが来る」と、『キリストにとどまる(Abide in Christ)』という本を書いてから三十五年たった後、彼は書いています。「教役者やクリスチャン著述家が、経験した以上のことを言うように導かれる場合が往々にあることを理解していただきたく思う。(『キリストにとどまる』という著作を書いた)当時、私は、文章にしたことを実際に経験していたわけではなかった。また、今でもそのすべてを経験したということではない」と。

神に関わる真理とは、比べうるもののない崇高なものです。ガイ・キング(※聖書註解者)が書いているように、それは靈妙

なことこの上ないものなので、「自分がそれに触れて、万が一にもそれを汚してはならないという恐れを引き起こす」のです。しかし、その高嶺に私たちが到達していないからといって、永久に告知をしないままでもいいのでしょうか。とんでもありません。むしろ、宣言をしてやまないことでしょう。たとえ、そうすることによって自分が咎められることになったとしても。自分自身で経験できていない範囲がどれほどであったにせよ、いつかそれを経験したいという熱望が、それに取って代わることでしょう。

以上、考察したことを、救い主にふざわしくない振舞いの言い訳として使うようなことが万が一にもあつてはならない、と念を押しておきたいと思えます。しかし、以上の点をわきまえていけば、紛れもない神の器によるメッセージに対して、「まだ到達していない高みにまで舞い上がっている」と、当を得ない非難をしないで済むのです。また、経験が十分でないからといって、神のみこころを余すところなく伝えることをためらってはなりません。神は、私たちの心を知っておられます。私たちが偽善者なのか、熱望に燃える者なのか、神はご存知だからです。

「この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いである。」

(歴代誌第二十章15節)

十字架の兵士なら、遅かれ早かれ、攻撃を受けるときがやってくると思っていて間違いありません。神の真理を勇敢に伝えれば伝えるほど、また、実生活でその真理を具体的に表せば表すほど、猛攻にさらされます。一人の年老いた清教徒がこう言いました。「司令官の近くに立つ者は射手の格好の的である」。

身に覚えのない悪事を責められます。うわさ話、中傷、陰口で踏みつけられます。仲間はずれにされ、嘲笑されます。このような仕打ちはこの世から出てくるのですが、悲しいことに、仲間であるはずのクリスチャンから出てくることもあります。

そのようなときこそ、戦いは私たちのものでなく、神のものであることを思い出すことが大切です。そして、出エジプト記一四・一四の約束を自分のものとすべきなのです。「主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていないければならない」。つまり、自己弁護や反撃をしなくてもよいということです。主は、適切なときに、私たちの汚名をそそいでくださいます。

F・B・マイヤーは、書いています。「たった一言で何と多くのものが失われることか。静まれ。落ち着け。頬を叩かれたらもう一方を向けよ。言い返すな。自分の評判や人格が貶められても気にするな。それらは、主の御手の中にある。失うまいとするなら、かえって損なわれることになる」と。

身に覚えのない罪で訴えられたときに、自ら汚名をそそごうとはしなかつた模範として際立つのはヨセフです。自分の言い分を神にお任せしたのです。すると、神はヨセフの不名誉をそそぎ、高い榮譽ある地位に引き上げてくださいました。

一人の年老いたキリストのしもべが、長年に渡り、度々不当な扱いを受けて来た経験を証ししてくれました。しかし、アウグスティヌスのことばを借りて、彼は祈りました。「主よ、常に自分の正しさを証明しなければ気が済まないという欲求から、私を救い出してください」と。主はその度に、彼が正しかったことを明らかにしてください、訴えた人々の正体が暴露される結果となりました。

そして、もちろん最高の模範はイエスです。「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました」(1ペテロ2・23)。
したがって、今日のメッセージは、以下のようにまとめることができます。不当な訴えをされたときに、自己弁護をしなくてもよい。戦いは、主のものである。主が私たちのために戦ってください。私たちは沈黙を守るべきである、と。

「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。」

(ヨハネの手紙第一 4章1節)

カルトが驚くべき速さで増えている時代に、私たちは生きています。実をいえば、新しいカルトといえるものは、何一つありません。それらはみな、新約聖書時代に現れた異端のグループが形を変えたものにすぎないのです。目新しいのはその変形の様態であり、根本的な教義は変わっていません。

「霊を試しなさい」とヨハネが言ったのは、教師という教師をみことばに照らしてあらゆる角度から吟味し、偽りの教師を見破りなさいという意味です。自らが偽物であることをカルトが露呈する領域は、基本的に三つです。どのカルトといえども、この三つの試問のすべてを通してはできません。

まず、大半のカルトは、聖書に関する教えに、致命的な欠陥があります。カルトは、聖書を誤りのない神のことば、また、人間に対する神の最終的な啓示として受け入れてはいません。それぞれの教祖が書いたものに、聖書と対等の権威を付与するのです。主から新しい啓示を受けたと主張し、「新しい真理」だと鼻高々です。真理をねじ曲げ、歪めてできた独自の翻訳を出版します。伝統として言われていることを、聖書と同等に扱います。神のことばを欺瞞的に取り扱います。

次に、大半のカルトでは、私たちの主に関する教えが異端的です。主が神であられ、三位一体の第二格であることが否定されます。神の御子であると認めるかもしれませんが、父なる神には及ばないというのです。イエスがキリスト(すなわちメシヤ)であることをしばしば否定し、キリストとは、イエスという

人物にくだった神からの影響力のことである、と教えます。救い主の、罪なき、真の人間性が否定されることも少なくありません。

カルトがさばきを免れない三つ目の領域は、救いの方法に関する教えです。主イエスに対する信仰以外の何ものにもよらず、恵みによって救われる、ということを否定します。どのカルトも、異なる福音、すなわち、善行や立派な人間になることによつて救われる、と教えるのです。

このようなカルトを広めようという人が玄関に来たときに、どう対応したらよいのでしょうか。ヨハネは、明快に答えています。「あなたがたのところに来る人で、この教えを持つて来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。そういう人にあいさつすれば、その悪い行ないをともしることになります」(Ⅱヨハネ10・11)。

「恥すべき隠された事を捨て、悪巧みに歩まず、神のことは曲げず、真理を明らかにし、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。」

(コリント人への手紙第二4章2節)

前のページでは、「聖徒にひとたび最終的に伝えられた信仰」(※ユダ3節英訳)に合致しないカルトの三つの領域に、目を留めました。それぞれのクリスチャンの交わりの中で、気づくだけではなく、注意して避けなければならないカルトの特徴が、その他にもいくつかあります。

例えば、カルトの教祖は、いわば、個人崇拜と言ってよいものをつくりあげ、事実上、自分はメシヤ、または、超人であると説明します。一般の信者は、カリスマ的な人物の過酷で独裁的な支配のもとで服従が強要され、従わなかった場合には、恐ろしい罰が待っている、と脅されることが少なくありません。

真理はここ以外にはないとか、このような優れた特長を有しているのはここだけである、と誇らしげに主張し、それに同意しない集団はことごとく批判の対象となります。他の宗教の教義の中から最上のもものを精選して組み合わせたので、自分たちが最高権威である、と主張したりするところもあります。彼らがいろいろな奥義に与らなければ、真に幸福にはなれないと言いたいのです。

会員になった人々は、隔離され、教師や、その他信者といわれる人々と一切接触しないように、また、教祖が書いたもの以外の書物は決して読まないように指示されます。

律法でがんじがらめの生活を命じられ、やがて、そこから逃げ出すことができないようになることが少なくありません。聖潔とは、神のいのちによらず、自分の力で特定の儀式を行い、

何かを守ることと同義です。巧妙な心理操作を行い、人々から金を巻き上げます。教祖たちは、贅沢三昧をする一方、信者の多くは、貧困すれすれの状態に陥ります。

カルトの多くは、羊泥棒であり、教会に行っていない人相手に差し伸べる、というより、むしろ、他の宗教団体を襲撃します。

神が啓示された重要な事柄を完全に無視して、一つ、またはほんのいくつかの教義を極端に強調します。

真理を教える人は、敵と見なします。パウロが、律法主義に陥ったガラテヤ人たちに、「それでは、私は、あなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしうか」(ガラテヤ4・16)と尋ねたのも、同じ理由からでした。

以上、述べたような態度や行動の一つでも、健全なクリスチャンの交わりに入り込むとしたら残念なことです。しかし、肉体に留まっている限りは、そうならないように、私たちはみな熱心に警戒をしなければなりません。

『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行つて学んで来なさい。』

(マタイの福音書9章13節)

私たちが、宗教的な儀式をいくつこなしているか、ではなく、他の人にどう接しているかということに、神は絶大な関心を持つておられます。いけにえより、あわれみを好まれるのです。儀式よりも、実際のな品行を重視されるのです。神がいけにえを望んでおられないというのは、変に思えるかもしれませんが、そもそもいけにえの制度を確立されたのは、神だからです。

しかし、矛盾は少しもありません。いけにえや供え物を持つてくるように、と民に命じられたことは確かですが、それがあれば、正義や慈しみの代わりになるという意味ではないからです。「正義と公義を行なうことは、いけにえにまさって主に喜ばれる」(箴言21・3)。旧約の預言者たちが激しく非難したのは、すべての儀式を落ち度なく行ないながら、隣人をだましたり、虐げたりする人々でした。イザヤは、みなしごとやもめを虐げている限り、全焼のいけにえにも祭りにも、神はうんざりしておられる、と人々に語りました(イザヤ1・10・17)。神が望まれる断食とは、労働者を公平に扱い、飢えた者に食べさせ、貧しいものに衣服を与えることであるとも語っています(イザヤ58・6・7)。生き方が正しくないのであれば、いけにえとして犬の頭や豚の血を捧げると大差がないと言っています(イザヤ66・3)。

「宗教の祭典をやめよ」と、アモスは民に言いました。正義と憐れみが溢れ流れるのでなければ、「神はそのような儀式を憎まれるからだ」と言うのです(アモス5・21・24)。また、ミカは、神が儀式以上に望んでおられるのは、実体のあるもの、すなわ

ち、真の公平さであり、憐れみ、そして、謙遜であると論じています(ミカ6・6・8)。

主の時代に、やもめたちを家から立ち退かせながら、人前では長い祈りを捧げ、宗教心豊かであるふりをしていたパリサイ人は、主からの冷笑を受けただけでした(マタイ23・14)。菜園に生育するミンツの十分の一は、怠りなく納入してはいても、それが、正義や信仰の代わりにはなるはずありません(マタイ23・23)。もつともな不満を持つ兄弟がいるのに、私たちが主に捧げものを持つていくのは空しいことです(マタイ5・24)。その捧げものは、過ちが正されて初めて受け入れられるものなのです。

欠かさず教会に出席しても、その前の一週間に行なつた仕事上の不正をもみ消すことはできません。一年間、母親に憎々しい態度を示し続けながら、母の日にチョコレートとプレゼントしても無意味です。父親に愛も尊敬を示さないのでおきながら、父の日だけワイシャツをあげても無駄というものです。

どんなに外面をつくらなくても、儀式を行つても、神を欺くことはできません。神は、心と日々の行いを見ておられるからです。

「主よ。お救いください。聖徒はあとを絶ち、誠実な人は人の子の中から消え去りました。」

(詩篇12篇1節)

「誠実な人々」は、今や、「希少種」同然、人類から急速に姿を消そうとしています。すでに当時、消滅してしまうと嘆いていたダビデが、今、生きていたら、どう感じるだろうと思わずにはいられません。

誠実な人とは、信頼に足る人、あてになる人、信用できる人のことです。約束を守り、責任を果たし、誉れある誓いには、揺るぎない忠誠を示します。

不誠実な人は、会う約束をしても、それを守らなかつたり、言い訳できないほど遅刻したりします。日曜学校を担当すると同意し、出席できないとわかっていても補充の手配をしません。あてにならないとはこのことです。口では色々言いますが、中身がありません。ソロモンが、次のように言ったのもつとでもあります。「困ったときに不誠実な人をあてにするのは、虫歯や、関節の外れた足を頼りにするようなものだ」(箴言25・19英訳)。

神は、誠実な男性を、また、女性を探しておられます。神が望んでおられることに忠実に取り組む管理者を求めておられます(1コリント4・2)。キリスト信仰の偉大な真理を忠実に伝える教師を求めておられます(IIテモテ2・2)。主イエスに忠実に、主と同様に拒絶され、十字架を担うことを受け入れる信仰者を求めておられます。神の靈感を受けた、無謬(むびやう)の絶対的なみことばに対して、断固として従う人々を求めておられます。宗教版ジブシーのように、教会から教会へとさまよっているのではなく、地元の集会(教会)にしつかり結びつくクリス

チャンを求めておられます。救われていない人々に対してと同様、他の信者に対しても誠実な聖徒を求めておられるのです。

他の美点に関してもことごとくそうであるように、主イエスは、私たちの栄えある模範です。主は忠実で、真実な証人であり(黙示録3・14)、神に関わるもろもろの事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司でもあり(ヘブル2・17)、私たちの罪を赦し、すべての悪から私たちを、清めてくださる、真実で正しい方です(1ヨハネ1・9)。主のことばは真実で、主の約束は必ず果たされ、主の導きは全幅の信頼を置くことができるものです。

誠実であっても、人々は特別に評価をしないかもしれませんが、神はそうではありません。主イエスは、次のようなことばで、弟子たちの誠実さを賞賛しておられます。「あなたがたこそ、わたしのさまざまの試練の時にも、わたしについて来てくれた人たちです。わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます」(ルカ22・28、29)。そして、誠実であったことに対する最大の報いは、神から次のようなお褒めのことばをいただくことではないでしょうか。「よくやった。良い忠実なしもべだ。∴主人の喜びをとものに喜んでくれ」(マタイ25・21)。

「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。」

(創世記12章3節)

神が最初にアブラハムを召して、地上の選民のかしらにされたとき、その民族に味方するものは祝福し、敵対するものはのろうと誓われました。今日にいたるまでの幾世紀の間、ユダヤ人は数えきれないほどの敵意と差別に苦しんできましたが、反ユダヤ主義に対する神ののろいはまだ終わりを告げてはいません。

ハマンは、ペルシャ在住のユダヤ民族の破滅を企てました。王をまるめこんで、変更不能な勅令に署名させたのです。しばらくの間、すべてがハマンに有利に運んでいるように見えました。しかし、それから予期せぬ障害が次々と起きました。失望が失敗に変わり、動揺した首謀者ハマンは、はからずも、宿敵モルデカイというユダヤ人を処刑するために作っておいた絞首台に、自らがかかることになりました。

歴史から何も学ばなかったアドルフ・ヒットラーは、歴史の追体験を運命づけられてしまいました。ヒットラーはユダヤ人を抹殺しよう、と強制収容所、ガス室、焼却炉、集団処刑という残忍な計画に着手しました。もはや、どんなことをしてもヒットラーを止めることはできないように思われました。ところが、それから潮流が変わり、愛人と共に、ベルリンの掩蔽壕(※半地下式の鉄筋コンクリート製構築物)の中で、恥辱の死を遂げたのです。

反ユダヤ主義は、大患難時代に恐るべき頂点に達します。ユダヤ人は、引き渡され、苦しめられた挙句、殺されるでしょう。ユダヤ人は、すべての異邦の国々から憎まれます。途方もない

数の人々が殺戮されることでしよう。しかし、この大虐殺は、主イエス・キリストご自身が来臨されることで中断されます。主の民であるユダヤ人を迫害した者は滅ぼされ、キリストにつくユダヤ人の兄弟たちを助けた人々は、御国に入るのです。

真の信者であるなら誰も、反ユダヤ主義によつてたましいを汚すようなことがわすかでもあつてはなりません。クリスチャンの主、救い主、最善にして最も真実な友であるイエスご自身は、かつてユダヤ人であられ、今もユダヤ人なのです。神は、ユダヤ人を用いて聖書を与え、聖書を保護してこられました。メシヤを拒絶したため、神から一時的に退けておられるイスラエル民族ですが、キリストが御父のゆえに、イスラエルを愛しておられることは変わりません。ユダヤ人を憎みながら、自分の人生と奉仕の上に神の祝福を期待できる人は、一人もいないのです。

「エルサレムの平和のために祈れ。『おまえを愛する人々が栄えるように』(詩篇122・6)。ユダヤ民族を愛する人は、自らも繁栄を経験することになるのです。

「それゆえにサウルの娘ミカルには死ぬまで子どもがなかった。」

(サムエル記第二6章23節 英訳)

契約の箱をエルサレムに運び入れ、特別に用意した天幕に箱が安置されたとき、ダビデは有頂天となりました。これこそ自分が成し遂げたことの中で最大級のものであり、生涯で最も栄光に満ちた出来事の一つであると直感したダビデ王は、力の限り主の前で踊りました。ところが、妻のミカルは、「なんとという恥ずかしい振舞いでしよう」と、ダビデをさげすみました。その批判的態度が直接もたらした結果として、死ぬその日までミカルには、子どもが一人もできませんでした。

この出来事から、批判的な思いは、霊的不毛の原因となることがわかります。もちろん、それは建設的批判のことではありません。もし、批判が当たっていれば、それを歓迎し、益に変えるべきです。私たちを愛するがゆえに、敢えて助けとなる批判をしてくれる友人は、人生でめったにいないものです。

しかし、破壊的批評がすべてをぶち壊しにしてしまう場合があります。一人の人生に進行中の神のわざを破壊してしまうかもしれませんし、数年かかった進歩を数分で駄目にしてしまうこともあるのです。

ダビデに関わるこの出来事で、契約の箱はキリストを表し、エルサレムに箱が置かれたことは、キリストが人の心の王座に着座されたことを表しています。それが現実となったときに、御霊に満たされた信仰者は、喜びと情熱を抑えられません。それが不信者の敵意を呼び覚ますのは珍しいことではなく、他のクリスチャンが嘲りを浴びせることもあります。しかし、そのような批判的な心は、例外なく霊的不毛の原因となっていくのです。

個人の生活においてだけではなく、個々の集会(教会)の霊的不毛の原因にもなりかねません。例えば、若者が絶え間なく激しい批判にさらされる交わりを例に取ってみましょう。若者の服装、髪型、公の祈り、音楽が槍玉に挙げられます。指導的立場の人々は、忍耐強く若者を訓練するのではなく、一夜にして成熟した信仰者になることを期待しているのです。ほどなく、若者は気心の知れた交わりへと流れていき、集会(教会)というぶどうのつるは、実をつけないまま枯れてしまうのです。

あら捜しをしていると、相手を痛めつけるだけでなく、本人にもそれが報復となって戻ってくることを、ミカルの実例からの警告として受け止めようではありませんか。その報復とは、霊的不毛にほかなりません。

「わたしたちもこの世にあつてキリストと同じような者であるか
らです。」

(ヨハネの手紙第一 4章17節)

新約聖書の真理の中には、あまりにも大胆で、衝動的ですらあるものがあります。これもその一つです。もし、聖書に書いてなければ、そのようなことを発するという大それたことはしないでしよう。しかし、事実そう書かれているのです。それは、輝かしい真実であり、喜び祝うことができるのです。

この世にあつて、私たちがキリストと同じようであるとは、どういう意味でしょうか。私たちは、思わず自分がいかにキリストに似ていないかを考えてしまいます。全知全能であるとか、遍在するという神と共通の条件を、私たちが持つことはあり得ません。私たちは、罪と失敗でいっぱいである一方、キリストはあらゆる点から見ても完全です。私たちは、キリストのように愛することができず、キリストのように赦すこともできません。

では、どの点で主に似ているのでしょうか。この聖句が説明しています。「このことによつて、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばぎの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあつてキリストと同じような者であるからです。神の愛が私たちの人生に確かに及んだ結果、キリストのさばぎの座の前に立つても、恐れないで済むことができるようになりました。その確信を持つ理由は、救い主と、ある共通点があるからです。それは、さばぎはすでに終わったという共通点です。さばぎに関して、私たちはキリストのようなものなのです。キリストは、カルバリの十字架によつて、私たちの罪のさばぎをその身に負ひ、罪の問題を最終的に解決してくださいました。私たちの罪の刑罰を受けてくださったがゆえに、私たちがそれを受ける必要は一度となく、確信を込めてこう歌うことができますのです。」

死とさばぎは過去のものとなった

行く手には恵みと栄光が待っている

大波のすべてはイエスに襲いかかった

そして、大波はそこで力を使い果たしてしまつたのだ

主にとつて、さばぎが永遠に過去のものとなったように、私たちにもさばぎは過去となったのです。それゆえに言うことができます。

もはや罪に定められることはない。

私は地獄に行かなくてよいのだ

責め苦も炎も、私の目が見ることはない。

私に対する宣告は取り下げられ、死はそのとげを失つた。

私を愛し給う主が、御翼で私をかくまつてくださるから。さばぎに関してではなく、神に受け入れられるという点においても、私たちはキリストに似たものとなりました。神の前に立つとき、主イエスがお受けになるのと同じ愛顧を受けることができます。なぜなら、私たちは主の中にいるものとなったからです。

近く、これほどにも限りなく近く、私は神のおそばにいる

御子の中にある私は、御子と変わらないほど神のみそばに

いるのだ

そして、最後に触れたいのは、キリストが御父に愛されているのと同様に、御父に愛されている私たちは、その点でもキリストと似たものであるという点です。大祭司として祈られた中で、主は言われました。「あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたことを、この世が知るためです」(ヨハネ17・23)。したがって、私たちが次のように言つても、決して誇張ではないのです。

「神にとり、われほど愛しきものなし。御子を愛する愛をも

て、神、われを愛し給えば」(ケイツビー・パジェット)

以上のような理由から、この世にあつて私たちはキリストに似たものであるというのは、この上なく幸いな真実なのです。

「友を持つものは親愛の情をあらわすべきである。そうすれば、兄弟よりも親密に寄り添う友も現れる。」

(箴言18章24節 欽定訳)

この聖句を、現代語の翻訳はいろいろに訳していますが、欽定訳だけは大事な真理を伝えてくれます。すなわち、友情は育てるものであると。友情は、気配りによって成長し、放置することによってしおれていくのです。

『Decision 決断』誌の論説に、こう書いてありました。「友情は、偶然に起こるものではない。育てなければならぬものだ。つまり、手入れをしなければならぬ。受けるだけではなく、与えることによって築かれるのである。友情は、順調なときだけではなく、逆境のときのためにもある。本当の友には自分が困っていることを隠さない。また、助けてもらうことだけを目的にしてしがみつくようなことはしない」。

良き友人ほどありがたいものではありません。根も葉もないことで非難されたとき、味方になつてくれます。立派なことをしたときには賞賛を惜しまず、不十分な場合はどこがいけないかを率直に指摘してくれます。何年たつても連絡を絶やさず、喜びも悲しみも共感してくれます。

重要なのはその点、すなわち、連絡を絶やさないことです。手紙やグリーティングカードを書き、電話をかけ、顔を出すことです。しかし、友情とは双方方向のものです。もし、どれほど手紙をもらつても、一向に返事を書かなければ、その友情は保つだけの価値がないと表明しているも同然です。忙しくて返事など書いていられない。邪魔しないでくれ。あるいは、手紙を書くのが大嫌いなんだということ。放置が長引くと、どんな友情もまず持ち堪えることはできません。

連絡を取ろうとしないのは、一種の利己主義です。自分のことばかり、つまり、それに関わる時間、努力、費用に気を取られているからです。本当の友情は、相手のこと、すなわち、どうすることが励ましや慰め、元氣のもと、そして、助けになるか、また、どうしたら靈的な糧を届けることができるかを考えるのです。

一番困っていたときに、御霊に導かれたことばをもつて、かたわらに来てくれた友に、どれほど感謝しなければならぬことでしょうか。私の人生にも、クリスチャンとしての奉仕をしながら、深い失望を味わい、がっかりしていた時期がありました。私の落胆を知るはずもない一人の友人が、励ましの手紙をくれ、その中にイザヤ書四九章四節が引用されていました。「しかし、私は言った。『私はむだな骨折りをして、いたずらに、むなしく、私の力を使い果たした。それでも、私の正しい訴えは、主とともにあり、私の報酬は、私の神とともにある』。それこそは、まさに私が元氣を回復し、再び働きに向かうのに必要なことばだったので。

チャールズ・キングスレーは次のように書いています。

一人の友を忘れることができようか
その顔を忘れることなどできようか

最後まで励まし続けてくれたその友の顔を

走る元氣を与えてくれたその友の顔を

神のごとき人々に、負う恩義の深さよ

忘れうるとしても、忘れはしない

私たちのほとんどは、生涯にごく少数の親密な友人を持つのみです。であるとすれば、その友情を強く健全に保つために、全力を尽くさなければなりません。

「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたをたのこを心配してくださるからです。」

(ペテロの手紙第一5章7節)

思い煩いを主にゆだねることを学ばないまま、信仰者として長い、長い歳月を過ごす、というのは、ありえないことではありません。この聖句を暗唱し、人々に向かって説教しながらも、自分自身の生活においては、まったく実行していないということもあるのです。神が私たちのことを心配してください、私たちが抱える問題に気を配ってくださる、考えうる最大の心配事さえも、神にお任せすれば大丈夫であると神学的には分かっています。そうでありながらも、夜は眠れず何度も寝返りをうち、いらいらし、悩み、最悪の事態を想像してやまないのです。

そんな風になる必要は、どこにもありません。私には、私たちの誰よりも多くの問題と心痛に向き合っている友人がいます。もし、それらを一人で担わなければならないとしたら、霊的なノイローゼになってしまうことでしょう。彼は、どうしているのでしょうか。主にその問題を持つていき、そこに置いてくるのです。そして、ひざまずいた姿勢から立ち上がり、ベッドにもぐり込み、賛美歌を数節歌い、ほどなく眠りにつくのです。

(キャンパス・クルセードの設立者)ビル・ブライトは、かつてリーロイ・エイムズにこう言ったことがありました。「リーロイ、第一ペテロの手紙五章七節の中に、大きな慰めを私は発見したよ。結局のところ、私の重荷を担うのは、自分かイエス様かどちらかしかない。双方が担うことはできない。だから、主に重荷をゆだねることに決めたのだ」と。

エイムズも、試してみようと思いました。彼は、こう書いています。「部屋に行き、私は祈りはじめた。全力を尽くして、ビルが言った通りのことをした。何ヶ月の間、胸につかえていたことがあった。それが消えていくのを実際に感じることできた。神による解放を経験した。確かに、問題は消えたわけではなかった。今日に至るまで、問題は残ったままだ。しかし、重圧感は消えた。もはや、眠れぬ夜を過ごすことはなく、泣きながら眠りにつくこともない。喜ばしい思いと心からの感謝をもって、重荷と真つ直ぐに向き合うことができるのである」。

私たちのほとんどは、次のように書いた人に共感できるのではないのでしょうか。

神の御旨は、私の心配事を

日々、神にゆだねること

神は私に言われる、

あなたの自信も投げ捨てよ、と

しかし、ああ、愚かにも私は

とつきに心配事に襲われると、

自信は捨てても、心配事のすべてを

自分の両肩で担っているのだ

そして、救い主は、絶えず次のように語っておられます。

心配事はひとつも担ってはいけな

一つでもあなたには大きすぎるから

その役割は私に任せよ、私がそれをする

私の中に憩うこと、これがあなたの役割だ

「主よ…もしだれかから不正な取立てをしていましたら、それを四倍にして返します」

(ルカの福音書19章8節 口語訳)

神から直感的に教えられたのでしよう。ザアカイは、主イエスに心を開くとすぐに、過去の償いをするべきだと思いました。聖書本文を読む限りでは、誰かをだましたことがあったかどうかは不明に思えますが、この裕福な取税人ザアカイの場合、「もし」(S)という語は、本当は、「…ので」(since)という意味である

と信じるに足る根拠があります。ザアカイは、不正な手段で金儲けをしてきました。それが自分でわかっていました。その点について、何かしなければならぬと腹を決めたのです。

「償い」というのは、聖書の幸いな教えであると同時に、幸いな聖書の慣習です。回心したならば、間違った方法で手に入れたものは、正当な所有者に返還しなければなりません。救われたことによって、過去の間違いを正す責任がなくなつたわけではありません。もし、救われる前に金銭を盗んだことがあつたなら、神の恵みの何たるかを知つた今、そのお金を返すはずで

す。まだ回心する前の時点で負っていた合法的な負債が、新生を経験したからといって、帳消しにされるわけではありません。

何年も前のことですが、W・P・ニコルソンによる伝道の結果、ベルファストの何百人という人々が救われました。その結果、地元の工場では、大きな物置を作らなければならなくなりました。回心したばかりの人々が、以前盗んだ工具を返還しに来たからです。

アメリカの陸海空軍から盗まれた盗品を収納しようと思えば、巨大な倉庫がいくつも必要となるでしょう。工場や会社の

オフィス、店舗から違法に行方知れずになる工具、事務用品、商品は言うに及ばずです。

クリスチャンが償いをする場合、理想を言うなら、主イエスの御名によつて行いたいものです。例えば、このように。「何年前か前、ここで働いていたときに、これらの工具を盗みました。しかし、実は最近、私は救われ、私の人生は、主イエス・キリストによつて変えられました。私は主によつて、工具を返却し、あなたから赦しをいだけなければならぬという思いが心の中に起こされました」。このようにすれば、栄光は、それを受けるにふさわしい救い主に帰されることとなります。

クリスチャンの証しの問題として、盗んだお金に対する利子を支払つた方がよい場合もあります。旧約聖書にある「罪過のためのいけにえ」は、それをあらかじめ示すものです。その場合、損害に五分の一を加えたものが必要とされました。

正直なところ、時間が経ってしまったため、または、状況が変化したため、もはや償いができないという場合があります。主は、その状況をご存知です。罪を告白するならば、実際に行動で表したいという真摯な願いを受け入れてくださいます。ただし、それは、償いが不可能な場合に限られるのはもちろんです。

「ついに、人々は病人を大通りへ運び出し、寝台や寢床の上に寝かせ、ペテロが通りかかるときには、せめてその影でも、だれかにかかるようにするほどになった。」

(使徒の働き5章15節)

ペテロの公の働きには、力が伴っていることに人々は気づきました。ペテロが行く所はどこでも、病人はいやされました。群衆がペテロの影の中に入りたいと思つたのも、無理はありません。ペテロは、途方もない影響を及ぼしていたのです。

私たちの誰もが、影を投げかけています。接する人の生活に影響が及ぶことは、避けられません。(『白鯨』の著者)ハーマン・メルヴィルはこう書いています。「われわれは、自分のためだけに生きることはできない。われわれの生活は、目に見えない無数の糸でつながっている。この『交感神経線維』にそって、われわれの行動は原因として伝わり、結果として戻ってくるのである」。

あなたは福音書を書いている。毎日一章ずつ

あなたの振舞い、発することはよって

本当か、そうでないか、どちらであろうとも、人は読む

ところで、あなたによる福音書とは

いったい、どのようなものだろう

「あなたはどの福音書が好きですか？」と尋ねられた人が、こう答えました。「わが母による福音書です」と。ジョン・ウエスレーもこう言っています。「私は、キリスト教信仰について、英国のすべての神学者を合わせたより、もつと多くものを母から学んだ」と。

私たちの一人ひとりを見て、「クリスチャンとはあのような人のことをいうのだ」と思う人がいることに気づいたら、厳肅な

気持ちにならないでしょうか。そう思うのは、息子、または、娘であるかもしれません。また、友人、あるいは、隣人であるかもしれません。先生、または、生徒であるかもしれません。あなたこそは、その人にとつてのヒーローであり、模範であり、理想なのです。あなたが気づいている以上に、その人はあなたをじつと観察しています。あなたの仕事ぶり、教会生活、家庭生活、そして、祈りの生活―そのすべてが、その人にとつて做すべき模範なのです。あなたの影が、自分の上にかかることを願っているのです。

普通、影には実体がないと考えます。しかし、私たちが落とす霊的な影には、実体があるのです。ですから、次のような質問を自分に問いかけてみなければなりません。

私と出会う人々が、最後の《精算》の場に呼ばれるとき

私との束の間のふれあいは、喜び、悲哀のどちらのもとも

なるだろう

名前、日時、場所―その記録をくまなくご覧になる主は仰

せられないだろうか

「幸いな影響ここにあり」、または、「悪の痕跡ここにあり」と。

(ストリックランド・ジリアン)

ロバート・G・リーは、こう書いています。「日差しの中に立てば、自分のからだに影を落とすのを避けられないのと同様、人格、ことば、行動が、他の人々に影響を与えることは避けられない。内面の姿は、外面におのずと表れ、しかも、その表われ方は決して曖昧なものではない。ことばやどんな説得でも、到底表現できない影響力を、あなたは持つているのである」。

「ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。」

(ローマ人への手紙14章5節)

「同じ」という語は、この聖句から省かなくてはなりません。翻訳者が挿入したのだからです。本来の文章は、「どの日も大事だと考える人もいます」、つまり、毎日が神聖な日だと思う人がいるという意味です。

律法の下で暮らしていたユダヤ人にとって、安息日、つまり、週の七日目は、特別に神聖なものでした。律法は、労働を禁じ、旅行は制限されました。捧げものは、他の日より多くのものが必要でした。

恵みもとの下で生活しているクリスチャンに対しては、安息日を守るようにという命令は一つもありません。七日のうち一日は安息の日とする、というみことばの原則がそこにあることをもちろん信じるものの、クリスチャンにとつては、すべての日が神聖なのです。安息日を守らなかったとつて、罪に問われることは決してありません(コロサイ2・16)。

新約聖書の中で、週の最初の日、つまり、主の日が特に際立っているのには、いくつかの理由があります。主イエスは、その日によみがえられました(ヨハネ20・1)。復活後、主は、二週連続で日曜日に弟子たちに出会っておられます(ヨハネ20・19、26)。聖霊が、五旬節に下ったのも週の初めの日でした。五旬節は、初穂の祭りから数えて、七回目の日曜日に行われ(レビ23・15、16、使徒2・1)、キリストの復活を象徴するものとなっています。弟子たちは、週の初めの日に集まってパンを裂きました(使徒23・7)。そして、パウロは、週の初めの日には特別な

捧げものをするように、とコリント人に指示しています(1コリント16・1、2)。しかし、それは、安息日のような特別な義務が課せられる日ではなく、特別な特権あずかに与る日です。他の日は無理でも、日曜日は、通常の勤務から解放され、礼拝と主の奉仕に捧げることができなのです。

すべての日が等しく神聖であると考えるのは自由ですが、他の人をつまづかせるかもしれないことを、日曜日に行く自由はありません。家の仕事、車の修理やフットボールをするなどのことをつまづく兄弟がいるなら、本来、何ら咎められる必要のないことであると思っても、差し控えた方がいいでしょう。パウロが、言っている通りです。「ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとつて妨げになるもの、つまづきになるものを置かないように決心しなさい」(ローマ14・13)。

律法の下にあったユダヤ人には、労働をした一週間の終わりに安息の日が設けられていました。クリスチャンは、恵みのもとで、新しい一週間を安息の日から開始します。それは、キリストが贖いの御わざを完成してくださったからです。

C・I・スコフィールドは、「主の日とは、本来はどういう日のことを言うのか知りたいなら、主がその日をどのように用いられたかを見ればわかる」と指摘し、こう書いています。「主は、さめざめと泣くマリヤを慰め、途方にくれた二人の弟子たちと一緒に十キロメートル余りを歩きながら聖書を説いて聞かせ、他の弟子たちに使信を送り、信仰を失いかけたペテロと二人だけで話をし、二階座敷に集まった人々に聖霊を授けたのである」。

「主はレアがきらわれているのをご覧になって、彼女の胎を開かれた。しかし、ラケルは不妊の女であった。」

(創世記29章31節)

人生には、補償の法則とでもいふべきものがあります。その法則によれば、ある点で不足していても他の点では、それを打ち消すだけの恩恵が与えられています。この法則のため、あらゆるものを手にすることは誰にもできません。容姿で劣つていたとしても、実生活の知恵が、それを補つて余りあるかもしれません。運動は不器用でも、氣立ては運動が得意な人より良いかもしれません。詩人は実際的なことが得意とは限らず、芸術家は金銭の管理がうまいとは限りません。

ヤコブが、レアよりラケルを愛しているのをご覧になると、神はレアが多くの子供を生むことができるようにしてくださいました。それから長い年月がたった後のこと、この《補償の法則》がハンナとペニンナの場合にも、同じように適用されています。エルカナは、ペニンナよりもハンナを愛していましたが、ペニンナには子供があり、ハンナにはいなかったのです(1サムエル1・1・6)。

視力という賜物は、ファニー・クロスビーに与えられませんでした。比類のないほどの歌の賜物が与えられました。クロスビーの讚美歌は、キリスト教会の偉大な遺産です。アレグザンダー・クルーデンスは、重いうつ病に悩まされましたが、その名前がつけられたコンコルダンス(聖書語句索引)を生み出す力が与えられていました。

口下手で、説教ができない、控え目なクリスチャンがいます。およそ、人前で何かをするという賜物は、まったくありません。しかし、機械のことにかけては天才的で、ありがたいことに伝

道師の車がいつも使える状態にしておいてくれるのです。ところが、伝道師ときたら、機械のことに関しては弱いことこの上なく、車が故障したときには、ボンネットを開けて、首を突っ込み、祈ることしかできません。

《補償の法則》が、この世で完璧に作用することはないと反論する人がいるなら、同意せざるを得ないでしょう。不平等や不正があるのは事実です。しかし、この世がすべてではありません。最後の章は未完のままです。神が幕を開け、彼方の世界を見せてくださるとき、得点は平等にされ、形勢は逆転するので。例えば、アブラハムは、あの金持ちにこう言っています。

「子よ、思い出してみなさい。おまえは生きていた間、良い物を受け、ラザロは生きていた間、悪い物を受けていました。しかし、今ここでは彼は慰められ、おまえは苦しみもだえていたのです」(ルカ16・25)。

その時が来るまでは、バランスをとって人生を見る方が幸いです。足りない点だけに目を留めるのではなく、私たちより恵まれたように見える人ですら持つていない長所や能力を、神は私たちに与えてくださったことを忘れてはなりません。そうすることによって、自分が無価値であるとか、能力が足りないとか、他の人を妬むという気持ちを持たなくてすむのです。

「なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。」

(マタイの福音書10章35・36節)

主がここで語っておられるのは、おいでになった直接の目的ではなく、それに伴う避けがたい結果のことです。主に従って行こうと思うときにはいつも、親族や友人からの敵しい反対が待っているというのです。そのような意味ならば、主は平和ではなく、剣をもたらすために来られたこととなります(34節)。

この預言が的中したことを歴史は示しています。生ける愛の主に救いを求めれば、どこにおいても嫌がらせと敵意が待っていました。嘲笑され、勘当され、家から追い出され、解雇され、さらに殺害されたケースも少なくありません。

このような反対は、理不尽以外の何ものでもありません。麻薬常習者であった息子が、今や麻薬と縁を切り、生き生きとキリストに仕えています。父親は喜ぶに違いないと思われるところですが、その反対です。激怒するのです。「こんなことになるくらいなら、いつそ前の方がましだ」と臆面もなく言うのです。

アルコール中毒や犯罪、性的倒錯やオカルトから救われる人もいます。きつと親族は有頂天になって喜ぶばかりか、「自分もクリスチャンになりたい」と言い出すだろうと単純に考えます。ところが、そうは問屋が卸しません。主イエスが入って来られると、家族に分裂が起きるのです。

親が信じる宗教を捨てて、キリストを信じようものなら、火に油を注ぐも同然です。例えば、ユダヤ教とは名ばかりなのに、家族の一人がクリスチャンになろうものなら、感情が激しく爆発します。違反した者は背教者、裏切り者と呼ばれ、ヒットラー

と関係しているのだろうときえ言われ、ユダヤ人の敵とされま
す。クリスチャンの立場からどれほど嘆願や抗議をしても、の
れんに腕押しです。

多くのイスラム教国では、回心してキリストを信じれば、死
刑に処せられても文句が言えません。判決を執行するのは、政
府だけではなく、肉親の場合もあります。例えば、妻が夫の食
事に、ガラスを粉々にして混ぜたりするのです

ところが、回心したばかりのクリスチャンが信仰を大胆に告
白し、忍耐をもつて、まるでキリストのように憎しみと迫害に
耐える姿を見ていくうちに、人々は自らの生活と宗教の空虚さ
に目覚め、悔い改め、信仰を持ち、主イエス・キリストに信頼
を寄せるようになります。かくして、キリストの兵士たちは反
対を経てたくましくなり、迫害を通して成長するのです。

「あなたは彼らにとつては、音楽に合わせて美しく歌われる恋の歌のようだ。彼らはあなたのことを聞くが、それを実行しようとはしない。」

(エゼキエル書33章32節)

主のことはをはっきり宣べ伝えた場合、そのときに起こる皮肉な現象がいろいろあります。人々は、語り手には興味を持つのですが、自分に行動を求める使信には無関心であるというのはその一つです。

これは、公の場での伝道説教にもあてはまります。人々は、説教者を褒めそやします。使ったジョークや例話を忘れません。発音に聞き惚れます。ある女性の場合もそうでした。「うちの牧師先生が、『メソポタミア』というすばらしいことを口にすることで、私は涙が出そうよ」と。ところが、従順という点に関しては、まるで麻痺したかのようです。行動を阻止する免疫を持ち、美声で麻痺にかけられてしまっているのです。

これは、カウンセリングの働きをしている人にはお馴染みの症状です。カウンセリングを受けることによって、ひそやかな満足を得る人がいます。一時間かそこらという短時間、一身に注目を浴びることがたまらなく嬉しいのです。カウンセラーとの語らいが大変楽しいので、やがては慢性的にカウンセリングを受け続けなければいられなくなります。

おそらくは、助言を得ようとして来たのでしょう。しかし、本当のところは助言など望んでいないのです。決心はついています。自分がどうしたいのかわかっています。もし、カウンセラーの助言が自分の願望と一致すれば、決心は強固になる一方、一致しなければ、助言を退け、頑なに自分の思うがままに進むだけです。

ヘロデ王は、この類の好事家でした。パプテスマのヨハネの話は、いつも楽しげに聞いていたとはいえ(マルコ6・20)、表面的に聞きかじっていたにすぎません。ヨハネのメッセージによつて、自分の生き方を変えようなどとはさらさら思っていないでした。

アーウィン・ルツツアーは、こう記しています。「カウンセリングを求めて来る人々を助けようとする際、何よりももどかしく感じるのは、ほとんどの人の場合、自分が変わりたいとは思っていない点にあることがわかった。もちろん、若干の調整ならする用意がある。特に、自分の振舞いが原因でトラブルが起きている場合には。しかし、ほとんどの人は、手に負えなくなるに限りは、自分の罪を気にしない。そればかりか、自分の生活の中になるべく神が関わらないことの方を望む場合が多いのである」。

カウンセラーによつては、聞くことと行動に移すことのギャップを埋めるために、作戦を考えた人もいます。来談者に具体的な課題を与えるのです。それは、次回の診察に来るまでの間に行わなければならないものです。こうすることによつて、真剣に取り組まない人が排除されていくのです。そのおかげで、双方が時間を浪費しないで済むことになりました。

人生において、神のみことを聞くことはできても、感動がないという段階がやって来たら、深刻な問題です。主の御声に対する鋭敏さが途切れることがないように、また、主がおっしゃることはなんでも行なう心の備えができてるように、祈らなければなりません。

「悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいさるから。」

(イザヤ書55章7節)

罪人は、震えおののきながら、神は、自分を受け入れてくださらないのではないかと恐れます。信仰から離れた人は、自分がそれを悔いても、神がそれを忘れるはずはないと思つていきます。しかし、今日の聖句によれば、主に立ち返る人には、憐れみ、溢れる豊かな赦しが待つていることが再確認できます。

これをわかりやすく示す例話があり、長きに渡り、時折耳にすることがあります。細部はその度に異なるものの、中心的なメッセージは変わりません。その話とは、家を飛び出し、ニューヨークに行き、罪と恥の生活をし、ついに刑務所に入ることになった反抗的な息子の話です。四年間の刑期を務めた後、仮釈放となった彼は、家に帰りたくてたまりません。しかし、父親に受け入れてはもらえないだろうと恐れ、苦しみもだえました。拒絶されて、失望を味わうことが耐えられなかったのです。

ついに彼は、返信の宛先を書かずに、父親に手紙を書きました。「次の金曜日」に列車に乗ります。もし、家族が受け入れてくれるなら、家の前の庭にある樫の木に白いハンカチを一枚結んで欲しい」と。列車が家の前を通過するときに、ハンカチがなければ、下車しないでそのまま行くつもりでした。

ようやくのこと列車に乗ったものの、最悪を恐れるその顔は不機嫌で、人と目も合わせません。たまたまクリスチャンが彼の隣に座り、何度か声をかけた挙句、やつのことで腹を割つて、身の上話をしてくれました。彼の家まであと八十キロです。帰郷する放蕩息子の中の心の中は、恐れと希望が行き来しています。

あと六十キロとなりました。親の顔に泥を塗ったこと、親をひどく悲しませたことを考えました。あと五十キロ。空費してしまつた年月が頭をよぎりました。あと三十キロ。二十キロ。十キロ…。

ついに、自分の家が見えてきました。彼は座りながら、放心状態になりました。何と、樫の木は、白い布きれで一面に覆われ、布が風を受けてパタパタと舞っているではありませんか。彼は立ち上がったかと思うと、スーツケースを下ろし、駅で下車する支度をはじめました。

もちろん、この木は十字架のことを表わしています。十字架はその「両腕」を広げ、数えきれないほどの赦しの約束を散りばめ、悔改めた罪人に、「さあ帰つてきなさい」と招いていきます。御父の家で待つている歓迎とはこれほどのものなのです！

さまよっていた者が立ち返るとき、何という限りない赦しがあることに待つていることでしょう。

「悪者を助けるべきでしょうか。あなたは主を憎む者たちを愛してよいのでしょうか。これによって、あなたの上に、主の前から怒りが下ります。」

(歴代誌第二19章2節)

ヨシャパテ王は、アラムとの戦いにおいて、邪悪な王アハブと結託しました。それは、危うく命を落としかねない悪魔的な同盟でした。アラム人は、ヨシャパテをアハブと間違えて殺すところでしたが、すんでのところで人違いに気づきました。ヨシャパテは死を免れたものの、預言者エフーからの痛烈な叱責を逃れることはできませんでした。御民が神を憎む人々を愛し、不敬虔な輩と手を組むのを見て、神はお怒りになります。

今日に置き換えた場合、どこでそんなことが起こりうるのでしょうか。福音派のクリスチャンを名乗る人々が、自由主義を標榜する人々と一緒になって、大掛かりな宗教運動を行うとき、それは起こりうるのです。このような自由主義の人々は、キリスト教信仰の重要で根幹的な教理の数々を否定します。聖書の権威に懐疑や否定を投げかけ、その土台を崩そうとします。クリスチャンを装ってはいますが、実体はキリストの十字架の敵にほかなりません。彼らの神は、彼らの欲望です。彼らの栄光は、彼ら自身の恥です。彼らの思いは、地上のことだけです(ピリピ3・18、19参照)。彼らの引立てによって、キリストの主張や大義の重みが増すということは、到底考えられないどころか、損害をこうむるのが落ちです。

世界教会運動が勢いを増すにつれ、聖書を信じるクリスチャンは、キリスト教界の、神を否定するいかなる集団とも結束していかなければならない、という圧力に一層さらされることとなります。それを拒めば、嘲笑され、非難され、自由は制約さ

れます。しかし、キリストに忠実であろうとすれば、そのような人々と分離して歩むほかはありません。

中には、本当のキリスト者でありながら、無信仰の人々と手を組もうとしない兄弟たちを軽蔑する人々もいます。これこそは、究極の裏切り行為のひとつと言っほかはありません。クリスチャンの指導的立場の人々が、一方で近代主義者を評価しながら、根本主義者(※聖書を文字通りに信じるクリスチャン)を厳しく非難するということが、現実起きています。自由主義神学へつらい、自由主義の著者のことばを満足げに引用し、自由主義的な異端的諸説に、愛情豊かな寛容を示すのに、義なる人々と不敬虔な人々との境界線を明確に引くべきだとする根本主義の兄弟たちに対しては、軽蔑を隠さないのです。

神の敵である人々の歛心を買おうとしたり、援助を求めたりすることは、謀反に等しい企てです。キリストに忠誠を尽くそうと思えば、主を信じる不屈の信仰者たちと共に立つて、敵に立ち向かうほかはありません。

「戦いに下って行った者への分け前も、荷物のそばにとどまっていた者への分け前も同じだ。共に同じく分け合わなければならぬ。」

(サムエル記第一 30章 24節)

ダビデがアマレクからツイケラグの町を取り戻したとき、部下の中には、ベソル川のほとりに残った二百人と戦利品を分け合うのを望まない人々がいました。しかし、ダビデは、荷物のそばに留まっていた者も、戦いに行った者と平等に分け合わなければならぬという裁定をくだしました。

戦闘に従事する兵士一人に対し、前線の背後で任務を果たす人々は数人います。第二次世界大戦において、米国陸軍では、全部隊の内、戦闘に参加したのは、わずか三十パーセントでした。残り的人々は、工兵、補給、兵器、通信、化学、輸送の支援部隊と軍政部でした。

主のみわざにおいても、この状況に類似したものがありません。クリスチャンはみな兵士ではありませんが、そのすべてが戦闘の最前線にいるわけではありません。全員が説教者、伝道者、あるいは、教師、または、牧師とは限りません。全員が、世界各地の最前線で仕える宣教師でもありません。

神は、ご自分の軍隊にも支援部隊を置いておられるのです。戦いの潮目が変わるまで、毎日苦闘する忠実な祈りの戦士がいます。前線にできるだけの資金を送ろう、と切り詰めて生活をする、献身的な管理者がいます。敵と真正面から戦っている人々に、食糧と宿泊場所を提供する人もいます。さらに、いつか遠い国々にまでメッセージを届けるであろう原稿をタイプする人もいます。キリスト教の書物を編集し、翻訳し、印刷する人もいます。《王》の御用に役立つように息子や娘を育てなが

ら、家庭で仕える優れた女性たちがいます。戦いの激戦地に一人に対して、数人は支援部隊として仕えているのです。

やがて、報酬が渡されるとき、支援的役割を持っていた人も、戦争の英雄として誉れを受ける人々と、平等に分け合うのです。前線の背後で静かに任務を果たした者も、福音伝道の著名人たちに並んで、等しい栄誉を受けます。

神は、そのすべての選別がおできになります。一人ひとり、全員の貢献度の重要性を正確に測ることができるのです。驚くことが山ほどあるでしょう。余り重要ではない、と私たちが考えていた目立たない人々が、実は命運のかかる部署にいたことがわかることでしょう。彼らがいなかったならば、私たち自身も何もできなかったことがわかるはずです。

「わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。…後の世では永遠のいのちを受けます。」

(マルコの福音書10章29、30節)

すべての投資の中で最大のものは、イエス・キリストに生涯を投資することです。どのような投資の場合においても考慮すべき重要な点とは、元金の保証と利回りです。この基準をもとに判断すると、神のために生きた生涯に比べうる投資はありません。元金は、絶対に安全です。主は、委ねられたものを守ってくださることができからです(IIテモテ1・12)。所得に関しては、その桁違いの大きさに、息を呑むほどです。

今日の箇所では、百倍を支払う、と主イエスは約束しておられます。それは、利率にすると一万パーセントで、世界でもこれほどの利息はついたためしがありません。しかも、それで全部ではないのです!

主キリストに仕えるために、家庭での快適な暮らしを捨てた者は、「今のこの世では百倍の家」——つまり、多くの家庭から温情と便宜を受け、イエスのゆえに、神のご親切にあずかることができるのです。

結婚と家庭の楽しみをあえて手にしなかった人、または、福音のために、この世の大切な絆を断つた人には、兄弟、姉妹、母親、子供が約束されています。それは、世界に広がる家族であり、その多くの人々は、血の繋がった親戚よりも近い存在となるのです。

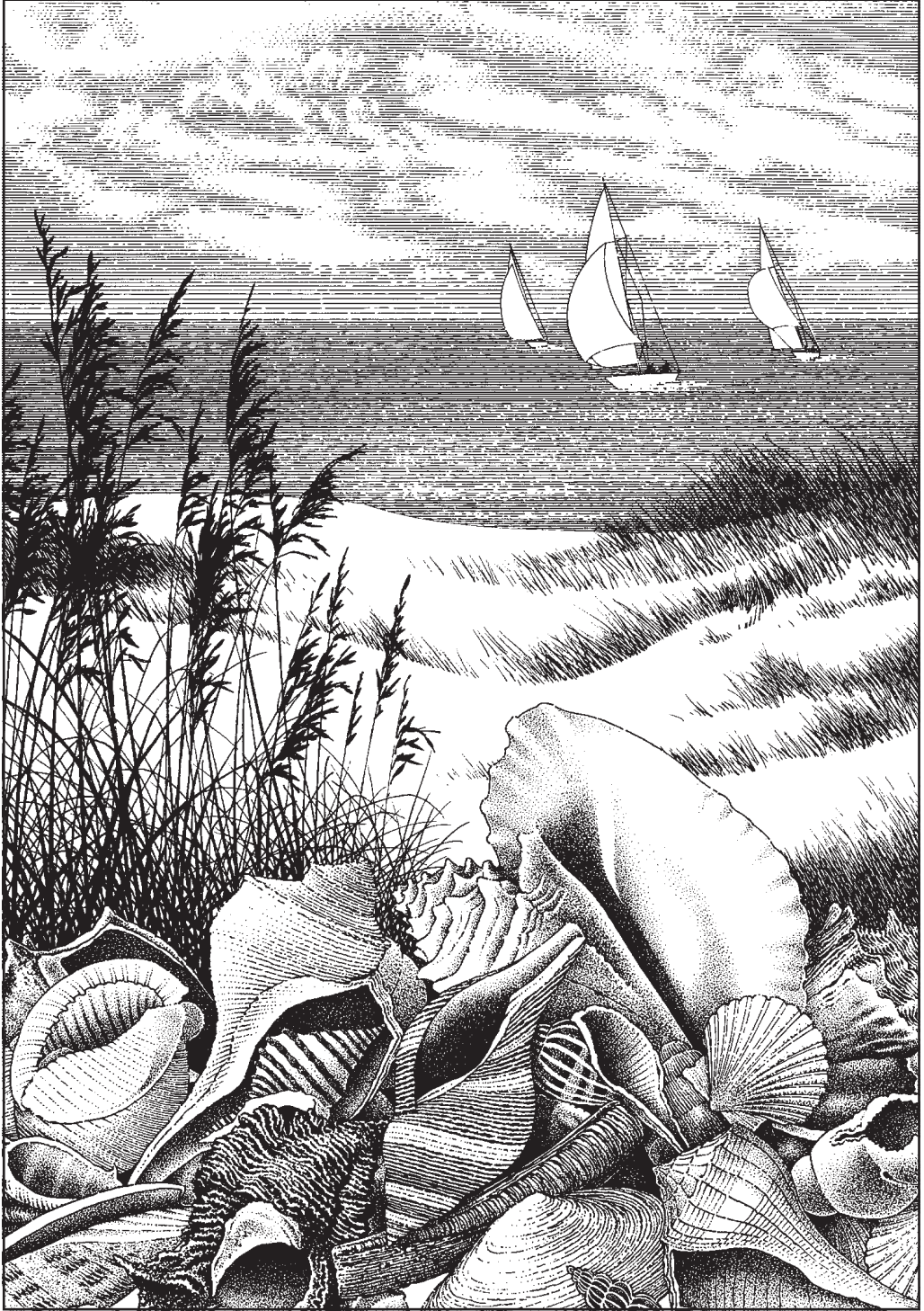
土地を捨てた人には、別の「土地」が約束されています。数エーカーの不動産を所有できるという特権を捨てた結果、イエスの尊い御名のゆえに、比較にならないほど多くの国々や大陸

までも所有が主張できる、途方もない大きな特権をいただくのです。

彼らには、「迫害」も約束されています。一見すると、調和した交響曲の中の、調子はずれの音符のように思えることばです。しかし、イエスは、投資に対する有利な収益の中に迫害を含めておられます。キリストのゆえのそしりを受けることは、エジプトのすべての宝にまさる財宝であるからです(ヘブル11・26)。

以上のものが、この世での配当です。主は、その上につけ加えてくださいます。「後の世では永遠のいのちを」。これは、永遠のいのちが完全に花開いた様子を表わしています。確かに、永遠のいのちそれ自体は、信仰によつてすでにいただいた賜物ですが、それを喜び楽しむ能力の大きさには差があります。すべてを捨ててイエスに従った人は、天の都で、より大きな報いに与るのです。

神に投資した生涯から生じる、並はずれた収益を考えると、なぜもつと多くの人が加わらないのだろうと不可解な思いになります。有価証券のこととなると、この上なく抜け目のない投資家たちが、あらゆるものの中で最良の投資の話となると、鈍感になるのは実に奇妙なことです。



「時宜になんて語られることばは、銀の彫り物にはめられた金のりんごのようだ。」

(箴言25章11節)

銀の台座にはめられた金のりんごという組み合わせは、この上なく感じの良いものです。両者は、うまく調和します。ちょうど適切なときに語られることばも、金のように素晴らしいものです。「良い返事をする人には喜びがあり、時宜になんたことばはいかにも麗しい」(箴言15・23)。

長年宣教師を務めた女性が、がん病棟で死を迎えようとしていました。意識はまだあるものの、話す体力はありません。信仰篤い長老が、訪問時間の終わろうとする頃、彼女のベッドの傍らに来ました。そしてベッドの上に覆いかぶさるようにして、長老は雅歌八章五節を引用しました。「自分の愛する者に寄りかかって、荒野から上つて来るひとはだれでしょう」。すると、彼女は目を開け、にっこりと笑ったのです。涙の絶えない苦しい世との接点は、これが最後でした。夜明けが訪れる前、彼女は愛するお方に寄りかかりながら、この荒漠とした世界を後にしました。彼女には、この上なくふさわしいことばでした。

ある家族が、愛する者を失って悲嘆にくれていました。友人たちがお悔やみのメッセージをたずさえて続々と集まってきましたが、心痛を和らげてくれることばは何一つありません。そのとき、H・A・アイアンサイド博士から手紙が届き、詩篇三〇篇五節が読まれました。「夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある」。おりになんた主のことばにより、悲しみの鎖は断ち切られました。

クリスチャンの青年の一人が長い旅をしていたとき、大学の科目で学んだことを一人が語りはじめました。それは、聖書に

懐疑を起こす内容でした。しばらく耳を傾けた後、物静かで、目立たない印象の青年が箴言一九章二七節を暗唱したので、一同は驚きました。「わが子よ、訓戒を聞くのをやめてみよ。そうすれば、知識のことばから迷い出る」。それは、まさに銀の台座にはめられた金のりんごでした。

また、(※無神論者として有名な)インガソルについて、よく知られた話があります。大勢の聴衆を前にして、「五分で私を死なせてみよ―もし、神がいるとすればだが」と不敵にも神に挑んだのです。皆がかたずをのむ中、五分が何事もなく過ぎました。自分がなお生きているという事実によって、神など存在しないことがこれで証明されたというのです。するとそのとき、一人の地味なクリスチャンが聴衆の中から立ち上がり、こう訊ねました。「インガソルさん。神のあわれみは五分間で終わってしまうほどちつぽけなものだとお思いですか?」と。これには、返すことばがありませんでした。

おりになんた話される適切なことばは、神からの賜物です。神の御霊が私たちを用いて、適切な慰め、励まし、警告、叱責のことばを語らせてください、とその賜物を切に求めるのは当然の願いです。

「彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなった。」

(ルカの福音書9章34節)

ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、イエスと共に山上にいました。今が歴史的な瞬間であることを直感したペテロは、何とかその栄光を留めようとして、「仮小屋を三つ——イエス、モーセ、エリヤのためそれぞれ一つずつ——作りましょう」と提案しました。こんなことをすれば、主は旧約の二人の聖徒と同じレベルに置かれることになります。神は、彼らをつつぽりと雲に包んで、その企てを阻止されました。ルカは、「彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなった」と伝えていきます。

弟子たちが恐れる必要はありませんでした。それは、審判の雲ではなく、栄光の雲であつたからです。それは一時的現象であり、不動の恒久的な出来事ではありませんでした。目に見えないとはいえ、雲の中には神がおられました。

私たちの人生にもよく雲が出現し、そのような雲の中に入ると恐れを覚えます。例えば、神に新しい分野の奉仕に召されると、未知の事柄に関する恐れにしばしば襲われます。危険、不快、好ましくない成り行きなど、最悪の事態を想定するものですが、本当は祝福を恐れているにすぎません。雲が消えれば、神のみこころは、適切で、申し分なく、完全であることを知ることです(※ローマ12・2参照)。

病気という雲に包まれるときも、恐れます。心配で頭の中が混乱します。医師のことば、表情の一つひとつを、破滅の予告のように解釈します。あらゆる症状が末期の病気であることを示していると自己診断します。しかし、やがて病気が通り過ぎると、詩篇作者と共にこう言っている自分に気がつくのです。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」(詩篇119・71)。神が雲の中におられたのに気づかなかつたのです。

悲しみの雲に包まれるときも、恐れます。いったいこのような涙、苦悩、そして、肉親の死から、どのような益が生まれるというのか、と疑問に思うのです。自分の周囲の世界がガラガラと崩れて、廃墟と化したような思いになります。しかし、雲の中には学ぶべき教訓があります。主が私たちを慰めてくださる慰めで、他の人を慰める方法を知るので、このようなことが起こらなかつたら、神の御子の涙の意味は決してわからなかつたでしょう。

人生の雲に突入しても恐れることはありません。雲は私たちを育んでくれる、一時的なものであり、私たちを破滅させるものではありません。主の御顔が隠れることはあつても、主の愛と力を隠すことはできません。ですから、(詩人)ウィリアム・カウパーのことばを心に留めようではありませんか。

おののく聖徒よ、勇気を新たにせよ

恐れのもとなるその雲は

憐れみを蓄えるがゆえに大きく見ゆ

やがて、雲は裂け、祝福は頭上に雨と注がらん

「神は…人の脚を喜ばない。」

(詩篇147篇10節 英訳)

何と興味深い洞察でしょう。人間をはるかに凌駕する偉大な神は、人の脚のことを喜ばないというのです。

これを、運動の世界に関連させて考えてみましょう。しなやかで足の速い、陸上の花形選手が、両手を突き上げてゴールに飛び込み、勝利を収めます。バスケットボール選手が、猛スピードでコートを駆け抜け、決勝のゴールを決めます。筋肉隆々とした頑強なフットボールのスーパースターが、ゴールラインに飛び込みますが、阻止できる人はいません。

観客は興奮します。飛び上がり、叫び、歓声を上げ、それと交互してプーイングをしたり、やじを飛ばしたりします。誰も押さえがきかなくなり、プレーの一拳手一投足に目が釘づけです。こうした姿を、人間の脚のすること、すなわち、運動能力を喜ぶことと表現できるかもしれません。

今日の聖句は、運動に興味を持つことを禁止しているのではありません。聖書は他の箇所、肉体の鍛錬の価値を認めています。しかし、神が人間の脚のことに関心をお持ちでないとする、私たちの優先順位のバランスが取れているかどうか、吟味してみたいわけにはいきません。

若いクリスチャンが何かのスポーツに夢中になり、やがてはそれが人生をかけるほどの熱情に変わっていくのはたやすいことです。最高の努力を傾注して、技を磨きます。時間、摂取する食べ物、睡眠をコントロールします。果てしなく練習し、考えうるあらゆるプレーに対応する技術を習熟させます。身体のコンディションを最高に保つように考案された、一定の運動のメニューをこなします。このスポーツについて考え、語るその

様子は、まるでそれが人生そのもののようです。ひよつとすると、本当にそうなのかもしれません。

このような若いクリスチャンも、ときには、人間の脚がすることを神は喜び給わないと気がついて、はっと立ち止まります。神との交わりを絶やさずに歩もうと思ふなら、神の視点からものを見なければならぬと…。

それでは、神はどうすることを喜ばれるのでしょうか。詩篇一四七篇一一節は、こう語っています。「主を恐れる者と御恵みを待ち望む者とを主は好まれる」。換言すれば、神は身体的なことより、霊的なことに関心を持つておられる、ということです。使徒パウロも、「肉体の鍛錬もいくらかは有益ですが、今のうちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です」(1テモテ4・8)と、そっくり同じ価値観を述べています。

今日から百年が経ち、歓声が静まり、スタジアムに誰もいなくなり、得点が忘れられても、なお本当に価値があるのは、神の国と神の義を何よりも優先した生涯なのです。

「主は正しく、正義を愛される。」

(詩篇11篇7節)

主は、御自身が義であるので、御民が正しい行いをしているのを見てこよなく喜ばれます。信仰者が直観的に神の基準、また、道徳の基準にかなう選択をすると喜んでくださいます。

しかし、私たちの住む世では、そうすることが必ずしも容易ではありません。道徳や倫理の領域で、常に妥協を迫られる誘惑にさらされています。誘惑には露骨なものもあれば、一見しただけではわからない狡猾なものもあります。真つ直ぐに歩むためには、識別力と勇気の両方が欠かせません。

あらゆる問題をカタログにまとめるのは不可能でしょうが、リストを抜粋するだけでも、今後の意思決定の参考となるでしょう。

賄賂わいらいとリベートは、不義の代表格です。買いつけ担当者に贈答品を送るのもそのためで、そうやって判断を狂わすのです。口座に十分な資金がないまま小切手を発行する、つまり、空小切手を出すというのは、たとえ、小切手が現金化される前に十分預金できるだろう、という見込みがあったとしても、間違っています。商品の小包の中に文書をしのびこませておきながら、手紙の郵便料金を支払わないのは違法です。上司が隣のオフィスで椅子に座っているのがわかつているのに、電話をかけた相手に、「上司はあいにく席をはずしております」と告げるのは、れつきとした欺きです。会社にいる時間や経費を、業務に関係のない個人的な必要にあてるといふ私物化、そして、言うまでもなく、所得の過少申告や、寄付および出費の水増しによる所得税還付のごまかしという慣習が蔓延まんえんしています。保険請求における詐欺行為は、止まるところを知りません。仕事をわざと

ゆつくり行うのも、水準に達しない仕事も間違っています。そしておそらく最も頻繁に行われているのは、目を盗んで、会社の時間を使って行われる個人的取引行為です。たとえ、親族や友人であっても、間違つたことをしているのが明白であれば庇うのは正しくありません。それは、愛情の履き違えであり、偽りの誠意です。過ちを犯したのが誰であれ、罪には反対し、真実の側に立つなら、正義が達成されるのです。

以上、述べたことと同様に、「誰かが違反した人の味方になつてあげなければならぬ」という感傷的な考えから、除名処分を受けた人の肩を持つのは間違っています。こんなことをすれば、教会に分裂がおき、違反行為をした人の心が一層その悪から抜け出られなくなるだけです。

最後に触れておきたいのは、自分がしていないことに対する責めを負うのは、決して正しいことではない、ということですが、間違いを犯した本人が名乗らず、告白もしないとき、その責めを代わりに負つても構わない、という平和主義の人はいるものです。しかし、本当の事実を犠牲にして、平和を達成することはできません。

勇気を出すのだ、兄弟よ、よろめくな

進む道が夜のように暗くとも。

へりくだる者を星は導き、こうささやく

「神に信頼し、正しきことを行なえ」と。

(ノーマン・マクロード)

「人の怒りは、神の義を実現するものではありません。」

(ヤコブの手紙1章20節)

以下のような光景は、見覚えのないものではありません。教会で会議が開かれています。結論を出さなければなりません。それは、信仰上の重大な教理に関するものではなく、例えば、教会の増築、台所の壁の塗装、または、資金の配分といったような問題です。ところが、意見の溝が広がり、怒りがたまり、ついにかつとなつて、怒鳴り声が発せられます。最後には、気の強い少数の声高な人の意見が通り、彼らは神のわざを推進したという幻想を抱きます。他の何かを「推進」してしまつたかもしれないが、少なくとも神のわざを進めてはおらず、神のみこころを成し遂げてなどいません。人が怒ることによつて、神の義が実現されることはないのです。

(米国の詩人・思想家の)エマーソンが、激しい議論と反目が渦巻く委員会の部屋から飛び出してきたときの話が残っています。怒りはなかなか静まりませんが、そのとき、夜空の星がこう言っているような気がしたというのです。「小さき者よ、なぜそんなに興奮しているのか」と。これに対して、レスリー・ウエザーヘッドは、こう注記しています。「尊厳をたたえて遠くに美しく輝く、ものいわぬ星々は、何と見事なまでに私たちの霊を鎮めてくれることだろうか。それは、あたかもこう語っているかのようなのである。『神はあなたのことを顧みてくださるほどに、偉大な御方である。』また、『あなたの悩みの原因はあなたが思っているほど深刻なものではない』と」。

もちろん、義の怒りを表すべきときもあることを、私たちは知っています。それは、神の栄誉がかかっているときです。しかし、ヤコブがここで人の怒りについて述べているのは、その

ような場合のことではありません。自分のやり方を通さなければ気が済まず、それが妨害されると、怒りを爆発させる人のことなのです。自分の判断が間違っているはずがないと思ひ込んでいる人、したがって、自分の意見に異を唱える人に我慢がでない人のことです。

そのような世代的タイプのの人にとつて、激情に駆られるというのは、力を見せつける機会です。それは、指導者であることのしるしであり、敬意を表させるための手段です。柔和とは軟弱のことだ、と思つていきます。

しかし、クリスチャンならもつと分別があるはずで、怒りを爆発させれば、尊敬を失うだけであることを知っています。怒りを爆発させる度に、失敗を積み重ねているのです。それは、御霊の実でなく、肉の働きにほかなりません。

クリスチャンは、それに優る道を、クリストに教えていただきました。それは、自分を抑制する道であり、自分が怒るのではなく、神の怒りに任せる道、すべての人に柔和な態度を示す道です。それは、不当な仕打ちにも我慢強く耐える道であり、頬を打たれても、もう一方を向ける道です。感情を爆発させてしまえば、神の御わざを妨げ、まだ回心していない人と自分との区別がつかなくなることを、そして、証しについていえば、口を閉ざすすほかなくなることを、クリスチャンなら知っているのです。

「道行くみなの人よ。よく見よ。主が燃える怒りの日に私を悩まし、私をひどいめに会わされたこのような痛みがほかにあるかどうかを。」

(哀歌1章12節)

時々、主の晩餐の席につきながら、自分に問いかけることがあります。「いったい、私はどうしてしまったのか。ここに座って救い主の受難を思い巡らしながら、心が涙で溶かされないでいるとは。」

私は羊ではなく、石なのか

ああ、キリストよ。あなたの十字架の下に立ちながら

一滴、また一滴、ゆつくりと血が失われゆくのを教えても

涙ひとつ流さずにいられるとは

太陽や月ですら

星ひとつ見えぬ空で顔を隠していた

真昼に恐るべき暗闇がおおったその恐怖よ

平然としているのは、私一人のみ

しかし、どうか私を捨てないでください

あなたの羊を捜し求めてください

群れのまことの牧者よ

モーセにまざる方よ。振り向き、もう一度目を向けてください

そして、岩なる私を打ち砕きたまえ

(クリステーナ・ロセッティ)

別の人は、こう書きました。「ああ、自分に驚くほかはない／愛のゆえに血を流し、死に向かう小羊なる君よ／この奥義を眼前にしなから、あなたを愛する愛が増し加わらぬとは」。

今にも死のうとしておられる贖い主の苦しみに、心揺るがされ、崩おれて泣く繊細な人に、私は敬服します。私の行きつけのクリスチャンの理髪師に、ラルフ・ルオッコがいます。私の

上に覆いかぶさるように立ちながら、救い主が耐えられた死の苦しみについてよく話しかけてきたものです。布のケープの上に、涙をポタポタ落としながら、言うのです。「なぜ、主が進んで代わりに死のうとしてくださったのか、俺にはわからねえんですよ。だって、俺はごらんのとおり、どうしようもない人間のクズです。それなのに、イエス様ときたら、ご自分のからだを十字架にかけて、この俺の罪の罰を担ってくださいすつたんですから」。

救い主の足を涙で洗って髪の毛で拭い、足に口づけをし、香油を塗った、あの罪深い女がいました(ルカ7・38)。主が十字架におかかりになる前の出来事であるのに、彼女より多くのことを知る特権に与っている私よりもずっと、感性の焦点が合っています。

なぜ、私は氷の固まりのような反応しかできないのでしょうか。泣くことを男らしくないとみなす文化の中で育ったせいでしょうか。もし、そうであれば、そのような文化と無縁であつたらどれほど良かったことでしょう。カルバリの十字架の陰に立つて涙を流すことは、決して恥ずかしいことではありません。涙しないことこそ、恥ずべきです。

エレミヤのことばの通りに、今後、私は祈らなければなりません。「ああ、わたしの頭が水であつたなら、私の目が涙の泉であつたなら、私は昼も夜も泣こうものを」(エレヤミ9・1)。

泣いてよいのです。私の罪のために、罪なき救い主にもたらされた苦しみと死のゆえに。そして、アイザック・ウォッツの不朽のことばを、私は自分のことばとして告白します。

「恥じ入るこの身をいかで隠さん／涙に心も目も溶け行く」

(中田羽後訳)

主よ、「涙なきキリスト教」という呪いより、私を解き放ちたまえ！

「灰に換えて美を、悲しみに換えて喜びの油を、憂いの心に換えて賛美の外套を与えるためである。」

(イザヤ書61章3節英訳)

この喜びに満ちた文章の中で、メシヤは、ご自分を受け入れるものにもたらず、素晴らしい交換について語ります。灰に換えて美を、悲しみに換えて喜びを、憂いに換えて賛美を与えてくださると。

私たちが主のもとに持つていくのは、快樂で燃えつきた人生という灰であり、酒、麻薬でボロボロになった肉体という灰にすぎません。「荒野」で浪費した歲月という灰、挫折した希望、砕かれた夢という灰を持つていくだけです。ところが、私たちは何をいたたくのでしょうか。美をいたたくのです。それは、花嫁の頭に燦然と輝く王冠です。こんな交換が他にあるでしょうか。「哀れな、疲れきった罪人が、聖なる神の皇太子妃となる榮譽に浴した」(J・H・ジョウエット)のです。七つの悪霊の虜にされていたマグダラのマリヤは、解放されただけではなく、いわば、王女となりました。(悪徳の町)コリントの人々は、墮落した姿のまま主のもとに来ましたが、洗われ、聖められ、義とされました。

私たちは、主に嘆きの涙を携えていきます。それは、罪や敗北、失敗がもたらした涙です。悲劇と喪失がもたらした涙です。崩れ去った結婚生活、わがまま放題の子どもを見て流す涙です。そのような、塩辛く熱い涙に対して、今さら主に何かできるのでしょうか。できます。主は、涙を拭い去ることができます。その代わりに喜びの油を私たちに与えることができますのです。赦される喜び、受け入れられる喜び、主の家族に加わる喜び、自分が生きている意味を発見する喜びをくださるのです。手短かに言

うなら、「悲しみという重い足取りに代えて、婚禮の祝宴に出る喜び」をくださるのです。

締めくくりに言います。主は、憂いの心を私たちから取り去ってくださいます。それがどんなものか、知らない人はいません。――罪責感、後悔、恥、不面目という重荷です。孤独、拒絶、裏切りを経験したときの心です。恐れと心配の心です。これらすべてを主は取り去り、賛美の外套を着せてくださいます。私たちの口に新しい歌を、そして、神への賛美さえ授けてくださいます(詩篇40・3)。不平を言っていた人が感謝で、神を冒瀆していた者が礼拝する心で満ち溢れるのです。

美しいもの、良いものにしてくださった

乱れる心の一切を、主は理解してくださった

主に差し出したのは、破綻と争いだけ

そんな私の人生を、何と主は美しいものにしてくださった

(ウイリアム・ゲイザー)

(※アメリカのゴスペル歌手・作曲家)

「彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、…」

(ルカの福音書6章35節)

これは、回心した人、そうでない人を問わず、すべての人に對して、私たちがどのように振舞うべきに関わる主のご命令です。しかし、今日は、個々人のクリスチャンが、金銭上のことで相互にどうするべきかという観点から、考えてみることにしましょう。

信徒相互の最も深刻な対立に、金銭を巡るトラブルがあるというの、残念ですが事実です。本来、そんなことがあつてはなりません。しかし、残念なことに次の古い格言は、今もなおあてはまるのです。「お金が玄関から入つてくると、窓から愛が出て行く」。

一つの簡単な解決法とは、信徒間の金銭の貸し借りを一切禁じることかもしれません。しかし「すべて求める者には与えなさい」、また、「返してもらうことを考えずに貸しなさい」(ルカ6・30、35)と聖書が言っている以上、そのように決めることはできません。したがって、みことばに従いつつ、争いを避け、友情が壊れるのを防ぐためにはどうしたらいいのか、さまざまな指針を取り入れることが必要です。

本当に困っている人には、施さなければなりません。あげるにしても紐付きではいけません。その結果、相手が教会の会合で、私たちと同じ意見でなければならぬとか、私たちの意見が間違つていても、私たちを弁護しなければならぬと思うようではいけません。いろいろ親切にしてあげて、人を「買取」するようであつてはならないのです。

求める者には、誰でも与えなさいという命令には、一定の外があります。ギャンブルや飲酒、喫煙の元手を援助してはいけません。人間の貪りむさぼりを満足させる浅はかな、金儲けのたくらみに加担してはなりません。

価値ある目的のために資金を用立てる場合は、たとえ、お金がまったたく返還されないとしても、気にしないという姿勢で行うべきです。たとえ、不払いとなつても、それが友情に影を落とすことがないようにしなければなりません。さらに、貸したお金の利息を途中で変えてはなりません。律法の下で暮らしていたユダヤ人ですら、同胞のユダヤ人からは利子を取つてはならなかったとすれば(レビ25・35、37)、恵みの下で生きるクリスチャンはなおのこと、仲間である信徒から利子を取るべきではありません。

相手が本当に困っているのかどうか確信が持てない場合は、一般的に、その必要が満たされるように応援してあげるのがよいでしょう。どのみち私たちの判断には、間違いがつきものであるとするなら、恵みの行動の結果として、間違い方が優つていきます。

施しをすると、援助を受けた人が、自分に恵んでくれた人に敵意をもつ場合が少なくないという事実から、目を背けてなりません。それは、覚悟しておかなければならない代償です。(英国の宰相)デイズレーリは、「ある人があなたを恨んでいますよ」と注意してくれた人に、「どうしてだろう。最近、彼に何もしてあげていないのに」と言つたそうです。

「するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。」

(ルカの福音書5章28節)

街道沿いにしつらえた机に向かつて座り、通行人たちから税金を徴収しているレビの姿を想像してみよう。レビも典型的な取税人であったとするなら、当時侮蔑ぶびょうされていたローマ政府に、大金をそのまま差し出すのではなく、たつぷりと上前をはねていたことでしょう。

ほかならぬこの日、イエスが通りかかり、「わたしについて来なさい」とおっしゃいました。レビの人生に、とてつもない霊的覚醒が起こりました。自分の罪があらわにされたことを見取りました。自分の人生の虚しさに、ハッと気がつきました。それよりもまさった生き方があるという約束を耳にしました。レビの応答に時間ばかりありませんでした。「するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った。」レビの取った行動は、(※インドで孤児救済の働きをした宣教師)エミー・カーマイケルの書いた、示唆に富んだ詩を先取りするものです。

私は聞いた。「さあ、従ってくるのだ」という主の呼びかけを

それだけだった

地上の黄金はみるみる色あせていった

私のたましいは主を慕った

私は立ち上がって従った

それだけだった

従わない人がいるだろうか

主が呼んでおられるのを聞きながら

しかし、レビは——マタイという名の方が有名ですが——キリストの召しに応答したその日、主に従うときに、どんなに偉大な出来事が起こるか、知るよしもありませんでした。

もちろん、第一に、《救い》という値段のつけられない祝福を経験しました。そのときから、なぜか履物は、かかとよりつま先の部分が先にすり減っていくようになりました。以前、嬉しかったときの喜びより、今は、悲しいときですら経験する喜びの方が大きいと感じるようになりました。ジョージ・ウエイド・ロビンソンのことばを借りれば、「あらゆる色合いにいのちが宿っている。キリストを知らなかったときの目には、決して見えなかったものだ」と言えるようになりました。

それだけでなく、マタイは、十二使徒の一人になりました。主イエスと共に生活し、比類なき教えを耳にし、主の復活の証人となり、栄光のメッセージを携えて宣教に出かけ、最後には、救い主のためにいのちを捨てたのでした。

マタイには、第二福音書を書くという、ことばに表せないほどの特権が与えられました。何もかも捨てたと言いましたが、主はペンの所有をお認めになりました。そのペンが用いられて、ユダヤ人の真の王である主イエスの姿が描かれることになったのです。

確かに、マタイはすべてを捨てましたが、その結果、すべてを得、自分が存在する本当の意味を見出したのです。

キリストが男性、女性、男の子、女の子を問わず、あらゆる人呼びかけておられるのには、意味があります。その呼びかけに、従うこともできれば、拒否することもできます。もし、応答するならば、主は想像もつかないような祝福をくださいます。もし、拒否すれば、他に従う人を見出されることでしょう。しかし、従うべき方として、キリストにまさる「別のキリスト」がおられるはずはないのです。

「そのとき、天から声が聞こえた。『わたしは栄光をすでに現わしたし、またもう一度栄光を現わそう。』そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言った。」

(ヨハネの福音書12章28、29節)

神はたつた今、間違えようのない明瞭な声で、天から語られました。ところが、雷が鳴ったのだという人もいました。神に関わる奇跡的な事柄を、自然現象として片づけたのです。

こうした態度を、今日、奇跡に対して取ることもあるかもしれません。そして、自然のなせるわざ以外の何ものでもない、とうまく説明しようとするかもしれません。

あるいは、奇跡の時代は終わった、とあっさり否定するかもしれない。今この時代、神が奇跡を行われることはない、と私たちは、自分に都合のいいデイスペンセーション(※神の人類に対するお取り扱いの歴史を七期に区分したもの)の整理棚に押し込みます。

三番目の反応は、もう一方の極端に走り、実際には、旺盛な想像力が生み出したものなのに、奇跡を経験したと主張することです。

それでは、正しい受け止め方とは何でしょうか。それは、今日の私たちの時代でも、神には奇跡を行う力があり、また、実際に行われると認めることです。主権者なる主は、お望みのままにことを行うことができます。御自身を啓示する手段として、神が奇跡を放棄されたと考えるべき理由は、聖書にまつたく見あたりません。

誰かが新生する度、奇跡は起きています。それは、神の力の著しい表れであり、その人は暗闇の王国から救出されて、神が愛される御子の王国に移されたのです。

医学がさじを投げ、あらゆる人間的望みが絶たれたときに起こる癒しの奇跡があります。また、信仰の祈りに応えて、神が病めるからだに触れ、その人の健康を回復してくださる場合もあります。

財布がほとんど空になったときに、必要が満たされるという奇跡があります。また、十字路に立ち、どちらに行つたらよいか分からないときに、導きが与えられるという奇跡があります。

自動車がその原型を留めないほどに大破したにもかかわらず、かすり傷一つ負わずに済む、という加護の奇跡もあります。

そうです。神は今もなお、奇跡を行われるのです。しかし、過去と同じ奇跡とは限りません。エジプトにもたらした十の災害と同じことを、神は繰り返してはおられません。確かに「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも同じです」(ヘブル13・8)。とはいえ、主の取られる方法が同じであるということにはなりません。主が地上におられたとき、死者をよみがえらせたからといって、今日も、主が死者をよみがえらせてくださるといふ意味にはなりません。

最後に一言申し添えましょう。奇跡のすべてが神によるものであるとは限りません。悪魔とその配下も奇跡を行うことができます。やがて、来るべき時代には、黙示録一三章に登場する第二の獣が、数々の奇跡を行って地上に住む人々を欺くことでしょう。しかし、今日でも、いわゆる奇跡だと主張されるものを、私たちは神のことばにより、また、人々をどこへ導こうとしているのかを見分けることにより、吟味しなければなりません。

「もし私たちが気が狂っているとすれば、それはただ神のためであり…」

(コリント人への手紙第二5章13節)

神の軍勢の中には、型破りな人がいて、最大の勝利が得られるのは、そのような人々のおかげであることが少なくありません。主にかける情熱のゆえに、変わり者のように見られます。従来の方法には目もくれず、独創的な方法を用います。言うことも、なすことも、みな意表をつくことばかりです。文法を公然と無視し、説教や学びの常識をことごとく破ります。ところが、神の御国にとつての大きな前進を成し遂げるのです。彼らの成すことは劇的であり、電撃的ですからあります。人々はショックを受けますが、決して彼らのことを忘れることはできません。

このような型破りの人々がいるということで、まじめで平凡な人々、そして、文化の規範が破られることに耐えられない人は、常に頭の痛い思いをします。クリスチャンたちは、寄つてたかつて何とか彼らを変え、もつと普通に振舞うようにさせ、火を消し止めようとしています。その努力は、大抵の場合、徒労に終わりますが、それは教会にとつては幸いなことなのです。

主が、その時代の人々にとつては、風変わりな存在として映つたというのは、にわかには信じがたいことです。「ご自身の働きに熱中しておられたために、主には食事する時間もないほどであった。そのために母と兄弟たちは、『頭がおかしくなった』と思つて、家に連れ帰ろうとした。しかし、正気であつたのは、兄弟たちではなく、イエスであつたのである」(W・マツキン トツシユ・マツケイ)。

人々が使徒パウロを、変わっている、と言つて非難したこと は明らかです。その告発に対するパウロの返答は、こうでした。

「もし私たちが、気が狂っているとすれば、それはただ神のためである」(IIコリント5・13)。

サンドイッチボードで身を挟んで歩いた変わり者のクリスチャンの話に、こんなものがあります。前面には、こう書いてありました。「私はキリストを信じる愚か者」、そして、後ろにはこう書かれていました。「あなたは誰を信じる愚か者?」と。

大半の私たちにとつて何が問題か、と言えば、普通の人と私たちの間に相違といえるほどのものがないために、神を求めるだけの「動揺」が社会に起こらないということです。ある人が、こう言つた通りです。「私たちは、平均をあたり前だと思つている。私たちは、キリストが裁判を受けておられるというのに、法廷の外に立ち、火にあつて自分を暖めていたペテロのようである」。

偉大なロンドンの伝道者、ローランド・ヒルは、変わり者でした。C・T・スタッドもそうです。そして、ビリー・ブレイ。あるいはまた、アイルランドの伝道者、W・P・ニコルソンも かりです。彼らが、風変わりでなかつたらよかつたのに、と 私たちは願うでしょうか。いいえ。神が、彼らをどのように用 いてくださったかを考えると、私たちがも、もつと彼らに似てい ればいいのと思うのです。「普通であつて効果がないよりは、 風変わりであつても一千倍の効果がある方が優つている。『初め の愛』は、ときとして風変わりなものだ。しかし、感謝すべき ことに、力がある。そして、私たちの中には、それを失つてし まつたものがあるのだ」(フレッド・ミツチェル)。

「分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。このような人は、あなたも知っているとおり、墮落しており、自分で悪いと知りながら罪を犯しているのです。」

(テトスへの手紙3章10、11節)

異端者というと、普通は、キリスト信仰の重要な根本的真理と反対の見解を持ち、それを宣伝していく人のことを連想します。二、三世紀に生きたアリウス、モンタヌス、マルキオン、ペラギウスのような人々を考えるのです。

その異端者の定義を否定するつもりはありませんが、それを応用してみたいと思います。新約聖書の観点から見ると、異端者の中には、ある教えを(その重要性が、たとえ二次的なものにも過ぎないとしても)頑なに推し進め、その結果、教会に分裂を起こす人も含まれています。基本的な事柄においては正しいかもしませんが、何か他の教えも盛んに広めるので、それが争いのもとになります。それまで受け入れられてきた信条と異なっているからです。

ほとんどの現代訳は、「異端者」ではなく「分派を起こす者」と訳しています。分派を起こす人は、頑固なまでに、自分の教理的な「十八番」を譲りほしなさい、と決意を固めています。たとえ、それが教会に分裂を引き起こすことになろうと意に介しません。会話をしていれば、必ずこの得意の話題に戻っていきませぬ。聖書のどこを見ても、自分の見解の裏づけがそこにあると考えませぬ。それを紹介せずしては、公の場で、聖書から話もできません。言ってみれば、一つのことしか考えられないのです。そのバイオリンには弦が一本しかなく、しかも、弾ける音は一つだけ、といった具合です。

その行動たるや、つむじ曲がりそのものです。聖徒の信仰を育む数限りない教えを完全に無視して、もっぱら分裂を起こすだけの、一つか二つの逸脱した教理を重視するのです。預言の、ある側面についてどくどく繰り返す場合もあります。あるいは、御霊の賜物をことさらに強調する場合もあります。または、カルヴァン主義の五つの特質にこだわる、という場合もあるでしょう。

教会の指導者たちが、その一人よがりの改革運動リフォーメーションに対して警鐘を鳴らしても、一向に悔い改める気配はありません。もし、自分がそれらのことを教えなければ、主に対して忠実を全うできないと言いつ張るのです。その口は、沈黙を拒みます。自分への反論に対しては、超「霊的」な解答があります。自分が原因で教会に争いと分裂が起きているという事実にも、まったく怯む様子はありません。「もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます」(1コリント3:17)という、神からの宣言にも動じません。

このような人は墮落しており、罪を犯していて、自分でも悪いと分かっている、と聖書は言います。墮落しているというのは、「道徳観がゆがんでいる」(フィリップス訳)、「考え方がひずんでいる」(NEB訳)、「曲がっている」(NIV訳)という意味です。聖書がこのような言動を非としている以上、罪を犯していることは明らかです。敬虔そうに異議申し立てをしていますが、本人にはそれが分かっています。このような人は、交わりから放逐ほうちやくされて、いつか目が覚め、分派的行動を捨て去ってくれることを願いながら、警告を二回行った後、交わりから除名するほかありません。

「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

(マタイの福音書18章20節)

イエスが語っておられるのは、悔い改めを拒んで、罪から離れない仲間をどうするか、協議するために召集された教会の集まりを指しています。違反した人に対処する方法が、ことごとく空振りに終わったため、その人は教会全体の前に引き出されることになりました。もし、そこでも悔い改めを拒むなら、除名やむを得ません。主イエスが、ご自身もそこにいるとおっしゃったのは、このような教会戒規に関わって開かれた集会のことです。

しかし、この聖句が適用できる範囲はもつと広いものです。どこにおいても、また、いつの場合でも、二人、また、三人が、主の名に集まる場合にあてはまるのです。主の名によつて集まるというのは、クリスチャンの集会として集う場合、という意味です。それは、主を代行して、主の權威により、共に集まる、ということなのです。それは、主に引き寄せられて集まるということとです。それは、「使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」(使徒2・42)という、初代クリスチャンたちの習慣に従って集まることです。それは、キリストを中心として、キリストのもとに集合することです(創世記49・10、詩篇50・5)。

信徒が、このようにして主イエスご自身のもとに集まるときに、主は、そこにいてくださると約束してくださいました。しかし、こう訊ねる人もいるかもしれません。「主は、どこにでもおられるではありませんか。全能者であるのだから、すべての場所に同時におられるのではありませんか」と。もちろん、その通りです。しかし、主は、主の御名に聖徒が集まるときに

は、特別な方法で臨在してくださると約束しておられます。

「わたしもその中にいるからです」。この一言で、なぜ、それぞれの地域集会(教会)で開かれるすべての集まりに忠実に出席するべきかが示されています。これこそが、その一つにして、最も強力な理由なのです。主イエスが、そこに特別な意味で臨在しておられるからです。主が約束された臨在を意識できないことが多いかもしれません。そのようなときは、主の約束に基づき、それが事実であることを信仰によつて受け入れます。しかし、主が特別な方法でご自身を現してくださいるときも確かにあるのです。それは、天が非常に低いところにまで、押し曲げられてくるようなときです。それは、すべての人の心がみことばの影響を受けて、主に服するときです。それは、主の栄光が満ち満ちて、深い、敬虔の思いが人々の心をつかみ、涙がとめどなく流れるときです。そして、それは、私たちの心が内で燃えるときです。

このような聖なる訪れがいつ来るのか、私たちにはまったくわかりません。それこそ、予告なく、思いがけないときにやってくるのです。その場に出席していなければ、逃してしまいます。これはまた、トマスがこうむった損失と似ています。トマスは、復活が起きた日の夕方、よみがえった栄光の主イエスが、弟子たちに現れたとき、その場にいなかったのです(ヨハネ20・24)。それは、後になつてからでは取り戻せない栄光の瞬間でした。

御名が主の御名によつて集まっているときに、キリストがその場におられる、と本当に信じているなら、大統領がそこに来るといふ場合にもまして、その場に出席しようと堅く決心するのではないのでしょうか。死、または、末期の病以外のものによつて、出席を妨げられていいはずはありません。

「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」

(詩篇51篇17節)

真に砕かれた信仰者のたましいほど、神の霊的な創造のわざの中で美しいものは他にありません。神御自身ですら、そのよくな人に対する愛を抑えることができません。神は、高ぶる者を退けても(ヤコブ4・6)、砕かれ、へりくだった者を退けることはできないのです。

生来のままでは、誰一人砕かれた人はいません。私たちは、野生のろばの子のようです。反抗的で、強情で、衝動的で、神のみこころという馬銜、轡、鞍に抵抗します。馬具をつけれれることを拒み、自分のやりたいようにやりたがりです。砕かれない限り、主に仕えることには不向きです。

回心とは、砕かれていく初期の過程と似ています。悔い改めた罪人なら、こう言うことができます。「かつてなきほどの誇り高き心も、いまや静まりぬ。神のわざを嘲り、神の敵に味方せし、荒ぶる意志もいまや、わが神よ、なんじによって鎮まりぬ」と。回心するときに、私たちはキリストのくびきを負うのです。

しかし、信者になつてもなお、馴らされていない子馬が放牧場を好きなように歩き回るような振舞いをしかねません。人生の手綱を、主イエスに引き渡すことを学ばなければなりません。蹴ったり、跳ねたり、飛び上がったりしないで、主のお取り扱いに従うのでなければいけません。次のように言えなければなりませんのです。

主の道こそ最善なり

無用なはからいごとはもはや止め

人生の主尊権を主にわたすなり

砕かれる必要があるのは、神に対してだけではなく、周囲の人々に対しても同様です。すなわち、高ぶらず、我を張らず、横柄にならないことです。不当な非難を受けても、自分の権利を守るために立ち上がらなければならぬのか、自己弁護をしなければならぬと感じる必要はありません。侮辱、嘲笑、悪口、中傷を受けても、反撃する必要はありません。砕かれている人は、自分が間違ったことを言ったり、したりしたときは直ぐに謝罪します。相手に対して、恨みを持ち続けたり、受けた仕打ちを数えたりすることはしません。他の人を自分より優れた人とみなします。遅延、中断、故障、事故、計画変更、失望に出会つても、逆上したり、パニックになつたり、ヒステリックになつたり、毛を逆立てたりしません。人生の危機に直面しても、平静と落ち着きを示します。

結婚した男女が真に砕かれていれば、離婚裁判所に行く必要はありません。砕かれた両親と子どもが世代間ギャップを経験することはあります。砕かれた隣人は、お互いの間に垣根を立てる必要があります。砕かれる道を学んだ人々の教会では、連続したりバイバルを経験します。

主の晩餐に集い、「取って食べなさい。これはあなたがたのために砕かれたわたしのからだです」と、救い主が言われるのを聞いたなら、それにふさわしい唯一の返事はこうではないでしょうか。「主イエスよ、これはあなたのために砕かれた私の人生です」。

「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。」

(ルカの福音書12章15節)

貪欲とは、富や財産に対する度を越した欲望のことです。それは一種の狂気であって、それに憑かれた人々は、もつと多くのものを手に入れようと躍起になります。それは、本当は必要でないものまで渴望するように駆り立てる熱病です。

満足することを知らないビジネスマンにあるのは貪欲です。ある程度まで蓄えたらやめるつもりだと言います。しかし、そのときがやって来ると、もつと多くのものが欲しくてたまらなくなりません。

その生活が果てしない買い物三昧、という主婦の中にあるのは、貪欲です。せつせとためこんだ大量の品物で、屋根裏部屋もガレージも溢れかえり、貯蔵場所は戦利品でふくれあがっています。

クリスマスや誕生日のプレゼントの慣習の中にも、貪欲の姿があります。老いも若きも、自分が獲得した戦利品の量で、この記念日の成功のいかんを判断します。

貪欲は財産分与のときにも見られます。誰かが亡くなると、親類縁者と友人は儀式的に涙を流した後、ハゲタカのように舞い降りて、獲物を分け合い、内紛が始まることもしばしばです。

貪欲は偶像礼拝です(エペソ5・5、コロサイ3・5)。神のみどころよりも、自分の意志を優先します。神が与えてくださったものに不満を表し、どれだけの犠牲を払っても、もつと多くものを得ようとしています。

貪欲はまやかしであり、幸福は物質的なものを持つことにあるという錯覚を作り出します。「願うだけで欲しいものを手に入れることができた」という人の話があります。大邸宅、召使い、

(高級車の)キャデラック、ヨットが欲しいと願いました。すると、たちどころに、目の前にそれらがあるではありませんか。最初は嬉しかったのですが、やがて欲しいものが何も思いつかなくなつてくると、不満を感じはじめました。ついに、彼は言いました。「ここから出してくれ。何かを作り出したい。何か苦勞をしてみたい。ここにいるよりは地獄にいた方がましだ」と。すると、召使いが言いました。「ここがどこだかわかつておられなかつたのですか」と。

貪欲のために、人は妥協し、だまし、罪を犯す誘惑にさらされます。自分の欲しいものを手に入れたいからです。

貪欲な人は、教会の指導者として不適格です(1テモテ3・3)。ロナルド・サイダーは、こう尋ねます。「あくなき貪欲によつて『経済的成功』を収めた人々を、長老職に選出するより、むしろ、教会戒規の対象にする方が聖書的ではないだろうか」。

貪欲が高じて、横領、財物強要、あるいは、その他の公のスクヤンダルとなつた場合には、除名が必要となります(1コリント5・11)。

そして、もし、貪欲を告白せず、放棄することもなかつたら、その人は神の国からも締め出される結果となるのです(1コリント6・10)。

「衣食があれば、それで満足すべきです。」

(テモテへの手紙第一 6章8節)

このことばを額面通りに受け止めるクリスチャンは、ほとんどいませんが、これもヨハネ三章一六節と同様に、真の神のみことばです。それは、私たちに衣食があれば、満足すべきだと語っています。「衣」と訳されている語は、身につける衣服はもちろんのこと、頭上を覆う屋根も含んでいます。言い換えれば、私たちは最低限必要なもので満足すべきであり、それ以上のものはことごとく主の働きに捧げるべきであるということです。

満足を知っている人は、金銭で買うことのできないものを持っています。E・スタンレー・ジョーンズは、言いました。「何も欲しない人は、すべてのものを持つている。何も持つていないからこそ、いのちそのものを含む、人生のあらゆるものを所有しているのである。：所有物が豊かにあるというより、欲しいものがほとんどないという点において、その人は裕福なのである」。

何年も前のこと、ラドヤード・キプリング(※ノーベル文学賞を受賞したインド生まれの英国の作家・詩人)が、マギル大学(※カナダの名門校)を卒業するあるクラスの学生たちに話をしたときに、物質的な富に過大な価値を置かないように警告をしました。キプリングは、こう言っています。「いつの日か、これらのものの何一つ欲することのない人に、君たちは出会うことだろう。そのとき初めて、自分がどれほど貧しい人間であるかということに気がつくのだ」。

「地上にいるクリスチャンの最も幸福な状態とは、欲しいものが数えるほどしかないということのように思われる。心にキリストがいてくださり、眼前には天国があり、人生の安全な営み

に必要なこの世の祝福さえあれば、苦痛も悲しみも攻撃する目標をあらかた失う。このような人には、失うものが何もないのだ」(ウィリアム・C・バーンズ※スコットランド出身の伝道者・宣教師)。

満足するというこの精神は、神に仕える数多くの偉大な人物の特徴となつていのように思われます。デイヴィッド・リビングストンは言っています。「私は、神の御国と関係のないものは、いかなるものにも目を向けられないことに決めた」。ウォッチマン・ニーは、こう記しています。「私は、自分のためには何も欲しくはないが、主のためにはすべてのものを欲する」。そして、ハドソン・テイラーは、「欲しいものが数えるほどしかないという贅沢を楽しんでいる」と言いました。

わずかのもので満足するという考えは、意欲や大きな志が欠けているしるしだとしか思われない人もいます。満ち足りた人とは、横着者、または、寄食者のことであると連想するのです。しかし、それは、神の与えてくださる満足ではありません。満たされたクリスチャンには、意欲も大きな志も豊かに備わっています。しかし、それらの向かう方向が霊的なものであり、物質的なものではないだけです。寄食者であるどころか、困窮している人に与えようと働くのです。ジム・エリオット(※エクアドルで宣教中、殉教)のことばによれば、「満たされた人とは、神によつて、『握りしめた手を緩めることができた人』のこと」なのです。

「わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ。」

(サムエル記第一2章30節)

主を尊ぶ数多くの方法の一つは神の定められた原則から一歩も退かず、妥協を決然と拒むというものです。

若い頃、アダム・クラーク(※イギリスの著名な聖書学者)は、絹商人のもとで働いていました。ある日のこと、雇い主が客の前で長さを計るときに、どうやったら絹を引き伸ばせるか、そのやり方を教えました。アダムは、言いました。「ご主人様の絹は伸びるかもしれませんが、私の良心は伸びたりはしません」。それから長い年月が経ち、この正直な販売員を神は尊ばれ、その名前を冠した聖書注解書が世に出ることになったのでした。

エリック・リデルは、オリンピックの百メートル走に出場することになっていました。しかし、その予選が日曜日に組まれていることを知ると、「自分は走るつもりはありません」と監督に告げました。主の日を軽んじることは、主ご自身を軽んじることになると感じたのです。大きな批判の嵐が起きました。彼は、せつかくの機会に水を差したとか、自分の国を失望させた、あるいは、融通のきかない狂信者だと非難されました。しかし、彼は、自分が決めたことを覆くさそうとはしませんでした。

二二〇メートル走の予選が、週日に組まれているのに気がついたリデルは、監督に走る許可を求めました。それがたとえ、自分の専門種目ではないとしても…。リデルは、一次予選、二次予選、そして、準決勝に勝ち残りました。決勝の当日、スタート地点に大またで歩いていくと、ある人がリデルの手に小さな紙切れを押し込みました。ちらりと目をやると、そこにはこう書かれていました。「わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ」。その

日、リデルはそのレースに勝ったばかりでなく、世界新記録を樹立したのでした。

主は、リデルに、極東で主の大使の一人として仕えるという、さらに大きな榮譽を与えられました。第二次世界大戦中、日本軍に拘禁され、強制収容所で死に、殉教者の冠を勝ち取ったのです。

アダム・クラークやエリック・リデルは、ヨセフやモーセ、そして、ダニエルのような人々の輝かしい系譜に名前を連ねることになりました。気高い人格をもって、神に榮譽を帰し、飢饉に際して、民を救って神に榮譽を帰したヨセフ。神にその献身的忠誠が尊ばれ、イスラエルの民をエジプトの奴隷状態から救い出したモーセ。そして、妥協を拒んだために、かえってペルシャ王国で他を圧倒する地位に引き上げられたダニエルのような人々です。そして、それらすべての人々にもまさる御方がおられます。誰も及びもつかないほど、御父に榮譽を帰し、すべての名にまさる名を与えられた主イエスです。

「武装しようとする者は、武装を解く者のように誇ってはならない。」

(列王記第一20章11節)

このように語ったのは邪悪な王アハブでしたが、これは真理のことばでした。神を恐れない人でも、ときとして思わず真理を口走ることがあるのです。

アラムの王は、アハブに対して侮辱的で、厚かましい要求をし、従わなければ、軍事的大敗北を喫することになるぞ、と脅かしました。ところが、その後の戦いで、アラム側は退却を余儀なくされ、王はいのちから逃げなければなりませんでした。実際の姿と大言壮語は一致しなかったのです。

今日の聖句は、ゴリヤテにとつても良い助言となつたかも知れません。ダビデが近づいてくるのを見て、ゴリヤテは言いました。「さあ、来い。おまえの肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう」(1サムエル17・44)。しかし、石投げ器で投じた、たつた一つの石で、ダビデは、やすやすとゴリヤテを倒してしまいました。巨人ゴリヤテは、自慢を早まったのです。

若いときにクリスチャンになると、私たちは自分の能力を過大評価しがちです。この世も、肉性も、悪魔も、誰の手も借らずに戦えるといわんばかりの振舞いをします。「世界にまだ福音が伝わっていないではありませんか」と言つて、年上のクリスチャンたちを非難するかもしれません。「さあ、そのやり方を教えてあげましょう!」と。しかし、誇るのは時期尚早です。戦いは始まつたばかりなのに、もうすでに終わったかのように私たちは振舞っているのです。

ある晩、打ち解けた、信徒の集まりが開かれたときのこと、そこ出席していた才気あふれる若手の説教者に注目が集まつ

ていました。自分が注目を一身に浴びていることに、彼は心から満足しました。その集まりの中には、彼の人生に深い感化を与えた、日曜学校の教師も来ていました。ある人が、この教師に話しかけました。「以前あなたの生徒だった彼を誇りに思つておいででしょうかね」。すると、彼は答えました。「はい。ただし、最後まで順調にいけばの話ですが」と。そのとき、若い説教者は、「不愉快な発言だ。そんなことを言わなければ、この夕べはどれほど愉快だったことだろうか」と思いました。しかし、後年、長い年月を振り返つたときに、年老いた師が言つていたことは正しかった、と気がつきました。問題は、いかに武器をつけるかではありません。戦いをどのようにして終えるかなのです。

実は、戦いがこの世で終わることは、決してありません。天で、私たちの偉大な《指揮官》の前に立つて初めて終わるので、そのときに、自分が仕えてきたことに対する主の評価を聞くことになります。そのみが、価値ある評価です。そして、主の評価がどうであろうと、誇るべき理由はありません。心からの謙遜を込めて、こう言うほかはないからです。「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです」(ルカ17・10)と。

「神をのろつてはならない。また、民の上に立つ者をのろつてはならない。」

(出エジプト記22章28節)

律法をモーセに与えたとき、神は、権威ある地位についている者に対して、非難めいた無礼な口をきいてはならない、と具体的に命じておられます。その理由は、明らかです。このような支配者や指導者が、神を代表しているからです。「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によつて立てられたものです」(ローマ13・1)。君主は、「あなたに益を与えるための、神のしもべだからです」(ローマ13・4)。君主が主を個人的に知らないとしても、公的には主に立てられた人なので

す。

神と君主たちとの関係は、非常に密接なため、神が、君主を神々と言つておられる場合もあります。したがつて、きょうの聖句を、「神々をのろつてはならない」と読むこともでき、その場合は、権力を司る人々を意味していると言えるかもしれません。さらに、詩篇八二篇一、六節では、主はさばきつかさを神々と言つておられますが、それは、神性を持つているという意味ではなく、神の代理人であるということに過ぎません。

サウル王が、ダビデを殺害しようとは何度も攻撃してきたにもかかわらず、部下が少しでも王に危害を加えることを、ダビデは許しませんでした。サウルは、主が油注がれた人物であつたからです(1サムエル24・6)。

使徒パウロは、大祭司と知らないで非難したことに気づくと、直ぐに悔い改め、謝罪してこう言いました。「兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、『あなたの民の指導者を悪く言つてはいけません』と書いてあります」(使徒23・5)。

権威ある人々を敬うのは、霊的な領域にも適用されます。大天使ミカエルが、なぜ、悪魔をあえてののしり、さばくようなことをせず、ただ「主があなたを戒めてくださるように」と言つたのか、それで説明がつかます(ユダ9)。

終わりの時代に現れる背教者の特徴の一つは、政府を嘲り、高い地位にある人々の悪口をはばからずに言う点にあります(IIペテロ2・10)。

私たちに對する教訓は、明らかです。私たちは、たとえその政策に賛成できない場合でも、また、その人格を受け入れることができないうとしても、国を治める人々を、公的な神のしもべとして敬わなければなりません。どのような事情があつたにせよ、あるクリスチャンが、勢い余つて政治運動中に、「大統領は卑劣な悪党だ」と発言したようなことがあつてはなりません。

その上に、私たちは王とすべての高い地位にある人たちのために、祈らなければなりません。「それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもつて、平安で静かな一生を過ごすためです」(Iテモテ2・2)。

「訓練と違って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。」

(ヘブル人への手紙12章7節)

「懲らしめ」という語が、ヘブル人への手紙一二章では一節一節までの中で七回出てきます。そのため、さりげなく読むと、間違った印象を持つてしまいがちです。神は、いつまでも自分の子どもたちをむちで叩き続ける怒った父親のようだと心に思い描いてしまうのです。このような誤解が起こるのは、懲らしめとは、罰そのものだ、と思うところから始まっています。

新約聖書では、懲らしめとはそれよりもずっと広い意味があると知ると、心からほっとします。その本当の意味は、子どもを訓練することであり、子育てに関連するすべての親の活動を含んでいます。(※「新約聖書神学辞典」の編纂で著名な)キツテルは、それをこのように定義します。「成長して十分な発達を遂げていこうとする子ども——指針や教え、指示、および、訓練や懲らしめという形で一定の強制力を必要とする子ども——をしつけ、扱うこと。」

ヘブル人への手紙が宛てられたクリスチャンたちは、迫害の真ただ中にありました。筆者は、この迫害を、主の懲らしめの一部として語っています。それでは、神が迫害を起こされたということでしょうか。もちろん、そんなことはありません。迫害は、福音に敵対する者が思いついたものです。神は、クリスチャンをその罪のために罰しておられたのでしょうか。いいえ、迫害が襲ってきたのは、おそらく、神に忠実な証しをしたためであると考えられます。それでは、迫害が主の懲らしめと

言えるとは、どういう意味なのでしょう。迫害が起きることを神が許され、それを、御民が生きていく上での教育的措置の一環として用いられた、という意味です。言い換えれば、神はご自分の子どもたちが、御子の姿にまで練り清められ、成熟し、同化していくように迫害を用いられたのです。

もちろん、このような懲らしめは、当座は喜ばしいものではありません。のみは、大理石を容赦なく削ります。炉は、金を高温にさらします。しかし、やがて大理石に人の顔が現れ、また、金が浮きかすから精錬されるときに、その苦勞は報われるのです。

主の懲らしめを軽んじたり、懲らしめを受けて気絶したりするなら、元も子もありません。唯一の正しい受け止め方とは、神が、それを訓練の道具として用いておられることを覚え、そこから最大限の利益が得られるように努めようと心がけることです。これこそは、筆者が、「これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます」(ヘブル12・11)と言っている意味なのです。

「教会では、異言で一万語話すよりは、ほかの人を教えるために、私の知性を用いて五つのことばを話したいのです。」

(コリント人への手紙第一14章19節)

ここで取り上げられているのは、言うまでもなく、解き明かす者がいないのに、教会での集まりで異言を語るという主題です。パウロは、そのような慣習に反対しています。話される以上は、理解できなければならぬ、さもなければ、誰の徳も高められないではないか、と主張しているのです。

しかし、この聖句はもつと広い意味に應用できます。私たちが話すときには、誰もが聞こえるように十分な声量で話さなければなりません。さもなければ、外国語で話しているのと変わりません。どのような聴衆の中にも、耳の遠い人はいるものです。そのような人は、話し手の声があまり明瞭でない場合、考え方の流れがつかめず、大変な苦勞をします。愛は、自分のことではなく、他の人のことを考えます。ですから、愛は、誰でも聞こえるように、十分に大きな声で話します。

愛は、ふつうの人が十分に理解できる簡単なことばを使います。私たちには、偉大なメッセージがあります。世界中最大のメッセージです。人々がそれを聞き、メッセージを理解することは重要です。もし、ややこしい、意味のよくわからない専門用語を使うなら、元も子もなくなってしまう。

ある説教者が極東に行き、人々に伝道をしました。もちろん、通訳者を使いました。そのメッセージの最初の文は、こうでした。「すべての思惟は二つの範疇、すなわち、具体と抽象に分けることができます」。歯のないおばあちゃんたちと落ち着きのない子どもたちから成る聴衆を見て、通訳者は次のように訳しました。「私は、主イエスについて話すためにはるばるアメリカか

らやって来ました」。これ以降、メッセージは、しつかり「御使いたちが導いてくれた」とのことです。

最近発行されたあるクリスチャン向けの雑誌を見ていたら、このような表現に出会いました。「超歴史的範疇の規範データ」「折衷的ではなく実存的妥当性のある著作」「垂直的連続体としての意識」「肯定の規範的言語」「測定の極限的状況における古典的因果律」…。このようなチンプンカンプンの宗教的用語をかき分けて進め、と言われる人は実に気の毒です。無限にことを費やしても、中身が何もないことを重々しい表現で言う人々には、どうか関わらなくてすみますように！

テレビ番組やラジオ番組は、平均すると、小学校三年生程度の教育があればわかるレベルに設定されているそうです。贖いのメッセージをこの世に届けたいと願うクリスチャンは、そこからヒントを得るべきです。「キリストは罪人を受け入れ給う」というメッセージを、私たちは誤解の余地のないほど明瞭に、またわかりやすく伝えなければなりません。誰も理解できない言語で一万語話すよりは、わかることばを五つ話す方が優っているのです。

「わたしにすがりついていてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。」

(ヨハネの福音書20章17節)

子ども向けの讚美歌で非常に愛されているもの一つに、こんな歌詞がついています。

イエスさまが人々の中へ来られ

子どもたちを小羊のように群れに入れてくださった…

昔からのその心躍るお話を読むたびに、私は思う

ああ、私もそのときイエス様と一緒にいられたら

どんなによかったらどうか、と

おそらく、ほとんど誰もが、こうした感傷的な気持ちになつたことがあるのではないだろうか。主が地上で働きをなしておられたときに、神の御子と個人的に交わつて楽しむことができたらどんなによかったか、と考えるのです。

しかし、実は、主を知るには、今日の方が優つているということに気づくべきです。みことばを通し、御霊によつて主の姿が啓示されているからです。不利な立場に置かれているどころか、実際には、弟子たちに優る特権に与つているのです。このように考えてみてはどうでしょうか。マタイは、マタイの目を通してイエスを見ました。マルコは、マルコの目を通してイエスを見ました。ルカは、ルカの目を通してイエスを見ました。ヨハネは、ヨハネの目を通してイエスを見ました。しかし、私たちは四名の福音書記者の目を通してイエスを見ているのです。そして、その観点をもう一步進めると、主イエスに関する

啓示が、弟子たちが地上にいたときよりも、はるかに完全に近い形で新約聖書に書かれているのです。

イエスと同じ時代にいた人よりも私たちの方がもつと恵まれている、ということに、もう一つの理由をつけ加えることができます。ナザレヤカペナウムで群衆の間におられたイエスに、当然のことながら、ある人は、他の人よりも近いところにいました。階上の間で、ヨハネは主の胸に寄りかかっていましたが、他の弟子たちは、主からの距離がそれぞれ異なる席で食卓についていました。しかし、そのすべてが、今は変わったのです。救い主とすべての信仰者との間の距離は等しく、また、近いものになりました。主は、私たちと共にいてくださるだけではなく、私たちの内に住んでいてくださるのです。

復活した主に会ったマリヤは、以前、主を知っていたときのように、主にすがりつきたいと思いました。主が目に見える形で、しかも、体を持つていてくださる状態を失ってはならないと思つたのです。しかし、イエスは言われました。「わたしにすがりついていてはいけません。わたしはまだ父のもとに上つていないからです」(ヨハネ20・17)。つまり、おつしやりたかつたことはこうです。「マリヤ。地上的、物理的な意味でわたしから離れまいとしてはいけない。わたしが父のもとに昇つた後、聖霊が地に遣わされる。その聖霊の働きによつて、あなたは、以前よりもはるかに完全に近く、はつきりと、また、親しく、わたしを知ることができるようになるのだ」。

したがって、結論はどういうことになるでしょうか。主が地上におられたときに、自分もそこにいられたらよかつたのにと願うのではなく、今、主と共にいる方が優つていることを悟り、喜ぶことです。

「わたしの民は二つの悪を行なった。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。」

(エレミヤ書2章13節)

泉を水ためと交換するのは下手な買い物です。それが、壊れた水ためであればなおさらです。泉とは、地中からほとぼり出る、冷たくて不純物のない、気分を爽やかにしてくれる水の源泉です。それに対して、水ためは水を貯蔵する人工貯水装置です。そこに入った水はよどみ、汚れることもあります。その水ためが壊れると、水は外に漏れ、汚染は染み込んでいきます。

主は、生ける水の源泉です。主を信じる者は、主の中に永続する満足を見出します。この世は、水ためであり、しかも、壊れた水ためです。快樂と幸せの希望を提供しますが、この世で満足を求める人には、例外なく失望が待ちかまえています。

メアリーは、クリスチャンホームで育てられました。神のことばが読まれ、それを暗唱しました。しかし、両親の生き方に反発し、好きなように生きようと家を出ました。やがて、ダンスに情熱のすべてを注ぐようになり、キリスト信仰による生い立ちの過去をすべて封じ込めようとして、次から次へとダンスパーティーを渡り歩きました。

ある夜のこと、パートナーと組んで、ダンスフロアを流れるような動作で動いていくと、子どもの頃に覚えた聖書の一節に捉えられました。「わたしの民は二つの悪を行なった。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。」ダンスをしている途中でしたが、彼女は自分の罪を責められました。自分の人生が空しいものであったことに目が覚めて、主

に目を向け、回心したのでした。これ以上ダンスを続けることができないと釈明をして、ダンスホールを出た彼女は、二度とそこへ戻っては来ませんでした。

以来、彼女の心境は、このように書いた詩人と同じものとなりました。

主よ、私はこわれた水ためを試してみました

しかし、ああ！ 水が漏れていました

たとえ飲もうとひざまずいても水は逃げ

嘆く私を水は笑いました

もはや、キリスト以外、誰も満たす方はいません

ほかの名では役に立ちません

愛、いのち、そして、永続する喜びは

主イエスよ、あなたの内にしかありません

メアリーは、救い主のことばが真理であることを経験したのでした。「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます」(ヨハネ4・13、14)。

「主はこう仰せられる。『あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。―主の御告げ―彼らは敵の国から帰って来る。』」

(エレミヤ書31章16節)

ステイーブンは、宣教地で育ちました。幼い頃に、キリストへの信仰を告白したステイーブンを通して、何人かが主に導かれました。大学に入学するために初めてアメリカに戻ってきて、良い証しを立てていました。しかし、そのうちに周囲に流されはじめ、心が冷ややかになっていきました。罪と妥協するようになった彼は、ほどなく東洋の宗教をかじるようになりました。

一時休暇で帰国した両親は、滅入ってしまいました。懇願し、説得し、嘆願しましたが、ステイーブンの態度は鋼はがねのように硬いままでした。思い余った両親は、他の三人と暮らすステイーブンのもとを訪ねますが、そこで見た光景によって、両親はすっかり打ちのめされ、家に戻って、号泣するばかりでした。

ベッドで寝ようとしても眠れません。朝四時、ついに二人はベッドから起きて、朝の静思の時を持つことにしました。普通であるならば、その日はエレミヤ書の三十一章を読むことになっていましたが、「エレミヤはやめておこう」と夫が言いました。涙の預言者と言われるエレミヤを読んでも、慰めにならないと思ったのです。しかし、主がエレミヤを読むように導かれたので、三十一章を開きました。一六節にやってくる、こう書いてありました。「主はこう仰せられる。『あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。―主の御告げ―彼らは敵の国から帰って来る。』」

何千というクリスチャンの両親が、今日も、息子や娘の反発に打ちひしがれ、悩んでいます。祈っても、天は青銅さながら、祈りを跳ね返すように感じられます。信仰から離れてしまった者を、神は果たして回復させてくださるのか、また、そうしてくださることができるのかと疑問を抱きはじめるのです。

親たちは、主に解決ができない事例は一つとしてないことを思い出さなければなりません。祈りをやめることなく、感謝を持って見守り続けるのです。神のみことばの約束に基づいて嘆願するのです。

上記の母親が、エレミヤ書三十一章一六節の約束が、果たして自分への約束なのか疑問に思ったとき、イザヤ書四九章二五節が目にとまりました。「あなたの争う者とわたしは争い、あなたの子らをこのわたしが救う」。

「ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。」

(コリント人への手紙第二一章9節)

パウロはアジア州で、からくも死から逃れました。何があつたのか、正確には確かめることができませんが、非常に深刻な事態であつたことは確かで、「死ぬか生きるかの一大事なのか」と尋ねたとすれば、「死ぬことになるだろう」と答えたに違いありません。

神がお用いになる人々のほとんどは、人生のどこかで同様な体験をしています。神に仕える偉大な人物の伝記を読むと、病氣、事故、個人攻撃から目覚しい方法で救出されたことが記録されています。

神は、ときには、このような体験を用いて、人の注意を喚起されます。物質的な繁栄という点では、波に乗っているかもしれませんが、順風満帆かもしれません。そんなときに、突然病気で倒れます。外科医が、癌で冒された内臓の相当な部分を除去します。その結果、自分の人生をもう一度見直し、優先順位を考え直すこととなります。人生がいかに短く、不確かなものであるかに気がつき、生涯の残りを主に捧げようと心に決めます。すると、神はその人を立ちあがらせ、神に仕える実り豊かな多くの年月を増し加えられます。

パウロの場合は、それと違いました。すでに主に仕えるべく、人生を主に明け渡していたからです。しかし、自分の力と才気により頼んで仕えようとしかねない、危険な可能性が潜んでいました。そこで、主は、パウロを死の一步手前に立たせたのです。それは、パウロが、自分ではなく復活の神により頼むよう

になるためでした。波乱万丈のその生涯に、人間的には解決不能な、苦しい立場に直面することが、幾度となく訪れようとしていました。しかし、不可能を可能にされる神に、より頼んでいれば十分であることを経験したパウロは、もはや怯むひることはありませんでした。

あやうく死にそうになるという、このような経験とは、祝福が姿を変えたものです。それによつて、私たちはいかにほかないものであるかを知らされます。この世の価値観が、愚かなものであることに改めて気づかされます。人生とは、突然終わりを告げる短い物語にすぎないことを教えられます。死に直面するに至つて、昼の間に、私たちを遣わされた御方の務めをしなければならないことを悟ります。誰も働くことのできない夜が来るからです。ある意味で、私たちは皆、死を宣告されています。それは、キリストに仕えることをすべてに優先させ、主の力と知恵により頼ませようとする、健全な促しなのです。

「私たちの手のわざを確かなものにしてください。」

(詩篇90章17節)

NASV(米国新標準訳)の欄外には、こう書かれています。「私たちの手のわざに永続性を与えてください」。これこそは、熟考に値し、祈りに値する願いではないでしょうか。永続することのために人生を使うことを、私たちは心からの願いとしたいものです。

新約聖書の中でこれと同様のことを、主イエスも言っておられます。「わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためです」(ヨハネ15・16)。

「自分の肉体が墓の中で横たわっている間もできる誉れある仕事を、誰もが自らに用意するべきである」と、F・W・ボラームは言いました。しかし、私たちは、その考えを墓の向こう側まで推し進め、だれもが永遠を視野に入れて人生を築くべきである、と言わなければなりません。

今日、行われていることのかなり多くは、重要だといっても一過性のもので、東の間の価値しかありません。先日、バートレットという品種の西洋ナシの皮に含まれる五十種の揮発性化学物質の分析に生涯を費やした人の話を聞きました。クリスマスチャンですら、泡のようにはかないものに夢中になったり、どうでもよい瑣末なことの専門家になったりする畏にはまることがあるのです。ある人が言ったように、「家が火事になっているのに、その中に飾ってある絵が曲がっているからといってまっすぐに直すことに人生を費やす」に等しい過ちを犯している場合があるのです。

永遠に重要さを失わない務めには、いろいろなものがあります。私たちは、それらに集中しなければなりません。まず第一に、クリスマスチャンとしての人格を成長させることです。天に持つていけるものはほんのわずかしかありませんが、人格とはその一つであるからです。それを育むのは、今しかありません。

キリストに導かれたたましいも、永遠に重要です。彼らは、永遠に至るまで神の小羊を礼拝する人たちとなるからです。

真理のみことばを教える人、若いクリスマスチャンに弟子訓練を施す人、キリストの羊を養う人は、無限に続くその人々の人生に投資をしているのです。

御国に仕える者になるように、と息子や娘を育てる親の働きは永遠に残ることが保証されています。

キリストとそのみこころの成就のために、自分の財産を投資する忠実な管理者は、失敗がありえない務めに従事しているのです。

祈りのわざに専心している人は、どの祈りもみな神御自身の時と方法に従って応えられていたことを、やがて知るようになります。

神の民に仕える人は、誰でも永遠の仕事に従事しているので、キリストのしもべなら、どれほど地味な立場にしようとも、この世の最高の知恵者に優るビジョンを持っています。その働きはいつまでも残り、そうでない人々の働きは、きのご雲とともに、跡形もなく消えてしまうことでしょう。

「主よ。だが、あなたの幕屋に宿るのでしょうか。だが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。…主を恐れる者を尊ぶ。損になっても、立てた誓いは変えない。」

(詩篇15篇1節、4節)

ダビデは詩篇一五篇で、偉大なる神の友となるにふさわしい人とは誰のことか説明しています。その特徴の一つは、自分が大変な損失を被ろうとも、言ったことは変えないというものです。いったん約束や承諾をしたら、どこまでも守るのです。

例えば、あるクリスチャンが家を売ろうとしていたとします。買い手がつき、提示価格を支払うことに同意します。売り主のクリスチャンもその取引に同意します。ところが、書類に署名する前に、さらに五千ドル上積みしてその家を買いたいと申し出る人が現れました。法律的には、おそらく、最初の売値を撤回して、五千ドルを上乗せしても問題はないことでしょう。しかし、道徳的な観点からすれば、いったん口にしたことばは守る義務があります。クリスチャンとして信頼されるかどうか、その人の証しは瀬戸際に立たされます。

あるいは、「親知らず」の歯の治療が必要になったクリスチャンがいたとします。歯科医はその人を口腔外科医に紹介し、抗生物質で処置をしてもらいます。次に、抜歯の予約をします。その外科医に証しをしてクリニックを出た後、家に帰る途中で、友人に出会います。すると、半額で抜歯をしてもらえるところがあると教えてくれるではありませんか。もちろん、すでに済んだ治療に対しては支払いをした後、その別の歯科医のところに行ってもいいわけです。しかし、そうするのが適切なのでしょうか。

スーは、年配のご夫婦から夕食の招待を受けました。ところが、電話が鳴り、「同年代の若者のグループと、持ち寄りの料理でパーティをするので来ないか」と誘われました。スーは、板ばさみになってしまいました。お年寄り夫婦をがっかりさせたくはないものの、どうしても行きたいのは若者の集まりの方だったからです。

そのようなとき、多額のお金がかかると、判断が大変難しくなります。しかし、どれほどのお金が絡もうと、約束を破ったり、承諾を覆くつがえしたり、証しの信用を失墜させて、主の御名に不名誉をもたらすようなことがあつてはなりません。どれほどの費用がかかろうとも、ヴォルテールの次のような皮肉たつぷりのことばが誤りであることを証明しなければなりません。

「金銭が絡むと、すべての人は同じ宗教の信者となる」。

神の人は、「どんな犠牲をはらっても、約束したことは常に守る」(TEV訳)、つまり、「自分が破産することになったとしても約束を守る」(リビング・バイブル)のです。

「自分の罪から逃げおおせることはできないと知れ。」

(民数記32章23節 英訳)

私たちが住むこの世には、神によつて、変更不可能な一定の原則が埋め込まれています。人間にどれほど独創の才があつても、その原則の適用から逃れることはできません。罪を犯せば、罰は免れないというのもその一つです。

子どもの頃、ジャムや他の食べ物をこつそり味見した後、母親に動かぬ証拠を見つけられてしまい、その原則を学んだ人もいることでしょう。しかし、その真理は、人生のあらゆる局面に適用されており、それを証言しない新聞は一つもありません。『ユージン・アラムの夢』という詩は、その点をあざやかに示す説明となつています。「完全犯罪」が可能だと考えた主人公アラムは、一人の男を殺し、死体を川に投げ込みます。「川は墨のように真っ黒で、流れはほとんどなく、深さはかなりのものだった」。翌朝、彼は犯罪の現場である川岸にくだつて行きました。

そして、錯乱した不安な目で

黒く、呪われた水たまりを探した

すると川床に死者が横たわつていてではないか

あろうことか、頼みの川は干上がつてしまつていたので

彼は葉を山のように積み重ねて、死体を隠そうとしましたが、その夜、海の方から大風が吹いてきたために、死体がそこにあることは隠しようがなくなりました。

それから、ひれ伏して

私は初めて涙を流した

その秘密を守ることを

大地が拒んだと、知つたからだ

それが陸であろうと

何万フィートの深さの海であろうとも

ついに、彼は遠く離れた洞窟に自分が殺した人を埋めました。数年後に骸骨が発見され、その犯罪で裁判にかけられ、処刑されました。自分の罪から逃げ切れることはできなかったのです。

しかし、私たちが罪に追いつめられる場合は、他にもあります。E・スタンレー・ジョーンズは、こう指摘しています。「罪を犯すと、罪は心の内部に自分の痕跡を残していく。その結果、心は荒廃していき、やがて自分がいやでたまらないという内面の地獄を経験し、人知れず、出口のない迷路に住まなければならないことになる」。

そして、たとえこの世では誰も自分の罪に気づかなかつたとしても、次の世では必ず暴露されることとなります。その罪が、イエスの血によつて清められていない限り、さばきの日に明るみに出されます。それが、行為であろうと思ひであらうと、動機であらうと意図であらうと、責任が問われ、罰が言い渡されます。その罰とは、もちろん、永遠の死なのです。

「キリストがすべてであり」

(「コロサイ人への手紙」3章11節)

私たちクリスチャンには、多大の時間を費やして、新しい霊的経験を求めようとする傾向があります。それによつて、永遠の勝利と日常生活の浮き沈みに左右されない自由を確実なものにしたためです。修養会、大会、セミナー、ワークシヨップを駆け巡り、見つけにくい魔法の公式を発見して、人生の難所を平坦な道にしようとします。光沢紙を使ったパンフレットには、私たちが御霊で力に溢れた者になるための画期的な発見を、何々博士が教えてくださると書かれています。あるいは、近所に住む熱心な人から、「豊かな霊的生活に手っ取り早くいたる秘訣が、市の大講堂で語られるからぜひ行きましょう」と無理やり誘われます。

この手の勧誘は、大軍のように押し寄せてきます。ある説教者は、「真の満足を得るための近道を教えましょう」と言い、また、別の人は、勝利を得るための三重の秘訣を宣伝します。そこで私たちも、より深い霊的な生活の秘訣というセミナーに出かけることとなります。その翌週は、聖潔にいたるやさしい五つのステップというテーマの大会があります。講壇の前に押し寄せて、御霊の満たしを受けようとしています。あるいは、肉体の癒しのこと以外は、考えられなくなりします。それが人生で最も大切なものであるかのように思ってしまうからです。あるときは、クリスチャンの心理学から刺激を得るために出かけ、その次には、過去に傷を受けた記憶の癒しに出かけます。新しい、霊的な高みを求めて、私たちは陸と海を駆けめぐるのでした。

このような話し手たちの多くが、まじめで、語ることの中には有益なものが含まれていることには疑いの余地はありません。しかし、現実を厳しく見れば、聖潔に至る近道などというも

のではないこと、そして、問題はなくなっていないこと、したがって、日々、主により頼んで歩むほかにないことに気づくのです。

結局のところ、経験に頼るのではなく、主イエスによつて心を満たす方が優っていることを学ばなければなりません。主に頼つて、失望することなどありません。私たちに必要なものはすべて、主の中にあります。他に何もなかったとしても、主がおられるならそれで十分なのです。

A・B・シンプソンは、体験を求めてその生涯の前半を費やしましたが、体験では心が満たされないことに気づきました。その後、シンプソンは、「主ご自身」(Himself)と題する、美しい賛美歌を書きました。その一番と合唱の部分は以下の通りです。

かつては我、良きものを求めて主を忘れたり
賜物より癒しより、与え主ぞさらに良き
わがすべてのすべなる主をばあがめん、とこしなえに

(中田羽後訳)

(直訳は次の通り)

以前は祝福、今は主
以前は感情、今はみことば
今は与え主をわがものとす
以前は癒しを求めぬ
今は主だけを求む
すべてにまさりとこしえに
われはイエスを歌わん
すべてはイエスにあり
そして、イエスはすべてなり

「自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。」

(テモテへの手紙第一 4章16節)

神のみことばには、顕著な特徴が数多くありますが、その一つは、教理と義務を決して切り離していないことです。例えば、ピリピン人の手紙第二章一〜一三節を見てください。それは、新約聖書において、キリストに関わる教理の代表的な箇所の一つです。そこを読むと、キリストが父なる神と対等であること、ご自分を無にされたこと、肉体をとられたこと、しもべとなられたこと、死を経験されたこと、それに続いて、栄光を受けられたことが書かれています。しかし、このように書かれたのは、教理の学術論文としてではなく、ピリピン人も私たちも、キリストの心を持つようにと訴えるためだったのです。もし、キリストのように私たちも他の人のために生きるなら、その結果、不和や虚栄は姿を消すこととなります。もし、キリストのようへりくだるなら、神は、適切なときに私たちを引き上げてくださいます。この箇所は、すこぶる 実際的です。

組織神学に関するいろいろな本を読むときに、その点を私もしばしば考えます。本の中で、著者たちは、信仰の教理に関する聖書の教えを——それが、神、キリスト、聖霊、天使、人間、罪、贖罪など、何であれ——あらゆる角度から統合しようと試みます。無論、そうすることが有益であることは確かですが、敬虔な生き方と無関係に取り扱われる場合には、非常に冷やかなものになりかねません。知的には素晴らしい教理を知り尽くしているながら、クリスチャンとしての人格においては、悲しいかな、欠陥があるという場合もあるのです。神が与えてくださったものとしての聖書を学んでいくなら、決して教理と義務が二

分されるような事態にはなりません。両者は、常に美しいバランスを保ち、不可分なものとして織り合わされているのです。

ことによると、個人的な責任と切り離されている最大の教理とは、預言かもしれません。好奇心を満たすようなやり方で預言が紹介されることがあまりに多いのです。反キリストとは誰かということに関する、あつと驚くような推測には、大勢の人が興味をかき立てられても、その結果、聖潔が促進されることにはなりません。預言は、知りたくてむずむずしていることへの答えとしてではなく、クリスチャンの人格を形成するために与えられたのです。ジョージ・ピーターズは、再臨が私たちの教理、義務、人格にもたらす影響を六十五の方面から書いていますが、それよりもはるかに多いことは疑いの余地がない、と私は思います。

神学と敬虔な実生活とを分離してはならない…これが、私たちに對する教訓です。個人的にみことばを学ぶにせよ、あるいは、他の人に教えるにせよ、私たちは、パウロがテモテに与えたこの勧めを強調しなくてはなりません。「自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい」。

「しかし、私にとつて得であつたこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさゆえに、いっさいのことを損と思つていません。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくと思つています。」

(ピリピ人への手紙3章7・8節)

クリスチャンが、大きな特権をイエスのために放棄するという出来事は、いつでも特別に輝かしいものです。その才能によつて富と名声を得たというのに、神の召しに従つて、それらを救い主の足元に置いた人もいれば、その美声によつて世界の名だたるコンサート・ホールに出演できるようになりながら、来るべき世のために、プロの道を捨ててキリストに従つた女性がいます。結局のところ、キリストを得るといふ、比較できない利益と比べるなら、名声、幸運、地上で有名になることに何の意味があるだろう、と考えたのです。

イアン・マクファーンソンは、こう尋ねます。「いろいろな才能に恵まれた人が、謙遜と礼拝の思いに満たされて、そのすべてを贖い主の足元に置く以上に感動的な光景があるだろうか」と。そして、キリストの足元こそ、もともと才能の数々が置かれるべき場所だったので、いにしえのウェールズの賢人のことばを借りれば、「罪状書きの」へブル語、ギリシャ語、ラテン語は、どれもしかるべき位置に書かれていたが、しかし、ピラトはその札の位置を間違えた。それらは、イエスの頭上ではなく、イエスの足の下に置かれるべきだった」のです。

使徒パウロは、富も教養も、また、ユダヤ教社会における地位も放棄し、それらをキリストのゆえに損とみなしました。ジョウエットは、このように注釈しています。「使徒パウロが、社会の特権層にいたがゆえに得たものを、大きな利得と考えていた

のは、主と出会う以前のことだった。しかし、主の栄光の光がまばゆく輝くを見た時、パウロは呆然となり、宝だと思つていたものは、色あせて影となり光彩を失つた。そして、以前得だと思つていたものが、主の光を受けて安っぽくなり、その両手に握つていたのは、つまらない、価値なきものだど気がついて立ち尽くした。そればかりか、それらについて考えることすらやめてしまった。かつては、最高にして、神聖な宝物として考えていたものが、すっかり脳裏から姿を消してしまつたのである」。

ゆえに、すべてを捨てて、キリストに従おうとする人を見て、頭がおかしくなつたと考える人がいるのは奇妙なことです。ショックを受けて、どうにも理解できないという顔をする人がいます。涙を流して、他の道では駄目なのかと説得する人もいます。論理と常識をもとに議論する人もいます。その人の決断を評価し、心の奥底で感動を覚えている人は少数です。しかし、信仰によつて歩むなら、他人からどう言われようと、その意見の軽重を適切に判断できるようにするのがです。

C・T・スタッドは、母国に財産と輝かしい将来を残して、宣教の働きに人生を捧げました。ジョン・ネルソン・ダービーは、輝かしい経歴を捨てて、御霊の油注ぎを受けた神の伝道者、教師、預言者となりました。エクアドルで殉教した五人の若者は、アメリカでの快適な暮らしと物質主義を捨てて、アウカ部族にキリストを伝えました。

人は、それを大きな犠牲と言いますが、それは犠牲でも何でもありません。ある人が、ハドソン・テラーを賞賛して、「あなたはキリストのためにずいぶん犠牲を払いましたね」と言うと、こういう答えが返つてきました。「おや、私は生まれてこの方、まだ犠牲など払つたことはありませんよ」と。また、ダービーもこう言っています。「〔み]を捨てることが大した犠牲だなどとは言えない」と。



「あなたがたは第五十年目を聖別し、國中のすべての住民に解放を宣言する。これはあなたがたのヨベルの年である。あなたがたはそれぞれ自分の所有地に帰り、それぞれ自分の家族のもとに帰らなければならない。」

(レビ記25章10節)

イスラエルの暦で五十年目の年は、「ヨベルの年」として知られていました。農作地は、休ませなければなりませんでした。土地は、元の所有者に戻されました。奴隷は、自由にされました。それは自由、恵み、贖い、安息の時だったのです。

土地を買うときには、ヨベルの年まであとどのくらいかを考慮しなければなりませんでした。例えば、土地の場合、次のヨベルの年が来るまでに、あと四十五年あるということになれば、価値は増大したわけです。しかし、あと一年だけということになれば、購入する価値はほとんどありません。買っても、収穫は一回だけだからです。

主のご再臨は、信じる者にとつては、ある意味でヨベルの年ということが出来ます。御父の住まいで、永遠の休息に入るからです。死ぬ運命という足かせから解放されたれ、栄光のからだをいただきます。そして、管理者として託されたすべての物質的なものは、本来の所有者なる方の手に戻されます。

私たちは、自分の物質的財産の評価をするにあたって、以上のことを考慮に入れなければなりません。価値にして何千ドルもの不動産、投資、銀行預金、私たちにはあるかもしれませんが、しかし、もし、主が今日いらつしやれば、その財産の価値は私たちにとつてゼロとなります。主の来臨が近づけば近づくほど、その実態的価値は下落します。このことが意味するのは、ほかでもありません、今のうちに、それをキリストのために、

また、困っている人々を助けるために活用すべきであるということです。

ラッパが鳴り響いてからヨベルの年が始まったように、主の来臨も、「終わりのラッパ」が鳴り響いて告知されるのです。

「このすべては、私たちに対する素晴らしい教訓である。私たちの心が、主の再臨を変わることなく待ち望んでいるなら、地上のものには囚われないはずである。天から御子が来られるのを待ちながら、現在のこの世と密接な関係に留まるというのは、道徳的見地からもあり得ない。：キリストの現われを常日頃待ちわびている人は、主が来られたときに裁かれ、粉碎されるべきものから離れなければならない。：どうか、この尊くも聖い真理が私たちの心に作用し、あらゆる行動にその影響が表れるものであるように」(C・H・マッキントッシュ)。

「私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きま
す。」

(ルカの福音書9章57節)

キリストの主権、主に完全にゆだねること、全面的な明け渡
しについて語り、歌うことが、あまりにも口先だけになっては
いないだろうかと思うことがときどきあります。「すべてにお
いて主でないなら、主とは名ばかりである」(If He is not Lord
of all, He's not Lord at all.)という、陳腐な決まり文句を繰
り返し、「みなさびげまつり／わがものはなし」(All to Jesus I
surrender, all to Him I freely give.)と歌います。まるで、毎週
日曜日、教会に足を運びさえすれば、完全に明け渡しができる
いるかのようにです。

不真面目だというわけではありません。明け渡しの中身のすべ
てがわかっていないということなのです。私たちがキリストの
主権を認めるといふことは、行く手に貧困、拒絶、苦難、そし
て、たとえ死が待ち構えていても、主に喜んでついていく、と
いうことなのです。

「血を見るだけで、気を失う人がいる。ある日のこと、イエス
に心酔する青年が、この上なく素晴らしい志を心に抱いてイエ
スのもとにやってきた。彼は言った。『主よ。私はあなたの行か
れるところ、どこにでもついていきます。』これ以上に素晴らし
い決心があるだろうか。しかし、イエスは、心を動かされたわ
けではなかった。誓ったことが何を意味するのか、そのすべて
がわかっているか、見抜いておられたのである。そこで、主
は言われた。狐には巣があっても、主には住む場所すらないた
め、夕食にもありつけず、山腹で眠らなければならぬかもし
れない、と。主が彼に、いわば、ほんの少し血がついた十字架

を示しただけで、あれほど熱心であった彼は、気を失い死んだ
ようになった。彼は幸いな憧れを持ったものの、その代価は想
像以上だったのである。このようなことは決して少なくはない。
私たちの中には、戦いに身を投じていない人がいる。それは、
キリストの召命に魅力がないからではなく、たとえ僅かでも、
血を流すのが怖いからである。そこで、『銃がもつとまともなも
のであれば、兵士になつてもよかったです』と弱音を吐く
のである(チャップル)。

「どこまでもついていきます」と言ったルカ九章の若者の場合
はそうでなかったにしても、ジム・エリオットが日記に次のよ
うに書いたことに、イエスは感動されたに違いないと私は思い
ます。

「もし、私がいちの血を流すまいとするなら——わが主の模
範に反して、犠牲の血を流すことを差し控えるなら——、私が
なそうとすることに對し、神の御顔が火打石のように硬いのを
感じなければならぬ。御父よ。みこころとあらば、わがいの
ち、いや、わが血までも取りたまえ。そして、あなたの炎でそ
のすべてを包み、焼き尽くしたまえ。そうすることを避けよう
と、われは願わず。避けるかどうかは、われの決めるところに
あらず。主よ。受け取りたまえ、すべてをば。わがいのちを世
のための捧げ物として注ぎ出したまえ。あなたの祭壇の前で流
してこそ、血は価値があるなれば」。

このようなことばを読み、ジムが事実エクアドルで殉教者と
して、血を流したことを想起するなら、自分は、全面的な明け
渡しについては何もわかってはいなかったと思う人がいてもお
かしくありません。

「ただし、恵みには違反のばあいとは違う点があります。もしひとりの違反によって多くの人が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。」

(ローマ人への手紙5章15節)

ローマ人への手紙五章一二〜二二節で、パウロは人類を代表する二人であるアダムとキリストを対比しています。アダムは、最初の被造物の代表です。キリストは、新しく造られたものの代表です。アダムは生来的なもの、キリストは霊的なものを表しています。パウロは、三度に渡って、「なおさらのこと」ということばを使い、アダムの罪が招いた損失を満たして余りある祝福が、キリストの御わざから流れ出たことを強調しています。つまり、「キリストにあつて、アダムの子らは、父(アダム)が失つたよりも多くの祝福を享受している」と言っているのです。アダムが仮に罪を犯さなかつたとしても、信仰者はキリストにあつて、そのアダムよりはるかにまさつた立場にいるのです。

仮に、アダムが罪を犯さなかつた、つまり、禁じられた果実を食べることなく、アダムと妻は神に従うことを選んだ、と少しだけ想像してみましよう。二人の生涯は、どのような結果になつたでしょうか。私たちが知り得るところからすれば、エデンの園で果てしなく生きたことでしょう。彼らに与えられた報酬とは、地上での長寿であつたに違いありません。そして、子孫についても同様であつたことでしょう。

罪を犯さないでいる限り、彼らもまたエデンで果てしなく生き続けたことでしょう。彼らが死ぬこともなかつたでしょう。

しかし、そのような純真無垢の状態にありながら、天国へ行くという見込みを持つことは全くなかつたはずで、聖霊が内

住されるとか、聖霊の証印を受けるといふ約束もなかつたことでしょう。神の相続者となることもなく、イエス・キリストと共同の相続人になることも決してなかつたことでしょう。神の御子に似せられるという望みもなかつたことでしょう。そして、いつなどき罪を犯し、エデンで享受してきた地上の祝福を剥奪まだちされるかわからないという、恐ろしい可能性と常に同居し続けたことでしょう。

それに対比して、キリストがその贖いの御わざによつて勝ち取つてくださった、無限にまさる立場を考えてみましょう。私たちはキリストにあつて、天にあるすべての霊的祝福に恵まれています。私たちは、最愛の御子のうちに受け入れられ、キリストにあつて完全なものとされ、贖われ、和解を受け、赦免され、義とされ、聖められ、栄光を受け、キリストのからだの一部とされました。聖霊が私たちの内側に住まれ、聖霊の証印を押されましたが、聖霊は、私たちが受け継ぐ資産の保証(※直訳「手付金」)なのです。私たちは、キリストにあつて、永遠に安全です。私たちは、神の子ども、神の息子、神の相続人、イエス・キリストとの共同相続人です。私たちは、神の最愛の御子と同じほど神に近いもの、神にとつて愛しいものとされました。もちろん、まだまだ多くのことをつけ加えることができます。しかし、罪を犯さなかつたアダムの立場にいるよりも、主イエス・キリストにあるクリスマスチャンが、どれほどまさつているかを示すにはこれだけでも十分です。

「私は盗まなかつた物をもとに返した。」

(詩篇69篇4節英訳)

詩篇六九篇で語っておられるのは、主イエスです。四節で、主は、贖いの輝かしい御わざによって、人間の罪がもたらした損失の埋め合わせを神の前に成し遂げた、と言っておられます。主がご自身を罪過のいけにえとみなしておられることは、間違いないありません。

ユダヤ人が他のユダヤ人から盗みを働いた場合、罪過のいけにえの律法によれば、盗んだものにその五分の一相当を加えなければならぬことになっていました。

さて、神は、人間の罪により、盗みの被害をお受けになりました。奉仕、礼拝、従順、そして、栄光が盗まれたのです。奉仕が盗まれたというのは、人間が神に背を向けて、自己と罪、そして、サタンに仕えるものとなったからです。礼拝が盗まれたというのは、人間が彫り刻んで作った偶像にひざまずくようになったからです。従順が盗まれたというのは、人が神の権威を拒絶したからです。栄光が盗まれたというのは、神にふさわしい榮譽を神に帰さなくなりました。

主イエスは、ご自分が盗まなかつたものを返すために来られた

主は神たる盛装を打ち捨て

土くれの衣で、神たるご自身をおおわれ

その姿で奇しき愛を示された

ご自分が盗んではいけないものを返すために

主は、人間の罪によって盗まれたものを返されただけではなく、それ以上のものをつけ加えられました。なぜなら、アダムの

の罪によって失われたものより多くのものが、完了したキリストの御わざを通して、神に捧げられたからです。「罪によって造物を失われた神は、恵みによって子どもたちを獲得された」のです。神は、たとえアダムとその子孫が、永遠まで墮落しなかつた場合よりはるかにまさる栄光を、救い主の御わざによってお受けになったと言つてよいでしょう。

ことによると、「なぜ、そもそも神は、罪が入ることを許されたのか」と言う質問に対する答が、ここにあるのかもしれない。道徳的判断が自由にできない人間を造ろうと思えば、神にはそうできたことでしょう。しかし、神は、あえて自らの意志で神を愛し、礼拝する力を持つものとして人間をお造りになったのです。もちろん、それは、人間が神に逆らい、神を否み、神に背を向ける可能性を持つことを意味していました。事実、人間は神に逆らい、罪の大惨事をもたらしました。しかし、神は、被造物の罪によって敗北されることはありませんでした。主イエスが、その死と葬り、そして、復活と昇天により、罪と地獄とサタンに勝利されたからです。主の御わざを通して、神は、さらに大きな栄光をお受けになりました。そして、贖われた人間が受ける祝福は、もし、この世に罪がまったく入らなかつた場合にまさる豊かな祝福となつたのです。

「この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」

(ヨハネの福音書1章10・12節)

《この方は世に來られた》いのちと栄光の主が、このような小さい惑星にわざわざ來てくださったとは、信じられないほどの恵みです。「この方は世に來られた」と、イエス以外の人について言ったとしてもニュースにはなりません。人間は、自分がこの世に生まれるように計画することはできないからです。しかし、イエスにとつて、それは意図的な選択であり、素晴らしいあわれみの行動だったのです。

《世はこの方によって造られた》驚くのは、それだけではありません。世に來られたこの方は、同時に世を造られた方でもあります。宇宙に満ち満ちておられる方が、ご自分をみどり子、青年、大人の男性というからだの中に押し込め、その御からだには、満ち満ちた神性が宿っていたのです。

《世はこの方を知らなかった》こうなったのは、言い訳のできない無知によるものです。被造物であるなら、自分の創造者を認めるべきでした。罪人は、罪なき方の出現に衝撃を受けて当然でした。そのことばとみわざを手掛かりに、この方が人間以上の存在であることを知るべきでした。

《この方はご自分のくにに來られた》世のすべてのものは、この方のものでした。創造主であられるゆえに、すべてのものに対して、誰にも奪う事のできない権利を持つておられました。

誰かの所有地に勝手に踏み込んで來られたわけではないのです。

《ご自分の民は受け入れなかった》侮辱は、ここに極まりました。ユダヤ民族は、この方を拒絶しました。メシヤとしての「信任状」をすべて持つて持ておられたのに、支配されることを望まなかったのです。

《しかし、この方を受け入れた人々》対象を限定しない招待が、公にされました。ユダヤ人だけでなく、異邦人も同様な招きを受けたのです。たった一つの条件は、この方を受け入れることだけでした。

《神の子どもとされる特権をお与えになった》何と身分不相応な荣誉でしょう。反逆した罪人たちが、愛と恵みの奇跡のおかげで神の子にしていただけとは！

《その名を信じた人々には》これ以上に条件を簡単にすることはできません。神の子どもとされる特権は、明確な信仰の行為として、イエス・キリストを主、また、救い主として受け入れるすべての人に与えられるのです。

以上のように、残念な知らせと喜ばしい知らせがあるのです。最初に残念な知らせです。「世はこの方を知らなかった。この方はご自分の国に來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」。次に、喜ばしい知らせです。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」。まだイエスを受け入れておられないなら、今日、主の御名を信じてはいかががでしょう。

「神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」

(創世記2章15節)

反対の考えをする人もいるでしょうが、労働とは呪いではありません。むしろ、祝福なのです。神が、アダムにエデンの園の管理という仕事を与えられたのは、罪が世に入る前だったからです。人間が罪を犯した後も、呪われたのは地であって、労働そのものではありません。土地から生活の糧を得ようとするときに、人は、悲しみや挫折、苦労を経験することになると宣告されたのです(創世記3・17・19)。

一人の賢人が、昔このように言いました。「ありがたきかな、労働。これが神の呪いなら、神の祝福とはいかばかりぞ!」と。しかし、労働に神の呪いはありません。それは、人間に必須なものの一部なのです。何かを作り出さないとはいられないという、私たちの創造性と自分という存在の大切さを覚えるために必要なものなのです。罪を犯す危険が高まるのは、むしろ、怠惰に屈するときです。そして、活動に溢れた生活から引退してしまうときに、精神的な変調を来すことが少なくありません。「働きなさい」と、神が命じておられることを忘れてはなりません(「六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ」[出エジプト20・9])。人はそれを見落として、七日目に休むように命じられている点を強調しがちです。

新約聖書は、働かない人を「締まりのない歩みをしている人」とか、「気ままな者」と呼んで、もし、働こうとしないなら、その人が空腹を抱えていても誰も助けるべきではない、と命じています(Ⅱテサロニケ3・6・10)。

主イエスは、私たちにとって、勤勉な労働者のこの上ない模範です。「何という労苦の日々を、何という祈りの労苦の夜を、主は過ごされたことか。三年の公生涯で、主はすっかり老け込まれた。『あなたはまだ五十にもなっていないのに』と人々は言い、主の年齢に見当をつけた。五十歳? まだ、三十歳であられたのだ。それは、隠しようのない事実だった」(イアン・マクファーソン)。

仕事には、自分に合わない不愉快な点があるということで、働くことにアレルギーを募らせていく人がいます。そのような人は、完全な、理想的仕事はどこにもないと悟らなければいけません。どの職業にも、何らかの難点があるものです。しかし、クリスチャンは、神の栄光となるように「どうにかこなす」のではなく、「悠々と」仕事をするのできるのです。

信仰者は、自分自身の必要を満たすためだけではなく、困窮している人々を助けるためにも働きます(エペソ4・28)。こうすれば、新しく、利己的でない動機が仕事に加わるようになります。

永遠の世界に入った後ですら、私たちは働くのです。「そのしもべたちは神に仕える」(黙示録22・3)とあるからです。

そのときが到来するまでは、スボルジョンの次の助言に従うべきでしょう。――「一心不乱に働こう。祈って生気をとりもどそう (Kill yourselves with work, and then pray yourselves alive again.)」。

「それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

(コリント人への手紙第二6章17-18節)

もし、次第に自由主義的に、また、近代主義的考えに変わっていくある教会に自分が身を置いていくことに気づいた場合、クリスチャンはどうすべきでしょうか。今の教会を創設したのは、聖書の無謬性(※誤りがないこと)、および、その他すべての信仰に関わる基本的教理を信じていた人々でした。その教会には伝道に燃え、宣教に努力した輝かしい歴史があります。牧師の多くは著名な学者であり、みことばを忠実に伝えた人々でした。しかし、教派が経営する神学校は、新しい神学を教える人々にとって代わられ、今ではそこを卒業して出てくる牧師は(※社会の改良を唱えることを主とする)社会的福音を唱えるようになりました。使うことばは、以前と同じ聖書の用語でも、意味する内容はすっかり変わっています。主要な聖書の教理の土台は弱められ、奇跡は自然現象として片づけられ、聖書に基づく道徳観は冷笑されます。急進的な政治活動や、破壊的な主義主張は率先して擁護し、(※聖書を文字通り解釈する)根本主義者をあざけります。

クリスチャンであるならどうすべきなのでしょう。おそらく、家族は何世代にも渡ってこの教会に関わってきたことでしょう。自分自身でも、長年にわたって、惜しみなく献金をしてきたことでしょう。最も親しい友人も教会にいます。もし、自分が出て行ったら、日曜学校の若者たちはどうなるだろうと心配

になります。自分ではできるだけ長く、教会に留まり、神の声を代弁するべきではないのだろうかと考えます。

その考え方は、もっともらしく思われます。ところが、パンを求めて毎週教会に来て、石以外は何ももらえないという人々の姿を見ると、義なるたましいは苛立つばかりです。自分と教会との関わりは、大事にしたいと思うのですが、消え入りような賛美を聞いていると、崇むべき救い主が嘲られているようにいたたまれません。

どうすべきなのか、もはや疑問の余地はありません。その教会を去るべきです。これは、神のことばの明確な命令です。釣り合わないくびきを取り外せば、あとの結果はすべて神が良きに取り計らってください。日曜学校の生徒たちに対しては、神が責任を負ってください。新しい友人関係を神は与えてください。それどころか、疑わずに従う人のみに許された親密さをもって、神はその人の父となってくださいと約束しておられます。真の意味で分離した場合の祝福は、偉大な神ご自身が共にいてくださる、という栄光ある結果にほかならないのです。

「神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。神は愚かな者を喜ばないからだ。誓ったことは果たせ。」

(伝道者の書5章4節)

窮地に陥ったときに、神に誓願を立てる人の話は、誰もが聞いたことがありでしょう。もし、救ってくだされば、いつまでも神に信頼し、神を愛し、従います、と約束します。ところが、その危機を脱出した途端、誓ったことはすべてきれいに忘れ、それまでと同じ生き方を続けていくのです。

誓いとは、クリスチャン生活にどのような位置を占めるのでしょうか、また、この主題に関して、みことばにはどんな指針があるのでしょうか。

第一に、そもそも誓いを立てる必要はありません。誓いは、命じられてはならず、主の恵みに感謝して、自発的に約束をするというのが普通です。したがって、申命記二三章二二節にこう書かれています。「もし誓願をやめるなら、罪にはならない」。第二に、慌てて誓願をしないように注意しなければなりません。つまり、私たちが果たすことができない、または、後悔するかもしれない誓願です。ソロモンは、こう警告しています。「神の前では、軽々しく、心あせつてことばを出すな。神は天におられ、あなたは地にいるからだ。だから、ことばを少なくせよ」(伝道者の書5・2)。

しかし、もし、いよいよ誓願をするということになれば、心してそれを守らなければなりません。「人がもし、主に誓願をし、あるいは、物断ちをしようと誓いをするなら、そのことばを破ってはならない。すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならない」(民数記30・2)。「あなたの神、主に誓願をするとき、それを遅れずに果たさなければなりません。あ

なたの神、主は、必ずあなたにそれを求め、あなたの罪とされるからである」(申命記23・21)。

誓って守らないよりは、そもそも誓わない方がよいのです。「誓って果たさないよりは、誓わないほうがよい」(伝道者の書5・5)。

誓約を続けるよりは、むしろ、破る方がよいという例外的なケースもあります。回心する前に、まやかしの宗教や秘密結社で誓いを立てた人がいるかもしれません。その誓いを果たすことが、神のことばに反するなら、たとえ、その誓いを破る犠牲を払おうとも聖書に従わなければなりません。その誓約が、ある特定の秘密を暴露してはならないという単純なものならば、その結社との関係を絶つた後であっても、死ぬまで沈黙を守っていれば済むことです。

ことによれば、今日最も多く破られているのは、結婚の誓約ではないでしょうか。神の御前でなされた厳粛な誓いが、まるでどうでもよいことのように扱われています。しかし、神のご裁定に変更はありません。「あなたの神、主は、必ずあなたにそれ(誓願の実行)を求め、あなたの罪とされるからである」(申命記23・21)。

「良き人は孫の代にまで財産を残す。」

(箴言13章22節 英訳)

このみことばを読んで、財産を子孫に残せという意味であるという結論に飛躍してはいけません。神の御霊は、霊的な資産のことを言っておられる、という方がはるかに自然だからです。貧しいながらも神を畏れる両親の手で、育てられた人がいるかもしれません。そのような人は、毎日聖書を読み、家族として一緒に祈り、主を畏れ、主にある訓戒を受けて過ごした、父母との思い出をいつまでも感謝することでしょう。たとえ、両親が亡くなったときに、一銭も残されなかつたとしても…。霊的な遺産こそが最高の遺産なのです。

それどころか、巨額の資産を継いだために、息子や娘が霊的に破滅する場合がないとはいえません。突然手に入った富は、まともな判断力を狂わせてしまう場合が多々あります。それを賢く管理できる人はそれほど多くないものです。財産を相続しても、立派に主に仕え続けていける人は少ないのです。

もう一つの懸念は、遺産を分与するときに、妬みや争いで家族が引き裂かれる場合が少なくないことです。「意志(III)」あるところ道あり」と言いますが、「遺言(III)」あるところ、親族を名乗る者多し」というのも事実です。長年にわたり、仲睦まじく暮らしていた家族が、わずかな宝石類、陶磁器、家具などをめぐつていがみ合うのです。

両親ともクリスチャンであるのに、救われていない自分の子どもや、怪しい宗教に入っている親族、受け取っても感謝をしない子どもたちに財産を残すという場合が少なくありません。それくらいなら、福音を広めるために使う、というもつと良い方法があるのではないのでしょうか。

財産を子どもに残すという務めも、ペールを被つた利己主義に過ぎない場合があります。できる限り長く財産を手放したくないというのが本音ですが、やがていつの日か、死にもぎ取られることがわかつているので、子どもに相続するという伝統に両親はやむなく従うだけなのです。

しかし、弁護士費用で分割や目減りが起こらないようにする遺言状は、未だ考案されてはいません。自分がいなくなつた後、果たして自分の願いがその通り実行されるかどうか、親が確信を持つすべはないのです。

したがって、最善の方法とは、生きている間に、惜しみなく主の働きに捧げることです。ことわざにもこうあるではありませんか。「生きている間に捧げよう。そうすればそれがどこで用いられるかわかるから」。

そして、遺言状を書き上げる最良の方法とは、次のように言うことです。「健全な判断により、私は生きている間、神の御わざのために財産を捧げた。私は子どもたちに、クリスチャンの精神的支柱と、キリストが崇められ、神のことばが尊ばれる家庭という財産を残す。私は子どもたちを、神とその恵みのみことばにゆだねる。その恵みのみことばは、子どもたちを育て、聖なるものとされるすべての人々の中にあつて、御国を継がせることができるからである」(使徒20・32参照)。

「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」

(マタイ福音書5章44節)

ときとして、例話が聖句の最良の注解になる場合があります。

淵田美津雄中佐は、一九四一年十二月七日(現地時間)の真珠湾攻撃を指揮した日本人パイロットでした。彼の送信「トラ、トラ、トラ」は使命が完全に成功したことを示しています。しかし、第二次世界大戦は、そこで終わりませんでした。戦闘が長引くにつれて、戦いの形勢は変わり、ついに、アメリカ合衆国が勝利したのです。

戦争中、日本軍はフィリピンで年老いた宣教師夫妻を処刑しました。米国にいた娘がこの知らせを聞いたとき、彼女は、戦争で捕虜になった日本人を訪ね、福音の良き知らせを紹介しようとして決意しました。

「なぜ、われわれにこんなに親切にしてくださいのですか？」と聞かれたとき、彼女はこう答えるのでした。「両親が殺される前に祈った祈りのためです」。しかし、それ以上は一言も言わなかったのです。

戦争後、淵田美津雄は、憎しみに駆られて、戦争中に行われた残虐行為について、米国を国際法廷で提訴しようと決意しました。証拠を集めるために、彼は戦争中捕虜になった日本人に面接しました。米国で拘束されていた人から話を聞いたときに耳にしたのは、残虐行為ではなく、両親がフィリピンで殺されたというのに、自分たちに親切にしてくれたクリスチャンの女性の話だったため、淵田は悔しく思いました。捕虜たちは、彼女が新約聖書という書物をくれたこと、そして、彼女の両親は処刑される前に、内容はわからないが何かお祈りをしたという

ことでした。これは、必ずしも淵田が聞きたい内容ではありませんでしたが、一応記憶の中に留めておきました。

その話を何度も聞いた後、彼は、外に出かけて新約聖書を買いました。マタイの福音書を読んで、心が惹きつけられました。マルコの福音書を読み通すと、興味が募りはじめました。ルカの福音書の二三章三四節に至ったとき、たましいが光で満ち溢れる思いになりました。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」。そのとき、直接的に、あの年老いた宣教師夫妻が殺される前に祈った祈りがそれであったことを知ったのです。

「もはや淵田は、そのアメリカ女性のこと、日本人の戦争捕虜のことも考えてはいなかった。考えていたのは、自分のこと、すなわち、キリストに対して敵意をむき出しにしているのにもかかわらず、十字架についた救い主の祈りの応えとして神が赦してくださいとうとしている自分のことだった。その瞬間、淵田は、キリストを信じたことによつて得られる赦しと永遠のいのちを求め、それを見出したのであった」

国際法廷への提訴という計画は破棄されました。淵田美津雄は、それからの残りの生涯を、多くの国々で無尽蔵のキリストの富を宣べ伝えることに費やしたのです。

「あなたの所有がみな増し加わるとき、…あなたの神、主を忘れることがないように気をつけなさい。」

(申命記8章11節、13節 英訳)

一般的に、信仰者は物質的な繁栄にはもろく、その反対に、逆境ではたくましさを発揮するものです。(死を前にした)別離の歌の中で、イスラエルはやがてその繁栄のゆえに靈的に破滅すると、モーセは予告しました。「エシユルンは肥え太つたと、足でつけた。あなたはむさぼり食って、肥え太つた。自分を造つた神を捨て、自分の救いの岩を軽んじた」(申命記32・15)と。

この預言は、エレミヤの時代に成就し、主は嘆き悲しんでこう仰せられました。「わたしが彼らを満ち足らせたときも、彼らは姦通をし、遊女の家で身を傷つけた」(エレミヤ5・7)と。

ホセア書一三章六節にも、こう書かれています。「しかし、彼らは牧草を食べて、食べ飽きたとき、彼らの心は高ぶり、わたしを忘れた」。

捕囚から帰還した後、レビ人たちは、主がなしてくださったすべてのことに、イスラエルは応えなかったと告白しています。

「こうして、彼らは城壁のある町々と、肥えた土地を攻め取り、あらゆる良い物のみちた家、掘り井戸、ぶどう畑、オリブ畑、および果樹をたくさん手に入れました。それで、彼らは食べて、満腹し、肥え太って、あなたの大きいなる恵みを楽しみました。しかし、彼らは反抗的で、あなたに反逆し、あなたの律法をうしろに投げ捨て、あなたに立ち返らせようとして彼らを戒めたあなたの預言者たちを殺し、ひどい侮辱を加えました」(ネヘミヤ9・25・26)。

物質的に豊かであるというのは、今の自分たちのあり方や行動を、主が是認してくださっている紛れもない証拠である、と考える傾向が私たちにあります。事業の収益が急上昇すれば、「主は、確かに私を祝福してくださっている」と言います。おそらくは、このような収益によって自分が試されていると思つた方が正確でしょう。私たちがそれをどのように用いるのか、主は見ようとしておられるのです。自分の楽しみに使うのでしょうか。それとも、忠実な管理者として、地の最も遠い所にまでも良き知らせを伝えるために使うのでしょうか。財産を築こうと貯め込むのでしょうか。それとも、キリストのために投資するのでしょうか。

F・B・マイヤーは、こう言いました。「人格を試すテストとして太陽と嵐、成功と試練のどちらが厳しいか、人は論議をするが、誰よりも鋭い観察眼を持つ者ならおそらくこう言うに違いない。私たちの本当の姿を如実に示すものは、繁栄をおいてほかにない。それは、あらゆるテストの中で最も厳しいものだから」と。

ヨセフもその意見に同意したに違いありません。ヨセフは、こう言っています。「神が私の苦しみの地で私を実り多い者とされた」(創世記41・52)。どちらの状況でも幸いな身の処し方をしたヨセフでしたが、多くの益を得たのは、繁栄よりも、むしろ、逆境だったのです。

「イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを行つた。」

(ルカの福音書2章44節)

イエスが十二歳のとき、両親とイエスは、ナザレからエルサレムへ行き、過越の祭りを祝いました。他の大勢の巡礼者の一行と旅をしたことは、間違いありません。同じ年齢の少年たちが祭りの行事の際、仲良くなるのは予期されたことでした。したがって、ナザレへ帰るときになつても、イエスは当然、他の若者たちと一緒に集団のどこかにいるだろう、とヨセフもマリヤも思つたのです。ところが、イエスはいませんでした。エルサレムに残つておられたのです。イエスがいないと気づいたときには、すでに丸一日、旅を終えた後でした。それからやむなくエルサレムへ引き返し、イエスを発見したのは三日後でした。

この出来事の中には、私たちのすべてに対する教訓があります。イエスがおられないにもかかわらず、おられるはずだと思ひ込んでいる場合があるということです。実際は、たましいと救い主との間に、罪が割り込んでいられるにもかかわらず、主との交わりのうちに歩んでいると思ひ込んでいられるかもしれません。霊的な衰えは、なかなか気づきにくいものです。自分が冷ややかになつていても自覚がありません。以前とまったく同じであると考えているのです。

しかし、他の人には、違いがよくわかります。私たちが最初の愛から離れ、流されてしまつていふこと、また、この世の関心の方が、霊的なものより大事になつてしまつたことは、私たちの話を聞いている人にはすぐわかるのです。私たちが、「エジプト(世の代名詞)のニラ、タマネギ、ニンニクを食べていた」ことが匂いからわかります。以前は、愛に溢れ親切であつたの

に、批判的になつたことに気づいています。シオンのことばを使わずに、通俗的な言い方を頻繁にすることに気づいています。他の人々が気づいても気づかなくても、私たちがらいつの間にか、歌が消えています。自分自身が不幸で惨めであり、他人をも惨めな気持ちにしがちです。何をやつてもうまく行く気がしません。ポケットからお金が漏れていきます。救い主のことを証しようとしても、相手が感銘を受けることはほとんどありません。相手も、自分と私たちとの間にあまり大きな違いはないと思つています。

多くの場合、ある種の危機が起こつてから、イエスが私たちと共におられないことが明白になります。御霊の油注ぎを受けたいことばの教えによつて、神が語りかけられる声を聞くという場合もあるでしょう。あるいは、友人が私たちの肩を抱いて、「あなたの今の霊的状态はどうなつていますか？」と直言してくれる場合もあるでしょう。あるいは、病氣、愛する人の死、または、何かの悲劇的な出来事がきっかけで、我に返るかもしれません。

それが起きたときは、私たちも、ヨセフとマリヤがした通りのことをしなければなりません。最後に、主を見た場所に帰るのです。何かの罪によつて、主との交わりが絶たれた地点にまで戻らなければなりません。罪を告白し、捨てることによつて、私たちは赦しを見出し、イエスと共にもう一度旅を開始することができるようになります。

「モーセは、さきに主と語ったゆえに、顔の皮が光を放っているのを知らなかった。」

(出エジプト記34章29節)

モーセが十戒の書かれた石板を持ってシナイ山から降りてきたとき、注目すべき特徴が二つありました。まず、第一に、モーセの顔が輝いていたことです。モーセは、それまで主のご臨在の中におり、主は、「シェキナー」という光り輝く、栄光の雲の中に yourself を現されたのです。モーセの顔に輝く光は、言わば、借り物の輝きだったのです。神と語った後、律法の授与者として、その栄光の輝きと光彩の一部が残りました。それは、変貌の経験でした。

第二の注目すべき特徴は、自分の顔が光を放っていることに、モーセは気がついていなかったという点です。主との交わりの結果もたらされた比類のない「化粧」を、本人はまったく自覚していませんでした。F・B・マイヤーは、モーセがそのことを知らなかったという事実こそが、変貌の最たる栄光であると述べています。

モーセの経験は、私たちの経験ともなり得るということができます。主の御前で過ごすとき、それが自然に表れます。実際に、それが表情に表れる場合もあるかもしれません。霊的なものと身体的なものとの間には、密接な関連があるからです。しかし、身体的な点を、私はあまり重要視しません。カルト信者でも、温和な顔の人がよくいるからです。重要なのは、神と交わった人は、精神面でも霊的な面においても変貌していくことです。これこそ、パウロがコリント人への手紙第二の三章一八節で教えていることそのものです。「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から

栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」。

しかし、その変貌の最も素晴らしい点は、私たち自身がそれを意識していないことです。他の人にはわかりません。私たちがイエスと共にいたということに、気がつきません。しかし、その変化は、私たちの眼からは隠されているのです。

私たちが、自分の顔が輝いているかどうかからしないこと自体は幸いなこととはいえ、それはなぜなのでしょう。その理由は、こうです。主に近づけば近づくほど、私たちは自分の罪深さ、価値の無さ、惨めさにますます気づくようになり、主のご臨在の栄光の中におかれると、私たちは自己嫌悪と深い悔い改めに導かれるからです。

私たちが、もし、自分が輝いていると意識するならば、やがて高慢になり、その輝きもたちどころに鼻につくものになるでしょう。高慢とは、唾棄すべきものであるからです。

そういうわけですから、主と共に山頂で過ごした人が、拝借した輝きを持ち続けているながらも、自分の顔が輝いているとは少しもわかっていないということこそ、恵まれた状況なのです。

「主は生きておられる。この事のためにあなたが罰を受けること
はないでしょう。」

(サムエル記第一28章10節)

イスラエルを治め始めて間もない頃、サウルは、霊媒や口寄せはすべて追放せよという命令を出しました。ところが、その後、私的にも公的にも、サウルをとりまく状況は悪化の一途をたどりました。サムエルの死後、ペリシテの軍勢はサウルに戦いを挑もうと、ギルボアを埋め尽くしました。主から何のみことばも得られなかったサウルは、エンドルにいた霊媒師に相談します。怖れた彼女は、「そもそも国から霊媒師をすべて追い払ったのはあなたではありませんか」と言いました。するとサウルは、すかさずこう言つて彼女を安心させます。「主は生きておられる。この事のためにあなたが罰を受けることはないでしょう」(サムエル20・10)。

教訓は、明らかです。人間は、都合の良い限り、主に従うという傾向がありますが、一旦、都合が悪くなると、自分の望むことをするための言い訳をいつも思いつくことができるのです。

「人間は」と、私は言いましたか？むしろ、「私たちは」と、言うべきであつたかもしれません。従いたくないことがあると、私たちには、聖書を避け、ねじ曲げ、うまく言い訳を考える傾向が誰にもあります。

例えば、教会における女性の役割については、いくつかの明白な教えがあります。ところが、どうも現代のフェミニストの運動とはそりが合いません。

そこで、私たちはどうするのでしょうか。そのような命令というものは、当時の文化に基づいたものであるから、現代の私た

ちには適用できないというのです。言うまでもなく、そのような原則を一旦取り入れたら最後、聖書に書いてあることはほとんどどんなことでも除去できることになります。

私たちは、ときどき、主イエスが弟子の条件としてお話しになった痛烈なことばを読みます。その条件では、払う犠牲が大きすぎると思うと、「そうせよではなく、そのような気持ちでいなさい、という意味でイエスはおつしやつたのだ」と、言います。そうしようというつもりがまったくないにもかかわらず、自分がそのような気持ちでいる、と言うのであれば、私たちは自分を欺いているのです。

違反をした人は、みことばの厳しい要求に従つて懲戒されるべきである、という毅然とした態度を私たちがとることもあるでしょう。しかし、違反者が親族や友人であることがわかると、みことばの要求を緩やかに解釈しようとか、いつそのこと大目に見ようと、主張するかもしれません。

さらにもう一つ、私たちが用いる手法は、聖書の命令を「重要」なものとして「重要でない」ものに分類することです。「重要でない」側に分類されたものは、無視してもよいもの―少なくとも私たちが自分にそう言い聞かせるものなのです。

以上のごまかしの論理のどれをとつても、私たちがしているのは、聖書を捻じ曲げ、自分に破壊をもたらすことにほかなりません。神のみことばが、私たちの都合に合おうが合おうまいが、従うことを神は望んでおられます。それが、祝福にいたる道なのです。

「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

(ローマ人への手紙5章5節)

ときとして、クリスチャンが用いる語彙には、通常使われる場合とは異なった意味があります。「希望」も、そのようなことばの一つです。

この世に関する限り、希望とは、多くの場合、目に見えないものを期待しながらも、実現するかどうかは確実ではないことを意味します。財政上、大きなトラブルを抱え込んだ人ならこう言うかもしれません。「やがては、すべてがうまくいくと希望します」と。しかし、そうなるという確証はまったくありません。彼の希望とは、希望的観測にすぎないかもしれません。クリスチャンの希望も、目に見えないものを期待するもので、パウロはそれをローマ人への手紙八章二四節で気づかせてくれています。「目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう」。希望とは、すべて未来の世界に関わることなのです。

しかし、クリスチャンの希望が他と異なるのは、神のみことばの約束を土台にしていること、また、それゆえに絶対に確実であるという点です。「この望みは、私たちのたましいのため、安全で確かな錨の役を果たしているのです」(ヘブル6・19)。希望とは、「神のみことばをつかむ信仰のことであり、神が約束されたこと、また、予告されたことを確信して現在を生きていることをいう」(ウッドリング)。

「私が『希望』ということばを、『確実なこと』という意味で使っていることに注意していただきたい。聖書における『希望』

とは、何があろうとも、必ず起きる将来の出来事のことを言う。

『希望』とは、私たちの気分を高揚させて、むやみに前進し、やがては避けることのできない宿命にぶつからせるというようなものではない。『希望』は、クリスチャン生活すべての土台である。それは、究極的な現実のことである」(ジョン・ホワイト)。

信仰者の希望は、神の約束に基づいているため、決して恥や失望に至ることはありません(ローマ5・5)。「神の約束を伴わない希望は、空虚で役に立たないばかりか、ときとして僭越である。しかし、神の約束に基づいているものであるなら、主のご人格を土台としているため、失望に至ることはあり得ない」(ウッドリング)。

クリスチャンの希望は、素晴らしい望みであると書かれています。主イエスと父なる神は、私たちを愛して、「恵みによって永遠の慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方」なのです(IIテサロニケ2・16)。

それは、祝福された望みとも言われていて、特に、キリストのご再臨と関係しています。「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望む」(テトス2・13)。

さらに、それは生ける望みとも呼ばれています。「神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました」(Iペテロ1・3)。

クリスチャンは、その望みのおかげで、際限がないように思われる遅延にも、患難にも、迫害にも、そして、殉教にすらも耐えることができるのです。そのような経験は、やがて来ようとしている栄光に比べるなら、針で刺されたくらい痛みに過ぎないことが分かっているからです。

「望みのあるうちに、自分の子を懲らしめよ。しかし、殺す気を起こしてはならぬ。」

(箴言19章18節)

私たちは、自由放任の社会に生きています。特に、子どもを訓練していくことにおいては、人々は神のことばよりも、心理学者や社会学者の助言に耳に傾けます。自由で思い切ったしつけをしてきた両親のもとで育ったのに、多くの大人は、自分の子どもには自由と自己表現を認めてやろうと心に決めていません。その結果は、どうだったでしょう。

そのような子どもたちは、心の奥深くで不安感を持ちながら成長していきます。彼らは、社会に適応できません。問題やめごとに対処するのが苦手で、麻薬やアルコールに解放を求めます。たった数年間でもしつけをしていたなら、その後の人生は、はるかに苦勞が少なかったことでしょう。

案の定、彼らは乱れた生活を送ります。その身なりや暮らしている部屋、私的な習慣を見れば、ぞんざいで雑然とした考え方が背後にあることが明らかです。彼らは月並みな生活、または、それ以下で満足しています。スポーツ、音楽、芸術、ビジネス、その他の領域で秀でたことをするための意欲が欠如しています。

そのような子どもたちは、やがて両親を疎んじるようになります。親とすれば、罰を与えないことによつて、子どもたちから永遠の愛を勝ち得ることができらるだろうと思っていたのですが、その代償は、子どもたちからの憎しみだったのです。

親の権威に対する反抗は、人生の他の領域にまで広がってきます。学校、会社、役所にまでも。両親が、子どもたちのわがままを、人生の早い時期に抑えていたなら、人生の他の場面

においても、従うことがそれほど苦にはならなかったことでしょう。

反抗は、聖書が示す道徳的な基準にも及びます。若き反逆者たちは、純潔に関する神のご命令を嘲り、無謀でだらしない生きかたに身をゆだねます。良いものには、ことごとくひどい嫌悪感をあらわにしなから、その一方、自然に反するもの、いかがわしいもの、おぞましいものには、愛着を示すのです。

最後に触れたいのは、親が訓練によつて子どもの意志を従わせないなら、子どもの救いも困難になるといふ点です。回心とは、神のご支配に反抗する意志が打ち砕かれることも含まれているのです。スザンナ・ウエスレーが、次のように言ったのはそれが理由です。「子どもの中にある我意を抑制することに心を砕く親は、たましいを生き返らせて救う神のわざに協力している親である。子どもを甘やかす親は、悪魔のわざをしているのであり、信仰を実際の役には立たないものにし、救いを到達不可能なものにし、全力を挙げてわが子の中からだやたましいを永遠のさばきにふさわしいものにしてに等しい」。

「また、小さい者にも、大きい者にも、富んでいる者にも、貧しい者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々にその右の手かその額かに、刻印を受けさせた。また、その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持つている者以外は、だれも、買うことも、売ることできないようにした。」

(ヨハネの黙示録13章16・17節)

獣の刻印！ 患難時代のさなか、一人の強大で邪悪な支配者が立ち上がり、額か右手のどちらかに刻印を受けよ、とすべての人に命じます。拒む人は、獣の怒りを買います。それに屈する者は、神の怒りの対象となります。拒む人は、キリストと共に栄光の千年王国を支配するようになります。屈する者は、聖なる御使いの前で、そして、《小羊》の前で、火と硫黄によって苛まれることとなります。

これを読んでも、私たちは、まったく超然としていられるかもしれません。それが未来の出来事であると知っており、その間に、教会は天のふるさとへ携挙されるだろうと信じているからです。しかし、獣の刻印というのは、現在の私たちの問題でもあるとも言えるのです。人生の中には、ときとして、神への忠誠か、それとも、神に反対する体制に屈するか、選択を迫られる場合が何度もあるからです。

例えば、職を得たい時に、神が定めた原則に明らかに矛盾する条件を飲み込むように、と注文される場合があります。そのようなとき、正当化するのとは簡単です。「働かなければ、食料品が買えない。食料が買えなければ、生きていかれない。しかし、とにかく生きていかなければならないのは当然ではないか」と。このような言い訳をして、自分をごまかした私たちは、要求に同意し、事実上獣の刻印を受けているのです。

食べ物が入らなくなるような危機、あるいは、これから生存していくのが危ういという状況に直面すると、私たちはパニックに襲われ、その恐れを回避するためならどんなものでも犠牲にして構わないと思う誘惑にかられます。患難時代のさなか、偶像礼拝を正当化するために使われる議論は、今日、神の真理と自分の生活のどちらを選ぶかという際に用いるのと、同じなのです。

そもそも、何があっても生きなければならないという考えが、正しくありません。私たちがすべきことは、神に従い、死に至るまでいのちを惜しまないことなのです。

F・W・グラントは、こう書いています。「私たちが真理を売って手にしたコインの裏には、たとえ、うつすらとはあっても例外なく、反キリストの肖像が刻印されている」と。したがって、問題は、「もし、患難時代を生きることになれば、私は獣の刻印を拒むだろうか」ではなく、むしろ、「真理を売ることを、今、私は拒んでいるか」ということなのです。

「十人いやされたのではないか。九人はどこに在るのか。」

(ルカの福音書17勝17節)

主イエスは、十人のツアラアトを病む人々を癒されましたが、感謝するために戻ってきたのは、たった一人で、しかもそれは、人々から蔑さげすまれていたサマリヤ人でした。

人生において遭遇する貴重な経験の一つは、忘恩です。というの、それを経験したときに、ほんの少しとはいえ、神がお心を痛めるといふことがどういふことかわかるからです。惜しみなく与えたのに、感謝として返ってくるものが少ないとき、ご自分の愛する御子さえ、恩知らずの世に与えてくださった神の素晴らしさを一層深く知ることができます。他の人のために、奴隷の立場を取ってください方との交わりが始まるのです。

感謝をしないとというのは、墮落した人類の醜い痕跡の一つです。パウロは、異教の世界が、神を知っていないながら、神を神としてあがめず、感謝もしていないことを指摘しています(ローマ1・21)。

ブラジルに行った一人の宣教師は、「ありがとう」にあたることばがまったくない種族を二つ発見しました。親切な行爲を受けても、「それを前から欲しいと思っていた」とか、「これはきつと私の役に立つ」と言うのです。もう一人の宣教師は、北アメリカで働いていたのですが、自分がどれだけ仕えても、人々は決して感謝の気持ちを表すことがありませんでした。そうすることで、宣教師が神への功德を積むことができると思っていたのです。彼らの感じ方からすれば、感謝をするのは宣教師の方でした。なぜなら、彼らが親切を受けてあげたおかげで、宣教師は恩恵を受けられるというわけです。

忘恩は、社会の隅々に浸透しています。「ジョブ・センター」というラジオ番組では、二千五百人の人に仕事を見つけてあげるのに成功しました。司会者が、後に報告したところによると、時間を取って感謝を伝えてきたのはたったの十人といひます。

献身的な学校の教師が、全力を注いで五十クラスの生徒たちを教えました。彼女が八十歳を迎えたとき、教え子の一人から手紙が届き、そこには、先生のおかげでどれほど助かったことかと書かれていました。彼女は五十年間教職についていたのですが、感謝の手紙はその一通だけでした。

忘恩を経験するのは良いことだ、それは、主が常々経験しておられることを、うつすらともわかるから、と書きました。それが、有益な経験であるもう一つの理由は、私たち自身が感謝することの重要性を心に刻むためです。神への願いごとが感謝を上回る場合が多すぎるのです。私たちは、神の祝福をあまりに当然のように考えています。そればかりか、もてなしを受け、いろいろ教えてもらい、車に乗せてもらい、食料を届けってもらい、その他数え切れないほどの親切な行爲を受けながら、感謝の思いを伝えないうままにいることが、何と多いことでしょうか。このような好意を期待する資格が、あたかも自分にあるかのように錯覚しているのです。

ツアラアトに冒された十人の出来事を学ぶことで、感謝すべき十分な理由がある人は大勢いても、礼を言う人はほとんどいないものだ、ということをお忘れないうちにしたいものです。私たちはぜひとも、その少数の仲間入りをすべきではないでしょう。

「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。」

(ローマ人への手紙5章6節)

キリストは義人を召すために来られたのでもなく、善良な人々のために死なれたのでもありませんでした。十字架に進んで行かれたのは、品行方正で、尊敬に値し、洗練された人々のためではありませんでした。不敬虔な者たちのために、死んでくださったのです。

もちろん、神の観点からすれば、人類のすべてが不敬虔です。私たちはみな罪の中に生まれ、悪の中で形作られました。飼い主から離れた羊のように迷い、自分勝手な道に向かいました。清いことこの上なき神の御目から見れば、私たちは墮落し、汚れ、反抗的な存在です。正しいことを行おうとする最善の努力も、汚れたぼろきれそのものです。

問題は、大半の人々が、自分は神をも恐れぬ不敬虔なものであるとは認めようとしないところにあります。犯罪者たちと比べて、自分は天国に行くのに十分ふさわしいと想像しています。それはまるで、ボランティア活動や慈善目的の寄付を誇りにしていた一人の婦人のようです。近所に住むクリスチャンが彼女に証しをすると、「自分は救われる必要を感じないわ」と答え、「自分は善行を積んできたのでそれで十分よ」というのです。彼女は、自分が教会員であること、そして、代々「クリスチャン」の家系の出身であることを彼に説明しました。すると、そのクリスチャンは、紙を二枚取り出し、そこに大文字で、「不敬虔」と書いてから彼女の顔を見てこう尋ねました。「これをあなたのブラウスにピンで留めてもかまいませんか」「不敬虔」ということばを見たたん、彼女は気色ばみしました。「とんでもない」と彼女は言いました。「私に向かって不敬虔であるなんて、誰にも言わせないわ」。彼は、それからおもむろに、彼

女に説明しました。「あなたは、自分が罪人あること、迷った存在であること、絶望的な状態にいることを認めないために、キリストの救いの御わざによって本来受けられるはずの恩恵を、受けられなくなっていますよ。もし、不敬虔であると告白なさらないなら、キリストはあなたのために死なれたのではないことになりました。もし、あなたが迷った存在でないなら、救われることはできません。もし、健康であるというなら、偉大な医師であるキリストが必要ないことになりましたよ」と。

ある特別なパーティが、市の広い講堂で開かれたことがありました。それは、目が見えない子ども、足が不自由な子ども、その他、障がいを持つ子どもたちのためのパーティでした。子どもたちは、それぞれ車椅子で、または、松葉杖で、あるいは、手を引かれてやってきました。パーティが進行している最中、警備員が、建物の前の階段で泣きじやくっている一人の少年を見つけました。

「なんで泣いているんだい？」と、かわいそうに思った警備員は聞きました。

「だって誰もぼくを中に入れてくれないんだもん」。

「どうして中に入れないの？」

少年はすすり泣きながら言いました。「ぼくにはどこにも障がいがないからなんだよ」。

福音の祝宴もそうなのです。あなたのどこにも問題がないなら、中に入れないのです。入場するためには、自分が罪人であることを証明しなければなりません。自分が不敬虔な人間であることを認めなければなりません。キリストが死なれたのは、不敬虔なもののためであつたからです。ロバート・マンガがこう言った通りです。「メンバーになるための唯一の条件が、自分ふさわしくないと認めるといふ集まりは、世界広しといえども、教会だけである」。

「高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。」

(ローマ人への手紙12章16節)

上流階級の人々と懇意になりたいと願うのは、自然の情です。どの人の心の中にも、著名で、富裕で、身分の高い人と知り合いになりたいという、強い願望があるものです。その点からすると、パウロがローマ人への手紙二一章一六節で助言していることは、生来の傾向とは正反対といえます。パウロは、言います。「高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい」。教会には、カーストはありません。クリスチャンは、階級の違いを超越して生きるべきです。

これを示す例話が、(※後にエクアドルでアウカ・インディアに宣教中、殉教したジムの父)フレッド・エリオットに関して伝わっています。ある朝、朝食のテーブルで家族と共に静思の時を持っていると、庭の方から騒々しい物音が聞こえてきました。ゴミをあさりに来た人がいる、とわかったので、開いた聖書をそのままテーブルの上に置き、窓を開け、明るい声で挨拶をしてからテーブルに戻り、何事もなかったかのように、静思のときを継続したのでした。彼にとつては、ゴミをあさりに来た人への挨拶も、聖書を読むのと変わらず、聖なることであつたのです。

今日のみことばをほとんど文字通りに受け取った主のしもべが、もう一人います。ジャック・ワーツェン(※ Word of Life 創設者)は、ニューヨークのシュルーン湖で、毎年バイブルキャンプを開催していました。大人対象の大会が開かれたときのこと、深刻な身体的障がいを持った参加者がいました。口の筋肉をコントロールできないため、食べ物全部飲み込めないの

です。そのため、食べ物胸と膝をおおう新聞紙の上にポロポロとこぼれ落ちてしまうのでした。そのような様子を見ていたのは、他の人が気持ちよく食事ができない、と考えた彼は、常に一人離れた場所でテーブルにつくのでした。

仕事が多忙を極めていたジャック・ワーツェンは、大抵、時間に遅れて食堂にやってきました。(有名人の)ジャックが戸口に姿を現すと、人々は興奮して手を振り、自分たちのテーブルに来て座つて、と招きます。しかし、決してそうすることはせず、いつも決まつて、一人で食事をしているこの参加者とテーブルを共にし、社会的に低い立場にいた彼に自分を合わせたのです。

「クリスチャンの将軍が、一人の貧しい老女に話しかけている姿が一度目撃されました。友人たちは口々に、『君は自分の立場というものを考えるべきだ』と抗議すると、将軍は答えました。

『もし、主がご自分のお立場を考えておられたら、いったい我々はどうなつていたことだろうか』と』(Choice Cleanings 誌)。

(※スコットランドの国民的詩人)ロバート・バーンズは、『何があろうと人は人(A Man's A Man For A' That)』という詩で、社会的な地位がどうであろうと、人の尊さには変わりがないと教えてくれています。自由な精神を持つ者なら、『絹を着た道化師の安物芝居』を笑い飛ばせる、と言うのです。

低き私たちのところにまで、降りてきてくださった救い主のことを思うとき、万が一にも他の人を軽んじることがあれば、愚かさの極み、というほかありません。

「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」

(テモテへの手紙第二四章8節)

「主の現れを慕っている者——長年、これは、優しい、感傷的な思いを持って、主の来臨を待ち望む信仰者のことを言っているのだと思っていました。携拳のことを思えば、心が燃える。それゆえに、義の栄冠という報いがいただけるのだと。」

しかし、それ以上の意味があることは確かです。主の現れを慕うというのは、あたかも、主が今日おいでになるかのように、主の来臨を前提にして生きることを意味しています。

したがって、主の現れを慕うというのは、とりもなおさず、清い生き方をするという意味です。なぜなら、ヨハネが指摘するように、「キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清く」(一ヨハネ3・3)するからです。

これはまた、この世のいとなみに深く関わり合わないという意味でもあります。私たちは、上にあるものを慕うべきであって、地上のものに心を寄せるようであってはなりません(コロサイ3・2参照)。

これは、また、神の民に仕え、「食事時には食事をきちんと与える」(マタイ24・45)という意味でもあります。主が来られるときにそうしている人には、特別な祝福がある、と主は、はっきり語っておられます。

端的に言えば、主の現れるとき、自分がしているのを見られたくないようなことは、何事もしないという意味なのです。主

が来られたときに、恥ずかしく思うような場所に、私たちは行くこととは思いません。主の御前で、主が不快に思われるようなことは何も口にしたいとは思いません。

もし、一週間後にキリストが来臨されるとわかったら、それまでの間をあなたはどうか過ごしますか。仕事を辞めて、山頂に登り、一日中、聖書を読み、祈ることに費やすでしょうか。それとも、「フルタイムの働き人」として、伝道や聖書の教えに、昼も夜も勤^{いそ}しむでしょうか。

もし、今日、主と共に実際に歩んでおり、主のみこころの中心にいるならば、いつも通りに過ごしていけばいいのです。しかし、もし、自分の満足のために生きているとするなら、その際には、一種の革命的な変化が何度も必要となるでしょう。

救い主の来臨を慕うだけでは、十分とはいえません。義の冠は、誰のために用意されているのでしょうか。そのときを心から待ち望むがゆえに、自分の生活が真理にふさわしく変えられたいと願う人のために、この義の冠が用意されているのです。再臨に関わる真理が、自分の中にあるというだけでは不十分です。その真理に、私たちが捉えられていなければならないのです。

「:アーメンと言いなさい。」

(コリント人への手紙第一14章16節英訳)

アーメン、とは語られている事柄に対して、心から同意していることを表すのに大変役立つことばです。このことばを、礼拝でもっと頻繁に用いようと思えばできる集会(教会)がたくさんあるのではないのでしょうか。

この語は聖書中、六十八回使われています。コリント人への手紙第一の一四章一五節を見ると、初代教会のさまざまな集会で用いられてきたことがはっきりわかります。したがって、「アーメン」という語を用いるのは、まことに聖書にかなっている、十分に確信を持つことができます。

それだけでなく、「アーメン」と応答するのは、必須でもありません。私たちが向き合う数々の真理の崇高さを思えば、熱情のこもった感謝を知的に表現することがどうしても必要です。それほどの真理を耳にしながら、声に出しての応答をまったくしないなら、恩知らずと言われても仕方がないことでしょう。

メッセージで強調したい点に来たとき、聴衆が「アーメン」と言ってくれるのは、語り手にとつて常に励ましとなります。聴衆が話についてきてくれること、および、霊的、感情的に湧き出てくるものに共感してくれているということが、それでわかるからです。

そればかりか、「アーメン」と言う人自身にとつても、それは幸いです。それによつて、聞き手自身も感動するべきところで無感動にならずに済むからです。

さらに、その場にいる外部の出席者にとつても良いことだ、と私は思うのです。クリスチャンは、熱意にあふれ、信仰生活を喜び、信じていることには掛け値がない、とわかるからです。

「アーメン」と声に出して言うことによつて、いのちと熱心が伝わります。逆に、「アーメン」という応答がないと、そこには倦怠感と退屈さが残ります。

「アーメン」とは、事実上、世界のどこでも通じる聖書の三つのことばの一つです。ほとんどの言語では、これらの語は原語のままです。ですから、どこへ出かけようと、「マラナタ！ ハレルヤ！アーメン！」と言えば、「主はまもなく来られる！ 主に栄えあれ！ その通り」と言っていることがわかつてもらえるのです。

もちろん、「アーメン」ということばを使う際には、洞察力が必要で、不幸なできごと、悲劇、悲しみの場合にまで熱情を表現するのは、場違いと言うほかありません。

極端に感情をおおるような集まりで濫用されてきたという理由から「アーメン」の使用をやめてしまったキリストの教会がいくつもある、というのは残念なことです。良いものすべてについて言えることですが、適切な場合とやり過ぎという場合があるのです。しかし、見境なく「アーメン」と言う人が中にあるという理由で、聖書にかなったこの習慣を奪われてよいものでしょうか。(「アーメン」と言っていただけでしたか?)

「わがたましいよ。彼らの秘密に加わるな。」

(創世記49章6節 英訳)

このことばは、ヤコブが息子たちを祝福する場面に出てきます。シメオンとレビが、シケム^{シケム}の住人に行った残酷な仕打ちを思い出したとき、ヤコブは言いました。「わがたましいよ。彼らの秘密に加わるな」と。

私はこのことばを借りて、それをもっと広い意味に適用してみたいと思います。それは、まったく知らない方が良かったという、罪に関わる秘密についてです。

誘惑は、最高の姿を装い、秘儀の世界への手ほどきを受けなければ、決して幸せにはなれないとほめかします。ぞくぞくするような経験、肉体的な満足、感情の高揚、そして、未知なるものの魅惑を差し出します。

多くの人、特に、外界の影響から守られてきた人は、このような誘いに心が騒ぎます。今まで、本当の楽しみを経験してこなかったのではないかと感じるのです。自分が損をしてきたかのように思うのです。この世がどんなところか一回は味わってみたいと、絶対に気がすまないと思うのです。

問題は、罪が一人ではやってこないことです。罪には、危険と後々まで尾を引く結末があらかじめ組み込まれています。どのような罪でも、最初にそれを経験すると、苦痛と後悔の洪水が堰を切ります。

誘惑に屈すると、罪への抵抗力が弱くなります。いったん罪を犯せば、次に同じことをするのはいつも簡単です。ほどなく、私たちは、その罪の熟練者になります。習慣という鎖に縛られて、その奴隷となる場合すらあります。

誘惑に屈した瞬間、今まで経験しなかったことのない罪責感の存在に気がつきます。罪の規制を破る快感もつかの間、その後続くのは、心が丸裸にされたような恐るべき感覚です。確かに、告白すれば罪は赦されるとはいえ、生きている限り、その罪に対しては、昔の悪い仲間に会うような気まずさがつきまといまいます。愚かなことをしてしまった場所に、やむなく再訪しなければならぬときには、過去の記憶がよみがえり、突き刺されるような痛みを経験します。望んでもいないのに、私たちにとって最も聖なるひとときにすら、いかかわしい出来事が突然よみがえるといふ場合があります。そんなとき、からだは文字通り脈拍が速まり、呻き声もれないように唇を固く閉じなければなりません。

このような罪に対しても、神の赦しを経験できるといふのは素晴らしいことではありませんが、初めから罪の秘密に加わらなければ、もつと幸いであつたことでしよう。魅力に溢れた秘密に見えたものが、やがては悪夢へと変わります。悦楽はほどなく恐怖に変わり、熱情に駆られた瞬間は、一生の後悔という結果になります。

誘惑を受けるときに、私たちはこう応答したいものです。「わがたましいよ。彼らの秘密に加わるな」。

「私は経験で知っている。」

(創世記30章27節 英訳)

ラバンは、主がヤコブのゆえに自分を祝福してくださったのだ、ということを経験で知っていました。それは、学ぶべき大切な教訓です。経験とは偉大な教師です。

経験があつたからこそ聖書のみことばがわかる、ということが少なくないことに、私は感銘を受けます。頭では聖句を知っているかもしれませんが、何か新しい経験の中を通ることによって、それらの聖句が突然いのちを吹き込まれたものになります。ネオンの光のように、くつきり目立つものになったように思われるのです。それらの聖句を、新たに味わえるようになったのです。

マルチン・ルターの方は、「もし、神がある種の苦難のもとにおいてくださらなかつたら、詩篇の中のある聖句が意味するところを決して知ることはなかつた」と語っています。

ダニエル・スミスとその妻が中国で宣教していたときのこと、強盗の一味が、ある夜、二人の住む家の壁に大きな穴を開けてしまいました。夫妻が寝ている間に、強盗たちは、引き出しや食器棚にあつたものをすべて運び出してしまったのです。もし、この宣教師たちが熟睡していなかつたら、おそらく殺されていたことでしょう。後日、この事件を説明しながら、スミス氏は言いました。「その朝になって初めて、私はハバクク書三章一七節、一八節が理解できました。『そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあつて喜び勇み、私の救いの神にあつて喜ぼう』と。もちろん、意味するところは、ハバクク

が描くような損失を自らも経験しない限り、ハバククの喜びを、本当の意味では共有できないということです。

コリー・テン・ブームは、強制収容所にいたとき、判事のところに出頭しなければなりません。判事には、まだ仕事が残っていた。そして、とうとうある日のこと、私だけでなく、私の家族や友人たちも死刑に処せられるという意味にしか取れない書類を見せられた」

『この書類の意味を説明できるかね』と判事は尋ねた。『いいえ、できません』と、私は正直に答えた。すると突然、判事は書類をすべて手に取ったかと思うと、ストーブの中に投げ込んでしまったのである！ 有罪を宣告したその書類がメラメラと燃えていくのを見て、私は、ああ、神様の力に守られていたのだと知った。そして、コロサイ二章一四節のみことばが、全く新しく理解できたのである。『いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました』

人生のさまざまな経験を通して聖なる書物に対する新たな洞察が得られることにより、それらの経験は計り知れない価値を持つことになるのです。

「それでは、私は、あなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしょうか。」

(ガラテヤ人への手紙4章16節)

ガラテヤのクリスチャンと関わったパウロの経験から気づかされるのは、真実を語ると、友人が敵に変わってしまうことが多いということです。かつて、これらの人々に、主を紹介し、彼らの信仰を育んだのは、使徒パウロでした。しかし、その後、偽教師がクリスチャンの諸集会に潜入してきたため、あなたがたはクリストを棄てて律法を守ろうとしている、とパウロは信徒たちに警告しなければなりません。これがきっかけで、彼らは自分たちの信仰の父に対して、敵意を抱くようになったのです。

それは、旧約の時代にもあったことでした。エリヤは、常に真実に、また、率直に自分のメッセージをアハブに伝えました。ところが、アハブは、エリヤに会うとこう言ったのです。「これはおまえか。イスラエルを煩わすもの」(1列王記18・17)。「イスラエルを煩わすもの」？ エリヤは、イスラエルにとつての最高の友人の一人であつたではありませんか。しかし、本来は真実であることを感謝されるはずであつたのに、トラブルメーカーとして、非難される破目になったのです。

ミカヤもまた、恐れを知らない預言者の一人でした。「みこころを求めることのできる主の預言者はほかにいないのですか」とヨシャパテが尋ねると、イスラエルの王は答えました。「いや、ほかにもうひとり、私たちが主のみこころを求めることのできる者がいます。しかし、私は彼を憎んでいます。彼は私について良いことは預言せず、悪いことばかりを預言するからです。それは、イムラの子ミカヤです」(1列王記22・7・8)。王

は、真実を知りたかつたわけではないので、真実を告げる者を憎んだのです。

新約聖書には、バプテスマのヨハネがヘロデに、こう語っている箇所があります。「あなたが兄弟の妻を自分のものとしてすることは不法です」(マルコ6・18)。それは、事実でした。しかし、そのように真実を勇敢に伝えた結果、ヨハネはほどなく処刑されてしまいました。

主は、不信仰なユダヤ人の憎しみを買うことになりました。その憎しみのきっかけは何だったのでしよう。それは、ユダヤ人に真実を語ったからです。「ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています」(ヨハネ8・40)。

トマス・ジェファアソン(※第三代アメリカ合衆国大統領)は、こう記しています。「恨みを買いたくなければ、当たり前義務を果たすという、つまらない境界線から出なければよい。ものごとにはすべて両面がある。したがって、一方の側にきつぱりと立ち、波紋を起せば、反対の立場の者たちが、それに比例した敵意を表すのは当然である」。

真理とは、痛みを伴うことがよくあります。人は真理に頭を垂れるのではなく、真理を伝えた人を呪うことが多いものです。しかし、主に仕える真のしもべであるなら、すでにこの代償は織り込み済みです。真実を語るか、さもなければ、死あるのみです。「友が与える傷は真実であるが、敵の接吻は欺きである」とわかつているからです(箴言27・6参照)。

「バアルにひびをかかめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」

(ローマ人への手紙11章4節)

ご自分を証しする人を、神が一人も残さないでおかれることは決してありません。暗黒が極まる時代にあつても、神を証しする声は、はつきりと、また、明瞭に響き渡ります。あり得ないような状況の中で、思いがけない人が、神の御名を勇敢に告白するべく、神に立てられる場合がよくあります。

洪水前の時代、全地には暴力と不道徳がはびこっていました。しかし、ノアがそこにおいて、主のために勇敢に立ち上がったのです。

イスラエルは、ことごとく偶像礼拝に飲み込まれたように、エリヤには思えました。しかし、バアルにひびをかかめていない七千人を、まだ神は取っておかれたのです。

霊的な生気が失われ、道徳が退廃の一途をたどる中、ヤン・フス、マルチン・ルター、ジョン・ノックスが、至高者なる神の教えを守るべく、歴史の舞台に登場しています。

もつと最近のことでは、電信技術の発見が神のおかげである、と認められた事例があります。最初に送信されたメッセージを知っておられますか？ それは、「神が何をなされたかを見よ」(民数記23・23英訳)だったのです。

一九六八年のクリスマス・イブに、アポロ八号が月への最初の有人飛行を終えて、地上に戻ろうとするとき、三人の宇宙飛行士は、交代で創世記一章一〜一〇節を読み上げ、このように話を結びました。「アポロ八号の乗組員より、最後のことばを申し上げます。神の祝福がみなさんに…この素晴らしい地球に住むすべてのみなさんにありますように」。

神を信じない人々からの猛烈な抗議を受けながらも、米国郵政公社は、アポロ八号の記念切手に、創世記一章一節の「初めに神は…」のみことばを印刷したのでした。

アメリカの通貨には、「神を我らは頼みとす」(In God We Trust.)という標語が刻印されています。

カレンダーのA.D.という略語は、今年も主のものであること(※Anno Domini「我らの主の年」)を気づかせてくれます。

星座に、処女、男の子、蛇、そして、十字架という贖いのドラマに欠かせないモチーフがあるのは偶然でしょうか。それとも、星空も福音を告げているのでしょうか。

無神論者ですら、ときには、うっかり主を認めてしまうことがあります。一人の、無神論を標榜する首脳が、一九七九年オーストリアのサミットでうっかりこのように発言してしまいました。「もし、我々が失敗するようなことがあれば、神は許し給わないだろう」と。

どうも宇宙の中には、神を公に認めないではすまされない道徳的規範があるようです。弟子たちが、「主の御名によつて来られる王」と、主イエスを讃えると、パリサイ人たちは、「弟子たちを黙らせてくれ」とキリストに要求しました。しかし、主は言われました。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます」(ルカ19・40)。

神の御名が讃えられず、神の荣誉がないがしろにされるような事態になったらどうすべきか、と私たちが案じる必要はありません。「神は死んだ」と人間が宣言する、まさにその瞬間、神は、証人を立てて、ご自身の敵にひとあわふかせ、ご自身の友を慰めてくださることでしょう。

「しかし、おくびよう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」

(ヨハネの黙示録21章8節)

臆病な者と不信仰な者も、極悪で墮落した罪人と思われる者と同列に扱われているばかりか、同じ永遠の刑罰を受けるというこの聖句を読めば、誰でもショックを受けることでしょう。

しかも、臆病な者がリストの最初にあげられていることに気づくと、その驚きは増すばかりです。自分が臆病であつたとしても、それは大した問題ではない、と言いつくする人は、大いに襟えりを正さなければなりません。友人が何と云うだろうかと気になって、主イエスを受け入れるのを恐れているかもしれません。あるいは、それが生まれつき引つ込み思案のためであるかもしれません。しかし、神は、それをどうでもいいこととして、大目に見ることはありません。責めを負うべき小心さとして、ご覧になるのです。

二番目の部類に入る人、つまり、不信仰な人も、襟えりを正す必要があります。「信じられない」とか、「信じられたらいいんだが」と、人はよく言います。しかし、そのどちらも不誠実な言い方です。救い主を信じることを不可能にするようなものは、何一つ存在しないからです。問題は、人間の知性ではなく、意志にあるのです。信じない人は、救い主を信じたくないだけなのです。当時の不信仰なユダヤ人に向かって、主イエスは、こう仰せになりました。「あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもつて来ようとはしません」(ヨハネ5・40)。

恐れや不信仰を持つていても、多くの人は自分を立派で、教養があり、道徳心が備わつていて、と考えています。生きている間、殺人犯や不道徳な人、あるいは、魔術にふける人とは関わりを一切持とうとはしません。しかし、皮肉なのは、そのような人々と永遠を共に過ごさなければならぬことです。リストのもとに来て、救いを得ようとすることが一度もなかったためです。

そのような人々の行く先は、「火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である」(黙示録21・8)。これは、もちろん究極の悲劇です。地獄が存在するのかどうなのか、また、永遠の刑罰はあるのかないのか、人々は議論するかもしれませんが。しかし、聖書に曖昧さはみじんもありません。キリストを持たない人の生涯の終わりには、間違いなく地獄が待っているのです。

それがことさらに残念なのは、臆病であつても、不信仰であつても、あるいは、この聖句の他の項目に該当していたとしても、わざわざ火の池に行く必要はないからです。その必要は、どこにもありません。ただ、自分の恐れや疑い、その他の罪を悔い改め、単純に主に頼る信仰を持つて、主イエスを見上げれば、赦され、清められ、天国に行くのにふさわしくしていただけるのです。

「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」

(ローマ人への手紙12章21節)

この節を神の靈感を受けない人が書いたとするなら、こうなっていたことでしょう。「ひどい扱いを受けて黙ってはいけません。やられたらやりかえせ」と。この世は報復と仕返しという観点から考えるのです。

しかし、キリストの学校に入ると、それとは異なつたレッスンが待っています。悪に押しつぶされるままではいけません。むしろ、善を用いて悪を敗北させるのです。

アッシジのフランシスが、幼少時代に体験したとされている話は、この点をうまく説明しています。小さい男の子が、家の近くで遊んでいたときのことです。叫んでみると声が反響すること気づきました。こだまが返ってくるというのは、初めて経験することだったので、いろいろと試しはじめました。「お前なんか大きらいだ」と叫ぶと、「お前なんか大きらいだ」と返ってきます。声を一層張り上げて、「お前なんか大きらいだ」と大声で言うと、もつと激しい口調で、「お前なんか大きらいだ」と跳ね返ってきます。三度目には、満身の力で、「お前なんか大きらいだ」と叫ぶと、「お前なんか大きらいだ」と大反響が戻ってきました。もうこれ以上は、耐えられませんでした。少年は走って家に帰り、からだを震わせてすすり泣きました。母親には、庭での大声が聞こえていましたが、それでも尋ねました。「どうかしたの、坊や」。彼は、答えました。「ぼくを嫌う男の子がその辺にいるんだ」と。母親は一瞬考えてから、こう言いました。「こうしたらどうかしら。外に出て行って、その男の子に、『君のこと大好きだよ』と言ってあげなさい」と。

すると、少年は外に走り出て、大声で言いました。「君のこと、大好きだよ」。すると、どうでしょう。はつきりとした、やさしいことばが同じように返ってきました。「君のこと、大好きだよ」と。少年は、もう一回、力を込めて呼びかけました。「君のこと、大好きだよ」と。すると、またしても、「君のこと、大好きだよ」と答えが返ってくるではありませんか。三度目に、少年はありつたけの真心を込めて叫びました。「君のこと、大好きだよ」と。すると、いつくしむようなことばが返ってきました。「君のこと、大好きだよ」と。

私がこう書いている今も、世界中の人々は、「お前なんか大嫌いだ」とお互いに叫びながら、どうして関係が緊張の一端をたどるのか、といぶかっています。国々は、他の国々に対して憎しみをあらわにしています。宗教団体の争いは、膠着状態にあります。人種間の争いは、絶えることがありません。隣人と垣根越しに口論します。そして、家庭は言い争いと恨みで引き裂かれます。このようにして人々は、みすみす悪に征服されているのです。それは、憎しみが憎しみを生むからです。対処法を変えて、憎しみを受けてもそれを愛で返せば、善で悪を打ち負かすことができるのです。そのとき、愛は愛を生むことに気がつくことでしょう。

自分の手がどのような種を蒔こうとしているのか
 どれほど注意しても注意しすぎることはない

愛を蒔けば、必ず愛が熟し

憎しみを蒔けば、必ず憎しみが繁茂する

「救いは主のものです。」

(ヨナ書2章9節)

私たちの中で、「救霊に熱心な人」に出会わなかった人はいません。忙しく歩き回り、疑うことを知らない、見込みのありそうな人を見つけると、途切れず話しかけます。そこで、どうしたら救われるかという一定の公式にしたがつて導き、ついに相手が根負けして、この人から逃れるためには、これしか方法はないと観念して、信仰告白をするまでしつこくつきまとう人のことです。回心者を新たに獲得すると、それを記録し、さらに、数字を稼ごうと見込みのありそうな人を探し回ります。果たして、これは福音伝道といえるのでしょうか。

これが福音伝道であるはずはない、と私たちは認めざるを得ません。むしろ、一種の宗教的嫌がらせ(ハラスメント)です。肉の力でなされる奉仕はどれもみなそうであるように、これもまた益少なく害の多いものです。

ジョン・ストットが、こう書いているのは的を射ています。「鍵を持つておられるのはキリストである。ドアを開けてくださるのはキリストである。であるとするとするなら、まだドアが閉じられているのに、ノックもせず、無作法にも入り込むようなまねはやめようではないか。主が突破口を開いてくださるまで、我々は待つていなければならぬ。無作法な、または、厚かましい『証し』なるものによつて、キリストの御名にいつも汚名が着せられている。家庭においても、職場においても、友人や親族がキリストのものとなるように求めるのは、確かに間違つてはいない。しかし、ときとして、私たちは、神よりもはるかに急いでいることがある。忍耐せよ。熱心に祈り、たくさんの愛を注げ。そして、証しの機会が訪れるのを期待して待て」

デイトリック・ボンヘッファアの教説には、必ずしも賛成できないものが多いのですが、彼が語った次のことばには、心を留めておきたいと思えます。「救いのことばをどんなに語つても、それには限界がある。他人にそれを強制する力も権利もないからである。：力づくで福音を押しついたり、人々を追いかけて改宗させようとしたら、他の人々の救いの道を整えてあげようと犠牲を払つたりすることは、無駄であるばかりか、危険でもある。：せいぜい、かたくなで暗闇の心を持つた人が、我を忘れて怒り出すだけであつて、それは無駄であり有害である。安価な恵みのことばを安易に扱う結果、この世はそれにあきさきするどころか、やがて、反感を持ち、自分が望んでもいないものを押しつけようとする人々に、最後は立ち向かつてくるのである」

真正の回心とは、聖霊のわざです。それは、どれほどの善意から出発していようと、人間が自分の努力によつて生み出すことはできないという意味において、「人の意欲によらない」(※ヨハネ1・13)ものなのです。自分の意志で、完全に同意していません。キリストを告白するように強制された人は、やがて幻滅を感じ、不満を持つて、キリストの十字架の敵となる場合が少なくありません。

聖霊が私たちを用いて、他の人を救つてくださるといふのは、人生における素晴らしい経験の一つです。しかし、それを自分の力だけで行おうとすると、異様で奇異なものになってしまうのです。

「彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、∴彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。」

(ヨハネの福音書一章41節、42節)

通常、個人伝道において、クリスチャンがキリストの証しをする方法は、毎日の生活の中にあります。だからといって、飛込み的な方法、つまり、まったく見ず知らずの人に歩み寄って福音を紹介するという方法を、神が取られることは絶対にならないわけではありません。神は、そのような方法も確かに取りになります。しかし、信仰者が自分をよく知っている人に対して、また、キリストのおかげで彼(彼女)の生活は確かに変わったと気づいている人に対して、証しをする方が、はるかに説得力があります。シモンに対してアンデレがしたのは、まさにそうでした。

ウォルター・ヘンリックセンは、大学の構内で証しをするこゝとに及び腰になっていた、ある青年のことを語っています。ヘンリックセンは、尋ねました。「ジョー、学内で君が個人的に知っている学生は何人いるのかな。つまり、君の顔を見て、君の名前がわかる人のことなんだが」。大学に来てすでに二、三ヶ月になつていたのに、顔見知りはずか二、三人しかいませんでした。

「私はこう言った。『ジョー、これから一ヶ月で、学内のできるだけ多くの学生と知り合いになつて欲しい。そうだな。五十人という目標はどうだろう。証しはしなくていい。自分がクリスチャンであると、名乗らなくてもいい。君は、彼らを知ることと努めればいいだけだ。彼らの部屋に立ち寄り、おしゃべりをするんだ。一緒に卓球をしてみるんだ。スポーツの競技会に出かけるんだ。一緒に食事に行きなさい。なんでもしたいと思

うことをしなさい。しかし、とにかく五十人と知り合いになつて、これから一か月後、私が戻ってきたときには、その一人ひとりの名前を言つて紹介できるようにしておいて欲しいのだ』」それから一か月後、ヘンリックセンが青年に会つてみると、ジョーは何と、すでに六人をキリストに導いていたのでした。「果たして、五十人と知り合いになつたかどうかについては、話さなかつた。話す必要がなかつたのである。彼が『取税人や罪人』の友となつたときに、自分の信仰を紹介する機会が、主によつてごく自然に備えられたことに、自分で気づいたのである」。

このような、毎日の生活の中で伝道するという方法に関して、二つの点に注目しておかなければなりません。第一に、個人的に主の証しをしようとする人の生活が大事であるという点です。主に近く歩んでいるかどうか、大きな違いをもたらします。前もつて用意したメッセージを立て板に水という調子で語つても、もし、その生活に聖さがなければ、そのメッセージは相殺されてしまうからです。

第二に、このような方法は、即座に結果を得ることを重視してはいないという点です。そして、それこそが良い点なのです。イエスは、救いに至る過程を、作物の成長に例えておられます。作物が収穫できるのは、種を蒔いたのと同じ日というわけにはいきません。確かに、福音を初めて聞いたその日に救われるという人も、中にはいます。しかし、そのような人は、全体から見ればほんの一部です。一般的に言えば、メッセージを聞き、罪が責められ、聖霊の声に抵抗するという一定の期間を経たのちに、回心は起こるのです。

「あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。」

(ヤコブの手紙4章14節)

いのちがどれほど短いものかを感じかせようと、聖霊は、死すべき人間に、絶え間なく、聖書の中で語りかけておられます。私たちの日々には限りがあること、そして、それは速やかに過ぎ去るものであることを、主の御霊は、比喩を繰り返して、私たちの心に焼きつけようとしておられるのです。

その一例として聖霊は、人生を機織り機の杼になぞらえておられますが(ヨブ7・6)、杼という装置は、あまりにも素早く行き来するため、目で追うことができません。

ヨブは、いのちを「風のようなものである」と言っています(ヨブ7・7英訳)。ひとしきり吹いていたかと思えば、次の瞬間には二度と戻ってきません。詩篇作者も、「吹き去れば、返って来ない風」と言って、その心情に共鳴しています(詩篇78・39)。

ヨブは百も承知であるのに、ビルダデは、「私たちの地上にある日は影だからである」(ヨブ8・9)と教えています。それは、詩篇一〇二篇一節にも繰り返されている情景で、「私の日は、延びていく夕影のようです」と書かれています。影は、ほんの僅か留まったかと思うとあっけなく消えていきます。

ヨブは、自分の人生を、はかなく、もろく、色あせていく木の葉に例えます。また、風で吹き飛ばされる切り株にも例えています(ヨブ13・25英訳)。イザヤは、「私たちはみな、木の葉のように枯れる」(イザヤ64・6)ものではありませんか、と言って、主に憐れみを懇願しています。

ダビデは、自分の人生を手幅に例え(詩篇39・5)、それがこの上なく短いものであると表現しました。人生を旅に見立てれば、それは、十センチにも足りない距離だということです。

神の人モーセは、人生を眠りに例えています(詩篇90・5)。眠ってしまえば、時は気がつかない間に過ぎていきます。

同じ箇所で、モーセは人とその生涯も草のようだと語っています。「朝は、花を咲かせているが、また移ろい、夕べには、しおれて枯れます」(詩編90・5・6)。それから数百年後、ダビデは同じ比喩を使い、私たちの存在のほかなさを描きました。

「人の日は、草のよう。野の花のように咲く。人の日は、草のよう。風がそこを過ぎると、それは、もはやない。その場所すら、それを、知らない」(詩篇103・15・16)。スポルジョンが言ったように、草は「種が地に落ち、伸びたかと思えば、風に吹き飛ばされ、人に刈り取られ、後には何も残らない」(sown, blown, blown, mown, gone)ものです。突き詰めていけば、これが人生なのです!

最後に、ヤコブは、人生は霧のように一過性のものである、と自らの証しをつけ加えています(ヤコブ4・14)。霧は、しばし現れたかと思うと、跡形もなく消えていきます。

このように、さまざまな比喩を積み重ねたのには、二つの意図が隠されています。第一は、まだ回心していない人が、時の短さと、神に会う備えの大切さに思いを致すためです。第二には、信仰者が自分に与えられた日々を数え、知恵の心を得るためです(詩篇90・12)。そうすれば、多くの人の人生はキリストに捧げられ、キリストのために費やされることになるでしょう。それこそが、永遠を視野に入れた生き方なのです。

「あなたのうちに自分の息子、娘に火の中を通らせる者があつてはならない。占いをする者、卜者、まじない師、呪術者、呪文を唱える者、霊媒をする者、口寄せ、死人に伺いを立てる者があつてはならない。」

(申命記18章10、11節)

神は、オカルトの世界に一切関わつてはならない、とご自分の民イスラエルに、警告しておられます。今日のみことばに列挙されている活動は、すべて悪魔礼拝に関係しているものばかりであり、それゆえに、何としても避けなければなりません。この警告は、旧約の時代と同じく、今日の信仰者にもあてはまります。

占いとは、水晶球、透視力、手相占い、骨相学、茶葉占い他、これと類似した活動をして未来を予告しようとするものです。

卜者とは、占星術師のことであり、星や惑星の位置を利用して、人間の営みに影響を及ぼそうとする人のことです。新聞に掲載される毎日の星占いは、黄道十二宮(星座)を用いるのと同様に、占星術に関連しています。

まじない師とは、魔力や呪文によつて他の人に影響を及ぼそうとする人のことです。

呪術者(※英訳は「魔女」とは、悪霊と接触することによつて得た超自然な力を行使する女性のことです。そのような接触は、突き詰めていくと邪悪で、有害です。

呪文を唱える者とは、他人に禁止や呪いを宣告する者で、実際にそのような現象を起こす悪魔的な力を持っています(そのような呪いは、クリスチャンに対して効力はありません)。

霊媒をする者とは、悪霊の世界と交信する媒体となる人のことです。これらの諸霊は、霊媒者に相談に訪れた人の、他界した親族のふりをするがよくあります。

口寄せ(※英訳「魔術師」とは、心霊術の領域で魔術を行う人のことです。「口寄せ」は、「呪術者」(※英訳「魔女」)の男性版である場合がときどきあります。

死人に伺いを立てる者とは、死者の霊を呼び出して、未来を告げたり、出来事を支配したりすることができると公言する人のことです。

クリスチャンは、これらすべてのものに加え、以下のような現代版心霊術として現れたさまざまなものを避けなければなりません。それらは、ヨガ、超越瞑想法(TM)、ハーレ・クリシュナ、降霊術、黒魔術、白魔術、催眠術、水脈占い、心霊的癒し、数霊術、死者への祈りなどです。以下に掲げるものが、心霊術者にとつては、常用手段であることも知らなくてはなりません。幻覚剤、ワイジャ盤、トランプ、タロット・カード、サイコロ、ペンダント、円形浮き彫り、魔除け、ドミノ、棒や骨(神秘的儀式で使用する場合)などです。

「イエスは、さまざまの病気にかかっている多くの人をいやし、また多くの悪霊を追い出された。」

(マルコの福音書一章34節)

悪霊に憑かれるという現象は、主が地上におられたときのもので、現在は、もはやそのようなことはないと考えられる傾向のクリスチャンもいます。それは、事実誤認であり、訂正しなければなりません。ほとんど毎日のように、悪霊が背後でそのかしたとしか思えない、常軌を逸した犯罪記事が新聞に載ります。悪霊にとり憑かれた場合には、それと分かる一定の症状があり、精神疾患と区別することができます。

まず、第一に、悪霊は取り憑いた相手を、最終的には、蛮行と破滅に巻き込みます。悪霊のねらいは、常に破滅をもたらすことです。

悪霊に憑かれた人には、二人、または、それ以上の人格が同居しています。その人自身の人格と悪霊(ども)の「人格」です。いろいろな声音を使って話すこともあり、違った名前で自分を名乗ることがあります。

このような人は、人間とは思えない怪力や、とてつもない知力を発揮したりすることもできます。

主イエスのことを偉ぶって話すときもありますが、主の御名、とか、祈り、キリストの血、神のことばとを口にしただけで、冒瀆的なことばを吐いたり、激したりするのが普通です。

その行動は、極端なほど風変わりで、突飛であり、落ち着きがありません。他の人が理解することも、言うことを聞かせることも、更生させることもできません。自殺傾向がある場合もあり、恐怖と迷信にがんじがらめの状態で過ごす場合もあります。

悪霊に取り憑かれるという現象は、幻覚誘発剤の使用と密接な関わりがあります。そのような薬物を使った結果、没我の世界に入り、悪霊の侵入を許すことになるのです。「魔法」や「魔術」と訳されることばは、ギリシャ語ファルマキア (pharmakia) に由来しますが、それは、麻薬を意味しています。

悪霊に憑かれた人は、加虐的で、異常なほど精神や肉体を痛めつけ、ときには、犠牲者の手足を切断したり、身体をバラバラにしたりすることがあります。

その他にも、悪霊に憑かれた結果、陰うつになり、足しげく墓地に出入りし、頭蓋骨や他の人骨を集めるなどの奇行をしたり、おぞましい話に夢中になったりします。

太陽と月、特に、新月は悪魔礼拝の世界で深刻な影響があります。それゆえに、信仰者の不安を取り除く、次のような約束が掲げられているのです。「昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない」(詩篇121・6)。

悪霊は、祈りと主イエスの御名の権威で追い出すことができます。しかし、悪霊に憑かれた人が永遠に解放されるには、救い主を信じる信仰によつて、新しく生まれる以外にありません。

「私の目をそらせてください(Turn)」、むなしいもの(Vanity)から」

(詩篇119篇37節 英訳)

この短い祈りの最初の単語(Turn)はT、最後の単語(Vanity)はVと言う文字から始まるのですが、この聖句をTV、すなわち、テレビにあてはめると、まさにぴつたりです。テレビ番組のほとんどは空しいものだからです。テレビは、実在しない世界、現実からかけ離れた生活を映像にしています。

テレビは、貴重な時間を奪う泥棒です。テレビを見ると、二度と取り戻すことのできない時間を、何時間も無駄にしてしまいます。一般的に言って、テレビのせいで聖書がしだいに読まれなくなり、その結果、神の声が締め出され、本人も気づかないうちに、霊的な熱意が冷まされる結果となっています。

テレビが子どもたちに有害な影響を与えることは、よく知られています。暴力が賛美され、性が美化され、ポルノが堂々と人目にさらされるために、倫理道徳が墮落していきます。子どもたちは、教育の面でも被害を受けます。読書をしたり、文章を書いたりする時間も意欲もないからです。子どもたちの価値観は、スクリーンに映し出されるものによって決まり、考え方全体が、反キリスト教的宣伝によって形成されていくからです。

テレビで語られるユーモアは、卑猥ひびなばかりか、その他のせりふもみな、下品なあてこすりばかりです。コマーシャルは愚かしいだけではなく、品性を損なうものです。なまめかしいハリウッドの女性たちが次々と、肌もあらわに、思わせぶりなしぐさをして情欲をかきたてる、という方法を取らなければ、何一つ商品売ることができないのでしょうか。

多くの家庭では、テレビが原因で家族間のコミュニケーションが破壊されてしまいました。テレビ番組に熱中するあまり、お互いにとって有益な会話を続けることができなくなってしまうのです。

音楽の分野においては、歌詞がいか過ぎるという場合が少なくありません。肉欲を賛美し、不倫や同性愛が生き方として認められるべきだといひ、粗暴な男が英雄扱いです。

「健全なキリスト教番組もテレビで流されているではありませんか」という反論があるとしても、それは、毒薬を糖衣にくるんだに過ぎません。総じて、テレビが及ぼす効果は、霊的な活力を損なう、というのは明白な事実です。

あるクリスチャンが、宅配でテレビを注文しました。玄関前にトラックが到着し、その側面にこういう広告文があるのに気がつきました。「テレビは、世界(※すなわち、この世を)を居間に運んでくる」。これで心が決まりました。彼は、テレビを返品したのでした。

テレビにかじりついている人が、神の前に、歴史に残ることをしたためしはこれからもないことでしょう。テレビこそは、今日の霊的衰退をもたらす主要原因の一つなのです。

「あなたがたが足の裏で踏む所はことごとく、わたしがモーセに約束したとおり、あなたがたに与えている。」

(ヨシユア記一章3節)

神は、イスラエルの民にすでにカナンの地を与えておられました。神の約束があるので、もう彼らの所有でした。しかし、それを実際に自分のものにする、という仕事が民に残っていたのです。占領は、これから成し遂げなければなりません。所有するためには、「あなたがたが足の裏で踏む所はことごとく、あなたがたに与えている」という規定があったからです。

神は、数多くの、素晴らしく尊い約束を、すでに与えてくださっています。聖書は、そのような約束に満ちています。しかし、それらの約束は、信仰によって自分のものにしなければなりません。そうしたときに初めて、約束が実際に自分のものとなるのです。

救いに関する約束を例に取り上げてみましょう。罪を悔い改め、イエス・キリストを主、また、救い主として受け入れるなら永遠のいのちを与えよう、と神は繰り返し約束しておられます。しかし、罪人を救ってくださる方を信じ、それを求めるまでは、その約束は何の役にも立たないのです。

もう一步話を進めてみましょう。主イエス・キリストを心から信じているにもかかわらず、救いの確信がないという人がいるかもしれません。例えば、自分が救われている、と言うのは僭越えんえつだと考え、その結果、疑いと暗闇から抜け出せないという場合です。みことばは、確かに神の御子の御名を信じる者は、永遠のいのちを持つ(Ⅰヨハネ5・13)と約束しているのですが、それを味わうためには、信仰によって、このみことばを自分に適用することが残っているのです。

神は、信頼されることをこよなく喜び、私たちがみことばを額面通りに受け取ることに満足を覚えてくださる方です。決してあり得ないような約束であっても、私たちがそれを信じ、すでに成就したとみなすとき、神は栄光をお受けになります。

ある日のこと、ナポレオンが閼兵えつべいしていると、馬が突然荒々しく駆け出し、皇帝は危うく落馬しそうになりました。一人の兵卒がすばやく前に飛び出して、手綱をつかみ、馬を静めました。

自分を助けてくれたのが、階級の低い兵士であることが十分にわかっていたはずなのに、ナポレオンは、「連隊長、大いに感謝である」と言いました。ナポレオンのことばを額面通りに受け取った兵卒は、答えました。「どの連隊長の指揮を執るようご任命でしょうか」と。

その後、以前は一兵卒であった彼がこの出来事を話すと、今や自分が連隊長である、と確信を持つ彼を友人たちは嘲りました。しかし、それは本当のことだったのです。皇帝がそう発言したので、即刻その場で彼は昇進を勝ち取ったのでした。

信仰者の状況も、これと幾分似ています。連隊長になることも、一兵卒のままでもできることがあります。キリスト・イエスにある富を享受することもできれば、事実上、窮乏生活を送ることもあるのです。「私たちは、自分が望むだけ神を保有することができます。キリストは、宝物蔵の鍵を私たちの手に渡してください、『望むだけ持つていくがよい』と言っておられる。金塊が積まれた銀行の貯蔵所に入るのを許され、好きなだけ持つて行ってよいと言われているのに、そこからわずか一セントしか持ち出さなかったとしたら、貧しいのは誰の責任だろうか。一般的に、クリスチャンが、神の無代価の富の中から、ごくわずかのものしか受け取っていないのは、いったい誰の責任だろうか」(マクラーレン)。

「あの方のすべてがいとしい。エルサレムの娘たち。これが私の愛する方、これが私の連れ合いです。」

(雅歌5章16節 英訳)

シユラムの乙女が、愛する人に向ける献身的な愛、忠実で揺るぐことのない愛は、私たちのたましいを永遠に愛される御方に、私たちがどのような愛を持つべきかを描いています。以下の具体的な点に目を留めてみましょう。

第一に、彼女は、愛する人のあらゆる点を慕っています。美しい顔色、頭、髪、目、頬、唇、手、体、足、顔だち、そして、口を称賛します(雅歌5・10・16)。もちろん私たちは、主イエスの身体的特徴を連想するわけではありませんが、主の内面がどれほど気高いか、彼女に負けないくらい具体的に言えるようでありたいものです。

彼女は、昼も夜も愛する人のことを考えていました。ぶどう園で働こうが、夜、床につこうが、また、夢を見ている時であろうが、彼女の目に浮かぶもの、思うものを占めていたのは愛する人でした。もし、主イエスに対する愛の大きさのゆえに、朝から晩まで、主で心が満たされているとするなら、私たちにとつて幸いなことです。彼女は、彼以外には見向きもしませんでした。他の人々がいくら言い寄り、熱烈な称賛のことばで彼女を得ようとしても、彼女はその称賛を愛する者に向けるだけです。ですから、世の声が私たちを誘惑しようとしても、こう言いたいものです。

ああ、世の壮麗と栄光よ。お前の魅惑をどれほど見せつけても無駄というもの。

お前より聞いた話より、もつと心溶かされる話を私は聞いた。お前の中で見つけた利益にまさる、真の利益を私は見つけた。

キリストが場所を備え給うところこそ、私の慕うすみか。そこで私は、イエスを見つめ、そこで私は、神と共に住む。

彼女が、彼のことを話すのに何の苦勞もありませんでした。

その口は、心に溢れることを語るだけだったからです。その唇は、熟練の書記が手にするペンのようでした。主のことについてなら、他のどんな話題よりも、ためらいなく、よどみなく語る事ができたなら、どんなに素晴らしいことでしょう。しかし、残念ながら、現実はいつともそうとは限りません。

自分のようなものはふさわしくない、と彼女は痛いほど感じていました。彼女は、身なりに手入れをしていないこと、平凡であること、そして、そつけない態度を取ったことをお詫びしています。私たちも自分の罪深さ、すぐにさ迷い出てしまいがちな性質、そして、不従順を考えると、キリストがそもそも私たちのような者に関心を持つてくださるのだろうか、と疑問に思つても不思議はありません。

彼女にとつて何よりも嬉しいことは、彼と一緒にいることでした。自分を花嫁として迎えに来てくれる日を、彼女はどれほど待ち焦がれたことでしょうか。それよりもはるかにまさる熱望を持つて、私たちは、天より来られる花婿を待ち望むものでありたいと思います。その方といつまでも、共にいるためです。

その時が来るまでは、彼女の心は無力な捕われ人のようであり、自らも、「私は、愛の病にかかっています」と告白しています。彼女は、もうこれ以上待つのは耐えられないと感じていました。私たちもまた、心をイエスに捉えていただき、イエスに対する愛が外に溢れ出るほどに、心を満たしていただくことを熱望しようではありませんか。

「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。」

(ペリピ人への手紙3章13節)

使徒パウロは、目標点に到達したとは考えていませんでした。私たちがそう考えてはなりません。私たちはみな、変えられる必要があるのです。劉少奇(リウシャウチ)※中国の政治家、国家主席。一八九八―一九六九)は、言いました。「人間は、自分が変えられなければならない存在、また、変えられる可能性のある存在として自分を見る必要がある。決して、自分が不変なもの、完全に聖いもの、あるいは、改革の見込みのないものとみなしてはならない。…さもなければ、人間に進歩などありえない」。

問題は、大半の私たちが、自分が変えられることに抵抗を覚える点にあります。むしろ、「他の人が変わってくれたらいいのに」と切望するのです。相手のちよつと変わった性格にいららし、彼らがまともになってくれたらと願います。しかし、私たちは自分の特異な点には、無頓着か、さもなければ満足していて、直そうとすら思いません。他人の目からは「ちり」を取ろうとするのですが、自分の目の中にある「梁」は気に入っているのです(マタイ7・3・5参照)。他の人の欠点や失敗には胸が悪くなるのに、自分の場合にはそれも愛嬌(あいせう)にしか思えません。

問題は、私たち自身の意志にあります。もし、心から望むなら変わることができるのです。自分の性格の中には、好ましくない習性がいくつもあるという事実に向き合ひさえすれば、向上に向かつての第一歩を踏み出したことになるのです。

しかし、どう変わったらよいか、どうしたらわかるのでしょうか。一つの方法は、神のみことばに鏡としての役割をしてもら

うことです。みことばを読み、深く学ぶと、自分が本当はどうあらねばならないか、また、その基準からいかに離れているかに気がつきます。身に覚えのあることについて、それが罪であると聖書から責められるときは、勇気を持ってその事実に向き合い、それに対する行動を決意しなければなりません。

私たちが、どの点でキリストと似ていないかを知るもう一つの手がかりは、親族や友人のことばにじっくり耳を傾けることです。こうしてみたら、という提案は、優しく語られる場合もあれば、大型ハンマーのように振り下ろされる時もあるでしょう。そのことばが遠まわしであろうと、あからさまであろうと、相手が言いたいことをしつかり受け止め、感謝してそれを受け入れたいものです。

実際、友人の愛ある批評を参考にするのは、大変良い練習です。例えば、このように言ってみるのです。「私の性格のよくない部分とか、他の人にとって迷惑な私の行動について何か気づいた点があったら、遠慮なく教えてもらえるとありがたいのですが」。本当の友人であれば、必ずその希望に答えてくれることでしょう。

誰一人、腹を割って話をしてくれなかったとか、あるいは、自分が変わりたいとは思わなかったというだけで、教会や家庭、社会において、迷惑な存在であり続けるというのは、実に残念なことです。

私たちは、どこで相手の神経を逆なでしてしまうのか、それを具体的に見つけるための時間と手間を取り、そのまじい点を取り除こうと積極的(せきごく)に取り組むなら、私たちは周囲の人にとってもずっと付き合ひやすい存在になることでしょう。

「兄弟たち。互いに悪口を言い合ってはいけません。」

(ヤコブの手紙4章11節)

「ゴシップ」という単語そのものは、欽定訳聖書にはありませんが、陰口、悪口、ひそひそ話とは、まさにゴシップのことです。そのような習慣が、聖書のどこを見ても戒められているのは言うまでもありません。

ゴシップというのは、ある人に対して悪い印象を持つように、その人に関する情報を暴露することです。そして、その情報とは不親切な、意地の悪いものであり、大抵は、秘密で内緒という性質を帯びています。つまり、ゴシップをしている人は、自分の名前が出されたくないのです。

二人の女性が(ニューヨークの)ブルックリンで話していました。一人が言いました。「テイリーには言わないでとお願いしてあったのに、私がテイリーについて言ったことを、テイリーにしゃべったそうじゃないの」。するともう一方が、答えて言いました。「テイリーってなんて卑劣な人なのかしら。私がしゃべったことをあなたには言わないでねとあれほど言っておいたのに」。最初の女性が、こう返答しました。「実は、テイリーが私に言ったことはあなたに言わないとテイリーに話してあるのよ。だから、私が話したことをテイリーには黙っていてね」。

他の人について否定的なことを全く口にしない人は、世の中に滅多にいるものではありません。しかし、幸いにも私はそのような人々と知り合いとなり、ことばで言い表せないほど尊敬しています。もし、他の人について何も褒めるべきことがなかった場合には、何も言わないことにしています、と一人が教えてくれました。私は、他のクリスチャンの中に、主イエスを連想させるものを見出そうといつも努めています、と二人目の人は

言いました。三人目の人は、その場にはいない人のことについて、何か否定的なことを言いかけたのですが、文を言い終わらないうちに、「いや、こんなことを言っても人の徳を高めることにはならない」と言って途中でやめてしまいました。(それ以来、いったいその続きはなんだったのか、気になって仕方ありません。)

パウロは、コリント人の間に争いがあることを知りました。事実には直面してもらうため、「クロエの家の者からこのように私は聞いている」と語っています(1コリント11)。クロエの家族がゴシップをしていたのではないことは明らかです。問題が解決できるように、情報を伝えたのでした。

また、使徒パウロは、ヒメナオ、アレキサンデル、ピレトに対して、強い語調で非難のことばを書いています(1テモテ1・20、2テモテ2・17)。それは、彼らがキリストを伝える障害となっていたからでした。またパウロは、「フゲロ、ヘルモゲネ、デマスに気をつけよ」とテモテに警告しています(2テモテ1・15、4・10)。どうも、彼らは「手を鋤すきにつけてから、うしろを見る」(ルカ9・62参照)人々であったようです。

しかし、これはゴシップではありません。それは、同じ戦いに従事するクリスチャンに伝えるべき大事な情報だったのです。

著名な伝道者のもとに、興味をそそるゴシップを話そうと人がやってくる、彼は黒い手帳を取り出し、こう言うのを常としていました。そのゴシップをこれからメモに取り、話してくれたあなたに署名してもらい、この件の当事者に、この情報を伝えます、と。何百回その手帳を開いたかわからないほどでしたが、一度も実際に書き込むことはなかったそうです。

「あなたのしあわせのために、私が、きょう、あなたに命じる主の命令と主のおきてを守ることである。」

(申命記10章13節)

今日の聖句の最初のことば―「あなたのしあわせのために」―に目を留めてください。主の戒めのすべては、私たち自身のみしあわせのためにあります。これに気づいていない人が大勢います。神は、あたかも気むずかしい裁判官のようで、いろいろな規則や決まりを押しつけて、人生の楽しみを根こそぎ奪ってしまう存在だと考えているのです。しかし、決してそんなことはありません。神は、私たちが健やかに、また、楽しく過ごしていけるように気を配っていてくださり、主の律法のすべては、その目的にかなうように考えられているのです。

例として、十戒のいくつかを取り上げてみましょう。なぜ、私たちに他の神々がいてはいけない、と神は言われるのでしょうか。それは、人間が自分の拝む対象に似ていくこと、また、偽りの神々は人を墮落へと導くことを「存じだからです」。

なぜ、偶像を作つてはいけないのでしょうか。それは、偶像礼拝が悪魔礼拝と密接に関係しているからです。「彼ら(異邦人)のささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている…のです」(1コリント10・20)。そして、悪霊は、常に私たちの破壊をねらっているからです。

なぜ、神は、七日のうち一日を休息のためにより分けられたのでしょうか。それは、人間を創造されたのが神であり、人のからだにとって労働の休止が必要であることを「存じだからです」。一週間に七日の労働を課すという試みをした国々がありましたが、その結果、生産性はガタンと落ち、そうした実験は中止に追い込まれました。

なぜ、神は、親に従いなさいと子どもに命じられるのでしょうか。そうすることによって、子どもが無謀で反逆的な生活をしないで済むからであり、また、早死にするようなことのないためです。

なぜ、神は姦淫を禁じられるのでしょうか。そんなことをすれば、当事者の幸福が破壊されることはいうまでもなく、家庭や家族が崩壊してしまうからです。

なぜ、神は殺人を禁じられるのでしょうか。それは、罪責感と後悔、投獄、場合によっては極刑という結果に至るからです。

なぜ、神はむざばりを責められるのでしょうか。それは罪が、心の思いより始まるからです。その思いに耽^ひつているうち、やがてはそれが行動となります。源泉をおさえなければ、そこから流れ出る奔流は、もはや止めることはできません。

他の罪も同様です。神の御名をみだりに唱えること、盗むこと、偽証をすること・・・等々。そのような罪を犯しておきながら、ただで済むわけがありません。その付けは、霊、たましい、からだに及ぶのです。罪はどれも例外なく、反射的に痛みを伴う行動を引き起こし、罪人からは平安、喜び、満足が奪われます。私たちは、蒔いたものを刈り取らなければならないのです。悪行には、必ず報いがあるのです。

何年も前のことですが、ある人が、『温情あふれる神の律法』というタイトルの本を書きました。確かに、神の律法は温情に溢れています。それらは、私たちの幸福のために作られたものだからです。

「無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いつさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。」

(エペソ人への手紙4章31節)

人生は、思わず癩癩かんしゃくを起こさずにはいられないような状況に溢れています。次のような場面の中に、あるいは、自分もそうだが、と思えるようなものがあるかもしれません。

ウェイターの注ぐ熱いコーヒーが自分にかかってしまいました。いくら待っても食事が運ばれてきません。買ったばかりの商品を持って家に帰ってみたら、欠陥商品です。払い戻しをしようとする、販売員は横柄です。教えてもらった情報が間違っていたため、飛行機に間に合いません。新車を買って一週間も経たないのに、どこかの不注意な人が運転する車のせいでへこみができてしまいます。また、「電気製品を届けます」と、店は約束をしたのに、待てど暮らせど一向に配達されません。「今度こそ届けます」と繰り返し約束しますが、それが反故はごにされません。スーパーの店員が、実際に買ったものより高い金額を言うので、「それは計算が違いますよ」というと、横柄な態度で答えます。近所の人が、明らかに自分の子供の方がいけないのに、子供同士の喧嘩けんかをめぐって非難してきます。また、近所に住む別の人は、ステレオを大音量で鳴らしたり、パーティで大騒ぎをしたりして、いらだちが極みに達します。クリスマスチャンとして、証しをしたのが気に食わなかったのか、会社の同僚がいつも嫌がらせをします。コンピュータのミスで月間収支にいつも間違いが発生し、何度も電話で申し立てをしても、その後何ヶ月も同じミスが繰り返されます。お気に入りのスポーツを見ていたら、審判があきれるような間違った判定をくだします。自

宅の居間では、テレビのチャンネルをめぐって意見の衝突が起こるといふ問題があるかもしれません。

このような苛立たしい状況の中には、どうしようもないものもあります。しかし、信仰者にとって大切なのは、そうした状況にどう対応しているかという問題です。怒りを爆発させたり、迷惑なことをした人に、単刀直入に文句をぶついたりすればストレスがないかもしれません。しかし、クリスマスチャンが癩癩かんしゃくを起こしたら、その証しは台無しです。怒りだからだが硬直し、視線は氷のように冷たく、唇をわなわなと震えさせながら立ち尽くしている状況では、一言でも主イエスの証しをするなど論外です。その振舞いは、世の人となら変わりません。もはや、聖書を自ら否定しているも同じです。

ここで悲劇的なのは、迷惑を起こした人こそは、おそらく福音が必要な人であるということです。もしかすると、いらいの原因を作ったその人は、個人的に何か危機を経験していたのかもしれない。愛と思いを示してもらうだけで、その人は救い主のもとに来たかもしれない。

癩癩かんしゃくを爆発させたことよって、信仰者の証しが台無しになり、主の御名に恥辱がもたらされた例は、枚挙にいとまがありません。怒ったクリスマスチャンほど、信仰にふさわしくない「広告塔」はないのです。

「あなたは徒歩の人たちと走っても疲れるのに、どうして騎馬の人と競走できよう。あなたは平穩な地で安心して過ごしているのに、どうしてヨルダンの密林で過ごせよう。」

(エレミヤ書12章5節)

これは、早々に、また、簡単にあきらめそうになるときに、私たちが奮い立たせてくれる聖句ではないでしょうか。もし、小さな困難に直面することすらできないなら、どうして大きな困難に立ち向かえると期待できるでしょう。日常生活の取るに足りない打撃で倒れてしまうなら、どうして大鎚が繰り出す打撃に耐えられるでしょう。

誰かに「気分を害された」と言つてふてくされるクリスチャンもいるようです。「この仕事を降ります」と辞表を出す人もいます。理由を聞けば、誰かに批判をされたから、と言うのです。また、自分が気に入っているアイデアが却下されたので怒る人もいる、という具合です。

軽度の病気に過ぎないのに、手負いの熊のように吠えたけるとすれば、治る見込みがない病気になったら、どういう反応を示すのでしょうか。日常の問題にすら対処できないビジネススマンが、大きな問題に立ち向かうのは無理と言わざるを得ません。

私たちの誰もが、ある程度のたくましさを備えている必要があります。だからといって、とげとげしくなれとか、無神経になれという意味ではありません。むしろ、打撃を受けても、それを柔軟に受け止めることができるようでありたいということなのです。立ち直つて、また歩みを続けていく強靱きょうじんさが必要なのです。

もしかすると、あなたは今日、危機に直面しているかもしれません。この瞬間、その危機は山のように思えます。やめてしまいたい、という思いがふつとよぎります。しかし、今から一年経てば、そんなに重要なことはまったく思えないはずですよ。今こそ、詩篇の作者と共にこのように言うべきなのです。「あなたによつて私は軍勢に襲いかかり、私の神によつて私は城壁を飛び越えます」(詩篇18・29)と。

ヘブル人の手紙の筆者は誰なのかわかりませんが、受取人の人々に忍耐を呼びかけつつ、次のような興味深いことばを述べています。「あなたがたはまだ、罪と戦つて、血を流すまで抵抗したことがあります」(ヘブル12・4)。つまり、まだ最高の代価、すなわち、殉教という代価を払つたわけではない、と。大事な皿が割れた、猫が迷子になった、恋愛が実らなかつたということ、精神的にダメージを受けるといふ人は、殉教を目前にしたときに、いつたいどうするのでしょうか。

感情の言うなりになったら、私たちの大半は、とうに投げ出してしまったことでしょう。しかし、クリスチャンの戦いにおいて、投げ出す、ということはありません。地面から起き上がり、ちりを払い、戦闘の中に突入するのです。小さな戦闘で勝利を収めることは、重要な戦いで勝利を得ることにつながるのです。

「見よ。あなたがたはみな、火をともし、燃えさしを身に帯びている。あなたがたは自分たちの火のあかりを持ち、火をつけた燃えさしを持って歩くがよい。このことはわたしの手によってあなたがたに起こり、あなたがたは、苦しみの中に伏し倒れる。」

(イザヤ書50章11節)

あらゆることをするにあたって、正しい方法とは何で、間違つた方法とは何なのでしようか。特に、導きを受ける上でこの点は重要です。今日の聖句は、間違つた方法を説明しています。それは、かがり火を焚いてから、その火と燃えさしを使って自分の道を照らそうとする人を描いています。

主に相談したかどうかは、まったく言及されていない点に注意してください。それが祈るべきことであるという認識があつたかどうか不明です。どうするのが最善かわかっているという、限らない自信があります。傲慢ごうまんともいえる独立心を持って、自分の悟りに頼っています。(英国の詩人)ヘンリー(W.E. Henley)のことばを借りれば、「自分こそ、自分の運命の主、自分のたましいの導き手」なのです。

しかし、その悲惨な結末を見落としてはなりません。「このことはわたしの手によってあなたがたに起こり、あなたがたは苦しみのうちに伏し倒れる」。自分が進むべき道を自分でこしらえる人は、問題が起きる方向に突き進んでいるだけなのです。強情で自分勝手な人はみな、やがてそれを後悔することになります。結局、神の導きが最上の道であつたことを経験から知るようになるのです。

一つ前の節(10節)には、指針を得るための正しい方法がこのように書かれています。「あなたがたのうち、だれが主を恐れ、

そのしもべの声に聞き従うのか。暗やみの中を歩き、光を持たない者は、主の御名に信頼し、自分の神に抛り頼め」。この人について、三つのことが言われている点に注意してください。第一に、主に喜ばれないことをしたり、主に頼らずに歩むことを恐れる、という意味で、主を恐れている点です。第二に、神のしもべなる御方、主イエスの御声に従っている点です。第三に、自分は暗やみの中を歩いており、光を持っていない、と素直に認めている点です。どちらの道に行つたらよいのか、自分にはわからないと告白しているのです。

そのような人はどうしたらよいのでしょうか。主の御名を信頼し、自分の神に抛り頼むことです。すなわち、自分の無知を認め、「私を導いてください」と主にお願ひし、神の導きに完全に抛り頼むのです。

私たちの神は、無限の知恵と愛に満ちておられる神です。神は、私たちにとって何が最善かをご存じであり、私たちに益となることだけを計画してくださるのです。

神は知り、愛し、氣遣つておられる

この真理を曇らせるものは一つもない

神は最善をなしてください

その選択を神に任せる人々に

「あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言つときに、だれが石を与えるでしょう。」

(マタイの福音書7章9節)

この質問は、否定の答えを想定しています。普通、父親が自分の息子にパンの代わりに石を与えるはずはありません。ましてや、天の御父がそうなさることは決してあり得ません。

しかし、ときとして、私たちはまさにそれをやってしまうという悲しい現実があります。深い、霊的な悩みを抱えた人々が、私たちのところにやってきました。ところが、私たちは、その悩みの真の原因となつて、鈍感な場合があります。あるいは、主イエスを紹介することをせず、表面的な、通り一遍の解決策で済ませてしまうことがあります。

E・スタンレー・ジョーンズは、自分を例に取り、この点をわかりやすく説明しています(自分の失敗を話題にするというのは、一流の人物でなければできないものです)。

「(インドの)議員たちが、新しく権力を獲得し、それを、国に益をもたらすためではなく、自分のために行使しているのを見て、ジャワハル・ネルーは、もはや静観している場合ではないと悟つた。ネルーは、総理大臣を辞めて、内なる霊を回復するために、一線から退くことを考えていた。私がネルーに会つたのは、そのようなときであった。やがて、会見が終わろうとするときに、穀草(cereal grass)でできた錠剤の入ったビンを、「どうぞ」と、彼に渡した。そこには、それまで知られていたビタミンがすべて入つていたのである。ネルーは、お礼のことばと共に、そのビンを受け取ってくれたが、一言「うつけ加えた。」「私が悩んでいるのは、身体的なことではありません」。つまり、それは霊的な問題であるという意味だった。私は、恵み(Grace)ではなく、

草(Grass)を差し出したのである。パンを求める人に、石を上げたのである。自分には答えがあるとわかつてはいたが、それをどう表現してよいかわからなかつた。この偉大な人物に不快な思いをさせはしまいか、と恐れていたのである。私は、サト・タル・アシラムの壁にある標語を思い出すべきであつた。すなわち、『イエス・キリストが場違いであるような場所は、どこにも存在しない』ということばである。しかし、私がそれを思い出すことはなかつた。私は、自分ためらつたことを覚えていた。そして、ためらいの方が優勢になつてしまつたのだ。心を癒す神の恵み(Grace)を、ネルーが心から求めていたときに、私が差し出したのは草(Grass)であつた。もし、その恵みをいただければ、ネルーはこう言つていたかもしれない。『私の心は癒された。これで世界に直面できる。解決不能な問題でいっぱいの世界に。私の準備は整つた』と。

ジョーンズ博士の経験は、私たちにも十分身に覚えのあることではないでしょうか。深い霊的な悩みを抱えた人々に、私たちは出会います。キリストを紹介してくださいと言わんばかりに、心の扉が大きく開かれて示すサインを送つてくれます。ところが、私たちは、その機会を生かさないので、霊的な傷を負っているのに、「救急用の傷絆創膏きずばんそうこうを使つてはどうですか」と言つてみたり、つまらない話題に話を変えたりしてしまうのです。

(祈り) 主よ、あなたのことを証しするためのあらゆる機会を活用し、開かれたあらゆるドアから入っていくことができるように助けてください。ためらいに打ち勝ち、パンと恵みを必要とするところに届けることができるように助けてください。

「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

(ヨハネの福音書8章32節)

これが条件付きの約束の一部であることを忘れて、この聖句がよく引用されます。この一つ前の節には、こう書かれています。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です」。その後、この約束が続いているのです。「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」。つまり、私たちを解放してくれる真理の力は、主のみことばに留まるかどうかにかかっているのです。

単に、知的な意味で真理を知っているだけでは、十分ではありません。真理に従い、それを実行しなければ意味がありません。聖書の指針に従って生きるときに、無数の悪から解放されるのです。

福音の招きに応えようとすぐに、罪責感と罪の宣告から解放され、神の子たちの自由の中に導かれます。

その次に、私たちを支配する罪から自由にされます。もはや、罪が私たちの生活で幅を利かせることはありません。

律法からも自由です。私たちは無法状態になったのではなく、キリストと法的に結ばれたのです。それゆえ、私たちは、刑罰を恐れてではなく、むしろ、救い主を愛するがゆえに、もつと聖くされたいと願うものになったのです。

「完全な愛は、恐れを締め出す」(※1ヨハネ4・18参照)とある通り、恐れからも自由です。今や、神は慈愛の天の御父であり、気難しいさばき主ではありません。

サタンの束縛からも自由です。サタンが意のままに、私たちを引きまわすことはもうありません。

性的不品行からも自由です。淫欲のもたらす腐敗から逃れることができたためです(※IIペテロ1・4参照)。

偽りの教えからも自由です。神のみことばは真理であり、また、聖霊はすべての真理に導いてくださり、真理を誤りと判別できるように教えてくださるからです。主のみことばの中に留まるなら、迷信からも、また、悪霊の支配からも自由です。これはまた、何という素晴らしい解放でしょう——悪魔の諸勢力から自由の身とされたとは！

死の恐れからも自由です。もろもろの恐怖の中で王の地位にあった《死》も、今や、たましいを主の御前に先導する案内人にすぎません。「死ぬことも益なのです」(※ピリピ1・21参照)。

抜け出すことのできない習慣、金銭を愛する愛、希望のない生き方、そして、絶望からも自由とされています。これからは、私たちの心をことばにすれば、次のようになるでしょう。

主イエスよ。あなたの御足のもとこそ、私のいるべき場所です。

そこで、私は学びました。得も言われぬ教えと私を解放してくれる真理とを。

自我より、また、人の習わしより
主イエスよ、私は解放されました。

かつては鎖のごとく私を束縛していた考えに
もう二度と縛られることはありません。

「ああ、エルサレム、エルサレム。：わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」

(マタイの福音書23章37節)

「またとない信仰の好機を見過ぐす」と言われる現象がありません。神の側からの驚くべき訪れや栄光ある機会に恵まれているのに、そのチャンスをつかみ損なうという意味です。

それが、エルサレムに起きたことでした。肉体を持った人間となられた神の御子が土埃ちぼろの舞う通りを歩いて行かれました。黄土色の建物群は、宇宙の創造者にしてそれを保っておられる御方を見下ろしています。人々は、その比類なきことばを聞き、いまだかつて誰も行ったことのない奇跡が起こるのを見ました。しかし、この御方の真価を認めず、この方を受け入れようとはしなかったのです。

もし、受け入れていたならば、その後の状況はどれほど素晴らしいものになっていたことでしょう。条件は何かといえ、詩篇八一篇一三〜一六節に書かれている通りと言つていいでしょう。「ああ、ただ、わが人々がわたしに聞き従い、イスラエルが、わたしの道を歩いたのだしたら。わたしはただちに、彼らの敵を征服し、彼らの仇に、わたしの手を向けたのに。主を憎む者どもは、主にへつらつていますが、彼らの刑罰の時はずっと続く。しかし主は、最良の小麦をイスラエルに食べさせる。わたしは岩の上でできる蜜で、あなたを満ち足らせよう」。

イザヤもまた、実現していたかもしれないことを、このように表現しています。「あなたがわたしの命令に耳を傾けさえすれば、あなたのしあわせは川のように、あなたの正義は海の波のようになるであろうに。あなたの子孫は砂のように、あなたの

身から出る者は、真砂のようになるであろうに。その名はわたしの前から断たれることも、滅ぼされることもないであろうに」(イザヤ48・18)。

ブレット・ハートは、「舌にのぼり、ペンが記すあらゆることばの中で、最も残念なのは、『こうならずにするでいたかもしれない』(It might never have been)ということばだ」と書いています。福音の招きを拒んだ人々のことを考えてみてください。ナザレのイエスが目の前を通られたのに、出会いを逃してしまつたのです。今は、空しい人生を過ぐし、行く手には永遠のさばきが待っています。

また、この分野で仕えなさい、と具体的にキリストの呼びかけを聞いたのに、応答しなかったクリスチャンのことを考えてください。現在得ていたはずの祝福と、永遠の報いがどれほど大きいものであったか、本人には想像もつかないことでしょう。

チャンスは一回しか巡つてこない、というのは時として真実です。そのチャンスの背後には、選りすぐりの宝物が山のようにあるとはいえ、今の時点では、自分の計画と相入れず、自分に犠牲を伴うようにしか思えないかもしれません。そこには、私たちに神が用意された最高のものが結集されているのです。自分が自身の都合で、その機会をやり過ぐしてしまふのです。「主が最善である」と言われるものを断り、次善のもので妥協します。ですから、主は、いつもこう語り続けておられるのです。「わたしは、そうしようとしたのだが、あなたがたはそれを好まなかった」。

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」

(ローマ人への手紙1章18節)

歴史のある時を選んで、神は人類にさばきを降り注いで来られました。それは、人間が犯すある種の罪をどれほど嫌悪しておられるかを示すためでした。もちろん、そのような罪が犯される度に、人が神に打たれて死んだわけではありません。もし、そうであつたなら、世界人口は激減していたことでしょう。しかし、神は、個別の出来事を通して、そのような不敬虔と不義が罰を受けないではすまないことを明確にし、人類に警告を発しておられます。仮に、地上の時間の枠内でないにしても、永遠という時間において、神が決着をつけられることは確実です。

地が腐敗し、暴虐で満ちているのを天からご覧になると、神は洪水によって地殻の大変動を起こし、世界を滅ぼされました(創世記6・13)。逃れて生き残つたのは、わずか八人でした。

時代は下り、ソドムとゴモラの町々は、同性愛の中心地となりました(創世記19・1・13)。そればかりか、ソドムは高ぶり、飽食を常とし、安逸をむさぼりました(エゼキエル16・49)。神は、これらの町に火と硫黄の雨を降らせてご自身の怒りを表し、永遠に消滅させてしまわれました。

「しかしナダブとアビフは、シナイの荒野で主の前に異なった火をささげたとき、主の前で死んだ」(民数記3・4)。本来は祭壇から火を取るべきだつたのに(レビ記16・12)、二人は、それ以外の方法で神に近づいてみようと思ふを決めたのです。彼らがその場で息絶えたことは、主が定めた以外の方法で主に近づくこととする企てを封じる、後世への警告となりました。

バビロンの王ネブカデネザルは、人間世界の出来事の後後におられる至高者の存在に目を向けなかつたばかりか、バビロンのすべての栄華は自分の功績であるとうぬぼれました。これに対して、神は、狂気という罰をくだされます。王は、人間の中から追い出され、野の獣さながらに生活をし、牛のように草を食べ、からだは天の露に濡れ、髪の毛は鷲の羽のようになり、爪は鳥のかぎ爪のようになつてしまいました(ダニエル4・33)。

アナニヤとサツピラは、いかにも土地のすべてを主に捧げたかのように装いましたが、実は、密かに自分たちの分をより分けておいたのです(使徒5・1・11)。二人ともその場で死にましたが、それは、礼拝や奉仕において、言行不一致があつてはならない、という警告となっております。

その事件からしばらく後のこと、神に栄光を帰すことをせず、自分が礼拝されたことに満足したヘロデのからだは、蝕まれ、息が絶えてしまいました(使徒12・22・23)。

神が沈黙し、何も行動を起こされないように見えても、罪ある人間がそれを侮つてはなりません。神が即座に罪を罰しないからといって、最後まで罰は来ない、という意味にはならないからです。長い歳月にわたる個別の事例を通して、神はご自身の裁定をくだし、刑罰がそれに続くことを明らかにしておられるのです。

「真理を買い。それを売ってはならない。」

(箴言23章23節)

神の真理を手に入れるためには、代価を払わなければならない場合が少なくありません。それがいくらであれ、その代価を払う覚悟を持ちたいものです。そして、いったん真理を手に入れたら決して手放してはなりません。

この聖句は、しゃくじようき杓子定規に、つまり、聖書や信仰書を買ひ、それをどんなことがあっても人に売ってはならないと解釈すべきではありません。ここで、真理を買う、というのは、神に関する原理や原則の数々をしつかり知ることと引き換えに、大きな犠牲を払うことを意味します。それは、家族の反対かもしれないし、解雇されること、それまでの宗教的なつながりを断たれること、経済的な損失や、場合によっては暴力を受けることも意味しているかもしれません。

真理を売るとは、真理を曲げる、あるいは、まるごと放棄してしまうことを意味しています。決して、そのようなことを受け入れてはなりません。

著書『家の中の教会』の中で、アーノットは、こう書いています。「人間性の一般的原则からして、簡単に得たものは、失うのも容易である。苦勞して得たものであればあるほど、それを失うまい、と強く握りしめることになる。それが財産であれ、信仰であれ、同じである。苦勞もせず、汗も流さずに莫大な富を得た者は、往々にしてそれを散財し、貧困のうちに死ぬものである。途方もない努力によって財産を得た人が、自分が勝ち取った富を浪費することはまれである。それと同様に、私が会いたいの、キリスト信仰に至るために戦いを通ったクリスチャンである。火の中、水の中を通して今の恵まれた立場に至った

なら、その豊かな靈的資産をやすやすと手放すことはしないであらう」。

どの時代の聖徒も、家族、名声、財産に背を向けてきました。狭い門から入り、細い道を歩くためです。使徒パウロと同じように、主キリスト・イエスを知る知識の素晴らしさのゆえに、すべてのことを損とみなしたのです。また、(エリコの遊女)ラハブのように、異教の偶像を捨て、主を唯一の真の神として受け入れたのです。たとえ、それが自分の民族を裏切るように見えたとしても、意に介しませんでした。また、そのために、ダニエルのように、血に飢えたライオンでひしめく穴に投げ込まれる、という処罰を受けることになったとしても、真理を売り渡すことを拒んだのです。

私たちは、殉教者精神があらかた消えてしまった時代に生きています。信仰のゆえに苦しみを受けるより、信仰を譲歩する方を選びます。どこを向いても、預言者の声は聞こえてきません。信仰はたるみきつていきます。真理に対して確信を持つことは、独断的な態度として糾弾されます。一致があるように見せかけるためであるなら、根本的な教理をいくつか犠牲にしてもいいとすら思っています。真理を売りはしても、買おうとしはしないのです。

しかし、神の周りには、真理という隠れた宝をこよなく尊ぶ、宝物のような人々がいつも絶えることがありません。真理を買うためとあらば、すべてを売ることもいとわず、また、いったん買ったなら、どのような値段を提示されても決して売ろうとしない人々が…。

「私は私のすべての師よりも悟りがあります。それはあなたのさとしが私の思いだからです。私は老人よりもわきまえがあります。」

(詩篇119篇99、100節)

これらの聖句を読むと、初めは、青二才の大言壮語のように、また、どうにもならないうぬぼれ屋のことばのように感じられます。それどころか、このような自慢が、聖書の中にあること自体に驚くかもしれません。クリスチャンにふさわしくないことばに思えるのです。

しかし、この聖句を詳しく調べていくうちに、障害を取り除く鍵が見つかります。詩篇作者は、自分が優れた考え方ができるようになった理由を述べているからです。作者は、言います。

「それはあなたのさとしが私の思いだからです」と。つまり、聖書を知らない他のすべての教師よりも、自分は物事をもっとよく理解している、というのです。年は取つてはいても、その知識が世俗のものである人より、もつと多くのことを理解している、と。作者は自分を、他の信仰者と、ではなく、この世の人々と対比しているのです。

そうだとすれば、当然、作者の言っていることは正しいのです。ごく平凡な信仰者がひざまずいて祈りつつ見る方が、博学の不信者が背伸びをして見るよりも、多くが見えているのです。いくつか例を挙げて説明してみましょう。

一国のリーダーが、国民に約束して言います。もし、一定の行動を次々に行つていけば、世界に平和が訪れる、と。都会から離れたある村で、一人の農夫がその演説をラジオで聞いています。しかし、農夫は知っているのです。平和の君(イエス・キリスト)が、地上に王国を確立されるそのときまでは、決して平

和が訪れることはない。その時が来るまでは、「人々は剣を打ちなおして鋤に変え、戦いのことを二度と学ばない」(※イザヤ2・4参照)ことを。この農夫は、外交官よりもわきまえがあるのです。

次に、著名な科学者に会つてみることにしましょう。私たちが、今、知っている宇宙というのは、神の介在なしに存在するようになったと教えている人です。その講義を受けている学生の中に、最近キリストに立ち返つた学生が混じっています。この学生は、信仰を通して、もろもろの世界が、神のみことばで形作られたこと、そして、目に見えるものが目に見えないものから造られたのだということを理解しています(ヘブル11・3)。この学生には、先ほどの科学者が持つていない洞察があります。

さらに、人間の行動を説明しようと試みる心理学者がいます。しかし、人間には生まれ持った罪があるという事実を受け入れようとはしません。神のみことばを知っているクリスチャンなら、人間は一人の例外もなく、悪しき、墮落した性質を受け継いでいること、そして、このことを見落とせば、人類の諸問題に対して、何の役にも立たない解決策を掲げるのが落ちだということを知っています。

したがって、すべての教師よりも悟りがある、と言つた詩篇作者は、意味のない自慢話をしていただけではなかつたのです。信仰によつて歩む人は、目に見えるところを頼りに歩む人よりも、物事がよく見えているのです。神のさとしを思いめぐらす人には、この世の賢い人々や知恵者から隠されているさまざまの真理が見えるのです。

「主が、ことごとく私に良くしてくださいましたことについて、私は主に何をお返ししようか。私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう。」

(詩篇116篇12、13節)

たましいの救いに関しては、それを得るために私たちの側でできること、また、自分をそれにふさわしいもののできることは何一つありません。どんな形であれ、神に貸しを作ることはできませんし、神に償いもできません。救いとは、恵みの賜物であるからです。

神が、永遠のいのちを無代価で差し出しておられることにふさわしい応答をするには、まず、救いの杯をかかげること、すなわち、信仰によって救いを受け入れることです。その次に、主の御名を呼び求めること、すなわち、ことばに表せない賜物に感謝し、神を賛美することです。

救われた後ですら、主から与えられたもろもろの恩恵にお返しできることは、何一つありません。「ああ主の恵みに報ゆる術なし」(※アイザック・ウオッツ。聖歌『さかえの主イエスの』)とある通りです。しかし、私たちにもできるふさわしい応答があります。それは、(※賛美歌の後半にあるように)「ただ身とたまとを献げてぬかずく」ことです。

主イエスが、私たちのために御自分のからだを与えてくださったのであれば、私たちにできる最低限のことは、主のために自分のからだを捧げることではないでしょうか。

ウガンダのピルキンソンはこう言いました。「もし、イエスが王であるなら、すべてに対して正当な権利がある」。C・T・スタッドは言いました。「イエス・キリストが、私のため死んでく

だされた、ということが分かるにつれ、主のためにすべてを捧げるのは難しいことには思えなくなつた」と。

エール大学のボーデンは、こう祈りました。「主イエスよ。私の人生に関しては、一切をお委ねします。私の心の玉座にどうぞお即きください」。

ベティ・スコット・スタムは、祈りました。「私は自分自身を、自分のいのちを、そして、自分のすべてを、残らず永遠にあなたに捧げます」と。

チャールズ・ハドン・スボルジョンは、言いました。「わが救い主に自分自身をお委ねしたその日、私は、自分の肉体、たましい、霊を捧げた。自分の持てるもの、また、これから永遠に渡つて持つであろうものすべてを捧げた。すべての賜物、力、能力、両目、両耳、良心、四肢、感情、判断力、男性としてのすべて、そして、そこから生み出されるすべてのもの、授けられるかもしれない新しい能力や可能性のすべてを捧げたのである」。

最後に、アイザック・ウオッツは、次のように気づかせてくれています。「恵みに報ゆる術を知らず」。しかし、それに加えてこう歌うのです。「すべてを投げ出し、ただひれ伏す」(※聖歌『虫にも等しき』)。

イエスの受難——血が流れ出るその御手、御足、その打ち傷、その涙——を考えれば、ふさわしい応答はただ一つ、私たちの生涯をいけにえとして、主に捧げる以外にありません。

「ダビデはしきりに望んで言った。『だれか、ベツレヘムの門にある井戸の水を飲ませてくれたらなあ。』」

(歴代誌第一11章17節)

ベツレヘムは、ダビデの郷里でした。すべての表通りも、路地も、市場も、共同井戸のこともよく知っていました。ところが、今は、ペリシテ人がベツレヘムに守備隊を置いているため、アドラムの洞窟に身を潜めるしかありません。「ベツレヘムの井戸の水が飲めたなら」と、ダビデが切に願っていることを耳にした三人の部下は、敵陣を突破し、ベツレヘムの水をダビデのところを持ち帰りました。ダビデは、勇気あるこの愛と献身の行為に深く感動して、その水を飲むことができなくなり、主への捧げものとして注ぎ出したのです。

この場面のダビデを、主イエスのお姿として考えることもできます。ベツレヘムがダビデの土地であったのと同様に、「地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のもの」なのです(※詩篇24・1)。本来、王座に着いているべきダビデは、洞窟にいました。同様に、本来、主は世界の求めにに応じて王座に即くべき方なのに、実際は拒まれ、縁が切られたままです。ダビデが水を慕い求めたのは、救い主が世界中の人々のたましいを求めて渴いておられることと似ています。神に造られた人間が、罪と自我、そして、この世から救われるのを見て、言わば主は元氣を取り戻したいと願っておられます。このダビデの三勇士は、指揮官の願いを満たすためとあらば、自分の安楽、都合、安全を投げ出すことをいとわなない、キリストの大胆な兵士の姿を表しています。彼らは、良き知らせを世界の隅々にまで運び、回心した人々を愛と献身のいけにえとして、主に捧げるのです。感極まったダビデの姿は、あらゆる種族と国民

の中から、主の羊が集まってくるのをご覧になる救い主の様子を暗示しています。主は、ご自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足されるのです(イザヤ53・11)。

ダビデの場合、部下に命令することも、説き聞かせることも、なだめすかすことも不要でした。かすかな手がかりがあれば十分だったのです。彼らは、それを司令官からの命令として喜んで受け取ったのです。

それでは、その尊い血で買い取った者に、主が何を切望しておられるか知った私たちはどうしたらよいのでしょうか。宣教の必要がどれほどのものか、切々と訴えられたり、講壇の前進み出ていく呼びかけが必要なのでしょう。『だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう』(イザヤ6・8)と、主が問いかけておられることに耳を傾けるだけで十分ではないのでしょうか。部下たちは、ダビデのためにすぐに腰を上げたのに、私たちは指揮官である主のためであるのに、腰が重いのでしょうか。それとも、『どれほどかすかなご希望も、私への命令と心得ます』と、私たちは主にお答えするのでしょうか。

「狭い門からは入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」

(マタイの福音書7章13、14節)

今日の宗教世界を見渡すと、そこには数多くの宗教や宗派、そして、カルトのあることがわかります。とはいえ、基本的には、今日のみことばが示唆するように、宗教は二つしかないのです。一つは、門が広く、道幅も広く、大勢の人が通る道で、その終点は滅びというもの。もう一つは、門が狭く、あまり人が通らない細い道で、その終点はいのちというものです。すべての宗教は、このどちらかに分類されるのです。この両者を区別する特徴は、次の点です。一方は、救いを得るために、または、救いにふさわしいものとなるために人間が何をしなければならぬかを教えるのに対し、もう一方は、人間を救うために神がどんなことをしてくださったかを教えます。

本當のキリスト教信仰が他と顕著に異なるのは、永遠のいのちを信仰による賜物として受け取りなさい、と人呼びかけている点です。それに対し、他の宗教はすべて、行いや人格によって救いを自分のものにしなければならぬと説いています。福音は、私たちが贖われるために必要なことはキリストが遂げてください、と告げていますが、他の宗教はすべて、人間が自分を贖うために何をしなければならぬかを説きます。なおも行いをするのか、それとも、行いが完了したのか、そこに違いがあるのです。

多くの人は、善人は天国に行き、悪人は地獄へ行くと考えています。しかし、聖書が教えるところによれば、善人は一人も

おらず、天国へ行くことができるのは神の恵みによって救われた罪人だけです。キリスト信仰の福音には、誇りの入る余地はありません。「神からの恩恵に与るために人間ができる功德などどこにもない」と福音は教えます。人間は、罪と咎の中に死んでいるからです。他の宗教は、ことごとく、人間には自分を救うためにできることがある、とか、救われるために役立つことがある、と教えて、人間のプライドをくすぐっているのです。

すべての偽りの宗教は、「人の目にまっすぐに見える道」であるばかりでなく、死で終わる道です(箴言14・12)。主イエス・キリストを信じることによつて救われる、というのは、人間にとつて「あまりにも簡単すぎる」と思えますが、それこそは、いのちに至る道なのです。偽りの宗教においては、キリストは無意味な存在であるか、もしくは、つけ足しのような存在です。しかし、真正のキリスト信仰においては、キリストがすべてのすべてなのです。

他の宗教の場合には、救いの確信というものは、まったく得られません。自分が果たして良い行いを十分にしたか、または、なすべきことをしたのか、知る由もないからです。しかし、キリストを信じる者は、自分が救われたことを知ることができません。なぜなら、自分がしたことというより、キリストが自分のためにしてくださったことが問題だからです。

宗教には二種類があるのみです。――一つは、律法の宗教、もう一つは、恵みの宗教です。一方は、行ないによる宗教、他方は、信仰による宗教です。一方は、頑張り、もう一方は、信頼によるものです。前者は、最終的にさばきと死に至り、後者は、義といのちに至るのです。

「ヌンの子ヨシユアは、知恵の靈に満たされていた。モーセが彼の上に、かつて、その手を置いたからである。イスラエル人は彼に聞き従い、主がモーセに命じられたとおりに行なった。」

(申命記34章9節)

この聖句から知りうる重要な点は、自分の役割が終わりに近づいたことを悟ったモーセが、ヨシユアを後継者として任命していた、ということです。そうすることによって、モーセは、靈的指導者の立場にある人に、立派な模範を残しています。これは、今さら強調するまでもない初歩的なことである、と考える人もいるかもしれませんが。しかし、後継者を訓練して、仕事を引き継ぐという点において、無残な失敗が少なくないというのが実態なのです。やがて、誰かと交代しなければならぬと考えることに對して、私たちには、生まれもった抵抗感があるように思われます。

これが個々の教会において、長老の直面する問題となる場合があります。おそらく彼は、長年の間、忠実に仕えてきたことでしょう。しかし、群れを養うことができなくなる日が、目前に近づいています。それなのに、自分と交代できるように若者を訓練することがなかなかできません。青年たちが自分の地位を脅かす存在に見える場合もあります。あるいは、青年たちの未熟さと自分の円熟さを対比して、彼らはまだ到底この職責に耐えられまい、と結論を下すかもしれません。かつては、自分がどれほど未熟であったか、また、自分が群れの監督から訓練を受けたおかげで、今のような円熟さを持つに至ったことをたやすく忘れてしまうのです。

宣教地においてもこれが問題となります。現地の人々を訓練して、指導的な役割を果たせるようにしなければならぬ、と

宣教師には分かっています。しかし、自分にはまだ及ばない、と(現状を)正当化します。しかも、彼らは失敗がやたらに多い、もし、自分が説教を全部担当しなければ、出席者の数はがた落ちだ、そして、結局、彼らには(他の人を)指導するのはまだ無理だ、と考えるのです。以上のような議論のすべてに對しては、宣教師であるなら自分を使い捨てる存在と考えなければならぬ、と答えるだけで十分でしょう。現地の人を訓練して權威を委譲し、その特定の地域における働きから身を引くのです。まだ開墾されていない宣教地は、常に他の場所にあります。宣教師がその職を失う必要はどこにもありません。

モーセの後をヨシユアが引き継ぐ際、その交代は円滑でした。指導体制に空白は生じませんでした。神に仕えながら精神的ダメージをこうむるという事態が避けられました。本来はこうでなければなりません。

若い人々が指導的な立場に就くのを見たなら、神のしもべたちはみなそれを喜ぶべきです。このような若い弟子たちに、知識と経験を伝えることができること、そして、死に強制されるうちに、引き継ぐことができるのは大きな特権である、と考えるべきです。モーセは、これとは別の機会に、「主の民がみな、預言者となればよいのに」と言いましたが、そのような無私の状態こそが必要なのです。

「御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」

(ヨハネの福音書16章13、14節)

御霊は自分から語るのではない、と主イエスが言われたのは、御霊がご自分のことにはいつさい触れない、という意味ではありません。むしろ、御霊はご自分の権威に基づいて、または御父なる神から独立して語られることはない、という意味です。これは、それに続くことば、「(御霊は)聞いたままに、その通りに話し」(英訳)からも確認できます。新米国標準訳(NASV)は、「御霊はご自分の主導権で語るのではない」と訳しています。

しかし、それはそうであるにしても、聖霊は、通例、ご自身のことについて語ることはない、と言い添えなければなりません。聖霊に特徴的な役割の一つは、キリストの栄光を表すことです。イエスは言われました。「御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです」。

つまり、主イエス・キリストが崇められるようなみことばの解き明かしこそ、御霊の導きを受けているものと確信できる、ということなのです。それに対し、主より、むしろ話し手に栄光が帰されるメッセージの場合は、御霊が悲しんでおられると思つてよいのです。御霊は、イエスの偉大さと話し手の偉大さを同時に証しすることはできないからです。

「最も霊的な教えにおいては、キリストが余すところなく、また、絶えることなく提示されているという特徴がある。キリストは、いつもこのような教えの中心を占めておられる。御霊

は、イエス以外に宿るところをお持ちにならない。イエスに関することなら、御霊は喜んで話される。イエスの魅力と卓越性をはつきり示すことを、こよなく喜ばれる。したがって、神の御霊の力によつて主の働きをするときには、他の何物にもまして、キリストがその働きの大部分を占める。このような働きにおいては、人間的な論理や理屈が入る余地はないといつてもよい。御霊が唯一の目的とされるのは、キリストを示すことである」(C・H・マッキントッシュ)。

それに関連して言えば、福音主義諸派が、講師の学問的業績と神学研究における榮譽を延々と述べる、という慣習は、再検討するべきでしょう。天にも昇るほど人をほめあげた後で、御霊の力によつてみことばから語るのを期待する、というのは、現実的ではないからです。

書物を通しての働きを判別する重要な試金石は、それが、主イエスに栄光を帰すものかどうかという点です。『聖霊——その御人格と働き』という本を読んだことを思い出します。はじめのうちは、著者が聖霊より、むしろ、キリストの道徳的卓越性についてページを費やしているのを見て変に思つたものです。しかし、その後で気づきました。これこそ、聖霊の御人格と働きのなせるわざなのだ、と。

ジム・エリオット(※エクアドルで殉教した宣教師)は、日記にこう記していました。「もし、御霊に満たされたなら、人は御霊について本を書くことはせず、御霊が啓示するために来てくださつた御方について書くことだろう。神のご目的とは、私たちがキリストに占有されることであつて、御霊で満たされることそのものではない」。

「いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」

(ヨハネの黙示録20章15節)

《地獄》という主題を聞くと、さすがにそれは受け入れられないという抵抗感が人間の心に生まれます。その抵抗感を端的に表しているのが、「愛である神がどうして、永遠の地獄を用意しておられるのか」という疑問です。

もし、パウロがその疑問に答えるとするなら、開口一番にこう言うことでしょう。「神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか」(※ローマ9・20)。「たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです」(※ローマ3・4)と。

つまり、被造物が創造者である方に対して質問する権利は、まったくないということなのです。もし、神が永遠の地獄を用意しておられるとするなら、正当な理由があつてのことです。神の愛、神の正義を疑う権利は、私たちにまったくありません。しかし、この問題に関しては、神のなさることに間違いはないという十分な説明が、聖書の中にあります。

まず、第一に、神が地獄を作られたのは、そもそも人間のためではなく、悪魔とその御使いのためであつたという点です(マタイ25・41)。

第二に、神のみこころは、一人として滅びることなく、すべての人が悔い改めに至ることである、ということも私たちは知っています(IIペテロ3・9)。もし、地獄に行くような人がいるなら、主のお心にとって大きな悲しみなのです。

問題の根源は、人間の罪です。神は聖く、公正で、正義であられるので、罪を罰しないまま放置なさることができません。「罪を犯したたましいは死ぬ」(エゼキエル18・4英訳)という

のが神の宣告なのです。神は、気まぐれに宣告しておられるわけではありません。聖なる存在である御方が、罪に対して取り得る姿勢は、それ以外にはあり得ないのです。

神は、この件はそこで終わりにすることもおできになりませんでした。つまり、人間は罪を犯したので、死ななければなりません。

しかし、神の愛がそこに介入したのです。人間が永遠の滅びを免れるため、救いの道を開こう、と神は究極の非常手段を取ってくださいました。神は、罪深い人間の身代わりに死なせよう、と唯一の御子を遣わし、違反を償ってくださいましたのです。十字架で御自身のからだをもって、人間の罪を負ってくださいました。救い主の素晴らしい恵みです。

今、神は、罪を悔い改め、主イエス・キリストを信じるすべての人に、無代価の賜物として、永遠のいのちを提供しておられます。神は、人の意志に反してまで、人を救おうとはされません。いのちの道を選ぶのは、人間の責任です。

率直に言えば、成し得ることのすべてを、神は成してくださいましたのです。しかも、期待できる以上のことをすでに成し遂げてくださいました。神が無代価で提供しておられるあわれみを拒めば、もはや選択肢は何も残っていません。天国を拒むという人は、熟慮の上で地獄を選んだことになるのです。

「永遠の地獄を用意した」と、神を非難するのは見当違いも甚だしいと言わなければなりません。そのように考える人は、地上で最悪の罪人でも、火の池に投げ込まれるという苦悶くもんを通して、なくもいいように、神が天国で最も尊い御方を地に遣わされた、という事実を、見落としているのです。

「滅びに至らせる友人たちもあれば、兄弟よりも親密な者もいる。」

(箴言18章24節)

イエスが私たちの友であられるという主題は、世界のあらゆるところにいる御民の心に温かい反応を喚起せずにはおきません。地上におられたとき、主は、「取税人や罪人の仲間だ」(マタイ11・19)と言って嘲られました。しかし、クリスチャンたちは、その侮蔑を甘んじて受け、それを名誉ある称号に変えたのです。

十字架に向かう前、主は、弟子たちを「友」と呼んでくださいました。「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです」(ヨハネ15・14・15)。

最もよく愛唱される讃美歌のいくつかは、この主題を取り上げたものです。例えば、「いつくしみふかき友なるイエスは」、「主イエスのごときとはほかにあらず」、「わが友主イエスはわれを見出し」など…。

なぜ、イエスが友であられるということが、このような反応を呼び覚ますのでしょうか。その理由の第一は、多くの人が寂しさを抱えているからだだと思います。周りに大勢の人がいたとしても、友人によつて囲まれているわけではないのです。あるいは、他の人々との有意義な交わりから切り離されているかもしれません。同年代の人々が他界してしまった高齢者によくありがちな状況です。

孤独とは、冷酷です。肉体的にも、精神的にも、情緒的にもよくありません。氣力を蝕み、神経をいら立たせ、「生きていくのはうんざりだ」という気持ちにさせます。その結果、捨てば

ちになつて、罪と妥協する道を選んだり、正気の沙汰とは思えない無謀な行動を取ったりすることも珍しくありません。このような人々にとつて、イエスが友であられるということは、ギルアデの乳香(※芳香性の樹脂または香料で、傷を癒すために用いられたもの)のように、癒しの効果があるのです。

イエスが友であられるということが、素晴らしいもう一つの理由は、それがなくなる心配がないということです。人間の友情であるなら、失望したり、いつの間にか消えたりしていくことが少なくありません。しかし、友なるイエスは常に真実であり変わることはない、と経験から分かるのです。

地上の友は裏切り、見捨てることもなしとはしない

慰めてくれる目があつても

翌日は悲しみのもととなるかもしれない

しかしこの友なるイエスは、決して私たちを欺くことはないのだ

ああ、何たる愛をもつて愛しておられることか！

イエスは、兄弟よりも親密な友であり、どんなときにも愛してくる友です(箴言17・17)。

主イエスが、目に見える体をもつて、共にいてくださらないからといって、主が友であられるという現実が制限がかかるわけではありません。みことばを通して語りかけてくださり、祈りを通して私たちの方から語ることができるからです。このようにして、主は、私たちが必要とする友として、ご自分が生きておられることを示して、祈りに答えてくださるのです。

主イエスよ、私にとり

御自身が生ける、輝かしい存在となりますように

地上のいかなるものよりも、信仰の目に明確に映りますように

地上のどれほど親密な絆より

もっと慕わしく近しいものとなりますように

「愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。」

(ペテロの手紙第一2章11節)

自分の手紙を読む人々が、旅人であり寄留者であることを、ペテロは思い起こさせていますが、この自覚が、今日以上に必要なきはありません。寄留者とは、一つの国から他の国へと旅をする人のことです。途中、通過する国は、自分の国ではありません。ここでは、異国人です。これから向かおうとしているところが、本国なのです。

寄留者の特徴は、その天幕です。したがって、アブラハムがイサク、ヤコブと共に、天幕に住んだと書かれているのは、(それがやがて与えられるとの約束はあったとはいえ)カナンを異国と考えていたと、理解しなければなりません。アブラハムが一時的な仮住まいに甘んじていたのは、「堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です」(ヘブル11・10)。このように、寄留者とは、定住してしまわずに、常に移動を続ける人です。

長い旅を行う寄留者は、身軽です。持ち物が多すぎると、その重荷で旅の進行が妨げられるからです。不要なものを運ぶゆとりはありません。移動の邪魔になるものは、放棄していくのです。

寄留者のもう一つの特徴は、すでにそこを終着の場所と決めた周囲の人々と異なるという点です。その生活の仕方、習慣、また、礼拝の形式にさえ、溶け込もうとはしません。寄留者であるクリスチャンにとつて、それは、ペテロが勧めるように、「たましいに戦いをいどむ肉の欲」を遠ざけることにほかなり

ません。そして、周囲の環境が人格形成に影響を及ぼさないように気をつけます。世にいることは確かですが、世には属していないのです。異国を通過はしますが、その道徳的姿勢や価値判断を取り込みはしません。

敵対関係にある領土を通過するときには、敵と親しくならないうように気をつけます。そうなることは忠節に反し、裏切り行為となるからです。

寄留者であるクリスチャンとは、敵の領土を通過しつつある存在です。この世が、私たちを導かれる主に与えたのは、十字架と墓だけでした。そのような世と仲良くなることは、主イエスを裏切ることにほかなりません。しかし、キリストの十字架によつて、今まで私たちを世に結びつけていた絆は断ち切られました。私たちは、世の称賛を求めることもしなければ、その非難も恐れません。

日ごとに前進した分だけ本国に近づいていることを知ると、寄留者に、旅を続ける力が湧いてきます。やがて目的地に到達すれば、途中の困難や危険はたちどころに忘れてしまうとわかっているからです。

「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあつて、一つだからです。」

(ガラテヤ人への手紙3章28節)

このような聖句を読むときには、それが意味することと、意味していないことを知ることがとても重要で、さもなければ、いつの間にか、他の聖書の部分にも無理な解釈をほどこし、現実になぞらない奇怪な立場を取っている自分に気がつく結果になることでしょう。

この聖句の鍵は、「キリスト・イエスにあつて」ということばの中にあります。それは、私たちの立場、すなわち、私たちが神の目にどのように見えているかを説明しているのであつて、私たちが日常生活において、つまり、私たちが基本的に、あるいは社会においてどのような存在であるのかについて述べているわけではありません。

したがつて、この聖句は、神の御前における立場に関する限り、ユダヤ人とギリシヤ人の区別はないと言っていることになります。信仰を持つユダヤ人もギリシヤ人も、両者共にキリスト・イエスの中に置かれており、その結果、両者共に神の完全な恵みを受ける立場にあります。どちらか一方が他方に対して優位に立つことはありません。しかし、だからといって、身体的、気質的差異が消滅したという意味ではありません。

キリスト・イエスにあつては、奴隷と自由人という区別はありません。奴隷も自由人と同様に、キリストとその御わざによつて、神に受け入れられます。しかし、日常生活における社会的差異はそのまま残っているのです。

キリスト・イエスにあつては、男性も女性もありません。信仰を持つ女性は、信仰をもつ男性とまったく同じように、キリストにあつて完全なものとされ、愛する御子に受け入れられ、無代価で義としていただけます。女性も、神の御前に入る自由については、同等なのです。

しかし、この聖句を日常生活に無理やりあてはめてはいけません。男性と女性という性的差異は残ったままだからです。当然、その延長線として、父親、母親の役割の違いも、そのまま残っています。神によつて定められた権威ある立場、また、権威に従うという立場もそのままです。つまり、男性にはかしらとしての立場があり、女性には男性の権威に服する立場が与えられているのです。新約聖書には、教会における男女の役割の違いまで、具体的に書かれているほどです(1テモテ2・8、2・12、1コリント14・34・35)。教会の中では男も女もないはずだ、と主張する人は、その結果、これらの聖句をねじ曲げたり、使徒パウロにつまらない下心があつたと言つてみたり、これらの箇所におけるパウロのことばが聖霊の靈感を受けているかどうか疑わしい、とまで言わざるを得なくなり、ます。

そういう人たちが悟らなければならぬのは、神の御前における立場に関する限り、人種も社会的地位も、男女の違いも消滅したとはいえ、日常生活では、それがそのまま残っているという点です。また、そのような差異は、他の人より劣っているかどうかとは、無関係であることも悟らなければなりません。異邦人、奴隷、女性が、ユダヤ人、自由人、男性に比べて劣っているわけではないのです。多くの面で、むしろ、優れているかもしれない。私たちは、創造と摂理における神の秩序を書き換えようとするのではなく、それを受け入れ、喜ぶべきなのです。

「ばらまいても、なお富む人があり、正当な支払いを惜しんでも、かえって乏しくなる者がある。」

(箴言11章24節)

聖霊は、ここで楽しい秘訣をそつと教えてくださっています。私たちの予測にはことごとく反するのに、常にその通りなのです。その秘訣の自身はこうです。与えれば与えるほど、多くを持つことになり、自分のために蓄えれば蓄えるほど、持つているものは少なくなる。惜しまないで与えるとかえって増え、惜しんでいると貧しくなる。「与えたのに持つこととなった。費やしたのに手に入れた。失わないように気をつけていたのに、いつの間にかなくなつた」とある人は、表現しています。

自分が「蒔いた」と同じく、お金として戻つてくる、とか、忠実な管理者は経済的に豊かになる、という意味ではありませぬ。「お金を蒔いて、たましいを得る」ということかもしれませぬ。「親切を蒔いて、友を得る」ということかもしれませぬ。「同情を蒔き、愛を得る」ということかもしれませぬ。

物惜しみをしない人は、他人があずかり知ることができない報酬を得るのです。自分が送つたお金が丁度必要な金額で、丁度よい時に届き、危急の事態から救われたというのを、郵便物を開封して知ります。若いクリスチャンのために買ってあげた本が、神に用いられ、その人生の方向全体が変えられます。イエスの御名のために示した一回の親切がきっかけとなり、ついに一人の人が救われます。それは、至福の時です。その喜びは、天にまで届くほどです。自分よりも財産があるように思われる人と立場を入れ替わりたいとは、絶対に思いません。

この真理を逆から見ると、「自分のために蓄えると、貧しくなる」ということでもあります。実際、銀行に眠っている金銭か

ら喜びを得ることはできません。偽りの安心感を持つような錯覚が引き起こされるかもしれませぬが、真の永続的な楽しみをそこから引き出すことはできません。その預金が紡ぎ出す微々たる利子は、キリストの栄光と同胞の祝福のために金銭が用いられるのを見る感動と比べれば、取るに足りませぬ。正当な支払いさえも惜しめば、預金高は大きくなるでしょうが、この世の差引残高では、わずかの喜びしかなく、天国の預金残高はわずかです。

今日の聖句は、神による原則の一つを示すに留まらず、神からのチャレンジをも示すものでもあります。主は、言っておられます。「自ら試してみよ。あなたのパンと魚を私に任せてみよ。それは、あなたの弁当であると私には分かっている。しかし、そのパンと魚を私に渡すならば、あなた自身の昼食はおろか、さらに数千人の腹も満たすほど増えることだろう。周囲の人々がすわつて、あなたが食べるのをじつと見ていたら、氣まづくはないか。しかし、その反対に、私があなたの弁当を用いて群衆の腹を満たしたことを知ったときの満足感を思つてみよ。」

自分に費やしたものは失われて戻つてこない

されどすべてを与えたもうあなたに

お貸したものは何であれ

果てしなく宝として私たちに残る

(チャールズ・ワーズワース)

「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」

(ヨハネの手紙第一 3章17節)

医学界で、癌の治療法が分かりながら、それを世界中の癌患者と共有しないでいる、という事態は想像もできません。治療法を封印しておくとなれば、それは無神経で、人道に反するほど同情の念を欠いていると、自ら告白しているようなものです。

使徒ヨハネは、霊的な領域でそれに似た状況を描いています。自分はクリスチャンであると言い、かなりの富を蓄えた人がいます。彼は贅沢な生活をし、快適、安楽に暮らしています。ところが、彼の周りは、とてつもない霊的、物質的を抱えた人々ばかりです。世界には、まだ福音を一度も聞いたことのない人が何百万人もいます。彼らは、暗闇と迷信、絶望の中で暮らしています。飢饉や戦争、自然災害による惨状の中にも人も少なくありません。ところが、この資産家は、この窮乏に無頓着です。むせび泣き、苦しむ人類のうめきが遮断できるので、自分が望めば、援助ができます。しかし、自分の財産を手離さない方を選択するのです。

ここに至って、ヨハネは爆弾発言をしました。彼は、こう尋ねます。「あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているといえるでしょう」。この質問は、もちろん、あわれみの心を閉ざすような者に、神の愛が宿つてなどいないことを意味しています。そして、もし、神の愛が宿つていないなら、彼が本当のクリスチャンであるかどうか、疑うべき正当な理由があるのです。

これは、実に深刻な問題です。今日の教会は、資産家をことのほか重んじ、長老職に任命し、訪問客に真っ先に紹介します。「裕福なクリスチャンに会うのはいいものだ」という雰囲気広がっています。しかし、ヨハネは尋ねるのです。「もし、彼が本当にクリスチャンであるなら、こんなにも多くの人々がパンに飢えているのに、なぜ、余分な富を少しも手離そうとしないのですか」と。

この聖句は、私たちに二つの行動のどちらかを取るよう迫っているように思えます。一つは、ヨハネのことばが明白に述べていることを退け、良心の声を封じ、わざわざこのようなメッセージをする者に、非難の矛先を向けることです。しかし、その一方、柔和な心でそのことばを受け止め、兄弟の必要を満たすために自分の富を用い、神に対しても人に対しても責められない良心を持つことも可能です。質素な暮らしに甘んじ、浮かせた分はことごとく主の働きに捧げるクリスチャンであるなら、神に対しても、困窮している兄弟に対しても心騒ぐことはないのです。

「私の子どもたちが真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。」

(ヨハネの手紙第二4節)

もちろん、使徒ヨハネは、たましいを主のもとに連れ戻す喜びを知らないわけではありませんでした。一人の罪人を、主イエスのもとに導くことは、たとえようもない霊的喜びをもたらすものです。しかし、ヨハネにとつては、それより大きな喜び——それどころか、最大の喜び——とは、信仰による自分の「子供たち」が、主にあつてまつすぐに成長していくのを見ることだったのです。

M・R・デハーン博士は、こう書いています。「伝道の働きに従事しながら、こう考えた時期があつた。クリスチャンの最大の喜びは、たましいをキリストに導くことである、と。しかし、それから何年も過ぎていくうちに、私は考えを変えた。：信仰告白をしたというので、私たちが喜んだあれほど多くの人たちが、途中で脱落し、私たちの喜びは、これ以上ないほどの嘆きと悲しみに変つた。しかし、何年も経ってから戻つてみて、回心した人々が恵みの中で成長し、真理の中を歩んでいるのを見たとき、これこそが最大の喜びであると気づいたのである」。

「人生で他の何のものにもまさつて喜びをもたらすものとは、何か」と聞かれたときに、リーロイ・エイムズは、答えました。「キリストに導いた人が、成長し、献身的で、実り多い、成熟した弟子となり、さらに他の人々をキリストに導き、自分がしてもらつたと同じように助けるようになることです」と。

こういうことが最大の喜びのもととなるというのは、特別驚くべきことはありません。霊的なものごとは、目に見える世界と相通ずるところがあります。赤ちゃんが生まれるときには、

大きな喜びがあります。しかし、常につきまとう心配があるのです。「この子は将来、どんな子になるのだろうか」と。子供が成熟し、人格、業績共に際立つた人物となつたら、両親の喜びはいかばかりでしょう。箴言二三章一五〜一六節に、こう書かれているのもそれが理由です。「わが子よ。もし、あなたの心に知恵があれば、私の心も喜び、あなたのくちびるが正しいことを語るなら、私の心はおどる」。

以上のことから浮き彫りになる実際的な教訓があります。それは、表面的な伝道や弟子訓練で満足してはならない、ということ。もし、霊的な子どもに真理の中を歩んでほしいと望むなら、自分の人生を相手に注ぎ込む覚悟がなければなりません。それは、祈り、教え、励まし、相談、矯正を必要とする、高い代償を伴う人生の歩みなのです。

「知恵のある子は父を喜ばせ、愚かな子は母の悲しみである。」

(箴言10章1節)

息子がやがては賢い人間になるのか、それとも愚かな人間になるかは、何によって決まるのでしょうか。ヨハネのような人物になるか、それともユダのような人物になるかを決定する要因は何でしょうか。

両親による訓練が重要な要素であることは、言うまでもありません。その中には、聖書に基づく徹底した土台作りが含まれます。みことばの聖なる影響力は、どれほど強調しても強調しすぎることはできません。

祈りで家庭を防備することもそれに含まれます。ある傑出した福音説教者の母親は、息子が道徳的な悪、また、悪しき教理に巻き込まれないで済んだのは、ひとえに「膝が擦り切れるほど祈ったから」であると言っています。

またそれは、子どもが権威に従い、服従するように、しっかりとしつけるということでもあります。厳格なしつけをすることに對しては、今日、激しい抗議の声が挙がります。しかし、鞭を使つたためではなく、甘やかしたために人生を台無しにした場合の方が多いのです(箴言13・24、23・13・14)。

それは、子どもに、自分は愛されている、ということを知る安心感を与えることでもあります。しつけは、気分でするものではなく、愛の行為として施すものでなければなりません。

それは、両親が、自分の告白する信仰の生きた模範を示すことでもあります。信仰に偽善が入り込んでいたため、クリスチャンの両親のもとで育つたのに、つまずいてしまった子どもが大勢います。

しかし、以上のことのほかに、子ども自身の意志も関係します。家から離れると、子ども自身が自由に物事を決めることができるようになります。同じ家庭で、しかも同じ条件で育てられたのに、その後の歩みが異なるケースはよく見受けられることです。

ここで、人生の現実を二つ見据えなければなりません。一つは、この世がどんなところか、少しは経験してみる必要のある人が大多数である、ということですが、もう一つは、賢明な助言を受けて世を知るより、恥と不名誉を受けてもいいから世を知りたい、という人が圧倒的に多い、ということですが。

賢明な両親なら、信仰告白をするように子供を追い込むようなことはしません。子どもたちが、主のもとに來たい、と望むなら応援するべきです。しかし、両親に説得されて本心とは異なる告白をしてしまい、大きくなつてからその信仰を捨ててしまふなら、キリストに導くのは一層困難になります。クリスチャンの両親が、最善の努力を傾け、主への敬虔な恐れと訓戒の中で育てたにもかかわらず、子どもが信仰の破船にあつてしまつたという場合は、どうなのでしょう。一つには、まだ物語の最終章が書き上げられたわけではないという事実を思い出すことです。主に解決できない事例などありません。熱心に祈り続け、子どもとの対話の機会を逃さないようにしていたことによつて、無事に「放蕩息子」が戻ってくるのを見届けた人は大勢います。たとえそうでなかつたとしても、両親がこの世を去つて、主のもとに旅立つた後に、祈りが応えられたケースも多くあるのです。



「朝のうちにあなたの種を蒔け。夕方も手を放してはいけない。あなたは、あれか、これか、どこで成功するのか、知らないからだ。二つとも同じようにうまくいくかもわからない。」

(伝道者の書11章6節)

神がいつ、どのように私たちの奉仕を用いてくださるか、私たちにはまったく分からないわけですから、(福音を伝える)機会だけは犠牲を払っても、確保できるように努めなければなりません。私たちがまったく期待していないようなときに、主が働いてくださることは珍しくありません。しかも、考えてもみなかった新しい方法で働いてください。

海軍の航空基地に配属されたクリスチャンの水兵が、格納庫の角のあたりに立って、仲間を証しをしていました。その角から見えない反対側に、もう一人の水兵が立っていて、福音を耳にし、自分が罪人であることに目覚め、見事なまでに回心しました。そのメッセージを直接語りかけた水兵の方には反応がなかったのにもかかわらず…。

一人の説教者が、新築された大会堂の音響の具合を試してみようと、ヨハネの福音書一章二九節、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言い、その声が大会堂全体にとどろきました。見たところ、聞いている人は誰もいません。もう一度、パペテスマのヨハネが語った不滅のことば、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と大声を響かせました。一階のフロアは、がらんとしていました。一番目のバルコニーにいた作業員がそのメッセージに打たれ、神の小羊なるキリストに立ち返り、罪の赦しと新しいいのちをいただいたのでした。

聖書を教える一人のアメリカ人が、パリのある鉄道の駅で、若いアメリカ人の旅行者に話しかけました(二人はアメリカの同

じ州、しかも同じ町の同じ地区の出身でした)。あなたは、どう考えますかと聞かれた青年は、苛立ってこう言いました。「パリの鉄道の駅でお前を救ってやろうと言うつもりですか」と。すると、聖書の教師はこう答えました。「とんでもない。私にはあなたを救うことなどできません。しかし、人生に偶然などというものはありません。ここで私たちが会ったのは偶然などではありません。神があなたに話しかけておられるのです。ですから、聞いておいた方がよいのではないのでしょうか」と。後日、この青年旅行者は、また別のクリスチャンにウィーンまで乗せてもらい、その道すがら、彼の証しを聞くことになりました。アメリカに戻ってから、そのクリスチャンは、この青年をコロラドにあるクリスチャンの牧場に招待しました。牧場での滞在の最後の日、青年がプールの中に立っていると、もう一人の来客が彼のところにやってきて、静かに主について語り、青年を救い主のもとに導くという大きな喜びを経験しました。それから数年後、ある集会が終わった後、彼はアメリカ人の聖書教師に、「この青年は熱心な主の弟子です」と紹介されました。その名前は、かすかに聞き覚えがありました。そして、ついに思い出したのです。彼こそは、パリの鉄道の駅で自分が話しかけたあの旅行者の青年だったのです。

この教訓は、言うまでもなく、「朝でも夕でも、ときが良くても悪くても、キリストのみこころを熱心に行うものであれ」ということです。(石切り場の)固い岩石が割れたのは、どの一打が効いたためか誰にも分からないように、どのことばがいのちを与えるものになるのか、私たちには分からないからです。

「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」

(コリント人への手紙第一15章58節)

主に仕えていくうちに落胆を経験し、もうやめてしまおうと思うのは、決して例外的なことではありません。私たちのほとんど誰もが、どこかで、この誘惑に直面したことがあるのではないでしょうか。そこで、私自身にとつてことのほか励ましとなり、私が途中で投げ出さないうで済むように守ってくれた四つのみことばをご紹介したいと思います。

最初は、イザヤ書四九章四節です。「私はむだな骨折りをして、いたずらに、むなしく、私の力を使い果たした。それでも、私の正しい訴えは、主とともにあり、私の報酬は、私の神とともにある」。めつたにないのは感謝であるにせよ、長年、主に仕えた奉仕が跡形もなく消えてしまうように思われる瞬間があります。私たちの働きすべてが、無駄な努力であつたように思えます。またしても「愛の骨折り損だ」と思われるような場合です。しかし、断じてそんなことはありません。今日、読んだみことばには、神が義であられるゆえ、王なる神ご自身からの報いが必ずあることの保証が書かれています。神のためになしたことで無駄になることは、つもありません。

二番目の聖句は、イザヤ書五五章一〇〜一一節です。「雨や雪が天から降つてもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、私の口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰つては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送つた事を成功させる」。生ける神のみことばを広めることに従事している人が成功を収めるの

は確実です。結果は、保証済です。神のみことばを阻止できるものは、何一つありません。世界の軍隊も、雪や雨が降るのを止めることができないように、もろもろの悪魔や人が束になつても、みことばが出て行くこと、そして、人々の人生に革命を起すのを阻止することはできません。私たちは、勝利者の側についているのです。

それだけではなく、マタイの福音書一〇章四〇節に驚くべき励ましが書かれています。「あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです」。クリスチャンとしての証しをしたために、鼻であしらわれたことがありますか。あるいは、仲間はずれにされましたか。軽蔑されましたか。のしられましたか。目の前でドアをボタンと閉められましたか。それを、あまり個人に対する恨みにとつてはいけません。あなたを拒絶した人々は、実際には、救い主を拒否しているのです。人々のあなたに対する態度は、主に對する態度と同じなのです。神の御子とそれほどもで一体に見られているとは、何と素晴らしいことでしょう。

そして、もちろんコリント人への手紙第一一五章五八節があります。パウロはその箇所まで、復活の真理を説き明かしています。もし、地上の生涯がすべてであれば、私たちの労苦は無駄となります。しかし、墓の彼方には、永遠の栄光が待っているのです。そのとき、主の御名によつてなされたすべてのことは、報いられるのです。愛を込めて行つた働きで、実りのないもの、空しいものなどは、一つもありません。クリスチャンの奉仕は、すべての使命の中で最も輝かしいものです。それを途中でやめてしまうまともな理由など、存在するわけがありません。神のみことばに記されている励ましがありません。引き返すことなど論外なのです。

「それにもかかわらず、神の不動の礎は堅く置かれていて、それに次のような銘が刻まれています。『主はご自分に属する者を知っておられる。』また、『主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。』」

(テモテへの手紙第二二章19節)

使徒たちの時代においてすら、信仰の世界には多くの混乱がありました。例えば、信者の復活は、すでに過去のものとなつたという奇想天外な教義を教える人が、二人現れました(※ヒメナオとピレトのこと)。私たちから見れば、このような思想は狂気の沙汰です。しかし、それは一部の人々の信仰を覆すほど深刻な問題でした。当然のことながら、疑問が浮かびます。「その二人は、本当のクリスチャンであつたのだろうか」と。

今日でも、それと同じ問題によくぶつかります。著名な牧師がキリストの処女降誕を否定するかと思えば、神学校の教授に、聖書には誤りがあると教える人がいます。信仰を通し、恵みによって救われたと主張しながら、安息日の遵守が救われる絶対条件だといって譲らない大学生がいます。回心を経験したというビジネスマンが集う教会では、偶像を崇め、秘蹟(※神の恩恵に与るための儀式とされる。カトリックでは洗礼・堅信・聖体・ゆるし・病者の塗油・叙階・婚姻の七つ)を通して救われると教え、上に立つ人は、信仰と道徳に関わる事柄において無謬(誤りがない)であると主張しています。このような人々は、本当のクリスチャンなのでしょうか。

率直に言つて、その人のキリスト信仰が本物か偽物か明確にはわからない場合があります。本物と偽物、白と黒との中間には、灰色の領域があるのです。この領域については、確たることは言えません。神でなければわからないのです。

不確かな世界の中で確実なのは、神による礎です。神が建てられたものであるなら、それは堅固で揺るぎがありません。その礎には、銘が刻まれており、二つのことばが刻印されています。その一つは、神の側から見たもので、もう一方は、人間の側から見たものです。前者は宣言であり、後者は命令です。

神の側から見たものとは、主が、ご自分に属するものが誰かを知っておられる、ということですが。神は、たとえ、その人の行動が理想通りでなかつたにせよ、誰が間違ひなくご自身のものであるかをご存知です。その一方、神はどんな見せかけや偽善も見抜かれ、外側は立派に見えても中身の実体がないものをご存知です。私たちには、羊と山羊を区別できなくても、神には、区別がわかり、また、事実、区別をされるのです。

人間の側から見れば、キリストの御名を呼ぶものなら、誰でも不義から離れなければなりません。このようにして初めて、信仰告白に実体が伴っていることが証明できるのです。罪に留まる人は、自分がクリスチャンであるという主張に関しては、信用を失う破目になります。

したがって、これこそは、麦を毒麦と区別するのが困難な場合の決め手です。つまり、主はご自分の者をご存知である。そして、主に属すると主張する者は、罪から分離していることによって、それを実証することができるということです。

「そのことによつて、神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」

(ヨハネの手紙第一3章10節)

何年も昔、ほとんどすべての家庭には、居間に大型の家族アルバムがありました。厚い革表紙に金の文字が浮き彫りになっていました。皮の止め金付きストラップを、裏表紙の右縁から表紙の右側まで延ばすと、止め金は受け口にパチンとはまる仕組みです。アルバムのページは硬めの光沢ある厚紙で、花模様と金縁が施してありました。それぞれのページには、その端に切れ目の入ったところがあり、そこから写真を差し込むのです。来客がアルバムをパラパラとめくって見ていると、「ジョシュ(男の子の名前)は、おじいちゃんにそっくりだね」とか、「セアラ(女の子の名前)は、やっぱりこの家族の血を引いているね」などという感想が、交わされたものです。

ヨハネの手紙第一を読んでいると、古い家族アルバムを見るような思いにさせられます。つまり、その手紙には、神の家族を構成する人々のこと、また、家族の特徴が描かれているからです。しかし、こちらの場合には、外見的なものというよりは、霊的、精神的な類似が問題にされています。

クリスチャンが霊的に、「似たもの同士」であるというのは、少なくとも八つの側面があります。その第一は、誰もがイエスについて同じことを言うという点です。イエスがキリスト、つまり、メシヤ(油注がれた御方)であると告白します(1ヨハネ4・2、5・1)。クリスチャンにとつて、イエスとキリストは、同一の存在なのです。

第二に、クリスチャンは、みな神を愛しています(5・2)。その愛がときとして弱く、揺れ動くことがあるかもしれませんが、信じる者が神の御顔を見上げて、「私があなたを愛すること

は、あなたがご存じます」(※ヨハネ21・15、16、17)と言えないときは、一度もありません。

三番目に、クリスチャンは、みな兄弟を愛します(2・10、3・10、14、4・7、12)。これこそ、死からのちへ移った者すべての特徴の最たるものです。神を愛するので、神から生れた者をも愛するのです。

第四に、神を愛する者は、その特徴として神の命令を守ります(3・24)。従順であるのは、罰を受けるのが怖いからではなく、ご自分のすべてを投げ出してくださった神を愛するからです。

五番目として、クリスチャンは、習慣的に罪を犯すことはありません(3・6、9、5・18)。確かに、罪の行為をしてしまうことはあつても、罪に人生を牛耳られているわけではありません。クリスチャンに罪がないわけではありませんが、罪を犯すことは少なくされているのです。

第六に、神の家族を構成する者は、義を行ないます(2・29、3・7)。単に、習慣的な罪を犯さないというのではありません。それだけなら消極的で、受け身であるにすぎません。積極的に能動的な義の行いをもつて、他の人に助けの手を差し伸べます。

神の家族の七番目の特徴は、世を愛さないことです(2・15)。世とは、人間が神に敵対して作り上げた仕組みであり、世の友となることは、神を敵に回すことであることが分かっています。

最後の点として、クリスチャンは、信仰によつて世に打ち勝ちます(5・4)。移ろい行くものの表面を見てごまかされず、その向こうにある永遠のものに目を留めます。目に見えないもののために生きているのが、クリスチャンなのです。

「信仰と正しい良心を保ち」

(テモテへの手紙第一一章18節)

良心とは、正しい行動には賛同し、間違つたことには抗議するために、神から人間に与えられた監視のメカニズムです。罪を犯したとき、アダムとエバは良心の咎めを受け、自分たちが裸であることを知りました。

人間の性質がみなそうであるように、良心も、罪が入つてきたことによつて影響を被り、必ずしも完全に信頼できるものではなくなつてしまいました。「良心こそ、迷つたときの道しるべ」という古い格言は、どんな場合でも適用できる原則ではありません。しかし、墮落の極みにいる人の場合でも、良心は赤と緑の信号を今でも点滅させています。

回心をしたときに、人間の良心は、キリストの血によつて死んだ行いから清められました(ヘブル9・14)。つまり、神の前で有利な立場に立つために、もはや自分の行いに頼らなくてもよくなりました。心は、邪悪な良心から清められました(ヘブル10・22)。罪の問題は、キリストの御わざにより完全に解決されたと分かつたからです。罪責感、また、罪の宣告という点に關しては、良心から責められることがなくなつたのです。

信じて以降、神の前にも人の前にも責められることのない良心を持ちたい、とクリスチャンは願います(使徒24・16)。正しい良心を保ちたい(1テモテ1・5、ヘブル13・18、1ペテロ3・16)、清い良心を持ちたいと望みます(1テモテ3・9)。

信仰者の良心は、神のみことばを通し、神の御霊によつて育まれていかなければなりません。このようにしていくうちに、クリスチャンとして行動する上で疑問の余地のある領域に対して、感度が研ぎ澄まされていきます。

信者の中に、それ自体では正しいとも間違つているともいえない事柄に対して、過度なこだわりを持つ人がいますが、それは良心が弱い人です。そのまま突き進み、良心が咎めることをするならば、罪を犯すことになり(ローマ14・23)、良心が汚れます(1コリント8・7)。

良心とは、ゴムバンドのようなもので、引つ張れば引つ張るほど、弾力性を失います。また、良心は押し殺すこともできません。ですから、自分の間違つた行動を正当化して、望む通りのことを良心に言わせることもできるのです。

傷口が真つ赤に熱した鉄で焼かれると感覚を失うように、不信者は良心が麻痺していることがあります(1テモテ4・2)。良心の声を何度となく否むことによつて、ついには、感情的に何も感じない段階に達します。そうなると、もはや罪を犯しても痛みを感じません(エペソ4・19)。

神は、人間が良心に対して行つたことについて責任を問われます。神から与えられたどの能力も、それを濫用するならば責任を免れることはできません。

「主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンにはいり、その頭にはとこしえの喜びをいただく。楽しみと喜びがついて来、悲しみと嘆きとは逃げ去る。」

(イザヤ書51章11節)

イザヤのこの預言は、七十年にわたるバビロンの捕囚から解放された神の選びの民が、喜びをもつて帰還する様子を予め描いたものです。

また、メシヤが世界中の国々から選びの民を再び集める、という未来におけるイスラエルの復興を指しているのかもしれない。それもまた、大いなる歓喜の時となることでしょう。

しかし、これを最も広い意味で取った場合、教会の携拳を描くものとして、この聖句を適用しても問題はありません。主の号令、御使いのかしらの声、神のラッパによつて呼び覚まされ、贖われたものたちの肉體は、どの時代にいたかに関係なく、墓からよみがえります。生きている信者は、一瞬のうちに変えられて彼らと一緒に天にのぼり、空中で主と会います。それから、御父の家へと向かう壮大な行進が始まるのです。

その行進の沿道に、大勢の御使いたちが立ち並んでいることは十分に考えられます。その行列の先頭には、死と墓に勝利した、晴れやかな御顔の贖い主ご自身がおられます。その後ろに続くのは、贖われた者たちの集団で、あらゆる部族、言語、民族、国民から成り立っています。万の幾千倍、千の幾千倍という人々が、完璧な音楽の調べと共に歌っています。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です」(※黙示録5・12)と。

大群衆の誰もが、神の恵みの素晴らしい「戦利品」です。一人ひとり、罪と恥から代価を払って買い取られ、キリスト・

イエスにある新しい被造物とせられました。中には、信仰のゆえに深い苦難を通つた者、また、救い主のためにいのちを捨てた者もいます。しかし、今はすべての傷跡も、切断された手足も元通りにされ、聖徒たちは死ぬことのない栄光のからだを持っています。

アブラハムもモーセもそこにおり、ダビデとソロモンもいます。そこには、親愛なるベテロ、ヤコブ、ヨハネ、パウロもいます。マルチン・ルター、ジョン・ウエスレー、ジョン・ノックス、ジャン・カルヴァンもいます。しかし、彼らといえども、地上では無名でありながら天国で有名となつた、隠れた神のしもべよりも目立つというわけではありません。

いよいよ、聖徒たちは王の宮殿に入城します。悲しみと嘆きは永久に去り、とこしえの喜びがその頭の上にあります。《信仰》で見ていたものは現実となり、《希望》は長く待ち続けたことの完成を報いとして受け取りました。愛する者たちは、お互いを熱烈に抱擁し合つて挨拶を交わしています。どこもかしこも喜びで溢れています。そして、誰もが感嘆しています。「何という驚くべき恵みだろうか。罪の深みから、このような栄光の高みまで引き上げられるとは」と。

「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。」

(マルコの福音書5章19節)

救われたばかりの頃、こんなに簡単に素晴らしいことなら、それを伝えさえすれば、家族、親族はみな救い主を信じたと思うに違いない、と私たちは考えます。ところが、それは反対に、場合によっては怒りをあらわにされたり、疑われたり、敵意を持たれることがあります。私たちが、まるで裏切り行為をしたかのような扱いを受けます。そのような状況にさらされると、かえって彼らがキリストのもとへ来るのを妨げるような反応をしてしまうことが少なくありません。反射的に反撃し、その後は距離を置き、不機嫌になり、心を閉ざしがちになったりします。あるいは、クリスチャン生活を送るための神の力が彼らには与えられていないことを忘れ、クリスチャンとはほど遠いその生活ぶりをあげつらうのです。こうなると、彼らに対して優越感を持つているという印象を与えてしまいかねません。もともと、「聖人ぶっている」という非難を受ける可能性は高いわけですから、そのもっともな根拠を与えてしまわないように注意しなければなりません。

よくやってみようという一つの間違いは、福音を無理やり受け入れさせようとする事です。相手を愛する愛と、また、その魂を思う熱情のゆえとはいえず、押しつけ的な伝道は、かえって疎んじられる結果となります。

さらに、いろいろなことが派生していきます。クリスチャンとしての信仰を持った今は、親に従う義務から解放されたとしても思うのか、両親を愛し、従うという行動を示しません。それ

に加えて、家にいないことが多くなり、教会で、クリスチャンと共に、礼拝に時間を費やすことが段々増えていきます。これがひいては、教会やクリスチャンに対する恨みを増大させていくこととなります。あの悪霊にとりつかれた男——レギオンを癒されたとき、イエスは、「家に帰りなさい。また、主がどんなに偉大なことをしてくださったかを友人たちに語りなさい」とおっしゃいました。これこそ、私たちが真つ先にしなければならぬことです。すなわち、自分が回心したことを、単純にへりくだり、愛を持って家族に証しするのです。

これに伴わなければならないのは、生活が変容したということです。「私たちの光を輝かせ、私たちの良い行ないを見て、天におられる私たちの父があがめられるように」するのです(マタイ5・16)。

それは、新たな思いで両親を敬い、従い、愛し、尊敬を示し、聖書と矛盾しない限り、その助言を受け入れる、ということにほかなりません。以前になかったほどに、家の手伝いをする事です。部屋を掃除し、皿を洗い、ごみを外に運び出すのです。それも、頼まれないうちに。

さらに、批判にも耳を傾け、決して言い返さないことです。彼らは、私たちが碎かれた心を持つているのを見て、驚き、喜びます。以前、そうした姿がまったくなかった場合にはなおさらです。小さな親切は、敵対心という壁を壊す助けとなります。感謝の手紙、グリーティングカード、電話、そして、プレゼントなどです。両親から自分自身を切り離すのではなく、一緒に時間を過ごして、関係を強める努力をしていきましょう。その結果、両親も、私たちが一緒なら教会への招待を受け入れやすくなるばかりか、やがては、主イエス・キリストに自らを委ねるまでになることでしょう。

「おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。」

(「コリント人への手紙第一7章20節」)

クリスチャンになると、それ以前の生活に関わるあらゆるものときれいさっぱり決別しなければならぬ、と考える人がいるかもしれません。このような考え方を直すため、使徒パウロは、回心したときと同一の召しの状態に留まっているべきである、という一般原則を定めています。この原則を考えてみることにしましょう。そして、それが意味することと、意味していないと思われることを述べてみることにしましょう。

この聖句は、前後の文脈の中では、結婚の特殊な関係に關して言われたものです。その場合、夫婦の一方は救われているが、もう一人は救われていません。クリスチャンは、どうしたらいいのでしょうか。妻を離縁するべきでしょうか。「そうではない」とパウロは言います。「伴侶が、自分の証しを通して、やがて回心する、との希望を捨てずに、結婚関係に留まるべきである」と。

一般的に言って、パウロの原則によれば、聖書が明確に禁じている場合を除き、回心したからといって、救われる以前の関係やつながりを乱暴に断ち切ったり、力づくでひっくり返したりする必要はありません。例えば、ユダヤ人が、ユダヤ教徒のしるしである割礼の跡をなくそうと、外科手術をする必要はないのです。同様に、信仰をもった異邦人が、異教徒と自分を区別するために、割礼のような肉体的しるしを新たに受ける必要はありません。肉体上の特徴やしるしが大事なわけではありません。神がご覧になりたいのは、神のご命令に対する従順なのです。

新生したときに奴隷であった人は、自分が奴隷であることに反発して、自分の身に問題や懲罰を招くべきではありません。役立つ奴隷であることと、立派なクリスチャンであることは、両立するのです。社会的な地位や階級は、神にとっては問題ではありません。しかし、もし、奴隷が合法的な手段によって自由を獲得できるなら、そうするべきです。

パウロによる原則については、そのくらいにしておきましょう。ここで、この原則が適用できない重要な例外があるということも、はつきり認識しておく必要があります。例えば、罪深い仕事をしてきた人が、その仕事を続けるべきであると言っているわけではないのです。もし、バーテンダーをしていたり、売春宿やギャンブルのカジノを経営したりしている人の場合には、仕事を変えなければならぬことは、霊的な直感でわかるはずですが。

この一般原則のもう一つの例外は、宗教的なつながりに関わることです。新しく回心した人が、キリスト教信仰の根本教理を否定するような組織の中に留まっていたりはなりません。また、救い主を貶めるような教会からは、分離しなければなりません。これは、キリストの御名を口にするのを禁じられたり、歓迎されていない社会的な集まりの場合にもあてはまります。信仰者が、神の御子に対して忠誠を示すためには、このような一切のことから手を引かないわけにはいきません。

以上のことをまとめると以下ようになります。すなわち、新たにクリスチャンになった人は、召されたときの状態に留まるべきである、ただし、その仕事や罪深いものであったり、主を辱めるようなものであったりする場合を除く。そして、神のことばがはつきり禁止していない限りは、今までのつながりを断ち切ってしまう必要はない、と。

「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましよう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。」

(ヤコブの手紙2章14節)

ヤコブは、今日の聖句で取り上げた人に、信仰があるとは言っていません。本人は、信仰があると主張していますが、もし、救いに至る信仰があるなら、行いもあるはずで、その人の信仰とは、ことばだけのものであり、そのようなたぐいの信仰によつては誰も救われることができません。ことばだけで行いがなければ、死んでいくのです。

救いは、行いによるものではありません。また、信仰と行いを合わせたものでもありません。救いは、良い行いという実を結ぶ信仰によるのです。

それではなぜ、ヤコブは二四節において、「人が義と認められるのは行いによる」と言っているのでしょうか。「信仰によつて義と認められる」というパウロの教えと明らかに矛盾しているのではないのでしょうか。実は、どこにも矛盾はありません。両者とも本当なのです。実のところ、新約聖書を見ると、以下のように、義認には六つの異なった側面があります。

- ・ 神による義認(ローマ8・33)―神が、私たちが義と認めてください
- ・ 恵みによる義認(ローマ3・24)―分不相応な賜物である義認を、神は無代価で与えてください
- ・ 信仰による義認(ローマ5・1)―私たちは、主イエス・キリストを信じるることによつてこの賜物をいただく
- ・ 血による義認(ローマ5・9)―私たちが義とされるために、キリストの尊い血が流された

・ 力による義認(ローマ4・25)―主イエスを死者の中からよみがえらせた力が、義認を可能にしている

・ 行いによる義認(ヤコブ2・24)―良い行いこそ、私たちが真に義とされたことの外面的な証拠である

が真に義とされたことの外面的な証拠である
回心の経験を立証するだけでは、不十分です。新生に必ず伴う良い行いによつて、それを示さなければなりません。

信仰は、目に見えません。それは、たましいと神との間で取り交わされる目に見えない相互作用だからです。人々には、私たちの信仰は見えません。しかし、救いに至らせる信仰の実としての良い行いなら、目に見えます。人々にその行いが見えるまでは、私たちの信仰が疑われても仕方ありません。

アブラハムにとつての良い行いとは、神へのいけにえとして、ためらわずにわが子を屠(ほろ)ぶることでした(ヤコブ2・21)。ラハブにとつての良い行いとは、母国に背く(ヤコブ2・25)ことでした。それらが、「良い」行いだったと言われているのは、主なる神への信仰を示すものであったからです。そうでなかったなら、それらは単なる悪事、すなわち、殺人であり反逆罪であったことでしょう。

霊から分離してしまつたからだは、死体です。それが死です。すなわち、からだから霊が離れることです。それと同じように、行いのない信仰も死んでいるのです。そこには、いのちも力もなく、働きを生じることもありません。

からだが生きているということは、目に見えない霊が、内に住んでいることを示しています。それと同様に、良い行いとは、目には見えなくても、救いにいたる信仰が、その人の中に確かに息づいていることのしるしなのです。

「靈的な輝きを保ちなさい。」

(ローマへの手紙12章11節 モファット訳)

物質界に作用する法則の一つによると、物体には次第に運動量を失い、弛緩し、燃え尽きていく傾向があります。科学的な説明とはいえませんが、この法則のおおよその概念はこれでつかめるでしょう。

例えば、太陽は猛烈な勢いで燃えており、これからも長い間燃え続けるでしょうが、その残りの期間は減少しつつあると言われています。

肉体は、老化して死に、塵に帰ります。振り子に手で動きを与えても、次第に速度が緩やかになり、やがては停止します。

(昔の)置時計や腕時計は、ねじを巻いても、少し経てばもう一度巻いてやらなければなりません。熱湯も、放っておけば室温と同じ温度まで冷えていきます。金属は光沢を失い、表面がぼやけてきます。鮮やかな色彩もくすんでいきます。無限に続くものは何一つなく、永久運動をするものも何一つありません。変化と崩壊は、あらゆるものに及びます。

世界そのものも古びていきます。天と地に関して、聖書はこう言っています。「これらのものは滅びます。しかし、あなた(神の御子)はいつまでもながらえます。すべてのものは着物のように古びます。あなたはこれらを、外套のように巻かれます。これらを、着物のように取り替えられます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません」(ヘブル1・11・12)。

残念ながら、靈的領域においても同様な原則が存在しているようです。個人にも、教会にも、運動にも、組織にも、これは当てはまります。

たとえ、華々しくクリスチャン生活を始めても、熱情が冷め、力が衰え、ビジョンがかすんでいくという危険が、常にあります。私たちは、疲れ、自己満足し、冷淡になり、年を取っていきます。

同じことが教会についてもいえます。聖霊の大きなうねりの頂点から始まった教会が、数多くあります。その火は、長年にわたってまばゆく燃え続けました。それから、下り坂が始まりました。教会は、最初の愛を失いました(黙示録2・4)。ハネムーンは、終わりました。伝道の熱情は、決まりきった礼拝に変わります。無益な結束を図るために、教理の純粹性が犠牲にされます。ついには、空っぽになった建物が、教会から栄光が離れたこと、物言わぬ証人となります。

運動や組織も崩壊を免れません。初めは、力強い伝道の働きであったのに、しだいに社会運動にのめり込み、その結果、福音が脇に押しやられます。あるいは、御霊による熱心と自由で始まったものが、いつの間にか冷ややかな儀式や形式に陥るという場合もあるでしょう。私たちは、靈的な衰退から自らを守らねばなりません。私たちに、ノーマン・クラブが「途切れることのないバイバル」と表現したものを経験する必要があります。「靈的な輝きを保つ」必要があるのです。

「よく聞かないうちに返事をする者は、愚かであつて、侮辱を受ける。」

(箴言18章13節)

リビング・バイブルでは、この聖句を次のように意識しています。「何と残念なことか、いや、何と愚かなことか、事実を調べないうちに結論を下してしまうというのはい！」。重要な教訓がずばり示されています。すべての事実を聞くまでは、理にかなつた決定を下すことなどできないのです。残念なことに、クリスマスチャンの多くは、争点に関わる両者の言い分を聞くゆとりがありません。一人の話をもとに判断を形成し、その判断が完全に間違つていたという場合が、珍しくないのです。

一九七九年に、ゲアリー・ブルックス(仮名)は、ある福音的な教会の執事の一人でした。彼は、ことのほか信望がありました。温かく、人見知りをしない性格でした。人でいっばいになった部屋に入ると、いつもその部屋がぼつと明るくなつたようでした。教会員が困っているときには、助けの手を差し伸べ、目覚しい働きをしました。会衆の中の年配者には、常に気配りを怠りませんでした。妻と二人の息子も、教会の働きに積極的でした。ブルックス一家は、模範的な家庭とみなされてきました。

このようなわけで、ゲアリーが長老たちから懲戒を受け、執事の仕事をとり上げられたばかりか、聖餐式も遠慮するようにと言われたというわがが広まつたときは、爆弾が炸裂したかのような衝撃がありました。友人たちは、ゲアリーを弁護しようとして、続々と集まり、この決定に関して長老たちに反対するため、他の教会の人々にも呼びかけました。長老たちは、不利な立場に追い込まれました。知っていることのすべてを公表することを避けたからです。そこで仕方なく、長老たちは何

もせず、ゲアリーの数々の人徳が賞賛されるのを聞くほかありませんでした。この話には裏があるということを知りながら…。その過程で、長老たちは、相当の罵詈雑言を浴びせられなければなりません。

長老たちは、何を知っていたのでしょうか。ゲアリーの結婚生活が破綻寸前であったことを知っていたのです。ゲアリーが自分の秘書と浮気をしていたためでした。その優雅な生活を支えるために、教会の財産を横領していました。ビジネスのやり方も倫理にもとるものであり、業界での評判は、芳しいものではないということも知っていました。長老たちが、証拠をつぎつけてその不正行為を追及したときに嘘をついていた、ということも知っていました。

長老たちの懲戒に服する代わりに、ゲアリーは、教会を分裂させかねない危険を知りながら、友人たちを組織して公然と反撃に出ました。やがて、ゲアリー側につく何人かが、長老の一人と話し合い、悲しむべき事実の一端を知ることになりました。今度は、逆にばつが悪くなつて回れ右ができません。そこで、ゲアリーのために戦いを続けたのです。

この出来事から、私たちが学ぶべき三つの教訓が浮かび上がってきます。第一は、すべての事実を知るまでは、決定を下してはならないということ。第二に、すべての事実を知ることができない場合には、判断を保留すること。そして、最後に、友情の絆を理由に、間違つたことを弁護する破目にならないようにすることです。

「最初に訴える者は正しく見える。ただし、その隣人が来て彼を調べるまでは。」

(箴言18章17節 英訳)

この聖句の前半では、私たちのほとんどに共通する弱点が指摘されています。私たちは、いつも自分が最も立派に見えるようなやり方で証拠を見せようとしています。こうすることには、何の努力もありません。例えば、私たちは、自分に不利な証拠はあえて出すことをせず、私たちの良い点だけに目が行くようにします。欠点が明らかかな人と自分を比較します。自分の行動の責任を他の人のせいにします。あからさまに間違った行動をしておきながら、動機そのものに悪いところは何もなかった、と言います。似ても似つかないほどに、事実を捻じ曲げ、歪めます。ことばに感情の色合いを込め、自分に都合のいいように、状況を説明します。

アダムは、エバを非難してこう言いました。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです」(創世記3・12)。エバは、悪魔を非難してこう言いました。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです」(創世記3・13)。

サウルは、アマレク人の羊や牛を生かしておくという不従順を犯すには犯したが、それは、敬虔な動機からです、と言いつくしました。「民は、ギルガルであなただの神、主に、いけにえをささげるために、羊と牛を取って来たのです」(1サムエル15・21)。もちろん、咎められるべき点があるなら、それは自分ではなく、民の方であると遠まわしに言っていたわけでは

なく、ダビデは、武器を手に入れるために(祭司)アヒメレクに嘘を

サムエル21・8)。実際には、ダビデは王の命令を遂行していたのではなく、サウル王から逃亡していたのです。

あの井戸にいた女も、事実を隠していました。彼女は言いました。「私には夫はありません」(ヨハネ4・17)と。実際には、五人の夫と結婚した過去を持っていたのですが、現在は、男と同棲しており、結婚はしていませんでした。

このような例は、枚挙にいとまがないほどです。アダムから受け継いだ墮落した性質によって、私たちが自分の言い分を述べるとき、完全に客観的になることはなかなかできません。私たちには、自分を最もよく見せようという傾向があります。自分の生活の中に潜む罪に対しては寛容なのに、他人が同じ罪を犯すときには容赦しないのです。

「最初に訴える者は正しく見える。ただし、その隣人が来て彼を調べるまでは」。つまり、隣人は証言する機会さえあれば、事実をもっと正確に述べてくれるというのです。隣人は、微妙な取り繕いや自己弁護の企てをすべて暴きます。真相をありのまま語ってくれます。

究極的な意味において、神は私たちの《隣人》です——暗闇の隠れた事柄を明るみに出し、心の思いや意図を明らかにされます。神は光であり、その内に暗闇はまったくありません。もし、私たちが神と共に曇りのない交わりのうちを歩きたいと望むなら、たとえ、面目を失う結果になったとしても、私たちの証しすべてにおいて正直、かつ、公明正大でなければなりません。

「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。」

(ヤコブの手紙4章2節)

このような聖句を読むと、興味深い質問が浮かびます。願わないから得られないのだとすれば、祈らなかつたというそれだけの理由で、どれほど素晴らしいものを受け損なつてきたのだろうか。

ヤコブ五章一六節を読んでも、同様な質問が湧き上がります。

「義人の祈りは働くと、大きな力があります」。もし、祈らなければ、その人を通して成し遂げられることはほとんど何も無いのではないかと。

私たちのほとんど誰もが十分祈らない、または、たとえ祈つたとしても、求めるものが小さすぎるといふ問題を抱えています。私たちは、「不可能なことを大胆に掴み取らず、可能なことをちびちびとかじるだけ」とC・T・スタッドが表現したような者です。私たちの祈りは、本来、大胆で勇氣あるものでなければならぬのに、実際は臆病で平凡な想像力しか持ち合わせていません。私たちは、大いなることを祈つて、神に栄光を帰すものでなければなりません。ジョン・ニュートンは、それを次のように表現しています。

あなたは今、王のもとに近づいているのだ

大きい願いを携えて行くがよい

どんなに求めても多すぎるといふことはない

その恵みと力はそれほどにも大きいのだから

このように祈るとき、私たちは神に栄光を帰するに留まらず、靈的にも豊かにせられます。神は、私たちのために喜んで宝物

を開いてくださいますが、今日の聖句によれば、それには祈りの応えとして、という前提が暗示されています。

今日の聖句は、私たちがよく耳にする次のような質問の答えのように、私には思われます。

《祈りによって、神は本当に、他の方法ではしてくださらないことをしてくださるのだろうか。それとも、どのみち神はしてくださるが、ただ私たちが平安を持てるようにしてくるだけなのだろうか》。

答えは明らかのように思えます。神は、確かに、他の方法ではしてくださらないことを、祈りの応えとして与えてくださるのです。

この点をじっくり考えると、私たちの想像は、二つの方向に果てしなく広がっていくのではないでしょう。第二に、祈りの結果、直接的にもたらされる途方もない成果です。へブル二章三三、三四節のことを借りれば、「信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃のがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れた」人々を思い出さないうわけにはいきません。

しかし、もし願つてさえいたら、キリストのために私たち自身が成し遂げていたに違いないことを考える場合もあることでしょう。うかつにも求めなかつた、数多くの、とりわけ偉大で貴重なみことばの約束が頭に浮かぶかもしれません。力に満ち溢れることができたのに、弱さに甘んじたのです。何千人、あるいは、何百万人の人生にさえ影響を及ぼせたかもしれないのに、神の関わりについて人は、ほんの数人かもしれません。大陸を求めてもよかつたかもしれないのに、数エーカーの土地を求めただけでした。靈的富豪でいられたかもしれないのに、靈的貧困者のままでした。私たちのものにならないのは、私たちが願わなかつたからなのです。

「あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。」

(マタイの福音書20章26節、27節)

新約聖書を見ると、偉大さには二種類があり、両者を区別することは助けになります。一つは、立場に関する偉大さで、もう一つは、人格に関する偉大さです。

パプテスマのヨハネを評して、「ヨハネよりも偉大な預言者はいない」と、イエスは言われました(ルカ7・28)。ここで、救い主は、ヨハネの立場の偉大さを言っておられたのです。他の預言者は誰一人、メシヤの先駆者となる特権がありませんでした。ヨハネが旧約の預言者の誰よりも人格が優れていたという意味ではなく、世の罪を取り除く、神の小羊を紹介するという、またとない役割を担ったことを意味していたに過ぎません。

ヨハネ一四章二八節で、イエスは弟子たちに言われました。「父はわたしよりも偉大な方だからです」。これは、御父が自分よりも偉いという意味だったのでしょうか。そうではありません。神格を構成するそれぞれの御方は、対等です。(ここでは)御父は、天の栄光のうちに御位に座しておられるのに対し、ご自分は地上で人にさげすまれ、拒まれていたということを言っているのです。イエスが御父のもとに帰られることを知った弟子たちは、喜ぶべきでした。帰られたなら、御父と同じ、栄光ある位にお就きになるからです。

信仰者はみな、主イエスと一体とみなされているという理由により、偉大な立場に就いています。(今や)神の子であり、神の相続人、そして、イエス・キリストとの共同相続人です。

しかし、以上に加えて、新約聖書は、個人の偉大さについても語っています。例えば、マタイ二〇章二六、二七節で、イエスは言われました。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい」。ここで言われている偉大さは、個人の人格の偉大さであり、それは他の人に仕えていく生涯によって明らかになるものです。

この世の大部分の人々は、立場の偉大さのみに目を奪われています。主イエスは、このことに言及して、次のように語られました。「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています」(ルカ22・25)。しかし、その彼らの個人の人格についていえば、偉大さは微塵ちじみもないかもしれません。淫行、金銭横領、酒の虜とりになっていることもあり得ます。

立場がどれほど偉大でも、人格の偉大さが伴っていないければ無価値であることに、クリスチャンは気づいています。大事なものは、人の内側です。会社の組織において出世頭となるより、御霊の実を結ぶ方が重要なのです。有名人(celebrity)の一人とみなされるより、聖徒(saint)の一人とみなされる方が優よっているのです。

「ただ、この一事に励んでいきます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、…」

(ピリピ人の手紙3章13節)

これらのことばを読むと、パウロは自分の過去の罪について語っているのだ、と普通は考えがちです。過去の罪は、すでに赦されたこと、神はそれを水に流し、二度と思ひ起こされることはない、とパウロは知りました。そこで、パウロ自身も過去の罪は忘れることに決め、「キリスト・イエスにおいて、上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走る」と言っているのだと。

確かに、それは、この聖句の適用として間違っていない、と私は今も思います。しかし、実のところこの箇所でパウロは、自分の罪のことを念頭に置いておくわけではありません。むしろ、誇つてもおかしくなかったこと—自分の血筋、以前の宗教、熱情、律法による義—について思い巡らしていたのです。今や、それらのものは、パウロにとって何の意味もないものとなりました。それを忘れることに、心に決めたのです。

かつて、アメリカに留学した、献身的な中国人伝道者、ジョン宋のことが思い浮かびます。今や、彼は中国に戻る途中ででした。レスリー・ライアルは、こう書いています。「ある日、船が航海の終わりに近づくと、ジョン宋は自分の船室に降りていき、トランクから卒業証書、受賞メダル、大学の社交クラブ(フラタニティ)の鍵を取り出し、みな海に投げ込んでしまった。父の心を満足させるために、博士号の学位証書だけは取っておいたことになった。W・B・コール師は、それがかかっているのを一九三八年に目撃している。ある日のこと、宋博士は、コー

ル氏がそれを見ているのに気がつき、こう言った。『そんなものは、何の役にも立ちません。私にとつては何の意味もありません』と」。

「クリスチャンとしての大きな足跡を残したいと思うなら、放棄するものも大きいものでなければならぬ」というデニー博士のことばは、宋博士を念頭に書かれたのかもしれない。まさにそのような日がめぐってきたときに、この世が尊ぶものすべてを放棄したことが、おそらくは、ジョン宋があのような生き方をする事ができた秘訣だったのかもしれない。

十字架のほかには／誇りはあらざれ

この世のものみな／消えなば消え去れ

(※直訳「主よ、わが誇りを禁じたまえ

わが神キリストの十字架への誇りを除いては

いかに魅力ある空しきものも

一切をキリストの血に捧ぐなり」)

人の榮譽は、移ろい行く、空しいものです。一瞬の間、珍重された後は、何十年も埃が積もっていくだけです。キリストの十字架こそ、私たちの栄光のすべてです。私たちのために死に、よみがえらされた主に、こよなく喜んでいただけることこそ、私たちの大きな願いです。大事なのは、主から「よくやった」といついていただき、神に受け入れられることだけです。その褒美を得るためであるなら、他のあらゆるものを放棄することを、私たちは何とも思いません。

「無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の個所の場合もそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。」

(ペテロの手紙第二3章16節)

ヴァン・ゴルダー博士は、木工場に掲げられていた看板の話をよくしたものです。そこには、こう書かれていました。「ひねる、曲げる：あらゆる加工はお任せください」と。実は、それが得意なのは、木工職人だけではありません。自分はクリスチャンであると言いながら、自分に合うように聖書を歪め、ねじ曲げる人が大勢います。中には、今日のみことばのように、聖書を曲解したために自らに滅びを招く人さえいるのです。

私たちはみな、正当化することにかけては、なかなかのプロです。つまり、自分の罪深い不従順の言い訳として、もつともらしい説明をしたり、「自分の行動には立派な動機があった」と言ったりするのです。自分の行動に合うようにみことばを捻じ曲げようとすることも珍しくありません。私たちは、自分の行動や態度にもつともらしいが、本当ではない理由をくつつけます。その例をいくつか挙げてみましょう。

クリスチャンのビジネスマンであれば、他のクリスチャンを法律に訴えることは、間違っていると分かっています(1コリント6・1・8)。その点を糾たがされると、こう言うのです。「その通り。しかし、彼が間違っていることは明白だ。主は、彼が何の罰も受けないで済むことを望んではおられないはずだ」と。

ジェーンは、ジョンが未信者であると分かっているにもかかわらず、結婚の計画を進めています。クリスチャンの友人が、「これはIIコリント六章一四節で禁じられているのでは」と念を押すと、彼女はこう言います。「それはそうよ。でも、主は、

彼をキリストに導くことができるように、彼と結婚しなさいと言われたのよ」と。

クリスチャンであると公言しているのに、グレンとルースは結婚しないまま一緒に生活しています。友人が、これは不品行であり、不品行を行なっている者は、神の国を相続できないと書いてあるよ(1コリ6・9、10)と指摘すると、グレンは、こう答えます。「それはおまえの意見だろ。俺たちはお互いを深く愛し合っているんだ。そして、神の目から見れば、俺たちは夫婦なのさ」と。

パウロの訓戒によれば、衣食があれば満足すべきで、質素な暮らしを心がけるべきとあるのに(1テモ6・8)、贅沢で華美な生活をしているクリスチャンの家族がいます。彼らは、軽妙な答えでその生活スタイルを正当化します。「私たちは神の民なのだから、最上のものを楽しむのは当然でしょ」と。

また、貪欲に富を蓄積するビジネスマンがいます。「金銭自体には何の問題もない。金銭を愛することが諸悪の根源なのだ」。これが彼の哲学です。自分が金銭を愛するという罪を犯しているのではないかという懸念は、本人にまったくありません。

人間は、聖書の許容する範囲を超えて、自分の罪を都合よく解釈しようとしています。そして、みことばに従わないことを決めると、うまい下手を問わず、さまざま言い訳をくつつけるのです。

「あなたがたは、盲目の獣をいけにえにささげることが、それは悪いことではないか。足なえや病気のものをささげるのは、悪いことではないか。さあ、あなたの総督のところに行き、それを差し出してみよ。彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。」

(マラキ書一章8節)

神がどのようないけにえの動物を求められたかという点については、疑問の余地がありません。動物には、しみや欠陥があつてはなりません。神は、民が牛の群れ、羊の群れから最良の動物を捧げることを期待しておられました。神が望まれるのは、最良のものだけだからです。

しかし、イスラエル人は、どうしていたでしょうか。何と盲目で、足の悪い、病気の動物を捧げていたのです。選りすぐりの動物は、市場で高い値がつきますし、繁殖にはもってこいです。そこで、民は廃棄処分となつたものを捧げました。それは、「主に捧げるならどんなものでも大丈夫だ」と言っているも同然でした。

あきれてものも言えない、とそのようなイスラエル人を見下す前に、現代のクリスチャンである私たちもまた、最良のものを捧げずに、神に恥辱をもたらしてはいないだろうか、と胸に手をあてて考えてみましょう。

私たちは、一生をかけて財産を築き、名声を追いかけ、高級住宅地に豪邸を建て、より洗練されたものを楽しみ、その後で、使い尽くした人生のわずかな残りくずを神に差し出します。私たちが持つ最も素晴らしい才能は、ビジネスと高度な職能に惜しみなく注がれ、主の受けるものといったら、たまたま予定の空いた晩や週末しかありません。

私たちは、子どもたちをこの世のために育て、子どもたちが高収入を得、良い結婚相手を見つけ、便利で快適な高級住宅を手に入れられるように励みます。子どもたちの目の前で、主のための働きが一生を使うにふさわしい生き方であると示すことは、まずありません。他の家の子供たちが宣教師となるのは構いませんが、自分の子どもがそうなるのは困るのです。

高級車やRV車、ヨット、高級なスポーツ機器にお金をつぎ込んだあと、一ドル、二ドルという微々たるお金を主の働きに差し出します。私たちは、高級な服を着、不要になった古着を救世軍に寄贈し、自分が良いことをしているという幸福感に浸ります。

私たちが言っているのは、結局のところ、主に捧げるものもどんなものでもよいが、自分には最高のものが欲しいということなのです。ですから、主は、私たちに言われるのです。「さあ、ホワイトハウスに行つて、大統領にそれを差し出してみるがよい。大統領があなたの差し出すものを喜んでくれるだろうか」と。おそらく大統領は、侮辱されたと感じることでしょう。実は、主もそうお感じになるのです。大統領に対して決して決してできないようなことを、主に對して行なつていいはずがありません。

神は、最良のものを望んでおられます。神は、最良のものを捧げるにふさわしい御方です。主が、私たちから最高のものを得ることになるように、ごまかしの一切ない決断をしようではありませんか。

「ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。」

(マタイの福音書10章16節)

実際的な知恵で大切な要素の一つは、気配りです。クリスチャンは、氣を利かせるとはどういうことを習得しなければなりません。すなわち、相手の機嫌をいたずらに損ねることなく、むしろ、良好な関係を強固にするため、何をし、何を言うべきかをわきまえる鋭敏な感性を養わなければなりません。気配りのできる人であるなら、相手の立場に立ち、このように自問するはずで、「私だったら、どのように言ってもらいたい、また、してもらいたいと望むだろうか」と。そのような人は、賢明にふるまい、相手に配慮し、相手の過ちを赦し、事の本質を見抜こうと努めます。

残念ながら、キリスト教信仰を信奉する人の中にも、御多分にもれず、機転の利かない人がいるものです。その典型ともいえる例の一つは、アメリカ中西部の小さな町に店を持つ床屋の話です。不運にもその店の客となった人が、ある日、「ひげを剃ってくれ」と店に入ってきました。床屋は客を座らせると、首の回りにいつもの白い布を巻き、椅子をやや後ろに傾けました。客が天井を見上げると、そこにはこう書かれていました。「永遠をあなたはどこで過ごすつもりですか？」床屋は、客の顔にたつぷりと石鹸の泡をつけ、革砥かわとでかみそりを研ぎはじめました。そして、次の質問で、福音の証しをはじめたのです。「あなたは神に会う備えができていますか」。客は、椅子から弾けるようにしてタオル、石鹸、その他をつけたまま逃げ出しました。それ以来、二度と姿を現すことはありませんでした。

また、個人伝道をしようと、ある夜、外出した熱心な学生の話もあります。暗い街路を進んで行くと、前方に、(人目につかないよう)物陰を歩いている若い女性がいました。彼が近づいていくと、彼女は慌てて走り出しました。不安になった彼もまた、彼女の後を追いかけてきました。彼女が二倍の速さで走ると、彼も同じ速度で追いかけます。ひどく動揺した彼女は、やつこのことで家のポーチに駆け上がり、ハンドバッグの中をかき回し、慌てて玄関の鍵を取り出そうとしました。彼もまたポーチに駆け上がると、彼女は恐怖でこわばり、叫び声も出せないほどでした。すると、彼はにつこり笑って彼女にトラクトを手渡し、一人の罪人に福音を届けることができたことに満足して帰っていったのでした。

病人を訪ねるときには、並々ならない気配りが必要です。「見るからに具合の悪い顔をしておられますね」と言っても、何の助けにもなりません。「知人が同じ病気でした。死んでしまいましたね」と言うのも同様です。そんな慰めを聞きたい人がいるでしょうか。

また、家族を亡くした人を訪ねるときも、十分な配慮が必要です。暗殺された政治家の未亡人に、こう言ったテキサス人の真似をしてはいけません。「よりによつてテキサスで死ななくては良かったのに」と。

常に温和で、適切なことばを語るすべを心得ているとしか思えない特別な聖徒たちに、神の祝福がありますように。しかし、たとえその仲間に入れないとしても、私たちがそっかしい振舞いをする事なく、知恵と機転の利いた対応ができるよう、神が教えてくださいますように。

「わたしは、あなたの苦しみと貧しさとを知っている。」

(ヨハネの黙示録2章9節)

アジアの諸教会への手紙で七回、主イエスは、「わたしは知っている」と言っておられますが、それは、ほとんどすべて好ましい意味合いで使われています。「わたしはあなたの働きを、行ないを、忍耐を、患難を、寛容を、信仰を知っている」と。「わたしは知っている」ということばには、神の民に対する大きな慰め、あわれみ、そして、激励が込められています。

ローマン・ストラウスが指摘する通り、イエスが、「わたしは知っている」と言われたとき、主は、知識の深まりを通して認識するという意味でよく使われる「ギノースコー」(γινώσκω)という語をお使いにはならず、あますところなく知る、完全に知る、単に観察によるのではなく、経験から知るという意味を示す「オイーダ」(οἶδα)という語を使っておられます。苦難の中にある信徒たちは、世に知られることなく、世に憎まれてはいなくても、主は彼らのことを知り、愛しておられるということです。キリストは、ご自身のものである人々の迫害と窮乏を知っておられます。信徒たちが世からどのように評価されているかを、主はご存知です。「わたしは知っている」(I know)というわずかに二音節のことばによつて、疲労と試練と困難の中にいた数多くの信徒たちが、どれほど強められ、励まされてきたことでしょう。私たちの救い主の口から発せられるこの二語が、私たちの困難を照らすとき、私たちは神の微笑みを感じ、この世での患難が、「私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないもの」(ローマ8・18)であることを悟ります。

これはまた、あわれみのことばでもあります。私たちの大祭司である方は、御自身の経験により、私たちが今、経験してい

ることをご存知です。主は悲しみの人で、悲嘆のなんたるかを知っておられます。主は、苦しみを受け、誘惑にさらされたからです。

これはまた、共有のことばでもあります。からだのかしらであられる主は、肢体が受けている試練や迫害を自らも感じておられます。「心を引き裂くどの心痛も、『悲しみの人』の知らざるものなし」。主は、私たちが経験していることを知的に了解しておられるというだけではなく、それを現在の経験として知っておられるのです。主は、それを感じておられるのです。

これはまた、助けを保証することばでもあります。私たちの弁護者として、主は傍らに来てくださり、私たちの重荷を担い、こぼれ落ちる涙を拭ってくださいます。主は、私たちの傷に包帯をしに来てくださり、敵を追い返してくださいます。

最後の点として、これは報いを保証することばでもあります。私たちが、主と一つとなつた故に、主は、私たちがなすこと、苦しむことのすべてをご存知です。主は、あらゆる愛の行ない、従順、忍耐について入念に記録をつけておられます。いつの日か、遠からず、主は豊かに報いてくださるのです。

もし、まさに今、悲しみや苦しみの谷をあなたが通つているとするなら、救い主があなたに語っておられることばを聞いてください。主は、言われます。「わたしは知っている」と。あなたは、孤立してなどいけません。主は谷の中でも、あなたと共にあり、あなたを最後まで安全に導いてくださり、あなたの望む目的地に安全に導いてくださるのです。

「だれも、主知主義や、仰々しい空論によって信仰が台無しにされないように気をつけなさい。そのようなものは、せいぜい人間の世界観をもとにしているに過ぎず、キリストを無視するものです。」

(コロサイ2章8節フィリップス訳)

ここでフィリップスが、「主知主義」(※真理は理性によって合理的に把握されるとする立場)と訳した語は、philosophy(日本語では「哲学」ということばのもとになっています。基本的には、知恵を愛することを意味しますが、その後、人生の実体と目的の探求、という、もつと深い意味が加わりました。

大半の人間の哲学は、混み入った、仰々しい言い方で表現されています。一般の人にとつては、何のことかさっぱりわかりません。そのような哲学は、自分の知力を用いて、人間の憶測に難解なことばで衣を着せることが好きな人には、大変魅力があるのです。

はつきり言つて、人間の哲学だけでは不十分です。フィリップスはそれを、「主知主義と仰々しい空論」と表現しています。それは、事物の本性に対する人間の考えを土台にしているにすぎず、キリストを度外視しているからです。パートランド・ラッセルほどの有名な哲学者でも、その人生の終わりにこう言つたと伝えられています。「哲学をやったことは、結局、私にとって大失敗だった」と。

賢明なクリスチャンなら、現代の主知主義という仰々しい空論にはだまされません。人間の知恵という神殿の前でひざまづくことを拒否し、むしろ、知恵と知識のすべての宝がキリストの中にあることを悟ります。すべての哲学を神のみことばによって吟味し、聖書に反するものはすべて拒絶します。

キリスト教信仰に対して、哲学者が新しい攻撃をしたことがトップニュースになつても、動じることがありません。そのような人々から聖書に優るものが出てくることは、期待できないと知る成熟した判断力があるからです。

哲学者たちと難解な語を駆使しての会話ができないこと、煩雑な論法についていけないことで劣等感を持つたりはしません。むしろ、哲学者たちが、自分たちの言いたいことを単純に言えないでいることを怪しみ、その反対に、福音は、たとえ(この世から見ても)愚かな(人生の)旅人にも理解できるものであることを喜びます。

クリスチャンは、現在の哲学の中に、「あなたがたは神のようになれるのです」という、蛇の誘惑が潜んでいることを察知します(創世記3・5)。人間は、自分の知性を神の知性より優つて見ようとする誘惑にさらされています。しかし、知恵あるクリスチャンなら、悪魔の偽りを拒否します。さまざまの思弁と、神の知識に逆らつて立つあらゆる高ぶりを打ち砕くのです(IIコリント10・5)。

「それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひぎをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」

(ピリピ人への手紙2章10-11節)

やがて、何という光景が繰り広げられることでしょう。聖なるイエスの御名の前に、宇宙のあらゆるものが膝をかがめ、すべての口が、「イエスは主である」と告白するのです。神がそうお定めになりました。ゆえに、必ず実現する時がやってくるのです。

これは、万人救済説(※「人類は結局全部救われる」という神学上の説)のことを言っているではありません。すべての被造物が、やがては、生ける愛する主として、キリストを受け入れることになる、とパウロがほのめかしているわけではないのです。パウロが言っているのは、むしろ、生きていく間にこの大切な告白をしなかった人は、やがて次の世で、いやおうなしに告白をすることになる、ということなのです。すべての被造物は、最終的に、イエス・キリストに関わる真理を受け入れ、宇宙全体が服従することになるのです。

ジョン・ストットは、「イエスは主である」というメッセージの中で、こう言っています。「ウエストミンスター寺院で女王陛下下の戴冠式が行なわれたときに、私が最も心を揺さぶられた瞬間の一つは、王冠が、今、まさに女王の頭上に置かれようとする時のことでした。英国の市民を代表するカンタベリー大主教が、寺院の東西南北の人々に向かって、合計四回、こう呼びかけました。『二回前に、この国の真の女王をご紹介しますか。』そしてそれには、女王にお従いなさいますか。』そしてそれに

続いて、賛同の大声がウエストミンスター寺院の身廊(しんろう)(※教会の建物の、入口から祭壇の前までの中央部分)に四回轟き、ついに、王冠が女王の頭に被せられたのです」。

それから、ジョン・ストットは、こうつけ加えました。「次に、皆様にお聞きいたします。私は今、皆様に真の王、また、主としてイエス・キリストをご紹介します。皆様は、この御方にお従いなさいますか」と。

この問いかけは、かき消されることなく、何世紀も鳴り響き続けています。多くの人々の口から、「イエスは私たちの主です」と、賛同の叫びが上ります。しかし、他の人々の口からは、「この人に、私たちの王にはなつてもらいたくありません」(ルカ19・14)という反抗の声が上がります。固く握りしめた拳は、いつの日かこじ開けられ、曲げられることのなかった膝は、すべての名にまさる御名をもつ方の前にかがむことになりました。悲劇としか言いようのないのは、それが手遅れであるということです。神の恵みの日は、その時にはすでに過ぎてしまつていくからです。罪人を救う方に信頼する機会は、過去のものとなつてしまったのです。かつて、主権が踏みじられた御方が、そのときには大きな白い御座の上に座す審判者となつていくからです。

もし、今日、この御方がまだあなたの主になつておられないとするなら、この御方を主と告白しましょう。そして、自ら進んで、主に従うものとなりましょう。

「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどころや、うるさいシンバルと同じです。」

(「コリント人への手紙第一13章1節」)

若いソプラノ歌手がオペラのデビューを果たした後、ある批評家はこう書きました。「もし、彼女に誰かを愛したという経緯があったなら、一層演奏は輝かしいものになっていただであらう」と。彼は、愛が欠如していたことを見抜いていたのです。彼女の歌唱そのものは、技術的に正確であったのですが、温かみというものがなかったのです。

私たちにも、一切のことを規則通りに行なって、人生を歩んでいくことは可能です。正直で、信頼を裏切らず、正しく、寛大で、活気に溢れ、謙遜であることは、決して不可能なことではありません。しかし、このような美德がどれほどあつたとしても、愛の欠如を補うことはできないのです。

どのように愛を与えたいのか、また、どのように愛を受けたらよいのかを知るのに苦労する人は少なくありません。最近読んだものの中に、「何でもやってみるべきではないが、愛する人々に対して、自分の気持ちを表現することだけはできない」、ある有名人の話が出ていたくらいです。

『祈る人々』という本で、著者ジョン・ホワイトは、こう書いています。「長年、私は愛されることにおびえていた。愛(また私は、私が愛と思っているもの)を示すことは、私にとつてなんでもなかった。しかし、男性、女性、子どもの誰であつても、もし、私に深い愛情を示すようなことがあると、居心地が悪くなつた。私の育つた家族では誰も、愛をどのように扱ったらよいか、まったく知らなかった。愛の表現の仕方、愛の受け方も、とてもではないがうまくいとは言えなかった。お互いを愛してい

なかったわけではなく、また、愛を示す方法がまったく見つけられなかったわけではない。しかし、私たちは、まさに「よそよそしい」英国人気質そのものの家族だったのだ。私が十九歳になって徴兵され、家を去るときに、父はそれまで一度もしなかったことをした。父は、私の肩に両手を置いて、私にキスをしたのである。私は、肝をつぶした。何を言つたらいいのか、どうしたらいいのか、まったくわからなかった。私にとつては、非常にきまりの悪い経験であつた。もちろん、父にとつては、非常に悲しいことであつたに違いないが。

ある日、ホワイトは、釘の跡が残る両手を差し伸ばして、自分の前に立つキリストの幻を見ました。最初は、どうしてもこのキリストの愛を受けられない、と感じました。しかし、その後、彼はこう祈りました。「ああ、主よ。私はあなたの手をつかみたいのですが、どうしてもできません」。

ホワイトは、こう書いています。「それに続く静けさの中で、私にある確信がやってきた。それは、私がそれまで自分の回りに築き上げていた防壁が、これから徐々に崩されようとしているという確信であり、キリストの愛が私を包み、満たすままに自分をゆだねさえすればよい。そして、それは、自分にもできるようになるという確信だつた」と。

もし、私たちがすでに自分の周りに防壁を築いてしまい、愛が私たちに対して流れ込むことも、私たちから流れ出ることも妨げられているなら、主とその防壁を取り除いていただき、私たちを冷淡なクリスチャンと変えてしまう、いろいろな恐れから解放していただかなければなりません。

「悪事を行なう者の道は苦痛でいっぱいだ。」

(箴言13章15節 英訳)

悪事を行なう者の道は、苦痛に満ちているという証拠が必要なら、無作為に毎日の新聞を拾い上げるだけで、たくさんの例が見つかることでしょう。私もほんの実験のつもりで、調べてみました。その結果を以下にご紹介します。(※本書が出版された一九八五年以前の実例)

三十五年間、南アメリカで、犯罪の発覚と逮捕を免れていたナチスの戦争犯罪人は、ついに自殺を遂げました。法廷に引き出されるといふ恐れ、そして、おそらくは処刑は免れないといふ恐れから、生きることを断念したのです。

七十四歳の老人が三人の男たちに銃をつきつけられて誘拐され、その息子に九万ドルの身代金が要求されました。ところが、身代金を要求された息子とは、警察と連邦政府の麻薬取締機関から逃走中の、悪名高い麻薬の売人でした。

ある米国下院議員は、政治上優遇する約束の見返りとして、賄賂を受け取り、下院から追放されてしまいました。議会からは、永久追放となる見込みです。

アフガニスタンの反政府勢力は、侵入するロシア軍(旧ソビエト軍)との戦いを継続しています。アフガニスタン政府が、以前、国内唯一のキリスト教会の建物をブルドーザーで破壊し、撤去した、という事実、新聞記事は触れていません。ロシアが侵入してきたのは、神からの懲罰とは考えられないでしょうか。

ある警部は、自分の車が盗難に遭った、と偽りの報告をしました。車にかけてあった保険金を得ようとしたのです。彼は、抜群に優秀な警官という評価を受けており、やがては警察署長

に栄進すると思われていました。ところが、今は警察から除籍され、犯罪捜査を受ける身となりました。

ときには、私たちも、詩篇作者のように、悪者をうらやむ誘惑に駆られます。この世は、彼らの思いのままにできるところで、何もかもが彼らに好都合に運んでいるように思えます。しかし、彼らといえども罪責感、恥辱、露見の恐怖という刈り取りを避けることはできないことを、私たちは忘れていきます。脅迫とゆすりの被害者となることも、しばしばです。また、自分の生命と家族の生命が奪われるのではないかと恐れています。悪事がばれないようにするための手の込んだ、金のかかる防衛網も維持しなければなりません。逮捕、高額な訴訟費用、罰金、投獄という事態も、想定していなければなりません。人生は、彼らが望んだ夢のようにならず、悪夢となります。

この教訓を身をもって学んだ一人の男が、伝道者サム・ジョーンズに、感慨深げにこう語ったそうです。「私は、聖書の中の一節を知っているが、本当にその通りだと思えますよ。それは、『悪事を行なう者の道は苦痛でいっぱいだ』という、あれですよ」と。罪の中には、そもそも避けることのできない、不快極まりない結果があらかじめ組み込まれているということを、男は経験から理解していたのです。

「すると彼は…のろいをかけて誓い始めた。」

(マタイ26章74節)

ある司教が、前週のさまざまな活動を思い返ししながら、庭を一人で歩いてきたときのことです。非常に気まずい思いをした出来事が突然脳裏によぎり、司教は、どう控えめに見ても、辛辣としか言いようのないのしりのことばを続けざまに漏らしてしまいました。たまたま高い壁の向こう側を歩いていた教区の信者は、およそ聖職者にふさわしからぬことば遣いを耳にし、信じられない思いで息を呑み込みました。

これは、自分一人だけの場面で起きた不敬の事例ですが、神の子としてまじめに歩む多くの人々に起こる悲痛な試練でもあります。悪いことばが思わず口から出てしまうという、この忌まわしい癖から逃れられず、いかに自分は主をはずかしめ、また、自らの生活を汚していることだろうかとうめく人は少なくありません。しかも、この癖を打ち破ろうとどれだけ努力しても、所詮は水の泡なのです。

悪いことばを吐き出すのは、たいてい一人でいるとき、あるいは、一人だと思いついてるときであり、また、神経がピリピリしているときです。それは、あるときには、たまりにたまつた怒りとして声に出ますし、また、あるときは、欲求不満の発散として現れます。くだんの司教の場合は、気まずい思いをしたという気持ちが引き起こした自然の反応でした。

一人のときに発した不敬虔なことばがもたらす苦悩よりもさらにひどいのは、いつか人前で、あるいは、就寝中に、または、病院で麻酔治療を受けているときに、口を滑らし、そのことばを発してしまうのではないかという恐怖です。

救い主が裁判にかけられた夜、この古い癖がペテロの中で頭をもたげました。「おまえは、ガリラヤのイエスの仲間ではないか」と指摘されると、ペテロは、のろいをかけて誓い、それを否んだのです(マタイ26・74)。もし、くつろいだ状況であったなら決してそんなことはしなかったでしょう。しかし、今度は自分が危うい立場に置かれ、周りは皆、敵という状況です。すると、回心する前の日々のように、言うべきではないことばがたやすく口をついて出てしまったのです。

どれほど素晴らしい意図を持っていても、また、どれほど固い決心をしていても、悪いことばは、考える間もなく、私たちの口から出てしまいます。うまく隙をつかれてしまうのです。

私たちの生活に居座るこのゴリヤテのような巨人を征服することは、諦めなければならぬのでしょうか。いいえ。他のすべての試練と同様、この試練にも打ち勝てるという約束があります(1コリント10・13)。そのためには、まず、失敗すること、にその罪を告白し、捨て去らなければなりません。次に、私たちの口に見張りを置いてください、と神に叫び求めるのです。好ましいとは言えない人生のさまざまな状況下で、落ち着きと平静さを持つて立ち向かう力を求めなくてはなりません。誰か他のクリスチャンに自分の過ちを告白することが、悪癖の強い鎖を断ち切る助けになる場合もあります。最後の点として、たとえ、他の人が地上で私たちの悪いことばを耳にすることがなかったとしても、御父は天で聞いておられることを決して忘れてはいけません。御父にとつて、そのようなことばがどれほど聞くに堪えないものかを思い出すことが、私たちにとつて強力な抑止力となるからです。

「また、感謝の心を持つ人になりなさい。」

(「口サイ人への手紙3章15節」)

感謝の心は、生活のすべてに輝きを与えるものです。食事を終えた子どもの一人が、こう言います。「おいしい食事だったよ、お母さん」。この一言で、すでに幸せな家庭に新しい温かみ加わることになります。

ところが、うつかり感謝の気持ちを表さないままでいることは、決して珍しくありません。主イエスは、十人のツアラアトを病む人を癒しましたが、わざわざ戻ってきて感謝をしたのは、たった一人でした。しかも、その一人は、ユダヤ人が見下すサマリヤ人だったので(ルカ17・17)。ここから、二つの教訓を学ぶことができます。罪ある人間の世界で感謝を持った人は、稀であること、そして、感謝されることがあるとしたら、それは、思いがけない人から来るということです。

せっかく親切にしても、「ありがとう」というあたり前の反応すら示さない人がいれば、私たちはすぐがっかりします。しかし、まさにそれと同じく、自分が親切を受けておきながら、感謝を表さないでいたら、相手はどう思うか、私たちは悟らなければなりません。

聖書をざっと眺めただけでも、あちらこちらに神に捧げるべき感謝についての勧めがなされていることがわかります。神に感謝すべきことが、私たちにはたくさんあります。そのすべてを一覧表にまとめることは、とてもできないでしょう。私たちの生活全体が神への賛歌でなければなりません。

賛美歌にこうあります。

数えることもあたわぬ尊き賜物こそ

日々感謝を捧げる理由なれ

心浮き立つほかはなし

その賜物喜びて味わえば

それだけでなく、私たちはお互いに対しても、感謝の気持ちを表す習慣も養わなくてははいけません。温かい握手、電話や手紙：それらのおかげで、どれほど落ち込んだ気持ちも元気づけられることでしょう。一人の老医師に、患者から支払いと共に感謝の手紙が届きました。それを読んだ彼は、その手紙を自分の大切な所有物と一緒に保管しました。それは、彼が初めて受け取った感謝の手紙だったので。

私たちは、いただいた贈物、受けたもてなし、ただで車に乗せてもらったこと、道具や機器を貸してもらったこと、仕事のプロジェクトに協力してもらったこと、いただいたあらゆる親切や手助けに対し、すぐに感謝の気持ちを表すべきです。

問題は、私たちがこれらのことを当然だと思っているところ、あるいは、腰を下ろして手紙を書くということが、まだ習慣になっていない点にあります。そうであるとするなら、今は、自分のものとなつていくすべてのもののゆえに感謝する心を養い、その感謝をことばに表す習慣を形成していくこと、そして、時を移さずに感謝を表すという訓練を、自らに課さなければなりません。感謝が迅速であれば、気持ちには、二倍となつて伝わるのです。

「幻がなければ、民は滅びる。しかし律法を守る者は幸いである。」

(箴言29章18節 英訳)

今日の節の前半は、「幻がなければ、民は滅びる」と書かれています。これは通常、努力するにあたっては、到達目標が必要だという意味であると解釈されます。計画を明確にし、望む結果と、そこに至るまでの過程をしっかりと思い描かなければならないというわけです。

しかし、この「幻」という語は、「神からの啓示」を意味しており、「滅びる」という語には、「制約を取り払う」という意味があります。したがって、この箇所が言おうとしているのは、神のみことばを知らず、尊ばないとすることは、人間はほしいうまに振舞うということですよ(※新改訳はそのような訳になっています)。

それとは対照的なことが、後半に書かれています。「律法を守る者は幸いである」。言い換えれば、祝福の道は、みことばに示された神のみことばに従うときに見つかるということなのです。

まず、節の前半を考えてみましょう。神を知る知識を放棄してしまうと、人間の行動には歯止めがなくなりになります。例えば、ある国が神から離反し、何もかも進化というプロセスで説明ができる、としたらどうでしょう。つまり、人間は純粋に自然の過程の産物であり、超自然的な存在者によって創造されたものではないとした場合です。もし、その通りであるとすれば、倫理的基準の土台は何もありません。私たちが取る行動はみな、自然にそうなるのだから避けられない結果ということになります。

ラン(Sir Arnold Lunn)とリーン(Garth Lean)がその共著、『新しい道徳』で指摘しているように、「生命が存在しない惑星の表面で、他の要因に一切よらず、自然過程だけで最初の生きた細胞が進化したとした場合、また、人間の知性というものが、火山と同じく、自然的、物質的な力にすぎないとするならば、南アフリカのアパルトヘイト(※人種隔離政策。九十年代初めまで続いていた)を無分別であると非難することはできない。それは、火山が噴火して、溶岩を流すのを非難するようなものだ」からです。

神のみことばを拒絶すれば、善悪の絶対的基準は、消滅します。倫理的に何が正しいかは、それを受け入れる個人や集団しだいで変化します。人間が、自分自身の行動の審判者となるからです。その哲学とは、「気持ちがいいなら、やってみるとよい」ということにつきまします。「そんなことはみんながやっている」という事実さえあれば、すべてが正当化できるのです。

このようにして、人々は制約をかなぐり捨て、不品行、姦淫、同性愛に身を任せます。犯罪と暴力は、恐ろしい比率で増加し、汚職は、政財界のいたるところに広がります。虚偽と欺きは、行動様式として受け入れられ、こうして社会の骨組みは、瓦解していくのです。

「しかし律法を守る者は幸い」です。たとえ、世界のすべてが勝手気ままに振舞っても、個々人のクリスチャンは、神のみことばを信じて従うことによって、幸いな生き方を見出すことができるからです。実は、それこそ進むべき唯一の道なのです。

「しかり。わたしはすぐに来る。」

(ヨハネの黙示録22章20節)

終末が近づくに従い、キリストがいつ戻つて来られてもおかしくない、という希望を捨てて人が多く出ることは、容易に想像が付きまします。しかし、人間が受け入れようと受け入れまいと、真理そのものが変わることはありません。

事実を言えば、主イエスは、いつ来られてもおかしくないのです。《花婿》「キリスト」が帰つて来られる日も、時刻も私たちにわかりません。言い換えれば、今日、来られる可能性もあるということです。主の叫び声、天使のかしらの声、神のラッパが聞こえるときまでに成就すべき預言で、まだ残っているものは一つもありません。確かに、教会は、地上にいる限りはずつと患難を経験することでしょう。しかし、「患難時代」という恐怖は、教会がたどるべき道から除外されています。教会が患難時代を通らなければならないとするなら、少なくとも七年間、主が来られないこととなります。今はまだ、患難時代になっていないからです。しかし、患難時代が到来したら、それは、七年間続くこととなります。

「救い主がいつ現れてもいよいよ備えていなさい」と教えている箇所が、聖書には少なくありません。以下のみことばに着目してください。

「私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。」(ローマ13・11)

「夜はふけて、昼が近づきました。」(ローマ13・12)

「主は近いのです。」(ピリピ4・5)

「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。」(ヘブル10・37)

「主の来られるのが近いからです。」(ヤコブ5・8)

「さばきの主が、戸口のところに立つておられます。」(ヤコブ5・9)

「万物の終わりが近づきました。」(1ペテロ4・7)

これらのみことばは、主の来臨が切迫していることを、しっかり分からせることを目的としているように思われます。主の来臨こそは、私たちが目を覚まして待ち望むべき出来事なのです。私たちは、しもべとしての任務を忠実に遂行し、主に精一杯仕えていかなければなりません。

R・A・トレーは、かつてこう言いました。「主の再臨がいつ起きてもおかしくないという教えは、人を清くし、非利己的、献身的にし、かつ、世俗的ではない者とし、活発な奉仕の生涯を可能にさせる、重要な聖書の主張である。私たちが説教する場合、死は速やかにやってくる、だから聖い生き方をし、仕事に励みなさい、と人々に促すことが少なくない。しかし、それが聖書の主張であつたためしはない。聖書の主張は、一貫して、キリストは再び来られる、だからその来臨に備えよというものである」。

私たちの責任は、明確です。腰には帯を締め、灯りをともし、主の到来を待ち望む者にふさわしい者でなければなりません(ルカ12・35・36)。主が、今にでも来られると期待する権限は私たちにない、と教える人々の言うなりになってはいけません。むしろ、主の来臨は、今にでも起こり得るものであることを信じ、それを熱心に教え、その真理が私たちの生き方を通して輝くものでありますように。

「神の恵みによって、私は今の私になりました。」

(「コリント人への手紙第一 15章10節」)

人が自らに課す苦悩の一つは、神がまったく意図しておられないにもかかわらず、自分が他の誰かのようにならうと努力することです。人は皆、他に例のない神の作品です。ある人が言ったように、「神が私たちをお造りになるとき、型紙を使うことはなさらなかった」のです。私たちがその事実を変更することを、神は望んではおられません。

マクスウェル・マルツ(※アメリカの行動心理学者)は、こう書いています。「あなたという人格は、他のいかなる人の人格とも競合しない。地上のどこを捜しても、また、あなたと同じような立場の人の中にさえ、あなたのような人は他に一人もいないからである。あなたは、他に類のない存在である。あなたは、他のどの人にも似てはいないし、似ることもできない。あなたは、もともと他のいかなる人にも似るように造られてはいないし、他のいかなる人もあなたと似るように造られてはいない。神は、標準的な人間を造っておいて、『これでよし』とラベルを貼るようなことはなさらなかった。神は、一人ひとりの人間を個人として、また、他に類のない存在として造られたのである。それは、ちょうど神が一つひとつの雪の結晶を、すべて異なったものに作られたのと同じである」と。

私たちの一人ひとりには、例外なく神の知恵と愛によって生み出されたものです。今の私たちを造るにあたって、神は間違いなどしておられません。私たちの容姿、知能、そして、才能は、神が最良のものとして私たちに備えてくださったものを表しています。それは、無限の知識と無限の愛を持つ方にして初めてできたことなのです。

したがって、私たちが誰か他の人のようであったらよかったのにと願うことは、神への侮辱です。それは、神がしくじりをした、あるいは、私たちの益になったはずのものを与えてくださらなかった、ということを示唆するからです。

他の人のようになりたいと切望するのは、空しいことです。神がどのように私たちをお造りになったか、また、何を与えてくださったかということは、今さら変更ができないことだからです。もちろん、他の人の美德を模範とすることは可能です。

しかし、ここで今、問題にしているのは、神の作品として、私たちはどのようなものとして造られたか、ということなのです。

神が、私たちの生涯のために作られた神のデザインに満足することなく、人生を歩んでいくとするなら、私たちは劣等感で身動きが取れなくなることでしょう。しかし、これは他の人と比べて劣っているという問題ではないのです。私たちは、劣っているのではなく、個性的で、他に類のない存在であるだけなのです。

他の人のようになろうとする試みは、失敗が運命づけられています。それは、小指が心臓の働きをしようとするのと同様に、無理なことだからです。それは、神が意図されたことではありません。したがって、どうやってもうまくいくはずはないのです。

幸いな態度とは、パウロと共にこう言うことです。「神の恵みによって、私は今の私になりました」(「コリント15・10」と)。
神の独特な設計によって、自分が造られたことを私たちは喜ぶべきであり、私たち自身を、そして、私たちが持っているものを最大限に用いて神の栄光を表そうと、心を決めるべきなのです。私たちに、どう頑張ってもできないことがいろいろあることでしょう。しかし、他の人にはできないことでも、私たちにできることがあるのです。

「わたしは、自分からは何事も行うことができません。」

(ヨハネの福音書5章30節)

主イエスは、ヨハネの福音書五章で二度に渡り、「自分からは何事も行うことはできない」と言っておられます。一九節で、主は、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことはできません」と言っておられます。また、三〇節で再び、主は、「わたしは自分からは何事も行うことはできません」と言っておられます。

このような聖句を読めば、最初は失望することでしょう。イエスも、私たちとまったく同じように、その力に限界があると言っているように思われるからです。しかし、もし、主張された通り、主が神ならば、主は全能でなければなりません。それではなぜ、自分から何事も行うことはできないと言われたのでしょうか。事実、福音に敵対する人々は、これらの聖句を引用して、イエスがあらゆる人間的制約に縛られた、ただの人にすぎないことを示そうとします。

しかし、この箇所をもっと注意深く見てみましょう。主は、肉体の力のことを話しておられたのではなく、御父のみことろに従おうとご自分を捧げ切っておられたので、「何事も先走って行なうことはできない」と言っておられたにすぎません。完全な御方であった主は、自我の意志によって行動されることができず、神のみことろから離れて何かを望むということがなかったのです。

あなたや私の場合は、自分から何事も行うことはできないとは言えません。主に関係なく、行動することがあまりにも多いからです。主に相談することなく、私たちは決断を下します。罪になると十分に分かっていながら、誘惑に負けます。主のみことろより、自分の意志を優先します。ところが、主イエスに

は、そのようなことは何一つできなかったのです。

したがって、これらの聖句は、イエス・キリストが、か弱く力に限りがあったということを暗示しているのではなく、その正反対に、神にふさわしく完全であったことを示しています。これは、これらの聖句を、途中で止まらずに全体を読めば明らかです。一九節で、イエスはこうおっしゃっています。「子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行うのです」。言い換えれば、「子は、父から独立して行うことはできないが、父がなさることは何でもできる」というのです。

これは、とりもなおさず、神と対等であるという主張にほかなりません。さらに、再び三〇節において、イエスは言われました。「わたしは、自分からは何事も行うことはできません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみことろを求めるからです」。これは、イエスが、一切を御父から受けた指図に基づいて決断しておられること、また、イエスが、神のみことろに完全に服従しておられるがゆえに、これらの決断は正しいと保証されていることを意味しています。

この箇所には、「ご自身が神と対等であるというキリストの主張が七つ含まれている」と、J・S・バクスターは、指摘します。すなわち、行いにおいて(19節)、知ることに(20節)、よみがえりに(21、28、29節)、さばきにおいて(23節)、生かすことにおいて(24、25節)、自存という点において(26節)対等であるということです。私たちの救い主は、力に限りのある、ひ弱な方ではなく、肉体をまとわれた全能の神であるのです。

「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。…人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」

(ガラテヤ人への手紙6章2、5節)

これら二つの節を何気なく読むと、明らかな矛盾があると思ひ込む人がいてもおかしくありません。最初の聖句は「お互いの重荷を負い合いなさい」、と言っているのに対し、次の聖句は「自分の重荷を負うべきである」、と言っているからです。

六章二節で「重荷」と訳されている語は、靈的、身体的、情緒的のしかかるあらゆるものを意味します。前後の文脈から見て、それが指すのは、過ちに陥った人(1節)の人生に起こった、罪責感と落胆であることがわかります。愛情を込めてその肩を抱き、神とクリスチャンの交わりに連れ戻すときに、私たちはこのような兄弟を助けているのです。重荷に含まれるものには、その他にも、私たちすべてに起こる人生の悲嘆、困難、試練、挫折などもあります。慰め、励まし、物質的なものを分け合い、建設的な助言をすることで、私たちは互いの重荷を負い合うのです。つまり、たとえ個人的に大きな代価を払っても、他の人の問題に関わるといふことです。そうするなら、私たちは、「互いに愛し合いなさい」というキリストの律法を実践していることとなります。他の人のために「もの」だけでなく、自分自身をも費やすことで、愛は實際生活に表されるのです。

ところが、五節の「重荷」には異なった語が使われています。ここでは、何であれ運ぶ必要があるものを意味しており、その重荷が重いか軽いかはまったく不明です。パウロがここで言っているのは、キリストのさばきの座において、誰もが負わなければならない自分の責任のことです。その際、他の人と比べて

自分はどうか、ということとは、問題になりません。おのおのが自分の記録に基づいてさばかれ、それにふさわしい報いが与えられるのです。

二節と五節の相互関係は、結局次の通りであるように思われます。過ちに陥った人を回復させると、人は、自分が優つたものだと思ふ罍わなにかかるかもしれませぬ。失敗した兄弟の重荷を負うことで、その人は、自分が靈的に高い立場にいるのではないかと、罪を犯している聖徒と比較すれば自分の方が有利な立場にいるのではないかと、と思つてしまうのです。そのような人にパウロが思い起こさせているのは、主の前に立つときに説明を求められるのは、他の人のことではなく、自分、また、自分の行い、そして、自分の人格についてであることを忘れてはならない、ということなのです。つまり、人は、それぞれ自分自身の説明責任という重荷を負わなければならないのです。

というわけで、これら二つの聖句は、排除し合うものでなく、むしろ、密接極まりない関係をお互いに保っているのです。

「もし、あなたの神、主があなたに与えて住まわせる町の一つで、
：聞いたなら、あなたは、調べ、探り、よく問いたださなければ
ならない。もし、そのような忌みきらうべきことがあなたに
たのうちで行われたことが、事実で確かなら、：」

(申命記13章12-14節)

もし、イスラエルの町に住む民が神を捨て偶像を選んだ、と
いううわさが広がったならば、いかなる懲罰的行動が行なわれ
るにせよ、その前にまず、徹底的な調査が行なわれなければな
りませんでした。

私たちがうわさ話や悪口を聞いたときにも、それと同様に十
分注意をし、ここにある六段階の確認が必要です。単なるうわ
さか、調べたか、探ったか、よく問いただしたか、それは事実
か、それは確実かという検証です。

実際、ときどき宗教界で取り沙汰されるセンセーショナルな
ニュースも、人に伝える前に、同様の徹底さと注意があつたな
ら、どれほど良いことでしょう。いくつかの例をご紹介しますよ
う。

しばらく前のことですが、(※本書が発刊された一九八五年以
前の話)、ニューヨークの棧橋に、エルサレムで神殿を建造する
ための石材が積まれていて、そのうちイスラエルに向けて運ば
れる予定であるという話が広がりました。その石材は、インディ
アナ州で切り出された石灰岩であるというおまけまでついてい
ました。クリスチャンたちは、このニュースを熱心に広めまし
たが、その報告がまったくでたらめであるということが後でわ
かり、不信を招いてしまったのです。

また、科学者たちが人類歴史の広範なデータをコンピュータ
に入力したところ、ヨシユアの時代に、(二十四時間よりも長い)

一日があつたという聖書の記述(※ヨシユア記10・12・14参照)
が確認された、という話が突然出てきたことがありました。聖
書を裏づけるニュースが欲しかったクリスチャンたちは、その
話を雑誌に載せ、話題として広めました。そして、その後、泡
のようにふくらんだ話が弾けたのです。その話には、根拠のな
いことが明らかにになりました。

もつと最近の話ですが、評判のよくないある有名人が反キリ
ストである可能性があることを示そうとして、数学的計算法を
駆使した、次のような仕組みが考案されました。まず、この人
物の名前の文字それぞれに数値を割り当てます。それからある
方式にのっとり、加減乗除をすると、何と六百六十六(※反キリ
ストを象徴する数とされる。黙示録13・18参照)という数字が現
れるというのです! もちろん、これでは何も証明されたこと
にはなりません。どのような名前であつても、六百六十六とい
う数字が現れるように数学的な計算を考案することが、ほぼ無
理なくできるからです。

私の手元には、チャールズ・ダーウィンがその一生を終えよう
とする頃、進化論を捨て、聖書を信じる信仰に立ち返った、と述
べるトラクトがあります。これは、事実かもしれませぬ。事実で
ある、と私は信じたい気持ちです。いつの日か、それが事実で
あると分かる時が来るかもしれません。しかし、今のところ
は、その話を裏づける資料が私にはありません。したがって、そ
れが手に入るまでは、その話を広げるつもりはありません。

今日の聖句にある六段階の検証を適用すれば、私たちが面目
を失う多くの場面から救われるばかりか、キリスト信仰が信用
を失う事態を避けることができることでしょう。単なるうわさ
か、調べたか、探ったか、よく問いただしたか、それは事実か、
それは確かか、と。

「詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かつて、心から歌い、また賛美しなさい。」

(エペソ人への手紙5章19節)

ここでいう歌とは、聖霊の満たしと関連しています。それは、あたかも聖霊の満たしの確かな結果の一つに、歌があると云っているかのようでもあります。おそらく、歴史上のほとんどの大リバイバルと歌が切り離せなかつた理由は、そこにあるのでしょう。ウエルズのリバイバルは、その最たるものです。

クリスチャンほど、歌う題材に富む人、詩と賛美と霊の歌という豊かな財産を受け継いでいる人は、他にいません。私たちは、賛美歌のおかげで、心に感じてはいてもなかなか表現できない思いを、崇高なことばで表現することができません。賛美歌の中には、完全な明け渡しをテーマにしたもののように、私たちがまだ経験していない思いを表現したものもあります。「みなささげまつり／わがものはなし」はその一つです。そのような場合でも、賛美歌を心からの願いとして歌うことができます。

霊の歌の場合、大事なのはリズムでもメロディーでも、ハーモニーでもなく、歌のメッセージが心から発し、聖霊の力によつて神の御前に上ることなのです。メアリー・ボウレーは、その真理を次のように言いあてています。

ああ主よ、私たちは知っています

歌がどれほど甘美かは問題ではないと

御霊に教えられた心

それだけがあなたに奏でる旋律であると

神の御霊は、みことばの説教と同様に、賛美歌を用いることもおできになります。後に、グラタタン・ギネス(※スボルジョン、ムーディーと並び称せられる一九世紀最大の説教者の一人)の母親となる一人の女性が、川に身を投げようとしていたところ、ふと耳を澄ますと、一人の農夫が畑を耕しながら歌っている歌が聞こえたので、自殺を思い留まりました。後に、ギネス博士は、こう述懐しています。「私が今日こうして、神のために働くことができるのは、すべて、一人の名もないクリスチャンが畑を耕し、実入りの少ない仕事をしながら、主に賛美の歌を歌っていてくれていたおかげです」。

キリスト教音楽の働きに従事する人は、次の二つの危険に対して警戒が必要です。一つは、自我が忍び込む危険です。他の公の働きと同様、自己顕示欲が頭をもたげやすいのです。神の栄光と人々への祝福となるより、自分の才能にみんなが感心するようにしたいという誘惑に、常にさらされます。もう一つは、徳を高めるといふより、聞く人を楽しませようという危険です。素晴らしい音楽的技術を持つて歌詞を歌いながら、歌のメッセージが聞く人の心にまで届かない、ということが、十分に起こり得るのです。そして、泡のような、軽薄で、私たちが慕う主にまつたくふさわしくない歌をもつて聞く人の感情をおおることもないとは言えません。

文化が異なると、音楽の好みも異なります。しかし、どのような文化であれ、賛美は教理的に健全で、神を敬う姿勢に貫かれ、霊的に徳を高めるものでなければなりません。

「以前私たちを迫害した者が、そのとき滅ぼそうとした信仰を今は宣べ伝えている。」

(ガラテヤ人への手紙1章23節)

タルソのサウロ(※後のパウロ)が回心した後、ユダヤの諸教会は、それまでキリスト信仰の迫害の急先鋒に立っていた者が、熱心な伝道者、そして、キリスト信仰の擁護者となったことを耳にしました。それは、鮮やかなどんでん返しでした。

近年においても、それと同様に、考え方を一転した人々の注目すべき出来事が起きています。

リトルトン卿とギルバート・ウエストは、共同で研究をし、聖書を擁護する人々の信仰を覆そうと企てました。リトルトンは、サウロが回心したという記録があてにならないこと、ウエストは、キリストの復活が神話にすぎないことを決定的に証明しよう、と分担が決まりました。

「彼らは二人とも、聖書の記録に関してそれほど多くを知っていたわけではないことを素直に認めていた。しかし、『正直であろうとすれば、少なくとも証拠は調べないわけにはいかない』と心に決めた。彼らは、研究テーマの進行状況について、しばしば話し合いをした。あるときのこと、リトルトンが、『何か大事なものが、ここには潜んでいる気がし始めた』と、友人ウエストに打ち明けると、ウエストの方も、『実は、自分の研究結果に私も幾分動揺しているのだ』と漏らした。そしてついに、本が書き上げられ、二人の著者たちも一度出会ったときには、お互いがかつて嘲笑の的にするつもりでいたテーマを、むしろ、肯定する内容の本を自らが出したことに気づいた。法律の専門家としてあらゆる証拠を調べた結果、サウロの回心についても、キリストの復活についても、聖書が述べていることが真実である、と正直に

受け入れる他はないという結論に至ったのであった(フレデリック・P・ウッド)。

ちなみに、リトルトン卿の本は、『聖パウロの回心』で、ウエストの本は、『イエス・キリストの復活』というタイトルです。

神を認めないことで有名なロバート・C・インガソルは、イエス・キリストに関わる記録が誤りであることを示す本を書いてみないか、と不可知論者であるルー・ウォレス(※南北戦争の英雄、ニューメキシコ準州知事、弁護士)をたきつけました。メソジスト派教会に属していた妻は、ひどく悲しみましたが、ウォレスは、何年もかけてそのテーマを研究し続けたのです。その後、いよいよ執筆が始まりました。最初の四章をほぼ書き上げた頃、ウォレスは、キリストに関する記録が本物であることを認めないわけにいかなくなりました。彼は、悔い改めて、ひざまずき、キリストを主、また、救い主として受け入れたのでした。その後、彼が書いた『ペン・ハー』という本は、神の御子であるキリストを示す内容となっています。

フランク・モリソンは、キリストに関する話を書きたい、と念願していました。奇跡が信じられなかったので、研究の対象を十字架に至るまでの七日間に限定しようと考えました。ところが、聖書の記録を調べていくうちに、対象は復活までおよびました。そしてついに、キリストが本当によみがえったことを確信するに至り、キリストを自分の救い主として受け入れ、『墓石を動かしたのは誰か』(※邦訳『イースターの朝のできごと』)という本を書いたのです。最初の章のタイトルは、『書かれるはずのなかった本』となっています。

聖書は、生きていて、力強く、両刃の剣よりも鋭利です。聖書の最高の証明とは、聖書自身なのです。聖書を攻撃し、嘲つていても、やがて、いつの日かそれを信じ、聖書の熱心な推進者になるという可能性は、誰にでもあるのです。

「彼に知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たした。」

(出エジプト記31章3節)

今日のみことばは、聖霊に整えられて、幕屋の建造を監督したベツアルエルに關するものです。彼は、金や銀や青銅の細工に巧みで、寶石を彫り、木を彫刻しました。神の御霊の助けによって、そのような実的な職務をこなす職人となったのです。

『チョイス・グリーニング』(※ Choice Cleanings)とつておきの落穂』卓上カレンダー形式のデボーション用読み物)には、E・トランプ氏の次のようなことばが引用されています。

「一般的に言つて、私たちはこうした実務面での御霊の働きを見過ごしがちである。畑であろうと、工場であろうと、会社であろうと、家であろうと、信仰者は毎日の労務において、御霊の助けを求めて構わないのである。私のある知人は、工場にあつたベンチを、いわば、祭壇に変えた。また、私たちと交わりを持つマルタとも言ふべき姉妹は、台所用のテーブルを、いわば、聖餐式さくせんしきのテーブルに変えてしまった。また、会社の机を講壇に変え、そこから語つたり、文章を書いたりした人もいる。つまり、日常の平凡な出来事を、『王』に対する奉仕に変容させたのである」。

イスラエルのナザレには、主にアラブ人の世話をするキリスト教病院があります。病院の敷地にはチャペルがありますが、説教者が立つて話をするときには、講壇ではなく、びかびかに磨かれた大工の仕事台の所に立つのです。そして、その端には、木製の万力が取りつけられています。それは、私たちの主がナザレで大工をしておられたこと、そして、その作業台は、主の

講壇であつたことを思い出させてくれる、絶好の調度品となっています。

アメリカ中西部に住むある医師は、患者の体だけではなく、たましいをも治療しようといふ心がけていました。診療室でしばらくの間患者と会話をし、徹底的な検査をしてみると、問題が身体的なものというよりは、靈的なものではないかと疑われる場合がときどきありました。そのような時は、夜、その患者の家に訪問し、玄関のベルを鳴らします。最初は、医師の顔を見て患者は慌てます。しかし、その後で、この温和な医師は、次のようなことを言うのです。「私は、医師としてあなたに会いに来たのではなく、友人として訪問に来ました。あなたにお話ししたいことがあるのですが、入つてもいいですか」。もちろん患者は、「いいですよ」と言います。そこで、医師は家に入り、患者の靈的必要について話をするのです。そして、その必要に対する答えはイエスにある、と説明をします。その結果、患者だつた人の多くが自分の生涯を主に委ね、主に従う人生に入つていきました。自分たちのからだのことばかりではなく、たましいの心配までしてくれたこの愛すべき医師に、多くの人が尽きることのない感謝をしたことでしょう。

主は、今日も、一風変わった「講壇」を世界の至るところにお持ちです。トランプ氏が言つたように、日常の平凡な営みを、王なる御方に対する奉仕と変える人が大勢いるからです。

「洪水のように敵がおしよせる時、主の御霊は敵に向かつて旗を高く掲げられる。」

(イザヤ書59章19節英訳)

サタンが、主の民に向かい、ありとあらゆる重火器を使って攻撃をしかけてくる、絶望的な危機の時があります。空は暗く、地は震え、一条の希望の光もないように思えます。しかし、神は、万策尽きた、という瞬間に援軍を送る、と神の民に約束しておられます。主の霊は、間をおかずに旗を高く掲げ、戦いを挑まれるのです。

エジプトの暴君によつて奴隷にされたイスラエルの民の前途は暗いものでした。彼らは、監督者の振るう鞭むちに身をすくめていました。しかし、神は、彼らの呻うなきに無関心でいたわけではありません。神は、モーセを立ててパロと対決し、ついには、民を自由へと導かれたのです。

士師の時代、外国の侵入者たちは、イスラエルの諸部族を隷属させました。しかし、暗黒が極まったとき、主は、軍事的解放者を起こして敵を蹴散らし、平穏な時代の幕開けをもたらしてくださいました。

セナケリブがアッシリヤの軍隊を率いてエルサレムを包囲したとき、(南王国)ユダが(国を追い出されて)捕囚となることは、避けられないように思えました。人間的に見れば、侵入間近の巨大な軍隊の侵攻を阻止できるわけがありません。ところが、その夜、主の使いがアッシリヤの陣営を行き巡り、十八万五千人を打ち倒したのでした。

ペルシャでエステルが女王であった頃のことです。敵は、洪水のように押し寄せ、王国内のユダヤ人はことごとく処刑されねばならないという、変更できない勅令が発布されました。メ

ディア、ペルシャのこの勅令によつて、神には、もはや打つ手がなくなってしまうのでしょうか。いいえ。その運命の日が訪れた場合、ユダヤ人に自己防衛を認めるもう一つの勅令が発布されるように、神が状況を整えてくださったおかげで、ユダヤ人が圧倒的な勝利をしたことは言うまでもありません。

フィレンツェにはびこる貧困と抑圧、そして、不正を目撃したサヴォナローラは、御霊の手によつて、改革の旗手となりました。

マルチン・ルターが、免罪符の販売やカトリック教会の他の罪悪に怒りの声を挙げたときは、暗黒の時代に光が放たれた瞬間でもありました。

女王メアリーは、イングランドとスコットランドの正統的キリスト信仰に大混乱を起こしました。しかし、神は、この切迫した必要のときに、ジョン・ノックスという人物を起こされました。地面に身を投げて神の前にひれ伏したノックスは、夜を徹して神に嘆願し、「神の聖徒の血に報いたまえ、我にスコットランドを与えたまえ、さもなければ死を与えたまえ」と祈りました。その結果、主は、ノックスにスコットランドを与え、女王は廃位されたのでした。

あなたは、今、生涯で最も重大な危機に直面しているかもしれません。決して恐れはいけません。主の御霊は、時になつた援軍を送り込まれます。そして、あなたをひろやかな場所に連れ出してくださいます。ひたすら主を信頼していればよいのです。

「エフライムが語ると、人々はおののいた。彼はイスラエルの中であがめられた。しかし、彼はバアルを礼拝する、という罪を犯し、死んだ。」

(ホセア書13章1節ZK訳)

義人のことばには、圧倒するような迫力と権威があります。義人が語れば、他の人の生き方に影響を与えないではおきません。そのことばには、重みがあります。人々は、尊敬し、従うべき人として彼を見上げます。しかし、そのような人物が罪に陥るならば、他の人に対して持っていた好ましい影響のすべてを失うことになりま。彼が話すときに醸し出していた権威は霧散し、人々はもはや助言を求めに来ることはありません。それでもあえて助言をしようとすれば、斜めに視線を向け、「医者よ、自分を治せ」(※ルカ4・23参照)、または、「まず自分の目から梁を除け。そうすれば私の目の中のちりを取り除けることができるだろう」(※マタイ7・3・5参照)と言われるのが落ちです。もはや、口を閉ざしているほかありません。

このみことばは、裏表のない証しを、最後まで保ち続けることがどれほど重要であるかを強調しています。良いスタートを切ることは大切ですが、それだけでは不十分です。最後のコーナーを過ぎてから警戒を緩めてしまえば、初めのころの栄光も、恥辱のもややかすんで見えなくなってしまうことでしょう。

「エフライムが語ると、人々はおののいた」。ウィリアムズは、次のような注を施しています。「ヨシユアの時代のようにエフライム族が神と共に歩んでいた間は、そのことばに権威があり、人々はおののいた。威厳と力があつたのである。しかし、エフライム族は、偶像礼拝に傾き、靈的に死んでしまった。：クリスチャンが気高さと威厳を保つのは、その心がるごとキリス

トに支配され、偶像崇拜から離れているときだけである」と。

この点では、ギデオンも似ているところがあります。主は、この勇敢な強者と共にいてくださいました。わずか三百人の手勢で、十三万五千人を超えるミデヤン軍を打ち破ったのです。イスラエルの人々が、ギデオンを王にしようすると、賢明にもそれを断りました。「主こそが正当なる王である」とわかつていたからです。しかし、輝かしい勝利を手中にし、大きな誘惑を見事に退けたギデオンも、さほど大したことではないと思われる問題で畏にはまってしまうました。兵士たちに、「イシュマエル人から分捕り物として得た金の耳輪を持って来てくれ」と頼んだのです。これらの耳輪で、彼は一つのエポデを作ったのですが、それは結局、イスラエル人にとつて偶像になり、ギデオンとその一族にとつて落とし穴となってしまうました。

もちろん、失敗したときには、神のもとに行つて告白し、罪の赦しをいただくことができることを私たちは知っています。いなごが食い荒らした年月を、主が回復してくださること(※ヨエル2・25参照)、すなわち、浪費してしまった時間の埋め合わせも神には可能であるということも知っています。しかし、そこから回復するよりも、転倒しないように初めから気をつけていた方が優っていることを否定する人は、一人もいないことでしょう。粉々になった破片を接着剤でくっつけて、元に戻すより、自分の証しをめちやめちやにしない方が優っている、と誰でもわかっているはず。アンドリュウ・ボナー(※スコットランドのリバイバルの中心にいた一人。祈りの人として有名)の父親は、よく息子にこう語ったといひます。「アンドリュウ、お互いに最後まで持ちこたえらるよう祈ろう」と。私たちも、自分の走るべき道のりを、喜びを持って全うできるように、祈ろうではありませんか。

「その中で一番すぐれているのは愛です。」

(「コリント人への手紙第一13章13節」)

愛は、憎しみと争いとわがままの世で勝利をもたらず力です。

愛には、他のどんな徳もかきません。その意味において、愛は、もろもろの美德の女王です。愛は、虐待に親切をもつて報います。自分に死刑を執行する人に、憐れみがあるように祈ります。誰もがみな自分の権利を主張するときにも、利己的に振舞うことがありません。与えるものがなくなるまで、与え続けます。

あるインド人が、乗っている象の速力を上げよう、と突き棒で小突き続けていました。ところが、鋼鉄製の突き棒が突然、手から滑り落ち、ガチャンと大きい音を出して、舗道に転がり落ちました。すると、象はクルリと向きを変えて、その長い鼻で突き棒を拾い上げ、自分の主人にそれを戻したのです。愛とは、そのようなものです。

イソップの寓話の一つに、北風と太陽のどちらが旅人の外套がとを脱がすことができるか競争した、という話があります。北風は猛烈に吹きましたが、吹けば吹くほど、外套が飛ばされぬように旅人はしっかりとからだに巻きつけました。次に、太陽が陽光を降り注ぐと、旅人は外套を脱ぎました。太陽の暖かさが、旅人を変えたのです。愛とは、そのようなものです。

ウォルター・スコット卿(※スコットランドの国民的詩人)は、あるとき、野良犬に向かって石を投げました。力を込めて投げた石は、ものの見事に命中し、犬の足は折れてしまいました。「かわいそうなことをした」と後悔し、その場に立ち尽くしている、その犬はびっこをひきながら、スコット卿のところに来て、石を投げたその手をぺろぺろと舐めたので

す。愛とは、そのようなものです。

スタントンは、リンカーン(アメリカ第十六代大統領)を「卑しい、狡猾な道化師」、また、「真正正銘のゴリラ」と呼んで、罵詈雑言ぼりぞうごんを浴びせました。「ゴリラを求めてアフリカに行くのはばか者のすることだ。スプリングフィールド(リンカーンの故郷)にゴリラがいるというのに」と言ったのです。リンカーンは、「もう一方の頬を差し出し」ました(※マタイ5・39参照)。つまり、後に軍事大臣としてスタントンを指名し、スタントンがその職務に最も適格であると主張したのです。リンカーンが銃弾に倒れたとき、スタントンは遺体の傍らに立ち、人目もはばからずに泣き、こう言いました。「ここに横たわっているのは、歴史上、最も偉大な統治者だ」と。リンカーンは、もう一方の頬を差し向けて、勝利したのです。愛とは、そのようなものです。

E・スタンレー・ジョーンズ(※インドで宣教した神学者)は、こう書いています。「もう一方の頬を差し向けるとき、あなたは敵の武装を解除しているのである。頬を殴つても、もう一方の頬を向けるあなたの気高さと大胆さが、敵の心を苛む。敵意は、泡のように消える。あなたの敵は、姿を消す。敵意を取り除いたことによつて、あなたは敵もいなくなつてしまった。逆襲する力がありながら、逆襲しなかつた方の前に、この世はひれ伏すしかない。これこそが力である。しかも、真正正銘の力である」と。

ときには、きついことばを語り、売りことばに買いことばを発し、自分の権利のために立ち上る方が効果的だと思えるかもしれません。確かに、それなりの効力はあるでしょう。しかし、力のバランスは、愛に有利に働くのです。愛は、敵意を深めるのではなく、敵を味方に変えてしまうからです。

「悪い行ないに対する宣告がすぐ下されないので、人の子らの心は悪を行なう思いで満ちている。」

(伝道者の書8章11節)

これを書いている今も、国民の憤りは、わが国(アメリカ合衆国)で増加の一途をたどる犯罪率に対し、大きなうねりとなっています。人々は、法と秩序を求めて叫んでいます。わが国の法律と法廷は、犯罪者に有利な半面、犯罪の犠牲者の救済はあつてもわずか、もしくは、皆無のように思えます。訴訟は果てしなく長引き、犯罪専門の弁護士も開いた口がふさがらないほどに、法律の抜け穴があり、これをくぐって勝訴することさえ、少なくありません。

社会全体の秩序が乱れていく要因として、進歩的な社会学者、精神科医、そして、その他の「専門家」による尊大な発言を見逃すことはできません。「死刑は、不合理で非人間的である」と彼らは主張します。「刑罰の恐怖は、犯罪者にとつて抑止力とはならない」と証言し、「解決の鍵は犯罪者を処罰することではなく、その更生を図ることにあるのではないか」と提案するのです。

しかし、彼らは間違っています。「うまく罰を逃れることができる」という確信があればあるほど、人はますます犯罪に手を染めるのです。または、処罰が軽いと思えば、捕まる危険を冒すほどに大胆になるものです。また、裁判が無限に継続するだろうと思えば、勇気を持つことでしょう。つまり、専門家のことばとは裏腹に、死刑判決は、確かに抑止力として作用するのです。

増加する一方の犯罪率を分析したある有名なニュース雑誌は、次のように書いています。「理由の一つはアメリカの刑事裁

判が、騒々しい割りには、強力な抑止力に欠けている点にある。刑罰の恐れが信憑性しんぴょうせいを持つためには、それが確実、かつ、速やかでなければならぬという点で、専門家の意見はすべて一致している。ところが、事案が多すぎるために、アメリカの制度は、確実でもなければ、迅速でもないのである」。

ある犯罪学の専門家は、最近次のように言明しています。「美德を愛するがゆえに美德家である人が一人いるとすると、刑罰が怖いので良い行いをする人の数は一万人にのぼる」と。そして、シカゴ大学のアイザック・エーリックは、こう言っています。「統計学上、一人の殺人犯が死刑執行された、というニュースは、十七件の殺人事件を抑止する効果がある」と。矯正や更生に答えはありません。それらの方法で人間が変革を遂げた試しはないのです。神の御霊によつて新生したときに初めて、罪人が聖徒に変わるのだということ、私たちは知っています。しかし、残念なことに、それが自分にも、囚人にもあてはまると同意するのは、比較的、わずかの専門家に限られるでしょう。それが現実であるとすれば、専門家にできる最善のことは、今日の聖句を真剣に考えることです。「悪い行ないに対する判決がすぐに下されないので、人の子らの心は悪を行なう思いで満ちている」。刑罰が、速やかに、また、公正に執行されない限り、犯罪の統計が下降線をたどることはないでしょう。しかし、その答えは、聖書の中に間違いなくあるのです——人々がそれを受け入れさえすれば。

「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」

(コリント人への手紙第一15章57節)

いかなる人の頭脳をもってしても、主イエスがカルバリの十字架で勝ち取った勝利の大きさを把握することはできないでしょう。主は、世に勝ちました(ヨハ16・33)。主は、この世の主権者であるサタンを破滅に定めました(ヨハネ16・11)。主は、すべての支配と権威に勝利しました(コロサイ2・15)。主が死を征服されたので、死は勝利にのみこまれてしまいました(1コリント15・54、55、57)。

しかも、主の勝利は私たちのものでもあります。ゴリヤテに対するダビデの勝利が、全イスラエルに救いをもたらしたのと全く同様に、キリストの栄光の勝利は、主に属するすべての人の手に渡るのです。それゆえに、私たちはホレイシャス・ボナー(※イギリスの讚美歌作者)と共に歌うことができます。

勝利は私たちのものとなった!

私たちのために、強き御方が雄々しくやって来られた

私たちのために戦いに身を投じ、勝ちを収められた

勝利は私たちのものになったのだ

私たちが愛してくださった方によって、私たちが圧倒的に勝利できるのは、「死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはでき」ないからです(ローマ8・38-39)。

列車が入線してきたときに、駅にいた少年の話をガイ・キング(※聖書註解者)が書いています。その列車には、大切な試合を終えて帰ってきたばかりの、地元サッカーチームの選手が乗っていました。少年は、最初に列車を降りて来た人に駆け寄り、息を切って尋ねました。「勝ったのは、どっち?」それから、彼は駅のプラットフォームの上を走りながら、有頂天になって叫びました。「勝った! 勝った!」それを眺めていたキング氏は、こう思いました。「勝利を得るために、彼はどれだけのことをしたのだろう。サッカー競技場での苦しい戦いとどのような関係があっただろう」と。答えはもちろん、「何もない」というほかありません。しかし、彼は、同じ町に住んでいたので、町のチームと自分は一体であると考え、選手の勝利を自分の勝利と受け取ったのです。

私は以前、国籍を変えたことによって、敗北の立場から勝利の立場に変わったフランス人の話を聞いたことがあります。これは、英国で「鉄の公爵」と呼ばれたウエリントンが、ワーテルローでナポレオンに対して輝かしい勝利を収めたときのことです。最初、このフランス人は、敗北した側にいたのですが、イギリス市民となった日には、ウエリントンの勝利を自分の勝利と主張できるようになったのです。

生まれながらにして私たちがはみな、サタンの配下です。そのために、私たちは敗北する側にいます。ところが、キリストを主、また、救い主として選んだ瞬間に、私たちは、敗北から勝利に移るのです。

「それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもつと正確に彼に説明した。」

(使徒の働き18章26節)

救いの道を説明するとき、相手を混乱させる可能性のある話題は極力避け、メッセージを明白でわかりやすいものにすることは極めて大切です。普通はすでに、「不信者の思いをくرامませ」ている(Ⅱコリント4・4)サタンのゆえに、十分混乱しているからです。

回心していない人が実際に耳を閉ざしてしまいかねないことを、私たちがうっかり口にしてしまう場合があります。初めて会ったばかりの若者に証しを始めたとき、話が始まる前に、話が始まる前に、彼は話をさえぎり、こう言います。「私は宗教(※religionという英語には、もともと超越的、人格的な神を信じる、というニュアンスがある)を信じません。試してみたいことがあります。私たちが、まったく何の役にも立ちませんでしたから」と。これに対して、私たちはこう言いがちではないでしょうか。「私も宗教は信じていません。また、宗教を宣べ伝えるつもりもありません」と。

いったん、ここで立ち止まってみましょう。このことばが、相手にとつてどれほどの混乱を与えることか、想像できるでしょうか。明らかに宗教的な事柄について語りながら、私たちは宗教を信じない、と言っているのです。相手は、わけがわからなくなつても無理はありません。

もちろん、意図するところは、私にも分かります。彼に特定の教会や宗派に加わつて欲しいのではなく、主イエスとの関係に入つて欲しいと願っているのです。教義を押しつけているのではなく、キリストという御方を提示しているのです。更正で

はなく、新生を、人の外側ではなく、人の内側を新しくすることを主張しているのです。

しかし、相手は宗教ということばで、神に対する礼拝、奉仕の一切を考えているはずで、宗教とは、大多数の人々にとつて、ある組織立った教え、および、神を信じる人間が営む特徴的な生活様式のことを言います。ですから、「宗教を信じない」と言えば、私たちが野蛮人か、もしくは、破壊的無神論者に違いないという考えが、さつと相手の頭の中を駆け抜けるのです。そして、私たちの真意を伝える間もなま、彼は、私たちに無宗教な人間というレッテルを貼つてしまうのです。

実のところ、私たちが宗教を信じない、と口にするのは、真実とは言えません。キリスト信仰の基本的教理を信じているのは、間違いないのですから。「キリストを信じる」と公言する者は、それを生き方によつて示すべきである、ということも、確かに信じていますし、清く汚れない宗教は、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし、世から汚れない状態を保つことであることも信じているわけです(ヤコブ1・27)。

むしろ、私たちが信じていないのは、宗教に救いがあるという考えです。生けるキリスト以外に私たちを救える方はいません。今日、流布している、骨抜きになつたキリスト教は信じません。自分の行いや長所によつて、天国に到達できるという希望を持たせる教えは、いかなるものであれ信じません。しかし、「私も宗教は信じていません」というような突拍子もない発言で人を驚かせることなく、以上のようなことを説明できるようにありたいものです。人のたましいに関わる重要な場面で、ことばをもてあそぶことは慎まなければなりません。

「あなたがたは、私のこのことばを心とたましいに刻みつけ、それをしるしとして手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。」

(申命記11章18節)

今日の聖句は、それに続く三節を抜かしては全体が分からないので引用してみることしましょう。「それをあなたがたの子どもたちに教えなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、それを唱えるように。これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。それは、主があなたがたの先祖たちに、与えると誓われた地で、あなたがたの日数と、あなたがたの子孫の日数が、天が地をおおう日数のように長くなるためである。」(申命記11・19・21)。

ここに、神のみことばが御民の生活の中で占めるべき位置が、実際に説明されています。これらの条件が満たされる時、クリスチャンは地上にありながら天国の日々を経験するでしょう。

第一に、みことばを暗記することです。言い方を変えれば、今日の引用聖句のように、心とたましいに刻みつけるのです。聖書の膨大な章節を暗記している人は、自分の生活を豊かにするだけでなく、他の人を祝福する可能性を増し加えていることになります。

次に、みことばを手と額に結びつけることです。これは、一部の人々が考えるような聖句箱(※羊皮紙に旧約聖書のみことばを記したものを納めた二つの革の小箱。ユダヤ人が祈りのとき、一つを左腕に、他の一つは額に結びつけて律法を守ること忘れられないようにした)のことではなく、むしろ、私たちの行動

(「手」と欲望(「目」)がキリストの主権のもとに置かれなければならぬことを意味しています)。

次に、神のみことばを家庭の話題の中心とし、それに加えて、どの家庭も「家族の祭壇」を持つことです。つまり、聖書が日毎に読まれ、家族が一緒に祈るときを持つのです。そのような家庭に、聖書が与える聖化の影響は計り知れません。

そのみことばが、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、私たちの思いを占有するものでなければなりません。言い換えれば、聖書が生活の欠くことのできない一部となるので、私たちがどこにいようと、また、何をしようかと、私たちが語る内容が聖書によって形成されるものでなければならぬということです。私たちは、聖書のことばで会話をしたいものです。

戸口の横や門にみことばを書くべきでしょうか。それほど素晴らしいアイデアはありません。玄関の入口にヨシユア記二四章一五節(「私と私の家とは、主に仕える」)のみことばを取りつけているクリスチャン家庭は数多くあり、家の中の壁にみことばを掲げている家庭は、さらに多いのです。

私たちの生活の中で聖書が占めるべき正當な位置に聖書を置くこと、無駄話で何時間も浪費しないで済むだけでなく、本当に重要な問題、永遠を左右する事柄に向き合うことが可能になり、家庭にクリスチャンらしい雰囲気絶えることはありません。

「あなたの神である主を試みてはならない。」

(マタイの福音書4章7節)

主を試みるとは、どんな意味でしょうか。私たちにも身に覚えのあることなのでしょうか。

イスラエルの子らが、荒野で水が欠乏したことに不満を言ったのは、主を試みる行為でした(出エジプト17・7)。「主は私たちの間にいるかいないのか」と言って、イスラエル人たちは、神のご臨在を疑っただけではなく、神が摂理をもつて養ってくださることも疑ったのです。

サタンが、主に対して、「神殿の高みから飛び降りてみよ」と言ったのも、主を試みる行為でした(ルカ4・9・12)。もし、そのことばに従っていたら、イエスは、父なる神を試みることになっていたはずです。御父のみこころから外れて、人目を引くための行為をしたにすぎないからです。

「カイザルに税金を払うのが律法にかなっているかどうか」と、パリサイ人が、主に質問したのも、主を試みる行為でした(マタイ22・15・18)。答えのいかんにかかわらず、主は、ローマ人もしくは、ローマ人に激しい敵意をもつユダヤ人のいずれかを敵に回すことになる、とパリサイ人は思っていたのです。

サツピラは、土地の売上金から得た収益の全額を捧げたかのように見せかけて、主の御霊を試みました(使徒5・9)。

「ユダヤ人である自分たち自身も負うことのできなかつた律法というくびきを、異邦人クリスチャンに負わせることは、神を試みることである」と、ペテロは、エルサレムで開かれた会議で語りました(使徒15・10)。

神を試みるとは、「神のさばきが来る前に、どこまでうまく逃げおおせるかを試すこと。神の慈愛を逆手に取り、神がみこと

ば通りに行動されるかどうかを見たり、神のさばきをその限界線まで押しやったりすること」(申命記6・16、マタイ4・7参照)と、トウーサン(※Stanley D. Toussaint ダラス神学校教授)は、言っています。私たちがつぶやいたり、不満を言ったりするというのは、とりもなおさず神を試みることなのです。私たちが、神のご臨在、御力、御慈愛を疑うも同然であるからです。それは、「神が私たちの置かれている状況を知らず、私たちのことなどはどうでもよく、私たちを助け出すことができない」と言っているのと、何ら変わらないのです。

自らを無用に、危険な目にさらし、神の救出を期待するというのも、神を試みることです。誤った考えをもつたクリスチャンが毒蛇を取り、その結果、死にいたつたという話を聞くことがよくあります。彼らの言い分は、マルコ一六章一八節で、神は「蛇をもつかみ、たとい毒を飲んででも決して害を受けない」と、安全が約束されているではないかというものです。しかし、それは、神のみこころをなす必要があるときのみに、私たちに許される奇跡のことなのです。

神に嘘をつくというのも、神を試みることですが、実際以上の立派な献身、犠牲、そして、服従を公言するときに、実は、神を試みています。ちょうどパリサイ人が、偽善によつてキリストを試みたのと同様に、私たちも自らの偽善によつて、主を試みているのです。

最後の点として、神のみこころの領域から身を引き、自我に従つて振舞うときにも、私たちは主を試みているのです。

神に造られたものでありながらあえて、または、好んで、造り主を試みたり、罪人でありながら、救い主をこのように侮辱することが万が一にもあるとしたら、絶句するほかありません。

「そのとき、主を恐れる者たちが、互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で、記憶の書がしるされた。」

(マラキ書3章16節)

あまりにも忙しいと、たましいが干上がってしまうことがないとは言えません。活動が多すぎると、仕事に没頭し、神と過ごす時間がほとんどなくなり、じつくりと静まって、一人の主と交わるための時間をたっぷり取らない説教者は、やがて霊的な力に乏しい、二番煎じのメッセージを語るようになります。私たちはみな、次のように祈らなければなりません。「主よ、私を多忙な生活の不毛状態からお救いください」と。一人になることを恐れるクリスチャンは、少なくありません。どうしても他の人と一緒にいて、話をし、作業をし、旅行しないではいられないのです。静かに瞑想するための時間は皆無です。現代の日常生活から来るさまざまなプレッシャーのために、私たちはいきおい、必要以上に活動的になり、必要以上の達成を目指します。活動にいったん弾みができると、ペースを落とすのは困難です。生活は絶え間ないスピードアップとダッシュの連続となります。その結果、霊的な根を深く下ろすことができませぬ。二十年前と同じ、聞き飽きた信心深い話を、相も変わらず、とうとうと語るのです。二十年経っても何の進歩もない、という嘆かわしい有様です。

しかし、それとは対照的に、この果てしない競争から身を引き、人からの招待を断り、主と一人で時間を過ごすことができるように、さして重要ではない活動には、見向きもしない人もいます。祈り豊かな静思の時間を生み出すために、断固とした決意をした人々です。この世の騒音を締め出し、主イエスと一

人過ごす密やかな場所を確保したわけです。

このような人は、(この時点ですでに)主との関係において有利な立場にいます。「主はご自身を恐れる者に秘密を明かし、ご自身の契約を彼らにお知らせになる」(詩篇25・14英訳)。騒がしい生活では決して知りえない秘密を、そのような人々に、神は啓示されます。導きについて、霊的領域で生起する事柄について、将来に関して、神からの知見が届けられるのです。聖所に住まうものは、その周辺に住むものがあずかり知ることのない神の幻を見る場合が多々あります。「黙示録」すなわち、イエス・キリストの啓示を与えられたのは、救い主の胸に寄りかかっていた人であったことを忘れてはなりません。

私はよく、セシル(※ Cecil Murphey)が書いた、次のことばを考えます。「私はどこでも、あらゆる人にこう言っている。あなたは、神との交わりを保持しなければなりません。さもなければ、あなたのたましいは死ぬ、と。あなたは、恵みによって成長しなければならぬ。さもなければ、恵みを失う、と。神と歩まなければならぬ。さもないと、サタンがあなたと共に歩むようになる、と。そして、この目的のために適切な時間をあてがい、ふさわしい手段を熱心に用いなければ、それを行なうことは不可能である。クリスチャンの中には、静思や一人静まることをほとんどしない人がいるという状態がなぜあるのか、私にはわからない。時代の風潮というものが同化作用を及ぼしているであろう。それが、私の思いを渦の中に巻き込み、肉性の残滓と汚濁に私を沈めるのである。∴私は一定の時間ごとに、他の人々から離れ、自らの心にこう問いかけなければならぬ。『おまえは何をしているのか』『おまえは今どこにいるのか』と」。

「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」

(イザヤ書43章7節)

私たちが生きていく中で出会う大きな悲劇の一つは、人生を浪費している人々を見ることです。そもそも人は、神のかたち、また、似姿に造られました。人は、最後には、王座に即くはずの者であり、酒場の丸椅子がゴールではありません。人は、神を代表するものとして創造されたのであり、罪の奴隷として創造されたではありません。「人間の主要な目的とは何か」という問いに対し、小教理問答は、「人間の主要な目的は、神に栄光を帰し、神を永久に楽しむこと」であると答え、それを再認識させてくれます。それを見落とせば、あらゆるものを失うことになるのです。

J・H・ジョウエット(※イギリスの著名な教会の牧師)は、多くの人々が歳月を過ごしていく様子について「人間の生き方というよりアメーバの生き方だ」と気づき、涙を流しました。つまらないことに時間を浪費し続け、言わば「一時的な事業に関わる小役人」に成り下がってしまった人間を見て、悲しんだのです。

F・W・H・マイヤーズ(※イギリスの著名な詩人)は、人類を見つめ、このように書いています。

その人々はたましいをもつ者のように見えるだけ
本来は征服者なのに縛られ

王であるはずなのに奴隷の立場に甘んじている

自分にとっての唯一の希望を耳にしても

空しい表情で驚いてみせる

うわべを見て満足している様子は悲しい限り

若かった頃、ウォッチマン・ニー(※中国の傑出したクリスチャン指導者の一人。多くの優れた信仰書を著した)は、人間の創造的才能が、貪欲な雇い主の利益のために浪費されるありさまを見て激しく心を揺さぶられました。「旧市街の漆工二房が立ち並ぶ通りにある一つの店の出来事である。無名の職人が四つ折りの衝立の三枚を完成しようとして、すでに六年を費やしていた。漆塗りの黒い表面に、白い花の浮き彫りを天然木に彫るのである。この仕事の報酬は、店の主人いわく、『雨が降ろうが、晴れようが、休日であろうが、革命が起ころうが』、一日八十セントと決まっていた。そこに、米、野菜、そして、寝台としての板一枚が追加されるだけであった。この仕事の技術をやつと習得し、衝立のうちの二枚ができると思われた頃、目と神経がだめになり、彼は、乞食たちと共に外に放り出されたのである」。

今日の人生の悲劇は、自分に対する崇高な召命が、人間に分からなくなっているところにあります。その召命に及ばない低次元のものを後生大事に抱きしめて、人は生きていくのです。空を翔けるのではなく、地面を這いつくばっています。ある人が言ったように、人は肥やしをかき集めて山とするのに夢中で、自分に王冠をかぶせようとしている御使いに気づいていないのです。人は時間を、真に生きるためではなく、生計を立てるために費やしているのです。

今日、天然資源の浪費に関心を持つ人は少なくありませんが、人間というもつと重要な資源の浪費については全く思いが及びません。鳥、動物、魚類の絶滅に瀕した種を救うための活動をする人は少なくありませんが、他の人々が人生を浪費していても、それを眺めているだけで心が痛むことはありません。一人のいのちは、世界全体よりも価値があります。そのいのちを空費していくというのは、ことばに表せない悲劇です。一人の女性が、こう言っていたのを思い出します。「私は七十になつたわ。でも自分の人生を使って成し遂げたことなんか、一つもありはしない」と。これ以上の悲劇があるでしょうか。

「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取る。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。」

(詩篇126篇5・6節)

詩篇一二六篇は、イスラエルの子らがバビロンの捕囚後、祖国の地へ帰還を果たしたことを回想した詩篇です。それは、笑いと歌で溢れる、夢の世界にいるかのような経験でした。異教の隣人たちさえ、主は、その民のために偉大なことをなさたと認めたのでした。

さて、彼らが祖国に帰ったからには、作物を植える作業に取りかからなければなりません。しかし、これが問題でした。持ち帰った穀物の量は、限られた分量しかなかったからです。今、食物として使うこともできません。何しろ、彼らが収穫できる穀物が、畑にあるわけではなかったのですから。しかし、それを種として使い、やがて来る豊作の日を夢見ながら、大地に蒔くという選択肢もありました。しかし、その大半を種として使うと決断した場合、収穫のときが来るまでは、儉約し、犠牲を払って、何とか生きていかなければなりません。彼らは、後者を選びました。

農夫が畑に出て行き、種の中に手を突っ込み、耕した土地に種を撒き散らすときには、自分はおろか家族も、収穫のときまで窮乏に耐えなければならぬことを思っ涙を流したことでしよう。

しかし、やがて畑一面が金色におおわれ、農夫が実った麦の束を納屋に持ち帰ったときには、涙が喜びに変わっていたことでしょう。家族全員のすべての苦勞は、十分に報われたのです。

これに関連して、私たちが託されている物質的なものの管理を考えてみましょう。主は、私たちの一人ひとりに、一定の財産を委ねてくださいました。それを好き勝手に使い、心の望むものを何でも買うということもできます。あるいは、犠牲を払って生活をし、浮かせた分を主の働きや、海外宣教や文書伝道、福音のラジオ放送、あるいは、地域集会(教会)、その他、福音を広めるさまざまな活動に投資することもできます。それは、質素な暮らしに甘んじ、必要最低限以上の余剰分はすべて、主の働きに注ぐことを意味します。福音を知らないで、たましいが滅びることのないよう、限られた予算で生活をするとということなのです。

しかし、収穫のときが到来し、払った犠牲の結果として、天国でさまざまな人々に出会うときには、もはや、犠牲のどれを取っても、あえて口にするほどの値打ちもなくなっています。地獄へ行くはずであった一人の人が救われて、永遠まで《神の小羊》を礼拝する者となるとするなら、それは、今、私たちが払うどんな犠牲にも優ることなのです。

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、…」

(詩篇103篇2、3節)

神の複合名の一つに、「わたしは主、あなたをいやす者である」という意味の《アドナイ・ラファ》があります(出エジプト15・26)。私たちを癒してくださるのは神です。神はあらゆる種類の病気から私たちを癒してください、ついには、ありとあらゆる病気から恒久的に救ってください。

神は、ときどき私たちのからだの中に組み込んでおかれた途方もない回復力を通して、私たちを癒してください。医師がよく、「朝までには大体良くなっているでしょう」と言う理由はここにあります。神が、医薬品や手術を用いて癒してくださいることもあります。著名なフランス人医師デュボアは、こう言っています。「外科医は傷の手当をするが、癒してくださいるのは神である」と。また、時として神は、奇跡的に癒してくださいる場合があります。福音書や個人の体験から、それを知ることができます。

しかし、癒すことが常に神のみこころであるとは限りません。仮にそうだとすれば、年を取ることもなく、死なない人がいてもおかしくありません。しかし、遅かれ早かれ、誰もが死ぬのです——主がいらっしゃるその時まで。神は、パウロの肉体上の苦痛を取り除くことはされず、それに耐える恵みを与えられました(IIコリント12・7、10)。

一般的な意味で言えば、病気はすべて罪の結果です。言い換えれば、罪がまつたくなかったとすれば、現在、病気は存在しなかつたはず。病気が、個人の生活に潜む罪の直接的な結

果である場合があります。例えば、アルコール依存症によって

肝臓疾患が引き起こされ、喫煙ががんの原因となり、性的放縱が性病の引き金となり、心配が潰瘍の原因となる、というような場合があります。しかし、病気と言う病気がみな、個人的な罪の直接の結果であるとは限りません。サタンは、ヨブを重病にかからせましたが(ヨブ2・7)、ヨブは地上で最も正しい人物でした(ヨブ1・8、2・3)。ある女性の脊柱に湾曲を起こして苦しめたのは、サタンのしわざでした(ルカ13・11・17)。そして、サタンは、パウロの肉体にはとげをもたらしただけです(IIコリント12・7)。ヨハネ九章二、三節にあるように、盲目に生まれついたのは、その男自身の罪ではありませんでした。エパフロデトは、重病に陥りましたが、それは、罪が原因であつたのではなく、疲労も顧みずひたすら主に仕えたためでした(ピリピ2・30)。ガイオは靈的には健康でしたが、肉体は虚弱でした(IIIヨハネ2)。

最後に触れたいのは、たとえ癒されなかつたとしても、それは、必ずしも信仰が欠如していたためとは限らない、ということです。神が癒してくださいる、と具体的に約束をくださった場合のみ、信仰による癒しを求めることができるのです。そうでない場合は、生ける、愛の主に自分をゆだね、主のみこころがなされるように祈ればよいのです。

「たきぎがなければ火が消えるように、陰口をたたく者がなければ争いはやむ。」

(箴言26章20節)

二人が口論をしています。一人は怒りを爆発させ、もう一人は鋭く言い返しています。一人は猛然と突っかかり、もう一人はそれに負けない激しきで反撃します。どちらの側も黙れば、それを弱さ、あるいは、敗北と見られるため、引き下がろうとしません。そのため、火はますます燃えさかり、憎しみの波は押し返しては返します。

今度は、情景を変えてみましょう。一人は相手に罵詈雑言を浴びせ続けます。ところが、反撃は返ってきません。彼は相手を怒らせ、苛立たせ、中傷し、辱めようとしています。ところが、相手は喧嘩になることを拒否します。ついに、敵対していた者のしりのことを吐いて、すぐそこその場を立ち去ります。火は消えてしまいました。それは、防戦する側が火に油を注ぐのを拒否したからです。

H・A・アイアンサイド博士は、集会の後、博士の話に難癖をつける人によく出会いました。大抵は、何か基本的な教理についての議論ではなく、重箱の隅をつつくようなものでした。博士は、忍耐強く耳を傾け、議論好きの相手が息をついたとき、よくこう言ったのです。「ところで兄弟、天国に着いたときには、二人のどちらかが間違っていたとわかることでしょうか。おそらくそれは、私の方だと思います」と。その答えに相手も納得し、おかげで博士は他の人との話も支障なくできたのでした。

私たちは、どのように批判を受け止めたらよいのでしょうか。自分を弁護し、報復し、相手に対して長年抱いてきた批判的な

思いをぶちまけるのがよいのでしょうか。それとも、穏やかにこう言うのがよいのでしょうか。「あなたが、私をまだあまり知らないのではありません。兄弟。もし、もつとよく知っていたら、批判したいことがずつと多かつたことでしょうか」と。このような答えのおかげで、火が消し止められたことは決して少なくありません。

私たちのほとんどは、過去のどこかで、地表から吹き飛ばされてしまいそうになる激烈な内容の手紙を受け取ったことがあるのではないのでしょうか。そのような場合に、私たちが取る自然の反応は、ペン先を酸に浸し、相手がひりひりするような返答を出すことです。これは、火に油を注ぐことになり、ほどなく毒薬に浸したペンで書いたような手紙がやり取りされることとなります。そんなことをするくらいなら、簡単な答えをただ一つ、このように書く方がどれほど優れていることでしょうか。

「親愛なる兄弟へ。もし、どうしても誰かと争いたいなら、悪魔と争っていただけませんか」と。

人生は短いので、自己弁護や口論、あるいは、怒りのことばに費やす時間はありません。こんなことをしていると、一番大事なことから注意がそらされ、私たちの霊的状态に異変が起き、証しが損なわれることとなります。他の人は松明を持って、故意に火をつけようとするかもしれません。しかし、その火に注ぐ油をどうにかできるのは、私たちの方です。もし、火に油を注ぐことを拒否するなら、火は自然に消えていくのです。

「ああ。悪を善、善を悪と言っている者たち。彼らはやみを光、光をやみとし、苦みを甘み、甘みを苦みとしている。」

(イザヤ書5章20節)

神は、道徳の基準を逆さまにする人々は災いである、と宣告されます。彼らは、罪が決して恥ずべきものではないと言い、純潔は、決して望ましいものではないと示唆します。ヘルベルト・ヴァンダー・ルフト(※「デイリーブレッド」の執筆者)は、道徳的な区別を人間がどのように改ざんするものか、その現代の実例を三つ挙げています。「第一に、私が読んだのは、ポルノの悪影響を軽く扱い、『狂信者たちの清教徒的な態度』を嘆く記事であった。第二に、私がたまたま読んだある新聞の記事には、未婚で妊娠した教師が教壇に立つのを心配し、彼女を追い出そうとした親たちのことが書かれていた。筆者は、この教師を心の美しい人としてほめそやす一方、親たちを悪者扱いしていた。そして、第三に、私が見ていると、あるコンサートで数人の若者が生命を落としたことに関連して、テレビ番組のゲストが、ハード・ロック、飲酒、麻薬の使用を擁護していた。彼は、社会問題が起きるのは、そのようなコンサートを好まない人々のせいだと言っているのである。」

道徳観の逆転がなぜこれほど多くなったのか、その理由は二つあるように思えます。第一に、人々が、聖書に書かれている絶対的な基準を捨ててしまったからです。今では、道徳といっても、個人の解釈の問題であるにすぎません。第二に、人々が罪に深入りすればするほど、その罪はもつともな行動であると正当化し、自分の立場を弁護しないわけにはいかなくなるからです。

中には、罪を正当化することが難しいとわかると、自分の主張を明確にするより、相手の人格を攻撃するという方法に切り替える人もいます。ですから、上記の例で、自由論者たちは、「狂信者の清教徒的な態度」を攻撃した上に、親たちを悪者扱いし、飲酒や麻薬、そして、何人かの青年が死んだロック・コンサートに反対する人々がいる、というのは社会問題だと非難したのです。

道徳的判別を逆転させる人々だけでなく、その境目をぼやかすことで満足する人々もいます。残念なことに、その中の大多数は、宗教指導者です。堂々と聖書の側に立って、罪を罪と呼ぶのではなく、煮え切らない態度を取り、罪とはいっても、本当はそれほどたちが悪いわけではない、と示唆するのです。アルコール中毒は病気である。性的倒錯は、新たなライフスタイルである。婚外セックスは、文化が受容するなら許容される。妊娠中絶、公然わいせつ、売春は、制約してはならない個人の権利である、云々。

このように混乱した考えは、まともな道徳観が致命的に欠落していることを表しています。これまで見たようなよこしまな議論は、ついには、人間を滅びに至らせる、悪魔のまやかしいうほかはありません。

「この天地は滅びます。しかし、わたしのことは決して滅びることがありません。」

(ルカの福音書21章33節)

神のみことばは、永遠であるだけでなく、間違いなく成就します。イエスは、マタイの福音書一章一八節で、すべてが成就するまで、律法の一点一画もすたれることはない、と言われましました。一点とは、英語のコンマやアポロストロフィーのような形のヘブル文字のことです。一画とは、ヘブル語アルファベツトで、Fと区別するためにEの下にある横の棒に似ています。つまり、イエスは、神のみことばは、その細部に至るまで成就すると言っておられるのです。

紀元三三一・三三六年まで、ローマ皇帝であった「背教者」ユリアヌス帝は、聖書の誤りを証明しよう、また、キリスト信仰の信用を失くそうと決意しました。ユリアヌスが、そのために特別に選んだ聖句は、ルカの福音書二二章二四節でした。「人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となつてあらゆる国に連れていかれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます」。ユリアヌスは、ユダヤ人を奨励して、神殿の再建を始めました。歴史家ギボンの『ローマ帝国衰亡史』によると、ユダヤ人は熱心に働き、掘るのに銀のシャベルを使い、紫のベールで土を運ぶほど、贅沢なことを行ないました。しかし、ユダヤ人が仕事をしている最中に、地震が発生し、地下から火の玉が吹き出て、工事は中断し、結局、計画は放棄せざるを得ませんでした。

キリスト生誕の六百年前、エルサレムの東の門は閉じられ、「君主」が来られるまでは閉じられたままになる、とエゼキエルは預言しました(エゼキエル44・2)。聖書学者の多くは、こ

の君主とはメシヤのことであると理解しています。その後、黄金の門と呼ばれることになったこの門は、西暦一五四三年、スルタンのスレイマンによって閉鎖されてしまいました。(ドイツ)皇帝ウィルヘルムは、エルサレムを占領し、この門から入城しようとして望みましたが、その希望は粉々になりました。黄金の門は、今も閉じられたままです。

(※フランスの啓蒙思想家)ヴォルテールは、聖書が百年後には廃棄されているだろう、と豪語しました。ところが、百年経過したときには、ヴォルテールはこの世になく、その邸宅は、ジュネーブ聖書協会の本部となっていました。(※無神論者として有名な)インガソルも、同じように豪語しました。十五年後には、聖書は死体保管所にあるだろう、と言ったのです。しかし、死体保管所に置かれたのは聖書ではなく、インガソルの方でした。聖書は、すべての批評家よりも「長生き」なのです。

人間は、やがて、聖書が神の永遠のことばであり、聖書が古びるといふことはないという事実に目覚めるときがやってくる、とあなたは思うかもしれません。しかし、やはりジョン・スウィフト(※『ガリバー旅行記』の著者)が言う通り、「目を開けようとする人ほど、盲目な人はいない」のです。

「私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」

(「ピリピ」への手紙4章11節)

大切なのは、境遇ではなく、境遇にどのように対応するかである、とよく耳にします。それは、本当のことです。境遇を変えようと絶えず努力するよりは、むしろ、自分自身を変えようと考えなければなりません。

不都合な出来事に、人は何通りかの方法で対応します。まずは、禁欲的な方法です。つまり、完全に受身に徹し、歯を食いしばり、感情を示さない方法です。「避けられないことには、妥協するしかない」というのがその持説です。

ヒステリックに反応する人もいます。大声で叫び、涙を流し、大げさからだで表現して、感情が引き裂かれるままに振る舞う人です。また、最初から敗北を受け入れる人もいます。惨めにも意気消沈してあきらめてしまい、極端な場合には、自殺という結末を迎える場合すらあります。

それでは、健全なクリスチャンにふさわしい対処法とは何でしょうか。従順をもって受け止めることです。クリスチャンは、こう考えます。「これは、偶然に起こったのではない。神は、私の身に起きるすべての事柄を支配しておられる。神がしくじったわけではない。神は、あえてこの出来事が起こるのを許され、ご自身に栄光が帰され、他の人には祝福を、私には幸いをもたらそうとしておられるのだ。神が最終的にどのように働かれるのか、その全貌はまだ見えない。しかし、それでも私は、神を信頼する。だから、みこころの前にひざまずいて祈ることにしよう。神が栄光を現し、私が学ぶようにと願っておられることを、それが何であれ教えてくださるようにと。」

しかし、非凡な聖徒たちに見られるもう一つの反応とは、勝利に

溢れたものです。自分がその一人であるとはとても思えませんが、私もその仲間に加えられることを熱望します。このような人々は、逆境を利用して、勝利の踏み石に変えてしまうのです。苦味を甘味に変質させ、(ユダヤ人が悲痛のときに頭にかぶる)灰を、美(しい飾り)に変えます。境遇に支配されることを拒み、境遇を利用してしまふのです。この意味において、まさに彼らは「圧倒的な勝利者」です(ローマ8・37)。その実例をいくつかご紹介しましょう。

その人生が、失望と挫折に満ちているように思われるクリスチャンの女性がいました。しかし、彼女の生涯を本にした作家は、こう書いたのです。「神の度重なる拒絶を材料にして、彼女は見事な花束をいくつも作った」と。

ある東洋の国で、クリスチャンたちは、怒った群衆に投石され、襲われました。やがて、その場所に戻って来たとき、その彼らは、自分たちに投げつけられた石で教会を建てたのでした。

家を買った後で、庭の真ん中に大きい岩があるのに気づいた人がいました。彼は、ロックガーデン(「岩石庭園」)を作ること

に計画を変更しました。
E・スタンレー・ジョーンズ(※インドで活躍した著名な宣教師)は、言いました。「釘は痛い、それを用いれば家具が作れる」と。あるいは、こう言った人もいました。「生きていくことがレモンの酸味のように耐えられないときは、それをレモネードにしてしまえばよい」と。

私が特に気に入っている話があります。それは、一方の目が失明するので、ガラス製の義眼を入れなければならない、と医師に告げられた男の話です。彼は、すぐにこう答えました。「喜びで輝いている目にしてくださいね」と。境遇に支配されない生き方とは、このようなことを言うのだ、と私は思うのです。

「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」

(エペソへの手紙5章25節)

教会はキリストの思いの中で、ひととき重要な位置を占めています。ですから、私たちの判断においても教会は特別な重要性を持つものでなければなりません。

教会がどれほど重要なものかは、教会が新約聖書に占める紙面の割合が突出している事からも一目瞭然です。また、教会は、使徒たちの任務の中でも、特に重要な位置を占めるものでした。例えば、パウロは、自分に与えられた二重の働きについて述べていますが、それは、福音を宣べ伝えること、および、教会の真理を宣べ伝えることでした(エペソ3・8・9)。使徒たちは、教会のことを熱情を込めて語りましたが、今日、それが失われてしまっているのは奇妙なことです。使徒たちは、出かける先々に教会を興していきしましたが、今日、人々の関心が向けられるのは、キリスト教団体を発足させることなのですから。

教会の真理は、聖書の啓示の頂点を成すものでした(コロサイ1・25、26)。それは、最後の段階になって啓示された主要教理となっております。

教会は、御使いに対する実物教訓です(エペソ3・10)。御使いは、教会から、神の知恵をさまざまな角度から学んでいるのです。

教会は、神が信仰を広め、また、擁護するために選び、地上に置かれた構成単位です。神は、教会を真理の柱、および、土台として扱っておられます(一テモテ3・15)。福音を広めること、また、クリスチャンの教育に専心している超教派的な組織に、私たちは感謝します。しかし、そのような組織が、それを

構成するメンバーにとつて、地域教会の代役となつていたら、それは間違いです。神は、ハデスの門も教会には打ち勝てませんと約束されましたが(マタイ16・18)、その約束は、クリスチャンの団体に与えられているものでは決してないからです。

パウロは、教会を、いつさいのものをいつさいのものによつて満たす方の満ちておられるところ、と語っています(エペソ1・20・23)。かしらなる御方が、ご自分に属する者たち抜きには、ご自身が完全になることはないと思なされる…これは驚くべき恵みです。

教会は、キリストのからだというだけではありません(一コリント12・12・13)。教会は、主の花嫁でもあるのです(エペソ5・25・27、31、32)。キリストは、この時代に、世に対してご自分を表すのに、キリストのからだである教会を伝達手段としてお用いになります。主は、ご自身の愛の特別な対象である花嫁なる教会を、ご自身の統治と栄光を分かち合うために整えておられます。

上述のことすべてから、次のように結論しないわけにはいきません。すなわち、どれほどか弱いクリスチャンの集会(または教会)であつても、キリストにとつては、地上最大の帝国よりも大事なものであると。主は、細やかな愛情を教会に注ぎ、特別な威厳を教会に与えてくださっているのです。また、地域集会の長老とは、神にとつて、大統領や王よりも大事な存在であるという結論に至ります。優れた統治者になるための教えは、新約聖書に特に何も書かれていませんが、相当な紙面が長老の働きに費やされているからです。

私たちがたつた一度でも、もし、主が見られるように、教会を見る事ができたならば、私たちの生き方やクリスチャンとしての働きに、革命が起こるに違いありません。

「もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」

(ヘブル人への手紙10章26・27節)

これは、新約聖書の中でも、真面目で良心的な多くのクリスチャンに大きな動揺を与えてきた聖句の一つです。彼らはこのように推論するのです。「私は、罪の誘惑に直面している。それが間違っていると私はわかっている。それをしてはならないこともわかっている。それなのに、私は立ち止まることなく、それを行なってしまう。私は、故意に逆らっている。私は、意図的に罪を犯しているようだ。したがって、この聖句から判断すると、どうも私は自分の救いを失ってしまったのではないかと思う」と。

問題が起きた原因は、この聖句を前後関係から切り離してとらえ、まったく言われてもいない意味を、無理やり読み込んでしまったところにあります。前後関係から見ると、ここで扱われているのは、背教の罪のことです。すなわち、一時的にクリスチャンであることを公言していたが、その後、キリスト信仰を否定し、キリストに反する何らかの体制の側につく罪のことです。背教者とは、二九節で言われているような人のことです。御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る人のことです。その人は、苦々しい思いでキリストに背を向けたことにより、実は、新生の体験をしていなかったことを暴露しているのです。

仮に、ある人が福音を聞き、キリスト信仰に好意的な感情を持つようになったとしましょう。先祖伝来の宗教を捨て、クリ

スチャンという肩書きをもらうのですが、真の意味では回心していません。ところが、そのうちに迫害がはじまりました。やがて、彼は自分がクリスチャンとして扱われることを考え直します。そして、ついに以前の宗教に戻る決心をします。しかし、それも容易ではありません。指導者たちに変節者が受け入れてもらう前に、通らなければならぬ小さい儀式があります。指導者たちは、豚の血を取り、床に振りかけます。それから、こう言うのです。「その血はキリストの血を表している。もし、先祖の宗教に戻りたいなら、その上を歩いてみよ」と。そして、彼はその通りにします。彼は、事実上、神の御子を踏みつけ、主の血を汚れたものとみなしたわけです。このような人を、背教者というのです。故意の罪を犯したからです。

真のクリスチャンは、このような故意の罪を犯すことはできません。間違っているとわかりながら、他のいろいろな罪の行為をするかもしれません。あえて良心に逆らうこともあるかもしれません。これは、神の目に重大なことであり、それを大目に見るようなことを私たちは口にするべきではありません。しかし、それでもなお、もし、罪を告白し、それを捨てるならば赦しが与えられるのです。しかし、背教者の場合は、そうは行きません。罪のためのいけにえが、もはや残っておらず(26節)、また、新たに悔改めに導くのは不可能である(ヘブル6・6)というのが、そのような人に下される判決なのです。

「だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもないし、知ってもいないのです。」

(ヨハネの手紙第一 3章6節)

昨日は、誠実なクリスチャンにとつて悩みの種になる箇所について考えました。今日は、自分の罪深さをいやになるほど知るクリスチャンの心を、それに劣らず騒がせてきた三つの節を、ヨハネの手紙第一から見ることにします。このページには、すでに聖句が引用してあります。さらに、1ヨハネ三・九には、「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです」とあります。そして、1ヨハネ五・一八には、「神によつて生まれた者はだれも罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守つてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです」と書かれています。そのまま額面通りに考えると、これらの章句から、自分が果たして本当のクリスチャンといえるのか、と誰もが疑問を持つてもおかしくありません。ところが、同じヨハネの手紙第一には、クリスチャンも罪を犯す場合があると認めた箇所があります。例えば一・二〇、二一などです。

この問題は、翻訳にその大きな原因があります(※日本語の新改訳は誤解が生じない明快な訳になっている)。新約聖書の原語では、ときに罪を犯すことがある、というのと、罪を犯し続ける生き方をする、という場合とを区別しています。クリスチャンも確かに罪を犯すことがあります。しかし、罪がクリスチャンの人生を特徴づけるものでありません。罪という主人から解放されているからです。

(英語圏で広く使われているNIV訳では、これらの聖句の動詞が、現在進行時制と言つてもよい動詞であることを明示しており、このように訳されています。「だれでもキリストのうちにあつて生きる人は罪を犯し続けることはありません。罪を犯し続ける人はだれも、キリストを見てもないし、知つてもいないのです」(3・6)。「だれでも神から生まれた者は、罪を犯し続けることがあります。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯し続けることができません」(3・9)。「神によつて生まれた者はだれも罪を犯し続けることはない、と私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守つてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです」(5・18)。

「自分は、罪を犯していない」と言うクリスチャンは、罪がどのようなものであるかという理解が単に不完全であるにすぎません。おそらく、神の完全な基準に達しないものすべてが罪であるということに、気づいていないのでしょう。事実はどうかといえ、私たちは、考え、ことは、行いにおいて、毎日罪を犯しているのです。

しかし、ヨハネは、例外的な罪と習慣化した罪とを区別しています。真正の聖徒にとつて、罪はもはや異質なものであり、義は備わつた特性なのです。

これが分かると、これらの聖句から、本当に救われているのだろうかと思つて、自分を苛む必要はありません。事実を簡単にまとめるところなりです。神のみこころは、私たちが罪を犯さないことです。ところが、残念なことに私たちは罪を犯しません。しかし、罪はもはや、私たちの生活を支配する力ではありません。救われる前にしていたようには、もはや罪を習慣的に行なうことはありません。たとえ、罪を犯しても、罪を告白し、捨てることによつて、赦しが与えられるのです。

「富む者の財産はその堅固な城。自分ではそそり立つ城壁のように思っている。」

(箴言18章11節)

ルカの福音書に登場する愚かな金持ち(一二・一六―二二)は、使い道に困るほどの莫大な財産を手に入れました。そこで、それまでの納屋やサイロを取り壊し、もっと大きいものを建てることに決めました。そうすれば、満足できると考えたのです。建設の計画が完成するやいなや、自分が死ぬとは知らずに…。その財産をもつてしても、死んで墓に入らないで済むことはできなかつたのです。

サイダー(※E.Morris Sider 教会史家)は、言います。「愚かな金持ちには、貪欲な人の典型である。必要でないのに、さらに多くのものを手に入れたいという貪欲な強迫観念にとりつかれている。そして、より多くの財産を蓄積し、並外れた成功を達成すると、今度は、物質的な財産が自分の必要のすべてを満たしてくれ、という冒濫的な結論を持つに至る。しかし、神の観点から見ると、このような考え方は狂気の沙汰である。このような人は、どうしようもない愚か者である」と。

株式市場で、金儲けをたくらんだ男に関する伝説が伝わっています。ある人が、「おまえの望むものを何でも与えよう」と、彼に言いました。すると、彼は、「その日から先の一年分の新聞を見たい」と言いました。もちろん、これからの一年間に一番値が上がる株を買えば、ひと財産を稼げるというのが彼の考えでした。そして、新聞を手に入れると、自分がどれほど金持ちになれることか、とあって、笑いをこらえきれませんでした。そのときです。死亡記事に目をやると、何と自分の名前がそこにあつたのです。

詩篇の作者は、「心の中で、彼らの家は永遠に続き、その住まいは代々にまで及ぶと思ひ、自分たちの土地に、自分たちの名をつける」(詩篇49・11)が、他人に富を残していく金持ちに対して、侮蔑を隠しません。「人は、その栄華のうちにとどまれない。人は滅びうせる獣に等しい」(詩篇49・12)と、作者は言います。

「お金とは、天国以外ならどこでも通用するパスポートであり、幸福以外なら何でも手に入れることのできる便利なものである」という諺は、まさに的を射ています。

お金のことが生涯頭から離れることがなかつたにしても、自分の墓石に、ドルの印を刻んだ金持ちは一人もいません。もし、自分にとつて最高の優先順位を持っていたものの記号を用いるとしたなら、それは間違いなく「\$」であつたことでしょう。ところが、死ぬときには、十字架のような、宗教的シンボルを使うのです。それは、最後の偽善的ジェスチャーです。正しい人々は、言います。「見よ。彼こそは、神を力とせず、おのれの豊かな富にたより、おのれの悪に強がる」(詩篇52・7)。そして、神もこのような碑文を書かれることでしょうか。「自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです」(ルカ12・21)。

「確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。『キリストは肉においで現れ、…』」

(テモテへの手紙第一3章16節)

奥義とは、偉大なものです。それは、不可解だからではなく、驚くべきものであるからです。ここでいう奥義とは、神が肉体をとって現れてくださった、という驚嘆すべき真理のことを言っています。

それは、永遠に存在する方が、時間に制約される世界に生まれたことを意味します。時間を超越した方が、暦と時計を用いなければならぬ領域に来て、住んでくださったのです。

遍在し、同時にすべての場所に存在される方が、ベツレヘム、ナザレ、カペナウム、そして、エルサレムという、単一の場所にしか居ることができない制約を受けられたのです。

天と地に満ちる偉大な神が、人体の中に御自身を押し込めてくださった：考えるだに、素晴らしいことです。人々は、イエスを見て、まさしくこう言うことができました。「この方のうちにこそ、神の満ち満ちた神の徳が、形をとって宿っており…」(コロサイ2・9参照)。

この奥義は、創造主が地球というこの取るに足りない惑星を訪れてくださったことを教えています。地球を除いた宇宙と比べるなら、地球は宇宙の埃のようなものにすぎません。ところが、他のすべての天体を見向きもせず、創造主は、ここに來てくださったのです。天の宮殿から家畜小屋、そして、飼い葉桶へと。

全能なる御方が、無力な赤ん坊になってくださいました。マリアが両腕に抱くその御方こそが、マリアを支えている御方であつたといつても、まったく誇張にはなりません。神は、世界

を造られただけではなく、世界を支えている御方でもあるからです。

全知なる御方は、すべての知恵と知識の源泉です。ところが、聖書を見ると、『子ども』とられた主が、知恵と知識において成長していった、と書かれています。所有権のある方が、ご自分の国に來られたのに歓迎されなかった、というのは信じがたい事実です。宿屋には、主をお迎えする余地がありませんでした。世は、この方を知りませんでした。ご自分のところに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかったのです。

主人である方が、しもべとして世に來てくださいました。栄光の主が、その栄光を肉体というヴェールに隠されました。《いのち》の主である方が、《死ぬ》ためにこの世にやつて來られました。聖なる御方が、罪の「密林」にやつて來られました。無限の高みにおられた方が、親密な近きにまで來てくださいました。御父の喜びの対象であり、御使いの礼拝の対象である方が空腹になり、喉の渇きと疲れを覚えて、ヤコブの井戸にたたずみ、ガリラヤ湖に浮かぶ舟で眠り、ご自分の手で造つた世を、家なきよそ者としてさ迷つたのです。キリストは、栄華を離れて枕するところもない窮乏の中へ來てくださいました。大工として、働きました。布団の上に寝たことは一度としてなく、栓をひねるだけでお湯、または、冷水が出てくるというような、現代人が当然と思う便利さとは無縁でした。

このすべてはあなたのため、そして、私のためだった
さあ、來たれ、この方を讃えようではないか

「ソドムの王はアブラムに言った。『人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。』」

(創世記14章21節)

侵略した軍隊は、ソドムを襲い、ロト、家族、そして、大量の分捕り品をさらっていきました。アブラムは、それを聞く 때마다、しもべたちに武装させ、侵略者を追撃し、とうとうダマスコ付近で追いつき、捕虜と所有物を取り返しました。ソドムの王は、帰還を果たすと、姿を現して言いました。「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください」と。アブラムは、それに対し、王のおかげで富んだのだと言われないように、私は靴ひも一本さえ受け取ることはしない、と答えたのでした。

ソドムの王は、物質的なことでクリスチャンの頭をいつぱいにし、周囲の人のことが目に入らないようにしているサタンを表している、という見方にはうなずけるものがあります。アブラムは誘惑に屈しませんでした、それで以降、アブラハムのようにならなく誘惑を退けられなかった人は少なくありません。財産を蓄積することに目が行き、神、キリスト、そして、望みを持たないまま永遠を迎えなければならぬ隣人や友人には、ほとんど無関心なのです。

大切なのは人間であって、《もの》ではありません。あるクリスチャンの青年は、居間で縫い物をしていた母親のところに行ってきた、こう言ったそうです。「母さん、神様が、《もの》よりも人を愛する心を僕にくださったことが、とても嬉しい」と。その母親もどれほど嬉しかったことでしょう。

英国製の高価な磁器の紅茶カップを誰かが壊したら、涙を流すほど悲しいのに、無数の人々が滅びに向かいながらも一粒の涙を流すこともないとしたら、これほど不釣合いなことはあり

ません。野球の得点については並外れた記憶力を持っているのに、人の名前が思い出せない、と嘆くのは、何を物語っているのでしょうか。事故で怪我をした相手よりも、自分の車の傷みの方が気になるとしたら、私の価値観が歪んでいる証拠です。お気に入りの活動をしているときに、邪魔が入るのは誰でも嫌なものです。しかし、もしかするとその邪魔こそは、その活動自体より、はるかに重要な意味があるのかもしれないのです。

私たちは、ともすると、人々よりも金や銀に興味を持ってしまいます。A・T・ピアソン(※アメリカの牧師・説教家。宣教運動や著作により大きな足跡を残す)は、こう言っています。「クリスチャン家庭の金、銀、そして、無用な装飾品の中には、五万隻の船を建造し、その船に聖書を満載し、宣教師をいつぱいに乗せ、貧しいすべての村々に教会を建て、二十年以内にはそこに住むあらゆる人に福音を届けるだけの資金が埋もれている」と。神のもう一人の預言者、J・A・スチュワートは、こう言いました。「私たちは、必要のない贅沢のために財産を使っている。私たちがキャビアを楽しんでいる間に、世界の他の国々では、罪という飢餓の中で無数の人々が死にかけている。私たちは、目先の利益のために霊的な家督権を売り渡してしまっている」と。

私たちクリスチャンは、いつになったら、物質的なものを追い求める狂気じみた争奪戦を捨て、人々の霊的幸いにしつかり目を向けるのだろうか、と私は考え込むことがよくあります。一人のたましいは、世界のすべての富よりも価値があります。《もの》などは、どうでもよいのです。大切なのは、人間です。

「これはあなたがたのために砕かれるわたしのからだです。」

(コリント人への手紙第一11章24節 英訳)

エミー・カーマイケルは、聖書に登場する、四つの壊されたもの、または、裂かれたものとそれによって成し遂げられた結果を列挙しています。

つぼが壊されて、光が輝き出た(士師記7・19)

つぼが割られて、香油が流れ出た(マルコ14・3)

パンが裂かれて、空腹が満たされた(マタイ14・19)

御からだに裂かれて、世は贖われた(1コリント11・24)

このリストに五番目を追加するのは、私たちの特権です。我意が砕かれて、平和と満足が満ち溢れた、と。

救いを求めて十字架のもとに行きながら、我意が砕かれるために、十字架に行くことは思いも寄らない、という人は少なくありません。気質は優しく穏やかで、声を張り上げても小聲程度かもしれません。その上、外面的には霊的な雰囲気を感じられるかもしれません。しかし、神が用意された人生で、最善のものに与ることを妨げる、鉄のように固い意志が潜んでいるのです。

それは、愛し合い、結婚を考えている若い人々の中にさえ、時折見られることがあります。円熟し、賢明な判断力を持った両親や友人から見ると、その結婚がうまくいかないことは明白です。ところが、本人たちは、聞きたくない助言は、強情に拒絶するのです。引き下がることを知らない意志をもって、結婚の誓いを立てた二人は、やがて、引き下がることをしないその同じ意志で、離婚の法廷に赴くことになります。

自分には明らかに経験がない上、必要な実務知識もないのに、あるビジネスを始めようと決心したクリスチャンの場合にも、それが見られます。見識のある知人の助言をはねのけて、自分の財産ばかりではなく、親しい友人の財産までも投入するのは珍しくありません。必然的な結果がやってきます。事業は失敗し、債権者が後始末に乗り込んできます。

クリスチャンの奉仕においても、我意が砕かれないための破壊的な結果を見るのは、稀ではありません。男性とその家族を宣教地に送り出しながら、一年も経たないうちに本国送還となり、派遣した教会に多大な犠牲を強いるというような場合です。神ではなく、人間の考え出した計画、そして、後になつて非生産的であるとわかつた事業に資金を投入した、人の好いクリスチャンたちの資金を枯渇させてしまうのです。また、一人が他の人々と協力して仕事をするのを嫌がるため、争いと不幸が生まれます。どうしても自分のやり方でないと気がすまないのです。

私たちはみな砕かれ、すべての頑固さ、すべての強情、すべてのわがままを携えて、それを十字架のふもとに置く必要があります。鉄のような我意を、いけにえの祭壇に置かなければなりません。エミー・カーマイケルと共に、私たちはみな、次のように言える者でなければなりません。

ああ、わが主よ、あなたは私のために砕かれてくださいました
主よ、今度は、私が砕かれる番です。あなたへの愛のゆえに

「自分に関係のない争いに干渉する者は、通りすがりの犬の耳をつかむ者のようだ。」

(箴言26章17節)

まず、知らなければならぬのは、この聖句の中の犬とは、耳をつかんでも気にもとめない、人なつくく、穏やかなアイリッシュセッター(※栗紅色の鳥獵犬)ではないということです。これは、気性が荒く、うなり声をあげ、凶悪で牙をむき出しにする野犬のことです。そもそも、このような犬の耳をつかめるほど接近できるとは思えません。仮にそうできたとしても、絶望的なジレンマに陥るだけです。耳をつかんでいることも恐ろしければ、手を離すのも怖いからです。

実は、これこそは無関係な争いにちよっかいを出す人の姿を、鮮やかに描いたものにほかなりません。敵対する両者からの怒りを買うのに、時間はかかりません。

双方とも、おせっかい者が邪魔をしたため、自分が勝つチャンスが損なわれたと感じ、今度はお互いの違いを忘れ、一緒になつて刃向かってくるのです。

拳を振り上げて、喧嘩をする二人の男に近づき、「これは個人的な喧嘩ですか。それとも誰でも参加できるのですか」と尋ねたアイルランド人(※せつかちで怒りっぽい、と定型的に言われることが多い)のことを、私たちは笑いますが、私たちの誰にも、自分には関係のない事柄に首を突っ込みたい、おせっかいな性質があるのです。

夫婦が喧嘩している現場に出勤を要請された警官は、普段よりもよほど気をつけなければなりません。であるとするとするならば、普通の人が、他人の内輪もめに介入するには、どれほど注意が必要なことでしょう。

今日の箴言の最も適切な実例の一つは、教会内のもめごとでしょう。それは、普通二人からはじまります。次に、他の人がそれぞれの側につきます。火花を散らしてはじまったものがほどなく大火災になります。その問題と何の関係もない人が、あたかもデルファイ(※アポロ神で有名)の神託のような賢明な宣告であるかのように、自分の考えを言わないでは気が済まないからです。感情は燃え上がり、友情は粉々になり、心は悲しみで張り裂けます。争いとその激しさを増すにつれて、集会では、冠状動脈血栓症、脳溢血、潰瘍、その他の身体的な問題で倒れた人のことが発表されるようになります。苦々しい思いを根として始まったことが、どんどん広がり、ついには、多くの人が汚れを受けてしまうわけです。

他人の争いに干渉してはいけない、という警告は、「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです」(マタイ5・9)という、救い主のことばと矛盾しているように思えます。しかし、矛盾はありません。争っている当事者が紛争を仲裁して欲しい、と望んでいるときには、平和をつくる者に入る余地があるからです。望まれていない場合、干渉する人は、一旦入ったら、痛みなしでは容易に抜け出せない状況に入るだけなのです。

「ダビデよ。私たちはあなたの味方。エッサイの子よ。私たちはあなたとともにいる。平安があるように。あなたに平安があるように。あなたを助ける者に平安があるように。まことにあなたの神はあなたを助ける。」

(歴代誌第一12章18節)

ダビデに対してなされた高貴な忠誠の表明は、すべてのクリスチャンにとつても、主イエス・キリストに対する忠誠の表明として、そのまま借用されるべきものです。王の王である方に対して、中途半端な忠誠心やどつちつかずの忠義は不釣合いです。主は、私たちの心のすべてを占有されるべき御方であるからです。

ナポレオン戦争のさなかに、重傷を負ったフランス人兵士の話には、いつも感動を覚えます。医師団は兵士のいのちを救うためには、手術が必要だと判断しました。麻酔が発明される以前の話です。外科医が兵士の(傷を負った)胸の中を探っていくと、患者である彼は、こう言いました。「先生、もう少し深くまで行けば皇帝陛下がおられます」と。皇帝が、彼の心の王座を占めていたのです。

エリザベスが女王として戴冠たいかんしたのは、まだ若かったときでしたが、祖母にあたるメアリー女王は、忠誠を誓う手紙を書き、そこにこう署名をしました。「あなたを愛する祖母にして、忠実な臣下より」と。メアリーは、このようにして王冠と、王冠を戴く人物への忠誠を表明したのでした。

しかし、私たちはどうでしょう。以上のすべてを、私たちにどのように適用したらよいのでしょうか。(聖書注解者)マシュー・ヘンリーは、次のことを私たちに思い出させてくれています。「アマサイのことばから、主イエスに対する愛情と忠誠をどの

ように証明したらよいかのヒントが得られる。余すところなく、また、たじろぐことなく、私たちが主のものとなつていくか。主の側に進んで立ち、そのように行動しているか。主に役立つように、心から願つているか。神を称え、主の福音とその御国の隆盛を願っているか。なぜなら、イエスがすべての支配と主権、そして、権能を従えるまで、神ご自身が主を助けたもうからである」。

(英国を代表する説教者)スボルジョンのことばを借りて言えば、私たちの生活は、次のことを物語るものでなければなりません。『イエスよ。私たちは、あなたのものであります。』——私たちが持つているものがいかなるものであれ、わがものとは思われない。すべてを王なる方に差し出す。『そして、神の御子よ。あなたの側に私たちはつきまします。』——もし、私たちがキリストのものであるなら、宗教、道徳、政治においても、キリストの側につくのは当然である。『どうかあなたに平安があるように。』——私たちの心は、この方に平伏し、この方に平安あれと祈る。

『そして、あなたを助ける者に平安があるように。』——すべての良きことが、良き人々にあるように。平和を愛する人々に、平和があるように。『あなたの神は、あなたを助けるからです。』——自然をお造りになつた神の力は、ことごとく、恵みの主に加勢する。よみがえられたキリストよ。もろもろの天があなたを受け入れるのを、我らは仰ぎ見、礼拝する。天に昇られたキリストよ。私たちは、あなたの尊い足元にひれ伏して言う。『ダビデの子よ。我らはあなたのもの。ああ、ダビデの子よ。油注がれて君となり、救い主となられた御方よ』と。やがて、来るべきキリストよ。私たちは、あなたの現れを待ち望む。あなたの民のもとへ、急ぎ来たり給え。アーメン、アーメン。』

「ダビデが言った。『サウルの家の者で、まだ生き残っている者はいないか。私はヨナタンのために、その者に恵みを施したい。』」

(サムエル記第二九章一節)

メフィボシエテは、ダビデのいのちを再三つけ狙ったサウル王の孫にあたります。したがって、彼は、ダビデが王座に即くと同時に抹殺されるべき逆の家族の一員でした。そればかりではなく、メフィボシエテは、からだも不自由でした。幼いときに、乳母が誤って彼を落としてしまったからです。彼がロ・デバル(「牧草地がない」の意)にある他人の家に住んでいた、という事実から、彼は、極貧の状態であったことがわかります。ロ・デバルは、ヨルダン川の東側にあつたため、神の御住まいとされるエルサレムから離れていました。ダビデの好意を受けられるような良い点は、メフィボシエテに何もありませんでした。

ところが、これら一切の状況にもかかわらず、ダビデは、彼の安否を問い、使者を遣わして王宮に連れて来させ、怖がらなくともよいと言って、安全を保証したのです。その上、サウルの土地のすべてを返して、彼に富を与え、家来を与え、王子の一人のようにして、いつでも王の食卓につくことができる不動の立場という榮譽を与えたのです。

なぜ、ダビデはこれほどにもふさわしくない者に、このような慈悲、恵み、あわれみを示したのでしょうか。それは、ヨナタンのためです。ダビデは、メフィボシエテの父であるヨナタンと契約を交わし、ヨナタンの家族に恵みを施すことを決してやめないと誓いました。それは、無条件の恵みの契約でした(Ⅰサムエル20・14・17)。

メフィボシエテにも、そのことが分かりました。というのは、初めて王の前に連れて行かれたとき、彼はひれ伏して、「自分のような、死んだ犬に等しいものは、このような親切を受けるに値しません」と言っているからです。(※Ⅱサムエル9・8参照)

この状況が、私たちにも当てはまることに気づくのは、それほど困難ではないはずですが。私たちは、死の宣告を受けるべき、罪深い、逆逆者として生まれました。私たちの道徳観は、歪み、罪によって無感覚になっています。私たちもまた、「牧草地のない」靈的に不毛な土地に住んできたのです。滅びに定められ、自分で自分をどうすることもできず、極貧の状態にいた私たちは、神から遠く離れ、キリストもなく、希望もない者でした。神の愛と恵みを引き出せるようなものは、私たち自身の中にはまったくありませんでした。

ところが、神は、そんな私たちを探し、見つけ、死の恐怖から救い出し、天にあるすべての靈的祝福をもたらし、祝宴に伴い、ご自身の愛の旗を高く掲げてくださったのです。

なぜ、神は、そこまでしてくださったのでしょうか。それは、イエスのゆえです。そして、それは、神が世界の基が置かれる前に、キリストにあつて、私たちを選んでくださった恵みの契約のゆえであつたのです。

私たちにふさわしい応答とは、何でしょう。それは、主の前にひれ伏して、「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか」と言うことではないでしょうか。

「見よ。わたしは、戸の外に立つてたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入つて、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」

(ヨハネの黙示録3章20節)

今年も、一年が終わろうとしています。忍耐強い救い主は、今なお、人間の心の戸の外に立つて入室を求めておられます。主が外で待たされてから、相当な時間が経っています。他の人であれば、とうの昔にあきらめ、家に帰ってしまったことでしょう。しかし、救い主は違います。主は、辛抱強く、一人も滅びることを望んでおられません。いつの日か、扉が大きく開かれ、中に招き入れてもらえる、という希望を持って、待つておられます。

主イエスが、戸を叩いておられるのに、戸口に出て行かない人がいるとは驚きます。それが、隣人であれば、ドアをすぐに開けるに違いありません。それが、セールスマンであれば、せめて戸を開け、「あいにく間に合っています」と言うだけの礼儀は示すことでしょう。もし、それが大統領や知事であったなら、家族は迎え入れる特権を奪い合うことでしょう。であるとすれば、万物の創造者にして、それを支えておられる方、また、贖い主が戸の外に立つておられるというのに、冷ややかで無言の扱いをするというのは、実に奇妙です。

人間の側で拒絶するということが一層不可解なのは、主イエスは、何かを奪い取ろうとして来ておられるのではなく、与えるために来ておられるからです。主は、より豊かないのちを与えるために来られたのです。

あるときのこと、クリスチャンのラジオ伝道者が、視聴者の一人から、ちよつと立ち寄りたいという電話を深夜に受けまし

た。彼が来ないように説き伏せよう、と伝道者はありとあらゆる言い訳をしましたが、最後には不承不承同意しました。ところが、後になって分かったのは、ラジオ放送の費用に、と大金をプレゼントするために来たということでした。彼が帰った後、伝道者は言いました。「ああ、彼を中に入れて良かった」と。

(著名な世界的伝道者)ジョー・ブリントは、にぎやかな会話が居間で飛び交うある家の情景をよく使いました。突然、玄関の戸口を叩く音がします。家族の一人が言います。「誰か来たよ」と。もう一人が飛び上がって、玄関に行き、扉を開けます。すると、居間から誰かが、「どなたなの？」と尋ねます。扉の向こうから、名前が告げられます。すると父親は、その権限をもって大声で言うのです。「入っていただきなさい」と。

これは、福音を端的に言い表したものです。耳を澄ませてください。玄関に誰かが来ています。どなたでしょう。それはほかならぬ、いのちと栄光の主、私たちの身代わりに死なれ、三日目によみがえり、今や、栄光の位に即き、やがて、再び来臨してご自分の民を御許に引き上げてくださる方です。「どうぞお入りください」と申し上げようではありませんか。



この日を主とともに

2014年 11月 1日 初版発行

著者 ウィリアム・マクドナルド
訳者 尾崎富雄
序文・挿絵 J.B.ニコルソン
印刷 株式会社ジーシステム
発行 株式会社ゴスペルフォリオプレスジャパン
〒156-0053 東京都世田谷区桜2-21-9
TEL 03-3428-5898/FAX 03-3428-5898
<http://www.gfpjapan.com>

©2014 Gospel Folio Press Japan Printed in Japan
ISBN 978-4-9905543-2-3

